近代諸家集

一

例言

一、本巻は近代諸家集（一）として、水戸光圀の常山詠草、下河邊長流の自選晩花集、圓珠庵契沖の自選漫吟集、戸田茂睡歌集、荷田春滿の春葉集、加藤枝直のあづま歌、眞淵の賀茂翁家集、田安宗武の天降言、河津美樹の靜屋集、荷田蒼生子の杉のしづ枝、楫取魚彦の魚彦歌集、鵜殿よの子の佐保川、六屋倭文子の散のこり、土岐茂子の筑波子歌集、塙保己一の松山集を收めました。

一、本巻は山岸德平が擔當しました。

一、常山詠草は、屋代弘賢の書寫と傳ふる寶永三年の寫本により、自選晩花集、自選漫吟集は共に文化十年の刊本をもととして、漫吟集は別に文化十二年刊、石津亮澄の漫吟集類題を參照しました。

一、戸田茂睡歌集は、家集なき爲、紫の一本、隱家百首、鳥の迹等の諸書より、その詠歌を拾ひ當編輯部に於て新たに集輯しました。茂睡の歌は、猶此の外二三の書にも出て居りますが、原

本なく、採收し得なかつた事を甚だ遺憾に思ひます。

一、春葉集は、寛政十年の、あづま歌は享和二年の、賀茂翁家集は、文化三年の刊本によりました。天降言は文化四年板をもととし、嶰谷叢説を參考しました。

一、靜屋集は、寛政元年、杉のしづ枝は、寛政七年、魚彦歌集は、文政四年、夫々の刊本をもととし、佐保川は山田常典自筆の寫本を採りました。

一、散のこりは、寛政二年刊文布(あやぬの)に收められたものにより、筑波子歌集は文政四年の板本をもととし、松山集は、安政三年、松村樂山なる人の書寫本を收めました。

校註 國歌大系 第十五卷目次

常山詠草……水戸光圀……一―一三五
卷之上ノ一
春歌……三
夏歌……二〇
秋歌……二六
冬歌……三九
戀歌……四四
雜歌……五九
卷之上ノ二
春歌……七七
夏歌……八三
秋歌……八四
冬歌……八七
戀歌……八八
雜歌……八九
卷之下ノ一
春歌……九六
夏歌……一〇八
秋歌……一一〇
冬歌……一一五
卷之下ノ二
雜歌……一一八
跋……一三五

晩花集……………………下河邊長流……一三七—一八四

春歌……………………一三九
夏歌……………………一四六
秋歌……………………一五三
冬歌……………………一六一
戀歌……………………一六八
雜歌……………………一七一
物名歌……………………一八〇
誹諧歌……………………一八一
長歌……………………一八三
跋……………………一八四

漫吟集……………………圓珠庵契冲……一八五—二三九

序……………………一八七
春歌……………………一八九
夏歌……………………一九六
秋歌……………………二〇一
冬歌……………………二〇八
戀歌……………………二一三
羇旅歌……………………二二一
哀傷歌……………………二二四
釋教歌……………………二二五
雜歌……………………二二八
雜體歌……………………二三六
誹諧歌……………………二三四

戸田茂睡歌集……二四一―二六四

紫の一本……二四三
不求橋梨本隠家勧進百首……二五五
鳥の迹……二五六

春葉集　荷田春滿……二六五―三四〇

序……二六七
春歌……二七三
夏歌……二八五
秋歌……二九三
冬歌……三〇六
雑歌……三一四
散のこり……三三九

あづま歌　加藤枝直……三四一―三八四

序……三四三
巻一　春歌……三五一
巻二　夏歌……三七七
巻三　秋歌……三九四
巻四　冬歌……四二三
巻五　戀歌……四三八

卷六　雜歌附雜體竝文……四五四
物名……四七八
長歌……四八〇

賀茂翁歌集……賀茂眞淵……四八五―五七六

序……四八七
おほよそ……四九一
卷之一
春歌……四九五
夏歌……五〇七
秋歌……五一三
冬歌……五二〇
戀歌……五二九
哀傷歌……五三〇
卷之二
雜歌……五三七
羇旅歌……五四四
物名……五四六
賀歌……五四七
擬神樂催馬樂歌……五五四
長歌……五五八
旋頭歌……五七五

天降言……田安宗武……五七七―六一四

しづのや歌集……河津美樹……六一五―六三〇
杉のしづ枝……荷田蒼生子……六三〇―七三九
楫取魚彦家集……楫取魚彦……七三一―七六七
佐保川……鵜殿よの子……七六九―八二八
上卷……七七一　下卷……七九三
散のこり……弓屋倭文子……八二九―八四五
筑波子家集……土岐茂子……八四七―八七三
序……八四九　秋部……八五七
春部……八五一　冬部……八五九
夏部……八五四　戀部……八六一

雑部……八六四
物名……八六九
長歌……八七〇
文部……八七一

松山集……塙保己一……八七五―九五三

上
春……八七七
夏……八九二
秋……九〇四

下
冬……九二一
戀……九二九
雜……九三五

解題……卷頭一―七六

目次終

解題

常山詠草

常山詠草は德川光圀の歌文の集である。

光圀は賴房の三子、家康の孫である。母は谷左馬介重則の女、賴房の侍女であつたのを、賴房に寵せられて寬永五年(皇紀二二八八)六月十日、三木之次の宅に光圀を生んだ。賴房は兄の紀州賴宣、尾州義直が子がないのに、弟の己が子をもつのを義にあらずとして、長子すら、家臣の家に養はしめた程であつたので、光圀が生まれようとするやこれを殺さうとまでしたが、三木之次賴房に懇願して、侍女を宅に迎へて、無事に光圀を生ましめたのであつた。

光圀の幼名長丸、又千代松丸、字は德亮、觀之ともいふ。日新齋、常山人、率然子、梅里等の號がある。寬永十年に光圀は賴房の嗣と定められた、時に齡六歲。同十三年九歲で元服して、將軍家光の一字を賜はつて光圀と稱し、從四位下に敍せられた。同十七年三月右中將に任ぜられ、七月從三位に陞つた。父賴房は嚴格な尙武敎育と氣質の鍛練とをもつて光圀に臨んだ。光圀も此

の頃は年少氣鋭、擧動粗暴に流れる嫌があつたが、正保二年(皇紀二三〇五)、十八歳の時に、史記の伯夷傳を讀んで深く感じ、己が兄賴重を越えて世子となつた事を悔いた。これからひどく學問を好んで、書を讀んで鷄鳴にいたつたといふ。かく光圀が支那の歷史を耽讀してゐるうちに、我が國の歷史の不完全なのを痛嘆して、遂に明曆三年(皇紀二三一七)二月、大日本史の編纂に著手した。時に齡三十歳。

寛文元年(皇紀二三二一)、光圀三十四歳の時賴房薨じ、光圀封を襲ひ、同二年十二月參議となつた。同三年十二月兄賴重の子賴方をたてて己の嗣と定めた。同五年明の遺臣朱舜水を聘して師とす。この年十二月、國内の淫祠三千八十八を毀つた。年三十八歳。同十年賴方が卒したので、翌年その弟綱條を嗣と定めた。延寶六年(皇紀二三三八)、五十一歳のときに、扶桑拾葉集が出來上つて、後西院から勅撰に準ぜられた。元祿三年(皇紀二三五〇)十月十四日致仕して、封を綱條に讓つた。ときに年六十三、初め故將軍家綱の嗣を定めた時に、光圀は館林侯綱吉を薦めて、議これに定まつて綱吉が將軍となつた。處が將軍綱吉は、其の子德松を立てて嗣としようとした。光圀はこれに反對して、家綱の後は、綱吉の兄甲府宰相綱重が將軍となるべきであつたのを、綱重が早逝したので綱吉が大統を繼いだのである。故に、綱重の子綱豐を以て綱吉の嗣とし、德松

を又これの嗣とすべきであると論じたが、綱吉きかず、故に光圀は致仕したのだといふ。翌日權中納言に任ぜられた。十二月水戸に歸つて、翌年五月久志郡太田鄕西山に閑居して、西山隱士、梅里先生と號して、自ら農作して風流をたのしんだ。五年楠公の碑を湊川に建てて、嗚呼忠臣楠子之墓と題した。元祿十三年(皇紀二三六〇)十二月六日薨ず、年七十三であつた。天保三年勅して、從二位大納言を賜はり、明治二年從一位を賜はつた。光圀の學問上における功績は數多の學者を聘して、大日本史編纂に著手して、尊王の大義を唱へた事であつて、水戸學派は尊王の源流であつたのである。和歌の方面に於ては、光圀が由來國學に志深く、萬葉の研究の必要を知り、長流、契沖を保護奬勵して、終に契沖をして萬葉集代匠記の大著を成就せしめたのは、光圀の大きな功績であつた。實に光圀は國學の親であつたのである。

常山詠草には五冊本と、二冊本との精粗の二種がある。五冊本は上中下三卷に分れ、上卷と下卷は各二冊で歌集、中卷一冊は文集である。上卷の一は四季、戀、雜の六に分類され、上卷の二も亦同樣に分類され、下卷二冊は元祿三年西山隱栖後の作を輯めて四季、雜の五に分類されてゐる。この上卷の二は上卷の一と、下卷とから春四十二首、夏十二首、秋二十一首、冬九首、戀五首、雜四十七首の百三十六首を撰出したものである。卽ちこのうちの歌は皆上卷の一か、下卷に

のつてゐる歌ばかりである。本大系に收載したのは、この五冊本の文集を除いたものである。二卷本は續日本歌學全書に收められてゐて、上卷が歌集、下卷が文集、而して、歌集は五冊本の上卷の二と同じものである。たゞ春の部の

春雨のふるき昔を思ひ出でてしたふに花の袖ぞしをるゝ　上卷の二

が歌學全書には載つてゐないのみで他は全く同じ物である。又二卷本下卷の文集は、五冊本の中卷の文集のうちで、西山の記、椿詩の序、小野言員餞別等の數篇を除いた他が收めてある。故に二卷本は實は五冊本のうち上卷の二と、中卷の一部であつた、二卷本は五冊本のうちに全部を含まれてゐる事になる。併し五冊本も、和歌の部四冊といふものの、實は三冊で、前述の樣に、上卷の二は、光圀の詠草から精選された物であらうから、五冊本は常山詠草前集ともいふべき、元祿三年以前の集と、後集ともいふべき元祿三年隱栖後の集と、この前後の集から更に抄出した、上卷の二の撰集との二つが合したものである。

梓弓春のこなたに年こえてはや立ちなるゝ朝霞かな　上卷一　春

山はみな春めきながらさえかへり猶白妙に雪ぞ降りける　同　同

まだ咲かぬ花をば雪に思はせて散りかひくもるみ吉野の山　同　同

これらの歌は純然たる堂上舊派の作風であつて、今までに詠み古された趣である。

ゆく船の跡こそ見えね春霞たつ白浪の音ばかりして　上巻一　春

春の夜の月よりあけて鳰の海や霞みわたれる瀨田の長橋　同　同

これらは美しい敍景の歌である。

年にまれの人を待ちえて咲く花は今日ひとしほの色や添ふらむ　上巻一　春

中院通茂が關東下向のついでに、花見のために光圀の邸を訪ねた翌日送つた歌である。光圀は通茂に親交があつたのである。

あをによし奈良の都はあれにしをまたや榮えむ萬ことの葉　上巻一　雜

萬葉集の註釋をおもひ立つた時の歌である。まことに萬葉の世人にもてはやされるにいたつたのはこの時以來の事である。

位山のぼるもくるし老の身は麓の里ぞ住みよかりける　上巻一　雜

元祿三年中納言に任ぜられた時の詠である。

この春はよその櫻にあくがれて我が山里のはなや恨みむ　下巻　春

我が宿の花や恨みむ幾としも餘所の櫻の花に暮して　同　同

全く同趣の歌である。或はどちらかが始めの作で、他はやゝ改めたのかもしれない。

老いらくの頭に積るしら雪のともにふりゆく年の暮かな　上巻一　冬

春に今朝あらたまれども老いらくのかしらの雪は猶ぞふりゆく　下巻　春

これも同じやうな技巧の歌である。これらの例を以てみれば、この集は光圀の詠歌の殆んど全部を、そのあるがまゝに分類したものであらうと推せられる。これを精撰したのが上巻の二であらう。

夕立の涼しく過ぐる蓮葉に入日かゞやく露のしら玉　下巻　夏

軒ちかく落つる木の葉に聞きなれて時雨もわかぬ冬の山里　同　冬

美しい敍景の歌である。

なかなかになるゝぞつらき假初の宿りもけふを限りと思へば　下巻　雜

軒ちかくまだ聞きなれぬ松風や幾たび夢を驚かすらむ　同　同

前者は水戸の館を出で西山に移らんとしての作であり、後者は西山に移つての作である。流石にこの時の光圀の心中寂しいもののあつた事が思はれる。

光圀の歌は當時一般の歌風以外には出てゐないし、さしたる特色もないが、理窟張つた歌や、

餘りに趣向に墮し、技巧に過ぎた歌は少なく、嫌味のない清楚な歌が多い。

自撰晩花集

「自撰晩花集」は下河邊長流が建寶九年（皇紀二三四一、此の年九月天和と改元）に自撰した家集で、「長龍延寶集」ともいふ。「自撰晩花集」の名は後人が出刊した時につけた名である。この他長流の家集には、長流の歿後親友契沖の撰んだ「晩花集」といふのがある。

長流は初め通稱を彦六、名を具平といふ。姓は小寄、大和龍田の人、故あつて母の姓下河邊を名乘つたのである。はじめは長龍といつたのを、難波に出でて後、堀江の水に因んで長流と改めた。もと長流を「ながる」と訓んだのは誤りであらう。彼は富貴に媚びず、名聞を求めない、廉潔な隱者的の風格の人物であつたので、大阪の富豪等が門弟となるものが多かつたが、氣のむかない時には、招かれても行かなかつたと傳へられてゐる。

室町以來萎靡沈滯して振はなかつた和歌は、元祿の文藝復興期の機運に乘じて、先づ堂上歌學に對する反抗の烽火が揚つて、再び活潑な運動が起つてきたのである。自由であるべき和歌を、窮屈な歌學や祕傳說を擁して束縛し、和歌の道の主權を掌握し來つた堂上歌人の手から、彼等の

歌學を破壞し、和歌の民衆化を行つた先驅者の一人に、この長流が居る。長流は庶民の歌を集めて、「林葉累塵集」を撰してゐる。卽ち和歌の民衆化の具體運動である。その自序の中に、

大和歌は、大凡わが國民の思ひを述ぶる言の葉なれば、上は宮柱高き雲居の庭より、下は蘆ぶきの小屋のすみかにいたるまで、人をわかず、所を選ばず、見るものに寄せ、聞くものにつけて、皆その志をいふこととなむ。

といつてゐるので、彼の主張はよく知られると思ふ。長流は萬葉に精しかつたので、德川光圀に知られて、萬葉集の註釋を依賴されたが、物に拘らない性格の彼は、氣のむいた時に一首か二首づゝ註してゐるうちに、業を終らないで、貞享三年(皇紀二三四六)六月に歿した、時に年六十三(六十二ともいふ)であつた。これは後に契沖によつて繼がれ、萬葉集代匠記の大著となつたのである。長流が光圀から萬葉集の註釋を依囑されたのは、久松潛一氏によれば、寬文から延寶の初め頃までのうち、卽ち長流の五十歲前後の頃であつたであらうといふ。

長流が延寶九年に「晩花集」を自撰した時に、年五十五といはれてゐるのは訝しい。貞享三年に六十三で歿したとすれば、延寶九年は五十八歲の時であつた筈である。

長流は堂上歌人への反抗の第一線に立つた人ではあつたが、その歌風はまだ舊風を脫すること

は著しくはなかつた。

春のきて思ひすてたるふる年やきのふの雨のなにはすが笠　春

さくら色の衣は春にほしはてて夏はみどりの天のかぐやま　夏

浦島が箱にやあけし年ならむくやしくてのみ又ぞ暮れぬる　冬

思ふ事いはぬにこめて洩らさずばさてやしられでやまの井の水　戀

洒脫な趣のあるところ、木下長嘯子の歌によく似てゐる。二條家一派の風に反抗した長流は、長嘯子に私淑してゐたのである。始め長龍と號したのも長嘯の長をとつたのである。

朝菜つむ野邊の少女に家とへばぬしだにしらずあとの霞に　春

梅が香をさほぢはるかに送りすてて柳にかへる春の河かぜ　同

くもりなくめにこそみえね春雨のふるか朝けの風の露けき　同

一葉ちる秋やきぬらむ春風のあと河やなぎまた動くなり　秋

小山田に冬の夕日のさしやなぎ枯れて短きかげぞのこれる　冬

これらは美しい敍景の歌である。新古今の巧緻優麗ともやゝ趣の違つたやうな所もあつて、後世の江戸派の歌人の歌に似た點もあり、かつ「一葉ちる」や「小山田に」の歌は、「玉葉」「風雅」の歌風

に似てゐるやうである。爲兼の風は長流が好んでゐたところであつて、

遠きつらは只一つらに見えし鴈の近づく空に數ぞわかるゝ　秋

ゆく年をおくりの翅雪にぬれて寒きからすの夕暮のころ　冬

いかにぞと疑ふ日頃けふになりてそむく限りの暮ぞみじかき　戀

これらの歌は特に「爲兼大納言の體にならふ」と詞書してある歌である。いかにも巧みに爲兼の調と修辭を摸してゐると思はれる。

三吉野の山人とても何かあらむたゞこの花のひと枝にこそ　春

「僧契沖がもとより庭の櫻をりておこせたるに」と詞書がある。長流が契沖といかに相許してゐたかはこの歌でも推知され得るであらう。

唐土にありし人だに戀かへすみつの濱なる松にやはあらぬ　雜

これには「契沖が難波より山里にいりけるにいひ遣はしける」と詞書してある。

夏の歌には郭公の歌が二十餘首の多數ある。郭公は昔から多く夏の歌の題材であつたものである。

打ちとけていつかきこえむ時鳥うの花がきのゆきのしたころ　夏

というやうな歌であつて、餘り特色のある歌はないやうである。

　時鳥山とし高くなのるより麓になりぬうぐひすの聲　　夏

「さつきの頃ほひ鶯時鳥のともになきあひたるを聞きて」と詞書がある。俳人其角の「時鳥啼くや雲雀の十文字」と同じ境地に興じたものであるが、この歌は殆んど舊派の歌風である。

　しらま弓おして雪ふる年の内の何處をとりて春とさだめむ　　春　年内立春

　夏衣なほ山さむく尋ねみむ殘るさくらの雪にあふやと　　夏

　天つ風さえくらしたる名殘には水なき空に沫雪ぞふる　　冬

これらの歌も理智的の技巧を用ゐたるところ、全く舊派の歌風であるやうに思ふ。

　秋の部には「七夕」と「月」の歌が多い。

　むかへ船八十瀬をかけて漕ぎ出でぬと妻にはつげよ天の河風　　秋

これは「七夕」の歌であるが、これは「小倉百人一首」にも出てゐる篁の「和田の原八十島かけて漕ぎ出でぬと」の歌を摸したものであることは明らかである。同樣の歌に、

　更科の山もおもはずわが心なぐさの濱に照る月をみて　　秋

などがあるが、機智を喜んでやゝ兒戲に類した感がある。

秋ときく風の使はけふたちぬ今いく日あらば初鴈のこゑ　秋

夕霜のまづやおくらむ高砂の尾上にさゆるいりあひの鐘　冬

これらも本歌取りの例である。

關こえて打出の濱にけさみれば近江は霧の海にぞありける　秋

近江より朝たちくればたづのなくやすの川瀨に冰ゐにけり　冬

馬はあれどかちより渡る木幡川こは誰が爲にぬるゝ通ひ路　戀

これら萬葉風の歌には、萬葉學者である彼の面影をみることが出來る。

雜の部には富士山の歌が十數首並んでゐる。

ふじのねにのぼりて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり

天づたふ日をおふまではなけれどもおのが力ぞ我もかはらぬ　雜

のごときは秀逸であらう。

前をふみあとに躓き我こそは道もなき世に夏はきにけれ　同

かは衣毛をふき疵をいふ世にも身はつゝみなし麻衣にして　同

みだるべき世はたれ〳〵も遁るらむ治まる時を獨りすてばや　同

世の中に道ありとてもふみとめじ山のいはほに進む心は　　同

これらの述懷の歌には脫俗的な性格、堂上歌學に對する反逆兒としての長流の意氣が認められて面白い。

最後にある長歌は、五七と七五との調の交り合つたやうな作である。五七調を意識しながら、思はず七五調になつたのかもしれないが、舊派歌人が永い間顧みなかつた長歌の一方面を拓いたものである。

以上の例によつても知られるごとく、長流の歌は全く舊派堂上歌人の風を脫却し得たとは云はれないが、爲兼、長嘯子に私淑して、とにかくに特色のある歌を殘してゐる事は、大いに認めなければなるまいと思ふ。

自撰漫吟集

自撰漫吟集は契沖阿闍梨の自撰歌集である。近世の和歌復興運動は、二條家歌學、傳授思想の破壞、上古、中古の古典を自由に新しく科學的に、卽ち文獻學的に硏究して古典の語學を明らかにして、久しく亂れてゐた歌文の語法を正した新しい硏究法の採用、所謂古學の勃興となり、上

代研究はひいて上代の憧憬となつて、古道主義の唱道との三つの段階を經て行はれた。

師傳を盲信する事なく、廣く縱橫に古典を研究して、想像を排し、一々上代の文獻によつて、上代の語を解す。卽ち上代を解するには上代の心によつてするといふ態度、卽ち文獻學的の態度によつて古典に臨んだ所謂古學を興して、ひたすら師傳を尊信するの蒙を啓いた、新しい學風の開拓者は實にこの契沖であつたのである。

契沖は寬永十七年(皇紀二三〇〇)に、播磨尼ヶ崎に生まれた。彼は長流よりは十六の年少である。契沖の家は武士であつた。肥後守加藤淸正に仕へて食祿五千石を給はつてゐた下川元宜といふのが契沖の祖父である。その太郞が元眞、末子元全。元全の子が契沖である。契沖の伯父元眞の代には一萬石を給はつてゐたが、寬永九年(契沖の生まれる八年前)に主家加藤家は改易沒收されたので、元眞は加藤家を辭して、播州尼ヶ崎にきて、松平遠江守に仕へた。契沖の父善兵衞元全は元宜の末子で、幼にして父元宜に死別したので、兄元眞のもとに養はれてゐたが、後尼ヶ崎城主青山大藏少輔に仕へて、祿二百五十石を食んだ。元全には八人の子があつた、その三番目の子が契沖である。契沖は幼い時から極めて頭腦明敏であつたと見えて、五歲の時、母が百人一首の和歌を教へたところが、旬日でよく諳記し、父が實語教を教へた時も、日ならずして諳記して

父母を驚かせたといふ。慶安三年(皇紀二三一〇)十一歳の時に、尼ヶ崎にあつた父母の家を離れて、今里の妙法寺に入つて、住職丰定に就いて佛學を學び始めた。此處でも彼は、丰定から般若心經を教へられ、四五度讀んでよく之れを諳んずるといふやうに、絶大な記憶力を發揮して、師に認められ、十三歳薙髮すると共に高野山に修行の爲に上つた。時に承應元年(皇紀二三一二)であつた。高野にゐること十年、東室院の左學頭快賢を師として學んだ。この快賢は佛學はもとより、神道、和學にも通じてゐた。これが後に契沖が眞言僧でありながら、國學研究に赴くにいたらしめた機緣であつたかもしれない。契沖が阿闍梨になつたのは寛文三年(皇紀二三二三)二十四歳の時である。水戸の學者安藤爲章の「行實」によれば、寛文二年に契沖は高野山を下つて、攝津生玉の曼陀羅院の住職となつたといふが、これは爲章のは一年の誤りがあつて、二十四歳阿闍梨になつて山を下り、曼陀羅院の住職となつたのかもしれない。寛文四年(皇紀二三二四)契沖二十五歳の時に、父元全は北越で客死した。又難波の隱士長流との交はりもこの曼陀羅院の住職時代であつたであらう。十七歳の時から和歌を詠みはじめた契沖が、長流と交はりを結ぶにいたつたのは極めて自然な事であるが、これが後に契沖をして國學研鑽に沒頭せしめるにいたつた最大の原因であつたであらうし、長流の學問は契沖に影響してゐるのであつて、長流との交際は國學者

契沖の生涯にとつて極めて重大な事である。契沖と長流との交情は極めて深く、貞享三年（皇紀二三四六）長流が死ぬまで續いてゐた。

當時佛學の研鑽の外他念なかつた契沖にとつては、寺の住職としての雜務の煩瑣に堪へなかつたのでもあつたであらう、彼は數年ならずしてその職を去つて、一笠一鉢隨意に諸國に放浪して佛寺靈場を周遊した。或時は室生山に登つて、幽絶な巖窟を見ては死の誘惑を受けて頭を石にうちあてて生を斷たうとはかつたが果さなかつた。生死の岐路に彷徨した契沖はこゝに新しい生涯を見出したのであらう、吉野、葛城等の山川を跋涉して、再び高野に上つて、圓通寺の快圓に菩薩戒を受けた。山を下つた契沖は和泉の久井に住する事になつた。それは彼の三十歳の頃であつたであらう。三十歳とすれば、寛文九年（皇紀二三二九）荷田春滿（あづままろ）の生まれた年であつた。久井の里で契沖は靜かに佛典漢籍を讀んでゐたが、悉曇に關する研究もしてゐたのである。この悉曇學は後年の契沖の語學に大いに役立つたものである。久井に居る事數年、延寶二年（皇紀二三三四）三十五歳の頃には、久井から二里程隔たつてゐる池田萬町の豪家、伏屋長左衛門重賢の邸內養壽庵に移つてゐた。これは長左衛門が學問に志の深かつたせゐでもあらうが、その祖父が豐臣秀吉に仕へてゐたといふから、契沖が淸正の家臣のゆかりであるといふ緣故も、この二人を結ぶ一

因であつたのであらう。この伏屋家には國書を多く藏してゐたので、日本紀以下の國史舊記を讀破し、博く歌書に眼を曝したのであつた。この養壽庵時代は古典研究家としての契沖の基礎準備の時代であつた。

かくて契沖は延寶六年(皇紀二三三八)三十九歳の時から、再び大阪に歸つて、今里の妙法寺の住職となる事になつたが、實際になつたのは契沖の師定の死んだ延寶八年(皇紀二三四〇)契沖の四十一歳の時であらう。この頃契沖の兄元氏が松平家を辭して浪人し、母や兄元氏が契沖と共に住む事になつた。延寶九年には長流と契沖とはおの〳〵歌集を自撰した。而して長流が水戸の光圀から萬葉集の註釋を乞はれたが病の爲に果さなかつたので、契沖が代つて之れにあたる事になつたのは、久松潛一氏によれば、天和三年(皇紀二三四三)契沖の四十四歳の時からであらうといふ。爾來契沖は積年蘊蓄を傾けて、萬葉集代匠記の完成に努力するにいたつた。これこそ從來の研究法をすてて、新たに文獻的な研究法によつて、古典研究上に一新時期を劃し、あたらしい研究法の端をひらいた一大快著であるのである。貞享三年(皇紀二三四六)には國學の友であり先輩であつた長流の死にあつた。契沖は四十七歳であつた。翌貞享四年には萬葉代匠記の初稿本が脫稿した。元祿三年(皇紀二三五〇)契沖五十一歳の時に、萬葉代匠記精撰本の稿が成り、その年

母が歿し、契沖は妙法寺を如海に讓つて、己は高津の圓珠庵に隱棲するにいたつた。この圓珠庵の建物は、伏屋氏から嘗て契沖の住つてゐた養壽庵を寄進されたのが卽ちこれである。圓珠庵に移つてから契沖は萬葉研究の爲に得た餘材を以て古今餘材抄其の他の書を草した。契沖の研究は上古から、中古に進んでいつた。元祿九年（皇紀二三五六）には、今井似閑、海北若沖等のために萬葉集の講義をした。元祿十三年（皇紀二三六〇）十二月六日六十一歲の時に、契沖の後援者水戶の光圀が薨去し、翌十四年一月二十五日には契沖も寂したのである、年六十二歲。かくて長流契沖によつて始められた、新しい自由な研究法は、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長等の傑物によつて承繼され、古學國學の隆盛を來すにいたつたのである。

契沖の本領は歌學者といふよりは語學者であつたが、彼の歌論は「物を興じてさるはかなき事をもよむが歌の道はをかしきなり。」といふのが根本觀念であつて、現實のそのまゝではなくて、これを美化する主情主義の立場にあつた。これは定家の歌論の立場であり、平安朝文學の基調でもあつた。

契沖の歌集の主なものは、漫吟集と、文化八年に淸水濱臣が長流の「自撰晚花集」と共に刊行した契沖の「自撰漫吟集」とがある。本大系に採錄したのはこの「自撰漫吟集」である。その刊

行の次第は濱臣の序によつて、濱臣が手もとにあつたものを刊行せしめた事が知られるが、その原本は延寶九年契沖四十二歳の時に自ら集めたものであるから、初期の作しか載せてゐないが、その自撰であるところに興味がある。大坂殿村家藏の三家和歌集によつてその原形を覗ひ知る事が出來る。三家和歌集は、湖海狂士の跋文によつてその成立を知ることが出來る。それによると湖海狂士が、長龍(長流の前名)に擧白集中の歌のすぐれたのを撰ばせて「長嘯歌選」と名づけ、又長龍自身の歌を撰ばせて「長龍延寶集」、契沖にも自歌を自撰させて、これを「契沖延寶集」といひ、この三集を「三家和歌集」といつた事がわかる。この「長龍延寶集」と「契沖延寶集」とを後に濱臣が刊行して、「自撰晩花集」「自撰漫吟集」と名づけたのである。この三家和歌集本と、濱臣の刊本との間には、多少の歌の異同がある。

さて自撰漫吟集によつて彼の歌をみてみよう。

春風はそよとばかりの音もなし霞みわたれるゐなの笹原　春

夕づく日かすみこもりし影きえて寒き入江をわたる梅が香　同

まきもくの檜原の霞たゞならず曇ると見れば春雨のふる　同

雨まじり風うちふきてふる里にちる花さむし春の夕ぐれ　同

これらは優麗な敍景の歌である。あるが儘の自然そのまゝではなくて、これを美化し、想化した點に巧みな技巧がある。萬葉の雄渾ではなく、古今の典雅でもなく、新古今の巧緻華麗と同一趣であると思ふ、かく自然を美化し、想化し、技巧的な表現をするところに契沖の歌の特質が見られるのである。

鶯もなかぬかぎりの年の内にたが許してか春はきぬらむ　春

高砂の尾上の松を雪ながらうづむは春のかすみなりけり　同

梅の花にほふ月夜をふかしても朝いゆるさぬ鶯の聲　同

これらの歌はやゝ理知的である技巧が理窟に墮して、舊派二傳家の歌人の歌風と同一の弊が見られる。新古今の情趣主義的の歌風よりは、古今の理智的な歌風に近い歌ではあるが、技巧を重んずる契沖の歌風はこれにも見られるのである。

梅が香のうすくなるやと拂はねば春は枕に塵ぞつもれる　春

たまと見て手にはとられぬ白露や月のかつらの雫なるらむ　秋

白雲のうづむ山路はわけなれてけさや木の葉にまよふ柴びと　冬

冬の夜のさゆる空ゆく鴈がねの氷るなみだやけさの朝じも　冬

これらの技巧、白露を月の雫と見るとか、鴈の涙の冰を初霜と見るといふやうな修辭、すべてやゝ理智的な技巧は、從來多くの舊派歌人によつて試みられたものである。かく技巧を重んじた契沖は、

科長戸の神のみ室にあらねども風は扇にこもるなりけり　夏

の如きは、やゝ極端にはしつて、そこに何等の美もない歌を作つてゐる。技巧といふものは元來が、理智の働きからくるものであるから、その過重はやゝもすれば、單なる理窟に墮するやうになる嫌があると思ふ。この歌の如きはその例であらう。

昨日かもとりし早苗のつかのまにふしみの田の面秋風ぞふく　秋

これは古今集、秋、讀人知らずの「昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉戰ぎて秋風の吹く」を本歌としてゐる歌である。

ゆきて見む思ふ事のみたがふ身はなぐさみやする姨捨の月　秋

これも古今集、雜上、讀人知らずの「我が心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」に據つた歌である。

夕立のよそにすぐるを時雨にてふじの高ねは初雪ぞふる　夏

これにも巧みな技巧が見られるが、或はやゝ理窟つぽい嫌ひがないでもない。

やたの野は夕立すらしふく風のあらちの峯に雲さわぐなり　夏

これには餘り巧緻な想像や技巧は見られない。あるが儘をあるが儘に詠じた趣があつて、萬葉の歌風に近い歌である。或は古今集の讀人知らずの歌に似てゐるといふ方が眞に近いであらう。

いかにせむ軒端の荻をかりすてて聞かじと思へばよもの秋風　秋

立田姫山のにしきも織らぬまにまづ一むらの庭の秋萩　同

みなの川もみぢ葉流る筑波ねの山もとゞろに時雨ふるらし　冬

しぐれせし小野の篠はら風さえてあまる雪より霰ふるなり　同

これらもすぐれた敍景の歌である。最後の歌の「あまる雪より」に巧緻な技巧がある。

心ある人は昔にいではててひとり殘れる秋の夜の月　秋

くれにけりありて憂き身のながらへば又こむ年もかくや歎かむ　冬

たゞ感情を率直に歌ひ出でたまゝの歌であつて、技巧を凝らした歌よりも（それが契沖の特色ではあるが）人の心をひく事が多いやうに思はれる。これは萬葉の歌風に近いと見られない事もあるまいと思ふ。

ならひ濱ありし難波もやま河の友なし千鳥こひつゝぞ鳴く　冬

詞書によれば久井時代に長流に送つた歌である。契沖が長流と友としてよかつた樣がよく理解されよう。

契沖の抒情の歌についても、敍景の歌によつて知つたと同樣なことが云はれると思ふ。

おもひねの夢の直路の浮橋もあふくま川にわたすよぞなき　戀

玉くしげ同じふたみの逢坂にあけやすからぬ關の戶もがな　同

わかの浦に老をなこその關すゑて常磐の山にすむ人もなし　哀傷

これらは感情を率直に詠じたのではなく、技巧を通じてゐるところは、從來の戀の歌に見ると同趣である。

おもひねの夢をはかなみ起き居つゝ猶心から見つる月かな　戀

心ある人に一夜の宿かりてなるゝも悲し明日のふるさと　羇旅

草枕ゆふべ〳〵に數ふれば野くれ山くれ我はきにけり　同

雲るぢも猶おなじ世を賴みしをさてだにあらで別れぬるかな　哀傷

最後の歌は父の死を傷んだ歌である。これらは餘り技巧を弄しないで、反つて人を動かすもの

があると思ふ。

夕闇に玉なさづけそそならぬを欺くやとてくだきもぞする　釋教

法の舟楫も碇もありながらまづ心せよそこやまたきと　同

これら釋教の歌には、僧侶としての契沖の知識や人生觀を見る事を得て、釋教の歌としては優れたものであらうが、釋教の歌そのまゝの本質が智的に流れて精彩に乏しいものであるから、歌としては高く評價する事は出來ないであらう。

敷島のやまとながらに機ばりの唐錦ともみゆる言の葉　雜

はしならぬ人の言の葉くちもせじ長良の川のながく流れて　同

前者は長嘯子、後のものは長流の贊である。契沖がこの二人を尊敬してゐた事は、この歌によつてよく覗ひ知られるであらう。

ひとへ山表もうらとなりにけり春の衣をたちし霞に　春

力をもいれぬ歌さへおもにとや面杖つけどこしのをるらむ　雜體

これらの誹諧趣味、連歌趣味の歌に、長嘯子の歌の影響が見られると思ふ。技巧を重んじた契沖は、

佐保姬の霞をたちし衣にはふりせぬ雪やま袖なるらむ　雜體

といふやうに、同じ文字のない歌や、物名のやうな技巧ばかりの歌も詠じてゐる。

紫もあけも綠もふる衣ならのみやこは誰かきてみむ　雜

大空にめわたりきえてとぶ鳥のあすかの都あとものこらず　同

これは彼の萬葉研究の影響によつて得た歌ではあるまいかと思ふ。

我が身今みそぢもちかの汐竈にけぶりばかりのたつ事ぞなき　雜

思ひつることとたが磯のうつせ貝我が身むなしく世をや過ぎなむ　同

昔こそあだにもすぎめ去年今年昨日今日さへ何かくやしき　同

これらの述懷の歌には、契沖の感情、生活を率直に歌つたものであつて、巧まざるのに我等に迫る或物を感じるやうに思はれる。

之れを要するに、我國に新たに文獻學的研究法を採用して、古典研究上に一新時期を劃し、舊來の傳授思想を破壞して、研究の自由を示した、古學の先驅者、萬葉學者契沖も、その作歌に於ては、その主張が新古今的技巧にあつて、舊派の歌風を出づる事あまり遠くなく、作歌上には未だ萬葉歌風の影響を多く認めることは出來ない事は、長流の歌と大差はないやうに思はれるが、

これを長流の歌に比べてみると、長流には長嘯の流をひいた、誹諧歌趣味、連歌趣味が多いが、契沖に於てはこれが少なく、古物撰風の正雅な風が多く、契沖が希求したらしい、美的な技巧的な新古今風の和歌よりは、率直に彼自身の實感生活を詠じた歌に、我等の同感をひくものが多いやうに思はれる。これ併しながら、萬葉歌人の作歌態度に近いと見られるかもしれないやうに思はれる。

戸田茂睡歌集

平安中期と江戸の元祿時代とは、我が國の文學史上で、文運隆盛の二頂點を示してゐる。元祿の文藝復興時代は舊文學が衰へて新興文藝が續出して文學の主潮流となり、特種階級の手にあつた文學が民衆化した時代である。淨瑠璃に於ける近松、浮世草紙における西鶴、誹諧に於ける芭蕉などはその代表的なもので、彼等の作品は何れも劃期的の物であり、傑れたものであつた。これらの平民文學が步調を揃へて花々しく活躍してゐるのに比べると和歌は一步遲れてゐる。和歌に於てはこの元祿時代は中世歌學の破壞時代、二條冷泉家歌學の束縛から脫せんとして自由研究を高唱してをつた時代である。この和歌がおくれたのは和歌には非常に久しい傳統があつたばか

りでなく、その中心が堂上にあつて、神聖視されてゐたといふ事が最大の原因であらう。
舊歌學に對する反抗は長流契沖に於ても見ることが出來るが、契沖は二條家歌學の破壞よりも新しい研究方法の建設に努力した事は前述の通りである。舊歌學攻擊に全力を傾倒したのは戸田茂睡である。然して長流、契沖はもとより、近松、西鶴、芭蕉など皆上方方面に出た人である。即ち元祿文學の中心地は上方であつたのであるが、茂睡は新興の江戸に住した人であつた。
戸田茂睡は寛永六年(皇紀二二八九)五月十九日に、駿府城內二の丸に生まれた、これは光圀の生まれた翌年であり、長流が六歲の時であり、契沖が生まれるよりは十一年前である。父は渡邊監物忠、駿河大納言忠長の附人であつて、六千石を賜はつてゐた。茂睡はその六男である。處が寛永九年忠長が高崎に幽閉されたので、茂睡の父忠は大關土佐守高增に預けられて、長男善に家を繼がせて、己は二男以下を連れて下野那須に蟄居した。此の時茂睡四歲である。後免されて茂睡は江戸に出た。これは寛文元年(皇紀二三二一)茂睡の三十三歲の時であつたであらう。當時友の「茂睡翁傳」には承應二年二十五歲の事としてゐる。江戸に出た茂睡は伯父戸田政次に養はれて戸田姓を名のるにいたり、本多侯に仕へて三百石を賜はり、本鄕森川宿の邸內に住したが、本多侯國政改革の時に浪人して、淺草金龍山の邊に居住した。天和二年(皇紀二三四二)五十四歲の

時長男を失つて悲嘆し、翌年の春高野山に上り、その途中大磯鳴立澤に碑を建てた。碑は中央に「鳴立澤戸田茂睡」左右に「哀れ思へ昔の秋の夫れならで鳴立澤に殘す我が名を」とあり、横に「天和三年三月二十五日爲亡息高野詣之序造之」と刻してあるといふ。元祿十一年(皇紀二三五八)七十歳の時に、彼が舊派歌學を攻撃せる歌論梨本集が出來た。賀茂眞淵の生まれたのはこの前年元祿十年の事であつた。元祿十三年に梨本集を刊行した。茂睡七十二歳、德川光圀の薨じた年である。契沖はその翌年示寂してをるし、長流の死んだのはこれより十四年前茂睡の五十八歳の時であつた。かくて茂睡は寶永三年(皇紀二三六六)四月十四日七十八歳で歿した。この年に荷田在滿が生まれたのである。

茂睡の和歌史上の功績は、制禁の詞のいはれのない事を論じ、歌詞の自由を唱へて、和歌を冷泉二條兩家の中世以來の歌學の束縛から解放して、自由の境地を開かんとした潑剌たる彼の歌論にある。彼のこの精神は寛文五年三十七歳の時に記せしといはれる宣言書に見えてゐるが、その主張を一々豐富に例證を引いて論難したのが前述の梨本集である。梨本集五巻には和歌革新の急先鋒としての彼の全精神全氣概が充滿してゐる。例へば「ほの〴〵と」といふ詞は「ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞおもふ」といふ人麿の名歌があるから、それに對して、私

の歌には初五文字においてはいけない、といふ說に對して彼は、

歌の道も先達の詞をかり、その心をまねてこそ道には至るべし、延慮せよといふは、あるべき事ともおもはれず。「ほの〴〵と」いふ詞は、「月やあらぬ」、「櫻散る」などといひたるとはちがひ、月にも花にも、雲にもかすみにも、特更にはるの曙、うみ山の眺望に、色匂ひの言語にもなが〳〵しくいひ盡しがたきを、此ほの〴〵といふ詞一つに、かねそなへたる事なれば、我等體の歌にも、五文字にほの〴〵といひたらば、少しは歌のやうにもなるべきものをとおもへど、延慮といふ事あれば、我もよまれず、人もゆるさぬゆゑ、いよ〳〵歌あしくなりて、一首のぬしにさへならざる、みな詞の制あるゆゑなり。むかしはかやうの延慮もなかりしにや、五文字にほの〴〵とおきたる歌おほし。

と論じて、

ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹きおろす山颪の風　　源　信　明

ほの〴〵と春こそ空にきにけらし天の香山霞棚引く　　後鳥羽院

以下十首の歌をひいて證としてをるが如きである。即ち梨本集の主張は和歌を二條冷泉の窮屈な禁制から解放して、新古今以前の自由な天地におかうとしたのである。

茂睡の家集といふものはない。彼の歌は「紫の一本(ひともと)」、「わか紫」、「隱家百首」、「鳥の迹」、「さ

ざれ石」、「渚の松」などに散見してをるのである。今本大系には「鳥の迹」、「紫の一本」、「隱家百首」のうちにある彼の作を抄出して、彼の歌の面影を示したのである。

「鳥の迹」は山名玉山、清水宗川以下當時の江戸歌人の詠を茂睡が撰んだ私撰集であつて、元祿十五年刊行、歌數八百三十首に及んでをる。

「紫の一本」は遺佚と陶々齋といふ二人が、江戸を廻り歩いて古、今を語り合つたやうに擬したもので、天和二三年頃の作である。

「隱家百首」は茂睡晩年本郷丸山本明寺谷に暫く住んで、自ら隱家の茂睡と名乘り、傍の小橋を不求橋と號してゐた。その隱家、不求橋、梨本等名づけた理由の歌、茂睡の歌をはじめ勸進の歌百首、追加二十九首の和歌を集めて元祿七年出刊したものである。茂睡の隱家の狀は「紫の一本」に、

不求橋、　丸山本明寺谷にあり。陶々齋と遺佚と、染井の花屋見物の歸りに、丸山へよりて見るに、わづかなる橋を渡し、不求橋といふ札を立てたり。橋のきはに、あばらなる竹の折戸の門を設けて、檜の木板のちひさきに、隱家の茂睡と書きて、

塵の世と思ふ心も積りては身の隱家の山となるらむ

とあり。是はいかなる者ぞと尋ね侍りければ、遺佚は歌の友にて、よく知りて物語する。此のあるじは、はじめは淺草に住みけるが、世を遁れてこゝに暫く住みける時、此の橋を渡したるを聞きて、親族なりける源の光豐といふ人のもとより、

隱家は山も求めず世を渡る心やかけし前の棚橋

と詠みておこせたるに、

我が庵は山も求めず棚橋の短くみつる世を渡る程

と返歌したりしより、不求橋と名けけるといふ。

とあるので、想見し得ると思ふ。

これらの書に載せられてゐる歌によつて、彼茂睡の歌風をみて見ようと思ふ。彼の歌は舊派の束縛から放れて自由である。

あちこちとめぐりて爰にくるま坂うちくたびれて腰をひくなり　紫の一本

武藏野の詠めの末にたとへては富士もさながら草の上露　同

聞く人の首なげぶしの唱歌にも浪あらじとはよき小歌ゆゑ　同

久しくてあうたる事を嬉しくも我ぞんじたてまつりすぎそろ　同

第一首は「車坂」の歌、第二首は武藏野の廣大なのを誇張してよんだ歌、第三首は、酒宴の時になげぶしを唱うものがあつたので詠んだ歌、第四首は淺草の三社祭見物にいつて、茂睡の舊庵に入つて、昔をしのんでゐるうちに、まつりが渡つたので詠んだ歌である。これらの歌に用ゐられてゐる技巧は機智と言葉の洒落であつて、誹諧歌風といふよりは全くの狂歌である。そしてこの言葉の洒落と機智とは茂睡の歌の一つの特質をなしてゐると思ふ。この輕い諧謔、狂歌趣味の歌は一面和歌の民衆化とも見る事が出來る。

風たえて池靜かなる水煙に冬ともわかぬ朧夜の月　　紫の一本

纖細巧緻な敍景の歌であるが、斯樣な新古今風の歌は彼の詠には餘り多くは見る事が出來ない。新古今風といふのは、此の歌の内容がもつ情趣についていつたのであつて、「池靜かなる水煙に」は、「すゐえん」と音讀させるのであらうが、漢語をそのまゝに和歌に用ゐるといふ處に、和歌革新家としての、用語の自由を唱へた彼の新し味を十分にみる事が出來る。

あはれとは夕越えて行く人も見よ待乳の山にのこす言の葉　　紫の一本

これは彼が待乳山に建てた碑に刻んだ歌である。自ら隱家の茂睡などとは稱しながら、かく待乳山に碑を建てたり、鴨立澤に碑を建てたり、又は紫の一本のうちに、自ら住みし淺草の庵のさま

を記して、「熊にあらず虎にもあらず淺草におき臥すわれを誰かしるべき」といふ歌までも載せたるが如き、又は同じ書に、不求橋の際に、隱家のさまを記すが如きを見れば、彼は元來自負の念強く、名聞を好んだ人であつたのであらう。それが逆境に沈んだがため世を拗ねての隱棲であらう事が、この歌に於ても覗ひ知られるであらうが、なほ、

身にかへてをしみし家の名をだにも捨つればすつる世にこそありけれ　紫の一本

この歌を見れば一層明瞭になるであらう。

秋の色のながめにかへてこの頃は高嶺のあらし麓のしぐれ　鳥の跡

和歌の雅俗巧拙はしばらくおいて、自由に放膽にのび〳〵として生彩のあるところ、堂上派歌人の詠とは全く面目を異にしてゐると思ふ。

祝ふべき暮にもあるかな身にとりてなにのことなく今日も過しつ　紫の一本

思ひねの通ふ夢路もかさなれば古鄕遠し一夜々々に　鳥の跡

旅衣たちへだてても去らざるはさらばといひし人の俤　同

命ありて今日は此の野に行き暮れぬあすはいづくの草の葉の露　同

立ちよるもひとりさびしき木の下に花も去年見し人や戀しき　同

みそら行く光はさらにかはらぬにいつの月日の老となしけむ　　鳥の跡

これらの抒情の歌は枕詞掛詞緣語比喩などのうるさい修辭技巧を用ゐないで、あるがまゝの感情を率直に詠じて、しかも餘韻の嫋々たるものがあつて得易からざる傑れた歌であると思ふ。

茂睡の歌はその抒情の歌に於ては技巧を求めないで、眞情そのまゝを詠出して人に迫る力のあるところにその一つの特色があり、彼の好んで用ゐた技巧は、多く掛詞緣語であるが、その用ゐる方內容が諧謔洒落に類して全くの狂歌趣味であるところにも他の一面の著しい特色がある。前揭の「紫の一本」の歌の如き後年の一九の「膝栗毛」に見る狂歌と同一の趣をみせてゐる。この狂歌風の歌を詠じたところに彼の江戶ッ子氣質と堂上歌學への叛逆兒としての彼の面目が、より多く現はれてゐるやうである。とにもかくにも彼の歌は相當異色をもつてゐる點は大いに注意するに足ると思ふ。

春葉集

春葉集は荷田春滿(あづままろ)の家集である。春滿は京の伏見の稻荷の祠官荷田信詮の男である。信詮は深草の元政と親交のあつた人である。荷田の宿禰は姓で、氏は羽倉であるが、羽倉には東西兩家あ

つて、春滿は東羽倉の方である。通稱を齋宮、初め信盛といひ、後に東麻呂と改めた。東丸、東滿、春滿ともかく、いづれも「あづままろ」と訓む。正德の頃は旣に名を東麻呂と改めて居た、春滿とも書いたのは享保元年以後の事だといふ。

春滿は寬文九年（皇紀二三二九）に生まれた。前の戶田茂睡四十一歲、光圀四十二歲、長流四十六歲、契沖が三十歲の時である。

如何なる事情があつたのか家職は春滿の弟信名がついで、春滿は我が國古典の硏究に心をひそめて大いに國學を唱へ、その學風は世に羽倉學といはれた。契沖の古典は古典を正しく解しようとするにあつた。卽ち上代の書を解するには上代人の心を以てして、後世からの想像を以てする事を排斥したのである。そのために古典を縱橫に硏究して、その正解を得ようとしたのであつたが、春滿の國學にいたつては古典の硏究は古代への憧憬となり、古代の道を以て、卽ち大和民族本來の思想を以て、人間生活の目標として、華美淫靡な、當時の弊風を救はうとするにいたつたのである。卽ち古代硏究が古代信仰へと進んだのである。所謂國學は春滿によつて唱道されたのである。これは彼が神官の家に生まれた事が非常に影響してゐるであらう。春滿が契沖の弟子となつたといふ說と、然らずといふ說とあるが、直接に契沖に學んだか否かは知らず、春滿が契沖

の著を讀んで得る處があつた事は疑ひのない事であらう。享保の頃春滿が江戸に出た時には、將軍吉宗が聘したけれど辭して受けなかつた。赤穗の遺臣子葉大高源吾は春滿と風流の交はりがあつたので、春滿は義士復讐の企てを知つて大いに之れを壯として、自分が吉良邸に出入してゐたので、邸中の狀を源吾にしらせてやつたので、赤穗義士は非常に益を得たといはれてゐる。これらの事にも已に廢頽せんとしてゐる元祿士風に慨してゐる春滿の氣質を知る事が出來ると思ふ。晩年京に歸つて、伏見に國學校を創立しようとして、幕府に建議した。その時の啓文は世に傳はつてゐて、春滿の意圖をよく覗知することが出來る。がその企ては遂に成就しないで、元文元年(皇紀二三九六)七月、春滿は六十八歲で歿した。家は甥の在滿が繼いだ。

春葉集二卷は寬政七年(皇紀二四五五)、上田秋成等が選んで上梓したものである。上卷は四季及び雜の歌がをさめてあるが、春滿平生の主張によつて戀部はない。下卷には、創學校啓の幕府への建議文、信美が臨寫した古今かな序などを載せてある。本大系にはその上卷和歌の部だけを收錄したのである。その成立ついては、

浪速のよしあしをも撰ばす、玉藻も藻屑もあるがまゝに信郷宿禰のかき集めたるを、たまあへる人にも見せ、うからやからの後にも傳へむとて二卷につくれることを、春の葉の茂りなすこち〳〵の枝のさかゆくてふふる

言も二、春葉集とはとなふるになむ。

と、荷田信美の序にあるによつて知られるし、春葉といふ題の意味も知られる。

さて彼の歌はどうであらう。

たちへだつ波のひまにはあらはれて霞にしづむ淡路しま山　春

春雨の降るとも見えず谷かげは岸のしづくの音ばかりして　同

夏の夜は難波の蘆のふしのまもなくて明けゆく夜半ぞはかなき　夏

水上は夕立すらし見るがうちに一すぢにごる里のなか川　同

秋風にたちそふ浪と見るまでに男花うち靡く武藏野のはら　秋

夕風のふきもはらはぬ玉笹や小ざゝがはらに露しづかなり　同

おきいづる霜のあさぢの朝ぼらけ外に色なき庭の寂しさ　冬

これらの歌は新古今風の優麗な叙景歌である。「たちへだつ」、「水上は」の歌は殊に巧妙纖細な歌である。がこれらは彼の本領ではないかもしれない。

夕ごりの雲はみ冬をたちへだて今朝ふる雪や春の初花　春

関守のある世なりせば逢坂の花にとゞまる人もゆるさじ　同

これらの歌の如きは舊派の歌風そのまゝの、理窟に墮した作である。かやうな作も春葉集中には可成り多く見えてゐる。

稲荷山ほがら〳〵とあくる夜を名のるからすの聲も春なる　春
いひしらぬ神代の春の面かげをみせて霞むや天のかぐやま　同
くりかへし見る卷々の書の數にあきの夜長きほどぞ知らるゝ　秋
霜をへてもろからむよりきほひ散れよしや冬たつ風のもみぢ葉　冬
おもしろやをりかへし謠ふ榊葉にゆふつけ鳥も聲合はせつゝ　同
そのかみの國の始めの面影はたちもへだてぬ秋ぎりの空　雜
ふる雨と照る日の惠みまち〳〵に高田くぼ田も神のまに〳〵　同
たが爲と誰か思はむ世をまもる天つやしろも國つやしろも　同
黃金もてつくる佛をてらふとや世に輝かぬ寺とてはなし　同
したふから流れての世も其のかみの心くまるゝ水莖のあと　同
おやの親の世をくみしらる水莖の跡や子の子のしるべにはせむ　同
わけ入りてとふも語るも靜けしなやまとの書のふかき敎へに　同

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは　　同

これらの歌には彼の主觀性格がそれ〴〵著明に現はれてゐる。卽ち神官としての彼の面目、皇道復古の主張者たる彼の氣慨、警世家としての彼の情熱は、これらの歌によつてよく覗ひ知る事が出來る。これらの抒情歌こそ彼の本領であらう。彼の歌の生命はこれらの歌に於て炳乎として輝いてゐる。

萬葉復古を歌論の本旨として主張した東麿も、その作には未だ著しい萬葉の影響を認める事は出來ない。彼の歌論と創作とは未だ同一の步調をとつてはゐない。從來の歌風を十分に離れきつてはゐないこと、長流契沖等と同樣であつた。

あづま歌

「あづま歌」は千蔭の父、加藤枝直の家集である。

枝直の遠祖は、萬葉集の撰者だと云はれてゐる橘諸兄だといふ。諸兄十一代の孫に後撰集以來の勅撰集の作者能因法師がある。それまでは攝津國古曾部に住んでゐたが、能因の子月次藏人何某にいたつて、伊勢に移り、藤原を姓とし、加藤を氏とした。その末裔が枝直である。枝直の父

は尙之、浪人して伊勢松坂に閑居して春雪と號し、朝夕詠歌を樂しんで世を送つてゐた。枝直は春雪の四男である。

枝直は元祿五年（皇紀二三五二）十二月十一日伊勢の松坂に生まれた。光圀が湊川に嗚呼忠臣楠氏之墓といふ碑をたてた年であり、長流の歿した貞享三年（皇紀二三四六）より七年後、荷田春滿の生まれた寛文九年（皇紀二三二九）より二十四年後の事である。枝直初めの名は爲直、後に枝直とかいて、「えだなほ」と訓んだが、又「えなほ」と改め、要南甫ともかいた。本姓橘に復したが、なほ加藤を氏として、通稱又左衞門、南山と號し、家を常世庵また芳宜園ともいつたのは江戸に出てからの事であつた。父春雪は枝直が七八歲の頃から歌をよみ習はせたといふ。しかし枝直は單に風流に隱れて世を送る心はなく、父春雪の意を承けて武士として身を立てようとした。

享保元年（皇紀二三七六）將軍家繼薨じ、吉宗紀伊藩から入つてその跡を繼ぎ、有名な大岡越前守忠相は、伊勢の山田奉行であつたのが、享保二年に徵されて江戸町奉行となつた。枝直はこの忠相によつて身を立てようとして、翌享保三年江戸に出た。時に枝直二十七歲。枝直の母方の從弟中村三右衞門が大岡越前守配下の組與力であつたが、享保五年病歿して、其の孤兒中村又藏なほ幼少で公用を勤める事が出來ないので、枝直はその番代として組與力に召抱へられ、翌年吟味

方となつて、素願を遂げる事が出來た。かくて枝直が大岡配下の吟味役であつたのは、中村又藏が十五歳になつた享保十六年までの十二年間である。世に所謂大岡裁判の黑幕には、この枝直が居つたのである。

享保十六年には枝直が後見して居た中村又藏が十五歳になつたので、枝直は又藏に亡父の職跡を相續せさせ、己は辭職を請うて許され、更に大岡の指圖で、枝直は町奉行稻生下野守の組與力に抱へられ、寶曆七年(皇紀二四一七)まで引き續いて吟味役を勤め、寶曆九年からは吟味方四人の外として、格別重い吟味相勤むべき旨、依田豐前守から命ぜられたといふ。

枝直が公務上の功勞は、享保中御定書百箇條を編成したことである。これは吉宗將軍の善政の一として稱せられてゐる事であつて、世に物徂徠の立案とか、室鳩巣の起草などと云はれてゐるが、實は枝直一人の手に成つたものが、吉宗の意に叶つて定稿となつたのである。文學方面の仕事としては謠曲の改訂をやつた事である。これは明和二年に、觀世左近秦元章が、舊來の謠曲詞章の語格、天爾波、假名遣ひの誤謬を始め、故事詩歌の引き誤り等を訂正して、内外二百十番を開版したのであつて、世に之れを明和の改訂本といつてゐる。この改訂は田安宗武が企てて、之れを賀茂眞淵に命じたのであるが、眞淵はこれを枝直に囑したのであらう。枝直に眞淵の門弟で

もあり又その保護者でもあつた。眞淵の學才に服した枝直は、出府後間もない眞淵を己の近鄰に招いて住まはせ、眞淵の萬葉や古今の講席も、最初は枝直の家で開かれたのであつた。枝直にはまだ忘れられない學問上の功績がある。それは甘藷先生として有名な靑木昆陽は、枝直が大岡越前守へ推擧したのが、世に出る基となつたのである。昆陽は枝直の推薦によつて、享保十八年(皇紀二三九三)はじめて、薩摩芋試作御用掛を仰付けられて、飯田町坂上、白山御藥園内、下總國馬加村、上總國不堂寺村等を薩摩芋の植場と定められたのである。白山御藥園といふのは今の植物園である。寶暦十二年(皇紀二四二二)枝直は七十一歳になつたので、老頽の故を以て辭職を請ひ、翌年七月之れを許された。翌明和元年(皇紀二四二四)には、兩國回向院の住職によつて剃髮した。その時の長歌が「近葉菅根集」の雜五に出てゐる。これは「あづま歌」にはのせてないから引いてみよう。

寶暦十四年三月八日、回向院にて髮をそりて、家にかへりて

とこよ波　しき波よする　神風の　伊勢の國より　鳥がなく　とほの御門に　荒玉の　年の緒をへて　あからひく　晝はしみらに　ぬば玉の　夜はすがらに　賤たまき　賤しき身には　おふけなき　まけのまに〳〵　事終へて　うみのまなごも　仕ふべき　年になりぬれ　いつしか

に　身は老いはふれ　いたづきて　せんすべしらに　しかぐと　まをしあぐれば　司にもみたま賜ひて　かしこきや　きこえあげつゝ　去年の秋　まをしのまゝに　いとまたび　祿さへたびて　うつしみの　なりのことぐ　なしはてつ　恵みはあきぬ　たくづぬの　しらけし髪は　朝にけに　かきけづるだに　いぶせきを　そりてすてまく　思へれど　家人きかば　くずはしみ　いさめゆるさじ　よしゑやし　しられじゆめと　肝むかふ　心ひとつを　二國の中ゆく川の　橋わたり　そこなる寺に　いゆきつゝ　心たらひに　事とげて　家に歸れば　妻も子も　言だにとはで　春雨の　おつるなみだを　とゞめえず　いりくる人は　かきかぞふ二つの世六つの　ちまたには　迷はじものと　ひたむきに　姿かへしと　わらへらむかも

悔いもなく恨みもなしやうつせみのなりの事々なしはてぬれば

この歌によつて、その時爲すべき事はなし果てたといふ枝直の滿足してゐる心持がよくわかるであらう。寶暦十四年は六月二日に明和と改元されたのである。がしかしこれから二十餘年を生き延びて、天明五年(皇紀二四四五)八月十日に歿したのである。

枝直は幼少の時は父について歌を學んだが、江戸に出でた頃はまだ古學のひらけなかつたころで、廣澤長孝の門人の鴬氷中也といふ堂上風の歌人について學んだ。村田春道も始めはこの人に

歌を學んだのである。處が枝直はその頃の歌風を嫌つて萬葉風を喜んだ。これは「あづまうた」の千蔭の序に、「あるは二年三とせがほど、歌はいと少なくて、萬葉の歌をまねび作るを、ひたぶるに珍らかなる事におぼえて」とあるのでわかる。そのうちに彼は古今風を尊ぶにいたつたのである。彼の著「歌の姿古へ今を論らふ詞」の中で彼はいふ。

いかにとならば、今の大御代にもなぞらふべきは、宇多醍醐の御代なるべし。されば其の御代の手ぶり、事わざ、自らこの御代に通ひにたればにや、大御代の歌よむほどの人、知るも知らぬも、古今集の歌を上なきものにして、もてかしづかぬやはある。これ大御代の調にかなへる所ありて、然らしむるなりけり。されば歌作らむと思はば、ぬかづきて古今集を見るべきなり。

と、枝直が主張は、近代の歌の姿は保元平治以來亂世の調であるから、今太平の御代の範とするには不適當である、太平の調としては、太平の御代の古今を範とすべきであるといふのである。枝直が萬葉風を喜んだのは、眞淵に交はつた人であるから自然の事であらうなどと早合點してはならない。眞淵が江戸に出たのは元文三年の事である。然るに、この「歌の姿古へ今を論らふ詞」をかいたのでさへ、元文二年五月、枝直が四十六歳の時の事で、眞淵出府前の事であるから、萬葉風を喜んだのは、それより以前の事である。枝直の著に「答俊仍松宮氏書」がある。これによれば

枝直が歌の目標を萬葉風から古今風にと遷し始めた樣子が見えるが、これに、

すべて今の歌よむ人、古今集は勅選の始めにて、大切なる傳授ある事にして、それを除きて、學ぶ所は、保元平治以後の風體より末の一體に成りかたまりたるやうにて、やつがれ四十にもあまりける頃、やう／＼こゝに疑ひ出で來て、風雅の事は、その代に從ふものとこそ申し傳へて侍れ。保元平治より打ちつゞき開國以來の亂世なりし其の頃の風體を、今太平の御世にとりまなばむ事は、いと／＼忌はしき事に侍る理をうかゞひ、今の歌學者流の教へとは、大いにたがひ侍る事を、おろ／＼心に悟り候て、誠に人麿うしの神靈に助けられ侍るやうに、ありがたく覺え侍る也。

とある。これらによつて明らかであるやうに、枝直は始めは、當時一般の歌を學んでゐたが、四十二三歳の頃から、當時の歌學歌風に慊らぬやうになり、一時は萬葉風を學んだが、これも彼の理想にぴつたりとしない。遂に古今風に於て自己の道を確立したのである。これらの事はすべて眞淵に交はる以前のことであつて、眞淵とは全く無關係に、枝直は枝直の道を見出したのであつて、眞淵と交はりが始まつてからは、枝直は反つて古今を祖述してゐたのである。荷田在滿の新古今主義、賀茂眞淵の萬葉主義と竝んで、加藤枝直が、香川景樹に先んじて古今主義を唱道した事は、大いに注意しなければならぬと思ふ。

枝直の萬葉風時代は短い時代であつたらしい。「あづま歌」の千蔭の序に、

其のあづまうたと記されたる中にも、猶心にかなはざるやありけむ、多く消しもし、あるは二年三とせが程、歌はいと少なくて、萬葉の歌をまねび作るを、ひたぶるに珍らかなる事におぼえて、古き歌の調べとゝのほらぬをさへ、まねび見つるを、後に見ればうるさくて、皆捨てつ、などしるしおかれつるもあり。

とあるので見れば、萬葉調を好んだのは二三年の事であつて、古今調への過渡期の事であつたのにすぎない。眞淵と交らふやうになつてからは、反つて萬葉の粗野な調を捨てて、古今の雅馴な調を喜んだのである。千蔭、春海が縣門から出ながら流麗な江戸派となつたのは、枝直の影響によるものであらう。

「あづまうた」の成立に就いては千蔭の序で明らかであるから、何もいふ事はあるまい。さて彼の歌を見よう。

むさし野をふりさけ見れば秩父ねに春日かげろひ霞たなびく　巻一　春

上つふさの海より出でて行く月の泊りはふじの高嶺なりけり　巻三　秋

堅田船いざ漕ぎ出せいさなとりあふみの海の波の月みむ　同　同

あごの海の海士の釣船にはをよみいらこが崎へこぎ渡る見ゆ　巻六　雜

夕なぎに海士の釣船幸ありて眞間の入江にこぎ歸るみゆ　　同　同

これらは萬葉風の作であり、また優れた歌でもあるが、調に於ても、想に於ても幾分の柔味を帶びて居る事を見落してはならない。この柔味流麗といふ事が枝直の歌の特徴であると思ふ。かやうな萬葉風の歌にもその特徴は自ら滲み出たものであらう。が併し、もとよりかやうな萬葉風の歌は集中に餘り多くはない。

天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は殘れり　　卷六　雜

この歌は、内容に於ては萬葉に近いものである樣ではあるが、調に於ては流暢な古今風である。

となりにははつしまみえて七島は潮氣にくもる伊豆の海ばら　　卷六　雜

壯大であつて懷かしみをもつたすぐれた歌である。壯大な海原を歌つてはゐるが、狂瀾怒濤の凄絶雄渾な姿ではなくて、悠揚として親しみ易い海の面影である。調は萬葉調の樣でもあるが、非常に柔味を帶びてゐる。現代の人の歌の中にいれておいても一寸識別され難いやうな歌である。

明けわたる空の霞もほの〴〵と紫おぶるむさし野の原　　卷一　春

ふりはへて行きかふ袖の追風に都大路はかすみかぬらむ　　同　同

これらの歌は純然たる古今風で、その流暢な調には音樂的な快い響がある。が枝直の歌の古今風

といふのはその調に於てであつて、その内容に於ては、古今によく見られる露骨な理智的なところは少ない。がこの歌はその内容が比較的單純であつて古今集の敍景歌に近い趣をもつてゐる。

けさよりは淺瀨こす浪おとかへて氷ながるゝたま河の水　卷一　春
朝霞立ち出でみればうめ咲きてあり明の月に春風ぞ吹く　同　同
春さればすみれ咲く野の朝がすみ空に雲雀の聲ばかりして　同　同
村雨をすぐして名のゐる一聲に松の露ちる山ほとゝぎす　卷二　夏
松かげの板ゐの清水くみあげて結ぶ手にみる月ぞすゞしき　同　同
うづら鳴く野べの秋はぎ咲きにけり道行きぶりの袖匂ふまで　卷三　秋
うつしうゑし一むら萩の咲きしより花の影くむ庭の眞清水　同　同
霜の上に遲れて一葉ちる音も聞くべかりける庭の朝夕　卷四　冬
わけゆけばむこの山風さえ〲て袖に玉ちるあられ松原　同　同
風寒み前の小河の水かれて心細くもちどり鳴くころ　同　同
かぢ枕とま洩る雨の音づれもまぎれぬほどの波のしづけさ　卷六　雜

これらの歌は、いづれも瀟洒たる敍景の歌である。この歌の美を花に譬へてみると、牡丹の濃艶

でもなく、櫻のやうな華美でもなく、梅のやうな堅い感もない。瑠璃色に晴れた秋空の下にきりきりしやんと咲く桔梗の花のやうな清楚な美しさである。而して調は流麗な古今調であるが、盛られてゐる内容は複雑であり纖細であつて、どちらかといへば、新古今風の趣をもつてゐる。これが枝直の歌のもつ特徴である。枝直の歌のもつ美は、自然のまゝ、生地のまゝの美ではなくつて、洗練された美である。豪快な美でなくつて、しみ〴〵とした美である。これは江戸に生活した枝直としては、極めて當然な嗜好であると思はれる。卽ち枝直の主張した古今は、その調であつて、その歌の境地ではなかつたのである。これらの歌によつて、枝直の敍景歌人としての地位は、十分高く評價されていいと思ふ。「あづまうた」の序に、

學びの力長けたるは却りて歌の心に遲れ、歌詠む方に心引きたるは、なか〳〵に學びのわざにおろそかにて、これを兼ね得たるなむ稀なりける。さるを此の二つをかねて、世にも優れ人もゆるしたるは、縣居の大人、ありま呂の宿禰、さては橘の翁なむ有りける。此の三人の主達、其の學びの心は等しきものから、歌の手振りは思ひ得るかた異にて、心々にぞありけらし。彼の大人は尾上の松の雲を凌ぎて目も及びがたき古の高き姿をたふとみ、宿禰は秋の野に綾織る花の錦の細やかなる中頃の巧みを喜び、翁は絲竹の殊更に設けたる聲にはあらで、百鳥の音の自らなる調べを好みて、たゞ眞心より詠みいでたれば、古にもよらず、後にもつかず、我と一

つの姿をなむなせりける。

と、村田春海が書いてゐるのは過賞ではない。

春風の到らぬ隈やながるらむけさは蘆間もこほらざりけり　巻一　春

惜しかりし秋にわかれし袂よりけふの時雨は降りそめにけむ　巻四　冬

水鳥の陸になく音の聞ゆるはあさる蘆間や今朝こほるらむ　同　同

これらの歌は、純粋な客觀的敍景歌ではなくして、主觀がはひつてゐるところは、内容に於ても古今集の歌と同樣の趣をもつてゐるが、古今集の頃の歌には、やゝともすれば餘りに理窟ばつたやうな嫌ひが多かつたが、枝直の歌にはそれ程に甚しくないやうである。

敍景歌人としての枝直は上述のやうに非常に優れてゐる。抒情の歌はどうであらう。

わけそむる薄しの原末つひに忍びや果てむほにやいづべき　巻五　戀

ことなくば梢の蟬にあえもせで澤の螢の身をこがすらむ　同　同

あしたづの音のみぞなかる和歌の浦や汀に潮の滿つとばかりに　同　同

あまたたびしぐるゝ磯のそなれ松なれても染まぬ色のつれなさ　同　同

さりともと待ちもよわらぬ袖の上に二十日あまりの月ぞ宿れる　同　同

かやうに、技巧的な歌であつて、心中の熱情を直寫したものでないことは從來の戀歌と同樣である。が併しながら、右に載せたどの歌にも、「わけそむる薄しの原」とか、「袖の上に二十日餘りの月ぞ宿れる」とかいふやうに、必ず敍景の句を含んでゐる。これが枝直の戀歌の特徵であつて、彼は戀歌に於ても敍景的戀歌を詠じてゐるのである。卽ち枝直は、あくまでも敍景歌人として終始した人であるといふ事が出來ようと思ふ。

賀茂翁家集

賀茂翁家集は賀茂眞淵の家集である。眞淵は元祿十年（皇紀二三五七）遠江國敷智郡濱松莊岡部鄕に生まれた。此の年加藤枝直は六歲、荷田春滿は二十九歲、德川光圀は七十歲、契沖は五十八歲であつた。眞淵の父は同所の賀茂の新宮の神官岡部與三郎定信、眞淵五世の祖岡部三郎左衞門政定は三方ヶ原の戰に戰功があつて、家康から勸賞を賜はつたといふ。眞淵通稱莊助、參四、衞士と改め、實名は政藤後に眞淵と改めた。幼い時に姉壻政盛の養子となつてゐたが後に、濱松驛の本陣梅谷甚三郎の養子となつて、市左衞門眞滋が生まれた。眞淵が從兄政長の女を妻としたのはこれより以前の事であらう、その政長の女は享保九年（皇紀二三八四）九月四日に死んだ。この

時眞淵は二十八歳であつた。平田篤胤の玉襷には梅谷家を退いて後に政長の女を妻としたやうに記されてゐるのは誤りであらう。それは元文五年(皇紀二四〇〇)の岡部日記に、

　九月四日にも成りぬ。此の日は先妻の失せにし日なれば、早く住みける家にて、あと問ひなどして、墓にも詣でたるに、いつしか十七年にこそ成りにたりけれ。

とあつて、その先妻といふのは政長の女の事であるからである。眞淵が嘗て眞言の僧にならうとして果さなかつたといふが、それは或は壯年の眞淵にはこの政長の女を失つた悲しみに堪へられなかつたからであつたかもしれない。梅谷家の養子となつたのはこれより後の事であらう。眞淵も若い時は濱松の儒者渡邊蒙庵に漢學を學び、詩文をよくした。蒙庵は太宰春臺の門人で老莊學者であつた。眞淵が老莊の思想には同感を持つてゐたのは、或はこの蒙庵の影響であつたかもしれない。眞淵の國學の友は、濱松、諏訪社の大祝(おほはふり)杉浦國顯、五社の神官森暉昌などで、この二人はともに荷田春滿の弟子であり、ことに國顯の妻まさきは春滿の姪であつたので、春滿が江戸への往復には常に濱松に宿り、眞淵はこの人々の執りもちで、春滿に面識を得たりした。これらの事は、古學好きの眞淵をして、いかに學問に對する情熱と、春滿に對する思慕の心とを沸き立たせたであらう。旅宿の主人として世を終るべかりし眞淵は、享保十八年(皇紀二三九三)遂に意を

決して妻子を濱松にとゞめて、京に上つて春滿の敎へをうけるにいたつた。時に眞淵三十七歲であつた。しかしながら、其の後僅かに四年で春滿は元文元年(皇紀二三九六)に長逝したから、直接春滿から學び得たところはいかほどであらう。眞淵が濱松時代に獨學で得たものを、直接春滿から磨きをかけられた程度ではあるまいか。

師を失つた眞淵は一度故鄕に歸つたが、元文三年(皇紀二三九八)四十二歲の時に江戶に出でて村田春道の家に寓居した。このときから梅谷の氏をやめてもとの岡部を名乘つたが、梅谷を離緣したのではなかつた。最初に名簿を納めて弟子となつたのが小野古道であつた。間もなく加藤枝直と知つて、その近鄕に移つた。この春道と枝直とが、眞淵が江戶に出てまだ志を得ないうちの後援者であつたのである。春道の子、春鄕、春海、枝直の子千蔭も眞淵の門に入つた。延享三年(皇紀二四〇六)五十歲の時、春滿の養子在滿が仕を辭した後をうけて、在滿の推擧によつて田安宗武に仕へてから、名聲が大いに盛んになつて、弟子も非常に殖えてきた。文意考、冠辭考、萬葉考などの名著を著はしてゐる。寶曆十一年(皇紀二四二一)以來は致仕して、專ら著述に專念するやうになつた。

明和元年(皇紀二四二四)六十八歲のときに、濱町本矢倉に上代風の家を建てて移りすんだ。こ

の家を縣居と號した。この年の正月には、本居宣長が松坂から遙々名簿を送つて門弟の列に入つた。此の年歌意考が出來た。翌明和二年には國意考、明和五年には祝詞考、同六年（皇紀二四二九）には語意考が出來たが、此の年十月遂に歿した、年七十三歳であつた。縣門に學んだもの前後數百人、高才輩出して、本居宣長、荒木田久老、加藤千蔭、村田春海、加藤美樹、楫取魚彦、村田春郷、栗田土滿、小野古道、橘常樹、日下部高豐、同自寬を世に縣門十二大家といひ、油谷倭文子、鵜殿餘野子、進藤筑波子を縣門の三才女といつてゐる。かの片歌を唱へた建部綾足、科學者として、發明家として、漢學者として、淨瑠璃作者として、戲作者として、往く所として可ならざるなしの概があつたところの一代の奇才平賀源内も眞淵に學んだ一人である。契沖に始まつた古學は眞淵に至つて始めてこの盛觀を呈するにいたつたのである。契沖以來の萬葉研究は、未だ作歌の上には大した變化を及ぼさなかつたのが、眞淵にいたつて萬葉を體得し、盛んに萬葉風の、所謂大夫振の歌を作るにいたり、これを以て多くの門弟を導いた。眞淵は萬葉によつて古語古道を明らかにし、儒學を排し古道を以て天下に呼號したのである。

眞淵の歌もはじめは春滿の風を學んで、新古今と古今とに近い歌風であつて、江戸へ出た頃は定家、西行、俊成を喜んでゐた。其の後にいたつて萬葉風をよみ出したのである。上代は、雄偉

な大和國に都があつたので、その環境によつて、人心も歌も雄健な丈夫ぶりであつたのが、平安遷都以來、優美な山城國の風光に影響され、巧緻な唐風に累はされて、手弱ぶりの歌に墮し皇室も亦衰へ給うた。よろしく丈夫ぶりの歌をよむべしといふのが眞淵の主張である。かくて萬葉を尊崇し、實朝を激賞し、六百年以來、歌に於て師とすべき者もなく、我が歌の優劣を解し得べき者はないと豪語してゐる。晩年にいたつては萬葉に滿足しないで、更に遡つて紀記の歌を理想としたが、これは極めて短い間に過ぎなかつた。

彼の家集は、本大系に載せた、寛政三年(皇紀二四五一)、春海が輯めた「賀茂翁家集」の他に、天明元年(皇紀二四四一)、魚彥の選んだ「縣居歌文」、美樹が選び、秋成が補つて明和九年(皇紀二四三二)に出版した「縣居の歌集」の二種がある。さて彼の歌をみよう。

武藏野を霞みそめたる今朝みれば昨日ぞ去年の限りなりける　　卷一　春

きのふけふ時來にけりと時鳥とばたのおもに早苗とるなり　　同　夏

今朝はしもたけの林ぞそよぐなる世は秋風の立ちやしぬらむ　　同　秋

かやうな歌は想も調も餘程古今に近い趣をもつてゐる。眞淵といへば、たゞ萬葉歌人とばかり思つてゐる人々には、彼の集にかうした歌があるのが不思議に思はれるかもしれない。

みちのくのちかの鹽がま春來れば煙よりこそかすみそめけれ　卷一　春
つくば山しづくのつらゝ今日とけて枯生のすゝき春風ぞふく　同　同
とふ人の笛もきこえて垣の内に梅ちる風のおもしろきかな　同　同
うら〳〵とのどけき春の心よりにほひいでたる山ざくら花　同　同
故鄕の野べ見にくればむかしわが妹とすみれの花咲きにけり　同　同

これらの歌は、その趣が新古今の歌風に近い。殊に最後の「故鄕の野べ見にくれば」や、第二首の「つくば山」の歌の如きは、これを新古今の中に入れても一寸辨別し難いであらうと思ふ。眞淵の歌にはかうした一面もあつた事を忘れてはならぬ。

さくら花花見がてらに弓いればとものひゞきに花ぞちりける　卷一　春
おほひえやをひえの雲のめぐりきて夕立すなり粟津野の原　同　夏

この歌の如き、勇壯な趣を詠じたものではあるが、その調は中世風である。

かげろふのもゆる春日の山櫻あるかなきかの風にかをれり　卷一　春
雲雀あがる春の朝けに見わたせばをちの國原霞たなびく　同　同
大伴のみつの浦なみ吹き寄せて松ばら越ゆるあきのゆふ風　同　秋

遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむうらをむかし見しかな　巻一　秋

冬がれに里のわらやのあらはれてむら鳥すだく梢さびしも　同　冬

かまくらのよるの山おろし寒ければみなせの川に千鳥なくなり　同　同

しなのなるすがのあら野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな　巻二　雜

これらは所謂萬葉風の歌であり、眞淵の所謂丈夫ぶりの歌の優なるものであらう。がしかし、仔細にその一つ〳〵の歌を吟詠して味つてみると、意外にもその中に新古今風の情趣を可成りに帶びて居ることに氣がつくであらう。

おもふ人こてふに似たる夕かな初雪なびくしののをすゝき　巻一　冬

先だちし人のたもとか花すゝき今はそれだに見えずなりにき　同　哀傷

照る月にころもうつなる里遠み天がけるらむ聲かとぞ聞く　同　同

これらの歌は萬葉調のうちに、一抹の古今に近いものがあるやうに思はれる。かやうに眞淵の萬葉風の歌は、純粹な萬葉風ではなくて、そのうちに近代風のある物が加味せられてゐる歌が多い。けれどもこれはそれらの歌の價値をすこしも低くするものでない事は勿論であらう。

三冬つき春立ちけらし久方の高見の國に霞たなびく　卷一　春

みよしのをわが見に來れば落瀧つ瀧のみやこに花ちりみだる　同　同

天の原八重棚雲をふきわくるいぶきもがもな月のかげ見む　卷一　秋

にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつゝをれば月かたぶきぬ　同　同

はしたてのくらはし山に雲きらひ高市國原雪ふりにけり　卷一　冬

これらは純萬葉風の歌の代表的の作であらう。

百くまのあらきはこね路越え來ればこよろぎの磯に波のよる見ゆ　卷二　雜

これは眞淵の激賞した實朝の「箱根路を我が越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ」の歌とよく似てゐる。恐らくは實朝の歌から得た著想であらうと思ふが、これは實朝の素朴で雄渾なのに比して、眞淵の方はやゝうるさく思はれるやうに思ふ。

眞淵の萬葉主義の本領を遺憾なく發揮したものは、その長歌にある。古言古句を縱横に驅使して、古調を詠じゆく技倆は、まことに驚くべきものがあつて、萬葉以來はじめて眞淵によつて見得るのみである。今こゝには繁を嫌うて引用することを避けるが、集中の長歌そのいづれを見るも、優に萬葉の壘を摩すの概がある。

うまらに喫らふる哉や　一杯二杯　ゑらくに　掌底うちあぐるがねや　三杯四杯　言直し
心直しもよ　五杯六杯　天足らし國足らすもよ　七杯八杯　　巻二　長歌

この「うま酒の歌」は、萬葉以前を希求した作である。萬葉調に新古今風の想を盛つた事と、上代の思想文明を體得して、これを藝術的に再現し得た眞淵の功績は偉大なものであると思ふ。

天降言

眞淵門の歌人の歌風は必ずしも同一ではなかつた。これを萬葉派と江戸派とに二大別することが出來る。萬葉派も仔細に見れば、純萬葉風と、萬葉風に古今新古今風を加味したものとに別れる。純萬葉派の歌人に田安宗武がある。その家集が「天降言」である。

宗武は八代將軍德川吉宗の子で、松平定信の父である。正德五年（皇紀二三七五）十二月二十七日、江戸赤坂藩邸に生まれた。享保十六年（皇紀二三九一）正月、邸を田安門内にたまはつて住つた。宗武は流石に吉宗の子であつて名君であつた。我が國の古典を好み、有職聲律の事に精しかつた。はじめ荷田在滿を召して聽いたが、在滿は元文五年（皇紀二四〇〇）大嘗會便蒙を刊行して幕府から譴責せられたり、寛保二年（皇紀二四〇二）宗武の問に答へた「國家八論」を著はしたが、

これによつて在滿は和歌は詞花言葉の翫びであつて新古今風を理想とすべしと說いた。宗武はこれを喜ばずして、同年「國歌八論餘言」を著はしたりした。これらの事が原因となつて在滿は致仕して、眞淵を宗武に薦めた。そこで延享三年（皇紀二四〇六）から眞淵が田安家に仕へることになつた。このとき宗武は三十二、眞淵は五十歲であつた。以來宗武は萬葉を好んで、師匠の眞淵以上に純萬葉風の歌をよんだ。明和八年（皇紀二四三一）六月四日五十七歲で死し、悠然公と諡された。宗武は音樂については謠曲の明和の改訂本を作らせたり、「樂曲考」などの著もあるし、「服飾管見」などの有職に關する著もある。

「天降言」は、宗武の死後三十七年、即ち文化四年に藤原直臣の集めたものである。この集の歌はその時代によつてわけてある。即ち、享保から寬延まで、享保から寶曆まで、寶曆年間、寶曆から明和までとにわれてゐるので、時代によつての歌風の變遷をしるにはまことに便利である。

享保から寬延までの作には、

亂れ咲くちぐさの花の色まして歸るさ惜しき野路の夕ばえ

住む人の稀なる野邊の物うきにあはれを添ふる夜はの村雨

といふやうに、優麗な新古今風の歌が多いが、なかには、

おりゐつる蘆邊を渡る朝風に鷲はみの毛の亂れてぞたつ

といふやうな調子の強い歌もある。

つぎの享保から寶暦までの作には、

秋されば水底きよみさゝら波更にぞたてる風吹くごとに

星合の空靜けしな久方のあまつ河風すゞしくあるらし

洲崎邊に漕ぎ出でてみれば安房の山の雲居なしつゝ遙けく見ゆも

といふやうな萬葉調が多いが、なかには、

我が宿の杜の木の間に百千鳥きなくはるべは心のどけき

心よげに草木繁れる夏山に煩はしくもほとゝぎす鳴く

雨ふれば青みいやます常磐木の木の間をよそふ櫻葉の色

といふやうな中世風の歌もある、がしかし第二首の「煩はしくもほとゝぎす鳴く」の如きは、時鳥に對する從來の思想を破つてゐるものである。

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれ猶し學ぶ

天地のめぐみに生るゝ人なれば天の命のまに〳〵をへや

の如きは、純萬葉調の歌ではあるが、その内容は眞淵の排斥した儒學思想であつて、しかも教訓的でもある。

寶暦年間の作は、堀川初度の百首の題で二首づゝ詠まれてゐる。全部純萬葉調の歌である。

　春雨は音靜けしも妹が家にい行き語らひ此の日くらさむ

　風冱ゆる池の汀の枯蘆の亂れふすなる冬はさびしも

　ふる雪に御笠もめさず皇子達み狩せすなりみ鷹勉めよ

　常にみて安らにありし吾妹子を旅をしすれば戀ひ侘ぶるかも

　楯竝めてとよみあひにし武士の小手指原は今はさびしも

といふやうな調子である。

寶暦明和年間の作も無論萬葉調ではあるが、

　いつしかに池の冰の解け初めて心長閑けき春は來にけり

といふやうな中世風の歌がないでもない。又、

　たまとりの八尋のたり尾開きたてめぐる姿は見もあかずけり

これは孔雀を詠んだのである。

さゞら枝をしばうつうへにうつ雀汝が打つ尾羽を吾みはやさむ

これは太平雀と題してゐる。孔雀や雀は、今まであまり歌の題材にはされなかつたやうである。これらは「國家八論餘言」に「世くだれる後のものの名にても、うるはしく聞ゆるは、いにしへの詞にとりあひぬべければ、をさ〳〵よむべき事なり。」と說いた立場を、實際に行つたまでのことである。

かく見てくると宗武の歌ははじめは中世風が多く、後には萬葉風が多い。在滿と眞淵との影響が劃然と現はれてゐるやうであつて面白い。しかもその萬葉風の歌は、師眞淵よりも徹底的な純萬葉風であること、漢學思想、漢學趣味の見えてゐることが、その特徵である。

靜屋歌集

「靜屋歌集」は加藤美樹の歌を、寛政元年(皇紀二四四九)その十三回忌に、門人上田秋成が撰んだものである。

加藤美樹はまた河津ともいふ、美樹は宇萬伎とも書く、靜の舍と號す。享保六年(皇紀二三八一)に生まれた。幕府大番の騎士で、江戸淺草三筋町に住んだ。延享三年(皇紀二四〇六)に眞淵

の門に入つた。美樹二十六歳、眞淵が田安家に仕へた年である。公務で難波に勤番した事があつて、その折に教をうけた者が多い。上田秋成もその一人である。安永六年（皇紀二四三七）六月十日歿す、年五十七。千蔭、春海、魚彦と竝んで縣門の四天王と稱せられた。

梅の花ものがたりしは夢ならむ香ばかりさそふはるの手枕

夏きてもまだ袖寒きさごろものをつくば山にのこるしら雪

もののふの草むす屍としふりて秋風さむしきちかうの原

これらの歌は新古今風に近い趣をもつてゐる。

春がすみたたるを見ればくもりし神代の昔思ほゆるかな

さざなみや比良の大わた風吹けばみなわにうかぶ山櫻かも

いぶき山いぶく朝風吹きたえてあふみは霧の海となりぬる

これらの歌は萬葉と古今との中間を覗つたやうな歌風であつて、彼の歌の特徴はここにあるのであらう。しかし中には、

玉川のかは戸ゆきくれ島つどり鵜飼がともといほりす我は

あづまぢの富士のしば山しばしばも馴れて物思ふ別れするかも

といふやうな萬葉風の歌も見える。それ故にか世には美樹を萬葉派にいれてゐるが、萬葉派といふ特色は餘程少ないやうに思はれる。

杉の下枝

荷田在滿の妹蒼生子の歌を、門人菱田縫子が輯めて、橘千蔭、三島自寛の序をつけて、寛政七年出版したものである。蒼生子は享保七年(皇紀二三八二)京都稲荷に生まれた。兄在滿と共に春滿に養はれて、江戸に往き、某氏に嫁したが、早く夫に別れて在滿の家に歸り、歌文を學んで巧みであつた。紀州藩主の女公子に仕へたが、四十九で辭し、淺草に住み、諸侯の夫人、女公子等多くその門に學んだ。天明六年(皇紀二四四六)二月二日、六十五歳で歿した。

蒼生子、初めの名をふりといひ楓里とも書いた。その歌は古今風に幾分の新古今風を加味した極めて穩かな歌風である。

あけぬとて名のる鳥の聲の中に山際かすみ春はきにけり
春なれや白浪わけてかづきする海人も霞のころもきてけり
浦遠く汐路霞めるあけぼのは波も綠に立つと見ゆめり

入相の鐘は春しもうかりけりはかなさ見せて花の散れれば
うかりしも忘れて人の戀しきは身の秋近くなりやしぬらむ
秋なれや土さくるまで照る日にもさすがに荻の聲はありけり
花づまもうらがれぬとや山ふかく遠ざかりゆくさを鹿のこゑ
これらによつて、彼女の歌風の一斑は覗ひ知る事が出來るであらう。

楫取魚彦集

楫取魚彦(かとりなひこ)は下總國香取郡佐原の人、享保八年(皇紀二三八三)三月二日に生まれた。美樹より三歳の年少である。通稱茂左衛門、青藍と號した。その先祖は豐後國の尾形三郎維義から出たといふ。その四世の孫景能、下總香取郡大須賀の莊の地頭となつて、伊能村に住んだので、伊能を氏とし、その子孫守胤武士を捨てて佐原に移つた。守胤七世の孫が魚彦である。故に魚彦も伊能を氏としてゐたが、江戸に出て後に生地香取郡に因つて楫取を氏としたといふ。江戸に出たのは明和年間とも、又寶暦の頃ともいふが、眞淵の門に入り、その近鄰濱町山伏井戸にすみ、其の家を茅生庵といつた。眞淵の歿後魚彦に學ぶもの二百人に餘り、諸侯のうちにも弟子となる者多く、

又上野輪王寺法親王にもしばく召され、或時は輪王寺宮御みづから豆腐田樂を調じて魚彦にすゝめ給うたといふ。天明二年(皇紀二四四二)三月二十三日六十歳で歿した。

魚彦は綾足に學んで繪をよくした。「楫取魚彦集」は安永五年六年の二年間の詠草を、清水濱臣が縣門遺稿中に收錄したものである。

さて彼の歌をみよう。

皇神の天降りましける日向なる高千穗の嶽やまづ霞むらむ

古代憧憬の思想を、やゝ古今に近い調にもつた歌である。かやうな歌はやがて近世の和歌の一つの特徴ででもある。

天雲のむかふすをちの渡つみの霞めるかたゆ舟ぞ見えくる

純萬葉風の歌ではあるが、敍景は稍複雜になつてゐて、そこに近世味を帶びてゐる。

鳰鳥のかつしか川に朝菜あらふ子あさ菜にもなりにてしがも朝菜あらふ子

古調を帶びた旋頭歌である。

伊勢の國に君がいゆけば上毛野いかほの沼のいかまく思ほゆ

秋の野の尾花くず花はぎの花しらえぬ花もいま盛りなり

丈夫やしたには人を戀ふれどもますらをさびてあらはさずけり

內容、技巧、調子ともによく萬葉の骨髓を得た作である。「丈夫や」の歌の如きは、男性的戀歌の絕唱であらう。

東屋のまやの軒端に聲するは手がひの虎の妻やこふらし

「手がひの虎」は猫をいつたのである。猫の戀を詠じた歌であるが、俳句には、猫の戀といふ季題があるが、和歌では珍らしい題材である。かうした題材を、古語を自由に驅使して、古調を帶びた歌に詠じ出す彼の技倆は驚くべきものがある。

天の原ふきすさみける秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

實に面白い歌である。これは單なる萬葉の摸倣ではない。自ら云はんと欲する事をいつてゐて、それが自然に萬葉風になつてゐるのである。

一九二八　千萬四四八　十四三九二　八萬十九二二四　四九九二八七四

これは數字ばかりでよんだ歌である。普通の文字にすれば、

ひと國は千萬よしや豐みくにやまと國にししく國はなし

である。

松てらす月をさやけみ秩父あがた山の獵夫(さつを)が圓居せむかは

これは「まつちやま」の五文字を句の上に、「すみだがは」の文字を句の下においてよんだ歌である。この二首の歌の技巧に彼の頭腦の明敏さが現はれてゐる。

以上數首の例によつても、彼が古歌の精神情趣を體得してゐた事、彼の歌人としての天分が豐かで、古語古句を自由に驅使して、單なる摸倣ではなく、自然自己を十分に歌ひ得た手腕を知る事が出來ようと思ふ。蓋し彼は縣門の純萬葉派歌人の雄であると思ふ。その濱町の住居が火災に遇つたがために、彼の作の傳はるものが多くないのは遺憾に堪へない事である。

佐保川

世にいふところの縣門三才女の一人、鵜殿餘野(よの)子の家集である。「佐保川」といふ題名は、その卷頭の歌、

ふるさとのさほの川水ながれての世にもかくこそ月はすみけれ

からとつたのである。よの子は享保十四年(皇紀二三八九)に生まれた。紀伊侯に仕へて瀨川と呼ばれた。それに因んできよい子の名がある。後に涼月院と稱した。よの子の兄は鵜殿孟一、服部

南郭の門人であつたので、よの子は兄に學んで漢學にも通じ、詩をよくした。眞淵が或時、さる方から、女房の手本とすべき十二月の消息文をかけと命ぜられた時に、よの子にかかせたれば、極めて立派に書いたので、眞淵はそのまゝ奉つたといふ。この消息文は千蔭が書いて板にしたものがある。寛保八年に紀伊へいつた時の旅日記を「岐蘇路記」といふ、家集は「佐保川」の他に春海が跋を書いてゐる「涼月遺草」といふのがある。

物の音もながるゝ水に聲すみて夏のほか行く船のうちかな　上卷

朝な〳〵流るとすれど黑髮のおもひ亂るゝすぢぞ多かる　同

夕月夜露をも露とたれか見む風に亂るゝ野邊の絲萩　下卷

春雨は降れどふらねど古を忍ぶ袂はかわく間ぞなき　同

その歌風は右にあげたやうなものが多い。これらの歌は概していへば、古今、後撰、拾遺の風に近い歌風といへるであらう。

あはれ君この入相をとぢめとはいつの夕に契りおきけむ　上卷

これは中納言宗時をいたんだ長歌に添へられた反歌であるが、その調子は全然中世風である。

時雨ふる山邊を見ればもみぢばの過ぎにし君がゆくへ忍ばゆ　上卷

あま雲の中にや君はまじりにし時雨るゝ空をみればかなしも　上卷

これは眞淵の死を悼んだ長歌の反歌であるが、これは萬葉風の作である。

足曳の山邊に立てる白樫のしらず知られぬ戀もするかな　下卷

白眞弓まゆみつきゆみ末つひに我にしよらば年は經ぬとも　同

これらの歌も萬葉風である。即ち「佐保川」には中世風の歌と萬葉風の作とがあるが、その萬葉風の作は下卷に多くつて、上卷には殆んどないといつてもいいほどである。

散のこり

縣門三才女の一人油谷倭文子(ゆやしづこ)はもといく子といひ、年僅かに二十歳で死んだ歌人である。享保十八年(皇紀二三九三)に京橋弓町油谷氏の女として生まれた。この年は眞淵が京に上つて春滿の弟子となつた年である。倭文子の家は富裕であつたので、倭文子が歌文を好んで、これを學ぶことを願つたのを、父も許して眞淵に學ばしめた。眞淵も其の才を愛でて、我が子の如くにいつくしみ導いたが、寶曆二年（皇紀二四一二）七月十八日に長逝したのである。この時の眞淵の悲嘆は、「父のみの父にもあらず」の長歌の名作となつて、「賀茂翁家集」に光彩を放つてゐる。

倭文子の家集を「文布（あやぬの）」といふ。「伊香保の道ゆきぶり」、「ゆきかひ」、「散のこり」、「草の露」から成つてゐる。「伊香保の道ゆきぶり」は、彼女が十八歳の時母と共に伊香保に遊んだ時の紀行である。「ゆきかひ」は消息、「散のこり」が歌集、「草の露」が眞淵をはじめ縣門の人々の追悼の歌文である。そのなかに宇萬伎一人が名を列ねてない。それは倭文子が未だ壻をとらなかつた頃、宇萬伎とは相思の仲であつたので、宇萬伎は、

ひとりのみ思ひつゞけて歎くかな人にいふべきむかしならねば

とよんだが、名を現はす事をはゞかつて、讀人知らずとして出したのだといふ事が「泊洦筆話」に記されてゐる。

春風に吹き初めにけり筑波嶺のしづくの田居や冰とくらむ
いづこよりたちかへりこし春ならむ岩まの波はまだとけなくに
秋の野はあはれなりけり夕風にをみだれてちれる白露
寂しとはこれを云ふらむ木の葉ふり月影すめるよはの山風
潮干潟袖つく波を渡りつゝ月をいざなふ秋の旅人

かやうに古今風に新古今を加味したやうな歌風である。

筑波子家集

土岐筑波子も縣門三才女の一人である。進藤正幹の養女であつて、土岐賴房の妻となつた。もと茂子といつたが、眞淵が「筑波山端山茂山」の古歌によつて、筑波子とつけたといはれる。濱臣は筑波子の歌を、「歌はよの子よりもたちまさるばかりなりき。」と評してゐる。

あら玉の年のこなたに春くれば雪もちりつゝ梅もさきけり　春

限りなく來れども同じ春なればあかぬ心もかはらざりけり　同

この「限りなく」の歌は、眞淵が天暦の頃の女房の口つきだと評したといふ。

何となく心ぞ春になりにける霞みもあへぬ空を見つゝも　春

春たちてにほへる花の顏見れば我さへ共にほゝゑまれけり　同

みわたせば涼しかりけり浦風にゆくへをまかす海士の釣舟　夏

吾が背子がとき洗ひ衣も縫はなくに荻の葉そよぎ秋風の吹く　秋

婦人でなくては氣のつかぬ捕へ所である。

よと共にみつゝくらせど樣々に飽かぬは空の景色なりけり　雜

風をいたみすぎに過ぎ行く浮雲のかさなる果てやいづこなるらむ　雜

いはけなくいかなるさまにたどりてか死出の山路を獨りこゆらむ　同

この歌は子を失つた時の作である。

歎くとも戀ふとも知らでいかならむ方にのどけく君は住むらむ　雜

夫に別れた時の歌である。かやうに彼女の歌はまことにさらりとして嫌味がないところが、眞淵の弟子らしくつていいと思ふ。

松　山　集

松山集は盲目の國學者塙保己一の家集である。保己一は延享三年(皇紀二四〇六)、武藏國兒玉郡保木野村に生まれた。父は萩野宇兵衞、保己一幼名辰之助、後千彌又保木野一といふ。後に師雨宮須賀一の本姓を冒して塙保己一と改めた。水母子といふ號がある。五歳の頃から肝を病み、七歳の春遂に盲目となつた。寶暦十年(皇紀二四二〇)十五歳の時に江戸に出て、四谷の雨宮撿校須賀一の門人となり、三絃、鍼法を學んだがどちらもものにならず、讀書を好んで、荻野宗固に國學を、川島貴林(たかしげ)に漢籍を、山岡俊明に律令を學んだ。寶暦十三年一座の衆分となつた。明和六

年（皇紀二四二九）の春、宗固のすゝめによつて眞淵の門に入つた。時に年二十四歳。惜しいかな眞淵はこの年十月歿してしまつた。安永四年（皇紀二四三五）勾當に進んだ、このとき保己一と名を改めた。安永八年始めて羣書類從の編纂に志した。年三十四歳。天明三年（皇紀二四四三）撿校になり、同五年水戸公に見えて、盛衰記の校合に預り五人扶持を給せられた。ついで大日本史の校正を囑せられて十人扶持を給せらる。寛政五年（皇紀二四五三）、四十八歳の時幕府に請うて和學講談所を設立した。同六年盲人一座の取締となり、間もなく辭し、享和三年（皇紀二四六三）一座の總錄となり、文化二年（皇紀二四六五）之れを辭して、十老の列に入つた。文化十二年四月、特に將軍家齊に謁した。文政元年（皇紀二四七八）二老に進み、此の年羣書類從の刻がなつた。文政四年（皇紀二四八一）正月總撿校となり、八月辭す。此の年病む、時に續羣書類從成つて、將に之れを上梓しようとしたが果さないで、九月十二日遂に歿した、年七十六歳。翌文政五年七月九日喪を發した。

峯の雪岸の冰にとぢられし朽葉流るゝ春の山河　　春

春風に岩波高き音ばかりかすみ殘せる峯の瀧つせ　　同

たつた川春は柳のうつろひてから藍くゝる水のしら浪　　同

打ちなびく末野の茅原ふむ駒の跡も綠に春風ぞ吹く　春
立ちならぶ花の梢はあらはれて柳にかすむ春の夜の月　同
雷ひゞく峯の浮雲晴れのきて名殘涼しき月の下風　夏
鳴神の音羽の峯は虹見えて關のこなたに過ぐるゆふ立　同
秋來ぬと浦曲の波も聲そへて松風高き志賀の唐崎　秋
初瀨山峯の嵐に雪晴れて檜原がおくの月ぞ澄みゆく　同
淸見潟波路遙かに霧晴れて早くも明くる關の戸の月　同
波にはれ雪にみがきて大井河嵐の山の月ぞ寒けき　冬
鴫のゐるみぎはのあしは霜枯れて己が羽音ぞ獨り寒けき　同

彼の歌は右に揭げたやうな優麗な新古今風の歌風で一貫してゐる。盲目の人であつて、かほどまでに華麗な敍景歌を詠み得た保己一の頭腦、まことに驚くべきものがある。

解題終

常山詠草

水戸光圀

常山詠草　巻之上ノ一

春歌

年中立春

年はまだ關の戸こえぬ朝よりまづ立ちそむる春霞かな

手を折りて過ぐる月日を數ふれば年をのこして春は來にけり

梓弓春のこなたに年こえてはや立ちなるゝ朝霞かな

まき殘す暦のおもてそのまゝに見えてさながら春は來にけり

立春

風寒み霞は雪にとぢられて消ゆる方より春や立つらむ

きのふ今日その色としは見えねども人の心に春や立つらむ

あかねさす朝日のどけき山の端をけふ立ち出づる春霞かな

春風に汀の氷とけそめてやゝ打ち出づる池のさゞ波

立春鶯

春立ちて軒端をわたる鶯の聲めづらしきあけぼのの空

○手を折りて　指を折つて。

○梓弓　春の枕詞。弓の縁で、本末、中、引くなどにかゝる。

○まき殘す暦のおもて　殘つた暦の上。昔の暦は卷物になつてをつたからいふ。

○その色　春の景色。

春はたて霞はぬきに織りはへて綾織る色や鶯の聲

元旦

きのふかもふり行く年はくれ竹の一夜を鄰るあら玉の空

あら玉の春のはじめの杯に千とせのかげも汲みて見るべく

いとはやも夜ふかき鳥の聲のうちに四つの初めの春は來にけり

門松にかざりそへたる呉竹の一夜のかぜに春ぞしらるゝ

火をのがれ出て山荘に住みたる年の元旦

おのづからうゑしもけふは時にあひてもてはやさるゝ松の色かな

ふるとしに春たちける元旦

あらたまる年の初めの玉くしげ二たび霞むあけぼのの空

試筆

氷りゐし硯の池のうちとけて浪間に清き鳥のあとかな

卯の年の元旦に

あら玉の年も卯杖をとりそめてつきせぬ春を祈るけふかな

四十の年の元日

春の道迷はぬとしに逢坂の關の清水の影もはづかし

○たて　經。縱絲。
○ぬき　緯。横絲。

○四つの初め　四季の初め。

○おのづからうゑしも　何の考へもなくて植ゑたけれども。

○玉くしげ　二たびの枕詞。櫛笥の縁で蓋(フタ)にかゝる。

○迷はぬとし　四十歲。論語、爲政篇「四十而不レ惑。」

初春雪

山はみな春めきながらさえかへり猶白妙に雪ぞ降りける

初春松

常磐なる松もみどりの色そへて今朝初春の空ぞ長閑けき

初春鶯

鶯の聲のあやをもおりはへて霞の衣はるは來にけり

早春霞

昨日けふ霞の衣立ちそめて春來にけりとみ吉野の山

朝ぼらけ池の冰の打ちとけて浪の花さく春は來にけり

春水

冰りゐし池の心も春くれば風のまに〳〵とけてのどけき

子日

鶯の初ねのけふの姫小松幾代の春を引きやこむらむ

春もまだ淺野におふる小松原ひく手に寒き袖のあわ雪

霞

花鳥の色音もあれどおしなべて霞むや春のしるしなるらむ

○おりはへて　織り延へて。織りこんで。

○子日　子日の遊び。昔正月初めの子の日に、野に出で、小松を引いて千代を祝った行事。

朝霞

誰が里を夜こめに出でて旅人もあしたの原にたつ霞かな

山霞

山のはの木々の梢も見えぬまでたち渡りぬる春霞かな

野外霞

春日野に春はおふてふ紫の色のゆかりに立つ霞かな

浦霞

これもまた人に見せばや春の名に立てる霞の浦のけしきを

海上霞

ゆく船の跡より見えね春霞たつ白浪の音ばかりして

橋上霞

春の夜の月よりあけて鳰の海や霞みわたれる瀬田の長橋

湖上霞

音ばかりよするや鳰の浦波も霞にこもるあけぼのの空

庭鶯

軒近くきゐる鶯おのづから馴れてやおのが聲もをしまぬ

○紫の色のゆかり　一つの關係より情愛の他に及ぼす事。草の緣。「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今一七雜上）

○跡より　跡こその誤りか。

○鳰の海　琵琶湖。

○すご　賤しきもの。
○かたみ　籠。
○ふぐし　土を掘る道具。竹又は木で作る。

○はだれ　斑。

若菜

すごがけふかたみに入れてふぐしもち家づとにとや若菜摘むらむ

春日野の雪間分けつゝ諸人の袖ふりはへて若菜摘むらし

雪中若菜

ふる雪の衣の袖に積れるを打ちはらひつゝ若菜摘むらむ

春雪

おしなべて梢も山も白妙にあらぬ花咲く雪のあけぼの

白雪のふる川のべに跡もなし春のしるしの松たてる門

月前梅

梅の花しらけたる夜の月に吹く風をたよりに人もとへかし

雪中梅

ふる雪に埋みはてたる梅の香をそれぞとわくる庭の春風

しら雪ははだれにふれど吹く風に香をばうづまぬ軒の梅が枝

古郷梅

昔にもかはらで匂ふ梅の花浪花の宮の春のあけぼの

八重梅

咲く梅も霞も八重にたつか弓春べと匂ふ軒の夕風

紅の梅のさけるを見て

たちならぶ色にやならふ紅の霞がくれの軒の梅が香

梅がえに鶯の鳴くを聞きて

春くればおのがやどりと咲く梅の花よりにほふ鶯の聲

梅のさかりなりければ

心ある人にみせばや我がやどの庭もせにさく花の一木を

梅のさかりなる比ある人發句して花をもとめければ

色ふかき詞の花の匂ひにはやゝおくれぬる梅の下風

ある人梅の花さかりなるを見に來りければ

君が袖ふりはへてとふ我が宿の軒端の梅も香をやそふらむ

ある人梅花を送りければよみてつかはしける

誰がために手折るや梅の色に香にあはれ知るべき我ならなくに

庭の梅の花を人に送るとて

みせばやとたをれる庭の梅の花色香も深き心とをしれ

柳

○たつか弓　手束弓。手に執れる弓。

○心とを　我が心とを。

○けに　異に。ことさらに。

枝たるゝ柳の露の玉帯あさぎよめする庭の春風

水邊柳

影うつす岸の青柳春風におなじ綠の浪や立つらむ

柳帶露

打ちなびく柳の絲も春風のさそへば露の玉ぞみだるゝ

柳に雪のふりつもりたるを見て

沫雪のふり積りたる青柳は朧の白絲落つるとぞ見る

春月

八重霞へだつる影を見ればなほ心づくしの春の夜の月

浦春月

春といへば月もおぼろに晨明(しのゝめ)の光しづけき鹽がまの浦

春曙

山の端をたち離れたる横雲のたえま色どる春霞かな

春雨

かきくれてもの思ふさば春雨の雫よりけに落つる涙か

中川佐渡守内藤左京亮などとぶらひ來て春雨といふ心を

末遠く霞むゆふべにしく〳〵と降るやふるのの春雨の空

横たてに雨のいともて織るはたのおり得てみする花の錦か

歸鴈

東白（しのゝめ）の空をもまたぬかりがねや朧月夜のかげにゆくらむ

このゆふ歸るかりがね琴のねのたえぬ恨みも餘所に聞くらむ

まてしばしいざこととはむ歸る鴈常世の春の花はいかにと

雲雀

久かたの空にしづけき春の日は雲路はるかにひばり鳴くなり

初櫻

待ちつけてけふ咲き初むる櫻ばななほ春風も心してふけ

絲櫻

うちなびく櫻のいとの長き日も見るにめかれぬ春の夕ばえ

いとざくら風のあやもて織る機のはたばりひろき錦なりける

片絲をあみをになれと咲く花の色によりくる人をこそまて

ともに見てあかぬ心の絲櫻引きやとゞめむ春のもろ人

遠山櫻

○めかれぬ　目離れぬ。目はなれぬ。
○はたばり　機張。布帛の幅。

○青根がたけ　吉野山の東嶺にして金峯の北に並ぶ。

○太田　茨城縣久慈郡。

○見はやす　賞觀する。

み吉野の青根がたけの春風にたなびく雲や櫻なるらむ

池邊櫻

白波のよするとぞ見る花さそふ嵐の庭の池の汀に

つく〲と眺めもあかず我がやどの一木の春の花のさかりは

春の日のながしといふは名のみにて暮るゝはまだき花の木の花

ある人金王丸といふ櫻をおくりければ

今も世に色香妙なり名に負へる野間のうつみの花の一えだ

櫻の花折りて人におくるとて

心ざしふかくそめてしをるなればちしほにみずや花のにしきを

太田の道のほとりのさくらを見て

みちの邊に見はやす人は無けれども春を忘れぬ山櫻かな

花

昨日けふ高嶺の花や咲きぬらむ麓の里ににほふ春風

天津風もし心あらばふきとぢよこれも少女のはなの羽衣

待花

咲く時はいとひなれこし春風をいや吹くとてぞ待たれぬるかな

春寒花遲

まだ咲かぬ花をば雪に思はせて散りかひくもるみ吉野の山

花盛開

咲きみつるなみ木の櫻白妙にその山姫の布さらすかも

山花盛

みねも尾もそれとわかれぬ白雲の夕ゐる方に匂ふ春風

檀那院僧正畠山下總守などとぶらひきて翫花といふことを

けふはいざ花にあるじをゆづり置きて我もまとゐの數に入らなむ

長き日もあかぬ心をよするにてやゝ晴れやすき花の木のもと

花月

まがきなる梢の花の咲きみだれ雪にかげさすありあけの月

霞隔櫻

我がやどの花を霞の立てこめて心づくしの山櫻かな

雨後花

立ちならぶ花は軒端にかをりくる雪を殘して晴るゝ雨かな

遠望山花

○散りかひ　散り亂れる。

○心づくし　氣の揉めること。

○山まゆ　山眉。山の端のほのかなるを眉墨にみたてていふ。

○餘所めには　遠見には。

足引の遠山まゆも一しほの春の色そふ花の白雲

庭前花

花あらば名さへ懐かしその葉さへ何かはいやし卑し垣根も

花留人

花はねに帰るさまよふ道もなし家ぢ忘るゝ春のもろ人

落花

さくら花ちりかひくもる道もせに霰たばしる春の山風

船中落花

風さそふ比良の高嶺の山櫻花の帆かけてかへる釣舟

落花似雪

行く道も見えぬばかりに散る花を駒のすゝまぬ雪かとぞ見る

瓶裏花

餘所めには雪かとぞ思ふ山櫻花の色とは手折りてぞしる

花上金鈴

むかしはし跡はあらしの園ふりて鳥より花のすゞは引きける

さくら山吹ををりまぜたるを見て

○おもひつくみ　執著の深い。

○岩船願入寺　今、常陸國那珂川口の南方磯濱町。岩船山願入寺。

○日野弘資卿　光慶の子、堂上歌人。

○中院通茂卿　權大納言通純の子宮内大臣に至る。和歌に名あり。光圀の親友であつた。

○わくらばに　たまさかに。まれに。

山吹といふ名もつらし咲く花におもひつくみの春の夕暮

さくらの花に雪のふりかゝるを見て

なべて世は春めきながら雪ちりてはなに花さく八重櫻かな

岩船願入寺の彼岸櫻を見て

さすさをも花の名におふかの岸によするや春の法の舟人

花の比家弟などとぶらひ來りければ

けふはなほ空にかゞやく櫻花色も香も知る人を迎へて

駒込の山莊の花のさかりなる比人のとぶらひけるに

たづねくる人めまれなる山ずみも花故により今日はとはるれ

日野弘資卿中院通茂卿關東下向のついで園の花見むとてとぶらひ給ひければつとめて送り侍る

年にまれの人を待ちえて咲く花は今日ひとしほの色や添ふらむ

このやどに花をあるじと思はずはいかで待つべき雲の上人

わくらばにまねきいれたる嬉しさをつゝみぞあまる花の衣手

季姫君のかたへ花見にまかりて

櫻花あかずやすらふ木のもとに日をかさねても詠め暮さむ

○自息軒　常親、後水尾帝に侍讀し後五家、義公に遊事した。
○史館　彰考館をいふ。水戸城内と小石川邸とにあり。

○まうけ　設備。

月に花になかばあかさむ老の身はまたこむ年の春をしらねば

自息軒史館の花見にまかり給ふ時

はる／＼と八重しら雲の上人を招きいれたる花の木のもと

花見に來りし人の歸りなむといひければ

櫻咲く庭の春風吹きとぢよ花みてかへる人をとゞめむ

ちる花に嵐吹きまく玉むしろ今日のまうけにしく物はなし

花見にまかりし人の歸り來て花のいま盛りなりといひければ

とはばやな聞くだにゆかしさくら花見るてふ人の心いかにと

ある人花の散るを惜しみて心あるは袖に匂ひのとゞまりてあだにちりにし花の色かなといひおこせければかへし

色もかもとまらで花の散ればこそ春は一きはめでたきものを

人の植ゑおきし櫻のさかりなる頃見にまかりて雨のそぼふりければ

春雨のふるき昔を思ひ出でて慕ふに花の袖ぞしをるゝ

花のころ

花にあかぬ心を春のものにして今宵はこゝに詠め明かさむ

春はたゞ花に心をつくすかな風ならねば雨あめならねば風

花の比内藤左京亮のもとへ消息するついでに申しつかはしける

此の春はうとき親しきわくらばにとふ人へだつ花の白雲

再び別莊の花をながめて

きのふ見し櫻はけふのたけくらべうへなき春の色を重ねて

ある人の許より花を送りけるに

をちかたの雲とや見えむ櫻花はなの色とは手折りてぞ知る

手折りつる花にみよとやいく春も人の心のふかき色香を

あひしれる人に庭の花を送るとて

花の色うすくなな見そ一枝もいくしほそめしわれが心を

花のもとにて人々のよみたる歌を見て

ゆきてみぬよその櫻もこゝに今色香をおくる人のことの葉

中山備前守信成が許へさくらにそへてつかはしける

先づ一枝たをる櫻の色も香も君ならずして誰か知るべき

ある人花あまた折らせたりければ讀みておくりける

めかれせぬ花のにほひのさま〴〵に一かたならぬ春の色かな

花下宴

○な見そ　見るな。

○中山備前守信成　中山家は水戸藩の附家老。

散る花に霞はよそのながめにて嵐をにくむ袖の杯

閏三月花

ちりのこる後のはなみの八重櫻やよひの空に月を重ねて

武野春晩

むさしのの草分けなづむ春駒のかげ見ぬまでに茂る頃かな

遊絲

吹く風も袖寒からぬ春の日ののどけき空になびく絲ゆふ

紅桃

とつぐべき時こそあなれ紅の色にぞ見ゆる桃の花園

光海寺にて桃のはなを見て

かの岸にいたるやこれも棹さしてめかれぬ桃の水のみなかみ

桃の花を人におくるとて

みちとせに咲くてふ桃の一枝は君が齢のはじめなるべく

遠村里にもゝのあまた咲きけるを見て

紅の霞をわけて飛ぶ鳥の羽風にのぼる桃の一むら

菫

○絲ゆふ　かげろふ。

○とつぐべき云々の歌　桃花の夭夭たるを見て嫁期の女を思つてよんだもの。詩經周南「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸。」

○みちとせに咲くてふ桃　三千年に一度實を結ぶ桃。西王母の故事

かすがのの野邊のすみれを摘みぬれば袂をそむる紫の色

蛙

うちかへす小田の苗代雨過ぎてうね越す水に蛙鳴くなり

苗代

風そよぐ小田のさゞ波春めきて苗代水に蛙なくなり

躑躅

春の色はえこそ忘れねくれなゐに匂ふはやさし丹つゝじの花

山家躑躅

柴の戸をあけ行く空もくれなゐに山みな染むる岩つゝじかな

山路躑躅

山ふかく見る人もなき道のべの岩間に咲ける丹つゝじの花

松下躑躅

いはつゝじみな紅の下がさねうはおほひする松のみどりの

岩款冬

みよしのの岸の山吹咲きぬれば波の底にも花は有りけり

藤の花ざかりに人々をあつめ客をまうけて

野も山も吹きをさまりて藤浪のかたよる方にのこる春かぜ

立ち出でて色にそめてし武藏野のながめにかゝる春のふぢ浪

いにしへもかかる時にやみな人とともに樂しむ宿の藤なみ

岸藤

影うつる水の緣もむらさきの色にながるゝ岸の藤波

白藤

藤なみの花もみだれてかけ高く雲よりおつる瀧の白絲

雨後白藤

春雨も空にみだれて咲く藤のしら波こゆるすゑの松山

藤原なりける女藤の花を送り侍りければよみてつかはしける

ゆくすゑも猶や榮えむ紫のゆかりに匂ふ北の藤浪

あづまとて春はかはらぬ花の香を都の人はなにと見るらむ

人々山荘の藤花見に來りける時

折をえてけふ咲く藤の花かづら問ひくる人を引きやとゞめむ

紫のあけをうばひて咲く藤のゆかりへだてぬ花の友がき

とはばやな藤のしなひの長き日もあかぬ色香を君めづるやと

○すゑの松山　陸前國鹽釜の西方古來歌枕として名高い。末の松山こすといふは、昔男をんなに逢ひて末の松山をさして、彼の山に波のこえん時ぞ異心は有るべきと誓ひたるより起つたと。

○紫のあけをうばひて　昔の紫は今の茜染の類であつて朱に似てをるから、間色が正色に紛はしいのをいふ。論語陽貨篇「惡紫之奪朱。」

ある人に藤の花を送るとて

これもまた若紫のゆかりあれば香をなつかしみよする藤なみ

輪王寺法親王藤の花の比とぶらひ給ふ時

けふはなほ色も妙なり藤の花君が衣の影にうつりて

藤はら氏の女藤の花見に來りければ

しづのやも花のゆかりの色にけふもてはやさるゝ北の藤波

法岩院の藤花を見て

山寺の軒さす藤やむらさきの法の衣の色を添ふらむ

三月盡

見し花の色にをしまの浦波やたちもかへらぬ春の別れ路

年毎に過ぎ行く春はをしめどもわきて悲しきけふの暮かな

夏歌

庭卯花

ちりつきし櫻ののちの卯の花は雪をのこして晴るゝ白雲

おのづから空しき宿は白妙の色にさくてふ庭の卯の花

○紫のゆかり　一つの關係より情愛の他に及ぼす事。草のゆかり。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今一七雜上）

○輪王寺法親王　公辨法親王。

更衣

さくら花にそめし衣を脱ぎかへて春の分れや卯の花の袖

脱ぎかふる昨日の袖の花の香をうすくもとめよ蟬の羽衣

けふよりは櫻の衣ぬぎかへてあはれは同じ卯の花の袖

けふよりは霞の衣たちかへて薄き襲ねや卯の花の袖

殘花

さそひ行く嶺のあらしも心ありてたえ〴〵のこす花の白雲

新樹風

夏木立庭も笆もそよさらに綠吹くてふ山おろしの風

山新樹

山しげみ木々のうれはのぬれ〳〵も綠を渡る風ぞ涼しき

雨の降りける日榊原式部大輔とぶらひ侍る時庭新樹といへる心を

降る雨もけふのためとや我が宿の庭の綠の色も添ふらむ

郭公

四月朔日はじめてほとゝぎすをききて

夏衣まだ花の野もつきなくにはや來て馴るゝ郭公かな

〇そよさらに　風の吹くさま。

〇うれば　木ずゑの葉。

みじか夜も過ぎがてになる明けがたの軒端にうとき山ほとゝぎす

時を知る人ならなくに郭公雲居の橋をなきわたるとも

尋ねゆかむやよや卯月の郭公聞かぬに聞きし里もあるやと

聞郭公

このごろは待つにつれなき時鳥けふなほざりの聲をきくかな

初聞郭公

なか／＼に待つ夜の數は積れども一聲つらきほとゝぎすかな

郭公ゆめか現かうつゝとも思ひわかれぬ夜半の初聲

待ちわびて明けぬ暮れぬと夏の夜の夢路をたどる山ほとゝぎす

夜ほとゝぎすを聞くといふ心を

郭公夜半の枕のひと聲に渡しもはてぬ夢の浮橋

子規何方

夢かうつゝ現か夢と思ふまに一聲過ぐる山ほとゝぎす

郭公數(あまた)なくといふことを

郭公しでのたをさやすゝむらむ跡をあまたに鳴きとよむなり

岡子規

○しでのたをさ　死出の田長。ほとゝぎすの異名。ほとゝぎすは冥途より來りし鳥なりとの俗説による。「いくばくの田をつくればかほとゝぎすしでの田をさを朝な／＼よぶ」

○鳴きとよむ　鳴き響く。

ほとゝぎす昔を忍ぶの岡のべに思ひをそへて鳴き渡るらむ

名所時鳥

言の葉もしげりあふてふ筑波嶺の昔を忍ぶ山ほとゝぎす

鵑聲帶雨

紅のふり出でてなく郭公涙や雨とふるさとの空

風はやみ一むらすぐる雨雲のあとよりきほふ杜鵑かな

雨はるゝ雲の衣やはつるらむをりはへてなく山ほとゝぎす

端　午

歎きつゝ思ひ入江に沈みてもつひには得たる父の姿を

火をのがれ出で山莊に住みし端午に

おのづから今日のまうけと人や見むもとよりふきし草の庵は

菖　蒲

波こゆる池のあやめのみがくれて咲きぞわづらふ五月雨のころ

窗　橘

露結ぶ草の庵のさびしさに昔がたりの軒のたちばな

かをりくる草の扉の明けくれにむかしを忍ぶ軒のたちばな

○をりはへて　長く引きつゝく。

○露結ぶの歌、かをりくるの歌二首共に、古今夏　さつきまつ花橘の香をかげは昔の人の袖の香ぞする」を本歌。

五月雨

うき雲も空にみだれて五月雨の降るてふものは日數なりけり

水鷄

難波江やかりの妻戸を叩くとて明けて見ぬれば水鷄なりけり

まきの戸をたゝく水鷄に夢さめて明くればやがて月ぞ入りくる

雨後夏月

夕立の過ぐる軒端の雫より玉とみだれて落つる月かげ

○玉とみだれて　玉となつて亂れて。

樹陰夏月

軒近き桐の廣葉のしげりあひて風の隙もる夏の夜の月

夏の夜軒の板間に洩りくる月をひとり眺め居りて

獨居の軒の板間にかげもりてよそにゆづらぬ夏の夜の月

姫百合

草深み露の玉だれ垂れこめてひとり起き伏す姫百合の花

夏菊

涼しさは秋こそ通ふしら菊の花の香おくる庭の夕風

鵜河

鵜飼船高瀬の水に落されてさばしる魚を取りぞわづらふ

○衞士の焚く火の歌　「み垣守衞士のたく火の夜はもえて晝は消えつゝ物をこそ思へ」の歌に據つたもの。

螢

衞士の焚く火影とも見む晝は消えて夜は燃えつゝ過ぐる螢を

雨後螢

雨雲の晴れみ晴れずみ行く月に見えみ見えずみ飛ぶ螢かな

雨の後草葉の露に影うつし玉かずそひて飛ぶ螢かな

水邊螢

はるゝ夜のながるゝ星や池水に影をかはして螢飛ぶなり

澤螢

淺澤や水草かくれに飛ぶ螢影も涼しき夕闇の空

晩夏螢

流れ行く宇治の川水秋近み影もかすかに飛ぶ螢かな

蓮

白玉を蓮の廣葉にゆりするゑてひぢりにそまぬ月ぞ宿れる

夕立

雲ははや跡なく過ぎて夕立の雨より通ふ風の涼しさ

見るが内に風こそかはれこの山の峯越す雲のあとの夕立

蓑笠もとりあへぬまで降る雨にしとゞに濡るゝ遠の里人

吹く風も袖に通ひて夏の日の暑さを洗ふ夕立の雨

夕立の風にきほひて鳴る神のふみとゞろかす雲のかけ橋

風早み一むら過ぐる夕立の雲の衣やかたみなるらむ

行く雲に暑き日影もかくろひて雨より送る風の涼しさ

近水生微涼

このゆふべ涼しくなりぬ池水の波のぬれ衣秋や來ぬらむ

庭納涼

わが宿は涼しかりけり瀧浪の音吹きそふる庭の松風

六月祓

あすはまだ暑さも夏のみそぎ川今宵うながす秋の夕風

ゆふだすきかけてもしるし櫻麻のなびく方より秋風ぞ吹く

秋歌

初秋月

○六月祓　なごしのはらひ。昔陰曆六月一日朝廷及び民間一般にした大祓。八雲御抄「邪神を祓ひなぐさむる祓故なごしと云也。」
○ゆふだすき　木綿をたすきとするもの。神事に奉仕するに用ゐる。

待ちわぶる最中の秋の面影をまづ見せそむる山の端の月

秋くれば木間もる月の隈ぞなき梧の一葉の落ちそむるより

秋たつと夕の空は心よりはや澄みのぼる月のさやけさ

初秋風

秋きぬと夕の空もおのづから思ひなしにや風ぞ身にしむ

やよいかにまだ秋なれぬ山の端に梢吹きおろす風ぞ身にしむ

きのふけふ梧の一葉のおちそめて身にしむ風の秋ぞ知らるゝ

殘暑未盡

幾日數待つにつれなき梢にもあつしくるたる秋の夕風

七夕

七夕のまれに逢ふ夜のほどもなく明けゆく空や悲しかるらむ

七夕の逢期にこよひいく秋も結ぶ契りを魂のをにして

七夕雲

雲の波いさよふ月や七夕の妻むかへ舟のふなでなるらむ

いとせめてあやに戀しき織女の雲の衣や幾夜かさねし

七夕別

七夕の別るゝけさの玉かづらかけてうきたつ涙なるらし

故郷萩

ふる里は秋ぞさびしきむらの萩の上風そよぎたつなり

萩風

このゆふべ萩のうは葉を吹く風に物思ふ袖の露ぞみだるゝ

萩似錦

宮城野に咲きみだれぬる萩の花は木ずゑにかくる錦なりけり

風後薄

亂れあふ尾花が末の風絶えて玉と見るとて結ぶしら露

野草花

果てしなき秋のあはれは夕風に尾花亂るゝ武藏野の原

月前草花

露結ぶ尾花の末を吹く風にうつろふ月の影ぞこぼるゝ

水城の史館にあまた植ゑ置きたる草花の盛りなるを見て

いろ／＼の千草の種を植ゑおきて折にふれたる花を見るかな

朝顔

○水城の史館　水戸城の彰考館。大日本史編纂にあてられし館。彰考館は小石川の邸にもあつた。○折にふれたる花　其の季節々々に咲く花。

○よごろ　數夜この方。

○たよすげに　たをやかであつて

朝顔はよごろの風にうちとけて結びもやらぬ花の下ひも

露むすぶねくたれ髪もたよすげに行方めでたきあさがほの花

月前蟲

うらめしなこ萩がもとの蛬（きりぐす）こよひの月にかどさせと鳴く

夜蟲

雲の衣つゞれさせてふきり〴〵すたとひ夜のまの風やぶるとも

古郷蟲

ふる里の秋のまがきは荒れぬるをいつも變らぬ松蟲の聲

蛬

はかなくも鳴きとよむなりきり〴〵す衾いくよの秋ならなくに

月前秋風

秋風にみだるゝ雲の絶間よりほのかに出づる月のさやけさ

月前風

明石潟千里の奧を吹く風は月をよせくる夜半の浦波

山鹿

秋風に散るもみぢ葉をふみわけて牡鹿や山に住みやどるらむ

更くる夜の嵐につれてさを鹿の聲も高嶺の月にすむなり

秋眺望

きのふまでけぢかく見えし山の端にはや立ちへだつ秋の夕霧

秋は猶心の雲もかきくれて袖よりきほふ夕暮の雨

秋雨

きのふまで照る日の影はかくろひて景色ことなる秋の雨かな

雨の音も人の心もしく／＼と物あぢきなき秋は來にけり

秋月

いと薄（すゝき）露の契りのあやまたで玉にも貫ける月の影かな

庭の面はさながら雪のつもるかと見るにさやけき月の影かな

終夜對月

夜もすがら月にそめてし老の身は寐られぬまゝと人や云ふらむ

八月十四夜月

半ばにはまだみちあへぬ影ながらあまりて淸き秋の夜の月

十五夜月

四つの時秋の一夜とみな人の思ふ心に月や澄むらむ

○袖よりきほふ夕暮の雨　物哀れの感にうたれて涙が催せられる。

○月にそめてし　さやかなる月影に思ひ入つてをる。

○四つの時　四季。

さしむかふ今宵の月を飽かず見よまた來む秋を賴まれぬ身は

山の端にかたぶく月を眺むれば我が世の秋も半ばふけゆく

これぞこの名におふ空は世の中の人の心の月に澄むなり

八月十五夜なかの港といふ所にて

秋もけふ那珂の港の海風に雲もあとなく晴るゝ夜の月

眺めやる海面（うなづら）遠く雲はれて浪より出づる月のさやけさ

八月十五夜不忍の池のほとりにて

にほの海や其のいにしへの空までも浮みぞ出づる池の月影

八月十五夜に人のとぶらひ來りけるに

年にまれの人を待ちえし今宵はやなほ一人そふ秋の夜の月

閏八月の十五夜

名に高き月をふたみの浦浪にまた立ちかへる秋の空かな

十六夜月

雲霧もはらひはてたる中空にいさよふ月を眺め明かさむ

十七夜月

名に高きもちにふた夜はすぎのかどしるしを見せて歸る月かな

○浮みぞ出づる　思ひ出される。

○もちにふた夜　十七夜。

○すぎのかど　過ぎと杉とをかけた。古今雜下「我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門」

九月十三夜

くらべ見む月の桂も二もとのすぎし最中のそらのひかりに

菊の花の匂ひの露も名に高き月のひかりを結ぶ白玉

名に高き月を二見の浦人もまた滿つ汐に出づる釣船

行く雲もあとなく晴れて名に高き月を二見の浦の秋風

いせ島や二見の浦に雲はれて神代ながらの月ぞさやけき

立ち竝ぶ影こそなけれ末の秋の中の十日の三日の夜の月

すがの根の長き夜よし月夜よし夜よしとつぐる人をしぞ思ふ

名に高き月のひかりに早きえて空に稀なる庭のしら菊

九月十三夜人々とぶらひければ

降る雨は絲に亂れて長き夜を飽かぬ心や月の友どち

九月十三夜月見堂にあつまりて

秋暮れて今宵名高き軒端にも餘りて淸き月の影かな

皆人の飽かず眺めむ長き夜も今宵の月にさやは寢らるゝ

山月

この里は月にもうとし山高み峯越すまでに待つ夜更けぬる

○九月十三夜　宇多天皇の御時からこの夜の月を賞する習はしがあつた。

○月を二見　二見浦と見るとにかけてある。

○末の秋の中の云々　九月十三夜の月。

○さやは　いつもの樣にさやうにまあ。

野月

秋の野の草葉に置ける白露は風吹くたびに月ぞこぼるゝ

橋上月

これもまた宇治の橋守言問はむ幾夜かすめる水の月影

水上月

大空を秋すむ水にうつしつゝ雲居の月もしもに見るかな

駒込の山莊にて池上月といふことを

月に今宵むかしを誰か不忍の池の濡れ葉の長き夜すがら

海上月

沖津風心も空に浮きたちて月に棹さす夜半の舟人

眺めやる海面遠く雲暗く浪より出づる月のさやけさ

磯月

荒磯の岩に碎けて散る月を一つになして歸る浪かな

花落月

誰もみな仰げば高し雲の上にかはらぬ月の影ぞ正しき

社頭月

○月に棹さす　漁隱叢話前集「棹穿波底月。船壓水中天。」を思ひ寄せたもの。

賀茂川や濁らぬ水の浪の上に神代をかけし月の白ゆふ

かりに宿りし所にて月を眺めて

こゝもまたなるれば同じ秋の夜の情へだてぬ月の友垣

山家秋月

山里に照る月影を眺むれば心も澄める秋の空かな

山家名月

山里を立ち出でて見れば名に高き月の光をかへす浮雲

山居月

足曳の山の磐根に住居して訪ふ人もなく月を見るかな

閨月

秋の夜は枕をわたる月影の餘りてせばき寢屋のさむしろ

閑庭月

木の間よりそれとばかりに洩る月の影かすかなる庭ぞ靜けき

松間月

月冱えて夜寒やいそぐ松が枝の葉わけに積る雪のむら消え

月前述懐

○情へだてぬ　月を見ての情には人我の區別はない。

○足曳の　山の枕詞。

つく〴〵と空に向へば晴れやらぬ心の雲に月の隈なき

月前懷舊

夢にだに見ぬいにしへの空までも浮び出でぬる秋の夜の月

月前管絃

諸共に見し其の人の形見ぞと思（おも）へば思（おも）へば月もなつかし

行く雲もたちやとまらむ絲竹の聲すみのぼる秋の夜の月

月前燭

山も河も隈なく澄める月影にきえねど消ゆる窗の燈火

月前杯といふ心を

さやかなる影さし入りて杯の巡ればやがて月ぞかたぶく

月の歌の中に

いつの世に誰か見染めし秋の夜と月にむかしのことを問はばや

なか〳〵に見ぬいにしへの空までも浮みぞ出づる秋の夜の月

湖水に映る月のいと清らに波にあらはるゝ眞澄の鏡の影いや高く差しのぼる程彼の石山寺の古思ひ出でられて

名に高き月に近江の石山の寺なつかしきいにしへの空

○行く雲もの歌　列子「秦青撫レ節悲歌、聲振二林木一、響遏二行雲一。」の故例による。

○浮みぞ出づる　心にうかみ出づる(思ひ出す)と。空に浮み出ると

月の題にて人々歌すゝめしに上五文字を探りて彼の丘にといふ事を得たりしかば

彼の丘に草から残せ秋の夜は月の宿りの露や消ぬべき

初鴈

秋風の吹き初めしより侍ちわびてけふ珍らしき初鴈の聲

秋來れば雲居はるかに玉章をかけて珍らし初鴈の聲

鴈

秋霧に立ちこめられて行く鴈の聲ばかりこそ雲居なりけれ

秋風につらをみだしてくる鴈や誰が玉章と人も見るらむ

秋風に雲のかけはし中絶えてまた後先に渡るかりがね

秋風の吹きそめしより打ちつけに朧げならぬ鴈の一聲

月前鴈

月の琴鴈の琴柱(ことぢ)をたて置きて己が調べの秋の夕風

雨中初鴈

聲を帆にからろ押すてふ初鴈の櫂の雫か秋の夜の雨

雨中鴈

○草から　草刈りの誤りか。

○からろ　唐風の櫓。上品なるろ夫木十二「さよふけて空にからろの音すなり天の戸わたる鴈にやあるらむ」

降りすさむ雨の夕の山の端に翼しをれて渡る鴈がね

闇夜聞鴈

夕闇の空に亂れて行く鴈やからす羽に書く文字のひとつら

橋上霧

鳰の海や往來の舟も見えわかで霧立ちわたる瀨田の長橋

夜擣衣

賤の女が夜寒の袖や重ねむと更けゆく空に衣打つなり

誰がために手もたゆくして衣打つ賤機帶の長き夜すがら

山守擣衣

ききわくるかたこそなけれ山彦の聲をあまたに衣うつなり

里擣衣

夕時雨山は紅葉に染めかへて衣打つなり深草の里

夕鶉

風わたるいはたの小野の夕暮に千ぐさ亂れて鶉鳴くなり

庭上菊

庭の面に咲きみだれぬる菊の花の匂ひをこぼす秋の白露

〇からす羽　烏羽毛。紺の光澤のある黒色。

〇賤機帶　倭文でこしらへた帶。

〇深草の里　山城國紀伊郡深草郷原都と伏見との中間。

籬菊

白菊の咲きみだれぬる籬には置く露までも匂ひこそすれ

中山道軒が許へ菊の花を贈るとて

幾かへり飽かずかもみむ八重菊の花も千歳の秋を重ねて

中院通茂卿あづまへ下り給ふ時菊の花をまゐらせければ文の奥に手折りつる心も深き色に香に垣根の露を思ひやられてとあるに

言の葉の深き心の色香には露もはえなき宿の白菊

岸紅葉

紅に匂ふはいづら池水の底もかひある岸の紅葉ば

池のほとりの紅葉を見て

水底に影をうつしてもみぢ葉の錦をあらふ池のさゞ波

庭の紅葉の風に散るを見て

庭もせに木の葉吹きしく秋風の身にしむ頃は物ぞ悲しき

中山道軒が許より菊紅葉など手折りて添へ侍る歌の返し

君によりまたも紅葉を燒き添へむ幾秋めぐれ菊の杯

○中山道軒　備前守、水戸家の附家老の家柄。

○中院通茂　權大納言通純の子、内大臣に至る、和歌に名あり。光圀の親友。

○菊の杯　南陽酈縣にある菊水を飲んで長壽を保つたといふ故事による。風俗通「南陽酈縣有二甘谷一、谷中水甘味、上有二大菊一、落レ水從レ下流下。得二其流液一、谷中人家飲二此水一、上壽百二三十其中百餘歲、七八十則爲レ夭。」

○岩船　今常陸國那珂川口の南方磯濱町。

冬歌

初冬のはじめ散り殘る紅葉を見て

置きわたす霜より後の松ならでつれなく見ゆる嶺のもみぢ葉

山家落葉

一かたに散るもみぢ葉を誘ひゆく風も色ある冬の山里

夕時雨

暮れかゝる御室の山を見渡せばうき雲たちて時雨ふるなり

岩船の惠明院にて山家時雨といふことを

木の葉散る軒端の松の深綠これも時雨や染め出すらむ

堀田一輝六十賀せしとき寒樹交松といふこゝろを

夏木立それとも見えぬ松が枝の霜に千歳の色や添ふらむ

立ちならぶ色こそなけれ年寒き霜の後なる十かへりの松

寒草

紫のゆかりや忍ぶ宮城野の萩の枯葉にむすぶ朝霜

冰始結

岩間より落ちくる冰の音絶えて冰や結ぶ瀧の白絲

冬　月

木枯の身にしむ頃は山里にしぐれし跡の月ぞさやけき

木がらしの風にかつらも冬枯れて限なく出づる山の端の月

冬の夜月のいと明かりければ

冬の夜の雲のけはひぞたゞならぬ秋の最中の月は物かは

千　鳥

さほ川の棹さす舟におどろきて騷ぐ千鳥の間なくしば鳴く

網　代

せきとむる宇治の川瀨の網代木に淀める木の葉秋ぞ殘れる

霰の降りける夜人々戯れて旋頭歌を讀めるに

冱ゆる夜の風の霰の降りしきぬれば時の間に玉の臺の心ちこそすれ

待　雪

いまもまた雪げの空を白雪のひれふる山をまつらさよひめ

初　雪

たなくもり嵐も冱えて稻蟲や隱れかぬらむ今日の初雪

○さほ川　奈良舊都の東、今奈良市の西郊を流れてゐる。

○ひれふる山を云々　白雪のふる山を待つに云ひかく。松浦のひれふる山は佐用姫の故事に名高い。

曙雪

降るほどは空かきくれて天地もおなじ色なる雪のあけぼの

河上雪

積るべき方こそなけれ山川に降るあと見えぬ今朝の白雪

月照雪

白雪の積りそへたる月影やきのふの雲のあとのかたみか

野雪

果てぞなき空も一つに白妙の雪降りつもる武蔵野の原

橋上雪

鴎の海や瀬田の長橋見渡せば波間を分けて積る白雪

松上雪

千歳經む其の色見せて姫小松緑の髪につもる白雪

松下雪

葉をしげみ雨さへ漏らぬ松陰もあやしく積る今朝の白雪

雪未遍

山あひの風にまかせて降る雪は積りつもらぬ谷の下道

雪後

雪の降りける日友達の許へ消息するとて

雪の上に霜を重ねて照る月のきらめきあへる庭の面かな

雪の木々に積れるを見て

跡つけて訪ふはうるさしさりとても訪はぬはつらし雪の山陰

豐かなる年のしるしに降る雪をあだにや人の花と見るらむ

鷹狩

はし鷹の谷越す鳥に目をかけて飛ぶますがきの羽こそはやけれ

夕鷹狩

夕づく日野守の鏡かげわれておち草まよふ冬の狩人

尾州光義狩にまかられける時

みかりせしかづらき山に鳴く鳥のをしへは今も君忘れめや

その頃某人は狩にいでたちたまひけれどわなみは故ありて詣でざりければ

鷹を臂に犬を引きつれみな人は狩場に急ぐよそひどもなり

雪の降りける日狩に出で立つ人に讀みて送る

○はし鷹　鷹の一種。普通のものより體小さく鷹狩に用ゐる。

○わなみ　吾儕。自稱代名詞。

折にあふ狩場の雪に君はけふ鶴の毛衣きつゝ行くらむ

小金のかりばにおもむくとき

犬鷹の鈴の音までも音冴えて衣手さむき霜の朝風

埋火

ねざめする板間の嵐風さえてわが夜も更くる埋火のもと

神樂

風寒み榊葉うたふ袖の上に曉ふかく霜や置きそふ

宮つこのとるさかきばに置く霜の猶さえまさる月ぞ寒けき

冬天象

冬の夜の空かきくもり降る雪は明旦(あした)のはらにさぞな積らむ

歳暮

一とせを昨日よ今日と暮しきてあだに月日を送りぬるかな

月も日もけふばかりとや呉織(くれはとり)あやなく過ぎし年にもあるかな

移りゆく月日はかねて知りながらまた恨めしき年の暮かな

月も日の流れて早き年波の淀まぬ水にしがらみぞなき

年の尾のくるとも知らぬ宿もがなまだ捨てぬ身の思出にせむ

○榊葉　神樂歌の曲名。

○呉織　枕詞。あやに冠する。

なべて世に降る白雪ともろ共にわが身に積る年の暮かな
岸に根をはなれもやらで松が枝の老木の春にまたや逢ふべき
身につもる年を忘れてあすよりはまたあら玉の春や迎へむ

年の暮の雪

老いらくの頭に積るしら雪のともにふりゆく年の暮かな

戀　歌

初　戀

思ひ入るみののを山の初時雨しぐるゝ袖を人に見せばや

忍　戀

とはばやな餘所の見る目はつゝめども心に忍ぶ人もありやと
我が戀は常磐の山の夕時雨色こそみえね深き思ひを
かくとだにいはでの森の下紅葉こがれはつとも色に出でめや
ほしあへぬ逢瀬の浪のよる〳〵は見る目つゝみの天の濡れ衣
忍ぶれど浮名やよそに立田山ゆふつけ鳥の鳴かぬ日ぞなき
我が戀は常磐の山の夕時雨しぐるとだにも人に知られじ

○ゆふつけ鳥　鷄の異名。

よしや君浮名はたてじ夕煙なびかぬ空に消え果つるとも

互忍戀

我はなほ人には人も洩らさじと思ふ心の通ふとばかり

不逢戀

あだにのみ寄する汀のうつせ貝逢はぬ思ひはやるかたぞなき

經年待戀

年月の涙にきほふ時雨にもかはらぬ色の松ぞつれなき

夢にだに見むとまろ寢の唐衣かへしてぬれどあはぬ君かな

忍不逢戀

知らせばや人目しのぶの摺衣思ひみだれて逢はぬ恨みを

逢はでふる袖は涙に朽ちぬとも人にな告げそ夜半の月影

未不留戀

來る人は忍ぶにたへぬ白露に宿れる月は手にも取られず

逢戀

恨みつる人の心も下紐も逢ふうれしさに今宵とけつゝ

夢かうつゝいさ白絲の逢ふことは結ぶとすれば明くるしのゝめ

○うつせ貝　肉なき介殼。かひがら。

○唐衣かへしてぬれど　衣をうら返してねれば戀しき人にあふといふ當時の風習があつた。古今戀二「いとせめて戀しき時はうばたまの夜の衣をかへしてぞぬる」

後朝戀

憂しや其の逢夜の袖の涙より歸るあしたの道芝の露

忍逢戀

忍びねの衣かさねて逢坂や關よりつらき鳥の聲かな

絶後逢戀

年を經てまたも逢ふ夜の玉くしげふたゝび恨む鳥の聲かな

別戀

相思ふ人に別るゝあかつきは袖の露にしやどる月影

夜もあけば人目しげさに後朝の飽かぬ別れに立ちぞわづらふ

欲顯戀

我が袖は人めつゝみの涙にも朽ちなむ後ぞかねて苦しき

逢不逢戀

逢ふことも絶えて程ふる秋風の通ふ心やなかの關守

中々にみだれそめにし片絲のまた逢ふまでを玉の緒にして

懷舊戀

誰か知る文月七日のそのの日のさゝめごとせしなかの契りを

○玉くしげ　ふたの枕詞。箱の緣よりふた(蓋)にかゝる。

○さゝめごと　私語。

互恨戀

いかにせむ諸聲に啼く小夜千鳥恨みてのみも世を渡るかな

戀月

秋果つる扇もよしな閨の内にひとり寂しき月の影かな

月前戀

袖に置く涙を月のよすがにて君ならでまた宿す手枕

春戀

春はなほ霞こめたる妹脊山見べくすくなき花の面かげ

夏戀

葛城の神ならねども短夜の明くるわびしき東雲の空

秋戀

秋の夜の長き名にたつ手枕をかはす間もなく明くる東雲

いにしへの秋の扇の恨みをも空に知らるゝ月の影かな

冬戀

踏みわけむかたはいづこぞ白雪の埋みはてたるうひの山道

通書戀

〔葛城の神云々の歌〕役の行者が大和國の葛城山の神、一言主に命じて金峯山に岩橋を架けさせた。しかるに一言主の神は容貌醜きを恥ぢて夜々作業に從事したがつひに遂げなかつたといふ故事によつしもの。

水葦の流れ絶えせぬ中川にいかで逢瀬も浪は立つらむ

恥身戀

音絶えて落つる木の葉もかれ〴〵に身をはづかしの森の秋風

等思兩人

月影をひだりみぎりに宿し分けていづれの袖やひぢ増るらむ

寄七夕戀

稀なりと年に一夜をうらむなよ獨りまろねのあればあるよに

近戀

わが中はちかの鹽釜遠けれど隔つ笆が島の名もうし

寄露戀

我が袖は苫の衣にあらねども暮るれば同じ露に浮きける

寄雨戀

憂き人はまきの板屋の夕時雨音ばかりして濡るゝ袖かな

寄關戀

見しよりもかかる思ひに逢坂の涙とゞむる關守はなし

夢路をば逢坂山の關守もえぞ止めまじ通ふこゝろを

○ちかの鹽釜　ちかは千賀の浦。ちかし、遠しにつゞけ云ふ。
○笆が島　鹽釜に近くある。

それと名をきくだに嬉し逢坂の關の清水に面影ぞ立つ

寄杜若戀

君の宿つねなくへだつ杜若移ろはぬまに見るよしもがな

寄花戀

かねてより結ぶ契りを春風に早とけそめよ花の下ひも

寄荻戀

待つ宵はそれかとたどる心よりうちも寐られぬ荻の上風

寄獸戀

いかにせむまだ手に慣れぬねこ綱の曳くにひかれぬ強き心は

寄畫戀

賴まじなあだに心をうつしゑの誠すくなき人の契りは

寄消息戀

戀の山いかで苦しき道ぞとはふみみて今ぞ思ひ知らるれ

寄火戀

田子の浦やあまの釣りする漁火の燃ゆる思ひのわれ獨りのみ

寄硯戀

○ねこ綱　猫綱。强情にて他人の言に服從せざること。

○ふみみて　踏みと文とをかく。

する石も紙よりうすく成りぬべしつれなき人に文送るとて

戀の歌の中に

雲の上の月は落ちけれ若草を結ぶ枕の露のゆかりに

心あらむ人はよままし戀の歌世の蕩子(たはれを)の根無し言葉を

ある女のもとより思へかしおもはばいかゞ思はれむおもはぬをさへおもふ心のといひおこせるかへし

君見ずや遊べる魚のたのしみを知るべき草の人にとへかし

相知れる女の中絶えてのち又消息しけるを

思ひきや流れ絶えにし水莖のふたゝび袖をぬらすべしとは

春の夜の夢の浮橋中絶えてまたふみ見てや戀ひわたるべき

戀の歌の中に

幾千しほ思ひ染めぬるもみぢ葉のこがるゝ色を人に見せばや

としをへていかにやとはむ常陸帶のかごとばかりに結ぶ契りを

八月十五夜ともに月を見むとあらかじめ誓ひものせしかどもさはる事ありて來まさねば獨り居りて

是れもまた心づくしのくまなれや名にあふ月を君としみねば

○常陸帶　古昔常陸國鹿島の神祭に男女布の帶に我が想ふ人の名を記して神前に供へ社人の結び合はせて頒つさまによつて婚を卜定したといふ故事。「東路の路のはてなる常陸帶かごとばかりもあひ見てしがな」(六帖、五)。

○袖のひまなき　袖に涙の乾くまがない。
○もろごひ　相互に戀ふること。
○花色衣　露草で染めた衣。
○ちかの鹽釜　ちかの浦にある故いふ。

久しくありて月日へにける折から消息の返しするついでにいひやりける

音にきき目には見えずも程ふるはいかなる先の隔てなるらむ

けふ〳〵と思ふまもなく程ふりて早長月になりにけるかな

或人の許より獨りして思ふは袖のひまなきと思ひおこせよもろごひにせむとありかへし

思ひやらむ方こそなけれ君があたり離れしものをわれが心は

よばひわたりける女の月のさはりなりければ戯れに讀みて遣はしける

龍田山ふもとの里は木がくれて紅葉も月のさはりなりけり

なれつどひし人の遠ざかり侍りけるころ讀みて送りける

秋霧にたちへだたれて物ぞ思ふひとり入間の里の夕暮

思ふどち連ねし袖を立ちへだつ雲居のかりの便りばかりに

相慣れし人の遠ざかり侍りけるころ讀みて送りける

いかにせむ思ひそめにし若草の花色衣たちへだてつゝ

人めをつゝむ戀路のならひは君が在所そことは知れどえあらで侍りければよめる

わがつまを立ちへだてぬる夕煙けぶりにくゆるちかの鹽釜

月の夜ひとり伏して

君なくて誰にかはさむ手枕を月とともに寢の袖の露けさ

ともに見し月やあらぬか獨寢の枕をわたる影ぞ物憂き

夢に人を見侍りければ

おもひ寐の枕わびしき逢瀨川渡しもはてぬ夢の浮橋

寢屋のつま戶を風の叩くを聞きて

獨寢の閨のつま戶をたゝくとて起き出でみれば荻の上風

始めて物申しける人の其の後は久しく仲絶えにしを

竹ならばわりても見せむみさをもて變らぬ色は一夜なれども

待つ人のこざりければ

君來むと待つにつれなき夕時雨濡るゝ袂の乾く閒もなし

或人の許より玉の緒をかりそめながらよりかけてながらへて今結びしものを半天に物思ふ身のおのづから霞もともに立たぬ日はなしと讀みておこせたるかへし

下紐を玉の緒ばかり結べれど解かじとぞ思ふ君ならずして

半天(なかぞら)に立つや霞をへだてにてけふにも花の見らく少なき

○半天　中空。

○年月の涙にきほふ時雨　長い年月の間人を戀ふる涙。

春の夜物言ふまもなく明けはて侍りし時よめる

手枕をかはすもまだき春の夜の明くる侘しき東雲の空

物しける女のもとへ讀みてつかはしける

露の身のいつかけそめて若草を心靜かに結ぶよもがな

或女螢をつゝみておくりたる

我もまたおなじ思ひに燃ゆる身のこがれはつべき胸の螢火

ある女の許へよみてつかはしける

色かはる秋の紅葉のいかなれやつれなき松はときはかきはに

經年待戀

年月の涙にきほふ時雨にもかはらぬ色の松ぞつれなき

もの申しける女の方よりなどてかく浮名は四方に流しつゝなげけど更に甲斐なかりける、これがかへし

よしやよし浮名は水に流しても遂に逢瀬はありてふものを

物申しける女の心ちわづらはしきを知らずして日を過ぎにければそこより讀みて送りにける露と共に消えも果つべき此のごろを憂くもつらくも問はぬ君かなかきくもりそことしわかぬ夕闇に行くへも見えず伏す我が

身かな、この返し

それとだにうくもつらくも告げやらで今は我が身ぞ恨みられぬる

けふわづかふみ見てしるき丸木橋うくやつらくや恨みわたらむ

聞きしよりそこともわかぬ夕闇に迷ひにきとは君知らめやも

或女の許より誰が袖といふ香袋を送るとてたゞいつかちぎりは深くこめつれど洩れてや餘所に匂ふ袖の香、返し

もろともに花の袖がきかきこめぬ香には洩るとも色に出でめや

或女のもとよりいさゝめに見染めし色のちしほにてこがれきにける戀衣かなと讀みて送りし返し

知らざりきかへす恨みの戀衣重ねて物を思ふべしとは

或人の許よりあづさ弓もとの心に引きかへて夜な〳〵今は人ぞ戀しき、

返し

とことはに思ふはいづら白浪のよるは磯べの名にや立つらむ

しばらく旅立ち侍りしころ或女のもとへよみて遣はしける

道芝の露と消えぬとききしかば憂き身のなどか時を待つべき

君ならでまた立ち返り唐衣きて見る人はあらじとぞ思ふ

○ふみ　踏みと文とをかく。

○いさゝめ　假初。

○唐衣　著の枕詞。

○君やらで　誤りがあらう。

○いつまで草　きづた(常春藤)の異名。

○つくみ　附く身。鳥の名のつぐみ。

おなじ人によみて遣りける

わが戀はよそには洩れじ水底の深き心を君知らめやも

遠ざかりゐる人の許へ讀みてつかはしける

忘れむとおもひ寐覺のうつゝにも夢にも君の見ゆるものかは

題しらず

思ひかね胸に燒く火の燃えなくば涙は袖にこぼるべらなる

睦月のころ相知れる女の許より消息に添へて梅の花を贈るとて咲く梅の花の色香は昔にて移りかはれる今の世の中、返し

世の中はうつりかはると梅の花昔の春をさやは忘るな

ある女の許へ文遣はしけるに彼より讀みておこせる道芝の露の浮身の君やらで世にながらへて文を見るかな、返し

道芝のいつまで草のいつまでも露のちぎりを又や結ばむ

衣を人に贈るとて

唐衣いつか重ねて諸ともにつもる恨みを語りかはさむ

つぐみといふものに色々の花を折りまぜて人の許へやるとて

花に染めし心の道をうすく濃く思ひつくみのやるかたぞなき

香を送りける人のもとへ讀みてつかはす

もろともにかさねし夜半のから衣うつり香さへも懐かしきかな

つれなかりし女の打ちとけ侍りける時

悲しさを思ひあはせて比ぶれば嬉しきことは物の數かは

ある女よめる恨めしや逢瀨の浪のあらはれて末の松山こすかとぞ見る君こそは思ひわすれめ誓ひてし我が言の葉はかはらざらまし、返し

市の中に虎ありといふは世の人のさがなきにやあらむえならぬ春の花もしばし霞に埋もれ隈なき秋の月も忽ち雲にかくるゝを色も光も無きといはば月と花との罪にはあらじ大ぬさの引くては風にまかせてむとぞ思ふ

白雲のいさよふ末の松山をあだにや浪のこゆといふなる

我が袖はしのぶにたへぬ露の間も忘れぐさとや人の見るらむ

波の騷ぎの音絶えにし後は汐干に見ゆる海藻(め)ばかり刈りほす海女の捨小船水馴棹さすがに近き程なれどへだつるふしのよるべなければ

月の中の桂のごとき人ゆゑにうはの空にも物おもふかな

近　戀

○市の中に虎あり　無實の事も言ふ人多ければ終に信ずるに至るをいふ。戰國策に出づ。

○大ぬさの引くて　祓へ畢ると諸人大串につけた幣帛を引きよせて撫づるものだといふ。「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(古今一四、戀四)

○黒髮山　下野國男體山の異名。

○月やあらぬ云々　「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」（伊勢物語古今一五、戀五）

みちのくのちかの鹽釜近けれどへだつまがきの島の名もうし

其のころ一日二日がをちは世の中いかゞならむと伏猪の牀いをやすくもせずとあるうちにもいにし師走の始めのころかとよみけしき給ひし玉の緒のながき別れとなりもやせめと思ひたゆたふにもいとゞ心細うなりもて行くをふと消息に添へて梅の花一ひらいと美しき和歌ぐしたりさながらおふのうらなし花咲く心地して見るもまばゆしさても下野や黒髮山のすそを切るかたみと覺しくて文の奥に卷き添へたまふをふと見るより胸つぶれやるかたなさに返しするとてつき〲しからぬことなむし給ふものかなとあら〲しく言ひ遣はしけるを思へば〱忘れがたかりきぞや元よりやつがれが關の東あづまの果てに生ひたちて鄙びたるをもけぢめ見せ給はぬ情の色深く染めし心をいかゞはせむと

澄むもまた濁るもおなじ水底の深き淺きは月にまかせて

まがふすぢなき黒髮の末長くかけてぞ頼む人の心を

移りゆく氣配も物事に悲しき事つきず二月九日にもなりぬ去年のけふ思ひ出づめれば月やあらぬ春やむかしといはまほしくて

馴れ染めしその日は今日に流れ來ていかに逢瀬のよどむなるらむ

いみじう月のあかき夜蔀二開三開明けさせて一人伏せりをれば隈なくさし入る影を眺めて

君ならでかざしとぞ思ふ我が袖にうたてや月のかげに入りくる

或女の許より深く知れ思ふ心はしのぶ山忍ぶと人のみるよしもがな奥津なみよるのみなれて歸るさをみるめありとや君思ふらむ、かへし

さなきだに亂るゝものを忍山しのぶと告ぐる人の情に

まことなきみるめばかりは世をうみの浪の濡れ衣きると答へよ

ある方より幾千しほ袖はなみだのいろに出づ胸は思ひにこがすなりけり

返し

愚かなる袖は涙の色に出づもらさじものを朽ちはつるとも

ある人のよめる思へども別れになれば言の葉の殘るばかりに涙のみしてかへし

言の葉の殘る恨みの袖よりもたへぬ涙にひぢまさりぬる

相知れる人のわれを夢に見侍りけるとて讀みて送り侍りける夢のうちに逢ふと見しよの徒らにさむる枕の起きうかりける、かへし

夢の中に逢ふは物かはをちに思ふわれがまどろむひましなければ

ある人に答ふ

君があたりいくよしもがないかにしてとばかりありて末はなし誠に御言の葉の鴈にやさしきことよなう有り難きまでに見はやされていとやんごとなしむかし彼のまめ男伊勢國へ鴈の使に行きける時ついまつの墨して書きつけしことまでふと思ひ出でられぬ、ついまつのすみしてすゑをつぐべきざえも侍らねども默してやむべきにあらずとて

つもること葉をいひかはさまし

雑歌

虹

一通り雨の晴れ行く跡よりも夕日のわたす虹のかけ橋

夜雨

このねぬる夜の間の雨の名殘とて板屋の軒にそゝぐ雫か

富士山

立ちならぶ山こそなけれ日本の内に餘れるふじの高嶺は

見るたびにまた珍らしきふじのねは面變りする心地こそすれ

〇鴈の使　おとづれ。前漢の蘇武匈奴に囚はれし時、鴈の足に附けて音信を漢に通じたといふ故事。

〇ついまつの墨云々　伊勢物語に齋宮が杯に上の句を書きて出せるを、業平ついまつの炭にて下の句を書き續けたる故事。ついまつは續松、たいまつに同じ。上の句に下の句をつぎ合はす。

〇つもることゝ葉を　寫本には此の歌の上の句がない。

水草隔船

難波潟あしま漕ぐてふあま小船よするや棹の音ばかりして

別

世の中の憂きは別れの旅ならめ行くも止るも末し知らねば

中山備前守入道道軒常陸國へ行き侍りけるに馬のはなむけするとて

武藏野の草のゆかりを忘れずばはや立ちかへれ咲く花のころ

春正法橋都へかへり行くを送る

忘れずば又も來てとへむさしあぶみさすがにかけて頼む心を

別れ路の袖は涙にかきくれぬさらでも濡るゝ五月雨のころ

別れてはまた逢ふことも白雲のへだつ恨みをいつかはるけむ

旅立ちける人の許へよみてつかはしける

かへりこむといなばの山の嶺に生ふる松の言葉の契りたがふなゆめ

羽林爲景朝臣みやこに歸り給ふを送る

此のごろはしばしうとかる夕暮の雲をけふよりまたや望まむ

ある人の父母心づくしに赴き侍るにとゞまれる娘の許へ讀みてつかはしける

○草のゆかり　一つの關係より情愛の他に及ぼすこと。紫のゆかり。

○むさしあぶみ　古、武藏國より製出したる鐙。歌にさすがにかけて詠む。

○羽林　近衞府の唐名。羽林家は公卿の家柄侍從より近衞府の中少將になって大中納言參議となるを得る家柄。

別れても又逢坂のなにし負へど今日の涙はせきやとゞめぬ

旅行

故郷をおもひ立ちぬる麻衣つらき旅にし逢坂の里

羇中山

行き〳〵て岑こすほどは山もなしたゞ一むらの雲の通ひ路

君田といふ山の中通りける時

遠近の山また山も目のかぎりあかぬ眺めにつきぬ言の葉

○目のかぎり云々　眺望絶佳で、見渡す限り賞讃の言葉が盡きぬほどである。

雨中竹

雨そゝぐ夕の風に呉竹のそよぐ末葉もしづ心なき

寐覺聞松風

夢うつゝ朧げならぬ松の戸のしぐるゝ方に殘る月影

秋の頃櫻花の咲きければ

いかでその春におくれて櫻ばな秋の紅葉の色にならひて

柳下鷺

青柳の木ずゑの下の白鷺は降り積りたる雪とこそ見れ

眺望

見わたせば雲居に續く夕煙からより浦の八重の鹽釜

山家鳥

軒ちかく友よぶ鳩のおとづれにはなれもや寂し冬の山里

山居月

世をいとふ松の扉の木隱れに月さへ今はうとくなりゆく

述懷

何事も思ふにさはる世の中は月のうき雲花の春風

いつの年いつの月日の其の時か終にわが世の限りなるべき

まゝならぬ世の習ひとは知りながら猶恨めしき我が身なりけり

水の泡の消ゆるもあだし水馴棹のさす手ひく手に物ぞ悲しき

老いぬればいつも旅立つ心地してそれとなけれど忙がしきかな

秋述懷

秋はなほ晴れぬ思ひにかきくれて袖より注ぐ夕暮の雨

閑居述懷

殘し置く文より外の友もなし昔を語る人しなければ

老後述懷

○いつも旅立つ心地　たえず黃泉に旅立つ心持。

○殘し置く文　古人の書き殘してあつた文。古書。

ながらへて齢ふけゐの浦浪の水はらむまで年ぞよりくる

或人世を侘びあへる頃よみておくる時に八月中の五日になむありける

みてば虧くかくれば盈つる習ひぞと月に憂世のことを知るとや

雨中懷舊

春雨の降りし昔の戀しさに心も空も打ちしめりつゝ

逐日懷舊

むかし思ふあはれもさぞな有明の月に日に添ふうき世なるべく

隱者の壁に書きつけ侍りし

世をいとふ憂き身のはては我も人も變らざりけり木隱れの里

たかをといふ遊女を繪にかけるを見て

名に高きたかをの山の下紅葉こがるゝ色を君は知らずや

遊　女

たのまれずよごろの風のそよさらに彼方此方になびくをすゝき

上陽人

むさしとてちりも拂はぬ牀の上に深き涙の袖やくちなむ

招きによりて惠明院の許へゆきける時

○ふけゐ　吹上濱ともいふ。駿河國庵原郡蒲原町以東富士川口に至る海濱。

○よごろの風　數夜この方吹く風

○そよさらに　風の吹くさま。

沖津風いそべの松に音そへて何れを浪とききやわくべき

立つ浪もへだてぬなかの友千鳥間なくしばなく聲かはすなり

中山備前守亭にて卽興

なか／＼にいへばさらなりよつの時をりにふれたる宿の眺めは

內藤左京亮義概朝臣江戶より岩城へ歸り侍る道すがら村松山日高寺の別當龍藏院に一宿し侍りしとき牀上に飾り置きし盆石を見て知らざりき遠き境の海山も手にとる石の上に見むとはと書きつけ侍りしをあるじの僧のちに予に見せ侍りしかば

知らざりき遠き境の言の葉も手に取る文の上に見むとは

梅をさながら似せたる作り花を見て

春の色をそのまゝ見せて夏秋ももてはやさるゝ梅の作り枝

春の頃ある精舍に行きけるに雨の降りければ

法の華ひもときいだす春雨の惠みにもれぬ野邊の草木も

都に住みける友の許へ讀みてつかはしける

終夜おもひあかして月にとふ雲居もおなじ眺めなりやと

予のはらからはじめて歌よみければ

○中山備前守　中山道軒。中山家は水戶藩の附家老。
○よつの時　寫本まつの時とあつたが、誤りならむ。改む。

○精舍　寺。

いともよししもつ枝さへ言の葉の花も難波の春にあふべく

萬葉集の註釋をおもひ立ちける時

あをによし奈良の都はあれにしをまたや榮えむ萬ことの葉

内藤左京亮義概朝臣に明月記を貸し侍りければあきらけき月の光をみつしほの波路まよはぬ和歌のうら人と讀みておこせし返し

あきらけき月の光を君こゝにをしへとなせる和歌の浦人

雨の後庭の梢に露の置きけるを見て

雲の衣絲にはつれて降る雨の晴るゝ跡より結ぶ白露

堂上の人々とぶらひ來られし時

露ふかき草の戸ざしのそれながら今日のはえある月の宮人

われむじちの難にあひけるころ或人歌よみて送るわれもまた安達が原の鬼なれと　下ノ句闕　うき雲のしばしは光おほふともつひには晴るゝ月の影かな、返し

鬼こもる安達が原は名のみして物言ひさがなき世の人やこれ

世の中は晴れみ晴れずみ行く月の定めなきこそ命なりけれ

ある人歌の題どもあまた書きて之れに言葉がきせよともとめければ書き

○萬葉集の註釋云々　下河邊長流に命じ、後、釋契冲長流に代りてこれに當る。萬葉代匠記卽ち之れなり。

○はつる　ほぐる。

○むじちの難　無實の災難。

てつかはすとて奥に

強ひてまた否みがたさにはづかしの森の言の葉書に集むる

或所に賤の男の子あまた集まり酒呑み食ひて歌などしどろもどろにうたふいとをこがましくにげなし

賤の男の酒しくらへば腹ふくれ胸うちたゝき歌うたふなり

ある人消息するついでにいかにせむ心の月は淸けれどかゝるくまにぞ迷ひぬるかな、返し

月よ月罪にはあらじ雨に風に晴れみ晴れずみさもあらばあれ

竹の子を人の親の方へ送るとて

思ひ出づ親のためとや竹の子の雪かきわけし古の人

白さゝげといふことを句のかみに置きて

柴舟やろかいもすてつ棹もなし更にたゆたふけしきなりけり

或人に昆布を送るとて

忘るなよやがてさねこむふる里に昔がたりの月の友どち

冷泉爲景朝臣の詩を和して

おもふそのくしの敎への跡とめて我も過ぎうき古の庭

○さねこむ　眞實に來よう。
○冷泉爲景　藤原惺窩の子、入りて冷泉家を繼ぐ。
○くし　孔子。

○中院前亞相通茂　權大納言通純の子。內大臣に至り、和歌に名あり。

○むろのやしま　室八島。下野國下都賀郡國府村附近。東國名所の一。

中院前亞相通茂卿の許へ都鳥を送りしかばおもひきや沈む水屑を都鳥心にかけて言問はむとはとありし、かへし

みやこ鳥しばし浪間に沈むともやがて雲居にたちやかへらむ

扇に下野の花かきたるを

この花の名にこそたてれ下野のむろのやしまの煙ならねど

冬の夜より會ひて物語するついでに春の花の頃とぶらひ來むといひける人に答ふ

花のころと契るもはかな世の中のまたくる春と頼まれぬ身を

ある人問ひきて月のいつかごろ歸らむといひ侍りければ

きのふまで待たれし月の今宵しも山の端出づる影の恨めし

神山氏それがし花のころとたのめしに訪はず侍りければ

日本に跡をたれます神山のめぐみもいまは絶えはてにけり

つくり庭を見て

松影に石をたゝみてえもいはぬ匠にあまる庭の山水

夏木立わざとならねど茂りあひてさながら爰も深山邊の里

池水にひれふる魚の數見えて淸き心は住む人や知る

明暦三年正月中の八日九日火出できて風に吹かれゆく程に郭内にありとある上中下の甍ども悉く焼けうせぬ我も煙のうちを逃れたどり行くまゝに神田といふところの別墅に日を送る同二十七日あした雪のいみじうふりければ

世はなべて皆白雪のふることを思へば〱いとゞこひしき

ほどへて後小石川の邸作り出でて秦姫の方へつかはしける

待ちつけてやがてあふひの玉かづらかけて嬉しき心地こそすれ

無常

山のはに月の入りぬる跡みれば誰もこの世に住むは恥かし

題知らず

いつの年のいつの月日のその時か終に我が世の限りなるべき

物思ふころ

世にすめば猶もうけくのみなれ棹さす手ひく手に物ぞ悲しき

からすの啼くを聞きて

終夜やもめがらすの聲きけばわが身ひとつに物ぞ悲しき

法光院のみまかりしころ年頃飼ひ侍りし鴛鴦の一つは何地いにけむ唯一

○明暦　後西院天皇の年號。

○うけく　憂く。物うきこと。

○後西院の帝　光圀信任を辱うした。

○綠のほら　霞の洞。太上天皇の御所。

○有馬玄蕃頭　藤原賴利、光圀の兄賴重の女壻。

つ水に浮べるを見て

池水につがはぬ鴛鴦の心をば今ぞわが身の上に知りぬる

題しらず

今はよも思ふべしとも思ほえず賴まれぬものを人の心の

玉の緒よ結びもとめぬ白露の草の野上の人の行くゑ

相知れる人のみまかりて後かの庭の梅を見て

もてはやす人の昔に成りぬれど春は忘れぬ梅のひともと

後西院の帝かくれさせ給ひけるとき

春雨の綠のほらの内外までそゝぎ餘れる我が涙かな

立ちのぼる霞あとなき雲の上何をか殘るかたみとやみむ

弟におくれける時殘るかたみを見て

涙には思はぬ袖ぞあれにける見るべき人の見する形見に

有馬玄蕃頭みまかりし時

ありま山いなの篠原おく露の風にあとなき人ぞ悲しき

われとおなじ一めぐりの忌にあたりける人のもとへ讀みてつかはしける

我もまたともにぞ絞る去年のけふおなじ涙のかゝる袂を

年ははやこゆるぎの磯のいそがねど涙は袖に絶えぬ日ぞなき

ある人の女みまかりにければ讀みて送りにける

中々に言の葉もなし今はたゞ悲しくといふばかりとて

子におくれ侍りける人の許へ或人歌よみて送りにけるを見て

思ひきや和歌の浦浪よせかへりふたゝび袖をぬらすべしとは

亡き人の忘れ形見のみどり子を見るにも濡るゝ袖の上かな

やがて歸りこむと言ひて立ちわかれし人の程なくみまかりにければ

知らざりきこむといひてし稻葉山松をしるしの塚に見むとは

朝倉のなにがしみまかりて後書き置ける稿草なりとて人の見せ侍りければ

藻鹽草かきおく和歌のうら浪にみる目もぬるゝ人のあはれは

哀傷の心を

誰とてもとまるべきにはあらねども我に先立つ人ぞ悲しき

或人の七回忌に

かぞふれば七輪車のひとめぐり囘るも早し年の日數は

中山の何がし子におくれける時讀みてつかはしける

○こゆるぎの磯　相模國酒匂川より大磯までの磯邊。「こゆるぎ」は、年の「超ゆる」にかけてあり、「こゆるぎの磯の」は、下の「いそがねど」の序。

○知らざりきの歌　古今離別「立ちわかれいなばの山の嶺に生ふるまつとし聞かば今歸りこむ」によつたもの。

○稻葉山　因幡國岩美郡、今鳥取市の東一里宇倍神社の北嶺。

なぐさめむ言の葉もなしあはれその子を先立てし跡の歎きは

ある人の形見のうつはものを見て

殘し置くかたみの浦のうつせ貝かひも浪間にぬるゝ袖かな

冷泉爲景朝臣みまかりて書きおける歌を見て

藻鹽草かきおく和歌の浦浪を幾たび袖にかけてしぼるか

法橋立庵妻におくれし頃ちぎりおく言の葉ならぬことの葉もわすれ形見に袖ぞしをるゝといふを聞きて

契り置くことの葉ならぬ言の葉を聞くにつけても袖ぞしをるゝ

先考先妣の御墓へ詣り香焚き花を手向けなどして在りし世の事ども思ひ出でしのびざるあまり口にまかせかく書き付く

わくらばにとふ人もなき山の奥にひとりも君を捨てて行くかな

ありし世の面影ならで古塚にしるしの石を見るぞかなしき

母亡くなりて後そのうなゐ子を見てかの母なりける人のもとへ讀みてつかはしける

人の親の殘るなま子を見るたびにまた其の時の心地やはする

いかにせむわすれ形見のうら浪によその見る目もぬるゝ袖かな

○かたみの浦　紀伊國紀淡海峽に面したる加太の浦。
○うつせ貝　肉なき介殼。
○冷泉爲景　藤原惺窩の子、後水尾天皇勅して冷泉家を繼がしめられた。

○しるしの石　墓碑。

姉君なりける人將軍家の養女となりて加賀少將光利朝臣に嫁し給ひける後みまかりにければ

ことわりに過ぎてぞぬるゝ藤衣われもゆかりの色にもれねば

瑞龍山に詣でしついで長壽院の墓の前にて

思ひきや今一度とたのめしも空しき塚になして見むとは

弟のみまかりて後住みあらしたる宿に來て見れば折節花の散りてければ

亡き人の花や形見に移り香を薄くもとめぬ春風ぞ吹く

臘月四日の夜酒井周防守につかはしけるその妻は予が妹なりしがわづらひて俄にみまかりにければ

北南おくれ先きだつ梅が枝の花や形見にのこる移り香

同じき七日蜴泰通相次いでみまかりぬ

はたとせにあまる三とせを春の夜の夢も見はてぬ人ぞ悲しき

二月十五日涅槃會

假初にねにかへるとも如月の春は忘れぬ法の花かな

如露亦如電

世の中は風にみだるゝ草の葉の露にうつろふ稻妻の影

○瑞龍山　太田町の北一里譽田村にあり、水戸家累代の葬所。

○酒井周防守　忠經、光圀の妹壻。

○涅槃會　陰暦二月十五日卽ち釋迦の入滅を追悼する法會。

〇一乘法　如來の敎法。多く法華經の敎法にいふ。乘は車乘。衆生を運載して彼岸に達せしむる意。

〇扉落月挑常住燈　薹破霧燒二不斷香一、扉落月挑二常住燈一。

〇千里まで云々「北冥有レ魚、其名爲レ鯤。鯤之大、不レ知二其幾千里一也。化而爲レ鳥。其名爲レ鵬。鵬之背、不レ知二其幾千里一也。」(莊子)

〇はぶき　はゞたき。

藥草喩品

しなじなに草萌えわたる春の野に雨はもらさで注ぎぬれども

唯有一乘法無二亦無三

露にうつる影は草葉に多けれど月は一つの光をぞ見る

勸學

雪をつみ螢あつめし窗の前は思ひぞ出づる古の人

明明德

曇りなき月立ちかくす浮雲も敎への風や吹き拂ふらむ

題しらず

春はうし秋はまぎるゝ風の名も月と湊の心づくしに

扉落月挑常住燈

いにしへは誰か住みけむ杉の戸のおちいる月や常の燈

北

千里まで羽うちはぶき飛ぶ鳥の南をはかるもとの海面

天の原ふりさけ見れば遠方や樞(かなめ)の星のはかり知られず

四方拜

すべらぎの星をとなふる久かたの霞に春の色は見えけり

夢想の歌の文字をかぶりに置きて人々歌よみはべりける時たの字を取りて

たちわたる霞は己が衣にてきるる鶯おりはへて啼く

にの字

濁りなき神の心をみもすその河の流れの澄むに任せて

との字

ときはなるみどりの髮も冬くれば雪をいたゞく岑の松が枝

りの字にて二首

龍門の瀧の白絲くりためて結ぶも涼し風の引く手に

りちの音もしらべあはせて絲竹のひゞきに通ふ庭の松風

元祿庚午の歲中納言に任じ侍りけるとき

位山のぼるもくるし老の身は麓の里ぞ住みよかりける

同じ頃中院亞相通茂卿の許よりまちえたる惠みの露や紫の色濃き袖にさぞあまるらむとよみて送られし返し

むさし野の草のゆかりや紫の色より深き人の言葉

○りちの音　音律。

○元祿庚午の云々　光圀の隱居聽許の後中納言に任ず。

○中院通茂　權大納言通純の子、和歌に名あり、光圀の親友。

ある人のびんそぎし侍りしに

ぬば玉の黒かみ山にふる雪のつもれる年を君にかぞへむ

はらからの元服し侍りける時

玉の緒の長きためしに萬代を初もとゆひに結びこめつゝ

性善院日體禪尼八十の賀に

つきせじな千代に千代そふ春の日の長々しくもふる齡かな

中山道軒六十の賀に

松高き吉備の中山なか〳〵に千とせのみかは萬代までに

中山隱岐守七十賀に

かぎらじな稀なる年におふの浦眞砂の數はよみつくすとも

いく世へむ君がよはひは七十の年の日數を年にかぞへて

萬代も限らじものを七十に餘るよはひは君にかぞへむ

寄松祝

君にひかれ老木の松の色も香もときめく御代や萬代の春

寄竹祝

千歲ふる松のよはひを我が君の行くへ久しきためしとやみむ

○びんそぎ　鬢を少しそぐこと。

○おふの浦　下總國今の我孫子の邊。古來不易の津驛にあたり南北必由の要衝であつた。

光そふ國のめぐみは若竹の幾久しくと君を仰がむ

常山詠草卷之上ノ一　終

常山詠草卷之上ノ二

春歌

年内立春

梓弓はなのこなたに年越えてはや立ちなるゝ朝霞かな

立春

春もけふ立田の山は紅の霞にこもる秋のもみぢ葉

初春霞

山はみな春めきながら冱えかへり猶白妙に雪ぞ降りける

春水

冰りゐし池の心も春くれば風のまに〱解けてのどけき

霞

花鳥の色香もあれどおしなべて霞むや春のしるしなるらむ

山霞

あし曳の山はちとせの名もしるく幾世の春や霞こむらむ

海上霞

行く舟の跡こそみえね春がすみたつ白波の音ばかりして

湖上霞

音ばかりよするや鳰の浦浪も霞にこもるあけぼのの空

夜鶯

軒ちかく來ゐる鶯おのづから馴れてやおのが聲をもしまぬ

柵町の亭はそのかみ三木某が住みし所なりしが我ゆゑありてこゝにて生まれ侍りぬ年へて後たま〳〵こゝに來れるに折ふし庭の梅さかりなるをかれが氏族どもさゝえやらの物もてきて興じあへるついで歌よみ侍りけるにむくい侍る

朽ち殘る老木の梅も此の宿の春にふたゝび逢ふぞ嬉しき

伊藤友嵩が別墅の桃花を見て

暮れかゝる夕日の空も紅の霞やこもる桃の花ぞの

法華道場にて春夜月といふ心を

つゝみ餘る衣の玉と人やみむ霞を分くる春の夜の月

二月のころ月のあかかりけるを見て

○軒ちかく來ゐる　一本、軒ちかくきぬるとある。

○柵町　水戸驛のあたり。

○我ゆゑありて云々　光圀妾腹の出なりしを以てこゝに生まる。

○さゝえ　小筒。酒などを入れる竹筒。

○法華道場　光圀は法華經信者。

山風に霞も雲も吹き晴れて空にさやけき春の夜の月

潮來と云ふ所にて舟中春雨といふ心を

夕汐もさすや小舟のみなれ棹しづくにまがふ浦の春雨

歸雁

此のゆふべかへる雁がね琴の音の絶えぬ恨みも他所に聞くらむ

水戸城内の花見にまかりてよめる歌の中に

老いらくの身につむ年は忘られて花待ちえたる春ぞ嬉しき

檀那院僧正嵒山下總守などとぶらひ來たりし時翫花といふ心を

けふはいざ花にあるじをゆづり置きて我もまとゐの數にいらなむ

櫻花を手折りて送りける人の許へ

春の色は此の一枝にこもりくの泊瀬の山の花のおもかげ

蓮華寺の日乘上人江戸へゆきける留守の程にかの寺の花を見侍りて

咲き匂ふ花や恨みむ此の寺のあるじは餘所の春にくらして

華留人

花はねに歸るさまよふ道もなし家路忘るゝ春のもろ人

落花似雪

○潮來　常陸國潮來町。霞浦と北浦との間の一水流に添うた町。

○こもりくの　初瀬の枕詞。

ゆく道もまがふばかりに散る花を駒の進まぬ雪かとぞみる

駒込の山荘の花のさかりなる比人の訪らひけるに

尋ね來る人目稀なる山ずみも花ゆゑにこそけふはとはるれ

日野弘資卿中院通茂卿關東下向のついで園の花みむとてとぶらひけるに

つとめて送り侍る

年にまれの人を待ちえて咲く花はけふ一入の色や添ふらむ

磐舟よりかへりくる道のほとりに花の心地よげに咲けるをみて其のあたりの人々呼び集め酒のみなどして暮るゝまであそびて

ゆくさきを急がぬ旅の心よりけふも櫻のかげに暮しつ

きのふ終日櫻がりしけふもまた花みる人にいざなはれて

見るたびに猶も珍らしさくら花きのふに今日は面がはりして

高尾局が許の花を見て

玉の緒の長きためしの絲ざくらなほ幾春もくり返しみむ

花見にまかりし人の歸り來て花は今さかりなりといひければ

問はばやな聞くだにゆかし櫻花みるてふ人の心いかにと

花の歌の中に

○日野弘資　光慶の子、和歌に名あり。

○磐舟　今、水戸の東南、海近き礒濱町。

白雲の八重たつ山の隠れ家も花咲くころは人にとはるゝ

春雨のふるき昔を思ひ出でてしたふに花の袖ぞしをるゝ

　ある人の許より花を送りけるに

手折りつる花にみよとや幾春も人の心の深き色香を

　春のころ松平豊後守頼路が妻の許より消息のついでに春といへばいとゞ昔ぞ忍ばるゝなれしみ園を思ひ出でつゝと申しおこせし返し

もろ共に馴れし園生の櫻花われもむかしの春をこそ思へ

　大炊頭頼雄の許より庭のさくらに添へておくり侍りける歌の返し

色深き心ことばのにほひとてけふ吹きおくる花の春風

　日周上人久昌寺の絲櫻を手折りてよみておくりける歌のかへし

法の花ひもとく庭の絲櫻ながき契りを我もむすばむ

　房子のもとより櫻の枝を折りておくり侍りけるに

あかずとよ幾重隔てし山櫻手折れる袖にみる心ちして

　石塚の金剛院へまかりけるに折ふし櫻の散るを見て

ふむは惜しふまねば行かむ道もなき古言思ふ春の山寺

　岩船御堂の前の櫻やう〳〵散りがてになりける折からかれこれ木の本に

○松平豊後守頼路　叔父頼雄の後をつぐ。

○大炊頭頼雄　松平頼雄。頼房の七男。常陸國宍戸一萬石を食む。天和元年十二月大炊頭に敍任。
○にほひさて　一本「にほひもて」

○古言　落花滿二山路一といへる心をよめる赤染衛門、「ふめば惜しふまではゆかむ方もなし心づくしの山櫻かな」(千載集二)

まとゐして酒などくみ興じけるに杯に花の散りかゝるを見て人々歌よみてむやとそゝのかしければ

散るをうしと思ひなはてそ是れもまた折にあひたる花の杯

伊藤友爵の許より牡丹を送りけるに

我がために手折るなさけのふかみ草淺くやはみむ花の色香を

山家躑躅

柴の戸を立ち出でてみれば紅に山みな染むる岩つゝじかな

島田の長德寺にて藤の花を

紫の藤波よするこの岸に舟さしとめて詠めくらさむ

岸藤

影うつる水の緣もむらさきの色に流るゝ岸の藤なみ

雨後の白藤といふ心を

春雨も空に亂れてさく藤の白波越ゆるすゑの松山

人々山荘の藤花を見に來りける時

折をえてけふ咲く藤の花かづら問ひくる人を引きやとゞめむ

○是れも　一本「老も」

○すゑの松山　陸前國の歌枕。鹽釜の西方。

○をちかへり　くりかへし。

○時鳥きかまほしさにの歌　古今夏「時鳥なが鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」によつたもの。

夏歌

初聞郭公

郭公夢かうつゝか現とも思ひわかれぬ夜半の初こゑ

郭公

山ふかく住むかひ有りて郭公きのふも今日もをちかへりなく

尋郭公

時鳥きかまほしさに立ち出でて里をあまたに尋ねてぞゆく

山家郭公

山里は嶺のこだまの響きあひて一聲ならぬ郭公かな

ほとゝぎすといふことをかくして

我がいほは鳥もまれなる山なれば程とき過ぎて鳴きわたるなり

水鶏

槇の戸をたゝく水鶏に夢覺めて明くればやがて月ぞ入りくる

蓮

池水にぬるめる蓮の花笠をきてみる人の袖や涼しき

夕立の涼しく過ぐる蓮葉に入日かゞやく露のしら玉

雨後螢

天雲のはれみ晴れずみ行く月に見えみ見えずみとぶ螢かな

夕立

雲ははや跡なく過ぎて夕立の雨よりかよふ風の涼しさ

涼しさは秋にぞかよふ夕立の晴るゝ跡よりむすぶしら露

見るが内に雲の足とき鳴神の音よりきほふ雨の涼しさ

秋歌

殘暑

風の音もまだ秋淺き草の戸は殘る暑さも一入(しほ)にして

七夕

織女のねがひの絲のくり返し幾代絶えせぬ契りなるらむ

七夕のまれに逢ふ夜の程もなく明けゆく空やかなしかるらむ

鈴蟲

秋の野の草の袂をふりはへて露のあはれを鈴蟲のなく

○天雲のはれみ晴れずみ云々　この歌二五頁に出づ。初句「雨雲」

○ねがひの絲　七月七日織女星を祭るに供する絲。

○草の袂　薄の風に靡くさまの人の招くが如くなれば、袂、招くなどいふ。古今、秋上「秋の野の草の袂か花薄ほに出でて招く袖と見ゆらむ」

まがきちかく鹿の鳴きければ

山深くのがれ入りにし我が庵はまがきを近み牡鹿鳴くなり

七月十五日の月をみて

待ち侘ぶる秋の最中の佛をまづ見せ初めて出づる月かな

九月十三夜

比べみむ月の桂も二もとの過ぎし最中の空のひかりも

九月十三夜中秋の曇りぬることを思ひ出でて

おもひきや最中の空に引きかへて限なき月を今宵みむとは

九月十三夜

名に高き月も照りそふ白菊の籬がもとの秋ぞえならぬ

同じ夜季姫君の方より幾かへり君ぞみるべき萬代も此の長月の秋に契りてと有りしかへし

萬代も限らじものと長月の秋のながめは君にかぞへむ

九月十三夜肥田政大が亭にて

かぞふれば秋の日數は限りあれどあかぬ心は長月の空

ながめやる海づら遠く雲晴れて波より出づる月のさやけさ

○九月十三夜　宇多上皇の時より此の夜の月を特に賞する習はしとなる。

○比べみむ　この歌三二頁に出づ

○君ぞみるべき　一本「君が」

○肥田政大　水戸藩の家老。

磯　月

あら磯の岩にくだけてちる月を一つになして歸る波かな

月前管絃

行く雲も立ちやとまらむ絲竹の聲すみのぼる秋の夜の月

月前草花

露むすぶ尾花が末を吹く風に冱えゆく月の影もこぼるゝ

山荘の月をみて

入るは早く出づるはおそき谷の戸や只半天(なかぞら)の月をこそみめ

夜更けて猶月のあかかりけるをみて

老の身はまたこむ秋もたのまれず只さし向ふ月をこそみめ

中院通茂卿あづまへ下りける時菊花を送り侍るに文の奥に手折りつる心もふかき色に香にかきねの露をおもひやられてとある返しに

ことの葉の心もふかき色香には露のはえなき宿の白菊

池のほとりの紅葉をみて

水底に影をうつして紅葉ばの錦をあらふ池のさゞ波

栴町の亭にて紅葉をよめる

○中院通茂　權大納言通純の子。宮内大臣に至り和歌に名あり。光圀の親友たり。

○栴町　今水戸驛のあたり。

○山々の嶺の紅葉をの歌　古今羇旅「此のたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」の脫化。

夕時雨おなじ梢をうすく濃く染めてえならぬ庭のもみぢ葉

下の宮といふ社へ詣でしに山の紅葉色づきわたるをみて

山々の嶺の紅葉をそのまゝにぬさと手向くる下のみやつこ

冬歌

山家冬

木枯の風もさびしく三日月の影かすかなる冬の山里

山落葉

聞きわかむかたこそなけれ木の葉散る草の庵の夜の時雨は

夕づく日猶色はえて筑波山このもかのもに散る紅葉かな

冰柱

かけわたす軒のつらゝの玉簾思ひもあへぬ草の扉に

雪の降りける日山野邊若狹守義淸とぶらひ來りけるに

しら雪のふりし昔の友ならで誰か問はましみ山べの里

雪の木々につもれるを見て

豐かなる年のしるしにふる雪をあだにや人の花とみるらむ

尾州光義卿狩に出で侍りぬとききて

みかりせし葛城山に鳴く鳥のをしへは今も君忘れめや

神樂

神垣の榊葉うたふ袖の上に曉ふかく霜やおきそふ

歳のはてによめる

月も日も流れてはやき年波のよどまぬ水に柵ぞなき

戀歌

經年待戀

年月の涙にきほふ時雨にもかはらぬ色の松ぞつれなき

秋戀

秋の夜のながき名に立つ手枕をかはす間もなく明くる東雲

戀の歌の中に

幾千しほ思ひ初めぬるもみぢ葉のこがるゝ色を人にみせばや

知らざりきかへす恨みの戀衣かさねて物を思ふべしとは

白雲のいさよふすゑの松山をあだにや浪の越ゆといふなる

○葛城山　大和國西境の峻嶺一帶の總稱。

○年月の歌　前にも出づ。

○すゑの松山　陸前國の歌枕。今の鹽釜の西方に當る。

雑歌

虹

一とほりむら雨はるゝ跡よりも夕日のわたす虹のかけはし

暮鳥宿林

夕まぐれ茂き林の一枝を己がとり〴〵塒あらそふ

心將流水自清淨といふ心を

ゆく河のきよき流れにおのづから心の水も通ひてぞすむ

羇中山

行き〳〵て嶺こす程は山もなし只一むらの雲の通ひ路

元祿庚午致仕し侍りて水戸にいたりまたの年五月に西山へ移るとて館の柱にかきつけける

なか〳〵に馴るゝぞつらきかりそめの宿りもけふを限りと思へば

村松と云ふ所にとまりける夜風いたう吹きて物すごかりけるに

村松の梢に浪の音そひて夜半の嵐に夢もむすばず

和久といふ所に行きて年魚などとり侍りしに月の出でけるを

○西山　光圀が晩年隱棲の地。

○和久　常陸太田町の西、今山田村の大字。

○年魚　鮎に同じ。

山のはを出でてさやけき月影にさばしる鮎の數も見えけり

山居月

世をいとふ松の扉の木がくれに月さへ今は疎くなり行く

述懷

ながらへて何にかはせむ空蟬の世のうきことを聞くにつけても

いつの年のいつの月日のその時に終に我が世の限りなるべき

閑居述懷

今はたゞ文より外の友もみず昔を語る人しなければ

懷舊

ながらへて思ひ出づるも憂しや今昔おひみし人はなき世に

かねてより世になき身とはおもへども思へばゆかし過ぎし古

月前懷舊

むかしみし人は嵐の松の戸に面影のこす秋の夜の月

紅葉村の舊館を見侍りて

昔みし草の庵の名殘とて分くる袂に露ぞこぼるゝ

堀田一之むさしの國一本櫻といふ所にまかりて昔我とともに遊びし事な

○肥田政大　水戸藩の家老。

○しき波かけて　磯の緣よりしき波といひ頻りに驅くる意。

○こせ山　大和國葛城郡と吉野郡との境。
○つら〳〵椿　枝葉の生ひ茂った椿。

どおもひ出で侍るとてよみておくれる歌の返し
ともにみし昔忘れぬ山櫻こと葉の花もにほふ春風
ある人の許より我にもの書きて與へよなどいひおこせければ書きてつかはすとて
秋風につらもみだれて行く鴈の影はづかしき筆の跡かな
霜月のころ肥田政大が許より梅花をおこせ侍るによみてつかはしける
あかずみむ霜の中より咲く梅の色も匂ひもふかき情を
伊藤友嵩が許より柿と梨とをおこせ侍る時よみてつかはしける
今はわが身を山賤（やまがつ）になしはてて憂世を餘所に結ぶ柴がき
平磯といふ所にて競馬をみて
千早振神の磯出のくらべ馬しき波かけて今日きそふなり
しろさゝげといふことを句の上に置きて
しば船やろかいもすてずさをもなし更にたゆたふけしきなりけり
百椿の圖のうちにいさはやといへる椿の名をかくして
我もいざはや行きてみむこせ山のつら〳〵椿春過ぎぬまに
風早宰相の許より松の歌望まれし時

家の風吹き傳へたる松の葉の散りうけずして萬代やへむ

旅行春雪といふ心を

旅衣猶さえかへる春風に匂はぬ花ぞ袖に散りくる

旅宿雨

さなきだに草の袂の露けきに猶ぬれ增る夕暮の雨

讃岐國より松平帶刀とぶらひ來てかへり侍る時

別れてはまた逢ふことも白雲のたなびく空をともにながめむ

ある人とぶらひ來てむさしへ歸る時

逢ふは嬉し別れはつらしよしや只あはず別れぬ身ともなりなむ

久昌寺慈敎が旅立つ時見柳思別といへる心を

あかで行く人の別れを今しばし引きもとゞめよ靑柳の絲

法光院みまかりしころ年ごろ飼ひ侍りし鴛鴦の一つはいづちにいにけむたゞ一つ水に浮びぬるを見て

池水につがはぬをしの心をば今ぞわが身の上にしりぬる

相知れる人みまかりて後かの庭の梅花をみて

もてはやす人はなき世にさすがその春は忘れぬ梅の一もと

○散りうけず　散りうせずの誤りならむ。

○法光院みまかりしころ云々　此の歌六八頁に出づ。

○相知れる人云々　此の歌に似たる歌六九頁に出づ。

○巖有公　四代將軍家綱公。
○中陰　人の死後四十九日間の稱
○肥田政大　肥田家は水戸藩の家老。
○有馬玄蕃　藤原賴利。光圀の兄賴重の女壻。
○いつまで草　きづた(常春藤)の異名。
○朴翁　安藤定爲、國學者、丹波千年山に隱居した。光圀の信任を得その二兒は水戸藩の臣籍に入る。

巖有公の十七回の御忌に昔の御事など語り出でて
つかの間も忘るべきにはあらぬ世を思ひ出づればぬるゝ袖かな

弟の中陰のうち肥田政大の許より庭の花いろ〳〵贈りける時
なき人に手向けて我もけふはみむ大方ならぬ花の情を

はらからの思ひに侍るころ月をみて
雲霧も今はうき世になき人の心の月や空にすむらむ

有馬玄蕃みまかりし時
有馬山いなのさゝはら置く露の風に跡なき人ぞかなしき

京極飛驒守三十三回忌に作禮向去といふこゝろを
あなたふと心の暗の雲晴れて月に迷はぬかへるさの道

心ちわづらひしころ庭の面をみをりて
風をいたみ亂るゝ草の露の上にしばし宿かる月のはかなさ

大聖院阿闍利わが爲に祈禱などし侍りていつまで草のいつまでもと賀し侍るに
祈るてふいつまで草の露の身は消え殘りてもあはれいつまで

朴翁が許より予が除病の祈りに壽量品壽命經など讀誦し侍るよし聞きて

松高き千とせの山の名にかけて君をぞいのるよろづ代までにと有りし返しに

山の名の千年は君にゆづり置きてよみぢ遠くも我や別れむ

久昌寺の日輝上人など集まりて深草の元政法師が辭世に鷲の山常にすむてふ嶺の月かゝりにあらはれかりにかくれてとよめる五句をわかちて歌よみ侍りし時首句をとりて

わしの山分けてえがたき道ぞとはふみみて猶も思ひ知らるゝ

月天子最第一といへる心を

天津空星のはやしのしげけれど桂一木の影は高しな

ある人のかみそぎし侍りし時

ぬば玉の黑かみ山にふる雪の積れる年を君にかぞへむ

中山遠江守八十の賀し侍る時寄菊祝と云ふこゝろを

盡きせじな君がよはひは長月の菊の白露淵となるまで

源英公の七十の賀に

かぞふれば君がよはひの高松やつらなる枝も千代に習はむ

清水宗川が八十賀し侍りし時

○久昌寺　太田町近くの日蓮宗の寺、賴房光圀二代の歸依厚し。

○深草の元政法師　山城の深草瑞光寺に住む、歌人。寛文八年歿す年四十六。

○かみそぎ　古昔小兒が髮置きの式の後、齡に應じて次第に髮を削いで行くこと。びんそぎ。ふかそぎなどがある。

○源英公　賴房の長男、光圀の兄高松藩祖。

八十島を漕ぎはなれてもはる〲と行末ながき綱手ひくらむ

竹有佳色

君が門に植ゑし千尋の呉竹や幾代かはらぬ色をみすらむ

寄松祝

浪風も吹き治まりて住吉の岸のひめ松枝もならさず

千とせふる松のよはひを我が君の行末久しき例しとやみむ

常山詠草卷之上ノ二　終

常山詠草巻之下ノ一　元祿庚午山居以後和歌

春歌

年内立春

年なみもまだ越えやらぬ松の戸を明くるかたより春ぞ立ちぬる

年の緒を去年と今年によりかけて長き日あかぬ春はきにけり

立春

春に今朝あらたまれども老いらくのかしらの雪は猶ぞふり行く

春もけふ立田の山は紅のかすみにこもる秋のもみぢば

元日

あら玉の春ともしらぬ山里に先づ告げわたる鶯の聲

年の内に春立ち侍りて元日の空長閑なりければ

年は一夜あらたまれどもさほ姫のおよずけもて行く春の色かな

こぞの夏のころ八重姫君の御輿を少將の館へいれまゐらせ秋は又方姫を細川のなにがしにあはせつかはすべきよし大樹の仰せごとありしかばこ

○元祿庚午　三年。

○老いらく　老いる。「らく」は「る」の延。

○およずけもてゆく　年の長ずるにつれて、心も貌も整ひ行く。

○八重姫君　五代將軍綱吉の女、水戸家に迎ふ。

○大樹　將軍の意。五代綱吉。

の春はわきてめでたきことにいひのゝしるを山深くすまひし身すがら人なみに祝ひをのぶるとて

待ちえたる三つの朝は萬代の春を迎ふるはじめなるらし

季姫君の方よりたまはりしかゞみもちひにむかひて

世は春にむかふ鏡もはづかしや老いてみにくき影をうつせば

年のはじめ日周師が許より予が名を隱して名にしあふ日のもとならば照るをなほあまねき光閑をもらさでとよみければ返しに師の名を隱し

あかねさす春日（はるび）周（あまね）き法の花ひもときそむる風の長閑けさ

初春露

朝霞わが日のもとに立ちそめて見ぬもろこしの春もしらるゝ

早春露

から錦春の霞や立田山秋のもみぢの色にならひて

丹州千年山の隱士安藤朴翁が夢想の歌のあつ字をかしらにおきて山霞といへるこゝろを

足引の山は千とせの名もしるく幾世の春や霞こむらむ

橋邊霞

○人なみに　水戸藩上下舉りて喜ぶ。獨り光圀感ずるところあり喜色なかりしをいふ。人なみにの言味ふべし。

○もちひ　餅。

○安藤朴翁　名は定爲、丹波千年山に隱居した。國學者。元祿十五年歿年七十六。光圀の信任を得その二兒は水戸藩の臣籍に入る。その一人は卽ち年山である。

にほの海や夕浪かけてはる〴〵と霞わたれるせたの長橋
いは橋のとだえも見えず葛城や岑にも尾にも霞わたりて

鶯萬春友

くれ竹の窓に友なふうぐひすや幾代の春を契りそむらむ

久昌寺にて毎年見櫻といふ心を

忘れずもまた幾春やとめこなむ花をまとゐの主とはして

梅漸薫

吹く風もや丶かをるなるあら玉の春日のどけきまどの梅が枝

籬落梅

夕まぐれ色はあやなくかすめども香をば隔てぬ梅の花がき

古寺梅

折り殘る梅も幾世をふる寺の花にむかしの物がたりせむ

久昌寺の梅花見にまかりける時日周年ごとに君見はやせる梅なれば花の色香もつねにことなる、かへし

梅の花ともに見はやす嬉しさを包みやあまる墨ぞめの袖

年ごとに同じ寺の梅見侍りしに今年は盛り過ぐるまでまうでざりければ

○久昌寺　太田町近くにある日蓮宗の寺。賴房、光圀二代の歸依が厚かつた。

○柵町　今の水戸驛のあるあたり

日乘あぢきなき春や過ぐさむ梅の花色香をしれる君にみせばや、返し

かよひぢを霞へだつる梅の花あぢきなしとて我な恨みそ

湊村にて白井胤尹梅花につけける千代經べき君の御園の梅が香のふかきめぐみをあふぎてぞ見る、返し

千代經べき若枝の梅の花の香をたむけに受くる老の鶯

ある人のもとにて梅花を

所がら香こそ深けれ咲く梅の花はいづくも同じ春風

町山喜愷梅花につけける千年經と和歌のうら松百枝さへ日影に匂ふ梅の花がき、返し

春風にそれとまがはぬ梅が香を霞へだてぬ花の友がき

毛利飛驒守妻の許より梅の花にそへて送り侍る君のため手折りし庭の梅が枝に千年の春を祝ひこめつゝ、返し

我がために手折りし梅の色よりもふかくぞ染めし人のことの葉

二本松寺の紅梅の咲きけるを

ふたもとの松のみどりの色ならで紅にほふ軒の梅が香

梅の花ざかりに柵町の亭に人々をまねきて

難波津の春をうつして咲く梅の花に催すやまと言の葉

この亭はそのかみ三木某が住みし所なりしが我ゆゑありてこゝにて生まれ侍りぬ年經てのちたま〳〵こゝに來れるをりふし庭の梅盛りなるを彼が氏族かれこれさゝえやうの物もてきて祝ひ興じけるついで歌よみ侍りけるにむくい侍る

朽ち殘る老木の梅もこの宿の春に二たびあふぞ嬉しき

伊藤友嵩が別墅の桃をみて

くれかゝる夕日の空もくれなゐの霞やこもる桃の花ぞの

ものへまかりける次に中山備前守信成が別墅に立ちより侍りて桃花の咲きけるを手折りて信成が常にすむ亭に送り侍るとて

うゑ置きし人の園生のもゝの花わがものがほに手折りてぞやる

法華道場にて春夜月といふことを

つゝみあまる衣の玉と人やみむ霞を分くる春の夜の月

二月の頃月のあかかりけるをみて

山風に霞も雲も吹きはれて空にさやけき春の夜の月

潮來にて舟中の春雨を

○この亭は云々　この歌七八頁に出づ。

○伊藤友嵩が云々　この歌同じく七八頁に出づ。

○中山備前守信成　中山家は水戸藩の附家老である。

○法華道場にて云々　この歌七八頁に出づ。

○潮來にて云々　この歌七九頁に出づ。

夕汐もさすや小舟のみなれ棹しづくにまがふうらの春雨

連日春雨のふりければ

雨風のなき春もがなせめて我が命のうちの思出にせむ

歸雁

日本の月みむとてや秋はきて春は越路へ歸るかりがね

年々に水戸城内の花見にまかりてよめる歌の中に

花にあかぬ心や春の長き日もをしむに暮るゝ入相の鐘

花見にまかりて

燈をかゝげてや見むさくら花長き日くらし飽かぬまとゐに

毎年見花といふことを

年毎にきて見る宿のさくら花はなに幾代の春を契らむ

花の歌の中に

櫻咲く軒端は雪にうづもれて麓の里ににほふ春風

白雲の八重立つ山のかくれがも花さく頃は人にとはるゝ

咲きにほふ花の都はさもあらばあれわが西山の春のあけぼの

絲櫻

○命のうちの　生存中の。

○白雲の八重たつ山の云々　此の歌八一頁に出づ。

春風にみだるゝ庭の柳陰いとよりかけて花の咲くらむ

自息軒にて花契多春といふ心を

いく春も猶やきてみむさくら花あかぬこゝろを宿に契りて

櫻花を手折りておくりける人のもとへ

春の色はこの一枝にこもりくのはつ瀬の山の花のおもかげ

蓮花寺の日乘上人江戸にいきける留守の程にかの寺の花を見侍りて

咲きにほふ花や恨みむこの寺のあるじはよその春にあそびて

水戸城中の花見にまかりて

老いらくの身につむ年は忘られて花待ちえたる春ぞ嬉しき

旌櫻寺の櫻を見て

年毎に見れどもあかぬ心よりなほ珍らしき花の面影

磐舟より歸りくる道のほとり花の心地よげに咲けるを見て此のあたりの人二人三人よびあつめ酒のみなどして日のかたぶくを忘れてよめる

行くさきを急がぬ旅の心よりけふも櫻の陰にくらしつ

すみなれし昔の宿の花を見て

折り殘る我も老木の山ざくらまたこの春にあふも恥かし

○櫻花を手折りて云々　此の歌七九頁に出づ。

○蓮花寺の日乘上人云々　此の歌七九頁に出づ。五句「春にくらして」とある。

○水戸城中の花見に云々　此の歌七九頁に出づ。

○旌櫻寺　瑞龍山の近くにある。

○磐舟より歸りくる云々　此の歌八〇頁に出づ。

春の比こゝかしこまどひ歩きてわが山里の花にうとかりければ

この春はよその櫻にあくがれて我が山里のはなや恨みむ

松倉山六峯院のさくらを見て

櫻花ちりかひくもる山寺の入相のかねに春風ぞふく

小幡の花見にまかりて

春風も心して吹け散るはうし咲かぬはつらし花の木の本

又の年水戸城中の花を見て

夜とともに詠めあかさむ櫻花またくる年の春をしらねば

神崎寺の花を見て

入相のかねの音もうし山寺の庭の櫻の花やちりぬと

庭前の花を見て

もろこしの種としいはばいかならむ珍らしからぬこの花をさへ

又の年水戸城中の花見にまかりて

老の身はまた來る春も頼まれずこよひも花に詠めあかさむ

きのふ終日櫻狩しけふもまた花見る人にいざなはれて

みるたびに猶もめづらし櫻花きのふに今日は面がはりして

〇ちりかひくもる　散り亂れて暗くなる。

〇きのふ終日云々　此の歌八〇頁に出づ。

高尾の局が許の花を見て

玉の緒の長きためしのいと櫻なほ幾春もくり返しみむ

またの年おなじ家にて

幾春もとひよりて見むこの宿のあらしよ花よあかぬ心に

雨ふりける日六地藏寺の花見にまかりしに去年まうでしにも雨のふりけるをおもひ出でて

此の春も雨の絲水よりかけてくり返し見る山櫻かな

春の頃松平豐後守賴路が妻の許より消息のついでに春といへばいとゞむかしぞ忍ばるゝなれしみそのをおもひ出でつゝと申しおこせし返し

もろともに馴れし園生の櫻花我もむかしの春をこそ思へ

山寺の花を見て

庭つ鳥かけのたれ尾の長き日もながめにあかね花の古寺

またの年城のさくらを見て

思はずやうき玉の緒のながらへてまた此の春の花をみむとは

花のころこゝかしこに櫻狩して

我が宿の花や恨みむ幾としも餘所の櫻の花に暮して

○高尾の局が許の云々　此の歌八〇頁に出づ。

○あらしよ　あるじよか。

○春の頃云々　此の歌八一頁に出づ。

○見し春　去年の春まで見て來た花。

○こもりく　泊瀬の枕詞。

○大炊頭頼雄　松平頼雄。頼房の七男、光圀の弟。宍戸藩主。
○大炊頭頼雄云々　この歌八一頁に出づ。
○あるじまうけ　饗應。

花のころ大炊頭頼雄の許より見し春にかはらぬ花の色香につけても猶いにしへをしたふなどいひおこせし返りごとに

見し春に今もかはらぬ色香ぞと風につげこす花をしぞおもふ

やつむし山の花をみて

とふ人もなきやつむしの山櫻おのれ咲きてや春を知るらむ

またの春旌櫻寺の櫻に下にて

さほ姫の心や花にこもりくの泊瀬(はつせ)の山をこゝにうつして

花下勸醉

春風の匂ひ吹きまく木のもとに雪をうかぶる花のさかづき

花下即興

消え殘る雪かと見れば春の夜の月に色そふ花の一本

大炊頭頼雄のもとより庭の櫻にそへておくり侍りける歌の返し

色深き心こと葉のにほひまでけふ吹きおくる花の春風

一とせ江戸へまかりしに花のころ季姫君の方よりあるじまうけし給ひて

年月を待つかひありて君がため花も千とせの色をそへつゝとありしかば

返し

年月を待つかひ有りて今ぞみる花に色そふ君がことの葉

日周法師久昌寺のいと櫻を手折りてよみておくりける歌の返し

法の花ひもとく庭のいと櫻ながき契りを我もむすばむ

房子の許より櫻の枝を手折りておくり侍りければ

あかずとよいく重へだてし山櫻手折れる袖に見る心ちして

菅谷の延命院にて待花といふ心を

咲けかしと待つよりいとゞながき日を暮しかねたる花の木の本

軒ちかき花にむかひて

朝夕にみればこそあれ軒近き櫻をいかに人のめづらむ

旌櫻寺にて落花を

白雲をわけつゝ行けば山寺の庭にたままく花の下風

石塚の金剛院へまかりけるに折ふし櫻のちりけるを見て

ふむは惜し踏まねば行かむみちもなき古言おもふ春の山寺

岩船御堂の前の櫻やう〳〵散りがてになりける折からかれこれ木のもとにまとゐして酒などくみ興じけるに杯に花のちりかゝるを見て人々うたよみてむやとそゝのかしければ

○日周法師云々　この歌八一頁に出づ。
○久昌寺　太田町近くの日蓮宗の寺。
○房子の許より　この歌八一頁に出づ。

○旌櫻寺　瑞龍山の近くにある。

○石塚の云々　此の歌八一頁に出づ。

○岩船御堂の云々　此れに似たる歌八一頁に出づ。

〇伊藤友嵩云々　これに似た歌八二頁に出づ。

散るをうしと思ひなはてそこれもまた酌みてはあかぬ花の杯

伊藤友嵩牡丹を送りけるに

我がために手折るなさけのふかみ草色も匂ひもあさくやは見む

苗代

うちかへす小田の苗代きのふ今日まかする水に蛙なくなり

風そよぐ藤のしなひの絲たれておぼつかなくもゆらぐ玉の緒

これもまた若紫の藤衣絲のみだれの限りしられず

水邊藤

岸に生ふる藤のしなひの絲たれて過ぎゆく船を引きも止めむ

島田の長德寺にて藤の花を

紫の藤浪よするこの岸に船さしとめて眺めくらさむ

山家春

柴の戸も春の日影をまづみせて長閑にすゝめる西の山もと

春社

宮柱ふとしきたてる春がすみ紅にほふあけの玉がき

夏歌

殘花

色も香も今はめづらし櫻花この山かげに春をのこして

綠岡にて櫻の咲き殘りたるを見て

夏木立みどりにまじる遲櫻ところ〴〵に春をのこして

葉底殘紅

紅のかすみや匂ふ桃ぞのの葉わけに春の色を殘して

庭卯花

我が宿の垣ねもたわに咲きみちて庭に雪ちる風の卯の花

杜鵑

山ふかくすむかひありて杜鵑きのふも今日もをちかへり鳴く

尋杜鵑

時鳥きかまほしさに思はずもさとをあまたに尋ねてぞゆく

山家時鳥

山里は峯のこだまのひゞきあひて一聲ならぬほとゝぎすかな

〇山ふかく　この歌八三頁に出づ

〇時鳥きかまほしさに　この歌八三頁に出づ。

〇山里は　この歌八三頁に出づ。

○鳴きとよめども　鳴き響かすけれど。

○我が庵は　既に八二頁に出づ。五句「鳴きわたるらむ」とある。

○常夏の花　瞿麥の花。

この程杜鵑の聲を彼もこれも聞き侍りぬと語りければ

我が山はいかにやうとき時鳥里をあまたに鳴きとよめども

時鳥といふことをかくして

我が庵は鳥もまれなる山なればほどとゝき過ぎて鳴きわたるらむ

例ならず惱みて起きもせず寐もせぬ枕の上を時鳥二聲鳴きわたりければ

郭公なれも獨りはさびしきに我をいざなへ死出の山路に

五月雨

わが宿の軒端は雪に埋もれて麓の早苗みづや越ゆらむ

瞿麥

吹く風にあつさ忘れて常夏の花色衣そでぞ涼しき

岩船瑛兼上人の許にて題をさぐりて瞿麥といふ心をよみ侍るにそのころ良丸著袴せられし慶びをいさゝか思ひよせ侍りて

たち縫はぬ天の羽衣なでしこの花のよはひはつきじとぞ思ふ

夏月

月影のさえゆくまゝに窓近くすだく螢の光ともしも

蓮

池水にぬるめる蓮の花笠をきてみる人の袖やすゞしき

蓮葉に風吹きたえてはなだ色のかさにはえある露の白玉

夕立の涼しく過ぐる蓮葉に入日かゞやく露のしら玉

夕立

涼しさは秋にぞかよふ夕立のはるゝ跡よりむすぶしら露

見るからに雲の足とき鳴神の音よりきほふ雨の涼しさ

夕立の名殘り涼しき端居にはまだ秋ならぬ秋ぞしらるゝ

山家納涼

岩そゝぐ音も涼しな山里の筧にあまる庭のやり水

秋歌

殘暑

風の音もまだ秋淺き草の戸は殘る暑さもひとしほにして

七夕

七夕のねがひの絲のくり返しいく世絶えせぬ契りなるらむ

七夕雨

○池水に　八三頁に出づ。

○夕立の涼しく　八四頁に出づ。

○涼しさは　八四頁に出づ。

○見るからに　八四頁に出づ。初句「見るが内に」とある。

○風の音も　八四頁に出づ。

○七夕の　八四頁に出づ。

たてぬきに雨の絲もて七夕の織るやおりそのあまの羽衣

萩

むらさきの露のゆかりや宮城野の秋をもうつせ庭の萩原

松蟲

草の戸に誰をまつむしのがれこし心もしらず鳴きあかすらむ

鈴蟲

秋の野の草の袂をふりはへて露のあはれを鈴むしの鳴く

旅亭に鈴蟲のなくを聞きて

草枕旅のかりねの契りだにふりすてがたき鈴むしの聲

江戸の邸へ出で侍りし時少將の方にてはたおりのなくを聞きて

はたおりのおのがしわざの絲薄亂るゝ露をたてぬきにして

まがきちかく鹿の鳴きければ

山ふかくのがれ入りにし柴の戸はまがきを近みをじか鳴くなり

旅宿秋雨

さなきだに物うき旅の草の戸に涙ふりそふ秋の夜の雨

山荘の月を詠めて

○たてぬき　經緯。たて絲とよこ絲。

○草の戸の歌　古今秋上「もみぢ葉の散りてつもれる我が宿に誰を松蟲こゝら鳴くらむ」を本歌。

○秋の野の　八四頁に出づ。

○山ふかく　八五頁に出づ。

晴れやらぬ心の雲もはづかしなくまなき空の月に向ひて

入るははやく出づるはおそき谷の戶やたゞ半空の月をこそ見め

七月十五夜の月をながめて

待ちわぶる秋の最中のおもかげを先づ見せそめて出づる月かな

水戶にて八月十五夜の月を見て

年を經て又この宿を來てみれば面がはりせる月の影かな

旅宿名月

問はばやな秋のなかばは故鄉も同じこよひの月を見るかと

八溝山のふもと黑澤といふ所に侍りて中秋の月を

黑澤ややみぞの山の名もつらし年にまれなる月の光に

月見の宴催しける時淸水宗川わすれじな名高き秋の今宵しも月の圓居に

あへるかしこさとよめりける返し

名に高き月をかたみに幾秋もおなじまとゐの契り忘るな

宴過ぎていよ〳〵月のすみのぼるを詠めて

老の身はまた來る秋もたのまれずたゞさし向ふ月をながめむ

九月十三夜に中秋の曇りぬることをおもひいでて

○入るは早く　八六頁に出づ。

○八溝山　常陸下野磐城三國の境

おもひきや最中の空に引きかへてくまなき月を今宵みむとは

九月十三夜

名に高き月もてりそふしら菊の籬がもとの秋ぞえならぬ

九月十三夜季君の許より幾かへり君ぞみるべき萬代もこの長月のあきを契りてとありしかへし

萬代もかぎらじものと長月の秋のながめは君にかぞへむ

九月十三夜肥田政大が亭にて

かぞふれば秋の日數は限りあれどあかぬ心は長月の空

老婆高尾が亭にて月を詠めて

いく年もまたや來てみむ此の宿の詠めにあかぬ秋の夜の月

雲間より月のもれ出づるを見て

たちぬはぬ天津少女の雲の袖つゝみあまりて出づる月影

蓮華寺の日乘が許へよみてつかはしける

山寺の秋のあはれやいかならむ心の月もさぞな澄むらむ

雲間鴈

風さそふ雲の浪間をゆく舟の梶音高くわたる鴈がね

○思ひきや　八五頁にも出づ。

○名に高き　八五頁にも出づ。

○萬代も　八五頁にも出づ。

○肥田政大　水戸家老の家。

○かぞふれば　八五頁にも出づ。

きぬた

賤の女がさむさ忍ぶのすり衣あかつきふかく亂れてぞうつ

大井滿直が庭の菊を乞ひ侍りけるにおよびなき空まで風のかをり上げし霜のまがきの菊の一もといふ歌を添へて侍りしかばかへし

あかずみむ色めづらしき八重菊の花もなさけの深き匂ひを

柵町の館にて紅葉を

夕時雨おなじ梢をうすくこく染めて色わく庭の紅葉ば

山の紅葉をみて

山姫のさらす錦か遠近の山のかひより見ゆる紅葉ば

山風の一むらさそふ夕時雨晴るゝ跡よりにほふもみぢば

一歲江戶へ上りし秋のころ細川綱利朝臣庭の紅葉を手折りて送りければ

染め出す心の色の唐錦おりえて見する庭の紅葉ば

下の宮へ詣でしころ山の紅葉やう〳〵色づきけるを見て

山々の岑のもみぢをそのまゝにぬさと手向くる下のみやつこ

ちかまちの道場へ罷りてとかくするほどに秋の日はや暮れかゝるまゝに三日月西の山の端にかゝると見て

○柵町　今の水戶驛のあるあたり
○夕時雨　八七頁にも出づ。
○山々の　八七頁にも出づ。

雲はみな吹きつくせども弓はりの光ともしき岑の秋風

惠明院瑛兼の許より紅葉にそへて贈り侍りし歌のかへし

手折りつる此の一枝の紅葉ばに君がなさけの色ぞ見えける

堀田一之眞朋の紅葉見にまかりてよめるとて山風におちてかさなる紅葉ばのまた影添ふるまゝのつぎ橋、かへし

もろともに見まくほしきをいかにせむ花も紅葉もまゝならぬ身は

自息軒より後園のもみぢ一枝おくり侍りければ

うすくこく一木の枝を染め分けて時雨ぞ秋の錦なりける

秋の夕久昌寺の摩訶衍廬庵にあそびて

山寺の秋の夕のさびしさをなほ吹きそふる岑の松風

秋の歌の中に

四つの時何れをそれと分かねども秋のあはれに如く物もなし

冬歌

初冬月

名に高き秋の二よの名殘とてまだ冬なれぬ月ぞさやけき

○弓はり　弓張月。

○摩訶衍　佛語、大乘と譯す。高遠なる佛教教理を指す。

○四つの時　四季。

山家冬

木がらしの風もさびしく三日月の影かすかなる冬の山里

軒ちかく落つる木の葉に聞きなれて時雨もわかぬ冬の山里

聞きわかむ方こそなけれ木の葉散る草の廬(いほり)の夜の時雨は

山落葉

紅葉ばは峯の嵐にさそはれて麓の里に錦おりかく

残る日に猶色はえて筑波山このもかのもに散る紅葉かな

霰

時のまは玉のうてなと人やみむ霰たばしる賤が軒端を

冰柱

かけわたす軒のつらゝの玉すだれ思ひもあへぬ草の扉に

冰

冰りゐし程ぞしらるゝ更くる夜に音も絶えゆく庭のやり水

雪のふりける日山野邊若狭守義清とぶらひ來りければ

雪もけふ降りしむかしの友ならで誰かとはまし深山邊の里

雪のあした人々山莊をとぶらひけるを

○木がらしの　八七頁に出づ。

○聞きわかむ　八七頁に出づ。

○殘る日に　此れに似たる歌　八七頁に出づ。

○かけわたす　八七頁に出づ。

○雪もけふ　これに似たる歌八七頁に出づ。

けふのためと春さく花をまづ見せて我がすむ山に降れる白雪

人々問ひ來て山の落葉を拾ひ酒などあたゝめて遊び侍るとき

山里は峯の嵐にさそはれて手もたゆからず落葉たくなり

自息軒にて年内梅花といふ心を

色深き情とぞ見る冬ながらこの一枝に春をもらして

中山備前守信成亭にて河歳暮といふ心を

老の浪ながれて早くゆく水の歸りもやらぬ年の暮かな

旅泊歳暮

せむかたも浪のうきねの枕よりあとよりせめて暮るゝ年かな

太田の淨光寺にて歳暮の心を

みな人はたちかへる春のあしたより同じ事して年ぞくれぬる

春秋の日數もあだにくれはとりあやなく過ぎし我が身くやしも

歳暮の口吟

年くれて柴折りくぶる草の戸も人なみ〳〵に煤や拂はむ

常山詠草卷之下ノ一 終

○中山備前守　水戸家の附家老。

常山詠草卷之下ノ二

雜歌

元祿庚午致仕し侍りて水戶にいたりまたの年五月に西山へ移りぬるとて館の柱にかきつけける

なかく／＼になるゝぞつらき假初の宿りもけふを限りと思へば

西山に移りしころ

軒ちかくまだ聞きなれぬ松風や幾たび夢を驚かすらむ

萬葉の詞をとりて海といふことを

天雲のそぐへのきはみはるぐ／＼とおなじみどりの奧の鹽さゐ

しほがまを

世をわたるしわざもからし鹽がまの煙も空に絕えず亂れて

和久といふ所に行きて鮎などとり侍りしに月の出でければ

山の端を出でてさやけき月影にさばしる鮎の數も見えけり

久慈の湊にて海士のしわざを見侍りて

○なかく／＼に　八九頁に出づ。

○そぐへ　そきへに同じ。遠く離れた方。

○鹽さゐ　潮のさしくる時波のさわ立つこと。

○和久　常陸太田町の西、今山田村の大字。

○山の端を　九〇頁にも出づ。

○久慈の湊　常陸國久慈川口。

朝な夕なあみ引くあまの手もたゆくいとまも波の世を渡るかな

むら松にて海邊眺望を

あま小舟葉ごしにみれば村松の梢によする沖津白浪

終夜風いと吹きて松の音物すごかりければ

村松の木ずゑに浪の音そひて夜半の嵐に夢もむすばず

石塚より清音寺へまうでけるとき青山といふ所にて

松楓おなじみどりの青山を嶺のしぐれの染めやわくらむ

鳥の巣の原を通りけるに筑波山の雪のけしきさながら富士のおもかげに見えければ

筑波嶺をこゝよりみれば鳥のなく吾妻の富士と人やいふらむ

雨いたうふりける日遠く見やりて

雲霧の立ちへだたりてふる雨に遠くなりゆく松の一むら

神無月のはじめつかたある人菊の花一枝送りければ讀みてつかはしける

みし秋の色なき霜のまがきにもあまりて匂ふ白菊の花

松平大炊頭より杯にそへて思ひ出でて昔を忍ぶさかづきの深き心をくみてしれ君といひおくりける、かへし

○いとまも波の　いとまも無きに通はせた。

○村松の　八九頁にも出づ。

○鳥の巣の原　常陸國鹿島郡鳥栖

○松平大炊頭　松平賴雄。常陸宍戸藩祖。

もろともにくみし昔の杯を思ひめぐらす程ぞ嬉しき

柵町の館にて入相の鐘を聞きて

何をそれと待つとはなけれど秋の日はやゝ暮れやすき入相の鐘

神無月のころ咲き殘りたるなでしこに添へて日周いなむしろさゆる旅寢のなぐさめに名もとこ夏の花奉ると聞えければ返し

咲きしより君が朝夕なでしこの花の色香はとこ夏にして

霜月のはじめつかた肥田政大梅花一枝おくり侍りければ

あかず見む霜の中より咲く梅の色もにほひも深き情を

伊藤友嵩が許より柳と梨とをおくりたるを見て

今はわが身を山がつになしはてて憂世をよそに結ぶ柴がき

那珂の湊の館に侍りけるころ日周法師が許よりよみてつかはしける歌のかへし

朝夕の詠めにあかぬ此の浦の鹽やき衣きても見よかし

大炊頭の許より梅鶯を造れる臺に杯を添へて春といへばまづ咲く庭の梅が香をくみて見はやせ花のさかづき、返し

千代の春かけて霞を汲みもみむつらなる枝の花の杯

○柵町　今の水戸停車場のある所

○あかず見む　九一頁にも出づ。

○今はわが　九一頁にも出づ。

○きても　衣著て、來て。

○大炊頭　松平賴雄。

雨のふる日尼日祥水戸へかへりけるに

ふりすてゝわりなく歸り行く人を雨の絲もて引きやとゞめむ

松平式部讃岐より問ひ來りけるに

もろともにあかずよりゐて語らなむまきの板屋の隙しらむまで

宇都宮隆綱が許より絹川の鮎をおくり侍れば

はる〲と流れてこゝにきぬ川やはや瀬の浪にすみし若鮎

完倉の果泰寺に詣でしとき

松風の音はいづれと人問はば風とやいはむ松とやいはむ

星野延壽が許よりわれにもの書きてあたへよなどきこゆれば書きておくるとて

秋風につらも亂れて行く鴈の影はづかしき筆のあとかな

鵲岡の歸願寺にあそびて

かさゝぎの岡のもみぢを紅の法の衣の色とこそみれ

暮鳥宿林

夕まぐれ茂き林の一枝を己がとり〲ねぐらあらそふ

百椿の圖の内にいさはやといへる椿の名をかくして

○隙しらむまで　夜が明けて光のさしこむまで。

○秋風に　九一頁にも出づ。

○夕まぐれ　八九頁にも出づ。

我もいざはや行きてみむこせ山のつら〳〵椿春すぎぬるに

風早宰相の許より松の歌よめと有りければ

家の風吹き傳へたる松の葉のちり失せずして萬代や經む

讃岐國より松平帶刀賴芳とぶらひ來てかへり侍る時に

別れてはまた逢ふことも白雲のたな引く空をともにながめむ

澄元上人とぶらひ來りければ

まれ人を招き入れたる草の戶も今日ぞかひある庭の小薄

淺井有鄰わが山莊をとぶらひきける時

行きくれて草ひきむすぶ旅枕ひとりまろ寢の牀やさびしき

有鄰かへり去なむといひければ馬のはなむけするとて

かりそめもわかれは悲し老の身はまたいつかはのあふご知らねば

狩野興雲の江戶へ歸るを送る

玉章をかけてぞ賴むくる鴈にまた逢ふまでの便りすぐすな

上近章が江戶より訪ひ來たる時

かたいとの又もよりきてけふこゝに逢ふことのねは知る人ぞしる

伴資矩がむさしより來りてかへり侍る時

○我もいざ　九一頁にも出づ。
○こせ山　大和國葛城郡と吉野郡との境。
○家の風　九二頁にも出づ。
○松平賴芳　光圀の兄賴重の子。
○別れては　九二頁にも出づ。
○あふご　逢期。

老の身は頼まれなくにかりそめの別れや終の別れとやなる

遠山主殿頭が許へ久しう消息せざりしことなどいひ遣はしけるついでに

松の葉のかはらぬ友と見し色を立ちな隔てそ雲の遠山

ある人とぶらひ來て武藏へかへらむといひけるとき

逢ふはうれし別れはつらしよしやたゞ逢はず別れぬ身ともなりなむ

久昌寺の慈教が旅だつ別れを惜しみて見柳思別といふ心を

あかで行く人のわかれを今しばしひきもとゞめよ青柳のいと

澄元上人移轉して甲斐の一蓮寺へおもむけるにおくる

別れてはまた逢ふまでも頼まれねあだし憂世を思ふやも君

遊行四十六世の上人常陸の國を勸化して又他國に遊行し侍るを送る

めぐり來てまた逢ふ事はかたいとの亂れ心ぞやる方もなき

旅行春雪

旅衣なほさえかへる春風に匂はぬ花ぞ袖にちりくる

旅宿

さなきだに草の袂の露けきに猶ぬれまさる夕ぐれの雨

懷舊

○終の別れ　死別。

○逢ふはうれし　九二頁にも出づ

○あかで行く　九二頁にも出づ。

○旅衣　九二頁に出づ。

○匂はぬ花　雪を花と見たてていふ。

○さなきだに　九二頁にも出づ。

○懷舊　二首とも九〇頁に出づ。

ながらへて思ひ出づるもうしや今昔あひ見し人はなき世に

かねてより世になき身とは思へども思へばゆかし過ぎしいにしへ

月前懷舊

昔みし人はあらしの松の戸に面かげ殘す秋の夜の月

述　懷

ながらへて何にかはせむ空蟬の世のうき事を聞くにつけても

寄雲述懷

晴れやらぬ心の雲も恥かしな隈なき空の月に向ひて

紅葉村の舊館を見侍りて

昔見し草の廬の名殘とて分くる袂に露ぞこぼるゝ

堀田一之むさしの國一本櫻といふ所へまかりてむかし我と遊びし事など
おもひ出で侍りしとよみておくりし歌の返し

ともに見し昔忘れぬ山櫻言葉の花もにほふはる風

同じ時堀田一宣見せばやと昔の友に慕はるゝ青葉の櫻さかりなるころと
ありしに

見せばやと思ふ一木の山櫻花にもまさる人のことの葉

○昔見し　九〇頁にも出づ。

○ながらへて　九〇頁にも出づ。

○昔見し　九〇頁にも出づ。

○ともに見し　九一頁にも出づ。

○大樹　將軍の意。五代綱吉。
○二西堂　二人の西堂。西堂は禪僧の職、東堂の次に位する私官。殿上の五位に准ず。

○いなばの山のはる〴〵　古今離別「立ち別れいなばの山の嶺に生ふる待つとし聞かば今歸り來む」による。

元祿戊の年大樹の仰せごとにて江戸へのぼりしばらく止まりけるに雷啓
大忠二西堂旅亭にとぶらひ來てかへりけるとき

あふは別れわかれては逢ふ習ひぞとかつ知りながら思ひ忘れて

水戸へ歸り侍らむとて旅亭の障子に書きつけたる

雨やどり一木の陰も忘れしにこのごろ馴れし名殘悲しき

首途の日雨ふり侍りければ送りの人々に向ひて

立ち別れまたあふことも白雲の隙なき雨を涙とは見よ

下總國塙村しのぶ里といふ所にて

とし經ても猶や心に忍ぶ坂ながめにつゞく遠の海原

堀田一宣江戸より小金の驛へ別れつゝいなばの山のはる〴〵とまつも久
しき月日をや經むとよみておくりけるかへし

老いらくの身は賴まれぬいなば山かひやなからむ松の言の葉

西山へかへり來て

立ち歸る影もはづかし遁れえぬ憂世の塵にしばし交りて

堀田一之が許より消息の次にはるかにも思ひなされて慕ふぞよもろこし
の船の別れならねどといひおこせたる返し

別れこし名殘をぞ思ふ老浪の又立ち出でむ世をもしらねば

人々集まりて去年のけふは予が江戸に赴きし事など語りあへるを聞きて

思ひいづやおもひ出づればこぞのけふ霞と共に立ちし月日を

む孫少將の君大樹より姫君にめあはし給ふべき御本意なりければかたじけなきあまりにこゝらの人うちより喜びの酒など勸めけれどもいつもなにかともてなしまめやかにものせし高尾の局も身まかり宇都宮の菜にあたへし妹も七夕のきぬ〳〵はまた來る秋もたのまれぬべけれど是れはながき別れとなりて再度かへらぬ道におもむきぬ高乾院と聞えしは佐々木氏なりしかど早うやもめとなりてかざりおろし日祥尼と申しけるも中の秋月と共に雲かくれ侍りぬつく〳〵思へばありし人々はみなから見なしつあらぬ所に來りたらむやうに覺えていとかなし

きのふまで逢ひ見し人のなき宿や庭の草木も面がはりしつ

是れはこゝにありしものを彼はかくいひけるなんどと思ひつゞくればむねつぶれ心地まどひて物言ふべくもあらずしかはあれどかうやうの折に下もみぢ色にいでむもはゞかり多ければ忍ぶ山しのぶ心の苦しさおもひやるべし

○少將の君　次の水戸藩主となるべき人の初任官は少將である。
○大樹　將軍の意。五代綱吉。

いかにせむ露もらさじと包めどもあまりてぬるゝ袖の涙を

心ちわづらひし比大樹より侍醫奥山法眼が薬用ゐるべき虫の仰事にてとぶらひ來りて何くれと物語の次に

世のうきを思ひ入りにし山里に昔がたりを聞くも珍らし

心ちわづらひしころ庭の面を見をりて

風をいたみ亂るゝ草の露の上にしばし宿かる月のはかなさ

法眼江府へ歸る時に筑波山しげき恵みを千代までと祈りつゝたつ旅衣かなとよみ侍りしかへし

千代までといのりつゝたつ旅衣またもきて見よ草の廬を

飼ひなれし驢馬の斃れしかば

羨ましなれも此の世をうさぎ馬のあゆみを急ぐ死出の山道

大聖院の阿闍梨わがために祈禱などしていつまで草のいつまでもと賀し侍ることばをうけて

祈るてふいつまで草の露の身は消えずは有りとも哀れいつまで

朴翁居士が許より予が除病の祈りに壽量品壽命經など讀誦し侍るよし書きておくに松たかき千年の山の名にかけて君をぞ祈る萬代までにと有り

○次　ついで。

○祈るてふ　これに似たる歌九三頁に出づ。

○朴翁　安藤朴翁。名は定爲。安藤年山の父、丹波國千年山麓小口村に隱居した。光圀の信任厚し。安藤千山の父。

しかへし

山の名の千年は君にゆづり置きて黄泉(よみぢ)遠くも我や別れむ

久昌院三十三回忌に大炊頭よりよみておくりける歌の返し

くらべばや三十三年(みそぢみとせ)のめぐり來てしたふ袂に落つる涙を

家弟刑部大輔三回忌に

年はけふみつの車のめぐり來てやるかたもなく積む歎きかな

大炊頭みまかりけるを悼みて

山ふかく世をのがれても世の中のうきには落つる袖の涙か

郭公われに告げこせ死出の山わけてかなしき人の行末

又七月八日妹のみまかりしに

五月雨もまだほしあへぬ袖の上にまた置きそふる秋の白露

盂蘭盆に瑞龍山に墓まうでして

うき袖の涙は雨とふる塚のあはれ數そふ山の奥かな

程もなく同じあはれをきく袖の涙よいかにほすかたぞなき・

日視上人をはりとりしを聞きて

我が跡をとふべき人は先づたちてしばし殘れる露の身ぞうき

○山の名の　九四頁にも出づ。

○大炊頭　松平賴雄、光圀の弟。

○瑞龍山　常陸國太田町の北一里今磐田村にある。水戸家累代の墓所。

○雲霧も　九三頁にも出づ。

○なき人　九三頁にも出づ。

○嚴有公　四代將軍家綱公。

○つかの間も　九三頁にも出づ。

はらからのおもひに侍るころ月をながめて

雲霧も今はうき世になき人の心の月や空にすむらむ

松平壹岐守仲隆妻をはりぬる時こぞの夏松平美作守直能妻おなじ冬酒井
忠敬などうせぬることを思ひつゞけて

うつゝとも思ひぞわかねあるはなくなきは數そふ袖の涙に

弟の中陰の内肥田政大姪のはないろ／＼おくりければ

なき人に手向けて我もけふか見むおほかたならぬ花の情を

伊藤玄蕃友玄みまかりて後松壽院の許へよみてつかはしける

いとゞなほ老の寐覺ぞ苦しけれ世のうき事を思ひつゞけて

年ごろしれる人のみまかりけるに

うたゝねのさめても夢のうちなれや憂世の暗に迷ふ此の身は

酒井忠徴みまかりし時に翁が許へつかはしける

子は親に後るゝ道を先だてて殘るうき身ぞ思ひやらるゝ

嚴有公十七回の御忌に昔の御事などいひ出でて

つかの間も忘るべきにはあらぬ世を思ひ出づればぬるゝ袖かな

壽光院の形見を見て播磨守によみて送る

我も世に同じなき身とおもへどもまづ先だちし人ぞ戀しき

人の子におくれけるによみてつかはしける

問はばやなおほしたてつるみどり子を先だつる親の心いかにと

久昌寺の日輝上人など集まりて故元政法師が辭世に鷲の山常にすむてふ峯の月かりにあらはれかりにかくれてとよめる五句をわかちて歌よみ侍りしに首句をとりて

鷲の山分けてえ難き道ぞとはふみみて猶ぞ思ひしらるゝ

日輝上人はじめて説法せられけるに日周師が許へよみておくりける

日の輝(ひかり)あまねく照らすこのもとにのりの花咲く鷲の山かぜ

日周法師來りて法文の歌すゝめ侍りしに月天子最爲第一といふこゝろを

天津空星の林のしげけれどかつら一木の影は高しな

岩船願入寺にて泥洹院の三回忌に四十八願をわかちて人々法樂の歌よみ侍りし時生尊貴家願のこゝろを

今こゝにいかなる種をまきおかばその九重の花にみてまし

京極故飛驒守三十三回忌に作禮而去といふ心を

あなたふと心の暗の雲晴れて月に迷はぬかへるさの道

○久昌寺　常陸國太田町附近にあり、日蓮宗の寺、德川賴房、光圀二代の歸依厚かつた。

○元政法師　山城深草瑞光寺に住む。歌人。

○鷲の山　九四頁にも出づ。

○天津空　九四頁にも出づ。

○あなたふと　九三頁にも出づ。

中山遠江守八十の賀し侍る時寄菊祝といふ心を

つきせじな君のよはひは長月の菊のしら露淵となるまで

堀田河内守一輝七十の賀し侍る時松延齢友といふこゝろを

萬代も君にともなへ岩根松あかず操の色をかさねて

源英公七十の賀に

けふにあふ君が齡の高松やつらなる枝も千代に習はむ

眞弓院の六十の賀に

祝ふぞよ君がともなふ玉椿けふを八千代の春のはじめと

清水宗川が八十の賀に

八十島を漕ぎはなれてもはる〴〵と行末ながき綱手引くらむ

讃州少將の許より予が七十の賀し侍らむよしいひおこせたりしに

消えやらぬ露のうき身の玉の緒をなに長かれと人のいふらむ

予が七十の春日周師が許より絛法の卷數に竹の枝そへて八百萬よゝをこ
めたる竹の杖つかば千年の坂もこえなむ

竹有佳色

八百萬代々をこめてし呉竹も今は我が身の卯杖とぞみる

○つきせじな　九四頁にも出づ。

○源英公　光圀の兄賴重、高松の藩祖。

○けふにあふ　九四頁に出づ。初句「かぞふれば」とある。

○八十島を　九五頁にも出づ。

○卯杖　古昔禁中にて惡鬼を避くとて正月上の卯の日種々の木を五尺三寸にきり一束として奉った杖

君が門にうゑし千ひろの呉竹や幾代かはらぬ色をみすらむ

秋　祝

雨風も時ある御代のたなつもの絶えずをさむる民ぞゆゝしき

寄松祝

波風も吹きをさまりて住よしの峯の姫松枝もならさず

朴翁居士におくる言葉

居士の曾祖長松軒の書かれし八境の記をうつしとし久しくその詞のうるはしきを賞づといへどもその文字のさだかならぬを憂ふこのごろかの眞蹟をあはせ校ふるに日ごろ讀み解きがたかりし文字心をえたるよろこび思ふことかぎりなし今その眞蹟をかへしおくるにたゞにも無下なればとて腰折れ一つかいつけてその山びこの笑ひを催す

遙かにもあふぎこそ見れ千年山山としたかき君がみさをを

日周法師におくる辭

山のもみぢ見むとてたち出でしに庭のまがきに短冊一ひらつけられたり取りて見ればとはでやは庭もまがきもをり〳〵の哀れこもれる宿のなさけをとありたがしわざとも知らねども昨日とぶらひ來りし僧にこらのう

○君が門に　九五頁にも出づ。

○たなつもの　田より生ずるもの稻、又穀類。

○波風も　九五頁にも出づ。

ちにてもやあるらむといとうしろめたし返しせむにその主をしられにも
だしてやみぬさりとてかかる心すてむも心ぐるしければとて腰折一つか
いつゞりぬ

住みあれしまがきながらもをり〳〵のあはれをこむる人の言のは

同じ人に答ふる詞

葉月末つかた秋のあはれをとはむとて木こりの行きかふ道をしるべに
嶺にのぼり谷にくだり流れにしたがひてかなたこなたたどり行くまゝに
けふは和久といふ所にいたりて旅の一夜をあかしぬ日周上人の寺近き程
なればとてとぶらひ來たるにいみじき序ぐしたる大和歌二つもたまへり
めもあやに打ち誦してさし置くに忍びずこれに報いせむと思ふにその才
なしといへども狗の尾をものせしためしもあればなむにぶきふんでをと
きてこゝにかいつく上人の歌にあはれさの秋のかぎりをしらむとてふか
き山路の露やわくらむとあるに

人もまた秋のあはれをとはむとて山てふ山をけふやわけけむ

次の歌に名もしらぬ山の草木の末葉まで恵みの露ぞおきあまりけるこ
れは下官が上をよめるにやされどかの寺草創有りし頃はあかし佛の御名

○狗の尾をものせしためし　狗尾續貂。善からぬものを善きものにつぐといふ事に用ゐる。
○ふんで　文手の音便。筆。

をも知らずすたらの尊きをも辨へぬものしが丹に觸るれば赤く香に交はればかぐはしとやらむ自らなる德に化せられていさゝかその心を得るも賢き上人の餘澤なりかしかかるすぢをだにいひ述べむとすめるにくちのむばらにさはり多かれば片端ばかりを呻き出でて胡盧の笑ひにぞのぶ

草も木も御法の雨の降りそひて露の惠みに洩るゝとはなし

常山詠草　歌の部終

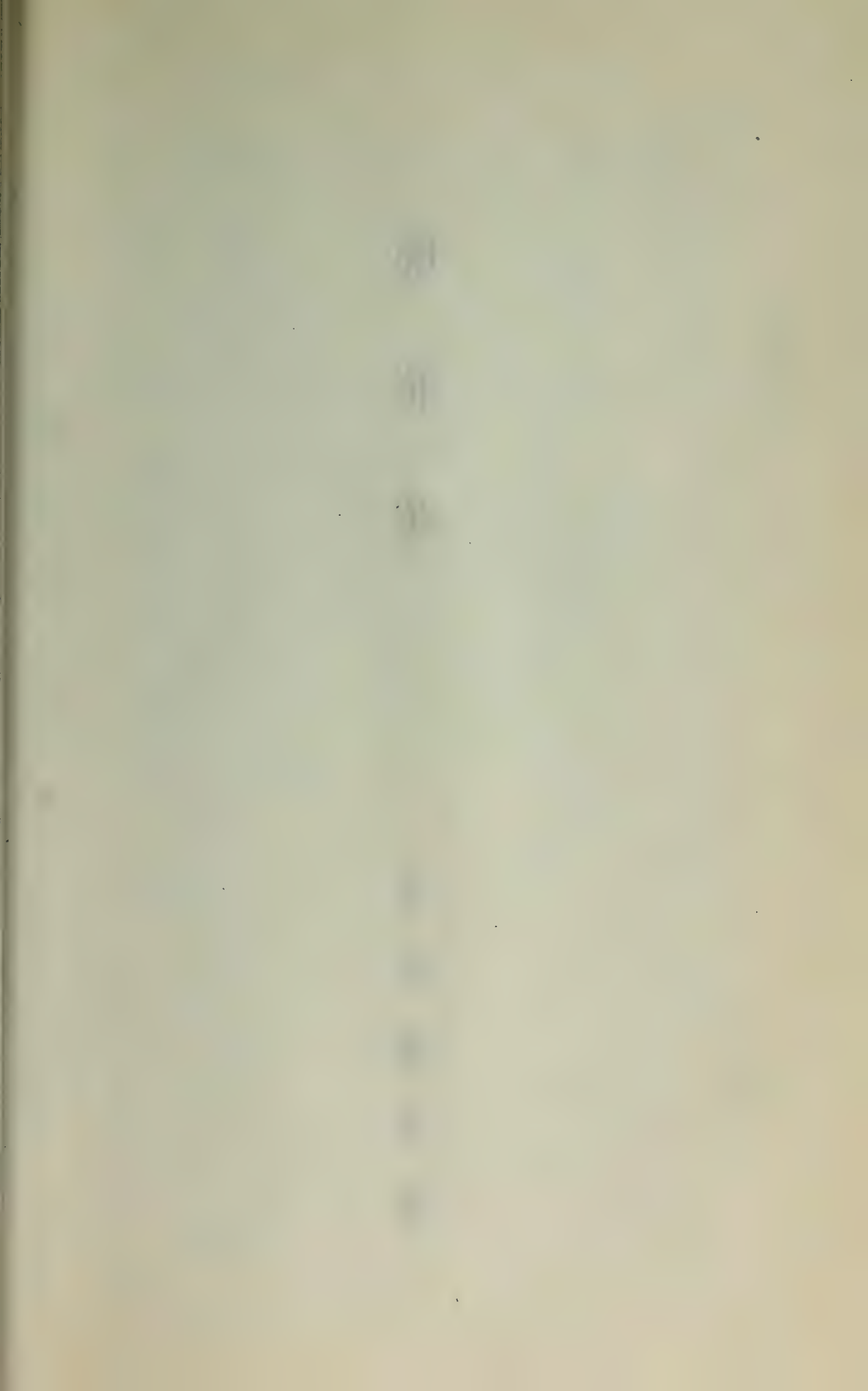
○すたら　修多羅。Sutra.　經をいふ。
○ものしが　ものなりしが。なりを脫せるか。
○むばら　茨。
○胡盧の笑ひ　口を掩ひて大いに笑ふこと。

先君政理之暇多ㇾ所㆓著述㆒、懼㆘其久而易ㇾ失、謹類次以成ㇾ編。詩文二十五卷、名曰㆓常山文集㆒、倭歌五卷、曰㆓常山詠艸㆒。又命㆓儒臣㆒、撰㆓行實一卷㆒。羹牆在ㇾ此、足㆘以表㆓盛事㆒垂㆗不朽㆖庶。俾㆘子孫繩々繼者有ㇾ所㆓觀感㆒仰㆗其文武兼備之德㆖、遺風餘烈可ㇾ不ㇾ欽哉。

寶永三年丙戌十一月　　權中納言從三位源朝臣綱條拜識

○羹牆　歸趣するところ、手本。

○綱條　光圀の弟、入りて光圀の後を嗣ぐ。寶永二年十二月權中納言に進む。享保三年九月薨ず、年六十四。肅公といふ。

晩花集

下河邊長流

晩花集

下河邊長流自集

春歌

年内立春

しらま弓おして雪ふる年の内の何處をとりて春とさだめむ

あらはにもまだ立ちいでず年の内は春のかすみも冬籠りして

まだあけぬ年の此方に忍ぶとや鄰をこえて春のきぬらむ

けふいかにさだめてきかむ鶯のことしの初音こぞのふる聲

しはすのつごもりの日雨ふりくらしてあくるあした晴れて侍りける年難波にありて

春のきて思ひすてたるふる年やきのふの雨のなにはすが笠

早春霞

このねぬる朝けの霞まだ薄し春はいくかもたたぬ衣に

○しらま弓　白木の眞弓。又弓の縁の語の枕詞。

○手引の絲　機械を用ゐず手にて引き出して繰りたる絲、互に手をひきて伴ひ行く手引をかく。
○うちはへて　ながながと。
○子の日する　正月子の日に小松を引き若菜をつむ遊びごとをする
○六帖題　古今六帖の中の題をとつて詠ずること。

○こをあらみ　籠の目荒き故に。

子日

小松原手引の絲のうちはへて子の日する野に千代はへぬべし

六帖題にて歌よみける中に白馬

白雲の庭にたなびくあを馬は空のみどりの名のみなりけり

若菜

尋ぬれば雪まの若菜七種のたからよりこそえがたかりけれ

緑なる野邊の若菜を七くさに誰かはわかむ雪のしたもえ

少女子が飼屋きよめし玉帚なほ雪はらへわか菜つむ野に

朝菜つむ野邊の少女に家とへばぬしだにしらずあとの霞に

けさ消えし垣根の雪のたまり水野澤に似たる若菜をぞつむ

雪をわけ冰をくだく手間をのみ摘みし若菜は手にもたまらず

河上に洗ふ若菜のこをあらみもるを拾ふぞつむにまされる

春の歌とて

古寺はかはらや先にとけぬらむ雪の玉みづ軒端もるなり

昨日けふまやの軒端の雨まじりあまりなるまで雪の玉水

梅も見よ櫻もならべとばかりにまづ散りそむる春のあわ雪

鶯

鶯のはつねをけふの玉はゝき翅ぞ雪をはらひいでてなく

若菜つむ青つゞらこにまつはれて聞かばやと思ふ野べの鶯

かり衣梅にやどせば朝ぼらけ袖よりいづる鶯のこゑ

かはたけの綠はふちと見えながらこゝをせになく鶯のこゑ

鶯のこゑする竹は折らじとてうすくやかゝる春の沫雪

おきいでば騒ぎやすると鶯の聲ゆゑいとゞ朝いをぞする

梅

古の高津の宮ゐいつよりかなにはゐなかに匂ふうめが香

難波女が小屋のあし火もたきものの煙になりて匂ふ梅が香

難波江の玉藻の牀にふす鴨も浮寐さむべき梅が香ぞする

浦風の便りをまつのあなたより遠さと小町のけさのうめが香

くらぶ山闇の現もさだかなるしるべなしやは夜半の梅が香

くらぶ山闇を便りとぬすみいでて風のもてゆく夜半の梅が香

梅が香をさほぢはるかに送りすてて柳にかへる春の河かぜ

鶯の閨のものとも定まらず我がしきたへの夜の梅が香

○はつねを　一本「はつねの」

○うすくや　一本「うすくぞ」

○朝い　朝寐。

○高津の宮ゐいつよりか　一本「高津の宮木このごろは」

○あし火も　一本「あし火を」

○煙になりし　一本「なして」

○便りをまつの　一本「まつと」

○くらぶ山　山城國暗部山。

○さほぢ　佐保路。

○しきたへ　寢牀に敷くもの。

梅が香はおぼろげならぬ春の夜にたがならはしの霞む月影

梅の花人のとがむるうつり香もしづ枝の露のきせしぬれ衣

伊豆國三島の社に奉りける百首の歌の中に

かざすより頭の雪のかくろへば老も若木の梅の花がさ

柳

山鳥の其のしだりをのます鏡おもかげ似たる池のあをやぎ

かゝればぞ色もまされる春雨にあはずばなにを玉のを柳

歸鴈

白雪のふるさと遠くゆく鴈もみちしる駒のあとやならへる

ゆく鴈にくるつばくらめ逢坂の關とやちぎる天の岩門

秋風を柳が枝にちぎりおきて行くやこのめもはるの鴈がね

ゆく鴈を送るとすれど天つ風えやはふき折る靑柳の絲

きさらぎの空ふく風の霜をおびてありし夜寒に歸る鴈がね

さえかへる月は朧げなく／＼も鴈ぞ別るゝきさらぎの空

かへる鴈あとはしたへど白山のゆきみるべくもなき雲路かな

空の海の汐は霞のたちみちて春はにはよき鴈のふなみち

○しづ枝　下枝。

○おもかげ似たる云々　一本「池の柳のかげに見えつゝ」

○柳が枝　一本「柳が末」

○にはよき　海上の波靜かなること。

歸るさはことえりすらし玉章のもじすくなる春の鴈がね

春霞かすめるまゝにかきすてて讀みもとかれぬ鴈の玉づさ

咲かぬまによしゆけ花はあだもののとても常世の鴈にかなはじ

常世には又もかへらぬ浦島がうらみもあるを春の鴈がね

雉

旅にして妻ごひすらし片岡の雉もかれ飯のほろゝとぞなく

旅人に宿かすが野の草まくらともに朝たつ雉のこゑかな

みかり野にこぞのとだちの跡とへば妻なき雉の聲ぞ悲しき

住吉の祠に奉りける百首の歌の中に呼子鳥

住吉のなごしの岡のよぶこ鳥なにによるべき海人の釣舟

春駒

荒れまさる心こはさもしらま弓はるはとられぬ安達野の駒

野火

ふる草は螢のたねも殘りなく春の野火とやまだき燃ゆらむ

春雨

くもりなくめにこそみえね春雨のふるか朝けの風の露けき

○かすめるまゝに　一本「そらに」

○鴈の玉づさ　鴈の一列を文字の一行に見立ていふ。「一行の鴈や端山に月を印す」（蕪村）

○みかり野に　一本「春の野に」

○とだち　一本「みかり」

○とだち　鷹狩の時のため鳥の集まるやうに草むら又は澤などを設けたる處。「みかり野はかつふる雪にうづもれてとだちも見えず草がくれつゝ」

○くもりなく　一本「くもり日の」

おひそむる草葉も末はかかれとて風に靡きて小雨ふるなり
春さめのいとの日をへてたまれるをひきもえやらぬ庭たづみかな

花

雪はけぬ今いくかありて櫻花さかむとか見る春の山守
ゆく鴈を共にそむきて山ざくら花はみなみの枝いそぐなり
吉野山ありてふ瀧の聲よりはさくらぞ四方の音にきこゆる
あまのすむこやともつげよ蘆垣のよし野の花の春の山もり
み吉野のたかきの櫻世はなれて濁りにしまぬ花の白雲
月の中のかつらをそめて山櫻をらまくほしきそらの一えだ
よも山にあくがれぬべき此の頃の心おちゐるいへざくらかな
逢坂はみちゆく人もたえにけり志賀の山越はなになるより
宮木もりありし昔を思ふにも盛り戀しき志賀の花ぞの
ほりうゑし後さへ花をまつほどはなほ遠山の櫻なりけり
櫻色にころもそめては春風の袖ふくをだにいとひつるかな
山風にみねのかすみは消えずともあな頼みがた花のしら雲

僧契沖がもとより庭の櫻をりておこせたるに

○小雨ふるなり　一本「春雨ぞふる」

○み吉野の　一本「吉野山」

○いとひつるかな　一本「いとふべきかな」

三吉野の山人とても何かあらむたゞこの花のひと枝にこそ
まれにあふ浮木やこれと櫻花かめに插してもあかず見るかな

花開鶯とといふ心を

たつた山櫻にうつる鶯の今ぬふ笠はくものきぬがさ

落花

さきのぼる峯の限りになりぬれば花も悔いある山おろしの風
春のよの夢にくらぶの山櫻みはてぬかたは花ぞさまされる
櫻がり雨はいとはぬ木のもとにうたて雪ふる花のあらしよ
鶯の人くとなきてたつ枝の花さへともにさわがずもがな
くちなしの色こそみえね風ふけば雪げになりぬ花の白くも
山ざくら何ぞは花のあだものと惜しまぬ風やふきに吹くらむ
誰かうきあだにうつろふ花の名のたつにとがある春の山風
櫻花ひとの恨みをこきまぜて木陰の雪ぞいたくつもれる
花も根にかへるを見てぞ木のもとに我も家路は思ひ出でける

蕨

思ふ人すむとはなしにさ蕨のをりなつかしき山のべの里

○山人　一本「山つ子」

○まれにあふの歌　盲龜浮木の故事を巧みにとり入れた。阿含經ニ佛告ニ諸比丘一。譬如ド大海中有ニ一盲龜一。壽無量劫。百年一過出レ頭。浮有ニ一木一。正有ニ一孔一。漂ニ流海浪一。隨レ流東西。盲龜百年一出。得レ過ニ此孔一。

○花も根にかへる　花の散る。

武藏野の草のはやまも春はまだふもとのちりの下わらびかな

雨中苗代といふこゝろを

天の川なはしろ水にひけとてやふる春雨は絲に見ゆらむ

藤

むらさきの初元結のめづらしくわがみる藤は花かづらせり

高砂の松の藤なみ咲きしよりうらむらさきの鶴の毛衣

底ひなき名をぞ頼みしふぢの花あだ浪たちて散らむとや見し

つゝじ

藤の花かゝれる松のかげにしも黄昏しらぬ岩つゝじかな

山ぶき

ちりぬれば悔いの八千度かへりこぬ水のゆくての井手の山吹

夏歌

首夏

花の色にまだそめざりし白妙のはじめにかへす夏ごろもかな

泉川みづの涼しさたちこめて今日より夏のころもかせ山

○底ひなき名　藤を淵の意にとる

○藤の花かゝれる　一本「藤のなみ」

○井手　山城國綴喜郡。古來山吹の名所として歌によまれる。

○泉川　今の木津川。
○かせ山　鹿脊山。山城國相樂郡木津町の東方。

衣がへうきも嬉しくなるばかりやま時鳥けふ來鳴かなむ

卯の花は雪と見ゆともさむからじいざなつ衣うすくたちきむ

住吉のきしともいはじ夏ごろも今日しら波のいそぎたたなむ

三島の社によみて奉りし百首の歌の中に

藤はらの大宮びとの衣がへ夏きにけらしあまのかぐやま

夏九十首歌よみける中に

けふよりは霞も夏のすて衣たがひろふとか見えずなるらむ

殘花

春にこそおくれし色はふりぬらめ青葉の山のはつざくら花

小ぐるまのかもの青葉のやま櫻はるにかぎらじ花のもの見は

夏衣なほ山さむく尋ねみむ殘るさくらの雪にあふやと

なつのうたとて

さくら色の衣は春にほしはてて夏はみどりの天のかぐやま

郭公

うぐひすのやまば繼ぐべき時鳥誰にゆづれる初音なるらむ

打ちとけていつかきこえむ時鳥うの花がきのゆきのしたごゑ

○藤はらの大宮人　持統、文武兩帝の大宮人。
○夏きにけらし　「春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山」（新古今三、夏）
○霞も夏の　一本「春の」

○かも　釭（カリモ）。車轂の口にある鐵。鴨にかけ、青葉を青羽にかく。

○誰にゆづれる　一本「誰にかゆづる」

卯の花の雪のかきねの冬ごもり思ひかけぬをはつほとゝぎす

去年の夏聞きもふるさでいとゞしく今年またるゝ時鳥かな

百千鳥さへづる春にあらそはで遲れてまさるほとゝぎすかな

まちまたぬ人わきもせぬ時鳥この里なかにもらす初こゑ

ほとゝぎす程すぎてきく我が宿のけさの初音やよそのふる聲

こゝになほ聞きぞおどろく時鳥ひとのみかどの玉のひと聲

寐覺してきくはきくかは時鳥よひより待ちしあかつきの聲

宵ながらあけゆく夜半の時鳥こゝろ長くは待たむものかは

郭公あやめの枕とひこかしうときも折によるの一こゑ

郭公ねぶりの森の深き夜にめさまし草をこふるひとこゑ

夏の夜の深草山の時鳥ふしみの夢のあとになくなり

しでの山くらきをいでて郭公なほさみだれの闇になくなり

たちばなにねての朝けの時鳥うつり香こくも匂ふひと聲

時鳥こゑのひゞきにゆく雲のとまると見れば村雨の空

浮橋のとだえはてざる夢の跡にとゞろき殘るほとゝぎすかな

桂きる斧のひゞきのほとゝぎす月に聞えてやまぬ空かな

○程すぎてきく　一本「とふ」

○めさまし草　目をさますたねとなるもの。又荻の異名。

○こふる　一本「ううる」

○深草山　山城國京都と伏見との中間。

○しでの山　死出の山。ほとゝぎすは冥途より來り鳴くといふ俗說

○まつち山 紀伊國。大和國を限る。今紀伊國橋本町の東。
○車はとめず 一本「とめつ」
○とゞろかす 一本「とゞろかせ」
○やどごとに 一本「やど〳〵に」
○廣澤の池 京都市の西嵯峨の北にある。古來歌人の毎秋月を賞せし所。
○妻にやあるらむ 一本「やはあらぬ」
○水鶏をぞきく 一本「さ苗とるらむ」

ゆきやらで今一聲をまつち山紀の關となる時鳥かな

誰故に車はとめずほとゝぎす猶とゞろかすのちの一こゑ

あしびきの山もふたゝび塵ひぢのさわぐまでなく時鳥かな

さつきの頃ほひ鶯時鳥のともになきあひたるを聞きて

時鳥山とし高くなのるより麓になりぬうぐひすの聲

あやめ

都人やどごとにふく菖蒲さへ刈るあと見えぬ廣さはのいけ

けふさへも難波のこやのかくれ妻あやめは蘆の下葉なりけり

菖蒲ふく軒の雫をいづくよりながると思へば淀のさはみづ

今日こそはかくてねもみれ菖蒲草あすはかれなむ妻にやあるらむ

春駒の昨日はあれし澤邊よりけふひかるゝは菖蒲なりけり

早苗

暇なき田子の身をしる雨の中にしひていく日のさ苗とるらむ

よをこめて急ぐけふだにうゑはてぬ竹田の里に水鶏をぞきく

五月雨

みつしほも爭ひかねて流るめり堀江のみづの五月雨のころ

照射を

鹿まつと山にあかして時鳥ともしからずも聞きし夜半かな

五月山星の林となりにけり幾そのせなかともしさすらむ

鵜川

ふす鮎のよがはをせむる篝火よね鳥は矢をも射ずとこそきけ

夏九十首の歌よみける中に

篝火にかねて奈落のそこもみつよ川の水のおちあひの淵

鵜飼舟この世はかくてわたり川沉む後瀬のみをいかにせむ

さ苗だにまだとりあへぬ山里にかりほす麥の秋はきにけり

五月山うの花月夜まだよひのかげと見しまに峯の横雲

夏引の絲をばひるの長さにて賤がからむしよるぞほどなき

たち花

古を忍ぶねざめのとこ世物をりあはれにも薫る夜半かな

螢

あまつ星おちて石ともならぬまやしばし河邊の螢なるらむ

蟬

○ともしからずも　十分に。

○よがはをせむる　夜川魚を漁りたてる。

○篝火よ　一本「篝火に」

○夏引の絲　春蠶の夏にあがりたるを絲にひいたもの。

○からむし　苧麻。

○とこ世物　橘は常世國より産するといふ傳へによる。古事記、神代卷「多遲麻毛理遣常世國。令求登伎士玖能迦玖能木實。」とある。ときじくのかくのこのみは橘の實をいふ。

○おちて石とも　一本「おちても石と」

夕立のは山すぎにし木づたひにまたしぐれゆくむら蟬の聲

蚊遣火

をりふしの暑さだに猶苦しきを又蚊遣火の宿をせむらむ

蓮

白露のやどかりぬべき蓮葉におぞのたはれの池の夕風

夕立　爲兼大納言の體にならふ

ひわり戸の板まもやがてしめりあひぬ夕立雨の風さきの宿

夏九十首の歌の中に

紀の海や南を夏とてる日には海士の手かけぬ鹽もやけなむ

五月雨はみな淵と見しほどもなく細川山の日ざかりの空

うはひもを解きあけながら暮しては夜も閨の戸ささぬ頃かな

袖毎に扇ばかりの動きつゝ草木は風もみえぬころかな

泉

日ざかりの道ゆきなやむ岩がねに死なぬ藥の山の井のみづ

むすぶ手のひづと思へば立ちかへり清水ぞ袖の汗はほしける

夏衣むすべばさゆる袂よりあられたばしる水の白玉

〇宿をせむらむ　一本「むすらむ」

〇白露の歌　「みやびをと我は聞けるを宿貸さず我を歸せりおそのみやびを」（萬葉集二）の脱化。

〇おそのたはれ　痴鈍の戯れ。

〇ひわり戸　干割り戸か。

〇うはひも　上紐。

〇汗は　一本「汗を」

桐の葉のまだおちそめぬ夕風も板井のもとは先づぞ秋なる

三島の社に奉りし百首の中に

この頃は清水に人をとめさせてもる人ぬるむせきの岩かど

水邊秋涼といふ心を

さほ風は今さへすゞし夏衣ひもゆふかはに千鳥なくまで

夏はらへの心を

ゆく水にあつさ流すとせしみそぎ神はうけたる川風ぞ吹く

住吉の濱邊のみそぎくれゆけば松を秋風けふよりぞ吹く

すゞか川せゞに流せるすて衣いせをの蜑や禊しつらむ

しくら川せゞに祓へてわがならぬ鵜飼が罪もけふは殘さじ

夏九十首の中に

八百萬神もをしかのみゝと川ふりたてて聞けけふの御祓を

秋　歌

秋たつこゝろを

夏衣うすきものとも知らざりし袂おぼゆる秋の初風

○さほ風　大和國佐保のあたりを吹く風。「わがせこがきるきぬ薄し佐保風はいたくな吹きそ家にいたるまで」(萬葉集六)
○夏はらへ　六月祓。

秋ときく風の使はけふたちぬ今いく日あらば初鴈のこゑ
春がすみ夏の衣のころもへず又たちかへる袖のはつ風
みにしみて心にぞしむ涼しさに悲しさたぐふ秋のはつかぜ
ならしつる扇を霜におきかへて衣とりいだす秋の初かぜ
せば布の胸あひがたきすきまより身にしむけふの秋の初風
一葉ちる秋やきぬらむ春風のあと河やなぎまた動くなり
ゆく末の夜寒をかねて身にぞしむ我がひとりねの秋のはつ風

川邊の早秋といふ心を　源仲正が體にならふ

河風にうは毛なびきて鴛のゐるゐぐひの柳ちりそめつはや

七月三日初月のうた

夕まぐれほの見るからに悲しきは西こそ秋のはつ月の影

七夕

彦星のこぬ夜つもりしとこ夏にけふちりはらふ天の河かぜ
天の河こなたかなたの妹脊山けふ崩れよる星あひの空
船よそひ橋わたすまも待ちうきに天の河には浮木やはなき
棚機のにぎたへ衣やはらかにぬる程ぞなき年のひと夜は

○たちかへる　一本「たちかふる」
○我がひとりねの　一本「ひとりある人の」
○ゐぐひ　堰杙。
○彦星　七夕の夜織女星と相逢ふといふ男性の星。
○星あひの空　七月七日夕の空。牽牛織女の二星の相會する夜。

あふことは天の川瀨の水引のいと打ちはへてながくたえせじ

棚機のつま待つ宵と常よりはそらだきもののあまのかぐ山

天の川年のわたりをまつ程や早くながれぬ月日なるらむ

棚機のこよひ待つ夜のおもひ寐にわたると見けむ橋ぞ其の橋

年にあふつまならずして重ねねば世をへて輕きあまの羽衣

かさゝぎの行きあひの夜半は更けぬともまだ霜おかじ初秋の空

秋のきて行きあひのわせも束のまに早いなのめの天の河霧

かりにきてあふは逢ふかははし鷹のいぬかひ星も憂き名なりけり

天の河ゆふ波ちどり梶の葉にわがふみたらむあとはそへなむ

紅のころもそめてもかすべきを紅葉のはしにあきの棚機

棚ばたの秋さり衣わび人は我がかたにこそからまほしけれ

むかへ船八十瀨をかけて漕ぎいでぬと妻には告げよ天の河風

天の河うき木は人にかさゝぎの橋ぞ我がためいざわたりなむ

心から一夜とかけてかさゝぎのちがふる橋のくいや何なる

一年に一夜のかずも積りては天の川瀨のいさごなるなむ

海邊七夕

○打ちはへて　長く續きて。

○そらだき　空薫。來客などある時、まづその座敷に香をたきしめて匂ふやうにすること。

○つまならずして　一本「つまより外に」

○わせ　早稲に我が背をかく。
○いなのめ　夜あけ方。
○はし鷹　鶚、鷹の一種。
○いぬかひ星　牽牛星、彦星。
○梶の葉　古、七月七夕、之れに歌などかきつけて棚機をまつる。

○かさゝぎの橋　七月七夕、牽牛星と織女星と相會する時、鵲が翼を並べて天の河に亙すといふ想像上の橋。
○いさご　眞砂子。

○かさゝぎのよりはの橋　かさゝぎの橋に同じ。
○いはむら　岩村。
○後朝　きぬ〴〵。男女相會したる翌朝。
○みかへて　一本「身なげて」
○萩が花づま　萩は鹿の起き伏して親しむものなるより鹿の妻に見なしいふ。萩の異名。
○渡る錦も　「たつた川もみぢ亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ」（古今五、秋下）

彦星と棚ばたつめのふた見がた稀のみるめもよるの浦波

七夕別

かさゝぎのよりはの橋も別れぢの空さそひゆく朝がらすかな

棚機の心細さもさぞなげにかしつる絲のわかれ路の空

天の河別れにそゝぐ涙もて其のいはむらはけさも染むらむ

六帖の題にてよみ侍りける歌の中に、七夕後朝

あけぬれば昨日の暮を棚ばたの願ひのいともとしやかくらむ

草花

かげろふも暮をこそまて朝露にいのちかけたる朝がほの花

露のおくつまとしる〱女郎花虎にみかへてぬべき野邊かな

秋萩も今はほり植ゑじ宮城野は千さとの道に人なやみけり

さを鹿の戀はしるしの宮城野に今ぞひもとく萩が花づま

ま萩原花ふみしだきさを鹿の渡る錦も中ぞたえゆく

小山田のかりほの庵の夕露にからぬいねつむ秋はぎのはな

玉川ににしきあらへる萩が花またぬれ色をそふる朝露

月草に色どりきつるかり衣うつればかはる萩がはなずり

花薄ますほの絲にひきくらべみれば秋はぎいづれともなし

我のみやほさぬ袂とわびぬれば尾花が袖も露のゆふぐれ

たましひの入野の薄はつ尾花わが飽かざりし袖とみしより

野花留人といふ心を

招きとめつなぎとゞめて秋の野の尾花葛花道もゆかさず

六帖のうたにまめなれどよき名もたたず刈萱のいざみだれなむしどろもどろにとよめる同じ心を

刈萱のとてもよき名はたたじとて人見の岡に亂れてぞふる

刈萱に我が身はなりてよしさらば亂れぬ草のならむさが見む

蟲

夕まぐれ野山の蟲の聲々はひぐらしにこそ催されけれ

はかなかる命を露にかけながら名のみ千年のまつ蟲のこゑ

百舌鳥

はじ紅葉色にやもずのうつるらむなれし尾花が袖をかれゆく

鶉

時鳥ひとの秋にはあはづ野のもりの下草うづらなくなり

○ますほの絲　赤き色の絲。薄の穗を比べていふ語。

○さが　ならひ、ならはし。

○鹿なれや　一本「さを鹿や」

○あらちを　荒男。

○かる矢はもれて　狩る矢は免れて。

○打出の濱　近江國逢坂山の東。

秋萩にすれる衣をにしきにて行く故里はうづらなくなり

鹿

春日野に秋きて見ればさを鹿のつのはみかさの林なりけり

妻ごひに身をも惜しまぬ鹿なれや神がき山をこえて鳴くらむ

あらちをのかる矢はもれて今更に戀にしぬべきさを鹿の聲

秋風

玉とちる露さへ手にはとられねばまして目に見えぬ野邊の秋風

ふく風のみにしむ秋はこもりつゝ見ぬもの悲し此の頃のそら

秋夕

くれはてゝ日かげに月のかはるほど秋は萬のものぞ悲しき

霧

朝嵐のはげしき山の麓川となせは霧ものぼりかねつゝ

關こえて打出の濱にけさみれば近江は霧の海にぞありける

月

秋の水天の川よりまづすみて洗ふか月のひかりまされる

てる月も秋の今宵の名とり川數さへ見ゆる瀬々のうもれ木

秋も秋ところも所廣澤の池のもなかに澄める月かげ

浮雲をこよひの空になではてて袖さやかなる月の宮人

呉竹のもとの光もかくや姫みぬよおぼゆる月のかげかな

雲はらふ風のはふりよさやけさも誰がなす月のさらしなの山

更科の山もおもはずわが心なぐさの濱に照る月をみて

あかしがた夜舟こぎいでて心さへ繫ぐかたなくみつる月かな

久方のそらに煙のはるゝ夜は月のみやこの鹽釜の浦

夕なぎの浪間にいでて浮鳥も月にぞあそぶしほがまの浦

宮人のむかしの袖も月の夜は面影あそぶ高まどの山

須磨の蜑の衣と關の板びさしまばらあらそふ月の夜半かな

雲もなくなぎたる夜半の風の上に月はありかを定めてぞすむ

浮雲の衣のうらにあたひなき玉と見えてもかゝる月かげ

天の原月のみやこの高殿はよるさへうち日さすかとぞ見る

空の海の千里は雲の浪もなし月の鏡をなぐと見しより

天の川何をうき木とおもひしは流るゝ月のかつらなりけり

天の川月と鴈との船わたりくもでに水のゆくかとぞ見る

○廣澤の池　山城國嵯峨の北。古來都人貴賤ともに毎秋月を賞せし處。

○呉竹の云々　竹取物語の故事。

○更科の云々　「我が心慰めかねつ更科や姨捨山にてる月をみて」（古今一七雜上）

○なぐさの濱　紀伊國和歌浦の南界。

○高まどの山　大和國添上郡高圓一名圓形山。聖武帝の離宮ありし所。

○なぎたる　一本「はれたる」

○滿ちひの玉　火照命、火遠理命の御兄弟で爭ひ火遠理命の龍宮より得たまひし鹽盈珠、鹽乾珠。

○只一つら　一本「すぢ」

海邊月といふ心を

ゆふ汐の曉おちてゆくからに滿ちひの玉と見ゆる月かげ

月前懷舊

月かげに夜わたる鴈のつら見ても我が數たらぬ友ぞかなしき

下弦月

すぎぬるも猶及ばぬに似たるかな弓はり月のありあけの空

鴈

秋風に峯のくず葉のかへる山歸ると見ればきぬる鴈がね

故里を秋さりごろも春かけてまてとや鴈のたのめきぬらむ

ぬしもなき野山の錦とりも著ずあはれにもあるか衣かりがね

朝ぎりにぬれし翅やさむからむ重きが上の衣かりがね

空にゆふ草の枕もはつ霜のあかつきおきやわぶる鴈がね

爲兼大納言の體にならふ歌

遠きつらは只一つらに見えし鴈の近づく空に數ぞわかるゝ

秋田

いとゞしくきぢは越路を隔てつゝ鴈がねまたぬ室の早わせ

時鳥とば田のおもに昨日こそ早苗とりしか初鴈のこゑ

擣衣

ふる衣きならの里にときあらひまつちの山の秋ぞふけゆく

菊

きせ綿のなごやが下に誰とねて紐ときぬらむ菊のはつ花

藥玉のその緒ぬきかへ菊の花かづらにつくる今日もきにけり

雫もてのぶるよはひの萬代をおのが名たゝる菊の花がめ

あらひこし細谷川の菊の香もくみておほゆるきびの酒かな

長月の夜寒しらする鴈の聲きくの籬の今朝のはつしも

此の後の花やはあらぬ菊の花うつろふからの色をたのまば

色はなほ移ろふからにまさり草秋をおきたる花の初しも

紅葉

棚ばたの手にもまさりて立田姫おるは千はたの錦なりけり

たつをだに惜しといひけむ唐にしき野山にすつる秋のもみぢ葉

そめてほす秋の時雨の露のまにいつか千入の峯のもみぢ葉

鴈の船さほの山邊をこえしより峯の木の葉もこがれそめてき

○まつちの山　數多あれども紀伊國北東大和國との境紀州橋本町の東。

○藥玉　種々の香料を入れたる袋を玉とし裝飾を施しその下に五色の絲を垂れたるもの。昔時、柱などにかけて不淨を拂ふ具とす。

○雫もて云々　菊の葉に置く露を飲むと壽命が延びるといふ。

○きびの酒　きびにて釀造せる酒

○まさり草　菊の異名。「すべらぎの萬代までにまさり草たまひし種を植ゑし菊なり」（寛平菊合の歌）

○さほの山　大和國奈良市の西。

○綠に　一本「みどりミ」

○神奈備　神を祭る處。

○三室の山　大和國高市郡。

三島の社に奉りける百首の歌の中に

夏木立一つ緑に見し山も秋はいろ〱の峯のもみぢ葉

契沖が出せる題にて紅葉のうたあまたよませける時、鄰家紅葉

垣こえてゆるさぬをひく少女子が袂の色に似たるもみぢ葉

秋落葉

ちるまゝに山の木の葉はせとなりて紅ふかき神奈備の淵

流れあふ時雨につれて神奈備の山路ふねゆく秋のもみぢ葉

うま酒の三室の山の秋の色にゑへる木のはは今亂るなり

ふき拂ふ風もとがめずさもこそは紅葉にあける神なびの森

暮秋

秋をのみ惜しむとすればけふ更に山の錦を風のたつらむ

もみぢ葉もあすはたむけむ神無月今日ゆく秋の幣に惜しむな

月まちてとだにいはれず夕闇の道ならでゆく秋のわかれは

冬歌

初冬

もろ神のぬれてや集ふけふよりは時雨の雲のいづも八重垣

神無月世のねぎ事はいひやみて今朝よりきくは時雨なりけり

木の葉だにふりて知らせば神無月そらはかならず時雨せずとも

霜とだにまだ一夜にはおきかへぬ昨日の露やけふしぐるらむ

しぐれゆく雲の衣のぬれ衣になき名ばかりや冬もたつらむ

人めさへ草さへかれし山里のまれの細みち冬はきにけり

冬のうたとて

しぐれつゝ頼むかげなき浮雲に宿りかりがね濡れてなくなり

落葉

もみぢ葉はふるも誠の雨ならず誰があやまりの笠取の山

山風のさそふ木の葉や佐保すぎてならの手向の幣とちるらむ

殘菊

いにし秋を忍ぶの草にことよせてつむべき菊の花がたみかな

霜

草の上に秋見し露も玉きはるうちの大野にむすぶあさ霜

宮木野の木の下草は冬のきてむすべる霜はゆきにまされり

○ねぎ事　願ひ事。

○けふ　一本「けさ」

○冬も　一本「冬は」

○あやまりの　一本「あやまちの」
○笠取の山　山城國近江國境に接す。京都市の南東。

○草の上に　一本「草の上は」
○玉きはる　枕詞。いのち、うち、世に冠す。
○下草は　一本「下草に」

夕霜のまつやおくらむ高砂の尾上にさゆるいりあひの鐘

笹の葉によるの霜ふる山際はいとゞあきさの音ぞさえゆく

山風の寒き岡べの朝霜にうらうへわかず靡くしひの葉

冬夕

身にしむもあまりになれば吹く風のあはれさめゆく冬の夕暮

網代

網代木をつひのよるせと定めこし氷魚の契りの宇治の河なみ

寒草

冬草にしひてはさけど紅のあさはの野らのなでしこの花

寒蘆

難波人みぎはの蘆のかれしより寐ぬよぞ更にしげさ増れる

かれわたる蘆べを見ても難波人短き夢の春やおぼゆる

寒樹

小山田に冬の夕日のさしやなぎ枯れて短きかげぞのこれる

冬の夜のこゝろを

水底にうちぬるばかり寒き夜のよもの嵐ぞ海ときこゆる

冬月

天の川水よりいでて水よりはさむきこほりとすめる夜の月

白雪の待ちいづる友もうとからず同じ光の山の端のつき

白山にあへば光も照りそひぬこしのみ空の冬の夜の月

秋の色はちぐさに見えし野も山も一つにあかき冬の夜の月

鳰の海や沖にかげしく月の夜は汀ばかりも冰らざりけり

冰

近江より朝たちくればたづのなくやすの川瀬に冰りゐにけり

あすか川きのふの淵のうす冰けふはあやぶみなくて渡らむ

あなし川結ぶ冰のつがねをにせゞの玉藻もけさは亂れず

池にすむ名をゝしどりの心より冰やいひのくちかたむらむ

霜をふむ木曾のかけ橋末つひに冰にいたる諏訪の水うみ

すはの海の冰の上に荷を積みて馬を舟とも渡す頃かな

すはの海の冰のとぢめ此の頃やつりせぬあまの岩戸なるらむ

水鳥

ゆく水の早瀬につれて吉野川岩きりとほす鴛のつるぎ羽

○鳰の海　琵琶湖。

○やすの川　近江國琵琶湖に注ぐ

○あなし川　大和國磯城郡。

○池にすむ　一本「冬の池の」

○冰にいたる　一本「似たる」

○つるぎ羽　劒羽、思ひ羽、いてふ羽。鴛鴦の尾の兩脇にある羽。

難波女をおのがつまとはなけれどもきつゝなれたる浦の水鳥

千鳥

しほの山うちこえきけば夕千鳥月もさしでの磯になくなり

さよ千鳥思ふつまにはうと濱の天の羽衣なれずとやなく

須磨人の寐覺のうらみ夜をかさねおふを苦しと千鳥なくなり

ひれふりし跡とや松浦さよ千鳥おのれも同じつま戀になく

思ふことありその千鳥しら浪のよるを寐られぬものと鳴くなり

飛鳥川せになる恨みきかぬ代を八千代とのみもなく千鳥かな

あられ

山かづら玉の緒とけて巻向のあなしの檜原あられふるなり

雪

むら鳥のねぐらいでても朝はみの處うしなふ夜半のしら雪

天つ風さえくらしたる名殘には水なき空に沫雪ぞふる

白雪の梢ふりしく夕よりあめのこゑやむ高砂の松

高砂の尾上のかねの雪の後にひゞくをきけば松のしたをれ

夕月夜おもふに殘るかげはあらじけさやをかべの松の白雪

○しほの山さしでの磯　甲斐國東山梨郡。
○うと濱　駿河國志太郡三保、不二見、久能、大谷の諸村に亙る海濱。
○ひれふりし　大伴狹手彥任那に使する時その妻松浦佐用姫別れを惜しみてひれふりし故事。
○飛鳥川せになる　「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる」（古今一八、雜下）
○雪の後に　一本「霜の後に」
○したをれ　一本「ゆきをれ」

羇中雪

ふる雪のぬさの追風しるべする道とてゆかば猶や迷はむ

鷹狩

天の川星のぬる夜はすくなきを片野に鷹のあはぬ日はなし

あらし吹く狩場の小野の草木よりつかれの鳥ぞしをれ果てぬる

み狩人野べのなら柴ふみしだきつかれの鳥のたつ空ぞなき

みかり人歸る夕日のおち草ぞ野べのきゞすの命なりける

炭竈

み山木は落葉してだにあせにしを又きりやつす小野の炭燒

み山木の二葉みつばの行末や今もえはつる小野の炭竈

大原やおのがうきにもこりはてず又寒さこふ槇の炭やき

炭竈のけぶりをかけて雪の中に一筋まよふ小野のほそみち

契冲がよませける冬の歌の中に炭竈煙纖といふ心を

をの山に炭やく賤のをだまきの絲に煙もよられてぞゆく

神樂

日のかげもまだ夜がくれの岩戸山あか星うたふ聲急がなむ

○鳥ぞ　一本「鳥は」
○果てぬる　一本「果てつゝ」

○小野の炭燒　小野は山城國愛宕郡。西は丹波國。木材薪炭の類を造りて京師に交易す。
○行末や　一本「行末は」

○あか星　金星。

○にひ桑まゆ　新しくとりたる繭

○ことしを　ことしはか。

貢調

貢物にひ桑まゆのしろたへにみくらの山と雪ぞつもれる

冬梅

鶯のなかぬへだてぞ猶うとき梅さく宿は春のとなりを

歳暮

浦島が箱にやあけし年ならむくやしくてのみ又ぞ暮れぬる

何をして暮れにけりともなき年の心恥かし慕ひしもせじ

冬はけふ幾日もあらぬ雪の中にしひて折りつる峯のゆづる葉

新玉のことしを今日に果てぬとも明日ぞきくべき鶯のこゑ

春秋の別れにしひて殘しつる涙はけふぞなき果ててける

大方はみ冬つきぬと思ふけふよつの時こそのこらざりけれ

荻の葉に半ばすぎぬと驚きし年もひと夜の笹のうへの霜

あすときく春や昔の春ならぬ老いてはもとのうれしげもなし

風まぜの雪も空にぞちりかはる年のいそぎは世人のみかは

爲兼大納言の體にならふ一首

ゆく年をおくりの翅雪にぬれて寒きからすの夕暮のこゑ

戀　歌

戀のうたとて

音にのみきくの朝霜色もなき心の何にうつりそむらむ

思ふ事いはねにこめて洩らさずばさてや知られでやまの井の水

白波のうちいでぬ程は思ふ事ありその濱もなぎさとやみむ

高ま山身はよそにして雲にいる鳥を羨む戀もするかな

よど河の魚も魚にぞまぎれすむひとり世に似ぬ戀もするかな

夕煙たが名はたたじ戀ひ死なば身をあだし野にいひはなすとも

伊吹山さしもかひなき思ひ草もえての後は峯の白くも

しのぶるに思ふ心はかつしかや逢ふにしかへばまゝの繼橋

涙川わがみなかみは世と共に氷らぬもののなに咽ぶらむ

雲居にて我こえがたき逢坂をいはとの關とみてや止みなむ

逢坂の關路まさしき夢もみず志賀の浦波うちもねぬ夜は

よるといへばねられぬ戀も故やあると夢殿にこそきかまほしけれ

戀しさの猶此の上に增りなばいかにせむとか逢はですぐらむ

○ありその濱　富山灣。近世詞人の言。

○まゝの繼橋　下總國の歌枕、ままは今市川町の北。

○涙川　涙の多く出るを川に譬へていふ語。

逢戀のこゝろを

うかれ鳥やもめ鳥も心せよまだ逢坂のやまは夜ふかし

旅宿逢戀

まくらとて夏野の草をかりそめに見しやいづこの大和撫子

待戀

苔のむすまつ程すぎてつれなきに我もいはねのこりぬべきかな

別戀

秋の夜の露をば露とおき別れなみだわけこし野べの道芝

今はとてわが別れくる道芝におきうかりとも見えぬあさ霜

名立戀

をし鳥の隱るとせしも顯はれて名取の川の淺瀨しらなみ

遠戀

我が中はすゑの松よりいきの松ふきかふ風のつてだにもなし

戀のうたとて

馬はあれどかちより渡る木幡川こは誰が爲にぬるゝ通ひ路

妹があたり神なる夜半にまぎれずばえぞ行きがたき淺水の橋

○つれなきに　一本「つらけれは」

○名取の川　陸前國名取郡。歌枕。

○渡る　一本「いく夜」
○木幡川　山城國宇治郡。宇治川の支流。

近江路のしるべとまではならずとも人なとがめそ瀨田の橋守

志賀の浦に戀せじとこそはらへしか又やかくべき逢坂の山

いまはわれ虎ふす野べに身なぐとも何かをじかの妻によりては

うつろはぬ瀨とも思はず色もなき心を人にそめかはの水

人ごとは皆僞りの世になれてまことを聞かばうとまれやせむ

我が爲はつむも拾ふもしるしなき戀忘れ草戀忘れ貝

今日まではありてゆくともみなせ川あすをばかけじ瀨々の柵

夏深き野山ばかりもつくしてむわが戀草ぞはらふかたなき

忘れゆく人の心のあさぢ原あとうらやすき宿の通ひぢ

通ひ路の草を冬野となすほどはなかなか人のかれむとや見し

うき人の心の嵐野をかけてふけばや草のなかもかるらむ

あきはてし入野のすゝき今はとてかるゝに似たる妹が手枕

爲兼大納言の體にならふ一首

いかにぞと疑ふ日頃けふになりてそむく限りの暮ぞみじかき

三島の社に奉りし百首歌の中に

ふるみちを又も尋ねむ心とは思ひもたえぬ佐野の船はし

○うつろはぬ瀨とも思はず　一本「うつろはむ瀨をもおぼえず」

○忘れ草　萱草。百合科の植物。

○忘れ貝　瀨戸内海に多し。

○あとうらやすき　一本「あとたえやすき」

○佐野　伊豆の三島町の北、今北上村の大字とす。

○しらま弓　白木の眞弓。又弓の縁語の枕詞。
○さゝがに　蜘蛛の異名。又枕詞。

戀の歌の中に

かつまたの池なる草を命にて猶いひたえじ人にこひつゝ

花がたみめならぶ魚と契りこし中より水はまづぞもりゆく

玉かづらはふ木あまたの後も見よもとの岩根はうつらざりけり

浪こえむものとは誰もしらま弓ひけばよりこし末のまつやま

風ふけばいでそよ今もさゝがにの袖にかゝりし暮ぞ忘れぬ

雲もなくいとはれにしを何處より今も身をしる雨のふるらむ

うとくのみなりゆく中の衣には程も千里の雲ぞたちける

蜑のすむ里といふ里を尋ねてもうらみはてよとなれる中かな

もとむとて又みるめかるかたもあらじ蜑の數へぬ戀の山道

雜歌

離別

あかずして別るゝ涙けふこそは我がめの前にふるのたきつせ

別るとて人にたのめし逢坂もあはづが原のあとのしら波

友の吾妻へ下るによみて遣はしける

別れての後あふ坂をまつよりはたゞ此のたびをせきぞとめまし

契沖が難波より山里にいりけるにいひ遣はしける

唐土にありし人だに戀かへすみつの濱なる松にやはあらぬ

旅

ゆきかへる程は我しもしら波の船路の日かず風ぞ定めむ

逢坂をこえゆく道のしるしにも猶すぎたてる關のいはかど

こえぬべきほどは遙かに都いでていく日の後としらかはの關

ゆき〳〵と見れば我が身の影ばかりともも添ひこぬ旅ぞ悲しき

八百日ゆく日數をいでて猶ふむは外の濱なる眞砂なりけり

羇中晩風

草も木もやどりは風にかしはてて暮れぬる野邊は寢む陰もなし

行客過橋

夕川に駒のりはなし旅人のかちよりぞゆく佐野のふな橋

海路

追風に聲をほにあげてうたふ船とほよるきけば秋の鴈がね

みつのさきこぎよる船も難波江の蘆の末よりほにぞ出でぬる

○唐土にありし人だに云々　在大唐時憶本郷歌。山上憶良「いざ子どもはやもやまとへ大伴のみつの濱松待ちこひぬらむ」（萬葉集一雜）

○ほどは　一本「ほどを」

苫ふかぬ浦の船人雨にあへば陰とぞたのむ和田の笠まつ

東に下りける時伊勢の四日市場といふところの濱より船にのりて熱田に渡るとてよめる

星崎に漕ぎてわたれば棚機の船のりすらむこゝちこそすれ

伊豆國三島の社に奉る百首歌の中に

和田の原底は千尋の波の上になにこゝちしてうたふ船人

無常の心を

少女子が其の紅のあさがほも夕はかるゝ花にやはあらぬ

あだにちる花と紅葉のぬさ見てもいとゞ我が世ぞ旅心地する

けふまでは消えぬ水沫も飛鳥川あすや空しきあとの白波

こしかたは更にもいはじ行末も同じ夢にてすぎぬべき世を

舊都のこゝろを

うつろひし都をとひて世の中はあだの大野のつゆを見しかな

かせ山に春さく花の一さかり移りもゆくか久邇の宮びと

風ふけば近江の海の沖つ波あれのみまさる志賀の花園

さゞなみの衣かけても思ひきや志賀の花ぞの麥を見むとは

○星崎　尾張國熱田と鳴海との間

○かせ山　鹿脊山。山城國相樂郡今木津町の東方。泉川に沿ふ。
○久邇の宮　久邇京は今の木津の邊。聖武帝の時こゝに造營があつた。
○衣　一本「哀」

述懐のうたの中に

天づたふ日をおふまではなけれどもおのが力ぞ我もかはらぬ

前をふみあとに躓き我こそは道もなき世に夏はきにけれ

かは衣毛をふき疵をいふ世にも身はつゝみなし麻衣にして

世の中はさこそからにの島つ鳥鵜のゐる岩もぬれぬ日ぞなき

荒汐の其の八百あひもいひたらず我いきしにの海のからさは

濁り江になれこし鴨もたちさりぬ我もうき世にさやはすむべき

終に我がいるべき身とてみ吉野の山口しるく世をやわぶらむ

世にふれば憂きことのみぞなれ衣早くぞすみに染むべかりける

かくしつゝ厭はで世をやつくし櫛さしもうしとは思ひしる身を

よの中のわたらひ草をふみからし山路の蕨いつかつまゝし

みだるべき世はたれ／＼も遁るらむ治まる時を獨りすてばや

世の中に道ありとてもふみとめじ山のいはほに進む心は

年頃難波に住みける人の出家して山にいりて名を禪海といひけるが許へ

世をうみのもしほは我もくみ絶えぬいざさそはれむ山の井の水

三島の社に奉りける歌百首の中に

○ぬれぬ日ぞなき　一本「しほなれにけり」
○世にふれば　一本「すめば」
○ことのみぞ　一本「事にのみ」
○世の中に　一本「中よ」
○くみ絶えぬ　一本「飽きぬ」

橋柱いざたてかへむ身の上のありしながらは言ふかひもなし

述懐のうたの中に

桂川心にかけし一えだも折られぬ水に身はしづみつゝ

いつか其の雲を凌ぎしあととめて我も高まのやまと言の葉

やまとの國故郷なりければよめる

つひにわがきてもかへらぬ唐錦たつ田や何のふるさとの空

山家

うしとても宿かり初めし椎がもとしひて我が世はこゝに過さむ

山里にけふきて見ればあらましに年へし我をまつぞふりぬる

山里に世の經がたさもならひきぬ友とはしるや岩の上の松

共にすむ山のかせぎも心みよわれ世の人に又やなるゝと

青つゞら垣ほをゆへば笹の戸も我があまなくに蜘蛛の絲筋

山里はかけひの水の絲筋によりあはせたる谷の細みち

山水をうくるかけひの竹のよも我が世もこゝにいざつくしてむ

水むすぶ岩のかけぢのおりのぼり我をならはす谷のしら雲

われぞこの谷の戸さして守るべき古巣あづけよ春の鶯

○高まのやま　大和國葛城山中の金剛山。

○ふるさとの空　一本「山」

○かせぎ　桛木。木の岐あるもの。

○あまなくに　編まぬに。なくはぬの延音。

○竹のよ　竹の節の間。

○いざつくしてむ　一本「過しはてゝむ」

位山みねなる人もふもととはわがみ吉野のおくよりぞ見る

老いぬるこゝろを

すゞか川八十瀬のなかばこすまでは我が年波の淀もありしを

昔見し秋のうの毛の末よりも山かすかなる老の目路かな

うつたへに頭は霜のふる蓬またひこばえの黑髮もなく

人の許よりうすやうえさせたるに

紙屋川せゞの薄らひ惜しければなべての鳥に跡はふませじ

是れやこの浦の濱ゆふ三熊野のかみのたすけにうるが嬉しさ

名所の歌の中に

枝ごとにくだけて寒き竹の音の時をもわかぬあられ松原

須磨の蜑のぬれて渚にほす衣までほは綱のめにぞまがへる

伊勢の蜑のわゝけさがれる藤衣からぬ袖にもみるはかけけり

少女塚しるしとつげの櫛なればいむとやささぬなだの汐燒

濱木綿の數さへあるを白浪の千重の沖こぐみくまのの船

こよろぎの磯のこがめの酒よりは沖のなごろにゑへる船人

わがみかど八島の中にたちいでてけぶり名をえし鹽竈の浦

○うつたへ　ひたすらに。殘りなく。
○うすやう　鳥の子紙又鴈皮紙。
○紙屋川　山城國桂川の支流。紙を漉き初めしといふ。
○薄らひ　薄き氷、うすやうに云ひかく。
○鳥に跡は云々　文字をかかせずと。鳥の跡は黃帝の時蒼頡の文字創作の故事より文字、筆蹟の稱。
○濱ゆふ　はまおもとの異名。
○こよろぎ　こゆるぎの磯、今相模國酒勾川と大磯との間の浦。
○なごろ　なごり。風過ぎて後波り立つこと、又その處。

鹽竈のまへなる蜑のつりの緒のさながらうけに迷ふ浦島

河原院

君まさでけぶりは遠くたえぬれどなぞながれひぬ鹽竈の浦

なるとをよめる

わたつみの鳴門は龍のかどなればうしほも瀧と落つるなりけり

瀧

少女子が天の川せにあらふとて流しやすてし布びきの瀧

ぬしなくてさらすとみつる山姫の布は巖にきするなりけり

川

穴師川せゞの岩かどたつをみて波こそ波の花は折りけれ

しかま川あさ緑にてゆく水も海にいでてやかちにそむらむ

富士川の歌あまたよめりし中に

ふじのねにまだき朝日のみえそめて後ぞ東（あづま）は鳥がなくなる

天の川みなぎるいさご年積り空よりなせる不二のしば山

ふじのねにのぼりて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり

富士のねの雪によすれば越路なる白山の名も下にきえつゝ

○浦島　一本「浮島」

○けぶりは　一本「けぶりも」

○みつる　一本「みえし」

○たつをみて　一本「たちこえて」

○いでてやかちにそむらむ　一本「いでてぞかちにそみける」

○なるさはの水　噴火口の水。

○なごりぞけぶる　一本「煙ぞたえぬ」

○ふるらむ　一本「みゆらむ」

○ねぐら　一本「とぐら」とぐらは鳥のねぐら。

ふじのねは天の川瀬の近ければ同じ雲居になるさはの水

富士のねはかのこまだらの雪開より今を春べともゆる夏草

千早振神さへ神をまつればやふじの柴山やくとみゆらむ

ふじのねは鳥ものぼらぬ雲の上にとびかふみれば天の羽衣

流れくる峯のいさごや水無月のふらぬたえまの不二のしら雪

富士のねの遠きをあはと見る程は只薄雲のめにぞ懸れる

ふじのねをめにかけてゆく東路はいとゞ程こそ雲居なりけれ

今も其のなごりぞけぶる竹取の世々にいひつぐふじの芝山

日に近き山はふじのねいづくとて夏のさかりに雪のふるらむ

六帖題にてよみける歌の中に、星

天つ風星の林をわたる世にさわぐ木の葉は空のむら雲

曉

あかつきの鴫のはねかく數きけばやこゑに限る鳥はものかは

夕

里中にゆふあさりせし庭鳥のねぐらに入れば日は山のはに

老子に吾不知誰之子象帝之先

朝くらや天の帝のさきにしてまだ名のらぬを誰が子とかしる

莊子の心を

大鳥の羽がひの山もうらやまず裾野にほたる草のかやぐき

埋火のきえさし炭を心にてかたちも霜の枯木ならばや

毛詩陟彼高崗我馬玄黃

けふ木曾のかけぢにみれば昨日みし景色もあらぬかひの黑駒

文選宋玉の登徒子好色賦に此女登牆闚臣三年至今未許也といへる心を

垣ごしにみとせの春の桃の花われ色ならばまづぞ折らまし

文選詩に渴不飮盜泉水熱不息惡木陰といへる心を

あしき山かげをばよきて盜人のたつ田の川は水もむすばず

秦始皇帝二世の時の事をとりあはせてよめる

かをさして遂にそれかと迷ふ世をかねてぞ馬に角はおふらむ

伍子胥

日はくれぬ道は遠しとことづけて仇にも馬の鞭やおふせし

いせ物語のこゝろ

戀せじといひはらへせし人しもぞ大ぬさの名はすゝがざりける

○ほたる　一本「をとる」
○陟彼高崗云々　毛詩國風の卷耳の句。玄黃は疲るゝ意。
○かけぢにみれば　一本「くれば」
○宋玉　楚の屈原の弟子。
○好色賦　楚の襄王を諷す。
○むすばず　一本「むすばじ」
○おふらむ　一本「おひける」
○伍子胥　名は員、伍奢の子、楚の亡臣。吳王闔閭に事へた。
○大ぬさ　祓の時用ゐる大串につけたる幣帛。祓畢れば諸人之れを引きよせて撫づる物。ある女の業平の朝臣を所定めずありきすと聞きてよみて遣はしける。「大幣のひくてあまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ」（古今一四、戀四）

○伊勢齋宮　歴代の天皇に一代毎に伊勢大神宮に奉仕せしむる爲差遣せらるゝ皇女又は女王、未婚者より卜定す。
○生田川　神戸の東、布引の瀧となりて海濱に就く。大和物語に「昔處女あり競ふ男二人ありけるを身になげきて生田川に投じ死せるよし。」
○空穂の俊蔭　宇津保物語の主人公仲忠の祖父、清原俊蔭、十六歳にして遣唐使となり波斯國に漂流し、鬼神にあひ名琴と祕曲とを授かりて歸來した。
○時ならぬ　一本「時しらぬ」
○捨てし　一本「からぬ」
○蛩や玉藻に云々　一本「蛩は拾はぬ玉なかりけり」
○にはくなぶり　鶺鴒の異名。

同物語伊勢齋宮

大よどのみるをあふにていとゞしくつれなき色の浦の姫松

大和物がたり生田川の心を

生田川淵瀬なくてぞはてにける思ひくらぶの山のした水

空穂の俊蔭

時ならぬ雪をふらせしことのをの調べやふじのねに通ひけむ

人丸の賛

敷島のみちひとりゆくかち人のこはたに馬は捨てしなりけり

貫之の賛

紀の海を土佐の海までかづきつる蛩や玉藻に飽きてきつらむ

市中隱士といふことを

事しげき市の中にはながれてもひとり騒がぬみわ川のみづ

物名歌

にはくなぶり

夕時雨ぬるゝにはくなふりやみて月になる夜の程もあらじを

きじのを鳥

下野やなす野にしげきしのをとりて東男の子は矢にぞはぐなる

はまつゞら

空さむく秋の夕風ふけばまづつらなる雁ぞみねこえて來る

ちのりのゆぎ

初かりのかりにあかねばあか駒にけふも打ちのり野ゆき暮しつ

なるとの沖

春秋に富むなるとのをきてみれば世々に老いせぬ門ぞ開くる

誹諧歌

女郎花

女郎花さきぬる時は野べごとに粟の飯をぞむしもなきける

除夜の心を

鬼をのみやらひやりつと思ふ世に追ひ失へる年にもあるかな

みの蟲を

みの蟲のつけるはゝその片枝に猶ちゝのなき事やなくらむ

○はまつゞら　濱邊に生ふる青かづら。

○ちのりのゆぎ　千入の靭。多くの矢を入るゝ靭。

蝸牛を

國をさゝげ家たゞも負ひてゆく蟲の力まことの牛にまされり

車をよみける

くだけたる車かぞふれば車なし牛をもとかばうしやなからむ

長歌

津の國にありてよみ侍りける冬の長歌

有馬山　山風はやく　時雨きて　冬にもなれば　木の葉ちる　生田の杜の
下草も　かれゆく頃と　しなが鳥　ゐなの笹原　おく霜の　さやぐ夜毎に
こやの池も　冰とぢそへ　みづ鳥の　牀さへあれて　しをれ蘆の　かげもま
ばらに　なるまゝに　難波のこやも　かくれなく　蜑のたく火の　よな〳〵
に　たきまされども　汐なれの　衣薄れて　浦風は　曉寒み　いねがての
枕をとふと　ゆき返り　みつの濱べに　なく千鳥　おなじ干潟に　朝霜を
ふむ蘆たづの　聲たてて　雲居にみゆる　伊駒山　梢の雪は　新玉の　春に
しられず　さく花の　林と見えて　和田のべや　大江の岸の　浦づたひ　遙
かに續く　住吉の　あられ松原　あられうつ　音もひとつに　よせかへる

○しなが鳥　ゐなにかゝる枕詞。
○ゐなの　猪名野。攝津國河邊郡。
○こやの池　攝津國伊丹町の北西
○冰とぢそへ　一本「とぢそひ」
○蜑のたく火の　一本「たく火は」
○春にしられず　一本「しられで」

波よりをちの　淡路しま　あはれことしも　わたつ海の　入日とともに　く
れむとすらむ

おほよそ歌のさまの遷り變り來ぬる事は、代々の集どもを見てもしるく、又人々のたてて好める姿も同じからざるは、大和言の葉のみかは唐土のもかくやあるべき。さるをおのが好めるひとすぢをのみよしと思へるは、かのいひがひとりてすみがねにするにひとしかるべし。此のふたつの集はならの葉のふるき心をもととして、詞の林にこゝらの春秋をおくり、硯の海におほくの年波をかけて、玉藻かづける人々のみづから撰びおかれたるが、又おのづから一の姿にてなむある。こたびかく板にゑりたるも、下河邊の水の心しづかに、難波高津の世にたかきしらべをしらしめむとのわざなりけらし。

文化八年正月棗がもとのあるじ躬弦しるす。

○いひがひ　飯匙。杓子。
○すみがね　墨金。定規。
○ならの葉の云々　奈良朝、萬葉集の心。
○躬弦　安田躬弦、國學を賀茂季鷹に學ぶ。

晩花集終

漫吟集

圓珠庵契冲

昔もろこしの白樂天は、元微之と言の葉の交らひに又なく昵びかはして、かたみにうるはしき心しりになむありける。近くわがみかどにも其のあとを慕へる人あり、下河邊の隱士と高津の阿闍梨となりけり。これもかれも心をあはせたる世のすね者にて、琴のねを聞きしりけむ中らひのやうにうるはしくむつびかはせしよしは、誰もよくしれる事なればいはじ。阿闍梨はいける程におのが歌を隱士に撰ばせて端書をこはれ、隱士は身まかりて後に其の歌を阿闍梨の集めて端書をそへられたりき。阿闍梨の集ははた巻あるを、隱士の集はしるしとめられざりしや多かりけむ、いと殘りすくなくて二巻なむある。今此のあはせゑれる一巻は、そのかみ二人のすぐれ人の自らの歌をみづからに撰びて、其の撰べる年月をさへ記しおかれたるが殘れるなりけり。おのがもとにつねものする書あき人英のしたがふがある日とひきて、此の一巻を見て、これおのれに賜へ、先づこれをゑりて後に又全集をも物せむ、いかにまれ端書をとこふまゝに、さらば全集とも合はせ見てとらせぬべしとて、一わたりよみかうがへてとらせやりぬ。誠や此のすぐれ人達の歌のさまよ、

（）元微之　元稹。唐の詩人、白樂天ミ親友。白樂天ミ元微之ミの唱和の詩作甚だ多い。

（）琴のねを聞きしり云々　得難き知己に譬ふ。鍾子木死、伯牙破レ琴、絶レ絃、終身不三復鼓二レ琴、以爲下無三足二爲鼓一者上。呂氏春秋）

〇六帖　古今六帖。

〇我だけく　我はがほに。自慢さうに。

共に其の心ざしよまれたるところ、六帖と歌仙家集との風骨をもととして、後のものにては風雅玉葉のたくみに、一ふしある樣をよく心にさとりえて、さてそれより後はおのれ〳〵がたてたる一つの姿をおのづからになしえて、思ふがまゝを至らぬ限なくたけくもみやびにもいひ續けられしなれば、一歌ごとに珍らしくもをかしくもあるぞかし。抑うたは人々の心々をいひあらはすものなれば、かかる姿もをかしきを、中には誹諧めけるがあるを見て、そぞろ高からぬやうにいひなし思ひおとす人もあるこそ、却りていかにぞやおぼゆれ。今の歌仙たちの、ともすれば、しらべといひて心高く思ひ構へたるが、よくせぬはいにしへ人の口つきをまねたるのみにして、古歌のもとするよみまじへて、我だけくめでたき歌よみえたりと思ふなどもあるは、よそめ苦しき事ならずや、さるどちにはかかる歌をも見せて、歌はいかなる姿にも心よりよみうべきわざなるよしも知らさまほしきことにこそ。清水濱臣

漫吟集

沙門契沖自集

春歌

年内立春

鶯もなかぬかぎりの年の内にたが許してか春はきぬらむ

はじめて詠み侍りける百首の歌の中に（于時十七）

み吉野の山は春たつけふごとに霞みなれてや又かすむらむ

元日子日にあたりける年

門松の今ひとしほの春の色も子の日にあへる今日やまさらむ

霞

高砂の尾上の松を雪ながらうづむは春のかすみなりけり

ひとへ山表もうらとなりにけり春の衣をたちし霞に

春風はそよとばかりの音もなし霞みわたれるゐなの笹はら

○子日　古昔正月の初の子の日に人々野に出で小松を引きて遊び千代を祝ふ習はしがあつた。

○ゐなの笹原　猪名野は摂津國川邊郡。

海邊霞

もしほやく難波の浦の八重霞ひとへはあまのしわざなりけり

若菜

おのがどち澤田のゑぐをつむ賤も今日やかたみに畔ゆづるらむ

住よしの細江もあせて淺澤にふかさくらぶる根芹をぞつむ

雪中若菜

片岡のあしたの原もくるゝまで雪ま少なき若菜をぞつむ

殘雪

高砂の尾上の雪のきゆる日にありつる松のいろぞかへれる

春氷

春風も氷の關をふきとぢてしばしとゞむる鳰の通ひぢ

二月餘寒

鴈がねのかへる翅を又やもるあかつき寒ききさらぎの霜

うぐひす

霧ふかき谷よりいでし鶯の野邊の霞にまたやむせばむ

鶯のやどにしむれば我がそのの梅も鄰のものにぞありける

○ゑぐ　草の名。

朝鶯

梅の花にほふ月夜をふかしても朝いゆるさぬ鶯の聲

百首の歌の中に、羇中聞鶯

故郷も今やうぐひすいたづらに人くとなきて我またすらむ

人の家に飼はれたる鶯のなくを聞きて

梅が香のさそふもつらくこの中はあるにもあらで鶯やなく

梅

梅が香にかゝれる雪はきえぬれど友まつ色ぞ花に残れる

色も香も誰にしれとか鶯のいでにし谷に梅のさくらむ

夕づく日かすみこもりし影きえて寒き入江をわたる梅が香

梅の花匂へる宿のたきものは煙ばかりぞまがはざりける

梅の花えだは限りのあるものを何にこめたるにほひなるらむ

鶯のやどはと問はば梅のはなさそひし風やいかゞこたへむ

梅が香のうすくやなると拂はねば春は枕に塵ぞつもれる

柳

濁りゆく雪解の水のうしなひし緑をうるは柳なりけり

○朝い　朝寝。

○この中　籠の中。

○こもりし　一本「もりこし」

○鶯のやどはの歌　「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞ答へむ」を本歌としたもの。

春風はやなぎが枝にこもればや吹くとはなしにうち靡くらむ

青柳のいとにつなぐと見るばかりよそにはすぎぬ春の河風

春雨

まきもくの檜原の霞たゞならず曇ると見れば春雨のふる

遲日

霞む日のゆくとも見えぬ山路より昔の人は老いずやありけむ

春月

にごり江にやどる影より霞めばやぬるゝ顔なる春の夜の月

玉津島うすきかすみの衣より光ぞとほる春の夜のつき

遊絲

佐保姫の霞の衣はる風にはつれにけりとみゆる絲ゆふ

蛙

鴈のゐし澤のうきぬにすみなれて常世をしらぬ蛙なくなり

つばめ

さのみやは飼ふともなれむあはれにも簾にいりてなく燕かな

歸鴈

○まきもく　大和國磯城郡三輪山の北に竝ぶ山。
○檜原　卷向山の麓。

○山路　一本「天路」

○佐保姫　春の女神。佐保は奈良の舊都の東の地名。東を春に配するより起る。
○絲ゆふ　かげろふ。

帰る鴈しばしゆきみよ散りぬればこゝも花なき里にやはあらぬ

聲はして空ゆく鴈のつら〳〵にみれども見えず霞む夕ぐれ

花

花を思ふ心はやまにはる霞かゝりし日よりかゝりそめてき

いみかねて月をだにこそ眺めつれいさめもかれし庭の櫻に

なのめなる事だにそはぬ櫻花たゞ散るのみのあかずもあるかな

ひとむらにまがふとすれど白雲のたちいでて見ゆる山櫻かな

あしびきの山の上なるやま櫻たゞ白雲のいづるなりけり

み吉野の瀧の白たまつきせぬは花ふむ鳥のたつかとぞみる

春雨も緣とのみは染めざりき櫻色なるみよし野のやま

吉野山さくらが枝にきゆと見し雪やこもりて花にさくらむ

下河邊長流が花見にまうできて暮れぬ歸りなむといへる折によめる

とめとめず庭の櫻にまかせしを夕日にまさる花な見すてそ

かへし　下河邊長流

とくと見てけふはたはるゝ花のひもゆふべと聞けばなれじとぞ思ふ

花月百首の歌の中に

○歸る鴈の歌　「春霞立つを見捨てて行く鴈は花なき里に住みやならへる」（古今春上）を本歌。

○花にさくらむ　一本「花とさくらむ」

○とめとめず　歸らんとする人を引きとむるもとめないのも。

花さけば蓬が中のふるみちも露うちはらひ人ぞまたるゝ

絲櫻を見て

花によりけふはまがはぬいと櫻あすのみどりは柳とぞみむ

尋花

年をへて花にまがへる僞りに尋ねもこりぬ峯のしら雲

山家花

さくら咲く軒端の山の春の雲かゝるをりだに人のとへかし

深山花

おく山のいはね苔むすさくら花春しりそめていく世へぬらむ

古寺花

山寺の花はのこりて鐘のおと今日もくれぬと人ぞちりゆく

雨後花

雨はるゝ空は緑になりぬれど山のさくらぞ雲とかさなる

花開鶯

古巣にはいまだかへらぬ鶯も木づたふ花のくもに入るなり

落花

○鐘のおと　一本「鐘の音に」

○さくらぞ以下　一本「さくらはくもぞかさなる」

○木ぐらし　一本「ぐらく」

○思ふことの歌　「山吹の花色衣主やたれとへど答へず口なしにして」（古今雜體誹諧）を本歌。

さきそめて春は幾日も暮れぬまに花なき里となりにけるかな

花やうきさそふ嵐もつらからず惜しむ心のあかぬなりけり

雨まじり風うちふきてふる里にちる花さむし春の夕ぐれ

山風の花にうき名はいま更に吹きたゆむともかひやなからむ

ふきすてて花ともしらぬ嵐山たれ山かぜの名をおふせけむ

みよし野の瀧の白泡梢よりおちて流るゝやまざくらかな

春の歌の中に

よし野山綠木ぐらし春くれてひとり花ちるたきの白波

つゝじ

かげろふの岩根のつゝじ露ながらもえなむとする花の色かな

はじめてよみける百首の歌の中に

なにしおはば淺澤沼は深からじいざ杜若おりたちて見む

藤

ぬしやたれ天つ少女が花かづら空よりかくる松のふぢなみ

山吹

思ふこととへど答へず我もまたいはでたゞにや山吹の花

暮春

鶯のなくにとまらぬ花見ても猶しるしなくしたふ春かな

東路はかへるの山もなきものを來てもとまらず暮るゝ春かな

夏歌

更衣

山吹の花いろ衣ぬぎかへて白きひとへもめづらしきかな

櫻色によるの衣をなほそめてかへさば春やゆめにかへらむ

母がたてたる願にかへて菅家の聖廟に百首の歌奉らむとせし中に

けふよりは天の羽衣えてしがなぬぎかふるてふ物も思はじ

殘花

夏衣たつ田の奥にきて見ればうすくぞのこる花の白雲

新樹

垣間より見えし鄰の人めだにしげればうとき宿のふるさと

卯花

忘れてはまた山の端ぞ見やらるゝ卯の花月夜めをたがへつゝ

○更衣　古、四月、十月に衣を著更へたることゝ。

○たつ　夏衣裁つと龍田とかく。

島つ鳥その名かよへるうの花も色に浪にぞ見えまがひける

葵

日のかげに向ふ葵をみる〳〵も人は心のねをぞまもらぬ

郭公

とこ世なる鴈だにくるを時鳥やまより月のいでて鳴かなむ

日ぐらしのなかむ夕は待ちもせじ山時鳥五月すごすな

もろかづら菖蒲をかけて卯月よりさつきまでまつ郭公かな

かひながらなくなる聲ときくほどは山時鳥かへらざらなむ

折しもあれ玉しま河につる魚のめづらしくなく郭公かな

閨の戸を叩く水鷄のさましつる夢をしからぬほとゝぎすかな

さ苗とる田にも時とて急ぐなり聲惜しむべきほどゝぎすかは

月前郭公

なつの夜の月すむそらの星よりもやま時鳥こゑぞまれなる

橘

たちばなのかげふむ道に忍べども昔ぞいとゞ遠ざかりゆく

あやめ

○その名云々　一本「にかよふ」

○島つ鳥　鵜の異名。

○とこ世なる　古昔極めて絕遠の地にありとした想像上の國。鴈はこゝより渡り來るとした。

○かへらざらなむ　なむは他に願望する意。

○たちばなのかげふむ道　「橘のかげ踏む道のやちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて」の歌による。

○かりそめの　刈り初めをかく。
○ことよせ妻　いひよれる女。

○橋のつめ　橋の端の方。
○ひづる　ぬれる。

○ともし　古昔獵人が夏の頃火串に松をもやして鹿をよせこれを射たりしこと。照射。

今日のみはまやのあまりにかりそめのことよせ妻の菖蒲なりけり
あやめ草けふは蓬にまじれども麻にもまして亂れやはする

五月雨

螢のみしげさまさりて五月雨にみ山がくれの草やくつらむ
さほ川にまさる五月のみかさ山雫や雨にあへず洩るらむ
山川の岩根にわたす芝ばしのつめだにひづる五月雨のころ

早苗

谷川の橋より外にかけひもて水をぞ渡す早苗とるころ

あふち

時ならぬ藤と見るまで五月雨の雲にまじるはあふちなりけり

水鷄

關のとを關路の鳥のそらねして叩く水鷄のはかる夜半かな

ともし

ともすとふたみかはれる筥根山鹿にもあはであけし夜半かな
つくば山花橘のにほふ夜は照射（ともし）のせなも香をぞとめける
ともしするさつをに問はむ梓弓ひけばもと末たが方による

○いにしへの　一本「いにしへに」

○うきみる　浮き海松。見るの序。

○氷室　冬の氷を夏まで貯藏する處。

○氷室山　氷室のある山。

夏夜

夏の夜はわれも久米路の神なれやわたしもはてぬ夢の浮はし

夏月

いにしへの鴨の河波たちかへりみそぎもすべく月ぞ涼しき

海邊夏月

うきみるのみる程もなし夏刈のあしやの里の短夜の月

螢

くるゝより人は音せぬ道のべを夜ゆくものは螢なりけり

蟬

蟬のなく梢にみゆるわくら葉やしぐるゝ聲の染むるなるらむ

氷室

氷室山夏なき年のさかさまに春さへくれて冬やかへれる

泉

松しげみてる日をさふる陰もよしあすも結ばむ飛鳥井の水

山の井のかげより見ればむすぶ手の雫に濁る峯のまつかぜ

扇

科長戸(しながど)の神のみ室にあらねども風は扇にこもるなりけり

納涼

ひとめこそ涼みがてらにまた見ゆれ花より後のこがくれの宿

しばしおく扇もちりのゐるばかり木陰に風の宿りをぞかる

夏のうたの中に

鶯のやどりし後のたかむしろ夏は人こそふしよかりけれ

夕立

あくた川ゆふだつ庭に流れいでて残る水草はなでしこの花

なゝくるま空にとゞろく鳴神の風にのりてぞ雨の夕だつ

夕立のよそにすぐるを時雨にてふじの高ねは初雪ぞふる

野夕立

やたの野は夕立すらしふく風のあらちの峯に雲さわぐなり

蓮

池水をいづる蓮のうきぬなはくりにもそまぬ花の色かな

荒和祓

みそぎ川風のまに〳〵大幣もあらぶる神もはなちてぞやる

○科長戸の神　しなつひこ、しなつひめの二柱の神の名より出づ。風の神。

○たかむしろ　竹席、竹にてあみたるむしろ。

○雨の夕だつ　一本「雨も」

○よそにすぐる　一本「よその」

○やたの野　矢田野。大和國生駒郡。

みそぎ川浪のあらだつ水上もけふより岩はこえじとぞ思ふ

秋歌

立秋

荻の葉のそよぐにつけて心さへ動きそめぬる秋の初風

西のうみの浪よりをちに立ちそめて風を便りに秋もきにけり

桐の葉の昔のしるし今もなほたがへずさそふ秋のはつ風

早秋のうたの中に

昨日かもとりし早苗のつかのまにふしみの田の面秋風ぞふく

七夕

へだておく神代の恨みいまも猶天の河ぎり晴れじとぞ思ふ

棚機のにぎたへ衣をさを繋みあふ事のみぞ間遠なりける

天の川かげふむばかり近き瀬を何へだつらむ雲のしがらみ

翠扇に奉らむとせし百首の歌の中に

渡す間にまづさ夜ふけて烏鵲(かさゝぎ)のはしになりぬる星合の空

百首の歌の中に閏月七夕

○昔のしるし　一本「ちぎり」
○たがへず　一本「わすれず」

○烏鵲の橋　七月七夕二星の相會する時かさゝぎの翅を廣げて天の川上に橋を作り星を渡すといふ。
○星合の空　七月七夕牽牛織女二星の相會ふ夜の空。

天の川名のみ文月のそふもうしさらでも遠き年のわたりに

七夕雨

夕立に涙のみそふ天の河思ひせくともかひやなからむ

七夕後朝

天の川いかにゆくへをせきかへし水増りぬと君をとゞめむ
天の川渡らば錦なかたえぬもみぢの橋のあけがたの空
さらばよと天の河ぎりたち別れみさへ涙にけさやおぼるゝ

秋風

松風の琴ぢをせめていとゞしく秋の調べのたかさごの山
ふく風のありてなければ秋の野の露よりすぐる聲もしをれず

露

たまと見て手にはとられぬ白露や月のかつらの雫なるらむ

荻

いかにせむ軒端の荻をかりすてて聞かじと思へばよもの秋風

薄

初尾花たがいつはりの涙より忍ばぬ袖の露こぼるらむ

○涙のみ　一本「なみださへ」
○七夕後朝　一本「七夕の別朝」
○渡らば錦　「立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中やたえなむ」(古今五、秋下)
○なかたえぬ　なかたえむか。
○露こぼるらむ　一本「つゆはならへる」

野となりてしげる草とや後は見む我がほり植ゑしにはの薄を

風ふけばすまの上野の花すゝき浦のけぶりの末かとぞみる

萩

立田姫山のにしきも織らぬまにまづ一むらの庭の秋萩

秋の野の千種の中にから錦たちいでて見ゆる萩の初花

女郎花

をるからに人にくからぬ女郎花猶あだし野の名をやたつらむ

春日野にいともなまめく女郎花妻こふ鹿やこゝろまどはむ

朝顔

めにちかく夢に現のまさらぬやたゞ片時のあさがほの花

かべにおふる草にはかなき名はきけど垣ほにみゆる朝顔の花

垣ほよりなびく便りにかゝりつゝすゝきにさける朝顔のはな

時しもあれ憂世をかりとなく涙いまぞ露けき朝顔の上に

はじめてよめる百首の歌の中に

藤袴ぬしをなとひそ秋の野をきてみる人のものとしらなむ

行路草花

〇庭の　一本「のべの」

〇をるからに下の句　一本「あだの大野の名をやたちなむ」

〇藤袴の歌　「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけ藤袴ぞも」の歌による。

萩にすり月草にすり狩ごろも野をわけゆけば色も定めず

秋の歌の中に

ゆきて見むくれなばなげの宿りかはまつてふ蟲の花になく野を

秋　夕

野邊やとき袖やおそきとくらぶれば涙も露もおなじ夕ぐれ

秋　夜

夕ぐれに秋の心はつくしにき寐覺はなにのもの思ふらむ

月

むら雲のちりもすゑじと月のゆく道もるものは嵐なりけり

秋の夜のながき天路をゆく月に嵐よ雲のつゝみあらすな

心ある人は昔にいではてゝひとり殘れる秋の夜の月

ながめつゝおつる涙をまづや知るつげぬに宿る袖の上の月

秋のよの月の桂のみなし川なみのひかりや花とちるらむ

小車にあらぬ名をかるかも川に月をも惜しとうつる夜半かな

廣澤の池のつゝみも名をとめて水もらさじと宿す月影

さらに又つきの都となりにけり波の玉しくひろさはのいけ

○なげ　なほざりなること。

○小車に　一本「小車の」

○廣澤の池　京都の西嵯峨の北、古來每秋都人士の月を賞する處。

○出見の濱　攝津國住吉郡。この濱にて淡路島を見やらるゝより名づけたらむか。又一說和泉の濱。
○月の心も　一本「心や」
○月ぞ以下　一本「月はさしにまちけり」
○わかるゝ以下　一本「わかれぬばかりすめる月かな」

住吉の松の木のまに待ちかねて出見のはまの秋の夜の月

聖廟に奉らむとせし百首歌の中に

西の海は月の心もとゞまらでみやこの山にまたかへるらむ

花月百首の歌よみける中に

天つ空をとめの扇秋きてもなほおかずやと見ゆる月かな

ゆきて見む思ふ事のみたがふ身はなぐさみやする姨捨の月

八月十五夜に

山のはは只よのつねの夕にて今宵の月ぞ年にまちける

秋月如畫

足引の遠山どりもひるると見てわかるゝばかりすめる月かげ

野　月

月にふすつげ野の鹿のよるの夢さめても霜と見ゆるかげかな

宮城野や小萩が露をはらふ風そらゆく月も雲にまつらむ

蟲

蜩のなく夕暮に誰をかもこてふに似たるまつ蟲のこゑ

さよふけて誰すみ吉のきしもせむ遠里小野のまつむしの聲

ねぶのはのしるしとするもあはぬまに山の陰野は蜩のこゑ

蟋蟀たが手をかれし水莖の岡ゆくまゝにふりてなくらむ

雁

夕風にきほひてすぐる雁がねにつらはなれたる秋の村雲

あらち山峯とびこゆる雁がねのつばさも寒くかゝるあわ雪

天の戸をおしあけがたになく雁や是れも常世のとりの初こゑ

鹿

さを鹿の聲をすゝきのほにあげて船岡山に今やなくらむ

さを鹿の妻にこよひやま葛原うらみなれにし聲のきこえぬ

鶉

ふか草やたれを野澤のこひ路よりうづらとなりて蛙なくらむ

淺茅原鶉のとこもいもと誰がねての朝つゆおきわかるらむ

擣衣

秋の夜も夢も短くなすものは枕ひゞかしころもうつ聲

秋田

ひつぢおふる刈田の面の今更にさなへにかへる色ぞ寂しき

○岡ゆくまゝに　一本「をかのくず葉に」

○あらち山　愛發山又有乳山。越前國敦賀郡、近江國高島郡との境。

○常世　甚しく遠絕の土地。我が古人の想像國。

○船岡山　京都市の北郊。源義朝の三子乙若、龜若、鶴若の殺されし處。

○いもと誰が　一本「いもとわが」

○おきわかる　一本「おきかはる」

○ひつぢ　刈りたる後に自生する稻。

菊

秋ふけぬすゝまぬ馬にいひなしておくれし心菊やならへる

露ながら折りてしさせば玉簾（たまだれ）のをがめは菊の雫なりけり

わたつみのかざしを菊にさしそへて浪を秋風ふきあげの濱

大井川千代もすめとや龜山のしづくに菊の露をそふらむ

紅葉

山姫のおもひの色のした染もまだくちなしの薄もみぢかな

立田やま秋の木の葉にめざかれぬいちにぬすみし錦ならねど

たつた姫そめばそむべき松の葉を紅葉にのこす心あるらし

山田もるかりほのかびにあひにあひて峯の紅葉も下こがるなり

いつはりの涙も色に出でにけり時雨にかせる衣手のもり

杣山のみや木にかゝるつた見れば今も色どる秋のしらつゆ

母がたてたる願にかへて菅家の聖廟に百首歌奉らむとしける中に

とりあへず紅葉をぬさと手向山神の心を神やうけけむ

九月盡

秋はけふつくし路遠く白雲のたなびく山の西にいぬらむ

○折りてしさせは　一本「をりてさせれば」

○菊の露　延命のたねとなるもの

○秋の木の葉　一本「木末」

○かび　鹿火。鹿などを防ぐ爲に田畑にて焚く火。

○みや木　宮殿造營の爲の材。

人はまだふるすとなきに浮名よりみをしる秋や暮れて行くらむ

冬歌

初冬

神な月雲の山ぐちうちしぐれ今日こそ冬の麓なりけれ

よつの時みつの濱風いと早もなにはを過ぎて冬はきにけり

時雨

神無月木の葉まじりのほどもなくまだ雪がてにふる時雨かな

宵のまの木の葉の後やしぐるらむ寐覺めてきけば軒の玉みづ

落葉

時雨ふり嵐ふきそひしげ山もは山にあする冬はきにけり

さゞなみの近江の宮木冬がれてのこる葉守の神だにもなし

みなの川もみぢ葉流る筑波ねの山もとゞろに時雨ふるらし

山深み霜ふむあとの一筋や木のはの奥の人のかよひ路

白雲のうづむ山路はわけなれてけさや木の葉にまよふ柴びと

せかれてはまさらぬ水や増るらむ木の葉もおちて瀧にそふなり

○浮名より　秋(飽きをかく)といふ名によりて。

○みつの濱　難波大伴の郷三津濱

○みなの川　水無川、又男女川。筑波山の男體女體の間を南へ降る溪流。櫻川に注ぐ。古來歌名所として知らる。

冬のうたの中に

神無月春めくからのあやまりに殘る紅葉は花ぞまじれる

殘菊

あはれてふ言の葉草は霜がれてあまたにやらぬ白菊のはな

霜

秋風のやどりすてたる荻のはに古里さむくおける朝霜

冬の夜のさゆる空ゆく鴈がねの氷るなみだやけさの朝じも

山里にて冬の夜螢を見てよめる

冬枯の草のほたる火すさまじく燃ゆともなしにうち光りつゝ

冬の歌の中に

霜がれの柳が枝のかたいとを心細さにあはせてぞ見る

寒月

山川の魚もなきまですむ水にあひにあひたる冬の夜の月

雲もなく山の端はるゝ雪の上に出でやすけなる冬の夜の月

氷

難波江にしをれてたてる蘆づゝのひとへに似たる薄氷かな

あしのやのこやの池とやふく風のとづる氷も隙なかるらむ

飛鳥川うへはつれなく氷りゐてしたの淵瀬やなほかはるらむ

なる瀧や氷らぬ名のみ聞ゆれどけふは都のおとなしの川

音羽川ゆきこそなやめ逢坂のこなたも關ととづるこほりに

寒蘆

ながれ江の小野の古江の名も寂しいせの濱をぎ霜がれしより

水鳥

つるぎ羽にけをふく風ををし鳥も霜凄まじきよとや侘ぶらむ

かつまたに冬も猶ゐる鳩鳥やつれなし草のねにかよふらむ

千鳥

跡つくるありその海の浦千鳥眞砂の數をよむかとぞ見る

室の浦の夕なみ千鳥なき島のありとやこゝに聲もをしまぬ

山里に住みける頃千鳥のなくをききて長流がもとへ難波へ詠みて遣はしける

ならひ濱ありし難波もやゝ河の友なし千鳥こひつゝぞ鳴く

雪

○おとなし川　紀伊國熊野本宮近くにあり。
○小野　伊勢國鈴鹿郡。關町の東。
○つるぎ羽　をし鳥の兩脇にありていてふの形をしたる羽。いてふは。おもひは。
○をし鳥も　一本「鳥の」
○かつまた　勝間池。大和國添下郡藥師寺近傍にありし池。蓮の名所。
○つれなし草　蓮の異名。「年をへて何たのみけむかつまたの池に生ふてふつれなしの草」（六帖、六）
○浦千鳥　一本「濱千鳥」
○室の浦　播磨國揖保郡。古、瀨戸内海の要津。
○夕なみ千鳥　夕波に立つ千鳥。

冬ながら天つ空にはさく花のあらしや吹きて雪とふるらむ

こゝにだにしばし積りぬ山里は雪の上にや雪のふるらむ

紫もあけも色やはかぎりなき野山をわかず降れる白雪

三吉野はふる里とてやさえくらす雪げの空も荒れて見ゆらむ

竹川のはしより見れば木にもあらず草にもあらぬ雪の花園

ふたごもりせまほしげなる筑波ねを新桑まゆにつゝむ白雪

雪はまだ面影ばかりふりそめて靡きもはてぬ眞野の萱原

山家雪

山里いきのふの木の葉けふの雪いづれか八重ととふ人もなし

百首の歌の中に、海邊松雪

松のゆきつもりてはるゝ曙にみやこ忘るゝ天の橋だて

長流に冬の歌二十首をすゝめければ詠みて其のはしに

と書きつけたりしかへし

花もなき冬の山人たきゞこりになひいだせる歌もきかなむ

冬深み雪にわけいる山人のなづむともなき斧のおとかな

あられ

○ふたごもり　二つの蛹のこもりたる繭。筑波山に男體女體二峯あり。
○新桑まゆ　新しき蠶の作りたる繭。
○歌もきかなむ　一本「歌さ」

しぐれせし小野の篠はら風さえてあまる雪より霰ふるなり

住吉のあられ松原わたつみのわが玉にとや散るを待つらむ

みぞれ

霙こそ雨と雪とのまじるなれ思ひ定めず世にもふるかな

鷹狩

海はまださかぬ冬野の狩場にも犬ぞきゞすのかをとめてゆく

爐火

埋火のあたりは春をいつとてか庭には雪のけぬが上にふる

神樂

今も其のとこよの鳥のしだり尾の長くぞともに慕ひあかせる

佛名

やすみしる君も今宵はつかふなり三世の佛を共に唱へて

雪中梅

冬ながら咲きてとくちる梅が枝に殘れる雪や春はをられむ

年のはてのうた

くれにけりありて憂き身のながらへば又こむ年もかくや歎かむ

○春を　一本「春の」とある。

○佛名　御佛名・佛名會。十二月十五日より十七日まで三夜過現未三千佛の御名を稱へて罪障を懺悔する行事。

○流れし　一本「流れて」

白絲の長き春の日秋の夜もなほ玉の緒にくるゝ年かな

立田川よし野の瀧の花もみぢ流れし年をくゆるけふかな

除夜

百敷にもゝの弓いて今宵こそあしのや遠くはなちやるらめ

戀歌

初戀

昨日まで何とはなくて思ふことけふ定まりぬ戀の一つに

おちそめて涙あれどもけふしれば戀とやいふと心にぞとふ

古風にならひて詠める歌の中に

たゞにいはむ事をやさしみたとへつる心をこふと知りにけむかも

欲言出戀

忍ぶれど猶思ふには玉簾(たまだれ)のまくと知らせむひまだにもがな

百首歌の中に初尋緣戀

ならはねばみるめ刈るべき由をなみ先づなれそむる浦の蜑人

忍戀

深き谷淺しとだにもえぞ見えぬ忍ぶの山の雲がくれつゝ
それをだに忍ぶ事とて君がすむあたりの空も眺め兼ねつゝ
かくとだにまだ書きやらぬ水莖の水城(みづき)の堤思ひせきつゝ

百首の歌の中に、忍親昵戀

うとからぬ人にはなほぞ忍ばるゝ物思ふ色やなれて見ゆると

戀の歌の中に

物思はばまづこぼれむと兼てより涙やまちし落ちがてにせぬ
おもひ川人をふちには戀ひながら袖ゆく水の何さわぐらむ
梅が香も手折る袖にぞ移りぬるなどよそながら思ひ初めけむ
ふみそめて迷ふ戀路の巷にも昔に似たるねこそなかるれ
はかなしな心のうらもかめとのみ行方はしれど身は焦れつゝ
木の葉ちる庭の月かげ宵々にまさりてものを思ふ頃かな
まとりすむうなての杜にゐる鷺の紛れぬ戀や色にみゆらむ
かさゝぎの渡さぬ夢の浮橋も空に通へばあふ人もなし
思ひねの夢の直路(たゞぢ)の浮橋もあふくま川にわたすよぞなき
片絲を此方ばかりによるの夢たが合はせてかあふと見ゆらむ

○おもひ川　下野國都賀郡。小山の西を南流して利根川に注ぐ。
○袖ゆく水　淚。
○移りぬる　一本「移りける」
○思ひ初めけむ　一本「思ひしみけむ」
○はかなしの歌　占といつたから龜、龜の甲を燒いて占ふから焦るといつた。
○まとり　鷲の異名。

思ひねの夢ともしらでかへしつる衣を中に厭ひにしかな
おもひねの夢をはかなみ起きゐつゝ猶心から見つる月かな
よそにのみ見るを逢ふにてはし鷹の野守の鏡手にはとられず
人ごとも同じへだての垣越にみてややみなむ朝顏の花
しらまゆみ小幡の里にひく駒のたゞによるべき心ともみず
我さへに人の名だてとなりぬべき戀ひずばつらき心をもみじ
殊更にわが爲にとも憂からずばもとよりつらき心なるらむ
いとゞ猶あくがれよとやつらからぬ氣色ばかりを人の見すらむ
火にいりてけふの細布やけずばと君もたのめど胸合はぬため
戀ひわびて影となる身の帶とだにつらき心のゆるびやはする
人にやは君がつらさの報ゆべき後を始めにしらせてしがな
報ゆべき後の世かねて思ふには君が爲にもつらき君かな
つらくとも共に千歳の命もて戀ひばやへにあふ時のあらむ
松が枝の時雨の後の雪をれをつれなき人になほや積まむ
たけくまの二木たぐはぬもの故やみののお山のまつ事にせむ
ありて世の果てはうしともあひ見ての後の後こそ思ひ合はせめ

○はし鷹　鷹の一種、鷹狩に用ゐる。
○野守の鏡　野中の水に物の影の映るを鏡に見做していふ語。
○しらまゆみ　白木の眞弓。枕詞として、引く、張る、射るに冠す。
○君もたのめど　一本「たのめよ」

昔のなみだに竹は色かへき今のしぐれは松をそめばや

こひわびぬ竈のふしどに迷ふとも君があたりの霜にだにねむ

吉野川さくる妹脊の山かづらなびきもあはず玉藻ならねば

白浪の濡衣きても越えましを垣ねばかりの隔てなりせば

心のみしがらみ越えて飛鳥川せゞの玉藻はしたみだれつゝ

神垣のあなたのさかき手もふれずなに白木綿に思ひかくらむ

うき中は蓬が島の水よわみおとには聞きて舟ぞかよはぬ

戀の山よしのの山と尋ねいりて人をも身をも思ひすてばや

濱のふをせきにて越ゆる三熊野の浦わの浪をいくへとかしる

あら磯の巖の上にゐる千鳥あとだにつけぬ戀もするかな

うばたまの闇のにしき木あやなくも千束の數をたてぞ初めける

仙人の遠きを近くなすわざも知らねばよそに戀ひつゝぞふる

した紐をゆふ山雪のとけもせば積れる戀のしるしとをみよ

八橋の其の橋つくり君なれやこなた彼方に思ひかくらむ

梅がえのこなたかなたに鶯のうつろひやすくみゆる君かな

さゝわけし野中ふる道たちかへり何いまさらに袖のつゆけき

○なみだに竹は　一本「なみだは竹の」

○蓬が島　蓬萊。

○にしき木　一尺ばかりの木を彩色したるもの。古昔奧州地方にて男の女にあはんとする時、之れをその戸口にたておき女逢はんと思へばとり入れたりといふ。

○戀草　戀の情を草のしげるさまにたとへいふ語。
○ちから車　人のひく荷車。

○井手の下帶　山城國井手にてある男、己が帶を一女に與へたりしに數年後再び其の女に邂逅せりといふ故事。親しき男女再びめぐりあふ事。

人心あきよりのちのあらを田をかへすもくるし賤の小田巻

寄雲戀

山風の拂ふあとよりゐる雲やつらきにかゝる心なるらむ

寄魚戀

池水の底に千さとをゆく魚のおなじこひぢの果てぞ知られぬ

寄車戀

戀草をおもにに積みて逢坂にちから車のくだけぬるかな

寄遊女戀

波のうへ舟のうちなる蜑の子の浮きたる戀に世をや過さむ

増戀

消えそむる雪まのくさの緣より日にそふものは思ひなりけり

祈戀

はつせ川みをの杣木の流れても遂によるせを祈りてぞまつ

幼戀

玉水の我はぬるまじ忘るなとことに結びし井手の下帶

名立戀

み狩野にふる白雪のくちのはにかゝりそめてもたつ浮名かな
磯がくれ忍ぶの浦にまがへてもわが名は風におきつ白なみ
いかにして逢ふとはなしにあふくまの霧ならぬ名の浮きてたつらむ

恨戀

片戀の岡の葛葉をふきかへし心のうらは今ぞまさしき
さよ衣かへすしるしやこれならむ夢にも人をうらみつるかな
あはぬ夜を中に隔てて杜若すらぬ衣しもうらみてぞふる

待戀

何ゆゑにさわぐ烏としらねどもしたまつ人にたのむ夕ぐれ
またるなよたぐひも何かつらからぬ山時鳥ありあけの月
とはばこそそれともきかめ松蟲のしるしなきねを鳴きて更けぬる
こぬ人を待兼山の雫にもいはほとなりて我や濡れなむ

連夜待戀

有明のまたれのみする月だにもよを隔ててはつれなからぬを

久待戀

あはぬまに千年はすぎていににしをさてだにまつの久しかるらむ

○すらぬ衣　老を摺りつけて染めぬ衣。女に逢ふことの出來ぬ意。

○行方も　一本「行方は」

○玉くしげ　ふたの枕詞。

○こぎかへる　一本「いたづらに」
○それやらむ　一本「かへるさも」
○心ならずば　一本「心なりきや」

○後朝　男女相會ひたるその夜の翌朝。

○末の松　「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとは」（後拾遺十四、戀四）

戀のうたの中に

とはじとてとはぬばかりや僞りのつくしもはてぬ誠なるらむ

音はして行方もしらぬ小車の夕とゞろきをなに殘すらむ

逢戀

鏡山むかふ直眼（たゞめ）のいとゞしくありしにこゆる逢坂の關

玉くしげ同じふたみの逢坂にあけやすからぬ關の戸もがな

不逢歸戀

こぎかへる雪の夜舟のそれやらむあはぬを人の心ならずば

戀のうたの中に

難波江に短き蘆を尋ぬともひとよのふしもなきをやは見む

別戀

もゝ羽がき明くる澤邊をたつ鴫のしきりになりぬ後朝（きぬぎぬ）の空

時しもあれ同じ心にわかるらむわがしのゝめの峯の横雲

鳥は猶そらねもあるをきぬ〴〵にまがへかねたる鐘の聲かな

誓戀

末の松こゝにたとへば逢坂の關やはこえむ志賀の浦なみ

契戀

陸奥の關とかためし下紐を人になときそ朝がほのはな

なみならず思ふ心は人よりもわれこそ越えめすゑのまつ山

聖廟に奉らむとしける百首の歌の中に

玉の緒を此方かなたによりかへし又片絲のなげきをぞ見る

忘戀

かりねせしいせの濱邊の枕だちさやは後さへ忘れはてける

戀のうたの中に

戀ひしなぬ命いつまでながらへて我つれなさを人にうらみむ

三輪山の同じしるしに年とともふるの神杉誰かたづねむ

人心うとの濱松はまひさぎまつに久しくとはずもあるかな

變戀

梓弓ひきたがへたる契りよりもとのつらきにかへる君かな

あはぬまをうつろふ時にくらぶ山花も惜しむぞまつに増れる

我が身こす人の心のあだ浪にまたたが袖の濡れむとすらむ

君がすむ宿のもみぢ葉霜をへて主人に似たる色も恨めし

○こそ越えめ　一本「こゆれ」

○枕だち　枕太刀。用心の爲枕邊におく太刀。

○三輪山　大和國磯城郡。初瀨山の西。大物主の神鎭まります。
○うとの濱　駿河國有渡濱。羽衣の傳説をうみし處。
○ひさぎ　楸、植物。

絶戀

誓ひてし人の玉の緒それならで忘られそむる中ぞたえゆく

たのめこし言の葉よりも忘られぬ俤いかで人にかへさむ

戀草は人の心にかれはてて植ゑぬよもぎぞ庭に繁れる

冬草も春はみどりになりぬべし憂き中のみぞ枯れてやみぬる

みくさおひて流れ兼ねたる古川のいつよりとなく絶えし中かな

わが誠ひとの僞りいたづらによそに知られず絶えにけるかな

秋くれば紅葉の橋もつくるなり絶えにし中を何にたとへむ

昨日こそあふみの海の濱千鳥けふは跡のみ見てや忍ばむ

羇旅歌

山里にすみける時に頃のあなたに難波より來てすむ人ありけり一年ばかりありて卯月の末つ方にまた難波へかへりけるを別るとて

けふ別れやどの橘あす咲かば明日のむかしを君やしのばむ

遠江へ下る人をわかるとて

君がゆく遠つあふみぢ遠くとも濱名の橋のかけて忘るな

○戀草　戀の情を草の茂るにたとへたる語。

○みくさ　水草。

○けふ別れの歌　今日別れたら、明日咲く宿の橘によつて今日を昔として君がしのぶだらう。「さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今、三、夏）によつたもの。

○人を別る　をはよりに通ふ助詞人より離るゝ。

○別れこしの歌　「漕ぎて行く舟にて見れば足引の山さへ行くを松を知らずや」の表現に習つたもの。

○枕だち　枕太刀。たちの序。たちさ同調。

かりそめにすむ宿にて人を別るゝ人に代りてよめる

旅にして我さへよその人ながら猶わかるべきものとやはみし

別

わかれぢの心細さにくらぶれば手折る柳もいとゞみじかき

共にたつ宿の梢のあさ鳥のかへる夕をいづくにかねむ

旅のうたの中に

別れこし心まどひにふる里の山さへあとに行くかとぞみる

いでてこし我がふる里を人とはばいづれの雲をさして答へむ

すみなれし里をいくへの山ごしに雨露霜のおきてきぬらむ

心ある人に一夜の宿かりてなるゝも悲し明日のふるさと

旅ねする宿のともしびあかき夜はいとゞ心の闇ぞまされる

枕だちたちのいそぎに驚きて夢のたゞちの束のまもなし

一夜かる宿だにあるを故里は何ごゝちしてわかれきぬらむ

草枕ゆふべ〳〵に數ふれば野くれ山くれ我はきにけり

袖かへすしるしもまたず故郷をおもひ寐にねしくさの枕は

霜にかれ風にをれつゝ旅人のまくら寒けきいせの濱をぎ

○故鄕をかへる云々　一本「故鄕も夢ぢはかりは」
○いつもと柳　五本柳。
○別れし日　一本「たをりし日」
○雲ふみかねて　一本「ふみがてに」

あけなばと思ひつゝぬる夢路よりかねてやすめぬ足柄の山
故鄕をかへる夢路は近かりきさめざらましを唐土のはら
故里のいつもと柳いつもかも別れし日よりわれを戀ふらむ
故鄕の蓬も今や亂るらむわが朝がみをけづる野かぜに
天雲に心づかひをたぐへつゝふる里とほくやらぬ日ぞなき
狩衣はぎが花ずりにほふとも誰にか見せむ旅のしるしを
海山も賴みしまではなぐさまで旅としるく\名をやたてまし
山高みあなたおもての麓にも雲ふみかねて誰ながむらむ
岩根ふむ山路の苔もあるものを行末うづむみねの白雲
越えかゝるうつの山路にはふ蔦も往きあふ人も又わかれつゝ
蔦も枯れかへでも枯れてうつの山うつればかはる雪の下道
夏衣うすひの坂に秋かけて夕風さむみ越ゆとつげばや
こえぬとて都につけし使りだにきこえ聞えず白かはのせき
故鄕の軒端の草のしのぶ山こゝろやおなじ名に通ふらむ
限りなく遠くもきけり故里をしのぶのころも身にならしつゝ
故鄕の人のかためと下にきてなるゝをいとふ旅ごろもかな

秋旅

衣うつ音に旅寢はまどろまずみやこの夢もいまやさむらむ

旅泊

うきねするからの泊りの波の音にたのむ夢路もとほきふる里

沖つ波うきねの袖にかけて思ふわが故里もいまや荒るらむ

哀傷歌

先師身まかりける時あひとぶらふべき人のとぶらはざりければ詠みて遣はしける

しでの山こえぬ人には疎くとも先だつをだに哀れとはみよ

父が越の國にて身まかりける時よめる

雲るだち猶おなじ世と頼みしをさてだにあらで別れぬるかな

近江國にあひしりて侍る人の秋の頃みまかりぬと聞きて其の子のもとへとぶらひ遣はしける

つなぎけむ近江の海のとまり船誰みづ莖の間にかくせる

時しもあれ君がなげきの霧まには涙ばかりに海もみゆらむ

いはきなき娘うしなへる人に遣はしける

君が手を離れておつるしら玉に涙やそひて砕けいづらむ

無常のうたの中に

わたりの川うへにむすべる薄冰しらで此の世にふむぞあやふき

けふこそあれあすは飛鳥の川千鳥たち居をかねて誰か定めむ

よみぢより終の使をたつの市にまさるともやはあはで果つべき

ぬしや誰雲にめわたる鳥邊野に數はたらでとなかぬ日もなし

花薄みはなきものと知りななむたゞ朝露の結ぶばかりを

朝顔のしをれし花をはかなしと夕露の身のおもふなりけり

わかの浦に老をなこその關すゑて常磐の山にすむ人もなし

朝顔の萎るゝをまつ人の世に松の千歳のなげきをぞする

鐘の音にあけぬと聞くも悲しきは終らむとての始めなりけり

はかなさをよそにおきても思ふかな身は露ならで何に均しき

釋教歌

眞言宗の心をよめる

○鳥邊野　京都五條坂の邊。古より葬所荼毘所にして知らる。○數はたらで云々　一本「數はたらでもなかぬ日はなし」

○人の世に　一本「世も」

うち日さす宮の八重垣たかければひま求めても見るよしぞなき

陸奥もこゝにありてぞ遙かなる誰かはいはむ住む人のため

うす霧を月の光と見ぬことは雲のかけ橋えねばなりけり

さはりなき空ゆく風に身をなさばうしの車も何かおよばむ

なる澤にふじの高ねはおどろかず清見がさきに沈む心を

人しれずつたふる法の燈(ともしび)はかりにも惜しむ身をばやくとて

かくぞきく法の燈てらすとき心の闇はひかりなりけり

燈を人のためにと挑ぐれば心の闇ものこらざりけり

菩提心論衆生愚朦不可強度のこゝろを

夕闇に玉なさづけそそならぬを欺くやとてくだきもぞする

最勝王經捨身品をみて

虎のすむ竹の林のすてごろも心ぞ早く世におほひける

弘法大師

高野山苔のみむろを天の戸にとぢし光もいつか照らさむ

聖德太子

耳敏川かは音近くきこゆるに其の水上のしるくもあるかな

○なる澤に　一本「澤ぞ」なる澤は鳴澤、噴火口をいふ。
○高ねは　一本「高ねに」

○最勝王經　金光明最勝王經の畧又金光明經。四卷十八品。奈良朝以後盛んにして法華經仁王經と共に護國の三部と崇められた。天台の敎義。

○耳敏川　太子聰明にして一時によく十人の訴へを聽き給うたといふ。

二月十五日涅槃の心を

佛だに猶かりがねの雲がくれ北を常世と今日ぞかへれる

春ながらかれしなげきの更々に何を陰とかいまはたのまむ

ゐにかけるこのしたぶしのみ佛もおなじ所におどろかすらむ

四月八日灌佛

よもにゆく今日のあゆみぞ頼もしき何處か法の道なかるべき

法の水物にまかするうるほひも二つの瀧のけふやかなへし

十二月八日成道

あやしくぞ心の月のいでてこし曉やみの山のはなわに

釋敎のうたの中に

いつかわがもとの佛の位山まよへる雲の嶺にかへらむ

磨きつゝ玉はありしに增るとももとの光を誰かそふべき

有明の月にまどひて長き夜をあけぬと思ふも夢にまさらず

玉とのみ石を包みしまどひよりあらぬを法と思ふはかなさ

長き夜のねぶりの杜に春風のいづるこのめを吹きてさまさむ

人やりの六つの道かは何しかも我がこゝろからしひて行くらむ

○二月十五日　釋迦如來入滅の日

○とこよ　常世。極めて絕遠の地にあるといふ想像上の國。

○四月八日　釋迦如來降誕當日。西曆紀元前五百六十六年。

○十二月八日　釋迦の大悟徹底し給うた日。

○六つの道　天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄。

行く水に数かくとのみつくる罪あとこそ殘れ結ぶこほりに

戒

法の舟楫も碇もありながらまづ心せよそこやまたきと

碇

いきしにの海に繩たぎいかりおろし物なおもひそ法の舟人

楫

法の舟ま楫しげぬき生きしにの海の荒汐はやしのがなむ

煩惱卽菩提

鏡山みがけるものに聞ゆるも世をへてつくる聲にやはあらぬ

密　名字のこゝろを

難波江におふるを見れば蘆垣の吉野の山は名だにへだてず

雜歌

三十六人の歌仙の贊によめる歌の中に

人麿

さを鹿の高角山のいたゞきに生ふるこずゑは誰か仰がぬ

○繩たぎ　繩をたぐる。

○しげぬき　繁く拔く。幾挺もたてゝ。

○高角山　石見國那賀郡都野津にある山に高といふ山の美稱をつけたのであらうといふ說もあるが今同國美濃郡高津町の高角山に人丸の祠があり、一般に人丸の舊蹟と擬せられてゐる。

○和歌の浦に　赤人は聖武帝の御幸の時紀伊行幸に従ふ。

○人しれず云々　兼盛の作「忍ぶれど色に出でにけり我が戀は物や思ふと人の問ふまで」と拾遺集一）

赤人

和歌の浦にたち出てきけば鳴き渡るたづの一聲高くもあるかな

素性法師

花山の種とはしるしいその上ふる野のさくら同じにほひに

齋宮女御

久方の天つ少女の琴のねに通ひやかねし峯のまつかぜ

兼盛

人しれず思ひそめ川深ければいづる色には猶まけにけり

中務

いせの海の蜑の子とこそ思ひしをわかの浦にもかづきぬるかな

喜撰

時鳥まれにやなきし宇治山の雪間の月のかすかなる音も

蟬丸

あやしくも逢坂山のこがくれに蟬ぞなくなる琴のねにして

長流がえらべる林葉累塵集の中によくよめりと見ゆる人を賛しける歌の中に

長嘯

敷島のやまとながらに機ばりの唐錦ともみゆる言の葉

長流

はしならぬ人の言の葉くちもせじ長良の川のながく流れて

田邊通直妻

言の葉も心を種とねふかめてたなべの磯におふるつまゝか

おなじ人の娘はゝにたがふことありてしばらく外におかれける時のうた

そのはらのたつあき霧のはれぬまは我がはゝき木をみぬぞ悲しき

そのはらにおふる梢のともすればはゝき木にこそ見えまがひけれ

僧禪秀　松島にすめりさか

松島に人はまことに住みにけり其の言の葉の見れどあかぬは

結城道閑

武夫の心もしるく言のはもよはひと共にたけくまの松

難波にいでて後下河邊長流によみて遣はしける

耳なしのやまの鶯いたづらに花になくともたれか聞くべき

めなし川水の泡とも誰か見む君がうたかた消えはてぬべし

○長嘯　木下勝俊。豐臣秀頼に仕へた歌人。大阪の陣の頃世を捨てて長嘯子と號す。慶安二年(二三〇九)歿、年八十一。擧白集、九州の道の記等の著がある。

○長流　下河邊長流。その晩花集は本書に收めた。

○つまゝ　磯際などに生ずる木の名、詳かでない。妻にかく。

○そのはら　信濃國伊那郡にある地名。目立つた樅の木があるさ。

○たつあき霧　一本「あさ霧」

○よはひと　一本「よはひも」

○いたづらに　一本「こゑたえず」

○めなし川　耳なしの山に對していひかけた語。

○聲はたえにき一本「やめにき」

○うと濱　駿河國有渡濱。羽衣の傳説をうみし地。

かへし　下河邊長流

耳なしの山の鶯くちなしの枝くひもちて聲はたえにき

祝

跡とむる千鳥もあやなめなし川闇はゆく〳〵深くなる世に

君が代は千さとの濱になく千鳥みゝにぞみてる汐ならぬ聲

海邊松

わたつみの其のうみの子のやそつゞきやまとの國の君ぞ變らぬ

ひとかたに靡きてたてる濱松は風の絶間もふくかとぞみる

鶴

うと濱の松よりたちてゆく鶴も雲居にかへる天の羽ごろも

琴

斧の音の高き山にてきりの木は響だにこそことに聞ゆれ

引きかへて舟木をつくる琴のねも猶まつ風ぞたよりなりける

車

久方の天の羽車おのづからしひよりさきのかみ代にぞなる

鐘

山深み寺やいづこと瀧川のおくよりひゞく入相のかね

ふるき机を

塵のゐてふるき机の島つどりうたて我が身はよるかたもなし

長流が志賀の花園をよみける歌を見て同じ心をよめる歌の中に

濱千鳥やちよとなきしかずもなく咲きてとくちる志賀の花園

しほならぬ海べに越えてかりそめのみるめばかりの志賀の花園

都だに何はなぞのとうつろひし志賀の辛崎さきのまもなし

古京

紫もあけも緑もふる衣ならのみやこは誰かきて見む

大空にめわたりきえてとぶ鳥のあすかの都あともとこらず

廢宅

春秋に燕いくたび往き還りいはひし宿のふりはてぬらむ

新玉津島に奉らむとて長流がよませけるうたの中に

淺茅生はとなりの笛も昔にて牛かふ野べにこゑぞのこれる

幽徑苔

むらさきの苔の細道うづもれてゆかりもとはぬ庭ぞふりゆく

○いづこと　一本「いづこぞ」

○島つどり　鵜。

○しほならぬ海　湖水。琵琶湖。

○玉津島　紀伊國海草郡和歌の浦にある島の名。萬葉以來歌人この島の風致を賞した。

閑居

我が宿は葎のせきにとぢられてよもぎが杣にいる人もなし

庭の面は蓬が杣とあれにけり蟬まつむしの斧をとるまで

名所のうた

都にて心のなせるふじの嶺はふもとを見てもふもとなりけり

久方の天のみはしら神代よりたてるやいづこ不二の芝山

不二のねは山の君にて高みくら空にかけたる雪のきぬがさ

ふじのねにおよびて高き山のへのあやしき歌も雪とふりつゝ

ふじのねに昔くだりし天少女ふりけむ袖やいまの白雪

汐竈のうらのつり舟つなぐまに蜑のながせる浮しまの松

今もなほけぶりはたちて昔よりたぐひぞたゆる汐竈のうら

磯の波の草にみちたるしほ竈はみらくおほかる浦の八十しま

浪風のあるゝ時みぬ汐竈もなごりひさしく忘れやはせむ

久方の都を遠み思ふことありても見ばやしはがまの浦

鳴門こす舟をかしこみ心をやちぶりの神のぬさにくだかむ

ふじのねと共に老いむの契りあればきえせぬ雪のおなじ白山

○蓬が杣　蓬のいたく生ひ繁りたること。

○雪のきぬがさ　絹を張りたる笠にたとふ。衣笠は古昔貴人の翳に用ゐたもの。

○みちたる汐竈は　一本「うちくる汐竈も」

○契りあれは　一本「あれや」

風早みみほの沖ゆくいづて船かもやはその名問ふかとぞ見る

たぐひなき妹脊の山を逢ふことのすくなみ神の何つくりけむ

梓弓もろ矢たばさみ射水がはいは波はやしとほすばかりに

瀧

吉野山たかき昔のことのねに流れし水やたきにそふらむ

莊子を見てよめる

底ひなき淵にもかくす玉なれや落ちては瀧の見えずなるらむ

孟　宗

杣山にしげき檜原はあせはてていはほの上の松ぞふりぬる

ふみわけて雪にもとめし竹の子は末の世にやは又もおふべき

蔡　順

桑の實を拾ふかたみに親を思ふ心の色もわきて見えけむ

殷湯王

よもにはるとなみときけむ君が代は惠みぞ民を洩らさざりける

惟喬のみこの御事を

秋とだにたのまぬ春の夢のまに片野のはなは小野のしら雪

○いづて船・五挺立十人漕ぎの舟又一説、古昔伊豆國より造り出した舟。

○妹脊山　紀伊國伊都郡。又大和國吉野郡。(上市町の東吉野川を隔てて妹山、脊山あり。妹山に大名持神社あり。)或は曰ふ大和なるは妹山にして紀伊なるは兄山なるをいづれも妹脊山の稱を冠らせて詠歌したのであらうと。

○孟宗　二十四孝の一人。

○蔡順　二十四孝の一人。

○惟喬のみこ　文德帝の皇子。藤原氏の出にあらざるを以て皇太子たる能はず、僧となり寛平九年薨ず。年五十四。小野宮と稱した。

伊勢の神道といふことを

おひそめし其の蘆かびのねをも見ぬ神代の事や末にたがはむ

今のうたを

千早振かみよの八雲末の世にうすらぎはてて色ものこらず

鶯の聲はきく〳〵鳥にだに人おとらめややまとことの葉

述懐のうたども

我が身今みそぢもちかの汐竈にけぶりばかりのたつ事ぞなき

思ひつることたが磯のうつせ貝我が身むなしく世をや過ぎなむ

昔こそあだにもすぎめ去年今年昨日今日さへ何かくやしき

世の中の塵をいでても心こそなほ立ちかへれやまのむかしに

風きりの翅まだしきひな鳥のなど身におはぬ空をこふらむ

山里にすみける時たび〳〵長流と歌よみかはして後つかはしける

冬くればわが言の葉も霜がれていとゞ薄となりまさりけり

葛かれし冬の山風こゑたえて今はかへさむ言の葉もなし

かへし　長流

かれぬとは君がいひなす言の葉に霰ふるらし玉のこゑする

○世をや過ぎなむ　一本「過さむ」

○身におはぬ　身不相應。

○薄と云々　一本「うすくぞなりまさりける」

冬がれむ物とも見えず言の葉にいつも玉まく葛のかへしは

雜體歌

おなじ文字なき歌

佐保姫の霞をたちし衣にはふりせぬ雪やま袖なるらむ

物名にたくみどり

根芹はむ鶴ぞ冰を踏みしだくみどりや下にすきて見ゆらむ

きりぎりす

からたちのおひたるかぎりきりすてて道ゆくひとの衣やらせじ

はなすゝき

しかりとて今は何をか身にはなす過ぎにし方は悔ゆるものから

いちひ　はしばみ　とち

時をうる辰のいちびといな我はしばしば見ばや相思ふどち

にしき　ぬひもの

今更にかれにしきみがこふればや思ひもかけぬひものとくらむ

ひたちおび

○たくみどり　みそさゞいの異名

○いちひ　櫟。
○はしばみ　榛。
○とち　栃。
○ひたちおび　常陸帶。古昔正月十四日常陸國鹿島神社の祭禮に、男女各意中の人の名を記して神に供したる帶。巫女の結びて頒つを受けて婚をトしたるといふ。「東路の道のはてなるひたちおびかごとばかりもあはむとぞ思ふ」(新古今十二、戀二)

あな戀し我もたびだちおびゆかむ別れし人に逢はざらめやは

くみがみ

飛驒たくみ神の社をつくるにはいく柱とやまづ定むらむ

ひとり　たきもの

世の常と思ひとりにしかひもひく別るればまた肝のきゆらむ

色紙　短冊

ちりしきし花見に來やと誰またむさく程だにも訪はれざりしを

びはのばち　ことの緒

道芝の露だにもひば野はちかし花みることのおそからめやは

ちから車

二道を人のかくてふ疑ひにいづちからくるまち心みむ

あしけ馬　からくら

夜も深し道もあしけむ待てしばしなど心から暗きにはゆく

たかだぬき

戀しさによわき心はまけぬれどえぞまたかたぬきみがつらさに

みの　かさ　あしだ

○ちから車　荷車。

○たかだぬき　古昔鷹を使ふ時に用ゐた革の手袋。ゆがけ。

○戀しさに云々　一本「戀しさに忍ぶることは」

露のみの何かさまぐ〻物は思ふあしたの程を千世と頼みて

誹諧歌

やなぎを

露の玉かぶり柳をかざるかなきしのつかさの高きひたひに

蛙

苗代にまくばかりある蛙とや吉野のくずはもみといふらむ

早苗

妻ごひによわりて空に眺むれば歌の力もなきかはづかな

おいぬまにさ苗をとれば田歌にもことわりにこそふしなかりけれ

月の歌の中に

いせの海にかたわれ月の影見ればあはびの貝ぞ波に浮べる

猿

おのれこそ栗は盗むをこのは猿山ふところは何探すらむ

山がら

山がらは山にまさらじ長月の青つゞらこにくるみはむとも

○きしのつかさ　岸にある丘陵。

○吉野のくず　吉野の名産、吉野葛。

○歌の力も云々　古今集の序文。「水に住む蛙の聲きけば生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける(中畧)男女の中をも和げ。」によつたもの。

○青つゞらこ　青葛籠。

述懐のうたの中に

力をもいれぬ歌さへおもにとや面杖つけどこしのをるらむ

漫吟集 終

戸田茂睡歌集

紫の一本

紅葉山にて

こん日はぬさも取りあへず紅葉山その名を手向け奉るなり

千代田城の亭々たるを仰ぎて

この殿の松の上よりつたへきて八すみの風もいく千代の聲

霞が關にて

行く春の雲の通ひ路立ちこめて霞が關にしばしとゞめよ

赤坂土橋より遙かに富士を見る

目に近くたゞこゝもとの雪ながら三國をへだつ富士の山かな

待乳山の石碑に書きつけし歌

あはれとは夕越えて行く人も見よ待乳の山にのこす言の葉

山の麓聖天町にてよねまんぢうをあきなふ伊勢鶴屋麓鶴屋とて鳥居の兩方にあるを

根本は麓の鶴やうみぬらむ米饅頭(よねまんぢう)は玉子なりけり

○紫の一本　二卷、著作の年代は詳かでないが天和以前のものらしく、その後屢改補せられたる形跡がある。一種の江戸名所記で、紀行文體に認め、その見聞に従ひ、興の涌くまゝに、多くの詠歌を挿入してある。

○ぬさも取りあへず　「此の度はぬさも取り敢へず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」(古今九　羇旅)

○八すみ　八隅。四海、天下などの意。

車坂にて

あちこちとめぐりて爰にくるま坂うちくたびれて腰をひくなり

屛風坂

立ちて見つおりて聞けども知られねば教へのあらぬ屛風坂かな

陶々齋が都鳥の說に對して

渡守都の人の問はばたゞ問はれし鳥をさして敎へよ

春雨降り來りて霏霖靡々として霞こめてすみだ川の方はそことも見えず淺草寺の鐘のひゞきに添へて上野の八つも聞ゆれば

春雨の雲に暮れ行くけふの日をむつだといふてくるゝともなし

春雨になほ行く水のすみだ川瀨切に高く浪は立てども

まゝの繼橋

渡れども憂世にまじる身ならねば捨てしこゝろのまゝの繼橋

眞間の弘法寺本堂の前にたぐひなき名木の紅葉あり此の紅葉見に來る人は必ず短冊をつくると聞き陶々齋が惜しみてや露も時雨も染めのこす紅葉の色はおのがまゝなるとつけしに添ふ

そのまゝの唐紅や露時雨古き御寺の庭のもみぢば

○あちこちと　一本「あちこちを」

○陶々齋　一本「陶々子」

○都の人の　一本「都の人は」

○むつだ　六田の淀。時は八つなれど、六つ(六時)とかく。

○まゝの繼橋　下總國の歌枕。今市川町の北のあたり。

隅田川にて九月十三夜の月やうやく光あらはれぬれば

角田川月も今宵の名にしおはばいざ事とはむ古の秋

五月雨の頃

浮橋も絶えて程ふる五月雨に須田の渡（わたり）は越えぞわづらふ

玉川調布にて

よそめにはさらせる布と見ゆるかな岩根をこゆる玉川の波

矢口新田大明神の祠のはめに參詣人の口ずさみの詩歌ありそれにつきてつれのよむ玉川やしづみし波のしらゆふもかけて涼しきみづかきの内遺佚にも一首とありければ心得たるといへども出でかねさま〴〵案じやうやうよむ

やはらぐる光にみゆる玉川の白きや波のかけしゆふしで

春立つ心を讀める（了然尼の聞書歌の中に）

塵ならぬ霞もけさは立ちそめて春こふならで空にしるらめ

見花（同前）

あすもとてながめ殘せる花も身も夜の間の風のあいなだのみや

水邊落花（同前）

○浮橋も云々　「角田川むかしはきかず今こそは身を浮橋のある世なりけり」（夫木集）
○須田の渡　角田の渡。須田と角田と同じ。
○見ゆるかな　一本「見つるかな」
○遺佚　茂睡の別號。
○ゆふしで　木綿を榊などに垂れたるもの。
○了然尼　東福門院に召使はれた女房。女院かくれさせ給ひて後尼となり了然といつた。江戸に住みわびて鎌倉に移る。
○あいなだのみ　あてならぬ頼み。空頼み。

花は根にそれさへつらきならはしをかへらぬ水に散りうくはうし

暮春の歸鴈を人々よみける時（同前）

花は根に鳥は古巣のならひぞとかへるか鴈の秋を契りて

更　衣（同前）

春きても花の衣を染めざれば苔の袂にけふもかはらず

秋　夕（同前）

音もなく色にも見えぬ寂しさは心のうちの秋の夕暮

山名光豐が亭にて八月十五夜の月を見て人々停午月といふ題にて讀み侍りける（同前）

花ならば咲きものこらず散りもせぬたとへや今宵半天（なかぞら）の月

老後月（同前）

なほめでむ昔は老もいとひにき月見るとても幾程の世ぞ

初　冬（同前）

住む程はしばしばかりの柴の戸もかこはまほしき冬は來にけり

歳　暮（同前）

祝ふべき暮にもあるかな身にとりてなにのことなく今日も過しつ

○衣を染めざれば　一本「衣を花にそめぬ身の」
○苔の袂　一本「苔の衣」
○亭　一本「許」
○人々　一本になし。
○讀み侍りける　一本「人々歌讀み侍りける」
○花ならば云々　一本この歌なし
○なほめでむ云々　一本になし。
○住む程は云々　一本になし。
○祝ふべき云々　一本になし。

後朝戀（同前）

そのまゝの心なりせばいかならむ憂きが中にも添ふ別れかな

高野山より歸りて（同前）

露の身はなほながらへて歸り來し高野の山に罪の消えしを

法體せしとき（同前）

身にかへて惜しみし家の名をだにも捨つればすつる世にこそありけれ

述懐（同前）

思ふぞよ幾寐覺にもたらちねにつかへ殘せししこの身をこそ

一とせ谷中感應寺へ友と打ち連れだちて詣でけるが不忍池の端をかへるにころは霜月八日の夜なるに風も絶えて池の面しづかなり西にかたぶく月のかげも朦朧としてさだかならざるに池のこなたの汀のさゞなみ蓮の枯葉のうかびたるも見ゆれど西の方は霧にやあるらむ打ちくもりて家居も山も見えず池の水よりつゞきて空もひとつになるを辻番の火ばかりほのかに見ゆるはいさり火かとうたがはる心ある人はさこそ感情を動かすべし

風たえて池靜かなる水煙に冬ともわかぬ朧夜の月

○後朝　男女相會うた翌朝。
○そのまゝの　一本讀人知らず。
○別れかな　一本「あはれかな」
○露の身は云々　一本なし。
○しこの身　醜の身。

鏡ケ池に梅若の姿のうつりて見えければそのまゝ母の飛び入りてむなしくなれりといふ口碑を思ひ出でて

哀れさはむかふ鏡が池の面に昔をうつす影は見えねど

堀兼の井にて陶々齋戯れに遺佚を嘲る遺佚はらを立ててつるべ竹を取りて理不盡に陶々齋をたゝく終に竹を打ち折る釣瓶主これを見ていたづらなる入道かな竹の折れたるやうに腰の骨を打ち折りて哭れむと棒を持ちて出づる陶々齋南無三寶と思ひ中へ入りて此の入道は名譽の歌詠みなりうたを詠みたらば許されよというてはやう〳〵とせむる遺佚棒におぢてふるひ〳〵いひ出す

堀かねの井づゝにさげし釣瓶竹をれにけらしな飲みみざるまに

一つ橋日本橋ありて三本橋のなきはいかにと陶々齋がいへば遺佚が一石橋兩國橋ありて三石橋なきが如しと云へば陶々齋からこびたせつはいひつる日本橋とう〳〵師にも渡し合はせてと讀みし返し

しらざらむ事をば我にとう〳〵しいひ出づる度に智慧は見えべし

又

二本橋ありと思ふな天が下笠一本ではちひらく身に

○遺佚　茂睡の別號。

○井づゝ　石又は木等をもつて地上にかまへたる井戸側。

○とう〳〵師　陶々にかく。

○淺草の川のおもての云々　一本「行く舟のほのかに人をみつまたや波ならぬ露を袖にかくらむ」
○白妙の老　一本「白妙の雪」
○はるといへば云々　一本「老の身もはるとしなれば消ゆる命ぞ」
○果てもなし　一本「果てぞなき」
○いかなる　一本「いかなむ」
○たとへては　一本「たぐへては」
○伊右衞門　天和二年十一月三十日沒、年十八歲。

淺草の川のおもての船あそび戀になりつゝ身も躍るなり

船遊びに興餘つて陶々齋の主從三人に飛びかゝられ拳をにぎつてひたものはられあまりのかなしさに泣聲になりて

白妙の老のかしらもはるといへばゆきも心もきゆるばかりぞ

陶々齋と府中あたりへ來てさて〳〵廣き事かな月の入るべき山もなく草より出でて草に入るといひしも理なり是れを本歌にして一首參らせむとて陶々齋がよむ武藏野は名のみばかりぞ家續き軒より出でて軒にこそ入れ遺佚がいふよき歌なり誠に聞き及びしより廣き野なり行けども秋の果てもなしとよみたる歌もありこれを本歌にして返し

武藏野は行けども家の果てもなしいかなる馬に乘りてめぐらむ

武藏野を大きくよまむとて陶々齋が西は富士東は海のなのみして雲と霞も武藏野の原とよみしかばそれにつけて

武藏野の詠めの末にたとへては富士もさながら草の上露

一子伊右衞門の墓碑の傍に石を立て手向野と切り付けて猶歌を添ふ

風の音苫の雫も天地の絶えぬ御法の手向にはして

伊丹右京が墓に詣でて陶々齋と慶陽寺を尋ねて淺草へ行きけるに何れの

頃にか淺草川の東に移されて伊丹右京が事知りたる人もなしさのみ年經ぬ事ながらその跡さへ昔に成り果てて移り變る世の様物悲しきに手向野の事語る人あればそれに案内せさせて行きて見るに蒼苔路なめらかにて露蘭叢にしたゝり秋風袂に滿ちて涙泉下に下る

花をこそ手向の野邊にすむ月を心ありても宿す露かな

　梅若塚にて

印（しるし）にと植ゑし柳の古木母寺葉も綠子もこゝに梅若

　上野輪藏堂より二王門への筋通の西の方に匂ひすぐれたる櫻あり

咲きにけり櫻をおほふ白雲と思ひまがへて風を待つまで

　上野に花をあなたこなた見る内に遺佚いづ方へ行きたるか見えず陶々齋方々尋ね歩きたるにいつの間に支度したりけむ大佛の後の窪に櫻の花盛りなるその下に水風呂を立てその湯へ花を入れて溫泉水滑かに岸流ふとたはごとつきてあかをすりて居たり餘りにくさにこれは氣が違ひたるかといへば遺佚返事に歌をよむ

水風呂のあかなく思ふ花なれば上野の山も入りてこそ見れ

　陶々齋はや歸るべしといへば遺佚は猶水風呂にありて

○梅若塚　角田川木母寺にある。

○印にと云々　一本「花散りし昔は遠くかすむとも昔の柳春な忘れそ」

○溫泉水滑かに　「春寒賜レ浴華淸池、溫泉水滑洗二凝脂一」（長恨歌）

明日もとて詠め殘さむ花もみもよの間の風のあはれなる身や

清水の方へ行きたるに松原よりの坂の上り口に石塔あり後の形見にその石に書きつけける。

殘しおかむうしと見し世にながらへば今を忍ぶが岡の言のは

花見の席暮春鐘といふ題にて

うきもいま忘れ形見の鐘の聲散りし名殘の花の夕暮

駒形堂あたり貴賤羣集の花見衆袖をつらねし有様は咲く花よりも見事なり

駒形にかざりし幕を張りかけて船の花こそ盛りなりけれ

此の船のまへの板戸は櫻にてひらけば花の筵まうせん

福屋のおなつお花おくにを一首の歌に

花の色なびくにつけて春風の吹くやかなりのおなつかしやな

柏木村圓性寺右衞門櫻のもとに酒をのみて

柏木のふりたる塚は見えねども昔をのこす櫻花かな

戸塚毘沙門堂の緣に琴の音に和して郭公を聞く

ひく琴に聲もをしまぬ時鳥感に堪へかね我も音に鳴く

○あはれなる身や　一本「あいな頼みや」

○駒形堂　淺草。

○なびくにつけて　一本「なほあかなくに」

○右衞門櫻　この櫻の通稱。

○昔　一本「芳」

○櫻花　一本「花櫻」

三股に月を詠めて

夕汐のさしくる浪にさき立ちて影みつまたの月ぞ名高き

木挽町に月見に行き覺えず涙はら〱とこぼれて鼻をすゝる上座なりける人のあないま〱し涙も時にこそよれ花のあるじの御もてなしに月はくまなくさし入りたる座に何の愁へかあらむ當座に月前の戀の歌讀め遲くなりなば酒強ひ飲ませむとあればおそろしさに涙押拭ひ

こぼれ落つる涙かきやり詠むれば袖よりのぼる月のうき雲

海晏寺に紅葉見に行きてつれなる人に和して

したひ見る心の色はなほ殘る庭の紅葉に染めもつくさで

王子金輪寺に雪見に罷り陶々齋とさし請け引請け酒を飲む遺佚三味線をひけば陶々齋は音頭を吹く京生まれのもの罷り出でてなげぶしを聲もをしまず歌ふ

聞く人の首なげぶしの唱歌にも浪あらじとはよき小歌ゆゑ

牛島長命寺に雪を見る

雪はなほふかき軒端に年をへて長き命も積りぬるかな

淺草觀音地内三社權現の祭を見むとて廣德寺の前をすぐるにもと見し人

○三股　兩國橋と崩れ橋の方と向島の方と三方に汐水がわかれた故いふと。

○袖よりのぼる月のうき雲　或人の歌に「みね高み雲を分け行くしのゝめに袖より下の山時鳥」

○なげぶし　京にて流行した一種の謠。この時謳うたといふのは、「渡りくらべて世の中見れば、阿波のなるとに浪あらじ」と。

○雪はなほ　一本「名をきけば長き命をふる寺の軒端の雪と年やつもらむ」

に逢へりやれ〳〵久しやとしばらく語れば辻番や門の犬にさまたげられ

是にては語りも盡きじいづかたにてかとしばし案じけるがこゝに古さる入道の住みあらしたる庵ありこゝにてものいはむと案内して門に入りぬ垣もくづれかたむきふかぬあらしも犖するやうなり僅かなる敷臺より二階に上る牀の脇に一つの額あり草庵之記なり岡野某の書にてその末に熊にあらず虎にもあらず淺草におき臥すわれを誰かしるべきといふ主の入道の歌を書き添へたり爰にて暫くものいひ茶など求めて飲み住みし主のことを思ひ出して

おもひきやかりの庵はしばしだに殘りて人の跡とみむとは

とやかくするまにはや祭こそ渡り候などといへば

久しくてあうたる事を嬉しくも我ぞんじたてまつりすぎそろ

江戸の時之鐘をたづね廻り赤坂圓通寺に來り打草臥れてもはや何見物もいやなり淺草に歸らむも程遠し今夜は一宿せよといふまゝに陶々齋が庵に泊る草臥れて宵にはよく寐入りたるが例の老の寐覺してねられぬまゝに

うしといひし老のねざめのしづけさや物にまぎれぬたのしみにして

やう〳〵して圓通寺の鐘の聲も明けぬとなりつるに陶々齋起きて遺佚を起すもとより寐ざめたる目なれば何事ぞといへばとてものこと見殘したる方をけふ見はたさむ扠々寐ごき事やあのやかましき寺々の鐘はきかぬかといふそこにて

今はまた耳にも遠き鐘の音を聞きしむかしは寐ざめざりしに

天和三年五月　日　　　　　遺佚入道判

「隠家百首」といふ。一巻元禄七年九月刊行。本書は隠家、不求橋、梨本と號する由來を三首の歌（即ち下の「塵の世を」「わが庵は」「のがれかね」の三首）に詠んで序文とし、次に、隠家主人の作（即ち下の「人しれぬ」の歌）を初め、勸進百首を収め、最後に追加二十九首を添へたもの。
○隠家　茂睡の別號。
○不求橋　同上。
（梨本　同上。

不求橋梨本隠家勸進百首

かくれ家と人の云へるは

塵の世をいとふ心のつもりては身のかくれがの山となるらむ

と讀みし歌ゆゑとぞ

もとめずの橋といふは源義豐より隠家は山ももとめず世を渡るためにやかけしまへのたな橋と讀みておこせたる返歌に

わが庵は山ももとめずたなはしのみじかく見つる世を渡るほど

又梨のもとといふは庵の前に山梨の木あり

のがれかね世にふりはてし老の身はかくれ棲むべき山なしのもと

この歌どもゆゑ名づけていふとぞ

すむ庵を世の人のかくれ家といふをききて

人しれぬ身にまかすればおのづから求むともなき隠家にして

鳥之迹

霞添山色（卷第一春）

けふまでの春の日數は淺みどり立ちそへかすみ色ませ外山

不忍池より上野の櫻を見て（同上）

心とくさき立ち行きて我やまつ咲きし梢の花のうへ野に

暮山花（同上）

暮れかけて山路の花にたれか來む入日をつなげさゝがにの絲

武藏の江戸にて讀みける（同上）

昨日まで富士の南に入りし日の北にめぐるもおそき春の日

卯花（卷第二夏）

ふじの嶺の外にはあらじ花の後けふ見る雪や咲ける卯の花

五月雨杜宇（同上）

ぬれて鳴く山ほとゝぎす五月雨のふる巢や思ふ親や戀しき

照　射（同上）

○鳥之迹　六卷、元祿十五年正月刊行。山名義豐（名山と號し、茂睡の從兄弟にしてかつ先輩）の遺志を繼いで、當時の同流歌人の作八百餘首を集輯せるもの。書名の由來はその序文に「抑鳥之迹と名付くる事は、一とせ淸水宗川といひしもの、江都の新歌を集めし書に水戸の黃門光圀卿、正木のかづらの名を下されし迹をしたひ、誠にこの道正木のかづら絕ゆる事なく、鳥之迹もつきまじきにこそ。」とあり。

○さゝがにの絲　蜘蛛の絲。

中の木陰に篝をたき集まり來る鹿を射殺すをいふ。
○戸無瀬川　山城國大堰川。嵐山の近く。

○こりぬも　幾度こぼれてもこりぬ。

水　鷄（同上）

梢ふく風も秋なる月影に夏の夜告げて水鷄鳴くなり

夕　立（同上）

夕立にぬれぬたよりとなりにけり日影いとひし菅の小笠は

萩（卷第三秋）

手折らばや枝ながら見む露もなし風より後の庭の秋萩

風もつらしこりぬもうたて幾度かこぼれては置く萩の葉の露

古郷鶉（同上）

野となりて鶉はなきつ古郷の籬の山に鹿もすむらむ

里擣衣（同上）

寐覺せし老の心のあかつきは里の砧に月ふけぬころ

初冬時雨（卷第四冬）

秋の色のながめにかへてこの頃は高嶺のあらし麓のしぐれ

落　葉（同上）

秋の色を深くそめてもそまりてもむなし露霜散りし紅葉ば

竹　霜（巻第四冬）

夜を寒み置けばそのまゝこぼれ落ちて風のま白き竹の葉の霜

歳　暮を（同上）

老いざりし昔はけふも惜しかりき今はと思ふ年の名殘は

む月末江都へのぼりける時筑波山を見て（巻第五雜上）

思ひねの通ふ夢路もかさなれば古郷遠し一夜々々に

旅衣たちへだてても去らざるはさらばといひし人の俤

諸國行脚の時佐夜の中山（同上）

すむ庵の軒端の杉も音はありし馴れぬあらしの佐夜の中山

美濃國關が原にて（同上）

命ありて今日は此の野に行き暮れぬあすはいづくの草の葉の露

下野國那須野の原を通りけるに一むらの森の中に古りたる社ありしを尋ねたれば玉藻の前の魂魄をこゝにて射とめたる所なるゆゑ稲荷に祭りて篠原の明神といふと教へければ（同上）

ありし世の玉藻も是れかと見るばかり月に露ちる那須の篠原

同じ時谷峯岨山（やみそやま）へのぼりて（同上）

○谷峯岨山　八溝山。下野、常陸、磐城の國境にある。

〇ほぐしの鹿　火串。ともしの松を夾む木。このともし火をみて鹿の寄り來るを獵夫射殺す。

〇山名玉山入道義豊　山名義豊。玉山はその號。茶技をも能くす。元祿七年歿。

やみそ山やまぬ思ひのもえ出でてほぐしの鹿の身をや捨つらむ

山つゞき東出谷山の綾織が池にて（同上）

浪のよる時雨の絲を染めかけて山の錦のあやおりが池

空にたつ行方も知らず雲鳥の綾織が池のみづからぞうき

八入の岡といふ所に紅葉のよくこがれたるを（同上）

岡の名も色もかはらずくれなゐの八しほの紅葉あづまなれども

山名玉山入道義豊世をはやう去りし明けの年の五月墓所に詣でて讀みける（巻第五哀傷）

來て問ひしかひもなつ野の草の原答へぬ露を袖にみるまで

伊豆守矩豊身まかりて五七日にあたりける神無月二日に墓所に行きて手向の水をそゝぎけるに木の葉の袖に落ちかゝりければ讀みける（同上）

はら〳〵と散りし木の葉の音聞けばほろ〳〵袖に涙落つなり

子におくれける時山名玉山入道より老鶴のひとりうき世におくれ居て子を思ふ闇に音をや鳴くらむといふ歌をおこされける返し（同上）

つれだたぬ心の闇に老鶴のおくれし道にまよひてぞなく

失せにし人を思ひ寐の夢に見て（同上）

みる夢のなにそはありてありし世の忘れぬさまを猶したへとや

玉山入道なくなりし明くる年の春上野の花を見て去年の盛りには共に眺めしものをと思ひ出でて讀みける（卷第五哀傷）

立ちよるもひとりさびしき木の下に花も去年見し人や戀しき

妻なくなりし又の年上野の花を見て（同上）

家づとにゆるせばとても櫻花みすべき人のあらばこそ折らめ

行脚して都に上りし時鳥部野に手向して（同上）

からこそは煙とならめ鳥部野の露の手向は我と知らなむ

述懷の歌の中に（卷第五述懷）

みそら行く光はさらにかはらぬにいつの月日の老となしけむ

老いぬれば姿こそはといさめても心も花になりがたの身や

今は身にうとき人だにゆかしきは老の心の哀れはかなさ

老後述懷（同上）

身に今ぞ思ひあはせつたらちめに老の心をしらでつかへし

寐覺して（同上）

寐覺して戀ふる昔のなになれば身の若かりし事をのみこそ

○鳥部野　今京都市五條坂西大谷の邊。古より葬所荼毘所として知らる。

老いて今物にまぎれず昔思ふ寐覺ばかりのなぐさめぞなき

山家を（卷第六雜下）

谷ごしにあなたもさこそながむらむ友山住の暮のほ影を

田家老翁といふことを（同上）

幾秋か田つらの庵に老いぬらむ落穗とともに年を拾ひて

太田道灌が別業日暮里にて（同上）

ゆふ霧に谷中の寺は見えずなりて日暮の里にひゞく入相

諸國行脚しける時武藏野より不二を見て（同上）

武藏野をかこはぬ庭にしめ置きて不二の高嶺を築山に見む

立野にて（同上）

ふみ分けてとほらざらめや石に矢のたちののまゆみ紅葉ちりしく

玉川にて 今たは川といふ（同上）

秋はなほ戀しきやなぞせこ待ちてうつ調布（たづくり）や玉川の里

鮫が橋（同上）

さびしさや友なし千鳥聲せずば何に心をなぐさめがはし

相生橋（同上）

〇別業　別莊。

〇まゆみ　栴檀の異名。

〇せこ　女より男を親しみて呼ぶことば。せの君。

君が代にあひおひばしやながれ行く水はすみよし波は高さご

雉子の宮にて　二本えの木のさき猿町こいふ所をこほりてゆく（巻第六雜下）

かりに來る人も名なしの雉子のみや里遠き野と宿さだむらむ

淺沼の池　本所宰府の天神の近所にあり昔物語に此の池に雌雄のをし鳥住みけるを獵師の一つ取りたりし夜の夢に殘りたるをしの來りて日暮れてはさそひしものを淺沼のまこもがくれのひこりねぞうきこ讀みてうらみたるこ云ひ傳へ侍る（同上）

すむとても水あさ沼に見る月のまこもがくれは鳥のなもをし

吾妻が森　東人こ云ふ人の住みし所こぞ本所横堀三つ目ひがしにあり（同上）

鳥がなくあづまの森を見渡せば月は入江の波ぞしらめる

眞土山（同上）

たのめつゝまつちの山に入りは來ず我が庵崎に又ひとりねむ

あや瀨川にて（同上）

錦ぞと見るや心のあや瀨川移る紅葉をいかで折らなむ

比叡の山へのぼりしにさくらの散るを見はべりて人丸のあふみのみやは名のみしてと讀みまた貫之の山たかみ見つゝ我が來しの歌をおもひ出て（同上）

宮木もりいかになしとも咲く花を風の心に任せては見じ

○あや瀨川　武藏國北足立郡。
○折らなむ　なむは願望の助詞。
○あふみのみやは云々　「さゞ波や近江の宮は名のみして霞たなびき宮木もりなし」（拾遺八雜上）
○山たかみ云々　「山高み見つゝわがこし櫻花かぜは心にまかすべらなり」（古今春下）

○誰をかもとは云々　「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（古今一七、雜）

○生靈の社　大阪市天王寺區生玉町。

○住吉　海神を祭る。

高野山に登りて奥院などをがみめぐりて仲性院に宿りし曉鐘の聲に目覺めて（同上）

高野山そのあかつきをまつ風も鐘のひゞきも夢を覺して

高野よりの下向に住吉に詣でて（同上）

いのちらずよ身はかりそめの旅衣袖しきしまの道の外には

高砂の松（同上）

高砂の松に契りて千とせ經ば誰をかもとは友も求めじ

駒込の富士にて（卷第六神祇）

吹きはらへ世のうき雲にけふまでは身の時しらぬふじの山風

行脚せし時津の國大坂の生靈の社にて（同上）

いのる日はいく玉だすき引きかけて神をぞたのむ下にある身は

伊勢の神を（同上）

淵は瀬にたとへかはるとすゞか川ふるき誓ひの末は絶えせじ

春日（同上）

三笠山光かすかの露をだにもらさず宿る秋の夜の月

住吉（同上）

敷島のみちひしらせよわたつみの底つゝをより顯はれし神

〇底つゝを　底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱。海の神。

戸田茂睡歌集　終

春葉集

荷田春滿

あし玉も手玉もゆらに神の織りけむ賤機布、呉のあやのはとりらがうまごりの唐錦も其の代々の目うつろひは、今猶然りとこそ人のま心のひとつなむかはらねば、言の數さだまらぬ古ぶりをさへおほにも意(こゝろ)えらるゝ時世なりけり。しかしてつぎ〱の代には、おのが心よりよみ出せる人あり、ひたぶるに古きをうつさまくするあり、あがれる代の事今は取り見ぬ教へと、しひても古言をのみ囀るとは同じつらにや見はなちてむ、唐の歌にもかかりとぞ聞ゆ。或は紅をや入(しほ)にふりでて匂はさまくする人は、これなむ幾ひささの色とめではやすよ。そもやゝさめにてはこはなぞなど見もわかぬものに移ろふもて、さる手振をうたてとり見ぬ世のいでくべし、眞心こそ變らね、道の教へも言のあやも、萬の事(わざ)を連ねて年に月に移ろふなむ、こも世の常とぞいふべかりける。我が荷田のうしの此のよみ歌どもを見れば、いにしへ今も變らぬ眞心もて、言葉は新草に古草おひ交はりたらむごとに、五つの色どりたてぬきの綾をも織りなしつゞして、世に獨りたてるよみ人になむおはせりき。又歌はさるものにて、天地の始めの時より畝火の橿原の宮に事たて給ひし御國

○あし玉も云々　足の飾り手の飾りにつけたる玉。「足玉も手玉もゆらに織るはたを君がみけしに縫ひあへむかも」（萬葉、十）

○うまごりの　枕詞。美はしき織物といふ意より綾などに冠す。

○うつさまく　うつさむと。

○幾ひささ　幾久しさ。

○たてぬき　經と緯。

がらののり言を、つぎ〳〵おつる限なく見渡しつゝ唐人の敎へのさかしきにまみれず、まして佛のはかな言心にそまむやは。ひたぶるに遠つ御おやよりつかへこし神のひもろぎしめゆひし操の直かりしかば、つひにしるしの杉の喬き梢は、あづまの大庭に影みえしこそ、道のほまれ世に類なき物しり人になむおはせりける。大人よりさいつ人、難波の高津の阿闍梨世にいでまし、天のみ柱のみ言擧げをはじめに、時雨ふる奈良の林の茂けきをさへときあかされしを見きき侍るには、たゞにそのかみの人にかもとあやしみつゝ、人皆さしあふぎてぞ侍るを、其の後いくほどもなくて大人いでまし猶考へたらはしことたて給ひしかば、今は浦安國のうらやすき學びとしも成んたりける。かれ阿闍梨のいさをに、大人のまめ心を合はせてたゝへ言すとて、いにしへ延暦の帝の歌はせし御をかしこきながら此のはしに歌へらく、其の御(おほん)いにしへの野中ふる道あらためばあらたまらむや野中ふるみち

後學生阮秋成記す

○神のひもろぎ云々　神籬しめ結ひし。ひもろぎは上古、神祭の時淸淨の地を選び周圍の常磐木を植ゑて神座とせしをいふ。

○難波の高津の云々　釋契沖、難波の高津の圓珠庵に住す。

○浦安國　心安泰なる國。日本の異稱。

稲荷山の神司、荷田の家のはつ子春滿うしの世にいませしはしらぬむかし人なりしを、まろがうひまなびの頃、おなじ社の秦直親宿禰の、ふるごとを學ばむには我が師のをしへにつきて、もはら萬葉集をみるべしときこえられしをよすがにて、難波津淺香山を手ならふより、楢の葉の名におふ宮のふるきしらべに心ざしたりしかど、大人のよみ歌はわらはにて九歳の時山にとがりしてよまれたりとて、

いなり山けふは小鳥のねをたえておとするものは谷がはのみづ

といふほかなるは、ふつにうけたまはらざりしに、こたびうからの信郷宿禰の家にをさめたるほごの中にも、遠近にもちりよろぼへるを書きあつめて、みつの秋成翁の許に相語らひしかば、翁これをえらぶとはなくて、二とぢとしたりしを、梓にちりばめむとて、春葉集となづけらるに、端書せよと信郷のあとらへらるゝにまかせて、つたなき言葉をいなみもやらずしるせしは、昔しのばしき大人の歌集なればなりけり。

寛政七年十二月　　正五位下　橘　經亮

○難波津　「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」淺香山の歌と共に古、手習の初めに用ゐたるより初學の意にいふ。

○淺香山　「淺香山影さへ見ゆる山の井のあさき心を吾が思はなくに」（萬葉十六）

○あとらへ　あつらへ。

○橘經亮　洛西梅宮の祠官、故實に通ず、歌人。

○ふつに　絶えて。全く。

○可具津知の神　火の神。

いでやまなびの道は天が下の大路なれば、おのれひとりたてらむがごとほこるべからず。學ぶ人も師のをしへなりとてあながちに泥むべからず。

皇御國のふみ見む人はまづからふみを讀みて事を辨へ、時雨ふる楢の林にわけ入り、神代の宮木ひき、千代の古道跡をとめつゝ、ますらを心をおふしたてて高き代をしたはば、などか昔の手振に到らざるべき、歌もしかりと常に翁のいへりしとぞ。又曰く、古は眞心もて思ひをのみ述ぶればおのづから直かりしに、題をとりてよめるより詞を飾り心をさへ巧みに作れば、くるしげなるもかつ／＼見ゆるぞかし。四季雜の題は見し折おもひいでてもよむべし、異國なるは筆のあとにてもおほよそに心えしるべし。をとこ女のなからひ何くれの物によせ心にもあらぬあだし言をいひ出せるは、眞をのぶる歌の本意ならずとて、戀の題をふつによます。毫加へし卷著はせしふみらのありしも世に殘して何にかせむ、學ぶ人は誰も／＼見あきらむべしとて可具津知の神に奉り、よみし言草も一葉だに家にとゞめざりしかば、我稻荷山の杉の木のまより、遠き武藏野の草をつけて耳ことまれるを求め、かいすてたらむ

をも拾ひたれば、端書ありつるをも漏らして、あらぬ題に入りたるも侍りなむを、浪速のよしあしをも選ばず、玉藻も藻屑もあるまゝに、信郷宿禰のかき集めたるを、たまあへる人にも見せ、うからやからの後にも傳へむとて、二卷につくれることを、春の葉の茂りなすこちごちの枝のさかゆくてふふる言もて、春葉集とはとなふるになむ。あなかしこ。

正五位下　荷田信美誌

○春の葉云々　「うつ蟬と思ひし時にたづさへて吾が二人見しはしりでの堤にたてるつきの木のこちごちの枝の春の葉の茂きが如く思へりし……」（萬葉二）

○荷田信美　本姓は羽倉、小澤蘆庵に學ぶ。

春葉集

春歌

荷田春満

立春

たちかへる一夜の春ののどけさはいつの朝けに思ひくらべむ

くる春のしるしもしるく稲荷山かすみかゝれる峯の杉むら

花鳥の色ねまちあへず春にあふ人の心ぞまづのどかなる

春にけさふくも音せぬ谷風に冰とけゆく水のしら波

荒玉の年のをだまきたが手より又くりかへし春のきぬらむ

百千鳥つぎて囀れ春のくるあかつき告ぐるかけの八聲に

なす業もいふことぶきも改まる春こそひとの上に見えけれ

朝日影まづ霞めるやくる春のしるしかはらぬ光なるらむ

冰るし池のこゝろもとけて今朝春をみぎはによするさゞ波

○稲荷山　山城國紀伊郡深草山の北部に在り、京都より伏見に通ずる大路に當る。

○かけ　にはとりの異名。かけの八聲は鶏の曉をつぐる聲。

筆こゝろむとてまづことほぎ奉る歌

たらちねの頭の雪もあをやぎの緣にかへせ春のはつ風

おのが上をも祝ひてよめる

此の春はいそぢの齢のべにいでてたが爲ならぬ若菜つままし

春たつあした御社にまうで侍りて

稲荷山ほがらくとあくる夜を名のるからすの聲も春なる

睦月朔日こぞほりし筒井の水を汲みてよめる

ほりえたる筒井くむ手に今年より春しりそめてぬるむ若水

春たつ日雪のふりければ

夕ごりの雲はみ冬をたちへだて今朝ふる雪や春の初花

毎家有春といふことを

松たつる門は高きも賤しきも心ひとしき春ぞ見えける

早　春

流れいでぬさとの小川も氷とく初春風をみなかみにして

春きてもなほ風さゆる谷陰はうち出づる浪を結ぶ冰もあり

〇のべ　延べと野邊と懸る。

〇夕ごり　夕凝。

〇子日　古、正月初の子の日に野に出で小松を引き千代を祝ひ遊び

○三津の濱　難波の大伴鄉御津。今、大阪島之內道頓堀の邊。

○水無瀨川　今、山崎驛のあたりを流るゝ淀川の支流。

○ここ浦　他の浦。

霞

いひしらぬ神代の春の面かげをみせて霞むや天のかぐやま

櫻色にくらべばいづれ朝日かげ薄くれなゐに霞む匂ひは

いつをわかぬ空の緣も春にそふ今一しほは霞なりけり

よそに見し雲もさながら葛城や高間の峯にかすみかゝれる

春の色はしるくぞ三津の濱松もおなじ緣にたつ霞かな

たちへだつ波のひまにはあらはれて霞にしづむ淡路しま山

ゆく水のありても遠し水無瀨川山もとかけてかすむ夕は

こぐ船の方も難波のえぞわかぬこと浦かけて霞みわたれば

鶯

なけやなけ賤の小田卷くり返し永き日あかぬうぐひすの聲

世は花の春をしらずや鶯は雪のふる巢をいでがてに鳴く

鶯を待つ

谷ちかみ鳴く鶯をあさなく〳〵けふや初音とまたぬ日はなし

鶯始めて鳴く

里なれぬ聲なほあかずめづらしな巣だちそめたる園の鶯

古巣鶯

春やとき羽かぜやさむき鶯のふる巣の谷をいでがてに鳴く

雪中鶯

匂はぬをあなうめとてや降る雪の花ふみしだく枝の鶯

鶯は花に鳴くとや思ふらし散りかひくもる雪にこゑする

寐覺に鶯のなくを聞きて

窗の竹よをこめて鳴く鶯はおいの寐ざめのわれのみぞ聞く

朝鶯

鶯の木づたふ枝の朝露や氷れるなみだとけて見すらむ

夕鶯

おぼつかな訪はれぬ宿に鶯の人來となくやたそがれの聲

山家鶯

のがれ住むみ山の春のかひなれや軒端まづとふ谷の鶯

郷鶯

しめおきしねぐらあるらしくれ竹のふし見の里にきなく鶯

○ふみしだく　踏みにじる。蹂躪。

○よをこめて　よは竹の縁語。

○くれ竹の　枕詞。竹、よに冠す。

若菜此の頃多かり

いかばかり生ふる若菜ぞ里人の摘み殘すさへさはに見えける

若菜

春日野の飛火の野守しるべせよ雪の底にも萌ゆる若菜を

春もまだあさ澤水はこほりゐて深き根芹をつみぞかねつる

千年へてつむともあかじ蘆鶴のあさる澤邊におふる若菜を

殘雪

きえせねば柳櫻のめもはるをわくもほどふる雪の山里

春をあさみ寄すると見えて川島にかへらぬ浪や殘るしら雪

春なほ寒し

雪も叉さそひきぬべく雪きほひ空さえかへる春の山かぜ

さえかへり猶ふる雪に此のごろは木の芽をはると見る色もなし

更に叉うちいでむ程もしら波の氷にさゆる志賀のうみづら

梅

さく梅の立枝に竝ぶ香やはある春に色々の花はめでても

薫りくる風をば梅のしるべにて主人もしらぬ垣根をぞとふ

○春日野の歌　「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」（古今一、春上）を本歌。
○飛火　のろしの類。
○あさ澤　春淺き、淺き澤水。

みる書も怠りぬべく咲きしよりうちむかはるゝ窗の梅が枝

音ならでおどろく風の梅が香にさめて惜しまぬ夢の手枕

袖かけて折らぬぞへだて中垣はこえて此方にさける梅の枝

ふきくるも音なき風の梅が香にちかきあたりの盛りをぞ知る

薫るなり風もまちあへず蘆垣のまぢかき軒の梅のさかりは

我が園になか垣こゆる梅が枝を主人顔にもいとふ春かぜ

待ちとりてたが袖のかにしめぬらむ軒端の梅にさそふ春風

枝あまた中垣こえてさく梅にあるじたがへて人やとひ來む

梅花春を告ぐるといふ事を

閨の戸の隙もとめきて世は春とつげの枕にかをる梅が香

梅を植ゑて鶯を待つ

うつり來て鳴けや鶯うゑおくも誰がためならぬ庭のうめが枝

荒れたる家に梅さきたり

植ゑおきし人はふりにし軒端にも春を忘れずにほふ梅が香

紅梅

なほそめよ八重さく梅のくれなゐに春を深むる色はみえけり

○待ちとりて　待ちつけて。待ち果せて。

○つげの枕　告げと黄楊をかく。

○なほそめよ　なほ此の上にも紅染せよ。

柳

春風にうちなびきなば亂れなむ散らぬ花田の青柳の絲

ふくとしも音にしられぬ春風を絲より見せてなびく青やぎ

柳絲隨風

いと弱き心づからや春風の吹くかたよりになびく青やぎ

故鄕若草

ふる里のみ垣が原も雪きえて綠にかへす春の若くさ

さわらび

岡ごえのくさかふ駒のそのまにも折りえてあかぬ春のさ蕨

春月

春の月たゞ世の空にめでそめて今もむかしの影かすむらむ

ほのかにもあるまは嬉し春の夜のふかき霞の袖の月かげ

舟路に月をながめて

霞めたゞ波の浮寢の夜半の月春とみるめも慰まばこそ

月に昔をしのぶ

身の老を忘れては忍ぶ春の月霞まぬ夜半もありしむかしを

○いと弱き　いとは柳の緣語。

○くさかふ駒　駒に草を食ましめる。

春曙

雲に薫る霞をそめてみ吉野の花にうへなき春のあけぼの

いつはあれど何處はあれど波かすむ繪島がさきの春のあけぼの

春雨

雪霜ものこらぬけふの春雨に野なる草木や緑そふらむ

春雨のふるとも見えず谷かげは岸のしづくの音ばかりして

野山には緑こそ添へ草のいほの朽目はる雨ふるぞ侘しき

旅にて

旅ごろもたちにし日より春雨のふる里のみを思ひしをれて

鴈かへる

慕へども名殘もとめず有明の月につれなく歸るかりがね

さく花を見捨てばせめて霞む夜の月にやすらへ歸る鴈がね

きゞす

狩人の入野の草のねにぞなく子をおもふ雉のたちも離れず

おのが妻霞へだてて逢ふことはかた岡のべにきゞすなくなり

雲雀

○いつはあれど　何時といふうちにもとりわけて。
○繪島がさき　淡路島の北端の東

○朽目　腐れた隙。

○かた岡の　逢ふことは難いの意にかけた。

草の名の母子まじりに菫さく野をなつかしみ雲雀なくらむ
暮るゝまでいきかひ繁き道のべは空に雲雀や落ちかねて鳴く

三月三日

咲くもけふもゝ悦びの花かづら三千年かけて匂ふいろかは

桃花

見るまゝに色しあせずば花の名のもゝ日も去らじあかぬ木の下

櫻

えやは誰わか木の花のはつ櫻いつの色香のかかるべしとは
年へてもあかず衰へぬ色に香に櫻ならでは何をめでまし
をりはへて山路の櫻まづめでむ花はみやまに色ふかくとも
峯もをも今日こそさくら雲雪の空めは晴れてかをる春かぜ

花をまつ

白雲も花待つころの心にはいつの春よりかゝりそめけむ
吉野山花まつ目こそ定まらね雪にあけても雲にあけても

はつ花

移しうゑて今年見そむる花の色にあかぬ千入の心もぞ添ふ

○母子まじりに　はゝこ草。菊科の植物。春の七草の一、ごぎやう。
○をりはへて　をりはふ。時を長びかす。うちはへて。

花

吉野山花の盛りになりぬらむ雲より上にかをる春かぜ

さかぬまに思ふは淺き色なれや今見る花にこゝろ染めては

春の夜はあくる光もいそがれず花に有明の影をめでては

まがひ見し色はさながらてる月の光になりぬ花のしらくも

たちへだつ霞も雲もかをるなり花に白めるあけぼのの山

うらみじよつゝむ霞も森の名の衣手かけてにほふ櫻に

春といへば梢のみかは宮人のさくらがさねもあかぬ色かな

さく花にあくよしあらば此の春やめでます色の限りならまし

關守のある世なりせば逢坂の花にとゞまる人もゆるさじ

棹とめて見るまもなみの早瀨河花にうらみむ春のいかだ士

身を隱す山ふところに咲く花はなべての世にも見えぬ色かな

此のごろは櫻かさして岡の名のゆききの袖のにほはぬもなし

なべて今遠山ざくら紛ひしもまがはぬ雲も花になりゆく

ふるほどは厭はぬ花の白雪にあすの梢の色やさびしき

花にかこつけて人をまつ頃

（斧の柄のくちし　晉の王質が仙人の碁を圍むを見局未だ終らざるに斧の柄の朽ちたるに驚き、宿に歸りゝたれはあらぬ世にうつりかはりてありしといふ、我が浦島に似たる支那の故事。「ふるさとは見しごともあらず斧の柄のくちし處ぞ戀しかりける」（古今一八雜下）

家櫻みせまほしさに見るよりも餘りて花に人ぞまたるゝ

とめこかし色をも香をも知るしらぬ人をわくべき花櫻かは

花をたづねありく

あすはなほ遠山ざくらたづね見むけふの空めの雲をしをりに

末つひにいとはれぬべき雲風もしるべとたのむ花の山ぶみ

わけ見ばや遠山ざくら花を花くもを雲とも見るを限りに

花下に日を送る

斧の柄のくちし例をもろこしの吉野の花にたぐへてぞ見る

花下述懷

さくをめで咲かぬを忍びとにかくに立ち去り難き花の木の下

尾上の花を見さけて

よしやげに花の春風薫らずばまがひやはてむ峯のしら雲

心在山花

山櫻身こそまかせね花にいそぐ心のこまのなづむ日もなし

花似幣

いつの世のたがならひより行く春に手向くる幣と花のちるらむ

禁中花

雲の上も花にへだては中のへや外の重をかけてかをる春風

落花入簾

家櫻よそに散らさで小簾の内にさそふはゆるす庭の春風

梨花

花にさく色も露けしひとりのみながめふる屋の軒のつまなし

野遊

春はたゞ誰も心を野邊にいでぬ花うぐひすに誘はれねども

水郷春望

おきいでて向ふ鏡の山も今はるかに霞む志賀のうみづら

かはづ

みな淵の山下水にところえて住むやかはづの朝よびの聲

花鳥も色ねしをるゝ春雨に池のかはづの聲きほふなり

菫

うちむれて菫つむ野は紫のゆかりあまたに袖ぞ見えける

庭は野となりなむもよしなつかしと菫つみには人もこそくれ

○雲の上もの歌　花咲くをりは宮中も隔てなく香の高き春風が吹く

○鏡の山　近江國三上山の東に竝ぶ。

○波にを　をは歎辭。

○とはでもしれな　一本「しるき」

○こゝた　澤山。多く。

つゝじ

春の花これや限りといはつゝじこがるゝまでの色に咲くらむ

夕日かげさすや岡邊のつゝじ原わけゆく人の袖さへぞてる

くれかゝる外山の松の陰にのみ入日をとめて咲くつゝじかな

山吹

日數こそとまらぬ春を餘波(なごり)やは波にをにほへ岸の山吹

すだけ猶いけの蛙も山吹のはなのをりえて聲かをるなり

山吹はこたへぬ色にうゑし世の言とはまほし宇治の橋もり

山吹の花もてはやす里の名はとはでもしれな露のたまがは

藤

契りあれやはふ木あまたの藤葛まつにとのみぞかけて匂へる

松がえにふく春風は音よりも色にぞしるくなびく藤なみ

春のくれはつるゆふべ鐘の聲を聞きて

けふのみに春はくれぬと聞くもうしこゝだに霞め入相の鐘

夏歌

首夏

めもはるの立ちにしよりは深みどり木末にしるく夏はきにけり

風や思ふ若葉にふくは涼しきを花にいたくも厭ひはてつる

しげれたゞ庭も葉廣のなら柏おきどころえて露も見ゆらむ

山はみなかをりし花の雲きえて青葉が上を風わたるなり

殘花何在

山守にいざこと問はむ夏きても猶ちらぬ花はありやなしやと

更衣

花染になれぬる春もはかなきをいやはかなにも更ふる袖かな

ほとゝぎす

夏衣きゞの木末もあさみどりをりえて來なく山ほとゝぎす

里なれぬねに名のらむはう月とやいでがてに鳴く山時鳥

時鳥遠山かづらくるとあくとあく時もなき音をぞ鳴くなる

きけばまづ語りつぐから郭公世にしのび音は洩らしかねけむ

またぬ宿まつ人わかば時鳥なほいかばかり初音しのばむ

いつしかに初音もらしつみちのくのしのぶはてある山時鳥

○う月　卯月と憂き月とをかく。

○みちのくのしのぶ　岩代國福島市のあたり。

○葛城や高間の山　大和國内境の葛城山脈中の高山。金剛山。

○けしきの杜　九州大隅國にある

○いはせの杜　大和國立田川の東傍龍田村の南車瀨。

幾里をかけてなくらむ葛城やこゑも高間の山ほとゝぎす

姿さへさだかには見つ時鳥月にむかひの岡になく夜は

時鳥まちつけけりなさもしるきけしきの杜のむら雨のそら

世離れて語らふ聲をきくやたれ須磨のうしろの山ほとゝぎす

鈴鹿川八十瀨もしらぬ五月雨におのれふりいでて鳴く時鳥

時鳥さだかならねば聞きつとも誰にいはせの杜のひと聲

しのび音を我にはもらせ聞きつやと問ふ人もなきやま時鳥

時鳥をまつ

心ある人もかくれぬ世をしらでなど出でかぬるやま霍公鳥

怨みおふはてをば知らで霍公鳥いつまでつらく音を惜しむらむ

夕月のほどもすぐれば時鳥たゞありあけの空やたのまむ

かきくもる空やたのまむ子規月の夜ごろもほど過ぎにけり

はじめて時鳥をきく

子規あすはいづこに語りつぎいひつぎゆかむ夜半のはつ聲

時鳥をたづねありく

山はとくいでもやせしと子規里をあまたに今日は尋ねむ

あした時鳥を聞きて

此のあさけ村雨すぐる雲間よりすゞしく名のる山ほとゝぎす

時鳥を聞きて

宵のまの只一聲にほとゝぎす更くる賴みもありあけの空

ひとり時鳥をききて

誰に又語りあはせむひとり寢のまくら音なふ山ほとゝぎす

雨ふる夜子規をききて

まちとらぬ人はきかじな降りくらす雨のまぎれに鳴く時鳥

おほつかな山霍公鳥くもふかき夕の雨のそらに鳴くねは

卯花

夕月にまがひし花のうつぎ垣なほありあけの影もへだてず

月と見てまがはぬ色にさきしより卯の花がきね曇る夜ぞなき

夕闇の空にしられずすむ月はうの花さける垣根なりけり

世を隔つ隱家なれや訪ふ人もあなうてふ花にかこふ垣根は

月雪を心にしめてすむやたれうの花かこふ山の下庵

よそめには月の桂やをると見む卯の花かざすみちのゆく手を

○更くる賴み　夜更けに鳴くだらうといふ賴み。

○夕闇の空にしられずすむ月　夕闇の空に關係なく澄む月。

あふひ

宮人のあふひの露の玉かづらよそめにかけて見るも涼しき

たえせじな神と君との諸葉草かけて千年に祭るためしは

さなへ

早稲おくて田子や千町にとりわけむ緑はおなじ水のわか苗

秋に見むたり穂の姿さきだてて露にのべふす小田の若苗

石の上いそぐ早苗か五月雨のふるの山田にうゑ女おりたつ

とれどつきぬさ苗に幾日くれ竹のよのまを田子の暇にはして

あやめぐさ

池深み水草ながらにひく手にもあやめは長き根にぞ分るゝ

たが代よりかるちの池の菖蒲草幾世たえせぬ根をとゞむらむ

たち花

誰が袖の香にや忍ばむ我が植ゑし軒のたちばな花さきにけり

今は我うゑし時世も忍ぶまであれゆく軒ににほふたちばな

夢にだに見ぬ世の人の袖の香もしのぶに近き軒のたち花

五月雨のふるき軒端をもるからにしをるゝ袖も匂ふたち花

○諸葉草　ふたばあふひの異名。

○石の上　ふるの枕詞。

○誰が袖　匂袋の名。「色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」（古今一、春上）より出づ。

夏　夜

夏の夜は難波の蘆のふしのまもなくて明け行く夜半ぞはかなき

夏　月

濱千鳥など聲たてぬまさごぢはみずや夏なき月のしも夜は

五　月　雨

雲幾重たちへだてても五月雨に瀧の音羽の山とよむなり

なでしこ

こと草の花やはおよぶ水無月の照る日のいろに咲ける撫子

あした撫子を手折りて

花の外のあはれも今朝は數そひて折る手にかゝる撫子の露

なつ草

茂れなほ飽かず色々の花にみむ秋もほどなき野邊のもゝくさ

わけてよも人は訪はじな夏草に我さへたどる庭のかよひ路

かげろふの小町の通ひ路おのづからあるか無きかに茂る夏草

來む秋もほどはなつ野の夕風に涼しくなびく露の八千草

蚊　遣　火

○夏なき月のしも夜　月影の照りそふ砂地。

○こと草の花やはおよぶ　他の草花は及ばない。

かくれすむ門は葎にとぢられて蚊やりの煙よそにしらるゝ

蓬生のにはの露とふ螢さへくゆる蚊やりに遠ざかりゆく

夕空にたちものぼらで山もとの里のけぶりや蚊遣なるらむ

ほたる

けつべくやあらぬ螢の思草はかなく音にはたてぬものから

夕月もいり江の波の暗き夜におのれしるくも飛ぶ螢かな

谷の戸のあくるもしらじ終夜岩まがくれに燃ゆる螢は

螢似玉といふことを

拾ふとも光はきえぬ玉なれやくさ葉の露に燃ゆるほたるは

風わたるおなじ草葉にちる露のきえせぬ玉は螢なりけり

螢火透簾

みす近く飛ぶや螢の玉くしげふたつ三つなほあかぬすき影

はちす

花といへばあだにのみやは見はつべき池の濁りもそまぬ蓮葉

夕立雨

水上は夕立すらし見るがうちに一すぢにごる里のなか川

○思草　思ひの種を草によせていふ語。又女郎花、薄その他の異名。

○花といへばの歌　「蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」(古今、四、夏)によつなもの。

夕立はやく過ぐる

涼しやといふ程もなく過ぐるなりけしきばかりの風の夕立

夕立遠

なる神の音羽の峯や夕立ちぬ關の小川の末にごるなり

せみ

所えて下葉のつゆになく蟬のおのが聲には木がくれもなし

秋近きいろこそ見えね松風にたぐふ時雨やせみのもろ聲

扇

草も木もなびく姿をうつし繪の扇は吹かぬかぜを見せけり

手にならす扇の風のゆく末は秋の音にやならむとすらむ

すゞみとる

花紅葉たれかは思ふ風わたるときはの松のした涼みして

秋風もこゝにや通ふあつき日をよそにへだてて茂る木陰は

たが門もあつさ流れて水無月の水のあき汲む里の中川

涼しさも奥ある夏のすみかとはたれ見入れずや杉たてる門

夏衣

○なる神の　枕詞。音に冠す。

○手にならす　手に持つてあふぎ馴れる。

○ひとへ　單衣とひたすらの意とをかく。

○星の林　多數の星。

涼しさをひとへにたのむ夏衣薄きをいとふ頃もありしに

野草秋近といふことを

みな月も末野の木萩いろづきぬ今幾日ありて牡鹿なくらむ

夏のはて

秋近み扇の風も荻の葉にやどりたがへてたが身にかしむ

秋歌

立秋

草も木もけさより色のかはるやと思ひそむるよ秋の初しほ

ほのかにもあけゆく星の林まで秋の光と見れば身にしむ

ふきかはる音ばかりかは風おこる雲の景色も秋は見えけり

風の音をまづさきだてて朝露もおきあへぬ庵に秋はきにけり

小田の屋は稻葉ふきわけいりたつと目にこそ見ゆれ秋の初風

聞きなれし音ふきかへて軒近き松こそ風の秋は告げつれ

朝日かげ色どる雲のたつ田姫これや手染のあきのはつしほ

けふよりは千五百の秋の數々に見ばや玉しく庭のゆふつゆ

ふく風の音より外にあきぞ知る物おもふ袖のうへの白露

風は秋をつぐる使といふことを

來る秋は目に見えぬ風や幾千里あまはせ使おとに告ぐらむ

七日の夜

星合はまだはつ秋のみじか夜を一夜のみとは何ちぎりけむ

天の川いかなるたねぞ棚機のかたらひ草の秋にかれせぬ

七夕月

夕月夜かげうすき頃にたのめるや星の契りもひとめよくらむ

同橋

天の川今宵は波のうち橋をかけざればとて逢瀬やはなき

同草

わきてけふ折らばや男花女郎花(をはなをみなへし)逢ひにあふ星の手向草には

同木

たが苑もけふの手向とたな機のをりにあふ梶は本つ葉もなし

同鳥

鐘の音はつらしと知らぬ棚機も常世の鳥のながなきやうき

○あまはせ使　天馳使。

○星合　七月七夕牽牛織女二星の相會すること。

○ひとめよくらむ　人目を避けると見える。

○をりにあふ梶　七月七夕梶の葉に歌かきつけて棚機をまつる習はしがある。

○常世の鳥　鴈を指す。

或は天の戸もあけば別れむ星のあふ

同　絲

棚機の手引の絲のくるゝまをいかに久しと今日はおほゆる

同　扇

かさばやなまだ秋暑き彦星の今宵あふぎはすてもおかじを

同　衣

かさじたゞ我が一人寢の旅ごろも露けき袖はほしやわぶらむ

同　祝

織姫もいはほぞためし天つ袖いく代かけても盡きぬちぎりは

星のためし燈火きゆる里もなし風をさまれるみ代のしるしに

二星適逢といふことを

あはぬ夜の數をあふ夜にかへまくのほしの契りのまゝならぬかな

閏月七夕

あひも見ぬ後のふ月はあるかひもなか〳〵星の思ひ添ふらむ

萩

音するをいとはば何に植ゑけむと風の思はむ庭のをぎはら

○くるゝまを　日の暮るゝを絲繰るにかく。

○織姫もの歌　いはほぞ一本「いははや」「君が世は天の羽衣稀に來てなづとも盡きぬいははなるらむ」（拾遺、五、賀）による。

○ふ月　陰曆七月。後のふ月は即ち閏をいふ。

船もいさ見えぬ入江の波風に聲うちそへて騒ぐ荻かな

軒の松に時じく風の下荻はおのれそよぎて秋をわくらむ

よひ〳〵荻の聲をきく

夢さそふをぎの葉風にちる露をうき手枕にからぬ夜ぞなき

はぎ

宮木野の秋も思はず色におく庭のこはぎの露のさかりは

もゝ草の多かる中にわきて猶いろに折らるゝ野路の秋はぎ

女郎花

花ざかりいざ折りとらむ女郎花風にのみやは任せたらなむ

風にのみ靡くとすれど女郎花なまめく色は露にみえけり

名におふもあだなる露の女郎花なべての風になびかずもがな

すゝき

秋風の松を調ぶるたび毎に岡べの尾花そでかへすなり

秋風にたちそふ浪と見るまでに男花うち靡く武藏野のはら

かるかや

ふく風をさのみ厭はじ亂るゝはおのが常なる野路の刈萱

○時じく　何時といふ區別なく。常に。

○宮木野　宮城野。陸前國仙臺市の東郊から南の海濱數里の間の野。

○男花うち靡く云々　武藏野は殊に男花に名高い。「武藏野や今は茶にたく枯尾花」(弱衣)

○するがに　がには接尾語。の故に、が爲にの意をあらはす。

○葛はうらみ尾花は招く　葛の葉は風に飜つて裏を見せるから、裏見と恨みとかけ、尾花は風に靡くのが人の招く様に見えるからいふ。

藤袴

見てのみやすぎなむ野路の藤袴手ふれば色のあせもするがに

朝顔

夜をのこす霧の隔てに中がきのそなたゆかしき露の朝顔

秋野

葛はうらみ尾花は招き秋風のあはれはてなき武藏野のはら

ぬるゝこそ秋の尾花の袖とみめ露ふきほすな野邊のゆふかぜ

露

玉ざゝの光も清くおきそへて有明のかげになびく白露

秋もやゝ深くなりゆく朝な〳〵淺茅が庭のつゆぞ身にしむ

おきいでてながむる庭の朝露に野山畝尾(うねを)の秋も知らるゝ

風の夕ふきもはらはぬ玉笹や小ざゝがはらに露しづかなり

秋はたゞいかなる草の葉末までつゆの哀れのかゝらぬもなし

閑庭露滋

風にのみ心おかれむ秋のつゆ誰かははらふ淺茅生の庭

野原には人もぞ通ふおく露の深きかぎりや蓬生の庭

秋田の露を

さ苗にはふかしと見しを色に出づる秋の田の面の露ぞ身にしむ

秋田

おしなべてわさ田おしねも八束穂のたりほに民の秋を見るかな

打ちなびく稲葉の波に一とほりふくかた見ゆる小田のあき風

蟲

いづれをか哀れときかむ秋ふけて夜寒にしきる蟲の聲々

契る其のたれをまつ蟲くずの葉のうらみ有明の影になくらむ

此のゆふべ聞けば千年もまつ蟲の秋のさかりの聲は弱らじ

野となるもよしや鈴蟲まつむしの所えてなく庭の草むら

まつ蟲も聲うらがれぬ秋もはや末野のくさ葉色かはるらむ

風もなくふけゆくまゝに松蟲の聲すむ庭の月ぞ身にしむ

秋風にたぐふやしらべ松蟲のすだく闇べのねこそことなれ

おくとしもまだ初霜ぞ淺茅生にかれぬ音をなけ庭のまつむし

鹿

ねにたてて妻こふ牡鹿きく人に秋の夜長き思ひかすらむ

○おしね　晩稻。

○かひよ　蚊(カヒ)と鹿の鳴聲のかひよさをかく。

露霜のおくての山田もる庵に寢ぬ夜の友とをじか鳴くなり

山居秋夕

み山べに住むかひよとぞなく鹿のねをのみ友ときかぬ夜ぞなき

稲妻

聞きわびぬ世のうきよりも此の夕吹きもたゆまぬ山の嵐に

秋もまだ淺茅が露のたまく〵に宿るもはかな宵のいなづま

月

こよひ誰都の月になぐさまで姨捨山に袖ぬらすらむ

秋ごとに夜を長しとはさやかなる月見ぬ人の言葉なるらむ

宵々に待ち出づる月の秋の夜はたかきも山のかひなからまし

雲はるゝ夜は中空になほすまむ山口しるくいづる月かげ

すむ月の色ねと見ばや野遊は今木萩花さきをじかなくなり

橋ばしら朽ちてもくちぬ光とや昔ながらに月はすむらむ

雲はらふ風を光にをかのべの松にふけゆく秋の夜の月

月かげは昔のまゝのつぎ橋にむなしき名のみかけて殘れる

似る夜半もなみにさやけく難波江の蘆間の月に秋風ぞふく

くもりなき月を宿して廣澤の水の心も秋やすむらむ

葎おひてあれゆく庭の白露をやどりとなるゝ秋の夜の月

雲はるゝよるは出づるをまつ島や入るををじまの波の月影

露霜のおきゐて見ばや槇の戸もさすがに惜しき閨の月かげ

ちるも今はをしまじ桐の葉がくれし筒井の月の影も汲まれて

寫すともえも及ばじな墨の江は松をくまにてすめる月かげ

たち隔つ霧も煙もはるゝ夜の月にみなせの里や訪ふべき

忍ぶにもあまりあるまで軒あれて月もりあかす秋のふる里

禁中月

嵐ふく音もおよばぬ雲の上はいかに靜けく月のすむらむ

社頭月

增鏡かけてくもらぬ神がきは月も光をわきてすむらむ

家づくりめでたき人の許に遊びて

みがきなす宿の光に月かげのいく秋すめる庭の池水

ひとり月をながめをり

秋の月いかなるかげに向へばぞ千々の思ひのひとりごたるゝ

○墨の江　住吉。攝津國。吉をえと發音する例は他にもある。

○增鏡　眞澄鏡。

○ひとりごたるゝ　獨言つ。

月を見て昔を忍ぶ

なれし其の影とむかへば昔へや今も戀しき秋の夜の月

月の夜人をまつ

あくがるゝ面影のみは何せむに來ぬ人さそへ秋の夜の月

曉月夜

まちいでし夕の月の光よりあはれは添ひぬあかつきの影

月まちどほなり

夜や淺き雲やこぶかき月はまだ峯にいさよふ影だにもなし

八月十五夜

かけて照らし亂れてすめる夜半もあれど最中の月にます影もなし

十六夜

ふきはらひ風も月まつけしきかも殘る雲なきいさよひの空

九月十三夜

唐國にしられぬ月の名たゝるやこの日本(ひのもと)の光なるらし

あふぎても猶天てらす日本のこよひ名におふ月よみの神

さやかなる月はも中の秋のみにかはらぬ名をや今宵すむ月

○昔へ　いにしへに同じ。昔方の意。

○最中の月　八月十五夜の月。

○九月十三夜　宇多上皇の御代より賞する習はしとなる。

○月よみの神　月の異名。

高山待月

かづらきや心にかゝる雲きえて高間の山に月ぞまたるゝ

月照瀧水

ぬば玉のよるとも見えず山姫の月にくりいだす瀧の白絲

月前松風

影やどす小笹が露はこぼすなよ庭の松風月にふくとも

月前草木

露を見せ風をしらすもたゞならず月すむ庭の萩にすゝきに

いづるより向ふ外山の松杉の葉末わくまで月ぞさやけき

初　鴈

ゆふ月のほどはいづこに休らひし有明のかげにわたる初鴈

老が身は寐覺のほどを今よりの秋に契らむはつ鴈のこゑ

渡りくるあはれもことに深き夜の月なき空の初鴈の聲

山こゆる數こそ見えね雲きりに聲はかくれずわたる初かり

めづらしと手にとるばかり庵近き峯をこゝろの初かりのこゑ

○高間の山　大和國の西境の金剛山。

うす霧の隔てはかりはさはらじなゆく道ひろきあふさかの關

おほつかなゆくへも波に見えわかず霧のひまこぐ秋の浦船

宇治川や秋ぎり深し船よばふをちこち人の聲ばかりして

擣衣

夜をかさねいこそねられね蘆垣のまぢかき宿に衣うつころ

秋風のたゆめばたゆむ槌の音にをちの砧のほどぞ知らるゝ

もりあかす小田のかりほのさよ衣露まどろまぬすさびにやうつ

深草や野となる里もかりにだにせこがきぬたとうち頼むらむ

しぎ

思ふこと猶かずそひて聞きわびぬうき曉のしぎの羽根がき

きけば猶物こひしぎのはねがきにあはれ數そふ曉のそら

たつ鴫をいかにながむる賤の男がおのが門田の夕ぐれの空

うづら

浦風のふきたゆむまのの江を近み波にまぎれず鶉なく聲

霧ふかき方に鶉なく

小笹原ふしど隔つる夕霧にいとゞ鶉のねにやなくらむ

○いこそねられね　寝て眠られぬ

○羽根がき　羽掻。鳥が嘴にて自ら羽をしごくこと。

くず

厭はれむものとも知らず鄰まで垣ねのまくずはひ渡るらむ

野分

あれやすき草の扉をあけば又夜半の野分にかこちもやせむ

つた

心なきいは木が上に這ふ蔦も露けき秋を色にみせけり

菊

秋毎に色香おいせぬ菊の露なめても見ても千代はへぬべし

菊の花さけり山水ながる

千年までへずとても飽かずくまばやな菊の下ゆく秋の山水

籬の菊に月さやかなり

色ふかき露さへあるに白菊の光さし添ふませの月かけ

伴菊延齢

匂へなほ秋なき時やとばかりもめかれしつべき千代の菊かは

もみぢ葉

大和なる立田姫こそ染むる木々を唐錦とはいかで見ゆらむ

○菊の露　これを飲めば長壽を保つといふ。

○ませ　ませ垣。竹木などをあつめて結へる低き垣。

○立田姫　秋の女神。奈良の舊都の東西に佐保山、立田山ありしよりこれを春秋に配しいふ。

影のこる夕日の岡のもみぢ葉は時雨もそめぬ千入とぞ見る

峯麓なべて錦をたちへだつ霧におくある山のもみぢ葉

さよ時雨音づれざらば今朝おける露にそむるとみぬのもみぢ葉

時雨はれ月影てらすもみぢ葉は露ひるまなき色ぞみえける

常磐山下ゆく水ももみぢ葉の移ればかはる色をみすらむ

もみぢ葉のうつれる秋の山川はにしきをたゝむ水の白なみ

霜のあした園の紅葉を

來ても見ぬ園の紅葉は霜のたて織るもかひなき唐錦かな

山の紅葉を見にいきて

山ふかみ秋のもみぢの色よりも淺からずこそ思ひいりぬれ

秋雨

さびしさは霞める空のながめにも千重増る霧の雨になる暮

秋夜ながし

くりかへし見る卷々の書の數にあきの夜長きほどぞ知らるゝ

秋のいはひ

春の花のさかえはあれど千五百秋みのる木の實の時は樂しも

秋くるゝ

山媛のわたるか雲のま袖よりうちしぐれてぞ秋はくれゆく

秋を今誘ひゆくとも山風よ拂ひなはてそ木々のもみぢ葉

暮秋霜

くれてゆく秋のいろとや霜白く置き渡す野邊のゆふべ寂しき

九月盡

うき秋といとひすごして長月も今宵つきなむ事をしぞ思ふ

冬歌

初冬

時雨にはもみぢぬ庭の常磐木に霜のはなさく時はきにけり

行末のはげしさいかに冬になりけさはや風の昨日にも似ぬ

けさは早しぐれを急ぐ峯の雲きのふの秋を空にへだてて

初冬落葉

霜をへてもろからむよりきほひ散れよしや冬たつ風のもみぢ葉

閑居曉時雨

定めなき身を思ふこころの曉にたえぬる夢をとふ時雨かな

時雨

たがうきにぬるゝとか見む此の夕しぐれてすぐる衣手の杜
立田川時雨にまじるもみぢ葉に水かさはそはで色ぞ添ひゆく
物おもふ我が袖ぬらすむら時雨また誰が里に涙かすらむ
ゆふ嵐ひとむら雲をふきまぜて煙しぐるゝ山もとの里
旅ねする笠置のさとのさ夜時雨袖にのみふる心地こそすれ

霜埋落葉

ふりしける庭のもみぢ葉色さえて白きを後における朝霜

落葉

ちりうづむ木の葉や深き谷みづは氷らぬさきに音ぞ絶えゆく
むす苔に木の葉衣をかさね著ていはほぞ冬はあたゝかげなる
ゆふ嵐ふきすぎてゆく名殘なほありと音たてて散る木の葉かな

月照殘菊

見し秋をうつろひかはる苑の菊もとの色とふ霜のつきかげ

殘菊

おく霜を重ねてにほふ白菊に冬がれ知らぬませのうちかな

霜

おきいづる霜のあさぢの朝ぼらけ外に色なき庭の寂しさ

はしゐせし夜半もありしか閨の戸の透間もいとふ霜の狹筵

くち殘るひつぢに深く結びとめて田の面に氷る霜のさむけさ

さゝ竹のさやぐ葉分の風の音に夜ふかき霜の音ぞしらるゝ

冬の野

其の色となくて身にしむあはれさよ草葉枯野の霜のあさあけ

寒樹交松

もみぢ葉は一葉もとめずたち竝ぶ松を殘してはらふ木枯

寒草所々

かれゆくか垣根のをざゝ軒の荻たえ〲さやぐ霜の寒けさ

寒草

あはれにも何のこるらむ霜深きをかべの薄枯れもはてなで

冬枯の野はおく霜の花よりも葉をめづらしみ殘るむら草

くちのこる庭の尾花のそでの霜はらふ朝けの風ぞさえぬる

○ませ　ませ垣。

○ひつぢ　刈り取った稲株に自生する稲。

○朝け　朝明け。あけがた。

○田な井　種井。春苗代を作る時稻種を浸すために掘る井。又一說田の中の井。

風さむみかれたつ池の蘆の葉にこほれる霜は吹きもはらはず
まさごさへ吹上の濱邊風をいたみうべも折れふす波の枯蘆

冰

夜の程に比良の嵐やさえぬらむ志賀の汀のけさは冰れる
冰れたゞさらずとてしももり捨てし田な井の水のくまれやはする

冬月

さむけしな山は一葉のくまもなき月にふきのこる峯の木枯
たが爲にあらぬ寐覺を板屋もる月にかこたむ霜の狹筵
風をいたみ木の葉の雨のふる夜半ぞ月は軒端の山にはれゆく

千鳥

さしてよる方やいづことタ汐のみつの浦波千鳥たちゆく
もろ聲になきあかさばや友千鳥我もうきねの夢のあかつき
いづかたに妻やおき津の濱千鳥波のよる〳〵鳴きてうらむる
千代とよぶ聲もこよひの友千鳥川瀨さやけき波に聞えて
さゆる夜は同じおもひや河の洲にむれゐる千鳥諸聲になく

○うぢ　網代の名所宇治と憂しとをかく。

○たつき　杣人の用ゐる刃の廣き斧。

水とり

ちり浮ぶ木の葉と見れば山川にながれぬ聲やあそぶをし鴨

網代

かかるわざうぢとはいさや白波のよるはかなくも網代もる身は

霰

風あれてふるや霰の玉がしは繁りしこともありし木末に

霜こほりいさゝむら竹さら／＼に霰ふるよは夢もむすばず

雪

さればこそ比叡の高嶺は雪白しふし見の夢もさむる嵐に

今ぞ思ふうべもすぎぬる花紅葉のこらば雪の色にうもれめ

かざされぬ枝や恨みむ年つもる老木も雪の色にかくすを

さえし夜の嵐もしるく此の朝け峯しろたへに雪ぞつもれる

をちこちのたつきの音もうづもれていくか日をふる雪の杣やま

音するやよする堅田の浪ならむ浦濱わかぬ雪のあけぼの

たつ波にみえかくれせし浮島もこの朝なぎの雪にさやけき

なびきふす竹より奥に松ひと木見ゆるや軒端ゆきの山もと

つもれたゞ積らずとてもとふ人は絶えてあれにし雪のふる里

ふる雪に深山はさぞなけふ幾日ふもとの里も道はたえけり

郷ありと空にしられて山もとの煙は雪のそこよりぞ立つ

枝さやぐ音もうもれて笹竹の雪ふかき夜はまど靜かなり

三輪の山けふは何をかしるしとも峯の杉むら雪にうづめる

ふる程は空かきくれて三輪の山はるゝ檜原ぞ雪にさやけき

雪をきく

したをれの音なかりせば呉竹によ深く積る雪はしられじ

雪の降れる夕

なく鳥のこゑもうもれて稲荷山くれ靜かなるゆきのすぎむら

雪の日人を待たれて

ふりはへて誰かは訪はむ雪もほに笠やどりする人やまたまし

野行幸

行幸せし道も昔にかへす世は今いくたびかみかり野の原

狩

○三輪山　大和國初瀨の西。「我が庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」（古今十八、雜下）

○ふりはへて　わざ／＼。ことさら。

あすも來む昨日もけふもかり衣ならしの丘のあかぬ鳥立（とだち）に

かり衣ひもゆふ風のふきたてて歸るかた野の袖ぞ寒けき

炭竈

山高み誰すみがまの底にしもありと知られて立つけぶりかな

けふいくか日數ふり積る雪に猶けたぬ煙はみねのすみがま

埋火

かたらへば思ひもとけつ思ふどちむかふ埋火なかだちにして

爐火似春

空炷（そらだき）の名もうめが香に冬ごもる閨は春べと向ふうづみ火

神あそび

おもしろやをりかへし謠ふ榊葉にゆふつけ鳥も聲合はせつゝ

早梅

めづらしと誰めでざらむ冬ごもり春にさきだつ梅のはつ花

歳暮

たが世より惜しむまもなき冬の日を限りに年のくれ始めけむ

たちかへる春をひとへにまつら潟ひれふるとても年はとまらじ

○鳥立　鷹狩の時の鷙鳥の集まるやうに草むら又は澤などを設けたる處。

○かり衣　枕詞。亂る、おごろ、き、ひも、たつ等に冠す。

○ゆふつけ鳥　鷄の異名。

○まつら潟　肥前國松浦潟。宣化天皇の時、大伴狹手彦任那に使するを妻の松浦佐用姫別れををしみて領布をふりたりとの傳說ある處

惜しめどもさすがに春も待たるればふた心とや年の思はむ

花さかぬ老木ながらにめもはるはさすが待たるゝ年の暮かな

見る書はのこり多くも年くれて我がよふけゆく窗の燈火

けふ暮るゝ年のいそぎに大路さへ所せきまで人ぞゆきかふ

をしめたゞ今年といふもくれ竹のひとよ二夜と數ふばかりに

閑居歳暮

ゆく年よしばし休らへこむ春をまつてふものも立てぬ住家ぞ

老いて年を惜しむ

哀れわがいつ老いらくの身となりて惜しまむといひし年もありしに

老いて年の暮に

數そふと思へばくるし老が身はいざゆく年も物わすれせむ

山家歳暮

くれゆくも知らぬみ山は年木こる斧のおとにぞ驚かれぬる

年の内に鶯を聞きて

しはすの十七日に春たちければ

わかがへる初ねとぞ聞く年の内にまだきさへづるそのの鶯

○くれ竹の　暮れをかく。
○ひとよ二夜　よに竹の節をかく
○年木　越年の準備に伐る薪。

春ははや年のこなたにたちまちの月も霞みてあけわたる空

年内立春

春はきぬなどゆく年も休らはぬとても遲れて殘る日數に

玉櫛笥ふたゝび春はめぐりきぬまだ一年も暮れあへぬまに

除夜

大方にをしと思はばいをも寢め我が世ふけゆく年のなごりを

雜歌

天

はてはいさ始めもしらぬ天の原たゞ大空と見て仰ぐのみ

日

入りてかついでにし日より天の戸を世の明暮の始めとぞしる

月

青海原さしも滿ちくる汐さるは月のみ船やうかべそむらむ

星

世の人のしげき思ひのかず〱はほしの林をためしなるらむ

○たちまちの　十七日のたちまち月にかく。

○いをも寢め　いをねる。寢る。めは未來の助動詞むの已然形。

○汐さゐ　汐のさしくる時浪のさわ立つこと。

風

ふき出づるしな戸やいづこしら雲の靡く方こそ風のゆくすゑ

雲

風を見せ雨をしらせてゆく雲を心なきものと思ひすてめや

煙

あだし野にたてし夜ぞうき民富めるしるしを國にみつる煙を

霞

木の葉ちる秋に思へばめもはるの霞は霧に千重まさるもの

霧

そのかみの國の始めの面影は立ちもへだてぬ秋ぎりの空

露

なき澤の森にたえせずおく露はなほそのかみの涙なるらむ

雨

親しきもうときになりぬ訪ひとはでながめのみする此の頃の空

霜

あはれさは草木もあれど霜をいたみねになく蟲のかれ〴〵の聲

○しな戸　風の神。

○なき澤の森　大和國高市郡。香具山の南麓に鎮まれる神。泣澤の女神（伊弉諾命が伊弉冊を喪して泣き給ひし時生まるといふ）を祀る。

霰

おきとおく霜夜よりけにさむしろはいやはぬる間も霰ふる頃

雪

松杉もうゑばや家の北おもて雪みむためと人はしらじな

稲妻

人心うつるぞはやきいな妻はすぐる雲間もありけるものを

曉

かぞへじな是れもうき身につもりては老となるべき曉のかね

老が身は鳥がねよりもさめやすき夢の世をしるあか時の空・

閑曉

何となき寐覺やはせむ鳥鐘におきて仕ふる身ならましかば

曉雲

月はとく影をさまりて殘る夜のあけぼのしろき峯のしら雲

朝

老いらくの身は朝いせぬならはせをつとめてとのみ人のいふらむ

晝

○さむしろ　狹莚。

○朝い　朝寢。朝遲く起くること。

仰ぎ見よかたぶくかたの中空に照らす光も盛りありとは

夕

あすありと頼む心の怠りにさのみ一日の暮や惜しまぬ

夜

なす事も闇の現にまどろむはいやはかなにも夜はいはじな

山

何か世に積れる事の空しからむ塵ひぢとても山となるもの

峯

心ゆく花紅葉には峯たかき吉野たつ田も越えなづむかは

谷

出でて世の春しる鳥もすむ谷にかくれがしむる人やいかなる

岡

何事を忍ぶの丘の名もつらしあからさまにも隠れなき世に

杣

ひかれては世にもいづみの杣木すら朽ち果てぬまで頼みなりける

嵐

霜枯もまたで草木をふきしをる山の嵐や秋にうらみむ

かけはし

棧のくちぬもつらし山深く入りにしあとも見えじと思へば

山居

思ひやれかかる人目の冬にだに限らぬ山の奥のさびしさ

山の庵に煙たつ

をりなれてたつる煙ぞ朝もよい來ても見よかしやまの庵に

瀧落つる

山深み雲霧つゝむたきつせはたゞ石ばしる音ばかりして

巖苔埋路

山道の苔のみふかき岩がねはこゞしともなく跡たえにけり

石

しらず其の神代のさゞれ幾世へてつきぬ千曳の石となりけむ

砂

なるは難く碎くは易き神とけのいはほをもとの砂(いさご)にはして

野

○朝もよい　來の枕詞。

○こゞし　けはし。險阻なり。

○神とけ　落雷。

廣しとて誰かまよはむ武藏野やさして行く手の道しある世は

森

頼もしな願ひもなほき直からぬけぢめたゞすの森ときくから

原

身のうさにたちも歸らぬ古を小野のしの原忍ぶわりなさ

關

行くはゆきとまるは止る道しある世にあふ坂ぞ關路まさしき

身を守る心の關しまさしくば世にまがごとのいかで入りこむ

ふる雨に越えわびぬれば鈴鹿川やそ瀬もけふは波の關守

徑

石の上いそがぬわざに世々の書みむとて年をふるのなかみち

ほそみち

とぢねたゞありとて誰かふみわけむ宿は葎の中の通ひぢ

田

ふる雨と照る日の惠みまち／＼に高田くぼ田も神のまに／＼

禁中

○たゞすの森　判別を正すに糺の森をかく。糺の森は京都の北賀茂川と高野川と相合するあたり。

○まがごと　禍事。曲事。

○とぢね　ねは完了の助動詞ぬの命令形。

○天つやしろ國つやしろ　天神地祇。

○深草の里　京都の南、伏見との中間に在る。

雲の上〻雲のよそより望み見れば富士より高し大内の山

神社

たが爲と誰か思はむ世をまもる天つやしろも國つやしろも

寺院

黄金もてつくる佛をてらふとや世に輝かぬ寺とてはなし

庵

雨霰ふるも厭はじかしましき世をのがれすむ草の庵は

里

我ならで住むもうづらと世を秋に鳴くねくらべむ深草の里

門

おきふしも心の儘にとはれぬぞ中々やすき門のあけくれ

戶

答へずよさしもとはれぬ笹の戶のさやぐか風の音信にして

垣穗

隱すべきことしなければ蘆垣のあれしかいまみよしや世の中

まがき

かこはねど隠れ住む山のかひなれやたつ雲霧を籬にはして

陸奥の籬が島のまつこともあらでふりゆく身こそはかなき

庭

荒れし宿の庭の蓬生葎生の繁きかたをや野べとわくべき

井

惠むべき人さへ我をわすれ井の住むかひもなき身にはなりけり

家

世に茂き言の葉草をふきわけて家の風をも傳へてしがな

柱

國の中にたてし例をたてて見よなど御柱のひとになるらむ

軒

もりそめし軒端の昔たが世より人もふる屋にながめしぬらむ

窗

ふみ見ても暗き我が身は思ひ猶かゝげそへまし窗のともし火

牀

拂へども思ひのちりは敷妙のとこの山かぜ吹くかひぞなき

○籬が島　陸前國鹽釜の沖。小祠がある。

○家の風　一家の歌風。

○敷妙の　枕詞。枕、袖、牀にかく

閨

窗の梅軒のたちばなかをる夜ぞ閨のあれまの風もうとまず

鄰

鄰にも聞えぐるしき世のさがをよしや隔つる蘆の中垣

海

底しらぬ人の心はくみしらじ千ひろの海ははかり見るとも

湊

汐ならぬ海もからくや世わたりに八十の湊をかよふ船人

浦

羨まし壹志の浦のいちじるくなみ〳〵ならぬ名をたつる身は

濱

君が代は遠つあふみの濱に生ふる松の千年も近しとやする

崎

千早振かねのみ崎は神代より後も幾代になりにけらしな

島

浦山とわくればやしま八十千島みなあめつちの中島にして

○壹志の浦　加賀國金澤市の南東石の浦。いちじるくの序。

潟

けふみれば昨日の沖は淺香潟汐のみちひぞ世の姿なる

泊

由良のとはけふ漕ぎはてつあす知らぬ身は浮船の浪枕して

渡

かち人のこすあさ川をしるべにて世わたる道もこゝをせにせむ

岸

かの岸とたのむもはかな誰も此のうき沈むまの中にすむ身は

橋

世を渡る身のうき橋は中々にかへり見するも危かりけり

水

いかにして身のうき事を忘れ水忘れはてつゝ世にはすまなむ

池

水草おひてみさぶる程ははらひてむ池の心の底しすみなば

沼

たえねたゞ身はかくれ沼のうきぬなはうきに茂きも人はしらずて

○淺香潟　淺き潟といはん意か。何處か定め難し。

○すまなむ　なむは希望の助詞。

○みさぶる　水錆の動詞形。水面に錆の如きもの浮ぶ。

○うきぬなは　水に浮きたる蓴。

江

世をうしと難波のえやは恨むべき業もあしかる身をしらずして

河

人なみの願ひはかけぬ水無瀨川ながらふべくも思ひえぬ世に

淵

なみ〳〵の世には見えじな片淵の片苦しくも人はいふらむ

瀧

いはで物おもふ心のたき波は千々に碎けて知る人もなし

瀧漲り落つる

ひゞきにも巖やさくと峯高みみなぎる瀧は雲に聲して

瀨

みそぎ川神の心のよるべこそぬるくもとくも中の瀨ならめ

早瀨

梓弓いるがごとなる瀧川の瀨は年月のたぐひなりけり

波洗石蘚

山ずみのゆづ岩むらの苔衣なにをけがしと洗ふたき波

○片淵　片一方深き淵。

○ゆづ岩むら　五百津磐村。極めて多くの岩の羣。
○けがし　穢らはし。

樵夫

わけ入るも遠山かづらくるゝまや眞柴おふ男の歸るさの道

釣船

君が代に數そふものは波風のたえぬ時うる浦のつり船

市

わけて見よ爭ひたてる市人のなかにもかよふ道はありけり

閑中燈火

はかなしや我が身ひとつの窗の内も照らしかねたる夜半の燈

披書知古

したふから流れての世も其のかみの心くまるゝ水莖のあと

おやの親の世をくみしらる水莖の跡や子の子のしるべにはせむ

靜語古人書

わけ入りてとふも語るも靜けしなやまとの書のふかき教へに

水樹有佳趣

石の上ふる川柳みなれそなれその根うせねば若がへりつゝ

春秋野遊

○みなれそなれ　水馴磯馴。

たちかへり同じ野原にあくがれて花も紅葉も身にぞ馴れぬる

初　草

見よや人雪の底にもはつ草のもえて春しる時もありとは

しのぶ草

名もあはれたが世の昔軒ふりて忍ぶてふ草のおひ始めけむ

忘　草

しげれたゞ世のうき事も忘草おふてふ岸の名もゆかしきに

思　草

憂き事のたねやつきせぬ思草刈りはらへども生ひ茂るらむ

月　草

頼まじようつろひやすき月草のあさ花田なる人の心は

下　草

うけて分くる惠みにやおふ雨露のしづくの杜の木々のしたくさ

葵　草

かけてあふげ神の契りにあふひ草二葉を千代と常磐かきはに

菖　蒲

○思草　思ふたねとなることを草に寄せたる語。又女郎花薄等の異名。

おりたちて誰かはひかむこと草の何のあやめもわかぬ水沼に

世の中にうけひ枯れねば隠れ沼のあやめぞながき根のみ流るゝ

菰

うき世こそ旅のかりねの菰枕たかき賤しき心やすまね

蔦

つたなしや獨りもたへで蔦蔓はふ木あまたにかゝづらふ身は

萱

茂れたゞ茅が軒端の高がやは刈りふかぬまも朽目かくさむ

淺茅

さればとてあはれとひ見ぬ人もなし淺茅が宿の淺ましの身は

蓬

露の身のおき處とて人も見むよしさも茂れ門のよもぎふ

芝

ゆききたえぬ木陰の芝生茂れるも知らじないこふ人の爲とは

萍

たえねかし身は岸のうきにたへて漂ふのみは生ふるかひなし

○ねぬなは　じゆんさい（蓴菜）の異名。

○みぬめの崎　敏馬、又三犬女。今の神戸市の近邊。古代の要津。

○みるめかるらむ　見る目離る、海松刈るをかく。

藻

なみ〳〵の世には見えじな知られじな風に靡かぬ底の玉藻は

蓴

うき事のます田の池のねぬなはのくるしきまでに物をこそ思へ

海松

常はさはみぬめの崎にこぐ船のあまた見ゆるやみるめかるらむ

松

千年へむ事は思はず身をやすく世にすみの江の松や賴まむ

澗庭古松

世にこゆる事はかたしやかけ高くふりぬる松も谷のうもれ木

薄暮松風

とふ人は影だに見えぬ夕暮に誰をまつかぜ庭はらふらむ

椿

つら〳〵に見れどもあかぬ玉椿たま〳〵さかばいかに賴まむ

榊

のがれても身は奥山の榊葉のさかゆく世をば祈らざらめや

杉

しづけしな獨りみ室の山かげにしめて幾とせすぎのいほりは

槇

わけ入るも覺束なしや花も實も見し日はまれの槇のしげ山

桂

幾代々にあふひ桂ぞちはやぶる神の契りとかけて頼まむ

楢

しる人も今は稀にぞならの葉の其のふることは世に傳へても

柏

ならふなよとにかくに世の人心ふたおもてなる兒(こ)のて柏(かしは)に

柞

風をいたみ更にいまはと柞葉の散りはてし世を思ふさへうき

櫨

常磐なる中に一木のはじ紅葉はじめてそむる色は見えけり

ひさぎ

我が見ても年をつもりの濱ひさぎ生ひ初めし世はさぞな久しき

○ならの葉の云々　奈良朝にあらはれし萬葉集。

○濱ひさぎ　濱邊に生ふる植物。楸。

常磐木

花さかぬ身は常磐木の色なきにをり知られぬぞ安げなりける

寄生

相思ふなどかは梨の宿り木はあなうつろ木のうつくしみかも

朽木

朽木にもたとへまうきは我が身かな終に花さく世をし知らねば

埋木

ありとてもよしやなからむ後にだに知られやはする谷の埋木

鶯

春とてもとはれぬものを鶯の宿たがへてやひとくとぞなく

きゞす

我が園に粟生あらねばかりにだにくる人なしときゞす鳴くらむ

時鳥

かくれすむみ山をいでよ時鳥なれはうき世にまたぬ人なし

水鷄

とはれしを叩く水鷄に思ひ出でて門たがへとや更にいらへむ

○羽根がき　羽搔。鳥が嘴を以て自ら羽をしごくこと。鴫にいふこと多し。「わびぬれば曉かけてかへりたる鴫のはねがき我ぞ數かく」(元眞集)

○浮巢　鳰は水上に浮巢を作るものといふ。

○なにはにつけて　萬事につけて蘆鴨の緣語。

雁

春秋にくるも歸るもうはの空に浮世ばかりと鳴くぞはかなき

鷄

ふきあらす林の山風身にやしむさ夜もすがらに鷄なくなり

鴫

老が身は物かなしきの羽根がきもうき曉の慰めにして

百舌鳥

旅衣すそ野を遠み見やるさへおぼつかなしやもずの草ぐき

鳩

所えて宮もとゞろにむかしへや今も八はたの山鳩のこゑ

鳰

鳰やしるおひたつ波の浮巢よりうき沈む身を世の常とは

鴛

さゆる夜は友寢の鴛のかひあれや羽がひの霜を拂ひかはして

鴨

世にすめばなにはにつけて蘆鴨の足のいとなき憂き事ぞある

鵜

島つ鳥おのが羽をもて其のかみの產屋にふくも安き世としれ

鷺

かち人の渡る淺瀬をしら鷺のしるべと賀茂の川瀬にやたつ

鵲

はげしくも降りくる雨を宇治川のうしとしらすにたてる烏鵲（かさゝぎ）

鷹

しらず其のもとはの山の荒鷹を誰が世ゆするゑて手にならすらむ

山雉

櫻さく遠山どりのをのの柄もくちぬべき程ながめのみして

庭つ鳥

我ならでかけの垂尾のたれか世に曉つぐる聲をまつらむ

鶴

おりゐても泣ならぬ聲は雲の上にきこえあげなむわかの浦鶴

熊

てる月のわが身にそへる山住も心のくましあらばかひなし

○其のかみの產屋云々　神代の鸕鷀草葺不合尊の故事による。

○世ゆ　世より。

○かけ　にはとりの異名。

虎

あた報ふ思ひはてすにたぐへては虎も拙きものとこそ見れ

馬

まよふとも雪の古道あととめむおよぶ心の駒をしるべに

猪

益良夫や折にふりてはたけり猪の武き心もなどなかるらむ

鹿

さらでだに慰めがたき姥捨の山にや鹿の獨りなくらむ

蝶

むつれとぶあはれ蝴蝶の爲ならぬたが花園も我がものにして

蛙

飛鳥川あす知らぬ瀨も夕さらずなくや蛙をあはれとぞ聞く

蛬

宮城野の萩の錦のなかくにあかぬさいでときりぐす鳴く

松蟲

住の江はなく蟲の名も松風の木末もかげも千代の聲して

○思ひはてす　思ハ果たすこ。

○まよふとも雪の古道云々　老馬の智の故事による。「管仲隰朋從ニ於桓公一而伐ニ孤竹一。春往冬反。迷惑失レ道。管仲曰。老馬之智可レ用也。乃放ニ老馬一而隨レ之。」（韓非子說林）

○さいで　裂帛。

鈴蟲

かみさぶる神樂の丘に聞くからにところがらかも鈴蟲の聲

促織

たが爲と機おる蟲のねにや鳴く露も夜さむの窗におきゐて

蜘蛛

雨にやれ風にみだるゝ笹がにのいともはかなき宿はわが宿

われから

世をうみに住むものゝうさも身を捨てぬ只われからの音をのみぞなく

玉

しるや人たもつ心の玉だにも磨くにつけてひかりそふとは

鏡

大空にますみの鏡かけまくもかしこき神の光そふとは

かづら

末長き世の神わざにうつゆふの正木のかづらつけ始めけむ

元結

もとゆひの古紫はあせて今よもぎの髪に霜ぞ消えせぬ

○笹がに　蜘蛛の異名。いとに冠する枕詞。

○われから　海藻に附著して棲む蟲。「蜑の刈る藻にすむ蟲のわれからとねをこそなかめ世をは恨みじ」(古今一五戀五)

○うつゆふの　枕詞。まさき、こもりに冠す。

○たれす　垂簾。

○紐かゞみ　裏面のつまみなどに紐のつきたる鏡。又なさき、のどか等に冠する枕詞。

枕

伏して歎き起きて驚く世のうさに見るもはかなき夢の手枕

筵

かりそめの露のさゝやの笹筵おきふしつらき住居のみして

衾

風をいたみ身はならはしの庵ながらうすき衾は恨みられつゝ

簾

いつまでか小簾のたれすの垂れこめて花も紅葉も見ずてやみなむ

衣

紫もあけの衣もはえはあれど淸きかみぢの山あゐのそで

裳

いせの海歌ふも舞ふも少女子が淸き玉もは見るかひぞある

紐

霞めるもえならぬ花の紐かゞみのどかの山の春のけしきに

帶

足引のやまひにやせぬ下の帶の一重ゆひしも三重ゆふまでに

書

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは

繪

忍ぶにもあまり悲しきうつし繪にみぬ世こちたくひとり言して

硯

藻汐草なほかきくゆる事はあらじ硯の海もつきぬ世なれば

筆

むかし今の人のこと葉の花紅葉ふでの林の上にこそみれ

笛

うきふしも忘るばかりに笛竹のよに優れたるねをや聞かまし

琴

笹竹の大宮ごとと六つの絃のむかしにかへす音こそ世に似ね

弓

梓弓まゆみもあれどつき弓のいさをしき名の神世しぞ思ふ

矢

うつほ矢もへやも劣らじ天のごとなりかぶらこそ世に聞えけれ

○唐鳥の跡　支那の書物。

○藻汐草　鹽をつくる料の海藻。かきあつむるにより、歌に多くかきあつめにかけていふ。

○笛竹のよに　竹の節に世をかく

○笹竹の　枕詞。支那の故事に禁苑を竹園といふより、大内、大宮人に冠する。又よにもつゞく。

○六つの絃　六絃の琴はやまとごと、あづまごと、わごん。雅樂に用ゐられしは十三絃の箏のこと。

○椎根津彦 一名、神知津彦。古事記には槁根津彦に作る。神武帝東征の時速吸門に於て帝に謁して臣下となつた。

○けに 殊に。

○位やま 位の高きを山に譬へいうた語。

扇

手にならす扇ぞためし家の風いかで心にまかせたらなむ

蓑

著るべくもあらぬ蓑笠しひてきる椎根津彦やあめの道しる

笠

天の下あふぐ恵みも大君のみかさの山の陰に知られて

絲

打ちみだる絲よりもけにとき難みむすぼほれたる人の心は

述懐

位やま高ねの松もあるものを麓も知らぬ谷のうもれ木

人の許へいひやりける

寂しとは是れをやいふと今日しりぬとはれし後の宿の夕ぐれ

とひくべき人は厭はじ門さして我憂世にはいでじとぞ思ふ

寄水述懐

くみほさば千尋も淺しとことはにすむを心の山の井の水

寄鐘述懐

○忘貝　瀨戶內海に多く產すと。「きの國のあくらの濱の忘貝我は忘れじ年は經ぬとも」（萬葉十一、新拾遺十四、戀四）

物もへば霜夜ならねど身をおきて心にぞしむ曉の鐘

寄貝述懷

いざこゝに身のうきことを忘貝ひろひては世にすみの江の濱

寄斧述懷

山人もかごとやおはむ斧の柄のくちはつるまで思ひいりしは

旅述懷

すゝむべき世に遲るゝも足柄の山路の旅に身を知らすらむ

寄岩祝

龜の尾の山のいは根もさながらに眞砂と見なす御代は此のみ代

寄松祝

松もしれ千年のかげを千年とも限らで世々を契る心は

絲竹もなるればけがる手もふれぬ千代のしらべや庭の松風

梓弓いとせの春にひきかへて砌に千代をまつぞひさしき

竹遐年友

此のそのに伴ふ千代のくれ竹を末はるかには誰か見ざらむ

社頭祝

大君をさきくと祝ふさくすゞのいすゞのみやを誰かあふがむ

八幡山さしも神代の根ざしとていはでもしろき岩坂のまつ

萬代に松のちとせの色そへて君をぞまもる住吉のかみ

祝

あふがばや星の林もわが君の八百よろづ代の數にかぞへて

古今和歌集講竟宴、道の祝

種となる一つ心を傳へてはよろづ代たえぬ言の葉のみち

散りのこり

五月のつごもり富士の山の雪を見侍りて

昔けふ鹿の子まだらに見し人の形見きえせぬ雪の不二のね

こたふ　　　　　　　　　　信章

白雪のかの子まだらの古言も殘るかひあるけふの不二のね

河邊紅葉

谷川やいはまの紅葉そめにけりうち出づる波の音かはるまで

後の長月二十五日姪まさきを伴ひてすがく院の離宮にまうで侍るに貞利

○さくすゞの　枕詞。いすゞに冠する。さくくしろ。

○鹿の子まだらに　「時しらぬ山は不二のねいつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ」(伊勢物語、今昔物語、新古今)

○すがく院云々　修學院離宮。京都市の東北郊外、修學院にある。後水尾帝の御時德川幕府より奉りて離宮となつた。

みちびきして御山の紅葉を見せ侍りしかば詠みける

まさき

もみぢ葉に御幸まちえる山姫やさも世にしらぬ色にそむらむ

御幸たえぬ山の紅葉はいく千入そめて上なき色にてるらむ

御幸も此の秋はまだ仰せいだされざるよし聞き侍れば

まちつけむ御幸のためか山姫のまだ染め残す木々もありけり

春葉集 終

あづま歌

加藤枝直

○二荒の宮の大神　二荒大權現。徳川家康を指す。

○高鞆　音高くなりひゞく鞆。

○明星の　枕詞。明る、飽かぬに冠する。明星は金星。

○曇らはしき　曇るの形容詞形。

○賤たまき　卑し、數にもあらぬ等につける枕詞。

東歌序

いはまくもゆゝしき二荒の宮の大神天の下むけ平らげ給ひて、まつろはぬ國もなくまう來ぬえびすもあらず、おほみいつくしみいたらぬ隈なむなかりしより、うま人は唐衣繙きさけて、玉の臺の宴に飽き、民草は高鞆の畏き響を忘れて、八十のちまたに歌ひ、おのがじゝ樂しかる月日を喜び長閑なる春秋を送り迎へざるなむあらざりける。かくて大御世は春の花の盛りに匂ふが如く、松の葉の常磐にさかゆくまゝに、おのづから千世の古道ふりぬる事も起り、隱沼の隱れたる跡も顯はれて、言の葉の道も明星の明かりゆきつゝ、曇り夜の曇らはしきかたもあらずなむなりにける。さるはつかさ位高き上の品のあたりにこそ、元より世にすぐれたる人々も數多おはして、其の名取々に聞えにたれど、賤たまき卑しきわが輩のたやすく學び出づべきならねば、今こゝに取り出でていふべくもあらず。唯此のしものきざみにも青淵の底ひ深き心をしめて、岩が根の賢きかどある人々是彼いで來にけり。これを上り

○おしてるや　枕詞。難波に冠する。
○難波の圓珠の庵の聖　僧契沖を指す。圓珠庵に住した。今も大阪南區餌差町に存する。
○つぎねふ　枕詞。山城に冠す。
○稲荷の山のはふり　荷田春滿、稲荷山の祠官たり。
○縣居の大人　賀茂眞淵。
○ありまろの宿禰　荷田在滿。春滿の甥、田安宗武に仕ふ。
○橘の翁　枝直。千蔭の父。
○目も及びがたき云々　萬葉調を指せるか。
○野に綾織る花の錦の云々　新古今調を指せるか。

たる世に比べみるに猶今をすぐれたりと覺ゆるたぐひなむありける。それが中におしてるや難波の圓珠の庵の聖、つぎねふ山城の稲荷の山のはふりこそ其の名遠近(をちこち)にしも聞えにたれ。この二人のをしへ世に廣まりてより、歌の學び古に立ちかへりぬれば、あがりたる世を慕へる歌人も多くいで來にけり。しかはあれど得たる所得ぬ所互にしもありて、學びの力長けたるは却りて歌の心に遅れ、歌詠む方に心引きたるはなか〳〵に學びのわざおろそかにて、これを兼ね得たるなむ稀なりける。さるを此の二つをかねて世にも優れ人もゆるしたるは縣居の大人、ありまろの宿禰、さては橘の翁なむ有りける。此の三人の主達(ぬしたち)其の學びの心は等しきものから、歌の手振りは思ひ得るかた異にて心々にぞありけらし。彼の大人は尾上の松の雲を凌ぎて目も及び難き古の高き姿をたふとみ、宿禰は秋の野に綾織る花の錦の細やかなる中頃の巧みを喜び、翁は絲竹の殊更に設けたる聲にはあらで、百鳥の音の自らなる調べを好みてたゞに眞心より詠みいでたれば、古にも寄らず後にも附かず我と一つの姿をなむなせりける。いでやこの人々はしも身は品下りたれども心は青

〇くだちゆかむ　降り行かむ。末になる。

〇くさはひ　物事の種となるもの

〇芳宜そののあるじ　芳宜園大人橘千蔭をいふ。

〇飯高の郡　伊勢國。今廢せられて飯南郡に入る。

雲の高さを占めたれば、くだちゆかむ世にも其の名隱れざらむ事しるし。されば今より幾百年をふとも、斯く眞盛りなる今の世の手振りを思ひ見るべきくさはひにもひきいでつべくなむ覺ゆるは、珍らかなりとこそいふべけれ。然るを大人と宿禰とは其の歌も文も早く世に傳へたるを、猶この翁のみ世に表はれざりしがあかぬわざになむありしを、翁のまなご芳宜そののあるじ、こたび思ひ起して東歌六卷を板に鐫りなむとす。こは翁のみづから選り出で置けるなりとて、これよりしも翁の言の葉廣く傳はりて、彼の二人と等しく芳しき其の名のいや增しにあらはれ行かむ事は喜ばしきわざになむ。翁はじめ名を爲直といひけるが、後に枝直となむ改めける。其の遠つ祖をたづぬるに、古曾部の入道能因がむまご加藤五判官景貞といひけるは、伊勢國になむ住みける。それより十つぎにあたりて彈正景光といへるは、北畠の家の家司となりて飯高の郡に住みけり、景光よりなゝ世景之といへるが時に、北畠の家は亡びにたり。斯くて後景之は世に隱れて伊勢寺といふ所になむ籠り居ける。景之がむまご重政にいたりて出でて紀の殿に仕うまつりぬ。翁はこの重

○町のつかさ云々　枝直は町奉行大岡忠相に隷して與力となつた。

政より四つぎの後にて、若かりし時に江戸に來りて町のつかさの下司に召されにけり、齡は九十あまり四にて天明の五とせ八月になむ身まかりける。さて其の家故ありて中ごろより藤原を名乘りきつるを、更にもとつ氏にたちかへりて橘を用ゐる事は翁よりとなむきこえし。

享和のはじめの年八月

平　春　海

ちゝの實の父の翁、神風いせの國にあれ出でて、おほぢ翁歌をしも好みよまれしによりて、いと若かりし程より歌になむ心をよせられけるとぞ。ゆゑよし有りて此のとほのみかどにまゐ來て、公の暇なかりつれど家に歸りてはたゞ燈火のもとにして古今の書見、あるは得がたきをもあさり出でて、みづから數多の卷々を書き寫し、はた歌作りて思ひをのばへられけり。常にいへらく、日にけにまごころのみかど、出づるよりやがて歌をかうがへ、道すがらも心の中にによびつゝ、まかづれば自ら心も靜けく清らに成りぬといはれき。千蔭九つの年より歌作る事を教へ給ひて、やゝおよずけゆくまゝに、歌てふものの尊むべきことわりを示し給ひぬ。千蔭十餘り四つの年にか有りけむ、縣居の大人をぢの鄰に招きすませて、かたみに昵みかはされつゝ、千蔭はかのうしの教へをうけよとてなむ名簿おくらしめ給ひける。父翁七そぢ餘り二つの齡にしてねぎごとの儘に仕へをしぞき給ひては、殊に歌にのみ遊び給へりければ歌の數いとさはになりにけり。さるを八十ぢ許りにしてかの歌をも文をも自らえり出で、其の年々を別ちて東歌と名づけおかれたる草子六

○とほのみかど　將軍の居所江戸を指す。
○のばへ　のべの延音。
○まごころ　家の中の室。家。
○によび　呻吟。うめく。
○およずけゆくまゝに　年齡の進むに隨つて賢くなる。
○しぞき　退き。

○やいすて　遣り捨てる。捨てやる。
○うからやから　一族。
○あかち　分ち。
○をぢなきかうべ　凡俗の頭。
○たど〳〵しさ　恐縮のさま。
○ことぐさ　言草。始終口にのぼすことば。

つ七つ有りて、其のもとの集共は、いつばかりやいすてられしにか今求むれどもなし。其のあづま歌と記されたる中にも、猶心に叶はざるや有りけむ、多く消しものし、あるは二とせ三年が程歌はいと少なくて萬葉集の歌をまねび作るをひたぶるに珍らかなる事に覺えて、古き歌の調べとゝのほらぬをさへに學び見つるを、後にみればうるさくて皆すてつなど記しおかれつるも有りけり。父翁天明の五年といふ年の八月十日に九十ぢ餘り四つの齡にてみまかられし後、かの東歌を板にゑりてうからやからはた教へうけし人々にもあかちてむと思へりしかど、其の頃は公の暇なかりしかば、さる事も成しえざりし程に、今年十あまり七とせになむ成りにける。いでやとて思ひ起して四つの時、戀雜など分ちて長うた文らまで千蔭寫しとりて板にゑりぬ。はたくさぐさ書きつめおかれつるもののちりぼへるもこゝらあるは、猶すき〳〵にものしてむ、かくかきつむるにつけても、昔千蔭をおほしたて教へさとし給へりし事共の、歌にもこと書きにもこゝかしこに見ゆるに、唯涙のみこぼるれば、をぢなきかうべに、いとゞたど〳〵しさぞそはりぬる。さて常のこと

ぐさに歌はすてずしてよみてよ、歌よみての德は老いての後しらるゝ事なれば、今はいはずといはれき。今なむ千蔭しづたまき數ならずして月花のすさみうとからぬにつけても、かの敎へのかしこさをなむ思ひあはせられぬる。かれいさゝかみたまのふゆにむくいむとてなりけり。御代の名を享和と改められけるとしのふみ月橘千蔭しるす。

○しづたまき　數ならぬ、卑し等にかゝる枕詞。

○みたまのふゆ　恩賚、神などの御加護をいふ敬語。

東歌巻一

橘枝直

春歌

としのうちに春立ちければよめる

つらゝゐし小河の水も年のうちに春立つ浪の花やみすらむ

おもふ事なき世なりけりをしと思ふ年はのこりて春のきぬれば

白雪の降るとしながら先づ咲きし梅が香とめて春はきにけり

老いらくのさらでも積る年の内に何ぞは春のたちかさぬらむ

春のはじめのうた

今いくかありて手折らむさ蕨の下もえそむる春になりけり

さゝのやの朝戸あくれば梅が香に春の光もたぐへきにけり

なべてよの春の光も玉垣の内つ御國やはじめなるらむ

明けわたる空の霞もほのぐ\と紫おぶるむさし野の原

○さゝのや　竹の葉をもつて葺きたる小屋。

○玉垣の内つ御國　日本國の別稱

○さす竹の　枕詞。君、大宮、都に冠する。

白雪の残るはこぞのかたみにて霞むや春の苞（つと）といはまし

二荒山（ふたらやま）あくる朝日のにほひよりかすみ初めつゝ春はきにけり

先づかすむあづまの春やさす竹の都人にも羨まるらむ

八十ぢあまり八つになりける年の始めに

はかりなきよはひにみれば數へこし八十ぢやとせの今ぞみどり子

春從東來

唐人もふりさけ見よとくる春は富士の高嶺に先づ霞むらむ

春風春水一時來

たま河の水もぬるむやいつしかと風寒からぬ春の光に

春生人意中

うちなびく霞もまたでのどけしと思ふや春のはじめなるらむ

春松久緑

松がえに日陰のかづら千代かけてくる春毎に色まさるらむ

松迎春新

いくちたび春の山松色そへて變らぬ陰もあらたまるらむ

冰始解

けさよりは淺瀨こす浪おとかへて冰ながるゝたま河の水

春風解冰

春風の到らぬ隈やなかるらむけさは蘆間もこほらざりけり

東風吹春冰

青柳のいとふきみだす春風に結びもとめぬ池のうすらひ

冰盡解

とぢはてし朧の淸水ぬるむより名殘ばかりの月もこほらず

早春餘寒

たをやめが若菜つまむとゝめてこし雪間に雪のまたぞ積れる

餘寒霜

春さむみ野邊の菫は咲きもせで霜のみひとり花と見ゆらむ

海邊早春

あづさゆみ春はきにけりますらをが手にまく鞆の浦もかすみて

春くればやがて霞や隔つらむ遠ざかりゆく海ごしの山

早春河

春はまだ淺瀨の水やさえぬらむ河邊の小草萌ゆるともなし

○うすらひ　薄くはつた冰。

○たをやめ　手弱女。益荒男の對語。

○鞆の浦　阿波國海部郡那佐港の邊。

早春松

春はまだ淺香の浦もかすまねど色こそまされ住吉の松

早春鶯

かすむともわかぬばかりの春の色を松にことわる鶯のこゑ

あづさゆみ春さりくれば朝日かげ匂ふ尾上に鶯のなく

初春霞

東路のちゝぶの山の朝霞幾千代かけて世になびくらむ

あさ霞ふたらの山に立ちそめてなびかぬ隈もなき御代の春

また春にあふ嬉しさをつゝめとや袂ゆたかに霞たつらむ

初春山

たちそむる霞とや見む春はまだ淺間の嶽になびくけぶりを

東路や春來にけりと出づる日の光まちとるふじの白雪

山家初春

山里のおのづからなる門の松今年といはむしるしともなし

都霞

ふりはへて行きかふ袖の追風に都大路はかすみかぬらむ

○松にことわる　松は色變へぬもの故春の來たことを報告する。

○袂ゆたかに　「嬉しきを何に包まむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを」古今、十七、雜上。
○霞たつらむ　霞立つ、袂を裁つ。たつは掛詞。

○あびき　すなどり。網引。

○二竝のつくばの山　筑波山の頂男體、女體の二峯に分る。

朝霞

あびきするわざこそ見えね朝ぼらけ霞をもるゝ海人のさへづり

朝山霞

山がらすあけぬと告ぐる聲はして八重の霞や夜を殘すらむ

霞滿山

船木こる音にしられて足柄の山は名のみぞ霞まざりける

遠山霞

むさし野をふりさけ見れば秩父ねに春日かげろひ霞たなびく

代におほふま袖といはむ春霞ふたらの山にたちそめにけり

けさはまた霞も一重二竝(なみ)のつくばの山はそれとしるしも

霞添山色

世は春になりにけるかな消え殘る雪にやつれし山もかすみて

霞添春光

いづことも春のひかりは若緑かすみに匂ふあけぼのの色

海邊霞

須磨明石見わたし遠くなりにけり浦浪かけてかすむ春べは

○さやに　明らかに。分明に。

○小松ひき　古、正月初子の日に小松を引きて千代を祝ふならはし
○若菜つみ　もと正月子の日に若菜をつみ食して祝ふ。後專ら正月七日の事となる。

玉よする浦波かけてかすむ日は潮干汐滿ちわかれざりけり

孤島霞

駒とめてさやに見ましを玉の浦はなれ小島も今朝はかすめり

霞隔遠樹

爪琴のいづれの緒より霞むらむしらべも遠き嶺の松風

原上霞

春がすみたちのゝ原に來てみればいばゆる駒の聲のみぞする

野徑霞

小松ひき若菜つみにとならざらば霞の末野いかゞたどらむ

南枝咲待鶯

雪きえて先づ咲くかたの梅が枝にやがて待たるゝ鶯の聲

雪中鶯

軒近き枝にこづたふ鶯の羽風にもろき春の沫雪

ふる雪を木毎に咲ける花とみて所さだめず鳴くや鶯

雨中鶯

春雨に梅の花笠とりもあへずしとゞにぬれて來なく鶯

○夜がれ　夜離、夜の通ひを絶つ。

夕鶯

ふしなれし一むら竹に夜がれじと花にわかるゝ鶯の聲

故郷鶯

故里になれし鶯ことしだに歸りやくると松に啼くらむ

鶯春友

鶯の人にをしまぬ聲ならで花待つほどの友ぞ少なき

竹鶯

里なれてまがきの竹に鶯の一よをあかす曙のこゑ

竹間鶯

朝日さす園のむら竹うちなびきさえだく〳〵に來なく鶯

竹林鶯

軒近き一むら竹に臥しなれて朝毎にきく鶯のこゑ

竹裏鶯

うちなびく園の村たけ長き日にうきふし知らぬ鶯の聲

庭の梅に鶯の啼きければ

さきにほふ色香のみかは鶯も梅にこそなけ朝な〳〵に

野　鶯

さとはなれ刈りもつくさぬ野づかさの萩のふるえに鶯のこゑ

名所鶯

鳴きてしもとまらぬ春は杉が枝に聲も老蘇の森の鶯

元日子の日なりければ

いざさらば鶯きかむ松引かむ春くる今日ぞはつねなりける

澤若菜

みかりせし野澤に出でてはしたかのすゞな摘みつゝ今日も暮しつ

水邊若菜

春風に野澤の氷とけぬらむ里のたをやめ根芹つむみゆ

春草漸青

いつしかと庭は緑になりにけり小草のたねを春にまかせて

春草短

野をさむみまだ下萌えのさしも草さしも春ぞと霞むものから

春草

生ひさきもやゝ此の頃ぞしられける花咲く草とあらぬむぐらと

○野づかさ　野原の中の小高き處

○松引かむ　正月子の日の小松引
○はつね　初音と初子と掛く。

○野澤　野べにある澤。
○はしたかの　すゞな、すゞろにかける枕詞。はしたかは鳥の名。みかりせしと縁語。

○さしも草　艾の古名。さしも云云の序詞に用ゐる。もえる、こがすの縁語。

路若草

雉子なく野は心せよ燒かなくに道の小草も春はもえけり

雨中春草

春雨の惠みにもれぬあはれかな憂れたかるべき蓬葎も

泉溫草色春

伊與の湯にあらぬ泉もぬるむより左右(さう)にも草のもゆらむ

殘雪

かきたえて古鄕人のとはざりし恨みをのこすこその白雪

花とちり月とながめし夕ぐれの忘れがたみやこぞのしら雪

いさゝめに春の光を片わけてをののかやねに雪ぞ殘れる

松殘雪

枝たわに殘りし雪のとけそめて雨にもまさる松の下露

嶺殘雪

花さかばともにあはれとめでなまし猶消えのこれ嶺のしら雪

野殘雪

さと人の若菜たづぬと踏みわけし跡もさだかに殘るしら雪

○憂れたかるべき　憂へらるべき

○いさゝめに　かりそめに。

○をののかやね　野にある茅の根

む月ばかり近江の龍公美へ消息のついでに
むさし野に雪ものこれる此の頃の比良山おろしいかに寒けむ
　正月もちの日ゆきふりければ
ふるとしは名のみなりけり春まちて咲くや木毎の花の白雪
　む月なかば雪降りつもりければ
みよし野の花の盛りもかかるらむ春ふる雪のゆきて見ねども
　きさらぎ二十日あまりにひばりの使として上總國にくだりてよりみな月のはじめつかた歸るさに赴きけるほどの歌の中に
わたつみのかざしみだるゝ春風にぬきとめぬ玉か沖つ白浪
ゆきゆけば一木の花の陰なれや野中の岡にかゝるしら雲
つばなぬく淺ぢがもとに宿とへば袖におちくる夕雲雀かな
　風光處々生
なにはがた梅さく比の朝な〳〵霞そひゆく淡路島山
　梅をよめる
きのふまで雪のふる枝にふゝめりし梅咲きたりと風ぞしらする
咲く梅の花のひかりを添ふる夜は月もかすみに曇らざりけり

○にひばりの使　開墾使。
○つばな　ちがや（白茅）の異名。

○たぐへむも　ことづけるのも。

○こぞめ　濃く染めること。

○わぎへ　我が家。

○うちなびく　春の枕詞。

朝霞立ち出でてみればうめ咲きてあり明の月に春風ぞ吹く

鶯はたづねてきなけ吹く風にたぐへむもをし宿の梅が香

色まがふ雪と散らさで咲く梅の花をはぐゝめ春の鶯

梅の花ちるべくなりぬ心して枝にうつろへ春の鶯

若木梅

紅のこぞめの梅は春雨にぬれての後ぞ色まさりける

末とほき春を契りてことしよりわぎへの梅は薫りそめけり

霞中梅

さほひめの霞の袖に包みてもあまりてかをる梅の下風

梅花風静

青やぎのかたよるかたや薫るらむ吹くとしもなき梅の下風

梅遠薫

われのみや哀れとはみむ梅が香のをち方人をさそはざりせば

窗梅

うちなびく世は春なれや朝日かげ匂へる窗にかをる梅が香

簷梅薫風

軒近き松に聲せぬ春風も袖にしられてにほふ梅が香

梅花夜薫

咲く花の陰に宿るとみし夢を現にかへす窗の梅が香

庭梅

たが袖を鷲かすらむほどもなき夜の籬にあまる梅が香

故鄕梅

なにはづや千世ふるさとの春をへてみやび忘れぬ梅が香ぞする

落梅浮水

さゞれこす波もかをれり咲く梅のあかで散り浮く庭のやり水

門柳

わが門のひともと柳絲たれて來るやと人を待たずしもなし

門柳春久

門にたつ柳の絲をくり返しへぬべき春の限りしらずも

柳垂窗

うちなびく柳の絲を春風に結ぶも解くもまかせてぞみる

水邊柳

○たが袖の歌　「色よりも香こそ哀れと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」（古今、一、春）を本歌としたもの。

春風は人にしられじいなむしろ河ぞひ柳なびかざりせば

春を淺み水草も生ひぬ池水になびく玉もや靑柳の影

河邊古柳

老いぬれど柳の髮はみどりにて水の鏡の影もうらみず

岡早蕨

かの岡に鳴くやきゞすの妻戀におもひ比べてもゆる早蕨

鶯に妨げられてけふもまた岡の早蕨折りぞのこせる

山早蕨

あし引の山のさわらび萌えざらば朝露分けし袖は乾かじ

霞中月

春の夜は光を花とちらさねど霞や花の匂ひなるらむ

旅春月

草枕都おもへばはれやらぬ心に似たる春の夜の月

春曙

咲きやらぬ花をもまたじ曙の眺めながらに春をつくさば

軒近き一むら竹に鶯の塒ながらのあけぼのの聲

○いなむしろ　かはの枕詞。
○春風はの歌　「いなむしろ川ぞひ柳水ゆけば靡きおきたちその根はうせず」（顯宗紀）

○鶯に妨げられて　その聲にききほれて。

江上春曙

難波がたかすむ入江のみをつくしたてるやいづこ春の曙

幽栖春曙

ながらへて住みやわぶると見む人に見せばやかすむ窗の曙

牧春駒

うちむれてあさるみ牧の春駒の中にも龍のおひ先はみゆ

夕野遊

春の日もいつしか暮れぬあづさ弓引馬(ひくま)の野べのあかぬまとゐに

春雨

年あらむたりほのかづら秋かけて御田の苗代春雨ぞふる

晩春雨

夕づゝの光をかくす霞よりやがて小笹に春雨ぞふる

水無瀬河

ありてゆく水はまさらず水無瀬河霞ながらの春さめの空

さくら河春

世とともに流れて久しさくら河花の雫を水上にして

○みをつくし　水先案内の爲に立てる杙。

○み牧　御料牧場。

○引馬の野べ　遠江國濱松のあたり。

○水無瀬河　攝津國三島郡。東流して今の廣瀬（山崎驛近く）に於て淀川に合す。

○見てを　をは助詞。

○曲水宴　古、三月上巳の日流水に臨みて酒を鈞み、杯を流し詩などを賦する遊び。

○飛鳥川　大和國高市郡。多武峯の邊に源を發し飛鳥村を經て北流大和川に合す。

○八鈞の宮　大和國高市郡、今飛鳥村大字八釣。顯宗天皇の皇居。

歸鴈

しばしだに見てをしのばむ春の鴈こえ行く嶺は霞まずもがな

鴈雁消雲

あけぬとて峯に分るゝ横雲につれて消えゆく鴈の一つら

峯歸鴈

きえのこる雪をや花と嶺こえて古郷いそぐ天津かりがね

水郷歸鴈

船きほふよどの川づら夜をこめて鳥羽田別るゝ鴈がねぞする

曲水宴

飛鳥川八鈞の宮のむかしより流れて久しけふの杯

野徑雉

菫つむ野べのゆききに馴れ〳〵てあさるきゞすの立ちも騒がず

雲雀

春さればすみれ咲く野の朝がすみ空に雲雀の聲ばかりして

田雲雀

すきかへすほどは幾かもあらを田を野と住みなしてひばり鳴く聲

○ふりはへて　ことさらに。

○ふもと田の歌　「蛙鳴く神なび山に影見えて今や咲くらむ山吹の花」（新古今、春下）の脫化。

庭の梨花を

春のよの月の光はうすけれど物思ひなしの花はくもらず

ふりはへてとはれやすると待つかひもなしの花さく庭の春雨

若かへでを

折ればかつ散る秋よりもかへるでの春の錦ぞたちまさりける

櫻

ふもと田の苗代水に影みえて山の櫻の花咲きにけり

山櫻

松杉の枝を殘して降る雪は外山に咲ける櫻なりけり

八重櫻

風をうらみ雨をいとひて八重櫻ひとへに花を思ふころかな

待花

いたづらに眺めてけりな待つとしも枝にこもれる花はしらじを

とく咲かば移ろふほどもしかならむよし山櫻まちもかこたじ

漸待花

春の來て一日々々にそふものは花の待たるゝ心なりけり

雨中待花

またれつる花かとみえし白雲は香にもにほはぬ雨にざりける

待山花

霞たつ外山にかゝる白雲はまたるゝ花の面影にして

花未開

さそはれむ風の心をたどればやうち解けかぬる花の下ひも

花始開

咲きそむるけさは珍らし春をへて見なれし庭の一木櫻も

咲きそむる花をしみれば又さらに春立ちし日の心地こそすれ

初花

思ひねの心づからとまどろめば明け行く空に匂ふはつ花

山深く入りにし人も出でてみよ花は里より咲きそめにけり

花半開

山櫻そとも影とも片わきて半ばぞ花の盛りなりける

山花未遍

移ろはむ恨みにかへて山櫻さかりまつ間を盛りとやみむ

○雨にざりける　雨にぞありける

○花の下ひも　花の蕾を下紐に見立てていふ。

○そとも影とも　山南、山北。

○ふゝめりし　含んだ。

尋見花

とめこずばくやしからまし里わきて先づ咲きそむる花の一本

霞中尋花

とひ殘す里こそなけれ春霞先づ咲く花を立ちやかくすと

花漸盛

盛りまつ外山の櫻ふゝめりし枝は日毎に稀になりゆく

見花

かつ見れど慰めかねつ櫻花さそはむ風のうしろめたさに

獨見花

わびしらに咲くや一木の家櫻おなじ心に友しのぶらむ

靜見花

つく〲と花に心を散らさねば風も梢やよきて吹くらむ

心靜見花

咲きしより飽かぬ心を散らさねばさそはむ風を待つ花もなし

風靜花芳

我が爲にさける一木の花の香をよそにとさそふ春風もなし

花下言志

春ごとに契りたがへず咲く花にあだなる名をば誰おほせけむ

花下送日

先づ咲きし山を旅ねの初めにて一木の櫻散りのこる陰

花留客

よしさらば思ひおもはず心みむふる里人を花にまかせて

曙　花

ちるといふ事もしばしは忘れけり花に風なきあけぼのの空

夜　花

夕月の入りぬる後も櫻花さける木陰は闇としもなし

月　照　花

さかりなる花に光やゆづるらむ空にかすめる春のよの月

雨　後　花

立ちよりて名殘の露にいざぬれむ花に晴れ行く村雨の空

羇　中　花

手向せし山の櫻に風ふけば草の枕に雪ぞつもれる

○あだなる名　「明日ありと思ふ心のあだ櫻夜はに嵐の吹かぬものかは」

羇中見花

宿とへばこゝもいくへの白雲と見しよりなれし花の下ぶし

山　花

岩ねふみ分けこし山のかひありてよに似ぬ花の盛りをぞみる

遠山に花あり馬をとゞめてみる

河上の高嶺の櫻咲きしより水かふ駒のたたぬ日もなし

嶺上花

白雲のかゝるとみてし高嶺より吹きおろす風に花の香ぞする

山里へ花見にまかりて

白雲とみし山里の花にきて都の空の雲をこそみれ

山家花

しかりとてとはれぬ軒の山櫻よしや雲ともまがひ果ててよ

聞きなれてうからぬ山の松風も花咲く頃はうしろめたしや

杣　花

さくら咲く春の杣人心せよ斧のひゞきに花もこそ散れ

宮木引く聲のをり〳〵絶えぬるは杣山人も花や見るらむ

○花の下ぶし　花の下にねること

○宮木　宮殿をつくる材。

古渓花

岩くゞる流れの末のかをれるはみ谷の奥の花や咲くらむ

關花

あふ坂は心をとむる關なれや花に別れて行くも歸るも

水郷花

守る人の袖より外にかをるなり關吹きこゆる花の下風

芹つむと水な濁しそ咲きしより花のかゞみの河づらの里

河邊花

櫻さくかた野やいづこ白雲の中に流るゝ天の河なみ

橋下花

河上に若葉あらふ兒おりたちて花の影みる水な濁しそ

海邊花

旅ごろもきそ山櫻咲きぬらし雲のはたてに渡すかけ橋

岸花

梓弓いそ山ざくら風ふけば雪に棹さすあまのつり船

よる波の花にも香をや移すらむ春行く河の岸の櫻は

○かた野　河内國北河内郡。今の河内國の最北にあたる地方。牧野村枚方町のあたり。

○きそ山　信濃國。木曾のきを旅衣著とかく。

○はだれ　まだら。

名のみして吉野の山は春寒し來ませ先づさく花の都に

櫻のちるを見て

かざせどもかくれぬ老のもとゆひにいとゞ降りそふ花の白雪

花　雪

雪とのみ庭もはだれに花ちれば梢に殘るしら雲もなし

山　落　花

いかばかり高かれとてか吉野山幾世の花のちりつもるらむ

殘花薰風

ちりのこる花のありかや知らすらむ憂かりし風の心にも似ず

尋　殘　花

分け迷ふ人にはつらし山櫻さそふ風には心よわくて

春　遠　情

いろ〳〵の袖ふりはへて都人今やさがのに若菜つむらむ

暮　春

ちる花の別れにぬれし袖を又いかにしをれと春の行くらむ

心よわく歸りかねたる鶯のこゑをのこして春ぞくれ行く

花は散りぬ今はとゞめてかひなしと思ひすてても惜しき春かな
をしめども日數はけふにつきゆみの心強くもはるぞくれゆく
かぎり有りて暮れてゆくとも萬代に花鶯のはるなからめや

暮春山吹

行く春は何のいそぎに山吹の花のさかりも見はてざるらむ

暮春月

ほどもなく暮れなむ春の思はれていとゞつれなき在明の月

春神祇

一しほの緣をそへて二荒山神の御まへの松ぞさかゆく
あられふりかしまの神を大君の三笠の山にまつるけふかも

春人事

いとなみはひとり〳〵にかはれども花をあはれと思はぬはなし

春述懐

何事のあかずといはむ八十ぢまで風なき花も幾春か見き

春懷舊

いく春の山の霞をへだてきて見しよの花の遠ざかるらむ

○つきゆみ　槻の木にて造りたる丸木の弓。つきに盡きを掛く。春に張るを掛け弓と緣語。

○あられふり　枕詞。かしまにかく。

○大君の　枕詞。みかさにかく。

三月盡

あまたたび春の別れに馴れぬれど惜しさは老もかはらざりけり

○ま木　まは接頭語、美稱。

○は衣　羽。

東歌巻二

夏歌

首夏雨

音もせで降りし長雨の其のまゝにはれぬや春の形見ならまし

首夏山

花さかぬま木のとやまに春くれて變らぬ色に夏はきにけり

首夏新樹

春花を待ちしばかりは待ちもせぬ木々の若葉のいつ茂りけむ

更衣

ぬぎかふる蟬のは衣うすけれど暑さもよほす夏は来にけり

見し花のおも影のみを形見にてかふる袂ぞかにもにほはぬ

色も香も心には猶殘りけり花にそめてし衣かへても

あだにちる花を恨みし心にもそめし衣はさすがかへうき

餘花

花遲き山のとかげに住む人は櫻を夏のものと見るらむ

尋餘花

名もしらぬ里に出でけりみ山には花や殘ると奥をつくして

此の頃はうとぶるさともなかりけり散りや殘ると花を尋ねて

山中餘花

分け入りしかひは有りけり夏山の青葉が中の花のひと本

花落枝綠

名にたちし花は跡なき青葉山それもあだにや秋はちらまし

新樹

花鳥の春のあはれをゆづるはの若葉の露に風ぞかをれる

夏木立しげりもゆくか飽かざりし花の盛りをおもかげにして

山新樹

夏山のしげみは風も洩らさねど若葉にそよぐ音ぞすゞしき

庭樹綠滋

軒近き木々の若葉の日にそひて綠にこもる宿ぞ靜けき

庭樹結葉

○とかげ　常に日かげのささぬ所

○うとぶるさと　何所といつて分けへだてをする里。

○神まつる葵　賀茂の葵祭には葵をかけるからいふ。
○玉かづら　枕詞。かくに冠す。
○みあれ　賀茂神社の祭事。
○あふひ草　葵、逢ふの掛詞。
○卯月の中の云々　賀茂祭は陰暦四月の中の申の日に（臨時祭は十一月中の酉）行はせらる。

みし花の雪とふりにし宿とへば青葉にかよふ風かをるなり

いつしかと木々は青葉になりにけり庭の苔ぢに色をかはして

にはの木立のいとしげりければ

あかざりし花こそちらめ夏木立月さへもらず成りにけるかな

新樹妨月

あすも又陰とたのまむ夏木立月のためにはうしと見ながら

卯花

くれぬとて塒にかへる鳥の聲よそに聞きなす垣の卯の花

葵露

神まつる葵の露の玉かづらかけて久しきためしなりけり

賀茂祭

神山に絶えせぬものはもろ人のかくる祈りとあふひなりけり

いく千たびみあれの今日にあふひ草卯月の中のとりもつくさで

待郭公

まちわぶと事やつてまし鶯のかへる古巣の山ほとゝぎす

漸待郭公

○里わきし　ある里に限つて鳴いた。

○聲さへにほふ　聲さへ匂ひあるやうに思はれる。

○なれをしも　汝をまあ。

○あとに枕に　あとさきに。

さつきにはあくまで聞かむほとゝぎす待たじといふもまつにざりける

久待郭公

咲きあへぬうの花垣にまちそめてさかり過ぎ行くやまほとゝぎす

人傳郭公

なほざりに我れやはまちしほとゝぎすねたくも人に先づきかれけり

里わきし恨みはあれどほとゝぎす聞きつとつぐる人もなつかし

待聞郭公

なれまつとはな橘をうつし植ゑて聲さへにほふやまほとゝぎす

遠聞郭公

千まち田をへだてて聞けどほとゝぎす物にまぎれぬ今朝の一こゑ

遙聞郭公

さだかにはききもわかれず武藏野の野末に今やなくほとゝぎす

近聞郭公

なれをしもまつ夜更けゆくうたゝねの夢おどろかす山ほとゝぎす

兩方聞郭公

なれをしもまつに弱れるうたゝねのあとに枕に鳴くほとゝぎす

山路經しかひは有りけり足曳のかなたこなたに鳴くほとゝぎす

獨聞郭公

ほとゝぎすながなく里は多けれどひとり〱の初音ならまし

朝霍公鳥

ほとゝぎすなきて過ぎぬと見し夢を現にかへすけさの一聲

夕霍公鳥

ほとゝぎす鳴きて過ぎゆく一こゑの後に照りそふ夕づゝの影

夜聞郭公

なほ待つと寢ざりし夜半の數ほどはこゝにのみ鳴け山ほとゝぎす

郭公一聲

をち返り鳴くとも飽かじほとゝぎすつれなかりける夜半の一聲

月前郭公

月かげは眞砂の霜の深き夜に夏をことわる山ほとゝぎす

雨後郭公

さみだれも限りあればぞほとゝぎす鳴く一聲に雲も殘らぬ

村雨をすぐして名のる一聲に松の露ちる山ほとゝぎす

○をち返り、折り返し。

山にほとゝぎす鳴くかた

夕立の雲もかゝらぬ山の端におのれふりいでて鳴くほとゝぎす

郭公ニ類

秋近み聲も惜しまずほとゝぎす古巣にかへる別れ告ぐらむ

名所郭公

誰が里に契りおけばかほとゝぎす名のりて過ぐる關のふぢ河

谷郭公

洩らすべき人めだになき谷の戶に何ほとゝぎす聲忍ぶらむ

里郭公

ほとゝぎす鳴く一こゑに武藏野の草はみながら露ぞこぼるゝ

野郭公

むさし野の廣さ知られてほとゝぎす聞きに來つれど聲ぞ遙けき

磯邊郭公

しのびねもあらはになりぬほとゝぎす波こす磯の松にならひて

故宮郭公

みかのはら布當(ふたき)の宮のあととへば鹿脊山(かせやま)のまにほとゝぎすなく

○關のふぢ河　美濃國不破郡、今藤子川といふ。

○みかのはら　山城國、今の木津川に沿うた地方。

○布當の宮　一名甕原宮、みかのはらにある。古昔の久邇宮大極殿の在所。

○鹿背山のま　鹿背山は布當宮近くにある山。まは際。

山家郭公

さびしさにたへて住めとや問ひすてて都に向ふ山ほとゝぎす

社頭郭公

過ぎやらでこゝに鳴かなむほとゝぎす北野の松の一夜ばかりは

郭公稀

宿りせし花橘も實になれば夜がれがちなる山ほとゝぎす

早苗

秋の穂の霜のおくてもわさ苗も一つ綠になびく夕風

雨中菖蒲

あやめ草かり葺くけふは五月雨に軒ふりまさる宿としもなし

池菖蒲

松が枝の千とせをうつす池水に同じためしのあやめをぞひく

旅宿菖蒲

都には軒にこそ葺けあやめ草旅にしあれば枕にぞかかる

橘

常世より珠城(たまき)の宮にかをりこしかぐのこのみぞ花咲きにける

○夜がれ　夜來て鳴かぬ樣になる

○枕にぞかかる　菖蒲枕とて端午の夜菖蒲を敷きて寢る枕。

○かぐのこのみ　橘の實。

いにしへを忍ぶの軒に風過ぎて繙く書にかをる橘

曙橘

ほとゝぎす啼く一聲も匂ふらむ花橘に明くる東雲

庭橘

香をとめて訪はれやすると窗近く植ゑし橘花咲きにけり

しのばれむ身にしあらねば袖ふれて植うるかひなき庭の橘

谷中の郷淨光寺の柿本社へ奉るとて社頭橘といふことを人のよませける
に

石見のやその神垣は遠けれどうつせばこゝに薫るたちばな

山家樗

山深みとはれぬものを誰に今あふちの花ぞ人だのめなる

五月雨

夏の夜を長かりけりと思ふまでかきくらし降る五月雨の空

わが門のあふちの花の咲きそめて散るまで晴れぬ五月雨の空

五月雨久

さみだれに花橘の咲きそめて實になるまでに晴れむともせず

○しのばれむ身にしあらねば　誰一人我が爲に偲んでくれる者もない身の上であるから。

○あふち　逢ふにかけた。

峯五月雨

かきくもり降るさみだれの晴れていつ外山の峯に松たてる見む

閑居五月雨

とはれぬも恨みなれねば五月雨の降るにまかする蓬生の宿

庵五月雨

塵の外のちりも流るゝさみだれに水草淸き谷の下庵

庭五月雨

日をふれば庭に海なすさみだれになびく玉藻は蓬なりけり

さみだれはじめける頃人にいひやる

五月雨のつぎてふるべき心にや今日さへやがて人待たるらむ

五月ばかり角太川へまかりて

さみだれは繼ぎて降るとも隅田川廣瀬の水はまさるともなし

五月雨晴

夕月のかげを雲間に先づみせて峯より晴るゝ五月雨の空

さみだれも昨日までとやみさび居し庭の池水すみ渡るらむ

水鷄

○塵の外のちりも流るゝ　世を遁れた庵の塵さへも流れる。

○みさび　溜水の面に浮ぶ錆の如きもの。

門にきてはかる水鷄と知りつゝも叩くはさすがゝとまれもせず

泊水鷄

思ひきや伊せの濱をぎ折り敷きて夜たゞ水鷄にとはるべしとは

夏月

明けやすき恨みのみかは木々の葉に隈さへおほき夏の夜の月

松かげの板ゐの清水くみあげて結ぶ手にみる月ぞすゞしき

端居して向へばすゞし短夜の月には秋もまたれざりけり

まだ宵と何おもひけむ夏の夜の二十日の月はとく出でにけり

夏の夜の月に思へばあだなりと見てし櫻の花ぞのどけき

六月かけてさみだれ降りつゞきけるが十日あまりに雨やみ所々晴れて月いとおもしろかりければ

月かげも秋近くこそ成りにけれ晴れぬ眺めの日かず經し間に

小笹原秋かたまけておく露にまちとる月の影はすゞしも

夏月涼

秋を待つ稻葉の露をよすがにてほに出づる月の影ぞすゞしき

○秋かたまけて　秋に傾いて來て。秋近くなつて。

○よすが　寄りつきば。宿る處。

夕立の雨の名殘の空はれて月に袖ほす夜半ぞすゞしき

夏月易明

弓張の月はみ空に影とめてさをなぐるまに明くる夏の夜

短夜月

くれはてぬ空にほのめく月みればやがて明け行く峯の横雲

河邊夏月

を舟さす淺せの棹のみじか夜に流れて早き浪の月影

六月ばかり春道秀倉などいざなひて角太河に船さし出でて月をみてよめる

ゆく水に月すむ夜半は河風も秋かたまけて涼しかりけり

海邊夏月

明け易き夜を長かれとくりかへし月ををじまの蜑のたくなは

山家夏月

山の井のつるべの繩のみじかよに月の影くむ杉の下庵

名所夏月

難波がた浦浪すゞし短夜のあしの葉のぼる露の月影

○さをなぐるま　梭を投ぐる間。瞬間に過ぎ去る事の形容。

○春道　村田春道。春海の父。
○秀倉　高橋秀倉。眞淵の門人。

○秋かたまけて　秋近くなつて。

○月ををじまの　月を惜しむに小島を掛く。
○蜑のたくなは　海士の栲繩。くりかへしと緣語。

瞿麥露

朝な〳〵咲くとこ夏の花におく露の間ばかり夏としもなし

夏草

たをやめの若菜すみれにふみなれし道も殘さずしげる夏草

庭夏草

秋まちて花さく種やまじれると拂ひかねたる庭の夏草

野草秋近

こと問はむ夏野の野守いまいくかありて咲くべき萩の初花

深更鵜河

かゞり火の殘る夜やなほ惜しむらむ月にそむきて下す鵜船は

名所鵜河

こゝを瀬にうぶねさすらし吉野河巖もと去らぬかゞり火の影

螢

聲をだに忍ぶとならばゆく螢こがると人に知られずもがな

雨中螢

ひたぶるにけたぬ螢の思ひにはあらそひかねて過ぐる村雨

○とこ夏の花　金盞草の異名。

○たをやめ　手弱女。

○こと問はむの歌　「春日野の飛火の野守出でゝ見よいま幾日ありて若菜摘みてむ」（古今、一、春上）によつたもの。

○けたぬ　消えぬ。

水邊螢

眞菅おふる川ぞひ道のゆきずりに包まぬ袖も螢みだるゝ

せきかけし庭のやり水早けれどうつる螢の影は流れず

澤螢

草しげみ野ざはの水は見えねども有りとやこゝに螢飛びかふ

かす〲にもゆる螢の思ひには野澤の清水ぬるむべらなり

瀧下螢

落ちたぎつ瀧の白玉よるごとに數そふものは螢なりけり

河邊螢

更けぬるか河音高くなるまゝに水草(みくさ)の螢光そひゆく

螢照叢端

飛ぶほたるいかに思ひをけちかねて忘るゝ草の露たづぬらむ

螢火秋近

飛ぶ螢夏をやをしむ秋やまつ何にみだるゝ思ひなるらむ

墻夕顔

まくらつくつまやの軒にかゝれるは籬にあまる夕顔の花

○ゆきずりに　通りすがりに。

○べらなり　べきなり。

○まくらつく　枕詞。つまに冠す。
○つまや　夫婦の寢る室。

たそがれのまがきに咲きて有明の月にきほへる夕がほの花

遠村蚊遣

夕ぐれは蚊遣りもそひて立つけぶり薄きや里の遠きなるらむ

夕立

なるかみの音羽の山は雲はれて關のこなたを過ぐる夕立

夕立晴

夕立のはげしかりつる空はれて庭にひれふる藻ふしつか鮒

山夕立

高嶺には夕立すゞし山の端にみなれぬ瀧の巌くゞるみゆ

浦夕立

二並のつくばの山に雲みえて霞が浦をすぐるゆふだち

橋夕立

里分けてかたへは晴るゝ夕立に猶なるかみのとゞろきの橋

くちもせぬ名のみながらの跡とめて夕立わたる雲のかけはし

遠夕立

入間路は夕立すらし名にも似ず角太河原の水の濁れる

○なるかみの　枕詞。音に冠す。

○藻ふしつか鮒　藻に臥す一握りばかりの鮒。又一說に河內國裳伏の鄕より產する鮒。

○二並の　筑波山の峯男體女體の二つに分る。

○みそぎ　六月晦日人々河原へ行きて身を滌むるわざ。

○石井筒　石にて圓く周圍をかこひたる井。

扇風秋近

夏もやゝみそぎほどなく成りぬとは鳴らす扇の風ぞ知らする

夏日對泉

夏草の下ゆく水をせきとめて秋に契りや先づ結ぶらむ

閑對泉石

なつ草のことの繁さも餘所に今向ふ岩間の水ぞ靜けき

松風五月寒

ほとゝぎすおのが五月やたどるらむ今も身にしむ松の嵐に

夕納涼

岩間行く水せきとめてゆふづゝの影を手にくむ袂すゞしも

麓納涼

夕日かげもらぬふもとの石井筒秋をくみしる木々の下風

高どのにすゞみする

この殿に中やどりせよとぶ螢雲の上までいぬべかりせば

ひこ星の秋まつ天の河風も袖にしらるゝ岡の高殿

家々納涼

○いみき部　上古神祭の具を造る者の稱。

○瀬織津ひめ　河瀬の女神。

○なごしうく　穏かにうく。和しに夏越の祓(六月祓)を掛く。

家毎におなじ流れをせき入れて夏を餘所なる川づらの里

樹陰納涼

若葉そふ木かげは風をもらさねど苔の雫のひるま知らずも

六月祓

今日とてや大和かふちのいみき部の太刀たてまつる萬代の聲

よろづ代とかへすゞもとなふなりけふの夕日の大み祓に

夕ぐれの波も靜けしみそぎ河瀬織津ひめもなごしうくらむ

夏雲

見るまゝに變りもゆくか夏山に雲のなしたる峯の姿は

山家夏

谷のとのむすぶ清水は淺けれど深くなりゆく夏木立かな

布引瀧　夏

夕立の雨の名殘のうき雲に半ばたえけり布引の瀧

夏旅宿

おくれじと誰があくがれし魂(たま)とみむ草の枕にかよふ螢は

夏祝

武藏野に生ひそふ夏の草よりもしげきは御代の惠みなりけり

安豆麻宇多卷三

秋歌

立秋

六月立秋

この朝け袂すゞしも秋きぬと必ず風のふかぬ物ゆゑ

野亭秋來

たなばたのあき待ちえても逢ふことは夏の日數の猶のこりつゝ

幽棲秋來

萩咲かむ野べを鄰に住みなれていつかと待ちし秋は來にけり

清水くむたよりばかりの道とめて淺茅が奥も秋のきぬらむ

初秋

みなせ河有りて行く水音かへて小波よする秋の初風

都初秋

みやこぢや柳さくらにあらぬ木も錦をいそぐ秋は來にけり

○みなせ河　攝津國三島郡。山崎の邊を東流する淀川の支流。

初秋月

した染めのまだ色うすき秋の葉を照らすは月の光なりけり

早秋

ほに出でぬ一聲すゝきいと早も秋の心になびく夕風

早秋朝山

荻の葉に聲きき初めしあしたより尾上の松も秋風ぞふく

田家早秋

きのふけふ穂に出で初めて鳴く蟲も門田のしめの外にやはきく

新秋露

とこ夏の花にも玉と見し露や秋まちつけて置き添はるらむ

殘暑

きのふけふ暑さにかへす眞葛原はつ秋風の涼しかりしを

七夕

天の河波なたちそと七夕のいはひて待ちし空はしるしも

たなばたの天津玉とてあすよりはたが爲とてか塵も拂はむ

神代より星のへだてとありがよひ流れて久し天の河水

○しめ　標。場所を限るために張りわたした繩などをいふ。

○星のへだてとありがよひ　牽牛織女二星の中のへだてとなつて、年に一度だけ渡ることにして。

天の河たなはしわたし船わたしなどしば〳〵も渡さざるらむ
ことさやぐ唐人こそは天の河天つ空へといひ流しけれ

七夕雲

こよひしもたなびく空の浮雲は風のかけたる天の河橋

七夕野

秋はぎの花ずり衣春日野の野守もこよひ星祭るらし

七夕草

あけばまた袖におくべき白露を草の葉にみる星合の空
天の河空にほのめく月草の花にならはぬ中ぞ久しき

七夕歌

こよひだに妹がり急げ彦星のひくや手かひのうしの歩みも

七夕瓜

空に知れ星の手向のこま野瓜なりも出でねど子を思ふとは

七夕衣

身におへる星の手向と山がつもうづら衣やかけて貸すらむ

二星契久

○ことさやぐ　唐人の枕詞。唐人の言葉は本邦の人の耳には騒がしく聞えるからいふ。

○星合の空　七月七日棚機の夜牽牛織女二星の相會するといふ天。

○うしの歩みも　牽牛星といふ名によつてかくいふ。

○うづら衣　つぎはぎしたる衣。弊衣。

○やすの河　天の安の川の略。天の川。

○とをゝ　たわゝ。

天地と共につきめや二星のかけて誓ひしやすの河波

七夕別

衣々のあまの羽袖のしづくよりもみぢの橋や色に出づらむ

荻

秋風もうはの空をや過ぎなまし窓のした荻移し植ゑずば

月前荻

をぎの葉の風の絶間におく露の玉の緒ばかり宿る月かげ

荻聲近枕

荻の葉にやどらば宿れ秋の風音なき風ぞ老の枕に

萩花露重

わけまよふ袖やまつらむ眞萩はらとをゝにおける露のおもさに

萩の花を折りて人に遣はすとて

露ながら見まくほしくば訪へかしと折りてぞおくる萩の一枝

野外萩

秋はぎの花を分けゆく野べの露うち拂ふまにすれる袖はも

行路萩

うづら鳴く野べの秋はぎ咲きにけり道行きぶりの袖匂ふまで

名所萩

一もとのゆかりしもさへ有るものをあまた萩さく武藏野の原

萩移水

うつしうゑし一むら萩の咲きしより花の影くむ庭の眞淸水

薄

なほざりに植ゑしまがきの絲すゝき秋を慰むふしも有りけり

薄未出穗

なほ殘る暑さ知られて秋ぞとも穗に出でかぬる庭のをすゝき

蘭

ふぢばかま來て見る人の數多あればたが移り香とわきてしのばむ

蘭薫風

ぬぎかけし主はたれぞもふぢばかま懷かしきまで風ぞかをれる

草花映月

をみなへしあだなる露の手枕に心もおかず月ぞ宿れる

わらは使の秋の花あまた持てきたるかた

○あこめ 衵。中古婦人童女の下着。又男子束帯の時下に著用したもの。

○露のすさめざりせば 露が相手にないならば。露が宿らないならば。

○うづらの牀 いぶせき宿。

散らさじとおほふあこめの袖さへも秋の色々にたぐへてぞみる

野花薫風

咲きつゞく花のいろ／＼おしこめて一つにかをる野べの秋風

草花露滋

さそへども跡より露のおきそひて尾花が袖によわる秋かぜ

月前露

ふみ分けし跡こそ無けれよもぎふの露にまたれて月はとひけり

月前草露

月にだに訪はれざらまし草のとのよもぎを露のすさめざりせば

草露映月

心なき草のたもとの露にこそ憂き事しらぬ月やどりけれ

田上露

山はまだ染めもあへぬに白露のおける門田は色付きにけり

故郷露

ふるさとはうづらの牀のおきふしに人の拂はぬ露ぞみだるゝ

草露如玉

夕ぐれの心細さを絲によりて玉にぬかなむ草の上の露

蟲

霜またで草のたもとは色づきぬ夜なく〳〵わぶる蟲の涙に

月前蟲

聲絶えずなけや妻戸のきり〴〵すこよひの月に誰かいをねむ

野蟲

果てしなきためしにぞ聞くむさし野や千代をあまたの松蟲の聲

曉庭蟲

もとゆひの霜のねざめも有るものを露なうらみそ庭の松蟲

籬下蟲

秋もやゝかきねの草の露霜に蟲の音よりぞ枯れそめにける

秋の歌とてよめる

白露のおくとはぬとはたゞならず月見ぬよはも鳴く蟲の聲

秋風

松陰のやどには秋もなきものをあなさかしらの風の音かな

曉鹿

○いをねむ　寢む。眠らむ。

○もとゆひの霜のねざめ　白髪の老の寐ざめ。

○さかしら　賢しら。賢だて。

○さつを　獵夫。

深からぬ外山のいほの寐ざめさへさびしき秋のさをしかの聲

夕　鹿

心なきさつをにとはむ夕ぐれの鹿の鳴く音をいかに聞くやと

遠聞鹿

さをしかの聲はる〴〵と誘ひきて風こそ秋の袖ぬらしけれ

鹿聲遙

をぎの葉の風の絶間にきこゆるは嶺を隔つるさを鹿の聲

野　鹿

色かはるあきのさが野の花すゝきほに出でて鹿のつま戀ふる聲

野鹿交萩

あきの野の萩の錦のたてぬきに露分けまよふさをしかの聲

鹿驚夢

見し夢のをしさはあれど手枕に聞きすて難きさをしかの聲

旅のやどりに鹿の鳴くをきく

都にてよそに思ひし鹿のねを旅にしあれば枕にぞきく

稻　妻

ほにいでてなびくわさ田におく露の數もあらはに照らす稻づま
秋の田のたりほの露の玉ゆらもやどり定めぬいなづまのかげ

月

上つふさの海より出でて行く月の泊りはふじの高嶺なりけり
庭におふる一もとすゝき汝さへも月をあはれとほに出でにけり
長き夜のはやも明けぬと思ふまで更けゆく月のてりぞまされる
いく秋の曇らぬ月を宿せばか隅田河原の名に殘るらむ
松がねに生ふるすがのね長しとも思はで見つる秋の夜の月
雲もなく思ふ事なく月みつる秋の半ばは少なかりけり
秋の夜にあかぬ友どちまとゐして月し入らずば千代もへなまし
あきの月飽くべきものか朝顏の咲くまで今宵おき明かすとも
山越ゆるつばさもがもな入る月をあなたの里に待ちいでて見む
秋の夜のくもらぬ月の影みえて名にぞ流るゝたま河の水
神路山杉の木の間の月も今みもすそ河に影の見ゆらむ
ながらへて又此の秋の月みれば月に見らるゝ心地こそすれ
むさし野や身にそふ影をみざりせば月のかたぶく程も知られじ

○上つふさ　上總。

○神路山　伊勢内宮のある山。
○みもすそ河　五十鈴川。

○しづえ　下枝。

○みをのしるし　みをは河海中にて船を通ずる水路となる深み。そのしるしとして立つるもの。みをつくしに同じ。

秋見月

をば捨の山にはかけじよもぎふの月になぐさむ秋の心を

會友見月

うき雲のへだてもおかず思ふどち向へばすめる秋の夜の月

月初昇

まちもあへず月や高嶺を離るらむ暮るれば窓に影ぞさし入る

漸昇月

立ちならぶしづえを隈と見るがうちに松をわかるゝ峯の月かげ

停午月

千尋ある谷の下ゆく水底も照らし殘さぬ月のひと時

そこの海みをのしるしもあらなくに半ばをこゝと澄める月かげ

獨惜月

をしと思ふおなじ心の袖もがなかたぶく月をわけてやどさむ

八月ばかり月あかき夜よめる

秋の夜の月かげしろし白樫の枝にも葉にも霜とみるまで

八月十五夜

○は月　陰暦八月。

○めがれぬ　目離れぬ。

あだなりと身をばうらみじ澄む月の秋の一夜を千とせと思ひて

そめあへぬ秋のは月の十日あまり五日と待ちし今宵なりけり

秋きぬと風の告げてし朝より待ちし今宵の月のさやけさ

いつのまに傾きぬらむ出づるよりめがれぬものを望月の影

秋の月いつはあれどもいつはらで今宵ことさら澄みぞまされる

萬代にかはらぬものはこよひ此の月と秋とのちぎりなりけり

秋津しま秋のなかばと澄みのぼる月をおそしと待つや唐人

雲つきてこよひの月のすみだ河萬代かけて濁る瀨ぞなき

更けぬとも待ちみむ月の今宵しも暮るれば出づる影のさやけさ

此の世にて飽かれやはする八十ぢまで秋の半ばの月は見つれど

去年の秋こよひもかくて又見むと契りもおかぬ月にあひけり

八月十五夜例の人々まとゐして更けゆくまで見居りて詠めるあまたの中に

めぐりきて月すむ秋のなか／＼に萩の錦は夜ぞまされる

今宵だに訪はれむものかすむ月に尾花が袖の招かざりせば

十五夜雨そぼふりけるに眞淵など訪ひ來て歌よみけるついでに

○人に老を添へじと「大方は月をもめでじこれやこの積れば人の老となるもの」（古今一七、雜上）

○ふゝめる　含める。

今宵しも降りくる雨は久かたの月の桂の花の雫か

今宵だに月も光やかくすらむさのみは人に老を添へじと

十五夜月みむと契りし友がき訪ひ來りけるにあやにくに晴れ間なければ

みづから問ひ答ふるうた二首

ひとり見て曇らぬ月とくもる夜に訪はれぬるとはいづれまされる

ひとり見る月はすむとも思ふどち語らふ雨の夜にはまさらじ

九月十三夜

待ちもあへず夕ぐれかけて長月の月もおくある影ののどけさ

花ざかりふゝめるもかつ殘れりといはむばかりの長つきの月

秋ふかみ夜さへいとゞ長月も月の爲には飽くとしもなし

長月やもちに一夜を隔ててもさやけき影は世にみちにけり

十三夜よひのほどくもりて更け行くまゝに晴れければ

夏ならばくもりながらや明けなまし更けてさやけき長つきの月

十三夜の月殊にすみ渡りけるに例の人々とひ來てともによみける

たのみあれや人もわが世も長月の月みむ爲のゆく末の秋

思ひ殘す心の隈もなよ竹のよを長月のあかぬまとゐか

○うら安の　安泰の。うら安の國は日本の異稱。

異國の人にみせばや類なき我がうら安の長月の月

閏九月十三夜

秋の日をかぞへ添へつゝいとゞ夜の長きにあかぬ月のさやけさ

月前星

秋の日の暮るゝもまたで澄みのぼる月におもなき夕づゝの影

千さとまでくまなかれとやすむ月に星の林の茂らざるらむ

月前雲

誰が里の月のくまとか厭はれむ外山の末にかゝる白雲

雲間月

澄む月にいとはぬほどの浮雲は風のゆくへにまかせずもがな

雲間微月

雲間よりはつかに見るも大かたの月にまされる秋の夜の月

深夜月

更けゆけば照りこそまされ秋の月など宵のまに友待たれけむ

山月

秋の夜の月のためとやふじのねの煙も今は立たずなりけむ

〔荷前〕朝廷に諸國より貢する荷の初穗を十陵八墓に獻ること。

〔眞間のつぎはし〕下總國の歌枕今の市川町の北。

みたからのはこぶ荷前（のさき）の箱根山夜もこえなむ月のさやけさ

山月明

から人もふりさけ見らむふじのねの雪にさえたる秋のよの月

嶺月

うき雲のおりしづまれる時まちてやゝすみのぼる嶺の月影

野月

さを鹿の鳴きて入る野の霧はれて尾花も月もほの見えにけり

野外月

こ萩さく野をなつかしみ分け暮れて月も移ろふ花ずりの袖

秋野月

天づたふ程も遙けき武蔵野にみてだにあかぬ秋のよの月

徑月

くまとみし陰もまばらに月ぞすむ筒井にかよふ桐の下道

月照古橋

しら波に玉藻刈りけむ人はいさ月すみわたる眞間のつぎはし

江上月

堀江にはよりくる波の玉敷きてくもらぬ秋の月を待ちけり

江月聞鴈

なには江やうら波かけてすむ月にかりがね遠し淡路しま山

河月

あひにあひて光も秋のにし河や流るゝ月の影のさやけさ

川に船うけて月をみる

月宿るこの河水に船うけて棹もとりあへず行く心かな

月照流水

刀根川のそこは濁ると名にたてど沈める月のかげはすみけり

湊邊月

大船のよする港の秋の夜はまほにぞ月もすみわたりける

海邊月

みつ汐の干るとやいはむをじか鳴くかしまが崎の秋の夜の月

湖上月

堅田船いざ漕ぎ出せいさなとりあふみの海の波の月みむ

浦月

○いさなとり　鯨取。海の枕詞。

いくへかも積れる雪とみくまのや月おもしろき浦のはまゆふ

心ある海士はぬれにし袖をさへほさで月まつ松がうら島

眞間の浦のあまのたくなは長き夜も月を見る目はあくとしもなし

須磨の浦に月を見るといふことを

秋の月とはにしすまばすまの浦にわぶとはいはじ藻汐たるとも

濱月

こゝをせに月も澄むらむ有明の濱の眞砂の數みゆるまで

禁中月

梅つぼに春のかをりや殘るらむ梢に匂ふ秋の夜の月

萩の戸の露をたづねて玉だれのをすの隙もる秋の夜の月

故郷月

古さとのうづらのとこに影みれば月も昔の月としもなし

日にそひて里は古江の萩の露もとの心に月はすめども

葎生の宿にも露の玉しきて月のためには故郷もなし

山家月

さを鹿の驚かさずば板間もるわづかの月の影をみましや

○はまゆふ　濱木綿。海岸に自生する草。はまおもと。

○あまのたくなは　海士の栲繩。長きといはん序。

○うづらのとこ　いぶせき臥牀。

賴みつる身のかくれがの松さへも月のためには厭はれにけり
すむ月に木の間さやけき秋の夜はかくれ家にせむ山里もなし
都には心とめじと住みかへて山にも月の友ぞこひしき

田家月

刈りてほす門田の稻をそのまゝに敷きてや月をめで明かすらむ

鷄峯茅店月

茅が軒にかたぶく夜半の月さえてとりの音寒し霜や置くらむ

月影滿屋

眺むとて立居にそはる影ならでくまこそなけれ月のした庵

閑閨月

おきあまる露をよすがに月ぞとふ蓬がねやのあれ間もとめて

秋月入簾

限なくてみるに勝れるあはれさにわざともおろすを簾の月影

月前松

秋ぎりにふもとの里は埋もれて松と月とぞ峯に殘れる
くまとのみいつしか月にいとふらむ木高かれとて植ゑし小松を

色かへぬ杜や枝をかはすらむ月も高嶺の松の木末に

松月幽

くまなくて見しはものかは松陰に光ともしき月のあはれさ

海人詠月

あま人も空に心やひくあみの先づめにかゝる浪の月かげ

客伴月來

秋の夜を月にまかせてすむ宿はたのめぬ人に訪はれもぞする

月前幽情

ながらへば今をむかしと忍ぶべき忘れ形見よ秋のよの月

月前懷舊

人しれず哀れなりしも憂かりしも思ひぞかへす袖の月かげ

月催涙

なに事の思ひもわかぬ袖の上にわれや宿せる月や宿れる

月前筏

いかだしも秋行く水の河よどに棹さしとめて月や見るらむ

月前鐘

おどろかす甲斐やなからむ秋の夜の月に寢よてふ鐘の響は

月前遠鐘

吹く風はねよとのかねや誘ふらむさのみかたぶく月は見せじと

月前神祇

曇りなき天津御空を渡會(わたらひ)や神代のあきの月よみのもり

月契千秋

ちぎりおく千歳の秋のあらましも心の松にうつる月かげ

秋月勝春花

みし花の都の春の錦にもたちまさりぬる秋の月かげ

月不選所

變らめや賤が砧も絲竹も月に聲すむ秋のしらべは

旅宿月

行きくれて宿かる草の枕かのこがのわたりの月をみるかな

月前祝

くもりなきためしにひくやつき弓のやす國てらす萬代の秋

寄月祝言

○つき弓の　槻弓に月をかく。
○やす國　日本の異稱。浦安國。

○なべに　それにつれて。

○かつしかわせ　葛飾早稲。葛飾は下總國西部。

白菊の露よりなれし月かげの千尋の淵にやどるをも見む

雁

此のごろの秋風寒みさを鹿のつまとふなべに雁鳴きわたる

秋風に海山こえてにほどりのかつしかわせをかりぞ鳴くなる

月前雁

すむ月にわさ田刈りつむ鎌倉の里わに落つるかりの一つら

田上雁

おちて猶いなばの雲に聲するは空にまたれし天つ雁かも

關路霧深

分けまよふ朝けの霧の深みどりそれともみえず關の杉むら

山路霧

ましら鳴くみ谷は霧に埋もれてそはのかけ橋危げもなし

擣衣寒

更けぬるかいとゞ夜寒の袖せばきほそ布衣うちもたゆまぬ

近擣衣

こゝもとにすまのうら波よる〳〵はうつや砧も枕がみなり

○こことはに　鶉の牀にかけてある。

浦擣衣

すまの浦やしほやき衣うつ槌の音もまどほに夜は更けにけり

更級のさとに砧をきくといふことを

たれ聞けと夜寒の衣うつたへに哀れそふらむさらしなの郷

鴫

かりつくす山田の引板の縄たえて友なき鴫の羽音寂しも

鶉

あれまさる里はうづらのとことはに寂しきものを夕暮の聲

野外鶉

秋もやゝ更けゆく野べの牀寒みおのれうづらの曙の聲

月下菊

月冱えて稀なる星のかず〱に數へそふべき白菊の花

山路菊

菊の花さける山路にやすらはば思ひのほかの世をやへなまし

菊薫枕

夜やふけぬ霜やおくらむと思ひ寐の枕にかをる庭の白菊

残菊

移ろひて色香そひゆく白菊はおく初霜もえこそはからね

竹芝わたりの山ぶみしけるに八月初めになるまゆみの色付きそめたるを見て

いつしかと半ば過ぎ行くとしの矢のはやまのまゆみ色づきにけり

蔦

さびしさを色に出でにけり蔦かづらくる人もなき軒にかゝりて

紅葉

山姫の袖のしぐれや染めつらむ曇らぬ嶺の木々のもみぢ葉

初紅葉

しぐれ降る山の梢のいかならむさとわのまゆみ染めはじめけり

紅葉深

染めはてて誘はれ易き紅葉ばのやしほの後はしぐれずもがな

紅葉待霜

露しぐれやしほ染めなすもみぢばの猶あかずとや霜を待つらむ

紅葉隠霧

○竹芝　今東京市芝區三田臺町のあたり。
○まゆみ　古昔多く弓を造る料とした。

○やしほ　やしほ染。

○やしほ染め　幾度となく染液にひたしてよく染めること。

そめしより散らまく惜しむ世の人のおきその霧や山かくすらむ

山みなもみぢせり

山はみな染めぬ木の葉もなきものをしぐれの雲の何殘るらむ

林葉漸變

秋の來し道こそみえね月のいる峯の林の先づぞ色づく

瀧紅葉

落ちたぎつもみぢをわくる白絲は何山姫のそめ殘しけむ

社頭紅葉

それならでねぎごともなし立田ひこ風な吹かせそもみぢする頃

遠村紅葉

中たえし錦とや見む一すぢの煙へだてし里のもみぢ葉

紅葉透松

立ちならぶ松の煙の下もみぢいかにこがるゝ色をみすらむ

古寺紅葉

山寺の鐘はきこえてもみぢばに入日の影は猶のこりけり

澀谷の長谷寺へまかりしにもみぢ盛りなりければ

○中たえし錦云々　「立田川もみぢ亂れて流るめり渡らば錦中や絕えなむ」(古今五、秋下)

露しぐれいつか染めけむ蜑小舟こゝも初瀨の山ぞこがるゝ

のこるもみぢ

嵐ふく深山の木々は散り過ぎて冬をさかりの里のもみぢ葉

紅葉殘梢

吹きおろす峯の嵐のさそひ來てあらぬ梢に殘るもみぢ葉

月前落葉

足引のあらし吹く夜は久方の月の桂も散りやまがへる

十月紅葉

もみぢばの散らぬ限りは千早振神無月とも思はざりけり

惜秋

うき秋といひしはありのすさびにて今日と暮れなば何心地せむ

秋欲暮

夜々は水鳥騷ぎ時雨ふり秋としもなき秋ぞ殘れる

暮秋

露結ぶ夕の霜を名殘にて野なる草木も秋に別るゝ

暮秋雲

○ありのすさび　「ある時はありのすさびに憎かりしなくてぞ人は戀しかりける」（讀人不知）「ある時はありのすさびに語らはで戀しきものと別れてぞ知る」（六帖五）

くれてゆく秋を牡鹿の聲かれてたゝずむ嶺に雲はおりゐる

暮秋雨

山の端はしぐれ降るらし長月の有明の空に雲のかゝれる

暮秋鳥

友よぶや霜のおくての稻雀いま幾ほどの秋をたのめる

暮秋鹿

秋ふけて草はしをるゝ野べの鹿あらはれて鳴く聲のかなしさ

九月二十日の夜よめる

秋のよの老のねざめはのどけくてなど一とせの程なかるらむ

九月盡

別るてふことさへ添へてうき秋のうき限りをも見はてつるかも

行く秋のなごりのみかは古りし身は見るもの毎に名殘なりけり

寐られねば夜を長しとてかこちてし秋も別れのけふぞ侘しき

夜嵐にもろくも積る木の葉のみ明けなば秋の形見ならまし

けふのみといへば別れぞ惜しまるゝ眺めわびにし秋と思へど

今はとて野べの蟲の音鹿の聲誘ひ(いざな)たてて秋ぞくれ行く

山家九月盡

山里に秋を見はてて明日よりはいかにたへなむ夜嵐の聲

秋古寺

先づ染むる梢の色に知られけり秋こし方や西の大寺

古寺秋鐘

山寺のかねの響に秋の夜の月の光ぞ花とちりける

秋山家

松のとにもろき一葉のおとづれは中々さびし秋の山里

秋田家

にほ鳥の葛飾わせやにへすらむ今日殊さらに煙たつ見ゆ

秋旅

心をばたぐふと誰もいひしかど目にみえぬ秋の旅ぞさびしき

から衣うつ音すなり行く末の雲よりをちの里も知られて

遠ざかる程も知られて秋霧の晴れても見えぬ故里の山

秋祝

かりてほす八束垂穂の稲かづらかけて盡きせじ萬代の秋

○にへ 贄。つかひもの。

百舌鳥

片岡のそはの立木の霧はれて梢あらはにもずぞ鳴くなる

安豆麻宇多　巻四

冬　歌

初冬木枯

荻の葉にあはれなりしは昨日にてなつかしからぬ木枯の音

初冬時雨

惜しかりし秋にわかれし袂よりけふの時雨は降りそめにけむ

かみな月またでしぐれし空ながら木の葉のまじる冬はきにけり

初冬眺望

山かぜのさそふ木のはの行く末を里の煙に見はてつるかな

時　雨

夕日さす外山の末に見し雲はやがて軒端の時雨なりけり

時雨易過

雲みえし外山は晴れて足早く今ぞ軒端をしぐれ過ぎ行く

夕聞時雨

鳴く蟲をあはれと聞きし夕陰の草の枯葉にしぐれふる音

山時雨

染めのこす梢もなしとみ吉野のあをねが嶺に今ぞしぐるゝ

嶺時雨

神な月しぐれふるらし二竝のつくば高嶺に雲のかゝれる

道行く人しぐれにあへり

ぬるゝともよしや厭はじ秋の葉を染めし時雨のあめと思へば

海時雨

玉藻かるみぬめを過ぎてゆく雲は野島が崎の時雨なりけり

渡時雨

角田河渡しも果てずしぐるめり暫し雲間の空だのめして

遠鄕時雨

そめのこす梢たづねてしぐるらむ雲こそかゝれ山もとの里

山城の水野の里やしぐるらむ雲におくるゝ淀の河船

獨聞時雨

友とのみみぎりの竹に聞きなれし風より外にとふ時雨かな

○二竝の　筑波山の頂。男體女體の二峯あり。

○野島が崎　安房國。今白濱村の南岬。

○みぎり　軒の雨落の敷石。みぎりの竹はそのあたりに生えた竹。

○山づと　山の土産物。
○ほゝかしは　ほゝのき（朴）の異名。
○裂いで　裂帛。

羇中時雨

雲かゝる嶺こえかねて宿とへば麓の里もしぐれきにけり

かばかりは思ひ起さじ都人しぐれさへふる草の枕を

十月ばかり人に山づとおくるとて

山路へてとりてぞ來つるほゝかしはしぐれせむ日の君がみ笠に

十月にいとよく染めたる楓の葉を物に包みておこせける人のもとへ

染めつくす秋の形見の三は五(いつ)はこれや錦の裂いでなるらむ

落葉

朝な／＼散るもみぢばに霧おきて懐かしかりし色も殘らず

谷河の巖うつ音も絶えにけりいかにしがらむ木の葉なるらむ

山落葉

年をへて木の葉は千重に積れども山の姿は變るともなし

落葉待風

あすまでは嵐待つまの唐錦殘るひと木の影ぞたちうき

夜落葉

風吹かぬ夜の軒端の音するは霜にもたへぬ木の葉なりけり

澗落葉

谷水を散るもみぢ葉のせき止めてたぎち流れし音もきこえず

路落葉

さればこそはげしかりつれ夜あらしに朝たつ道を埋むもみぢ葉

橋落葉

とふ人のまれなる程もしぐれけり木の葉ふりしく前のたな橋

落葉浮水

そめつくす木の葉流れて川波のあやを錦に織りかへてけり

河上落葉

同じ瀬によりやあふらむいもせ山中ゆく川に浮ぶ木の葉も

庭落葉

散りつもる底は拂はじ今朝みれば枝に一葉も殘らざりけり

もみぢ葉に苔の緣も埋もれて跡なき庭ぞ秋を殘せる

松下落葉

散りうせぬ陰をや猶も頼むらむもみぢしがらむ松の下水

名所落葉

○いもせ山　大和國吉野郡。今上市の東方に妹山と脊山とある。その間を吉野川流る。又紀伊國にもある。

かみな月時雨せぬ日もひな曇りうすひの坂は木の葉ふりつゝ

いつしかと山もあらはに成りにけりくぬぎかつ散る佐保の河かぜ

霜

よもぎふも霜の花こそ咲きにけれ千草にもれし秋な恨みそ

山家夜霜

さよ更けてきけば枕の山鳥羽におく霜や今拂ふらむ

閑庭霜

霜の上に遅れて一葉ちる音も聞くべかりける庭の朝夕

社頭霜

ゆふかけしさか木が枝に置きまよふ霜の花さへ香に匂ふらし

寒草霜

もえいでむ春まつ霜の下草は長しと冬の日をかこつらむ

寒草纔

枯れのこる草も有りけり色かへぬ野べの小松の陰をよすがに

原寒草

霜枯のあさぢが原に生ひまじる山菅のみぞ色もかはらぬ

江寒蘆

鳰のすむ古江も今朝や凍るらむたてる村蘆うちもなびかず

寒松積年

ことぞとも松は思はで經にけらし時雨も霜もよきぬものから

氷初結

散りうかぶ木の葉の風にまかせぬは池の氷や結びそむらむ

宵の間にふりし時雨のにはたづみ落葉をとぢてけさぞ氷れる

池閒氷

埼玉の池のみぎはやこほるらむ鴨の羽音の遠ざかりゆく

江氷

朝毎に氷りかさねてなごの江のつながぬ船も流れざりけり

冬田氷

ひたの音（おと）もたえていつしか薄氷結びすてたる小田のかりいほ

田邊氷

せき入れぬ小田のしぐれのたまり水おち穂をとぢて今朝ぞ氷れる

井氷

○ことぞとも　何の思慮なく。

○にはたづみ　雨水の地上に溜り流るゝ水。

○埼玉の池　埼玉縣北埼玉郡忍町の東埼玉村のあたり。

○ひたの音　ひたは引板、鳴子の音。

更けゆけば冱えやまさらむよひの間の板井の冰くみて知るにも

葦間氷

水鳥の陸（くが）になく音の聞ゆるはあさる蘆間や今朝こほるらむ

かみな月十日ばかり月を見をりて

夜をへつゝ庭に落葉の積ればや木の間の月のかげ添はるらむ

霜さむきねやの板戸をさしもせじ眺めよとての長きよの月

寒月

冬の夜や仰げば空ははるけくて手にとるばかり冱ゆる月影

山寒月

炭竈のけぶりは薄く成りにけり更けゆくまゝに月のさゆれば

寒夜月

染めはてて散りし木のはの霜の上に月のかつらは照りぞまされる

寒閨月

いかにねむ蓬がねやのかた廂さし入る月もこほる霜夜を

寒流帶月

みむろ山しぐれも今や晴れぬらむ立田の河に月ぞこほれる

○みむろ山　大和國高市郡。

寒夜衾

陰たのむ松にあらしの寒き夜も馴れてこと足る麻手こぶすま

千鳥

住の江の岸の松風濱千鳥ともに八千代の聲あはすめり

夕浪の音もかしまの浦風にしばなく千鳥おりもさだめず

千鳥聲遠

たまのうら離れ小島の友ちどり聲きくばかり波ぞ靜けき

河千鳥

角田川船に筏にさをなれてあさる千鳥の所がへすも

風寒み前の小河の水かれて心細くもちどり鳴くころ

島千鳥

さ夜千鳥かたみの浦に跡とめていもが島をや鳴きわかるらむ

荒磯にすだつ千鳥も馴れぬれば軒端にあさる海人の家島

旅泊千鳥

かぢ枕こととふものは古郷になれし寐ざめの友千鳥かも

水鳥

○麻手こぶすま　麻布にて造りたる衾。麻ぶすま。

○かしまの　かしましに鹿島を掛けた。

○しばなく　屡々鳴く。

○かたみの浦　紀伊國紀淡海峽に面す。今加太の灣。

〇何かづくらむ　何を求食るとて水に潜るのであらう。

〇冰魚　いさゞ(魦)の異名。

〇ふしづけ　冬季柴を束ねて水中に漬け置き、魚の寒さを避けて其の中に集まりくるを春に至りて圍み捕るもの。
〇いを　魚。

〇むこの山　今六甲山。

〇ひつぢ　刈りたるあとに再び生ふる稻。

岩間にはつらゝ結べるかた淵につながれぬ鵜の何かづくらむ

池水鳥

とし寒き池のみぎはの松が根に鴨の青羽もあらはれにけり

江鴨

さす棹の音になれつゝ船きほふ入江の鴨の立ちもさわがず

網代にもみぢよる

もみぢばの流れて止るあじろ木は冰魚のよるさへ赤くぞ有りける

冬河ふしづけしたるかた

さゆる夜もこほらぬ底のふしづけを頼む陰とやいをの寄るらむ

行路霰

わけゆけばむこの山風さえ〳〵て袖に玉ちるあられ松原

竹間霰

露ちりし秋のあはれもいつしかと霰にさわぐいさゝ羣竹

田殘鴈

おくれ來て山田のひつぢふみしだき羣れ居る鴈のこゑの寒けき

初雪

武藏野はまだ枯れのこる草もあるを秩父の山に初雪ぞ降る

神な月ばかり山にはつ雪ふりけるを

しぐるゝと見えし昨日の雲はれて朝日に向ふ峯の初雪

山初雪

待たれにし雪を見初むる朝より月にうかりし山もなつかし

都より見ればこそあれ山もとの里に知られぬ峯のはつ雪

山家初雪

立ちいでて拾ふつま木に折りそふる花と見るまでふれる白雪

松初雪

降るほどのしばしは風も音絶えて松にみそむる雪のあけぼの

十月はつかばかり初雪降り出でてやがて止みければ

降るまゝに花と見ましを花よりもあだになりゆく庭の初雪

雪未深

明日といはば道やたえなむ降る雪に訪ひもとはれも今日こそはせめ

曙雪

ねぐら出でしみ山がらすのうちみだれ眺めをそふる雪のあけぼの

薄暮雪

限もなくふり積むゆきの空はれてよそに聞きなす入相の鐘

深夜雪

あけやらぬねやの板間のほの〴〵としらむは雪の積るなりけり

行路深雪

中々に木の根岩角うづもれてやすげにみゆる雪の山路

野逕雪

松も引き若菜もつまむ春までは雪にまかする野べの細道

野亭雪

降るまゝに野べの高かや折れ伏して見わたし遠き窗の白雪

河雪

隅田河水の上にもふる雪のきえ殘れるは都鳥かも

濱雪

たびねせむ宿のしるべもかきくれて雪のをりしく伊勢の濱をぎ

禁中雪

さくら花咲きて散るかとみるばかり近きまもりに降れるしら雪

○松も引き云々　古、正月子の日に野遊に出で小松を引きて千代を祝ふならはしがあつた。又若菜を摘みて食料とし邪氣を拂ふ。

○近きまもり　近衞。

○きねが庭火　禰宜が社前にて焚く火。

社頭雪

焚きすてしきねが庭火の跡のみぞ雪のくまなる神の廣前

遠村雪

野も山もふりつむ雪の空はれて里のしるべもけぶりたつ見ゆ

・庭上雪

ふる雪に庭のまがきは埋もれて外山をしめの中にこそみれ

雪のふりけるあした眞淵へよみてつかはす

人はいさおもひ思はず白雪のまつにはわきて降るかとぞみる

雪のふりける日人のもとより降りつもる雪よりも跡なき恨みぞ深かるといひおこせければ

跡なきも同じ心のあとしみよ訪はむもをしき庭の白雪

船にのりて雪を見る

ふる雪にあこがれ出でて水馴棹さすとはなしにゆく心かな

松雪

松の葉の春一入の色そふや今ふる雪の染むるなるらむ

檜雪

〇まきもくの檜原　大和國初瀨山の西に並ぶ卷向山の麓。

ふる雪の友まつ程はまきもくの檜原もいまだ埋れざりけり

常磐木雪

わびしらにおのが友よぶ山鳩の聲はうもれぬ雪の白樫

雪朝遠樹

朝日かげ先づさすかたの片枝より色あらはるゝ松のしら雪

雪朝遠村

山もとのよのまの雪の下をれや今朝のけぶりのつま木なるらむ

雪中鳥

夕暮のあはれをそへて降る雪に汝も友よぶやまばとの聲

雪中眺望

ふらぬ日も比良の嶺おろしさそひきて雪の花積む志賀の浦船

雪中遊興

軒の松まがきの竹もありながら雪ふみわけて雪をこそ見れ

雪中鐘

いまは又ゆきの花こそ散りにけれあはれさびしき入相の鐘

うるふ十二月十日あまりよべより雪ふりたるに眞淵へいひやる

跡つけて訪はれぬ宿の白雪は降るかひもなく消えむとすらむ

炭竈

夕けぶり立ちこそまされ白雲はおり靜まれる峯の炭がま

埋火

よそにのみあはれと見つる炭がまの煙になるゝ閨のうづみ火

閨埋火

吹く風にゆくへさだめぬ炭竈のけぶりの果てや閨の埋火

爐火似春

つげやらば谷のふるすの鶯も初音來鳴かむうづみ火のもと

夜爐火

たまくもとはるゝ夜半は埋火の起きあかすとも思はざりけり

霜はらふをしの羽音やうづみ火に冬しらぬ夜を驚かすらむ

雪中神樂

ふる雪にめぐらす袖も物の音もあひにあひたるおもしろの夜や

早梅

鶯のなみだもこほる雪のうちに先づとけそむる梅のしたひも

○起きあかす　火おきるにいひかけた。

○みづはぐむ　八十餘り三つにみづはぐむをかけた。みづはぐむはいたく老いること。

雪中早梅

春を待つうぐひすの音に先だちて雪のふる木の梅咲きにけり

梅　雪

紅のしたてるばかり咲く梅の匂ふが上に積るしら雪

歳　暮

千代ふるも何かたからむ年波の名に流れつゝ淀むせもなし

行く年も惜しまざりけり身につもる數をば老の物忘れして

八十ぢに成りけるとしの暮に

水ぬるむ春をこそ待て行くとしの惜しかりけるもはた昔にて

八十ぢあまり三つに成りけるくれに

又春に逢はむとすらむやそぢあまりみづはぐむ身の今日も知らずて

ふるとしに春立ちける年の暮に

まてしばし花鶯の春もきぬ行くらむとしの岩木ならずば

けふにさへ成りにけるかな立つ春におくるゝほどを賴む名殘も

閏十二月歳暮

冬ごもり春まちつけて今更にをしとはいはじ年の名殘を

○みかま木　御釜木の義。古昔正月十五日に百官の宮中に奉つた薪

よどむ瀬もあればこそあれ年波の流れつくして殘る一月

河歳暮

とし波のよどむせもなくこむ春のみかま木はこぶ宇治の河舟

歳暮梅

春ながらくれぬと思へばさく梅の花もありふるものとこそ見れ

こむ春の道のしをりとさきだちて野にも里にもにほふ梅が香

年の暮に庭の梅をよめる

あら玉のとしのしはすに成りぬらし沫雪しのぎ梅の花さく

冬天象

天の河水いかばかり氷るらむかげさへよどむ有明の月

冬日

のどかなる花の春まつ心には長くぞ冬の日をくらしぬる

冬朝

あかつきの嵐はけさのけぶりにて梢さびしき山もとの里

湖上冬

ふりしよをいかにしのべとあふみの海夕波千どり今も鳴くらむ

冬市

みわの市にすみうる翁きのふみし嶺の煙をけふ運ぶらむ

冬庭

霜にてる山たちばなを光にてほどなき庭は冬としもなし

冬獸

手に馴れしことひの牛を引きつれて雪折れひろふ里のあげまき

冬旅

別れこし跡によこをる嶺に又雪さへいたくふり積りつゝ

冬遠情

箱根山はつ雪白し都には今やみかりの使たつらむ

○みわの市　大和國磯城郡三輪村古、三輪市と稱した。

○ことひの牛　强健なる牡牛。

○雪折れ　雪の壓に折れた木の枝

○みかりの使　みは敬語。かりの使はおとづれ。たより。前漢蘇武の故事。

安豆麻宇多卷五

戀歌

初戀

わけそむる薄しの原末つひに忍びや果てむほにやいづべき

つれなさもうさもならはぬ袖の上に先づみえそむる人の面影

きのふまで鹿の鳴くねも大方の秋のあはれと思ひすてしを

思不言戀

ことならば梢の蟬にあえもせで澤の螢の身をこがすらむ

詞和戀

つれなさの昨日にかはる一言もうきにたへずばいかで聞くべき

忍戀

末つひによわりもやせむ益荒男の忍ぶに堪へし心強さも

もらさじの心遣ひのいとなさに恨むべきをも知らず顔なり

久忍戀

○ことならば　同じことなら。出來得るなら。
○あえ　あやかる。似る。

○いとなさ　いとまがないために

○たたば立ちね　ねは過去ぬの命令形。立つなら立つてみよ。

○あらじ　さにあらじ。

○はかられて　欺かれて。

○夕づゝ　太白星。金星。宵の明星。

よしや名のたたば立ちねと思ふまでしのぶ心のいつよわりけむ

忍涙戀

月ゆゑにぬるゝ袂といひなせどあらじとや猶人のみるらむ

忍別戀

知られじのおのが心にはかられて明けぬと月にいそぐ別れ路

聞戀

波は先づ袖にかけけり秋風の吹上にたてる其の名ばかりに

見戀

あしたづの音のみぞなかる和歌の浦や汀に潮の滿つとばかりに

且見戀

吹く風にうき雲まよふ夕づゝの見えみ見えずみもの思へとや

纔見戀

知るらめや瀧津やなせのはしり鮎みるまも波を袖にかくとも

いかなれば見ぬにまさらぬ面影のさだかに身をば離れざるらむ

時々見戀

こえやらで月日へにけり小柴垣しば〳〵見ずもあらぬものから

夢中見戀

袖の上にかゝれる波はまさしくてみるめかりねの夢ぞはかなき

尋戀

たづねずばいかで知るべき島の名の蓬が露の玉のありかも

祈戀

頼みこし神のいがきの樟の葉に身をうらみよと秋風ぞ吹く

中々に神のいさむる道ならばぬさに涙はかゝらざらまし

一すぢに祈りぞかくる飛驒人の打つ墨繩の心長くも

祈空戀

いかさまに人を忘るゝ折もあらばせめて祈りしかひと思はむ

祈佛戀

頼めずば佛のみてのいとせめて苦しとのみや思ひはてまし

詣古寺祈戀

はつせ山はこぶ歩みの八十度をあふよの數になすよしもがな

祈經年戀

逢はでへし幾としの緒のくりごとをうけひく神のなどなかるらむ

○袖の上にかゝれる波　涙。
○みるめかりねの夢　波の縁で海松といひ見るにかけ、海布(メ)と妻(メ)とにかけ、海布といつたから、刈りと假りとにかけ、寢といつたから夢を取り出した。

○飛驒人　飛驒匠に同じ。

○としの緒　年を長く續くをいふ語。
○くりごと　繰返し言。

五　疑戀

嶺に生ふるまつとはいひて待たじとや來むとたのめて來ぬ夜更けゆく

契明日戀

いつはりと思ふものから明日の夜を過してこそは恨みはてなめ

變契戀

誓ひてし松をこす波袖の上にかゝるべしとは思はざりしを

不逢戀

苦しさは今こそまさめかた絲の逢ひ見て後に引き比ぶとも

馴戀

あまたたびしぐるゝ磯のそなれ松なれても染まぬ色のつれなさ

待戀

誰もしれ人まつがねの青つゞら苦しきものの限りなりとは

待夜深戀

さりともと待ちもよわらぬ袖の上に二十日あまりの月ぞ宿れる

待不堪戀

今日まではまつにかゝれる玉の緒のたえぬものから堪ふべくもなし

○誓ひてしの歌　「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪越さじとは」(後拾遺十四、戀四)を本歌としたもの。

○かた絲の　枕詞。よる、くる、あふ等に冠す。

○そなれ松　磯なれ松。

○人まつがねの青つゞら　人待つに松が根をかけ、次のくるの序とす。

○さりともと　それでももしや來るかと。

待空戀

必ずとたのめざりせば菅ごもの七ふの塵を拂ふべしやは

逢戀

たまさかに拂ふ枕よそのまゝに今より塵の積らずもがな

はじめてあへる

ほにいでしかひは有りけり初尾花こよひぞ人に結ばれにける

稀逢戀

さすが又あふ夜有りけりかた絲のたえぬばかりを玉の緒にして

逢增戀

かわくまも有りこしものをいかなれば逢ひ見し袖のぬれまさるらむ

希會不絶戀

ながらへばあふ夜のかずも積らまし絶えぬばかりをいきのをにして

夢會戀

かた絲のあふと見つるは定かにて現ならねば移り香もなし

山家逢戀

思ひのみまさきのかづらくる夜さへ筧の水の心細しや

○菅ごも　菅にて編みたる席。古陸奥の名産。利府郷より出す。
○七ふの塵　ふは編。「みちのくのとふの菅ごも七ふには君をばねせて三ふに我ねむ」(袖中抄)
○たまさかにの歌　たま〳〵逢ふ中故枕に塵も積るのであるが以後は枕に塵の積る暇のないやうに繁繁逢ふやうになつてほしい。
○移り香　人の衣の移り香。

（消えなば　死んで消え亡せたなら。

惜別戀

かねてより別れむことの思はれてかはす袂も露はかわかず

別戀

あふにかへて消えなば露の玉の緒のかけて苦しき別れせましや

後朝戀

きぬ〴〵のなみだの瀧の水上は幾よかへせし袖の露ぞも

逢不遇戀

けさも猶みはてぬ夢の心地してぬる夜ながらの人の面影

僞りのなきを恨むる折もありや又は逢はじといひしばかりに

ことならばなどつれなさのまゝならで許し許さぬあふさかの關

立名戀

うつゝとは我だに思ひ定めぬをいかで立つ名のまさしかるらむ

無き名やたちなむといひおこせければといふことを

こえやらぬあふ坂山の秋霧をいつかまさしき名にたててみむ

題戀

下もえの思ひは人にみえもせで何を煙とたつ名なるらむ

契りおきし松の千歳はいたづらに霜より後の名にこそ有りけれ
たのまれぬ人のさが野の雪間よりや丶あらはる丶春の若草
涙をば袖にせけどもみつれゆく身よりうき名は立ちそめにけり

依涙顯戀

いつしかと色に出でにけり蓬生の露をかごとにぬれし袂も

增戀

玉なせしきのふの袖は何ならず瀧つみなわと身はきえぬべし

日增戀

うつりゆくひのくま河の五月雨にまさるみかさを袖にこそ見れ

言出後增戀

憂き思ひますほのす丶き秋風も亂さじものをほにし出でずば

厭戀

玉だれの隙もる風に身をかへば花の姿に猶や厭はむ

見形厭戀

厭はる丶深山のくち木いかにして心の花を人に見えまし

遠戀

○みつれゆく　身やつれゆく。

○みかさ　水かさ。

○ほにし出で　ほに出で。しは强めの助辭。

○厭はる丶の歌　「形こそ深山隱れの朽木なれ心は花になさはなりなむ」(古今十七、雜上)を本歌。

むさし野の果てしも知らず紫のひともと故に分け迷ひけり

隔物語戀

忘るなよ人傳ならぬことの葉の露のまがきの隔てありとも

隔山路戀

峯いくへ越ゆとも越えむ行き〳〵て逢坂の山とまりなりせば

あひ思ふ

思へばぞ思はれにける變らずば變らむものか人のゆく末

難忘戀

おもかげの月にかげろひ花にそひ夢に現に忘れやはする

絶戀

絶えぬべきあらましなれやつれなさの思ひの外にことよかりしも

はかなしなあいなだのみに月日へてかたみにそむく中の契りは

恨絶戀

恨みしは賴むにあまるすさみにて絶えむものとは思はざりしを

絶久戀

中たえておのがさま〳〵世を經ればかけし誓ひもかひなかりけり

○紫のひともと　「紫の一もと故に武藏野の草はみながらあはれとぞみる」(古今一七、雜上)

○あいなだのみ　あてにならぬたのみ。

○賴むにあまるすさみ　ここまでも賴まるゝと思ひこんで居つての戯れ。

雪中戀人

きのふだに待たれしものを白雪のふりはへ問はば嬉しからまし

經年戀

くりかへし猶つれなきは命かな逢はでへにける年のをだ巻

秋忍戀

夕されば秋のならひにこと寄せて人のとがめぬ袖ぞぬれそふ

秋逢戀

置きわたす露も草葉のたまさかにあふ夜の袖ぞ秋をよそなる

露を重みなびくも易き初尾花穗に出でかねし程ぞくやしき

冬戀

さりともと長きをたのむ冬の夜の袖の霜とふ曉の鐘

春の日の暮るゝ待つまに比べても猶あはでぬる冬ぞ夜長き

冬恨戀

あふとみし夢おどろかす玉あられいかに碎けて物思へとや

こりずまにいつまでとてか思はれぬ身を浦千鳥なかぬ夜のなき

冬別戀

○秋のならひにこと寄せて　寂しいのは秋の常であるといふことを口實として。

○こりずまに　以前のことに懲りずして。

○うつろはむの歌　人の心の情の淺い故變心して二人の中がかれがれにならうさは前以て想像が出來る。

○ふた世　後の世まで。

冬の日の暮るゝほどなき曉もうき習はしの袖のつゆけさ

深夜戀

かにかくに更けぬと告ぐる鐘ぞうき待つにこぬ夜も袖かはす夜も

海邊戀

相思ふ契りはかなし底ひなき海はあさぢが原となるとも

閑居戀

うつろはむ秋こそかねて思はるれ人の心の淺茅生の宿

旅宿戀

心をばおもふあたりに留めおきて出でし旅寢に何を戀ふらむ

人傳戀

武隈の松いかばかりつらくともみきと傳へし人を頼まむ

悲離戀

有りてだに添ひもはてなで玉くしげふた世とはなど契りおきけむ

寐覺戀

たのめてし心かはると見し夢のさめて嬉しきあかつきの鐘

老後戀

○きぬ〴〵　男女が相會したる翌朝。後朝。

忘るなよ忘れむものかもとゆひの霜の朝けも露の夕も
今更に人は恨みじ古りはてしわが身それともあらずなる世に
　　としへていふ
花すゝきほに出でそめし夕より幾たび鴈の來て歸るらむ
　　寄月別戀
きぬ〴〵の袖の月かげいつかまた空にかへしてもろともに見む
　　寄月變戀
忘るなと空ゆく月に契りおきて色かはる秋を何たのみけむ
染めもあへず移ろふくさの名にしおふ月にも人の秋ぞ知らるゝ
　　寄雲戀
逢ふことの及ばぬ中も契りあらば心はわたせ雲のかけ橋
ちぎりあらば遙けざらめや山高み八重たつ雲の深き思ひも
　　寄雨戀
かやが軒にふる春雨の絲ならばくる夜も人に知られざらまし
　　寄霜戀
秋をへて霜はおくとも人しれぬ心のまつの色にいでめや

寄春戀

吹く風のさそふ方にやなびくらむくる夜まれなる青柳のいと

寄秋戀

うき人の心をたねとおひにけむま葛にまじる野邊の月草

寄冬戀

知らせばやしぐれにそめぬ常磐木も雪の積ればなびく習ひを

寄山戀

つもりこし枕の塵やうき中をいとゞ隔つる山となりけむ

寄原戀

たのめてし人の心のあさぢ原移ろひゆくか霜もおきあへず

寄橋戀

さりともと思ひわたりてくやしきは在りしつらさの眞間の繼橋

寄海戀

世をうみの蜑のもしほ木こりもせでこがれぞ侘ぶる恨みながらも

寄浦戀

たのめつる人はいなみの浦風にもしほのけぶり末もとほらず

○眞間の繼橋　下總國の歌枕。今市川町の北方。

○いなみの浦　紀伊國。今印南町田邊町の西北海岸。

寄石戀

かきたえし人のつらさも我からと忍ぶの奥のつぼのいしぶみ

寄田戀

たのまじな山田の鳴子引くかたにうつろひ易き人の心は

寄禁中戀

およびなき逢瀬をたのむみかは水そこの心はくみも知らねど

寄南殿橘戀

袖ふれむよしはなくとも夢にだにいかでみはしにかをる橘

寄寺戀

必ずといひし夜毎の鐘の音につらきかぎりを三井の古寺

寄市戀

涙せく淵もあふせにかはるやと飛鳥の市に出でて問はばや

寄草戀

さりとものたのみも今はつき草の移ろひ果てし中ぞくやしき

くやしくもほに出でけるか花すゝきなびかむ風の心しらずも

さねかづら逢ふてふ山は名のみしてくる夜ぞ稀に成りまさりぬる

○つぼのいしぶみ　壺碑。陸奥上北郡壺村に在る千引明神又石文明神ともいふが、壺碑を埋めた處とも傳ふ。後世は多賀に在る碑をいふ。

○みかは水　御溝水。禁中を流るる川。

○逢ふてふ山　逢坂山。「名にしおはば逢坂山のさね葛人にしられでくるよしもがな」（後撰集戀三）

○さがり苔　ひかげのかづらの異名。

○つまで　杣人の木作りして角立ちたる材。角材。

○神世の鳥　鶺鴒。伊弉諾尊、伊弉冊尊の二神御夫婦の御中の始めの故事。

寄草別戀

別るとも同じ世にだに住の江の岸なる草の名さへかけずば

寄苔戀

そま山のいはほに生ふるさがり苔心ながくも人のつれなき

寄木戀

忘らるゝ身は埋木の年を經てなどうきふしの朽ち殘るらむ

寄花戀

あだ人のいつ袖ふれて花さへも移ろひやすき名は立ちにけむ

わたつみの秋なき波の花ならばうつろふ中の歎きせましや

寄檜戀

ひく人もあらましものを杣山の宮つくる檜のつまでなりせば

寄鳥戀

うき中のならひよいかにかかれとは神世の鳥も教へそめしを

寄鶉戀

わすらるゝわが身うづらのとことはに音には啼くとも人は恨みじ

寄千鳥戀

風さゆる汀の冰とけてねぬ夜半の千鳥のねをのみぞなく

寄獸戀

うき名のみ立野の牧のはなれ駒馴るとはなしに遠ざかりけり

寄螢戀

思草くちて螢とならばこそ人の袂につゝまれもせめ

寄海人戀

さりともと待つもたゆまずこりずまの海人のたぐ繩くるゝ夜毎に

寄涙戀

おなじ世のたのみばかりを思ひせく柵なれや袖の瀧つせ

寄衣戀

魂あはば夢にや見ゆと試みに衣かへさでねし夜はもあり

かへすとも現ながらの夢や見む逢ふにならはぬ夜の衣は

寄笛戀

笛竹のいかなるふしをかごとにてねたくも人の遠ざかるらむ

寄扇戀

忘られむ秋なかりせばいかばかり扇てふ名の嬉しからまし

○立野の牧　武藏國立野郷、古、牧場の一、今不詳、或曰小机領内なりしかと。「秋霧の立野の駒を引く時は心にのりて君ぞこひしき」(後撰七、秋下)
○はなれ駒　放牧。
○せめ　めは未來の助動詞むの已然形。
○こりずま　失敗に懲りざること

○かりで　借手。笠の紐をつける處。

寄笠戀

有明のそれさへうとき雨もよに笠のかりでのわかれ苦しさ

寄網代戀

かひなしや身を宇治川の網代守ひをへて袖は朽ちまされども

寄名所戀

あはでぬる夜半のたもとと宮城野の木の下露といづれまされる

あづまうた巻六

雜歌附雜體竝文

曉雲

あらし吹く峯の梢に有明の月を殘して雲ぞわかるゝ

海邊雲

遠干潟浪をやく火のほの〴〵とをり靜まれる曉のくも

名所山

忘らるゝ誰がうき中の牀の山拂はぬ塵の名を殘すらむ

陰しげき筑波の山のつく〴〵と思へかしこき御代の惠みを

富士をよめる

天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は殘れり

日枝

八千鉾の神のみけしと大ひえに霞の衣たちはじめけむ

逢坂山

○日枝　近江比叡山。
○八千鉾の神　大山咋神。
○みけし　御衣。みぞ。

たが中のかはらぬ色にならふらむ逢坂山の杉のむら立

比叡

ひらのねに殘れる雪の消えて又降るかとみしは櫻なりけり

佐夜中山

旅人の袖いかならむ笹の葉のさやの中山こゆる夕は

高師山

秋の月たかしのやまの松風にさそはれわたる初鴈の聲

名所野

いひしらぬ御代の惠みを時なくもうけら花さく武藏野の原

瀧

白たまをぬきこそあへね瀧の絲弱からねばや絕ゆる世もなき

たちぬはぬ衣きし人の袖もがな借りてひろはむ瀧の白玉

雲かすみたてぬきにして山姬のおもてさらせる布引の瀧

英虞海

あごの海の海士の釣船にはをよみいらこが崎へこぎ渡る見ゆ

海路

○かはらぬ色　戀の變らぬ色。

○高師山　三河國豐橋市の南東。

○うけら　をけらの異名。菊科の植物。

○ぬきこそあへね　つらぬきさめぬ。

○あごの海　伊勢海。志摩沖の海

○いらこが崎　渥美半島の突端。

こぎつれて港出でにし友船も語りあふべき波の上かは

澗水

きその山夕こえくれば谷せばみ心細くも行く水の音

澗戸雲鎖

谷の水むすぶいほりや朽ちぬらむ夕ゐる雲を戸ざしにはして

櫻川

よとともに流れて久しさくら河花の雫を水上にして

故鄕

今はたれ住みならすらむかへり見し宿の梢もおもがはりして

山家

軒の松のこずゑにかへる夕鴉なれも都のよすがとをみむ

清水汲みま柴折りたき年をへて聞きぞ馴れぬるむさゝびの聲

山家嵐

世のほかの陰とたのみしみ山木は嵐のおとも靜けかりけり

うつゝにはさもこそあらめ都人夢にもうとき夜嵐の聲

山家煙

かげをのみ賴みしものを朝夕の煙も松の落葉なりけり

山家夕

山たかみ夕日のかげはさしながら茅が軒ばに雲ぞおりゐる

山家水

かげろふの岩がき淸水汲みて知れ心とすめる松の下庵

閑居友

物思ひなきを心の友にして住みなれてみむ蓬生の奥

故鄕草

故里はいかで人めのかれぬらむかくこそしげれ庭の夏草

故鄕松

ふる鄕に松の落葉のつもらずば軒のあれまを何にかくさむ

たへてしも住みはつまじき故里の松に似げなき千代の聲かな

別

露わけて今朝のわかれの袖の上を思ひも出でよ眞野のはり原

いせの松坂の藤田元能がやよひばかり國へかへるを送る

羨まし咲く花見つゝ日にそひて古里近くならむ旅路は

○かげろふ　岩の枕詞。

○眞野のはり原　攝津國武庫郡。今神戸福原の邊。榛原に名高い。

今こむと契りもおかでゆく人をいつとまつべき我が齢かは

常世より伊勢路やとほき秋はまたこむと契りて鴈はかへるを

人のいせの國へ歸るを送る

箱根山ひとりこゆとや思ふらむ慕ふ心はおくれやはする

たらちねのいまや〱と思ひこす心や旅の守りなるらむ

正幹が越前へ行くをおくる

やがてこむ鴈だに有るをいかなれば君は越路に立ち別るらむ

姉のみちのくへまかるとてやがて歸らむといひて年月ふれど歸らざりけるを恨むる妹に代りてよめる

鹽釜の恨みけりとも知らずしてあねはの松の千代を待てとや

一貞が都に上るとて秋は必ず歸らむといひければ

鴈の來む秋とちぎりて別れなば雲のはたてに待ちやわたらむ

素樹が都へ上る馬のはなむけに

なつかしき事をあまたの宮人に心ひかれてかへさ忘るな

野呂元文が母にあひに伊勢へ行くをおくる

神風やいつきの宮のいつはあれど秋の旅寢は露けかるらむ

○正幹　進藤正幹。筑波子の養父筑波子は縣門三才女の一。その歌集は本書に收めた。

○あねはの松　陸前國栗原郡澤邊村大字姉齒にありし松。

うら浪のはや立ちかへれいせの海人の見る目慰む事はありとも

人のみちのくへゆくを送る

ほどもなくあふくま河と思へども待てばすべなし早かへりこね

みちのくの野田の玉川遠けれどわかるゝ袖に波ぞかゝれる

倉橋正房が故郷遠江へまかるとて秋風たたば歸りなむといひしが遲かりければよみて遣はす

ちぎりおかぬ鴈はくれども秋風の吹かばといひし人は歸らず

思ひやる心はゆきも届かなむさばかり遠つあふみなりとも

通泰が遠江へかへるをおくる

わかれ路の天の中川名にし負はばとしのわたりを待つことにせむ

元義難波へ行きしが此の秋は歸るべきよし聞きしを秋も歸り難き事になりたりといひおこせければ

幸かれと猶こそいのれ歸りこぬ人をなにはのうらみ長しも

遠江濱松の五社の神主森民部少輔正月の初めに來りて眞淵が廬にやどりゐておほやけへ訴へ事有りとて四月までとゞまりけり。もとより近きわたりなればしば〳〵行きかひて語らひしに、こと成り果てぬあすなむ濱

○早かへりこね　ねは完了の助動詞ぬの命令形。

○遠つあふみ　遠江。

○天の中川　天龍川。(詞人のことは。)

松へまかり立ちなむこむ春又まゐりこむといひければにはかのやうにてさすがに名殘をしくてよめる

春はまた越えてを來ませ箱根山あけゆくとしを待つことにせむ

同じ時家としに紅と白きさいでして梅の花をつくらせておくるとて

冬ごもり先づさく梅のよすがにも春と契りし事な忘れそ

眞淵が家にて贈答に春海路に行く人にといふを題にて信幸が水の江の春の浦わの釣のいとに心ひかれて長ゐすな君と有るにこたふ

君待たば今かへりこむわたつみの神のをとめはいさといふとも

おのれとし高く成りて大橋正芳が美濃の大垣へまかれりけるとき馬のはなむけに歌よむべけれと源のさねをおくれるがのしろめが歌を翁がよめると思へといひやりければ主有る歌にては心ゆかずとて強ひてこひければ

心をばたぐへてぞやるながらへて逢はむ逢はじはとまれかくまれ

旅の歌とてよめる

おくれじと慕ひやすらむ行く袖にふるさと人の面影の見ゆ

旅行友

○源のさねをおくれる云々　源實が筑紫へ湯あみむとてまかりける時に、山崎にて別れをしみける所にてよめる。「いのちだに心にかなふものならば何かわかれのかなしからまし」（古今八、離別）

○おくれじと　我が心は旅立つ人におくれて跡に殘つてはをらぬと

にひはりのみ使　開拓使。

吾が友となれにし竹の杖ひとり旅の長路もおくれざりけり

旅宿

別れこしその曉の心かな都にかへる夢のねざめは

旅宿嵐

心なのよはの嵐よふるさとに通ふ夢路を何さそふらむ

古さとにふかずしもなき夜嵐も旅寝に聞けば音ぞかはれる

旅泊

こと問はむゆかりもなしやむらさきの石高の浦に一夜ねしかど

旅泊雨

かぢ枕とま洩る雨の音づれもまぎれぬほどの波のしづけさ

にひはりのみ使にて下つふさの國へまかりける頃よみける歌の中に

こも枕露もみだるゝ浦風に月の影さへ宿りかねぬる

夜をへぬる草の枕やくちぬらむかたしく露に螢みだるゝ

小柴さし祈りし神の名もしるくあすは家ぢに船よそひせむ

仕へをしぞきて後伊豆の出湯へまかりけるに湯の上なる土肥がねに登りて夕さりつ方山をくだるみちにて鹿の聲をききて

旅人の草の枕も思ひこせ妻どひがねのさをしかの聲

つとにせむものにもがもな土肥が嶺のを花くき鳴くさを鹿のこゑ

鎌倉のさとにて

旅衣にほはす萩の花ちりてをしね刈りほす鎌倉の鄕

おなじ所の長谷にやどりて

あまを船はつせの里にたびねして鎌倉山の月をみるかな

六浦にてよめる、こゝは武藏の國なり

住みなれしくぬちなれどもむつら潟長らへざらば來て見ましやは

其のころよめる

家人の心やこゝにかよふらむ草の枕に松むしの聲

旅てへば憂き習はしとしりつゝもたへぬは夜の時雨なりけり

見わたしにさはらふ山のなければぞ早くも月のいづの海原

となりにははつしまみえて七島は潮氣にくもる伊豆の海ばら

砌下竹

憂きふしも嬉しきふしも交るらむみぎりの竹のよをへぬる身は

社頭松

○つと　みやげ。
○くき鳴く　くゞり鳴く。

○六浦　三浦半島の北限。武州金澤の近く今六浦村。
○くぬち　國內。

○てへば　といへば。

○さはらふ山　障害となる山。
○いづの海原　月が出づると伊豆とかけた。

祝子(はふりこ)がいはふみむろの榊葉に立ちそふ松の風もかをれり

松積年

あらはるゝをりも有りけり松が根の露のなるてふ玉の光も

紀の路に住める人の七そぢの賀に松契遐年といふことを

あしたづも住むなる和歌の浦まつに契りてまさむ千代を幾千世

松契多春

深みどり松はときはにさかゆくや君にはは千世の春を契りて

名所浦松

やかぬ日も松のけぶりをそれとみて名をばたどらぬ鹽釜の浦

眞木

み山には木枯知らぬま木ならで染めし一葉は殘らざりけり

鶴

むさし野や雲居はるかに舞ふ田鶴の一聲ごとに千世ぞこもれる

關路鷄

鷹の巖におりゐたるかた

きぬ〴〵にかこちなれぬる鷄が音に都別るゝ逢坂の關

○ふしつけし　柴を漬けし。冬季柴を束ねて水中に漬け置き魚の寒さをさけてその中に集まり潛めるを春に至りて圍み捕る。

○鳥上の嶺　出雲國船通山の古名伯耆國との境。

岩ふちに眞白の鷹の影みれば水の底にも雪ぞつもれる

河邊鷺

ふしつけし淀のかはせに立つ鷺のおのが色より明くるしのゝめ

千蔭が鷄の雛つれたるかた畫かせて歌書きてよといひければ書いつけける

子を思ふおやの敎への庭つ鳥かけて忘るな殘す一こと

蛇かけるかた

草なぎの大みつるぎも鳥上の嶺のをろちぞ奉りける

琴

焚きのこす鹽木なればや聞くからに身にもしむらむ夜の琴の音

曉燈

きえやらで殘るもさびし有明の月影細き窗のともし火

瀧眺望

見もあかで千代も經なまし雲かゝる嶺の岩根の瀧のしら絲

海眺望

なにはがた波間に浮ぶあり明の月の行くへや淡路島山

○眞間の入江　下總國の歌枕。今武藏との境市川町の邊。

○いつはとは　何れの時とはわからずのわかに和歌の浦とかけ、いつはに松の五葉をかけたる緣語。

○竹芝の海べ　今東京市芝區三田臺町の近く。

江眺望

夕なぎに海士の釣船幸ありて眞間の入江にこぎ歸るみゆ

浦眺望

春風の松吹くからにいつはとは和歌の浦波花と散るらむ

川眺望

雨はるゝ田づらの河の古杙に鷺もみのけを掛けてほすらむ

竹芝の海べにてよめる

時津風吹きにけらしな眞帆あげてとしまの江どに舟ぞ寄りくる

晴後遠水

うき雲のゆくへ知らずも空晴れて宇治の網代に波ぞいさよふ

述懐

あけくれの思出にして年はへぬ月と花との人を分かねば

なに事につけてうらみむ愚かなる身も安國の敎へある世を

天づたふ影はへだてぬ月も日も老いてはいかで早く過ぐらむ

老いぬれば夏の一夜ものどけきを千代へまほしと何思ふらむ

夜述懐

思出のありのかず〳〵手を折れば老のねざめのつれ〳〵もなし

獨述懷

思ふことなくてふる身を人間はばかたらひ草に何を摘まゝし

老述懷

在りて世にうきめは見じと散る花を羨むばかり身は老いにけり

寄名所述懷

もとゆひの霜のしらがの濱千鳥我がよ更けぬとねをのみぞ鳴く

いかなる時にか

神代より松はみどりに雪白したれ常なしといひ初めけむ

懷舊

御くにぶり今も神代のまゝならむくだらの和邇をめさゞりせば

くりかへすものならなくにありし世を忘れがたみの青柳の絲

はかなさを霜とみし世の形見とやまさごの月のみじかよの影

過しこし八十ぢの蔓をそのまゝにうつゝともなく年ぞ暮れゆく

寄露懷壽

露のごと消えても結ぶ玉ならばなき人こふる袖はぬれじを

○思出　過去の追想。

○御くにぶり　我が日本國の風俗

○くだらの和邇　百濟の學者王仁

〇はかなしやの歌　「末の露本の雫や世の中のおくれ先だつためしなるらむ」（新古今八、哀傷）によつたもの。

往事如夢

すぐしてし昔おもへばぬばたまの夢てふものを現とやいはむ

忘れえぬ面影のみはまさしくて現ともなく過ぎし一とせ

かく有りしとありしとのみ忍ばれて夢とさだめぬ夢ぞはかなき

寄露無常

睦ましかりける人のみまかりける頃

はかなしや袂の雫草の露いつまでとてかおくれはつべき

かくばかり悲しきことを聞くべくばなど徒らに長らへにけむ

としごろむつみかはしける倉橋正房が八十ぢあまり五つにして病いと篤しく成りけるころよみてつかはす

さきだたばしをりしてゆけ死出の山今いくほども君はまたせじ

正ふさが一めぐりに思往事といふことを

面影はこととふばかり定かにてうとく成りゆく月日悲しも

瀬川氏の民子がこぞの秋京へのぼるときゝて歌よみておくりけるに其ののち京より長月の都の菊の花を見て思ひぞ出でむ君がことのはとなむいひおこせけるまたことし六月におもひ出でて聞かぬ夜もなしふるさとの

君があたりの山郭公といひおこせけるを思ひかけず其の七月になむみまかりぬと友がきの知らせけるにかの歌どもおもひ合はせて悲しみに堪へずしてよめる

この秋のみやこのきくの花もまたで葉末の露と消えし君はも

みな月の君が玉づさおもひ出でて今ぞ音をなく山ほとゝぎす

竹内順孝の父の一めぐりによみておくる

ほしあへず更に降りそふ春雨をよその袖とは思はざりけり

むつましかりける人みまかりける頃月を見て

忘るなよあらぬさかひに住みかへて此の世にまさる月はみるとも

山下在翁の七とせの忌日に長月二十九日其の墓に詣でて

七かへり霜おきかふる苔の下にありしながらの名はくちずして

かの翁が娘をおのれ養ひ子にしたりければ

言の葉の露の手向もなでしこのゆかりにかけてあはれとを見よ

宮澤通義がみまかりし時子の信義へよみておくる

さきだたむ身はつれなくてなき數にかぞへ添へぬる人ぞ悲しき

○あらぬさかひ　さきの世。黄泉。

○なでしこのゆかり　養子としたる縁を指す。

○あはれとを見よ　をは歎辭。

○雲がくる　死すること。

はま松の千とせを待たでいかなれば雲がくるらむ短夜の月

茂夏が母のみまかりけるに

千とせもと祈りしかひもあらし吹くはゝその陰のいかに寂しき

伊勢國に姉もたりける友其の姉みまかりぬと聞きてとぶらひにつかはす

文のはしに

東路のせきもとゞめぬ面影や君に殘せる形見なるらむ

身を露にたぐへし儘の夕にも人の千とせや思ひおきけむ

よそならぬ浪や袂をこえぬらむなれしいせをの蜑のゆかりに

島津但馬守どのの北の方はしば〳〵よみ歌みせ給ひしが六月ばかりみまかり給ひければはての日にみ墓に手向けける

ことしより秋鳴く蟲の名もつらし松をちとせと何思ひけむ

ありはてぬ世にこそあらめよしさらば老を限りの習ひともがな

日奉貞冬がみまかりて三年の忌日に夏懷舊を

なき影を何中々にさそひきてやがてかたぶく夏のよの月

貞冬が十三年の忌に對橘問昔といふ事を赤井一貞がよませければ

心なき岩木とは何おもひけむ問へば昔にかをる橘

この遠のみかどのおほみだい所と榮え給ひし閑院の宮の姫みこ過ぎしは月二十日の月と雲がくれましてあすなむ上野のみ山へはふりまつるといふ今日しも長月九日なりければかしこみつゝよみ侍る

けふまちてさく白菊も白たへの麻の衣の袖かとぞ見る

仙人(やまびと)の千よのためしと咲く菊の花も面なきけふにぞ有りける

山下忠景がみまかりけるに菊紅葉を折りて手向くるとて

今ぞしる千世のためしの白菊もはかなき露の宿りなりとは

色かはる袖にならひてもみぢ葉も此の秋よりや染めまさるらむ

興紀がみまかりし子の七年の忌に人々に歌よませけるに磯邊といふ題を得て興紀がうち續きて歎き事にあひぬる事をさへ思ひて

あづさ弓いそこす波のしば〳〵も潮馴衣ほしやわぶらむ

中村知陳がみまかりて十七年に成りける其の日に

いかなれば先だつべきは長らへて年をあまたの今日に逢ふらむ

吾がいろせの翁十一月二十六日しぐるゝ雲のおくかもしらず過ぎ行き給ひぬれば悲しさいはむ方なし七日にあたる日奧津城へ詣でてよみける

もろともにいざとは君がさそはねど幾程の世をおくれやはせむ

○過ぎしは月　は月は陰暦八月。

○潮馴衣　潮じみた衣。

○中村知陳　作者枝直の女壻。

○いろせ　兄又は弟。

惠照尼の十七年の忌日に

別れしはきのふばかりの心地して十まり七の年はへにけり

おもかげは在りし其の世にかはらねどしるしの石に苔おひにけり

秋ちかき木末の蟬もけふとてや手向の法の聲を添ふらむ

故郷にて母君の過ぎたまひしもいつしか五十年と成りにけるに手向すとてよめる

嬉しくも老いぬればこそたらちねのいそぢの御靈けふ祭りけれ

其の日雨ふりければ

今更に思ひかへせば年月も涙も雨もふりにこそふれ

いはけなかりしより吾が子の如く敎へたてし大橋元義がみまかりければ

永らへてくやしきものはとはるべき人のあととふ手向なりけり

妻のみまかりし頃よめる

先だちてうきめを見する人よりも老いて殘れる身こそにくけれ

千蔭があすは母の二七日とて題を出して族友よび集へて歌よませけるは三月二十九日なりけり

花鳥のをしきのみかは見し人を誘ひたてて春ぞ暮れゆく

○十まり　十あまり。

○しるしの石　墓碑。

○いはけなかりし　幼かりし。

披書思昔

筆のあとに殘す言の葉なかりせば何にしのぶの露をかけまし

夢談故人

夢のうちにゆめとも知らば見し人にみぬ世がたりを問ひは殘さじ

社頭曉

神さびて心もすめるみたらしにうつる杉間のあり明の月

社頭祝言

下野や二荒の宮の廣前によろづ代呼ばふ松風の聲

社頭祈君

さかえませ千世ませ君と祈るなる心の色かあけの玉垣

竹芝の浦ちかく住みける人の六十の賀に

春風に庭よき沖の大船のゆくら〳〵に君は千世ませ

人の賀に杖をおくるとて

千世の坂こゆべき杖の試みにけふより國に手なれ初めなむ

祝

愚かさの足ることと知らぬ心にも飽かずやはある御世の惠みに

○みぬ世がたり　死後の物語。

○庭よき沖　波靜穩なる海上。
○ゆくら〳〵　ゆる〳〵。

寄若菜祝言

たつのすむ澤べのわかな君が經む千代のためしと今日こそは摘め

寄道祝

賢きも出でて殘らじ足引のかなたこなたに道し有る代は

八百日ゆく濱のまさごも代々をへて巖をたゝむ道となるまで

寄郡祝

むさしなる都筑の郡つぎ〳〵に榮えますらむ御代はよろづ世

寄道祝世

萬代とかけてぞ仰ぐ大やしま五つ七つの道をのどけみ

寄月祝

千とせとも何か限らむ松を出でて竹をもりくる月に契らば

知のぶが母とじの五十の賀に寄松祝といふことを數多よみける中に

積りては玉と成るてふ下露に千代のかずしる松かげの宿

さらにまたためしはとはじ百枝さす松に盡きせぬ齡比べて

諸ともに今を千とせとしのぶまで契り忘るな宿の松が枝

人の八十賀に寄松祝を

○八百日　極めて多くの日數。

○むさしなる都筑の郡　今神奈川縣に編入。東京府に境す。

○五つ七つの道　五畿七道。

あづさ弓としのやそぢの春はまた千代へむ松の二葉なるらし

寄龜祝

榮ゆべきやどの千年のあらましは龜のうらにもまさしからなむ

寄民祝

むさし野におひそふ草や民くさのなびきさかゆく例なるらむ

寄世祝

船きほふ江門の諸鳥(もろとり)のたちゐるにも御代を八千代と呼ばぬ日ぞなき

本多退翁君のあらたに造られたるなり所へまかりて

飛驒たくみうつ墨繩のながらへて八千代いませと造るにひ室

おのれが四十の賀とてむこ知陳が勸めて人々歌たうびけるついでによめる

あづさ弓いたづらにのみ過せしはとしのやそぢの半ばなりけり

けふよりの猶行く末もたのむかな天にますらむ親の守りを

人の子の生先をいはひて

榮ゆべき宿の千とせのあらましは生ふる小松の二葉にもみゆ

千蔭が娘の七夜に名をつけさせければ

○龜のうら　龜卜。龜の甲を燒いて占ふこと。

○なり所　別莊。

○飛驒たくみ　古昔每年飛驒國より京師に召し出されし工匠。又木工匠の稱。

とり所なくてへぬれど老の身に齡ばかりは肖えよみどり子

かくて名をあえ子となむ名づけ侍りける

ことし五十ぢに成りたれば人々梅花によせて祝言たうびけるにぞ己もよめる

すてぬ世の惠みは老の身にもあまり袖にもあまる宿の梅が香

五つと三つに成りたる子どものいはひ事しける日よめる

すなほなる生ひさき見せよ竹の子の親にまされるふしは無くとも

愚かさの親に似よとは思はねど教へおかるゝ子の行くへかな

千蔭が妻をむかへし時に

いつしかと巣だち待ちえし鶴の子の子のこの雛に逢はむとすらむ

同じ時よみて千蔭に與へける

竹のねの下はひわたるふしのまも今日の日陰をあだにすぐすな

勤めよや愼めよやと殘しおく老のくり言千とせ忘るな

いさゝめもなす事毎に身をつみて人によからむ心おきてよ

行末のさかえいのらば人の爲よからむわざの數を重ねよ

伊勢にいますいろせの六十の賀に寄海祝を

○鶴の子　長壽を祝ひていふ語。

○いろせ　兄又は弟の稱。

いせの海の清き渚に拾ふてふかひ有る千世は君ぞかぞへむ

人の六十賀に花有喜色といふことを

君がへむ千とせの春をたのめばや花ものどかにゑみさかゆらむ

常陸の笠間に住む人の七十の賀に

つくばねの裾わの田ゐにゐるたづの經なむ千年に消えざらめやは

元義が母とし六十の賀の屛風にほとゝぎす鳴く山に女車行くかたを

を車のうしろやすくや思ふらむうちとけてなく山ほとゝぎす

昭如大とこうつせみのことぐさなしはてて今はとて寺の事弟子にゆづりけるころよみてつかはす

量りなきためしにいかであえざらむのがれにし世をのがれぬる身は

二月二十九日の夜火にあひてをとゞし十一月火にあひし後造れりし家を又失ひければ今は家も箒までやけ残りたるぬりごめにしばしは住みなむと思へど千蔭が幼き心にいかにわびしと思ひなむと心一つを定めかねて

かかりけるをりにつけても春の野のやけ野のきゞす身をばおもはず

七十二になりけるとしの七月かたじけなき仰せごとにて祿賜はりねぎごとのまゝに仕へをしぞきければかしこまりに堪へずしてよみ侍りける

○女車　女房の乗る牛車。
○大とこ　大德。
○うつせみのことぐさ　現在の仕事。
○あえざらむ　あえるは似る。

かたくなに老いはふれたる身のいかに聞えあげけむことぞやさしき
み惠みのかしこき蔭は塵ひぢのかずならぬまで洩らさざりけり
くまもおちぬ惠みにあきて徒らににふりぬる恥も忘れぬるかな

朝日圓如鏡

眞さか木のやあたの鏡萬代にかけてくもらぬ朝日子の影

得辨才智

一聲を里のあまたに待ちつけてききは迷はじ山ほとゝぎす

述志喩友

臣(をみ)のわざ盡すとならば劣れるを惠まむ事を忘るなよゆめ
野べに生ふるいさゝむら竹いさゝめも人の爲よき事ばかりせよ

をむな

身はかくて霜がれゆくか若草のつまとつまれし春も有りしを

うかれめ

河よどに船さしとめていづくともたのめぬ人をたのみてぞふる

韓使をよめる

波路へてけふぞをとめのまよびきのむかつ國人をがみすらしも

○やあたの鏡　八咫の鏡。

○いさゝめも　假初にも。

○うかれめ　遊女。

○むかつ國人　朝鮮人。

八十船のかぢほしあへぬ貢すと國ぶりしるきもののねぞする

幸逢太平代

うれしともいへばかしこし安國の大御寶のかずならぬかは

物名

からこと

冬されば寒き習ひといひながらことわり過ぎていこそねられね

かつらのみや

山こえてくる初鴈かつらのみや降るしぐれにも亂れざるらむ

よどかは

かく經つゝこむ後のよとかはるともかけしかごとを我は忘れじ

かみやがは

山たかみやかばけぶりも白雲にたちやまぎれむ峯の炭竈

かたの

いむべらがかたの弱きに太襷かけてぞ祈る御代の萬世

いかがさき

○大御寶のかず　國民の人數の中

○ねられね　ねられずの已然形。

○かつらのみや　桂の離宮。今京都市南西郊外桂川に沿ふ。豐臣秀吉の造營にかゝる。

○かみやがは　紙屋川。今京都市西郊を南流して鳥羽にて桂川に注ぐ。紙を漉き初めしと傳ふ。

○いむべ　齋部。潔齋して神事にあづかる職。

○いかがさき　河内國北河内郡。今枚方町の邊にて淀川に面す。又近江國石山の下勢多川に面したる所。何れも水勢の急湍なる所。

○つ 津の國。攝津。
○き 紀の國。紀伊。

いたゞきし雪の上にもふる雪を厭ふかおいがかさきてぞ行く

からさき

志賀の浦や花園近きところからさきて散るかとみゆる白波

よぶこどり

なつかしくさゆりはさけど草かると野べにかよふことりてだに見ず

國名十

あはれあきの草につゆおき月いでばゆきてあはましまちもするがに

（阿波　安藝　攝津　讚岐　紀伊　出羽　壹岐　安房　志摩　駿河）

草名十

あさましやあふ日もしらにこもりゐてうとしさびしと泣きやあかさむ

（麻　葵　蘭　蔦　藺　獨活　羊蹄　菱　大葱　[illegible]）

木名十

くりかへし書きつくすとももしひとの見やとがむべきえやはしのばむ

（栗　柏　[illegible]　楠　桃　檜　栂　郁　榎　櫨）

人の六十の賀に寄竹祝を題にてむそぢのがといふことを句のかみにすゑてよめる

むらだてるそのふの竹にちぎりてそのどかに千よのかずは數へむ

なつのふね　折句

なびくまでつゆこそ結べ野べの風ふきな亂しそねしろ高かや

八月十五夜によめる　せござうか

武藏野のはてなきものは心なりけり此のまゝに幾夜あかさば月にあくべき
常世より月いかばかり澄みまさればか秋といへば大御國へと來なく鴈がね
ねにたてて機おる蟲は月になけども片絲のよるとしもはた思はざりけり
大かたのかぞへもあへぬ秋のあはれをおしこめて曇らぬ月のものとなしけり
秋のよの月のかつらの照りそはるより山々の木の葉の錦おり初むらむ
里も野もひとしく秋の月は照れども見る人の心のあるとなきぞ異なる
すむ月にあさぢ踏み分け人やとふらむ鳴きたちし松むしの音の今ぞと絕ゆる
をしとおもふ夜をいたづらに秋の萩原おく露を月にまかせてぬるか萩原
角太河秋のすがらを船させどもさえわたる月のこほりは棹にさはらず
何事のうきふし知らぬ身も老いぬればあはれてふ淚くもらすあきのよの月

○常世　極めて絕遠の地。古來わが國人の想像上の國。
○片絲の　枕詞。採り合はせざる絲なるよりよるに冠する。

長歌

八月十五夜月を見てよめるうた竝短歌

あもりつく　富士の高嶺に　たゝむかふ　武藏の國は　大君の　遠のみかどと　大殿を　高知りまして　天の下　まをし給へば　をとめども　をとめさ

○あもりつく　枕詞。天上より降り著きたる山といふ意。かぐ山にも冠する。
○をとめさびす　少女らしくなる

びすと　手にまける　玉河の水　よろづ世に　絶ゆる事なく　秩父ねの　左百津いはむら　動きなき　國のほ見えて　野を廣み　此の月頃ぞ　ひきのほる　たつのみうまも　この野らゆ　引くといはずや　江を廣み　日なみのみけに　供ふべき　狹はた廣はた　この江らに　いさりもつきじ　春さればを岫をゝりに　さく花を　見つゝぞしのぶ　秋されば　限なき空に　照る月を　めでてぞ思ふ　昔より　きかすぞありし　谷具久（たにぐく）の　さわたるきはみ潮なわの　とゞまる限り　かくばかり　まつろひなびく　御代のためしは

反　歌

かもめすむ江をひろみかも照る月の秋の夜わたる影ののどけさ

眞萩さく野をひろみかも秋の夜はくだちゆけども月はかくれず

火にあひて後おかやけよりこがねたまはりて家をつくりてよめるうた

八百萬　御神々の　まな弟に　あれませしより　八隅しゝ　わが大君の御代久に　たゝへ言して　幣まつり　みかのへ高く　みかのはら　みたし竝べて　御心を　なごし給へば　たゝはしき　事はあらじと　たのめれど　大海原に　風のむた　立つ白波の　常もなき　事の如くに　いちはやき　神御心か　昔より　人の寶の　數々の　灰と成りしぞ　限りなき　何か恨みむ

○日なみのみけ　毎日の御食。
○狹はた廣はた　大小の魚類。
○谷具久　ひきがへるの異名。
○みかのへ　みかは酒を醸すに用ゐる大なるかめ。へは上。
○みかのはらみたし　みかの腹へ酒を滿たし。

塵ひぢの　數にもあらぬ　身にしあれば　とまれかくまれと　慰めど　慰めかねつ　かた鹽の　辛くも有るか　劍だち　三とせがほどに　玉くしげ　二たびさへに　さゝがにの　家を離れて　せむすべの　たどきをしらに　立ちのぼる　おきその霧を　み空ゆも　見はるかしけむ　あかねさす　朝日のみかげ　隈もおちず　惠みたまへば　更にまた　土ふみならし　柱たて　家つくりせる　事のかしこさ

青木美行が越の道のくちへゆくを送るうた竝短歌

春されば　こぬれ花さき　秋されば　もみぢ葉匂ふ　足引の　山路の土もみなつきの　照る日にさけて　時鳥　聲鳴きからし　岩くゞる　水のおとさへ　ともしくて　馬の毛色も　變るらむ　海邊を行きて　浦風に　あせほさましを　潮干れば　眞砂ふきたて　汐滿てば　こつみより來て　足なづむひなの長路を　こゝにして　思ふももとな　私の　旅にしあらば　いましばし　暑さすぐせと　いひてまし　しかはあれども　越にしも　いますちゝの實　はゝそ葉の　老木の陰の　眞心に　つゝみなかれと　道守る　くなどの神に　幣まつり　いはひべすゑて　東路の　驛々と　長きけに　待つらむものぞ　よし行きて　いつはた山の　岩こ菅　ねもころ〳〵に　慰めて　千年

○劍たち　枕詞。みに冠す。
○さゝがにの　さゝがには蜘蛛の異名。いと、い等に冠す。
○たどき　たづき、方便。
○こぬれ　こずゑ。このうれ。
○くなどの神　道祖神。
○いはひべ　古、神酒を盛る陶器の壺。
○長きけに　長く日を經るにいふ
○いつはた山　五幡山。越前國海岸近く。往古の官道に當る。萬葉にはいつはた坂とよむ。
○岩こ菅　岩間に生ふる菅。ねもにつゞく。

○たけふのこふ　武生の國府。越前國武生。
○益人　人民。人々。
○やもひとふ　病といふ。
○ゆつ岩村　五百津岩群。數多き岩の群。
○かふち　河内。川の行きめぐる處。
○たなつもの　稻、穀類。
○年のは　年毎、毎年。

いませと　色かへぬ　たけふのこふに　祝ひおき　又こむ年の　此の頃は　歸り來まさね　あがせよしゆき

反歌

必ずと歸りこむ日を契らずばいつはた山のいつとか待たむ

伊豆國熱海にて詠める歌竝短歌

二神の　國作らしし　その初め　益人の身に　やもひとふ　事あらせじと　神はかり　はかり給ひて　たゝなはる　ゆつ岩村を　ふみさくみ　下つ岩ねゆ　出づる湯を　ま藥としも　定めけむ　みゆは國々　さはなれど　伊豆の高嶺の　影ともの　土肥のかふちに　出づる湯は　こゝぞとしるく　岩間より　煙りたちつゝ　日に三たび　夜の間に三たび　沸きかへり　出づれば伊豆と　名をとめて　來ると來る人　こと〴〵に　癒えぬやもひも　なかりけり　餘れるみゆの　流れいる　海はあたみと　名に負ひて　あまのつり船　こぎ竝べ　狹はた廣はた　さち有りと　にぎはふ見つゝ　里みれば　八束たり穗の　たなつもの　刈りてほしたり　年のはの　御年豐かに　安國の　大御國ぶり　いちじろく　大御寶は　樂しかるかも

反歌

神の代の昔よりしも在りかよふたぎつ走りゆの音のさやけさ
いづの海のかつをつり船さちをおほみゆくら〳〵に漕ぎかへるみゆ

享和元年十一月二十七日寫畢

橘　千　蔭

東　歌　歌の部　終

賀茂翁家集

賀茂眞淵

○いなのめ　枕詞。明くにかけていふ。

○朝日子　朝日。

○縣居の大人　眞淵翁。

○心おそき　愚か。

賀茂翁家集乃序

いその上ふりにし世のことは、くもり夜のたどきもしられざりしを、いなのめのあけゆく如くなれるは、わづかに百とせあまりになむ有りける。しかはあれど猶もののけぢめおぼつかなかりしを、朝日子のとよさかのぼりて、八十の隈路の隈もおちず、明らかにしも成りにたるは、吾が縣居の大人を初めとすべし。その中にも、ならの葉の名におふ宮の古言や〻辨へしらる〻ことになりても、其の心を得、その言のはを拾ひて、歌にも文にもまねびもちゐることはあらざりしを、わがうし、ふることをやがて我が物になして、よきをとりあしきをすてて、歌にも文にも作られしより、千歳の昔のことぐさを、今の世にまねび得るたぐひもいできにけり。千陰いと若かりしより、うしに隨ひて、常のみありさま、のたまへりしことを、したしく見もし聞きもしつるに、うしは今の世の人とはことにして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそきさまに思はれしかど、たまさかにいひいで給へることに、

○によび　うめく、吟ず。
○三つのきざみ　三段。
○たよわき　かよわき。たは發語
○あるよりもあをし　出藍の學才師にまさること。

しきしまの大和心をあらはし、一言としてみやびならざる事なかりき。筆とりてもの書き給ふを見るに、五百とせも經にけむ筆のあとの如くなむ有りける。こはあまたとし、よるひるとなく古ことをのみ心にしめて、いへるより調度にいたるまで、いにしへによりて、いさゝめにも後の世のことを耳にふれ、心にとめ給はざりしかば、おのづからいにしへ人のこゝろに成りもてゆきて、其の心よりいひ出でもし、物かきもし給ひしによりてこそ、しか有りけるならめ。かく古につとめ給ひし中にも、歌をばことに心高くもてものせられたれば、歌ひとつよみ出で給へるにも、深くかうがへ、あまたたびあぢはへて、によび出でられしなり。うたのさまは、初と中ごろと末と、三つのきざみありき。はじめのほどは、物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまに通ひて、はなやぎたよわきさまなりしを、中頃よりみづからの一つの姿と成りて、みやびにしてしらべ高く、しかも雄々しきすぢをよみいだされ、齢の末にいたりては、いたくおもひあがりて、まうけずかざらず、誰も心の及びがたきふしをのみ作られき。其のはじめのほどなるも、あるよりもあをしと

か、すくねよりも立ちまさりてご聞えし。をりにふれては、古事記(ふることぶみ)のいとあがれる世のさまなる、又いにしへののりとごとになぞらへたる、あるは中つ世のさいばらのうたひ物をまねびたる、あるは物がたりぶみによりたるなどは、其の世々の人のいひいだせるに異なる事なくなむ有りける。さるを一とせ火のわざはひにあひて多くうせぬるこそ悲しむべき事の限りなりけれ。ここに平の春海(たひらのはるみ)のをぢわらはより大人(うし)にしたがへりしによりて、うしのみまかられし後、家の集ども將(はた)くさぐ\/のちりぼへるふみらを、このをぢが家にをさめおけるをかきつめて、板にゑりなむとせしに、障らふ事有りて、年月經(としつきへ)にけるを、更に思ひおこして、歌にふみに、くさぐ\/のとひ答へをさへにとりとゝのへて、十卷(とまき)とはなしぬ。うしの遠つおやよりして、現身(うつせみ)の世にまししほどの事は、江戸の南荏原(えはら)の郡品川の東海寺なる少林院のおくつきのかたはらの石碑(いしぶみ)にしるしたれば、こゝには省けり。眞淵(まぶち)といへるみ名は、敷智(ふち)の郡の名より思ひよりてつき給へりとぞ。あがたるとは、庭を田るのさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、自ら家の名におほせられたるな

○さいばら　雅樂の一種。もと俚謠であつたが、唐樂の盛んなるに至つて、譜を定めて雅樂に合はせることになつた。呂律の二種に區別せられてある。呂の安名尊、律の我駒の如きもの。

○ちりぼへる　散り亂れる。

○かきつめて　書き集めて。

○敷智の郡　濱名湖の東方今濱名郡に併す。

りけり。今よりをち、古の學び世にひろごりなば、よゝ此のうしを尊み、かつこの書をたゝへなむものぞとて、其のことわりをのぶるになむありける。

享和元年十月二十日　橘　千蔭

○今よりをち　今後。

（一）かぐつち　火の神。

賀茂翁家集のおほよそ

一此の翁の歌、はやき時にかきつめおかれたるがありしは、まだしき程のわざなりとて、後にみづからやかれにけり。其の中頃よりこなたのは、更にしるしおかれたるを、翁なくなり給ひて後、其の家かぐつちのあらびにあへりし時にうせにければ、今はつたはらずなむ。こゝに今書きつどへたるは、翁にもの學びたる人の、これかれしるしおけると、又あひしれりける人の家に、かず〳〵ちり殘れるをもとめ得たるなり。さるはもれたるも多かるべし。又このかきつめたる中には、かのみづからやかれにけむ歌もありぬべけれど、今はた選みすつべきならねば、得るにまかせて載せつ。

一今かきつめたるには、はやき時の歌を後にのせ、又後なるがまへにいでたるもありぬべし。さるはちり〴〵なるをひろひつるが、くはしく序（ついで）のしりがたければ、題の序にのみしたがへり。

一おなじ歌にて、かれとこれと詞のことなるあるはうたがはしきを、みだりに

さだむべきならねば、一本とてかたへにしるせり。

一長歌は、おほくは眞名もてかかれたるあり。されど今は皆平假名にあらためつ。眞名は後の人のよみあやまるべきものなればなり。さて題を眞名にかかれたるをばあらためず。

一文もかきつめ置かれたるが失せつるを、今は得るにまかせたれば、もれたるも多かりなむ。さて文にはやき時つくられしと、後にしるされしとあれば、その論じいはれたることゝ、かれとこれとあひそむけるたぐひもあり。見む人うたがふことなかれ。

一祝詞碑文のたぐひは、眞名にしるされたれど、みむ人のよみやすからむために、皆平假名に改めたり。

一書札はいとおほかりつらむを、今は往きかひせし人も多くうせにしかば、もとむべきよしなし。さればわづかにのこれるをあげつるなり。これはかりそめのわざにて、こゝろもせで筆にまかせられしものなめれば、ことさらに傳ふべきわざならねど、猶すてがたくてなむ。

○一本とてかたへにしるせり
傍註イ本は頭註に收む。

一やんごとなきおほせごとをうけたまはり、あるは人のうたがはしき事ども問へるふしなどに、考へてこたへられたる類をば、對問といひ、いさゝかづゝかうがへおかれたるもののはしぐ\なるをば、雜考とてあげたり。すべて十巻、名づけて賀茂翁の家集となむいふ。

寛政三とせのしもつき

平　春　海　記

賀茂翁家集 巻之一

春歌

春の始の歌

をつくばもとほつ足尾も霞むなり嶺こし山こし春や來ぬらむ

のどかなる春は來にけり玉くしげふたらの山のあくる光に

ことに今朝めづらしきかな春の來る方にむかふる春と思へば

年月のくれぬをなにか惜しみけむ春にしなれば春ぞたのしき

年たてばのべのあそびのゆかしきをけふ來む友に先づやちぎらむ

梅が枝の花のゑまひを朝ぼらけ年の始めのさかえにぞ見る

世の人の花鳥にしもならひせば昔にかへるときもあらまし

元日に春たちけるに

武藏野を霞みそめたる今朝みれば昨日ぞ去年の限りなりける

今日しこそ睦月も春も立ちにけれあめにかなへる御世のしるしに

年のはじめによめる　春は去年はやく立ちぬ

○をつくは　筑波山の男峯。
○足尾　あしを山、筑波山の北につゞく、今の足尾、加波、佛頂等の總稱。

○花のゑまひ　花の咲くこと。

○かひがね　甲斐が嶺。

○日高見の國　陸奥の一部の古稱

春はとく來ぬとはいへど大君の年たちてこそのどかなりけれ

春たちける日　去年唐人のみつぎ船つきたりといふ

東路(あづまぢ)に春立ちにけりからふねのつしまの波ものどけかるらし

春のはじめに　大御日嗣しろしめしゝあくる年の春なり

あたらしき御世の始に年たちて影のどかなる春日なるかも

ふるさとへ文のはしに

みよし野のかりのすみかに春たちぬいつ故鄕(ふるさと)へわれもゆかまし

春たちける日遠江なる人々をおもひて

越えゆかばわれことなしとかひがねのあなたにつげよ春の初風

正月三日陸奥の殿の姫君歌をとのたまふによみてまゐらせける

三冬つき春立ちけらし久方の日高見(ひたかみ)の國に霞たなびく

正月十四日に春の立ちける日よめる

東路(あづまぢ)にありてふ關のなこそともとゞめぬ春のなどおくれけむ

家に歌よみけるに春日望山といふ事を

見わたせば天の香具山(かぐやま)うねび山あらそひたてる春霞かな

其のむしろに名所若菜を

春日野の雪間の若菜つむ時はみどりの袖もよしぞありける

朝霞

山高みいづる日影をまちとりて四方(よも)ににほへる朝がすみかな

霞を

紫のめもはるぐ\といづる日に霞いろこき武藏野の原

海邊早春

みちのくのちかの鹽がま春來れば煙よりこそかすみそめけれ

春水

春風に氷ながるゝみぎはには水のこゝろのゆくも見えけり

天中川

すはの海や冰とくらし遠つあふみ天の中川みぎはまされり

春風春水一時來

つくば山しづくのつらゝ今日とけて枯生(かれふ)のすゝき春風ぞふく

春色浮水

こほりゐし志賀の浦波たちかへり白ゆふ花に春は來にけり

うぐひすを

○ちかの鹽がま　鹽釜は近浦にあれはいふ。

○天中川　天龍川(詞人のことば)

うちわたす竹田の原の雪のうちに鶯なきぬ春のはつこゑ

春鶯呼客といふことを

花のもとにさそはれ來てぞしられける人をはからぬ鶯の音を

正月家に歌よみけるに春神祇を

大王(おほぎみ)の園のまつりにとる弓のはる日たのしき神あそびかな

そのむしろに贈答の歌よまむとて縣召(あがためし)の比(ころ)人にといふ事を

高きにもうつるためしをよそに見て谷の古巣(ふるす)の鶯ぞなく

返し　枝直

日の光いたらぬ谷もあらなくになに鶯のいでがてにする

蹈歌(たうか)の夜人にといふ事を　枝直

來ぬ人をはしのつめにもまちて見む霰ばしりの夜は更けぬとも

返し

あやなしや竹川うたふ歌垣に君もこもらば手もとらましを

賭弓(のりゆみ)

わしといひ鷹とわかれてわたるかな今日のいく羽の雲の上人

のこりの雪

○うちわたす竹田　一本「ふる里のみかきがはら」

○縣召　縣召除目、又春の除目、又外官の除目。諸國の國司を任ずる儀。

○枝直　橘諸兄の遠孫、千蔭の父。眞淵と善し。家集東歌は本集に收めた。

○蹈歌　足を踏みならしてうたひ舞ふこと。古く歲首に行はれたる舞踊の一種。

○歌垣　古、男女相集まりて歌をうたひかはす遊び。

めづらしと見初めしほどになりにけり遠山のまにのこる白雪

かけまくもかしこき下つけの國ふたら山にいはれます大神のむかし遠つあふみのくに曳馬の城をしきましし御時御狩のをり〳〵竹山が家の梅こそおもしろけれとて其の庭に御馬よせさせ給ひ薫りさかえたる枝に御鷹をすゑおかせたまひて御酒きこしをしめでましゝを今は百よりおほくの年を經ぬれどその梅のみづ枝さしつぎて春毎ににほひをまし此の家もたぐひひろくさかゆることをおのれしも母とじのゆかりありてかたじけなく御ゆゑよしをつたへ承りよろこぼひてふるきしらべをうたふ

むかし君み袖ふれけむ梅がえの今もかをるかあはれその花

庭落梅

とふ人の笛もきこえて垣の内に梅ちる風のおもしろきかな

水郷柳

六田川風ものどかに行く水のみどりによどむ柳かげかな

柳ある家に人來れるかたを

春風のあわをによれる柳もてとひ來る人をとめむとぞ思ふ

む月の末津輕爲春のもとにはじめて行きけるに酒さかなとりまかなひ物

○曳馬の城　今濱松の引馬城。

○よろこぼひて　喜びて。

○六田川　大和國吉野川。六田の渡あればいふ。

○あわを　紐の結び方。あはぢむすび。

語しけるついでに冬がれの垣ねもけふこそ初花のかをり覺ゆれなど歌よみていだしけるに

初花のをりから君をとひつるは我こそ春にあへるなりけれ

早蕨

いざけふはをぎのやけ原かき分けて手折りても來む春の早蕨

題しらず

すがのねの長き春日になりぬればこゝろずさみぞ暇なかりける

家に歌よみけるに二月餘寒を

二月やまだ雪さゆるいこま山花の林はそらめのみして

同じ題を在滿が家にて

きさらぎの空さえかへる山風は冬にまされるこゝちこそすれ

また森鶯を

春ふかき老曾のもりの鶯は人もすさめぬ音をや鳴くらむ

二月梅

色も香もとりならべたる梅の花咲くこそ春のもなかなりけれ

きさらぎの末つかた櫻の花もやゝ盛りなる頃伊久米の君のおはしたるに

○いこま山　生駒山。大阪市と奈良市との中間に位す。

○老曾のもり　近江國の歌枕。

○あがた　田舍。

○ひぢりこ　こひぢ。どろ。

○牀をなみ　牀無き故に。

庭をはたに作れりしがすゞなの花のさかりに咲きたりければよみていだしける

春さればすゞな花咲くあがた見に君來まさむとおもひかけきや

二月晦日(つごもり)延享三年本所といふ所に火おこりて家ども多くやけにけりその夕つかた風もあらくそらのけしきあかくちりだちてこゝにしも火あるかと覺えたるをその夜亥の初めばかり十町ばかりみなみよりまた火いできて程なくおのが家もやけぬむかしよりこゝろつくして考へつゝ物おほく書きそへたる書(ふみ)どものあればこれをばくらにもいれじいかで便(たよ)りよからむ所へ渡しやりてむ今はとてのがれいでなむ時從者(ずさ)の手ごとにもたせむとかまへて先づその事をとりしたゝむる程に調度(てうど)どもは心にもいれずたゞくらの戸ぐちにひぢりこぬりまかなはせて立ちいでぬほどなくみな煙にこもりにければ源の簡(えらぶ)がもとへ行きて夜をあかしぬなにばかりの家ならねばなごりもさしもあらねどまた草の庵結ばむまでは人によりてあらむもくるしかるべし

春の野のやけ野の雲雀(ひばり)牀をなみ煙のよそにまよひてぞなく

おのがあたりより火いよゝさかりになりて明日のひるまでもつぎ〳〵や

け行きにけりいく千よろづの家々が煙となりけむ人なども死にけりとい
ふなりまたことしは所々に火あるはぬすびとのわざも多しとてからめて
からがへらるなどもいふ

田にもあらぬ千町の家をやきすててつくれる罪の程ぞ知られぬ

春の山ぶみ

山越えて霞む梢を見わたせば繪によく似たるものにぞありける

春三河のぞうをおくるといふ事を

宮道山（みやぢやま）春行く袖の深みどり秋はあけにも染めざらめやは

遲日

菅の根の長見の濱の春の日にむれたつたづのゆたに見えけり

桃

畯のをが園生の桃の花ざかりやぶしもわかぬ春の色かな

よし野の山の花ざかりを見やりて

世の中によし野の山の花ばかり聞きしにまさるものはありけり

花の歌とて

咲き散るはかはらぬ花の春をへてあはれと思ふことぞ添ひゆく

○宮道山　宮路山。三河國寶飯郡の北西。

○やぶしもわかぬ　藪に至るまで一般に。「藪し分かぬ春こや汝も花の咲く其の名も知らぬ山の下草」（風雅四、春下）

○こも　網。

○谷中の柿本社　谷中淨光寺にある。
○ことのはの色香にあける神　歌聖といはれし人丸を祀つた神。
○みづがき　瑞垣。

雲とのみまがふ櫻の盛りには心も空になりにけるかな
山櫻咲くと見しより吉野川ながるゝ花もかつぞたえせぬ
大路ゆく人の袂も櫻色に染むるぞ花のさかりなりける
うら〳〵とのどけき春の心よりにほひでたる山ざくら花

花のもとに弓いるかた

さくら花花見がてらに弓いればとものひゞきに花ぞちりける

關路花

山ふかみおもひのほかに花を見て心ぞとまるあしがらの關

關花を人にかはりて

吹く風をなこその關の山櫻心づからぞ散らば散らまし

不破關花といふことを

さくら咲くふはの山路は關守のすまずなりても人をとめけり

花下送日といふことを

山櫻ちれば咲きつぐ陰とめて大かた春は花にくらせり

谷中の柿本社にて歌よみけるに社頭花といふことを

ことのはの色香にあける神ながら猶みづがきの花やめづらむ

○ちりのほかなる花　世俗を離れた所に咲く花。

○引馬の大城　今、濱松の引馬坂
○ふたらの大神　二荒権現、徳川家康。

上野の花ざかりに

かげろふのもゆる春日の山櫻あるかなきかの風にかをれり

長門守の東のひえの花見に福聚院に遊び給ひける日題をさぐりて風靜花芳といふことを　よべ雨ふりて今朝はれたり

よるの雨の露だにちらず櫻花にほふばかりのけふの春風

あるひとにさそはれてやまざとにいたれりけるに柴の戸の花ざかりいと心のとまりて覺えければ

おもひきやうき世の人にさそはれてちりのほかなる花を見むとは

伊久米の君のもとより櫻の枝にそへてよしや花ちるともいかでをしむべき色香をさそへ庭の春風とある返し

君がけふをしへしものを今よりは花さそふとも風はうらみじ

山里へ花見にまかりたるこゝろを人々とともに

山里は岩ほのなかと聞きつるを花にこもれる所なりけり

遠つあふみの引馬の大城はむかしふたらの大神のふとしきましし城なりそのかたへにさかありひくま野へのぼるところなりそのさかのうへにいまはさかもとのぬしすみ給ふ垣のうちにむかしの大神のめで給へるざく

らの今もひこばえさはにしみさびてあるを今年事のついでにとひけるに

歌よめとありければよみける

あか駒を引馬の坂のもと櫻もとの心をわすれてぞ咲く

わらはあそびに竹の葉もてつくれる船に櫻の花をつみてながしたるを見

てたはぶれに人々とともに

すくな神つくれる舟に木の花の咲耶姫こそのりていづらめ

ふる鄕に櫻のちるを見るといふこゝろを

みよしのをわが見に來れば落ち瀧つ瀧のみやこに花ちりみだる

志賀山越

花をふくあらしの空は雪ながら袂ぞかをる志賀の山越

春山の旅のこゝろを

しなのぢのおきその山の山ざくら又も來て見むものならなくに

三月枝直が家にて歌よみけるに羇中花を

霞立つながき春日にながめして花にも物をおもふたびかな

さくらの花のちりたるを

菅の根の永き春日に袖たれて見むとおもひし花ちりにけり

○すくな神　少名彥神。大國主命を輔けて國土經營に當つた神。

○おきその山　木曾山の總稱。おは添辭。

上野にて

ちる花の都のふじやいかならむ東のひえは雪とこそふれ

すみれを

故郷の野べ見にくればむかしわが妹とすみれの花咲きにけり

雲雀

霞たつ春野の雲雀なにしかも思ひあがりてねをば鳴くらむ

國原

雲雀あがる春の朝けに見わたせばをちの國原霞たなびく

苗代

苗代の水口まつりしめはへて賤が業こそむかしおぼゆれ

河山吹を人にかはりて

山吹は下ゆく水も花なるを心してさせ春のかはふね

山吹咲きたり見る人あり

故郷は春のくれこそあはれなれ妹に似るてふ山ぶきの花

春のくれに春道がなり所をとひて唐棣花を

この園はまたも來て見む宮人の袂おぼえてはねず咲くころ

○東のひえ　東京上野公園の東叡山。

○春道　村田春道。春海の父。
○なり所　別莊。
○はねず　唐棣。にはざくらであらう。

残春

花のみな散りての後は春さへにのこる日なくも思ほゆるかな

春のはて

ひたちには田をこそつくれしめはへてけふ行く春を誰か止むる

夏歌

山家首夏

庵ながら昨日(きのふ)の春の花も見つさてこそ聞かめ山ほとゝぎす

山ざとは夏のはじめぞたゞならぬ花の人めもすぎぬと思へば

思餘花といふ事を

いかならむ熊野の奥を尋ねてか夏にものこる花にあはまし

おそざくらを

おくれては物すさまじく見ゆる世に今も櫻のめづらしきかな

あしがらの關の山路をこえ來れば夏ぞ櫻は盛りなりける

新樹

夏の來て昔にかへる玉がしは取るとも盡きじにひかゞみ葉は

○しめはへてけふ行春を　一本に「行く春をけふしめはへて」

枝直が家にて庭樹結葉といふことを

陰ふかき青葉のさくらわか楓夏によりてもあかぬ庭かな

春道がなり所に友だちかいつらねいきて

苦丹咲くそのふの木々の若みどり夏このましき宿にもあるかな

あかなくに明日もさね來むにほどりのかつしか小田の苗もみがてら

賀茂祭

年ごとにけふの葵をかけまくもかたじけなしや賀茂の氏人

かみゐにさなへ植うるかたかけるを

いそぎてぞ早苗はうゑむあし引の山時鳥なきにしものを

屛風に雨ふるに人多く早苗とる所

大御田のみなわもひぢもかきたれてとるや早苗は我が君のため

さみだれふるに山下の田うううるかた

さなへ草植うる時とてさみだれの空も山田におりたちにけり

採早苗

きのふけふ時來にけりと時鳥とばたのおもに早苗とるなり

郭公まつこゝろを

〇苦丹　植物の名。苦膽とも書く。牡丹又は龍膽又山梔と諸說あり。

〇とばた　鳥羽田。山城。

初こゑをみやこにいそげ郭公山がつならぬ人こそはまて

題しらず

なかざらむものとはなしに時鳥つらき時こそ猶またれけれ

郭公の歌あまたよみける中に

たちばなのかをれる宿の夕ぐれに二こゑ鳴きてゆくほとゝぎす

市郭公

しのび音をあらぬ名のりにまがへとや市路に鳴きて行くほとゝぎす

故郷郭公

橘の鳥の宮居のあととめてなくは昔のほとゝぎすかも

夏の比人々とともにふりにし世をしのぶ歌よみけるにほとゝぎすを

君まししむかしの花のふぢ原をほとゝぎすこそ今もとひけれ

京にて物ならひし比したしかりける人のいまはいせの國にあるがもとに

文のはしに

鈴鹿川はやく聞きつるほとゝぎすいせまで今もおもひやるかな

山ざとへほとゝぎす聞きにまかりて

うの花を手ごとにをりてかへらまし山郭公聞きししるしに

五月家に歌よみけるに船の中なる人郭公きくかたを人々とともに

郭公おのがさ月の山川をこゝろにのりてもさしくだすかな

名所郭公

つくば山花たちばなの咲きしより鳴くこゝろしげき郭公かな

郭公頻

このさとはさらに慕ひもあへぬまで過ぐればば來鳴く郭公かな

家に歌よみけるに山家五月雨といふことを

五月雨はをやむもわかず谷の庵に雲よりおつる眞木の下露

そのむしろに夏鳥を

みじか夜のはかなさつげて鳴くそらのをりあはれなる朝鳥かな

又夏祝を

ふる雨に早苗をうゑて國の名のみづほの秋をまつぞ樂しき

五月宴菅原氏家時作歌

橘のもとに道ふみ行きかへりもとつひとにも逢ひにけるかも

足引のいはねすがはらいくつ夏しげり行くらむ岩根すが原

夏蟲

○そこはかとなき　何處ともわからぬ。

○ふるさとの歌　「御垣守衞士の焚く火の夜はもえ晝は消えつゝ物をこそ思へ」（詞花八、戀上）を本歌としたもの。

○にひた山　新田山。上野國桐生市の南。太田町の北。

庭のおもにそこはかとなき蟲のねもをりあはれなる夏の夕ぐれ

故郷螢

ふるさとのみかきがはらの夏草によるはもえつゝとぶ螢かな

紀伊宰相の君のもとめたまふによみてまゐらせける三首の歌

樹陰納涼

すゞしさの大路の柳陰ごとに馬もくるまも憩はぬぞなき

里蚊遣火

ゆふさればかやり火たかぬ宿もなしこの里人は月や見ざらむ

晩夏

行く雲もほたるの影もかろげなり來む秋ちかき夕風のそら

夕立をよめる

にひた山うき雲さわぐ夕だちにとねの川水うはにごりせり

おほひえやをひえの雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原

夏風を

吹く風のこゝろは常にあらめども夏こそ人にしたしまれけれ

みな月初めの六日にかつしかの西にある秋葉の社にて歌よまむとてその

別當のもとめけるに友だちかいつらねてふねよりぞ行く對陰避暑といふ事をかねてよみていだしける

風やどる夕の森の下すゞみ秋の葉そよぐこゝちこそすれ

水邊納涼

立ちよれば山陰すゞし夏み川夏てふことやなみのぬれぎぬ

高殿にすゞめるかた

たかきやは涼しかりけりあらがねの土てふものし夏にやあるらむ

家に歌よみけるに晩夏といふ事を

空高く螢をさそふ夕風の身にしむまでになれる夏かな

おなじむしろに大井川の夏を

大る川わか葉すゞしき山陰のみどりをわくる水のしらなみ

わがやどをしも

むぐらはふわがやどをしもたゝくなる水鷄(くひな)やよはのなさけ知るらむ

なつと秋との

よしの川みそぎにながす麻の葉や夏と秋との中におつらむ

みちのくの岩城の君の許にて物がたり聞えける時夜ふけぬべしまかでな

○あらがねの　土の枕詞。

むといふをこよひは六月つごもりなり秋のおそき年のみなづきばらへの
こゝろをよまむとてあるじもよみ給ふにおのれも筆をはしらしめて

くにつ罪はらふ心のすゞしきはおめに知られぬ秋にぞありける

夏ばらへするかたかける繪を

よろづ代とひがしも西もとなふなりはらへのこせる罪やなからむ

枝直が家にて六月祓を

天(あま)つ罪(つみ)はらふゆふべは雲ゐ吹く風もすゞしくなりにけるかな

おなじむしろに夏日といふことを

わたの原とよさかのぼる朝日子のみかげかしこき六月(みなづき)のそら

秋歌

山べの庵に秋の來たる心を

今朝はしもたけの林ぞそよぐなる世は秋風の立ちやしぬらむ

早秋

うきものとおもひもいれで秋風をうら珍らしみすぐすころかな

殘暑

○とよさかのぼる　豊榮のぼる。

宮城野や秋なほあつき木のもとの露なき草に風をまつかな

秋も猶あつきゆふべ人々とともにすみだ川の下つかたの大川てふあたり舟こぎわたりけるにいとすゞしかりければ

からろとる大河のべのすゞしさは初かりがねも聞くばかりなる

秋の歌とて

秋風はたちにけらしな更級やをばすて山のゆふ月の空

大伴(おほとも)のみつの浦なみ吹き寄せて松ばら越ゆるあきのゆふ風

源之眞おもきやまひおこたりて後つかへをかへしけるころ主のめぐみふかきことなどこまやかにいひおこせてさて七夕の歌ども見せけるをその歌返しやるとて傍に書きてつかはしける

天の川かいのしづくを身にうけて今宵やいかに涼しかるらむ

七月なぬかの夜

たなばたのあふ夜となれば世の中のひとの心もなまめきにけり

こよひまで今宵をまちてこよひあけば又の今宵をまたむとすらむ

七月七日家に人々來てまつりのかたするにおの〳〵よむ

たなばたの天ついもせのことをだにこちたく誰かいひつたへけむ

○からろ　唐櫓、上品なる櫓。「さよふけて空にからろの音すなり天の戸渡る雁にやあるらむ」(夫木十二)

○大伴のみつの浦　古昔難波の要港。今大阪市道頓堀の湊。

○こちたく　言痛く。やかましく。

○川をさ　川長。川守。

○さゝらえをとこ　月の異名。

○ふんづき　文月。陰暦七月の稱。ふみ月は穗含月（ほふゝみ月）の約ともいひ、又穗見月の轉ともいふ。

七日の夜の歌

天の原とほき川との夕波に今やこぐらむともしきをぶね

たなばたのあふ夜の秋の初風にをとこをみなの花も咲くらし

あまのがは見つゝしをれば白たへの吾が衣手に露ぞおきにける

七日の夜雨のふりければ

夕月夜空もあやなく降る雨にこぎなまどひそ天の川をさ

枝直の子生まれける比文月十三夜に人々集まりてよろこびいふに月のおもしろかりければ

この宿にさゝらえをとこ生先の光こもれる千代のはつ秋

わかの浦の蘆してつくれりとて人の御もとより賜はりたる扇に書きける

ふんづきばかり

紀の海はすゞしかりけりあしべより波うちはふる秋のはつ風

とほつあふみの佐益の中山のにしにつゞきて今はあはがだけとて高き山あり延喜の式に安波々神社とあるこれなりそのかたゑにかきたるにそのふもとに旅人ありそれがこゝろをよみつ時は秋のはじめつかたなり

東路は衣手さむし白雲のあはゝがたけの秋のはつ風

人の柿本社に奉るとてもとめけるに初秋風といふことを

風のおとのいく代雲ゐに聞えあけて高つの山に秋は來ぬらむ

秋風

松のひゞき荻のさやぎのさま／＼に聞えて絶えぬよはの秋風

荻

百草(もゝくさ)のおほかる中にわきてなどうたて吹くらむ荻の上風(うはかぜ)

萩漸盛

鹿もやゝ戀のさかりとなりぬらし野べのこ萩の色まさり行く

萩

をじかふす野べの秋風吹きそめてほころびにけり萩が花妻(はなづま)

萩に對ふといふこゝろを

萩が花かきねもたわに咲く時は野べも思はぬものにぞありける

旅人鹿の音聞くかたを

さをしかのつまどふよひの岡のべに眞萩かたしきひとりかもねむ

旅衣わがつまならぬ萩原にしかの音聞きてひとりかもねむ

月の歌とて

○高つの山　石見國美濃郡高角山、こゝに人丸の祠がある。

○萩が花妻　鹿に配して萩の花をいふ。

○いなみ野　播磨國加古川の南東平野。

○いぶきもがもな　一本「いぶきもがなや」息吹。

○永昌　長昌か。通稱釆女。眞淵に從ふ。

○さゝらなみ　波のよるを夜にかけた序。

遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむうらをむかし見しかな

すみの江のうらわにたちて月みればなにはの方にたづぞ鳴くなる

さゞなみのひらの大和田秋たけてよどめるよどに月ぞすみける

はりま路やゆふ霧はれて久方の月おし照れりいなみ野のはら

大船に小舟引きそへますかゞみすみだがはらに月を見るか

十五夜くもりけるに

天の原八重棚雲をふきわくるいぶきもがもな月のかげ見む

八月十六日永昌がなり所に人々集まりて屛風に川邊なる家に月見るにまらうどの來るかたあるを所につけたる繪なればこの心よまむとてともによみけるあるじの所に

さゝらなみよるしもかくて訪はるゝは月こそ宿のあるじなりけれ

まらう人のところに

清らなる秋の川べにすむやどの君こそ月のあるじなりけれ

山家月

秋のよの月清ければなほもあらず出でてこそ見れ杉たてる門

夕月

萩原や庭のゆふ露うつろひてくれあへぬ影は月にぞありける

枝直が家にて松間月といふことを

都にもまつの木のまの月見ればみやまの秋のこゝちこそすれ

水上月

たつしぎの影ばかりをやくまと見む野澤の水のふかきよの月

明石浦秋

明石がた有明の月をしたふまにあはれをそふる波のあさ霧

八月廣澤池眺望といふことを

都人見ぬ海山のおもかげも月にうかべるひろさはの池

月見ればみやこのうちも海山のありけるものをひろ澤の池

秋水郷

あしがちる難波(なには)の里の夕ぐれはいづくもおなじ秋風ぞふく

秋神祇

秋風の立田の使たちしより世はゆたかなる穗なみこそよれ

鴈を

見わたせばほのへきりあふさくら田へ鴈鳴きわたる秋のゆふぐれ

○くれあへぬ影は　一本「くれぬひかりは」

○廣澤池　京都の西嵯峨の北にあり。古來都人士秋每に月を賞する處。

○あしがちる　難波の枕詞。

○ほのへきりあふ　穗の上に霧が立つて居る。

田づらのいほりにて

露さむき門田(かどた)のをしね月照りて鴈なきわきたる秋のよな〳〵

九月十三夜縣居にて

秋の夜のほがら〳〵と天の原てる月影に鴈なきわたる

こほろぎの鳴くやあがたのわが宿に月かげ清しとふ人もがも

あがたゐのちふの露原かきわけて月見に來つる都人かも

こほろぎのまちよろこべる長月のきよき月夜は更けずもあらなむ

にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつゝをれば月かたぶきぬ

九月十三夜知陳が家に月見ける時洲濱に紙もて鶴のかたをつくり松の葉をしきてかひこを多くおきたりいはふ心をよめとすゝむれば

鶴の子のよを長月の影なれば見るかひもある宿の秋かな

新むろにて

眞木柱(まきばしら)ほめてつくれる高きやに千秋の月を見そめつるかな

野分せしあしたに

野分してあがたの宿はあれにけり月見に來よと誰につげまし

九月ばかり犬上衞が家にて初紅葉を

○をしね　小稻。をは接頭語。
○ちふ　茅生。
○にひしぼり　新たに造れる酒。
○くみつゝ　一本「のみつゝ」
○知陳　中村知陳、枝直の女壻。
○鶴の子　長壽を祝ひていふ語。
○犬上衞　國學者、眞淵の門人。

心とく來ても見しかな山しなの石田の森のもみぢそめしを

紅葉

よのつねの色ならめやはさがの山もみづる秋のいでましどころ

詠菊

あたら代のたひらの宮にめでそめて菊は千ぐさになりにけるかも

菊の花を折りて人のおこせたりければ

よはひをものぶべき君が宿の花かざすに老ぞまづかくれける

惜秋

おのづからもろき木の葉の秋なればくるゝを何にかこちだにせむ

秋のはて

さをしかのたち野の原に秋くれて今いく夜とかつまを戀ふらむ

冬歌

神無月の一日に衣ばこのふたをひらきて

かみなづき又も春としいふめれば櫻いろなる袖やかさねむ

伊久米の君のもとにて十月更衣を

○もみづる　紅葉する。

○よはひをも云々　菊をよはひ草ともいふ。

○又も春とし　一本「今しも春と」

○翁さび　おきなぶ。老人らしくなること。

○雲のゐる、一本「さがみなる」
○あふりの山　相模國大山の別稱あふり山（雨降山）。
○まづしぐれける　一本「はれくもりける」

かふれどもいとゞあやなき衣手にもみぢだにちれ翁さびせむ

かみな月の紅葉をよめる

かみな月かた山あらしのどかにて紅葉みるべき今日にもあるかも

ちゝの木のちゝぶの山の薄もみぢ薄きながらに散れる冬かな

十月ばかり人に山づとをおくるといふ事を茂樹が家にて人々とともに

冬立つやあらしの落す椎がもと山にも身こそやどしわびぬれ

十月ばかり山里にやどるといふことを

くれ行けばまがきに鹿ぞそよぐなるたゞかくながら秋やなきけむ

時雨をよめる

高鴨ははやくしぐれぞ降りにけるかづらき山のみねのうき雲

神無月たちにし日より雲のゐるあふりの山ぞまづしぐれける

時雨陰晴といふことを

かみな月今日もしぐれの晴れにけり曇りにけりといひて暮しつ

朝時雨

けふもまたかくて幾度しぐれまし峯の朝日に雲かゝるなり

かみな月軒端の露のおきいでて今日もしぐるといはぬ日ぞなき

寒蘆をよめる

つのくにの難波のあしの枯れぬればこと浦よりもさびしかりけり

寒草

かれにける草はなかく／＼やすげなり殘るをざゝの霜さやぐころ

世の中はゆふ霜さやぐおきな草枯れてもやすき時なかりけり

枯野

つくばねの綠ばかりをむさし野の草のはつかにのこす冬かな

寒樹

日をさへし大河のべのくぬぎはら冬は風だにたまらざりけり

冬がれに里のわらやのあらはれてむら鳥すだく梢さびしも

夜落葉

山風のふく夜の月におとはして曇るともなくちる木の葉かな

名所落葉

佐保過ぎてたがとる幣と亂るらむ奈良の手向の風のもみぢ葉

冬月

さよ中と夜はふけぬらし我が宿の庭に霜おきてさゆる月影

○霜さやぐ　霜の冱えかへる。
○おきな草　かはらいちご。又菊の異名。

湖上冬月

すはの海や雪げのそらの雲間より氷をてらす月のさやけさ

ふゞきせしいぶきおろしの冱えくれて月にしづまるよごのうら波

千鳥を

かまくらのよるの山おろし寒ければみなのせ川に千鳥なくなり

楫取魚彦がもとにつどひてその所の歌とて

夕さればうなかみがたの沖つかぜ雲居に吹きて千鳥なくなり

霰

ありま山うき立つ雲に風そひて霰たばしるいなみ野の原

雪のふりけるあした枝直のもとより人おこせたるに何ごとをもいはでかへりにけるは心もえず此の人は朝霜をゝかしきものにいひければ

朝ごとの霜をあはれといふ君はけふの雪をばいかゞ見るらむ

といひやりつれば例の朝いをおどろかしつるなりけりそれが返しに曉のほどこそをかしかりけれ今朝ふるものとやおぼすらむあさいして霜をだに見ぬ君はしもよるの雪をばいかでしるべきとあればまた

おもひねの夢にまさらぬ初雪をよはにふりぬと誰かいふらむ

○よごのうら　近江國琵琶湖の北方余吾湖。

○みなのせ川　水無瀬川、又稲瀬川。相模國長谷町を貫き由井ヶ濱に注ぐ。

○楫取魚彦　集號は茅生。眞淵の門人。歌集魚彦家は本集に收む。

○いなみ野　播磨國加古川南東の平野。

○朝い　朝寢。

またある日よべより雪のふりけるに枝直のこなたよりも消息せざるをにくむなるべし詞はなくて白雪のふりとふるともこゝろなき人をばまたじとはむともせじとある返し

しら雪のふりと降りなば心なき人もやとふと待ちにしものを

また枝直ふる雪のおもはむことをおもはずば人をもまたじ人もまたじを

返し

人や來む我やとはむと思ふまにわくる心は雪ぞしるらむ

また枝直とひとはず君がこゝろをいかにぞとゝへども雪は答へざりけり

返し

物をこそこたへずあらめふりはへて今朝はこゝろの雪とやは見ぬ

同じ日正房がもとよりあとをしもいとはぬ君が宿ならばとはましものを今朝のしら雪とあるにたはぶれてこたふ

むかしたれ雪には跡をいとひそめて君がかごとと今日なりにけむ

詠雪

はしたてのくらはし山に雲きらひ高市(たかち)國原雪ふりにけり

雪の朝遠き里を望むといふ心を

○はしたての　一本「ぬばたまの」
○雲きらひ　一本「雲合ひて」
○くらはし山　大和國多武峯の東にある。
○高市國原　大和國高市郡。

今朝見ればふもとの里はわかねども煙ぞ雪の上にたなびく

すゝきにかゝれる雪のをかしかりければ友のもとへ

おもひやれ枯生(かれふ)のすゝきうちなびき友まちがほの雪の垣ねを

ことしふせやをしめて竹などうゑけるにしはすばかり雪のふりければ

しめおきしまがきになびくくれ竹のよに珍らしく見ゆる雪かな

かくれ家に雪のふりたる心を

わが庵の庭には跡もなかりけり落葉がうへに降れるしら雪

題しらず

おもふ人こてふに似たる夕かな初雪なびくしののをずゝき

屏風に雪のふりたるに人々舟にのりて見るかた

花ならばこぎよせてこそたをらまし入江の松にかゝるしら雪

杜　雪

身のよそにいつまでか見む東路のおいそのもりに降れる白雪

閑居雪

冬ごもる庵のとぼそをまれにあけて竹にかゝれる雪を見るかな

山館見雪

○今朝見れば　一本「朝ぼらけ」
○雪の上に　一本「雪の山に」
○こてふ　來よといふ。
○身のよそに　我が身の上でないこと。
○冬ごもる　一本「冬ふかき」
○庵の　一本「柴の」

雪ふれば咲くや梅津の山里ににほはぬ花は人もとひこず

雪中遊興

野も山も冬はさびしと思ひけり雪に心のうかるゝものを

雪中眺望

雪はるゝあさけに見れば不二のねのふもとなりけり武藏野の原

雪のあした

初みゆきはれたる朝に見渡せば里のけぶりも珍らしきかな

おきいでて曉ふかく見し雪の今朝まで月にまがふ庭かな

冬遠情

立ちかへり今も見てしか遠つあふみ濱名の橋にふれる白雪

うちきらしみ雪降るなりよしの山入りにし人やいかにすむらむ

家に歌よみけるに冬眺望を

ふる雪のしらふの鷹を手にすゑて武藏野の原に出でにけるかな

おなじ時贈答の歌人々もよみけるに神樂の夜人にといふことを枝直宮人の弓といへばとうたふ夜もひかれぬ身こそしななかりけれ　返し

四方山のまもりなりてふ梓弓ひきみひかずみうらみやはする

○入りにし人や　壬生忠岑「み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ」(古今六、冬)

○しらふ　白斑。

遠江のくに磐田のやしろの神主菅原信幸が母の八十の賀の屏風の歌十二

月神樂する所

とのもりの白くたくなる大御火のよにおもしろき神あそびかも

新嘗會

たふときやすべらみことは神ながら神をまつらす今日のにひなべ

まだきにさける梅

大かたは春だに花のまたるゝを年の内にもにほふ梅かな

年のくれに友をとふ

年たたば春野のわかなまづ摘まむかねごとしにぞけふは來にける

年のくれに祓するかたを

もろともにつもり來にける天つ罪雪より先にまづやきゆらむ

歳暮雪

野も山もみゆきふれどもゆづる葉の春の設けはをりもまどはず

年のとく暮るゝ心をみつねが冬の長歌によりて

今朝よりはしぐるると見えし冬の日の傾くまゝに年ぞくれ行く

としのくれに

○かねごと　約束。つがふ言葉。

○春の設け　春の準備。

○水上は白き筋　水上は頭にとりなし白き筋とは白髮。

○呉竹のよ　竹の節と世と。

○まで來て　まゐり來て。

くれてゆく年のはや瀨の水上は白き筋こそ落ちまさりけれ

これはくしけづりければ白髮のまじりてけづられけるにおどろきてよめるなり

年ふりてもとの身ならぬ心には春もむかしの春をやはまつ

おどろけどかひなきものを今よりは月日もよまじ年もかぞへじ

春をまち年を惜しみていづかたにふるとしもなくよぞふけにける

しはすに閏ありけるとしのくれに

くはれる冬をもたゞに過し來ておろかなる身を今年こそ知れ

都のかたへにすまへど人なみ〳〵なる身にしもあらねば春をむかふる業とてなにごとをも設けずさるは門さしてなどもあらねばのどやかにのみもあらず木にもあらぬ呉竹のよの中には法師ばらといひけむもおぼえてわれだにいひしらずなむ人々のまで來てかたらへる歌を聞けばとり〳〵にをかしかれどももとよりおのが心をやるわざなれば人にならふべきにもあらずよしとてうらやむべきことわりもなしたゞ心やりに

年くれて松をもたてぬすみかにはおのづからなる春やむかへむ

○むすびそめける　一本「そむなる」
○秋てふ風　飽きと秋とをかけて戀人に厭はるゝこと。

戀歌

はじめてあへる

初尾花むすびそめける夕露に秋てふ風はふかずもあらなむ

あひおもふ

思はぬを思ひしほどにくらぶれば思ふを思ふことぞすくなき

わすらる

風のこゑむしの音をだに聞かじやはなどみし秋を忘れはてぬる

しらぬ人

おもひつゝぬればあやしなそれとだに知らぬ人をも夢に見てけり

舊戀

かれしその昔ばかりはしたはぬや我さへうとく今はなりけむ

逢戀

かりそめのたのめと人や思ふらむなきてわたりしみよし野の里

思高戀

わが戀は雲居に高きあし引の山のしづくを袖にかけつゝ

知身戀

これぞこのうき身しらるゝつまなるをつらしと人を思ひけるかな

つらき身にあるべきかはと思ひしる同じ心のいかで戀ふらむ

待空戀

残る夜も鳥より後にまちえたるならひなければなく／＼ぞぬる

寄瀧戀

いはばしる瀧つ山川とこなめに絶ゆることなく逢ふよしもがな

寄霞戀

はる來べき方こそなけれねぬるよの夢より霞む春のあけぼの

おきてわかれし

今はたゞ袖の氷となりにけりおきて別れしをふのした露

春のくれに人をおもふ

今もかもこじまがさきに匂ふらむ君に似るてふ山吹のはな

哀傷歌

卯月のはじめつかた茂子のせの身まかりつと聞きて花などおくりけるに

○つま　端緒。はじめ。

○とこなめ　常滑に。永く障りなく。

○をふ　生麻。

○茂子　姓は進藤。又筑波子ともいふ。土岐賴房に嫁す。縣門三才女の一人。筑波子家集は本書に收めた。

○美樹　姓は加藤。靜の舍と號す。眞淵の門人。

○藤衣　喪服。

○今きの岡　大和國吉野郡。今木の外山。諸墓あり。今來、忌をかく。

○淚川　淚の多く出るを川に譬へていふ語。

○暉昌　姓は藤原。遠州曳馬五社の神主、眞淵の師、寶曆二年歿年六十八。

○みなぬか　三七日、二十一日忌。

さしたる歌

世のなかのはかなき時はほとゝぎす鳴くねも殊にうらぶれにけり

美樹がちゝのみまかりたるのちひと〳〵夕郭公といふ題をかの家によむとてその歌見せたるついでによみておくる

藤衣ふかくそむてふすみの色の夕ぐれに問ふほとゝぎすかな

あるものの師の忌とて名所懷舊といふ事を人のもとめけるに四月の末なりければ

ほとゝぎす今きの岡にこゑ聞けばたゞなき人のたよりなりけり

五月のころいとけなき子をうしなひける人のもとへ

さみだれのふるにますらむ淚川(なみだがは)せくべきよしもあらじとぞ思ふ

六月十四日はこぞ暉昌が身まかりし日なればとしごろのむつびわすれがたきにたよりにつけていひつかはしける

天の原ふじの高嶺の白雪のきえぬる時と聞くぞかなしき

利秋としごろわづらひて久しくあはざりけるに七月七日友古がまで來ていにしみな月になむ身まかりにける今はみなぬかばかりにやなりぬらむといふを聞くに心しれる友なりければかへす〳〵も悲しく思へどかひな

し年ごろ好みつることにて今はのきはにも歌よみつるなどかたるを聞きていとあはれのすゝむにくちずさめるかぎり書きて友古のもとまでおくりつ露の手向草にもとなり

大かたも驚かれぬる秋風につねなき聲のそふぞかなしき

なき人はいく七日にかなりぬらむ彦星ならばまたも見ましを

きくからにくやしき事のくやしきはあはで經(ふ)るまの別れなりけり

今はよになしと聞くこそかなしけれあるにも逢はで年はへぬれど

秋風の空に今はと行く螢見る〳〵きゆる世にもあるかな

これはかの終の日に螢の曉に影消ゆるよしをよみし故にそれになぞらへたるなり

荷田在滿にはかに身まかりける後横瀨侍從(隆貞)の許よりふぢばかまにさして世の中はあだなるものと知りつゝもかからむとしもおもひきや君　あたらしや露にしをれしふぢばかまかぐはしき名は世にのこれども　秋風に荒れにし宿の女郎花こ萩がうへもいかゞとぞ思ふ　答へとりあへず書きて萩につけてやがてその使にやる

みよし野のかりの命はさだめねどおのが後こそたのむべきもの

○つねなき聲　無常の報。訃報。

○彦星　牽牛星。

○あたらしや　可惜しや。

○おもひ　喪に籠つて居ること。

風をあらみにはかに散りしふぢ袴香だにや多く残らざるらむ

今よりはいかにこ萩が花づまのをしかなき野にちりまどひなむ

宮城野の露にしをるゝ秋萩は君がみかさのかげたのむなり

父のおもひにてありけるころ

浪の上をこぎ行く船の跡もなき人を見ぬめのうらぞ悲しき

茂松庵といふ寺のもりの陰におくつきあり

しげりあふ松かげに君をおきしより風の音こそかなしかりけれ

ふるさとにまうで來て又ほどなくあづまに歸らむとするを母はらからめこは更なりたれかれ別れをしみ涙おとすを見きくにいはむかたなうかなしくて

わかれ惜しむその人々の袖の露をあつめてしぼるわが涙かな

母君むなしくなり給ひぬときくになゝとせこなた夢にのみ見ならひつるまゝにうつゝともおぼえねどしらするものは涙にぞありけるいかで今しばしすぎばこゝにもかしこにもゆきかひてともに住みてむとのみ老のたのみをかけわたりしをかひなくかなしき世にもありけるかな今はいかにせむ

鴈がねのよりあふことをたのみしも空しかりけりみ吉野の里

今はとも人を見はてぬくやしさは我が身のつひの世にもわすれじ

妻の身まかりけるに

我がのちを頼みし人は先だちてふりにける身をいかにしてまし

あるゆふべ

色かはる萩の下葉をながめつゝ獨りある身となりにけるかも

夜をふかして

から衣たちぬふ人もあらなくに秋は夜寒になりまさりけり

こゝかしこありきつゝ家にかへりて

妹が門いでいるごとにはや行きてはや歸りことといひし人はも

八月十五夜には尾花などかめにさして月めでつるをさるわざもなし

先だちし人のたもとか花すゝき今はそれだに見えずなりにき

横瀬侍從のめぎみの身まかり給ひしをりによみてまゐらせける

をしか鳴くをかべの萩にうらぶれていにけむ人をいつとかまたむ

かぎりありて深くはそめぬあらたへの袂の露やちゞにおくらむ

ある人の十七年の忌にかのよみたる歌を句の上に分ち置きて三十一人に

○ふりにける身　吾が老齢の身。

○から衣たちぬふ人　妻をさす。

○めぎみ　女君。

○あらたへ　荒栲。ころも、ぬのぎぬ、藤はらにかゝる枕詞。こゝにては袂にかけた。

○袂の露や云々　一本「まそでをくたす露やしけけむ」

○心しらび　心構へすること。

○望月三英　幕府の醫官、國學を眞淵に學び、又服部南郭の門に遊ぶ。

○おきな草・かはらいちご。又菊の異名。

○檜わりご　檜物にて造れる破子

○ついがさね　衝重、檜の白木の方形なる折敷に臺を重ね、三寶の形の如きもの。

○五菓　五果、桃、李、杏、棗、栗など五種の果物。

○つばいもちひ　椿餅、椿の葉で包みたる餅、蹴鞠の會には定まりて饗す。

歌もとめけるにてをかみにてかなしみの心しらひして遠擣衣といふ事よめとあるに

照る月にころもうつなる里遠み天がけるらむ聲かとぞ聞く

ある人の妻うせて後題を分ちてかなしみの歌こひけるに九月盡を

秋くれて野風たつなり白露の玉のありかもあすやたどらむ

ある人のいたみに夕落葉を人にかはりて

何となく人のこゝろもみだるゝはもろき木の葉の終(つひ)のゆふ風

望月三英の父草庵が一周忌に題をわかちて歌もとめけるにわれもいとしたしき友なりければ寒草霜といふ事をよめとあるに

かぎりあれば終に枯野のおきな草いたゞく霜の末ぞかなしき

神無月の比井上河内守の母君みまかりたまへり守はみちのくの岩城におはすほどなりたよりあればみけしきとむらひまゐらすついでに檜わりご一かさねついがさねにおきて内に一つには五菓一つにはつばいもちひ入れてつかはしけるそれが中に松子(まつのみ)は韓(から)のなればわりごのふたのうらにちひさき紙に書きおしたる歌

常ならぬ嵐をいたみうつせみのからの木の實も散りにけるかな

河津長夫はすめら御國の書の學びをわがみちびきつるにもとよりからの書をよくよみつればいと才ことにしていにしへにかへるこゝろざしふかかりつるをわづらひて十月十七日に身まかりぬといひおこせたるを聞くにいとくちをしその後とむらひつかはすついでに美樹がもとへ

わが道もさそはむ人をぬば玉のよみにおくりてまどふこころかな

となむ又長夫が今はの時ますらをはむなしくなりてちゝはゝのなげきをのみや世にのこさましといひてまたわれはこゝろざしとげざるをつぎて名をもあらはしてよなど美樹にいひおきしとぞ此の歌は憶良の大夫のますらをやむなしかるべきよろづ世にかたりつぐべき名はたたずしてといふをおもへるなるべしいとあはれにこそまた菊の花をおくるとて

白菊は冬だにかくてあるものをまだき消えにし露のかなしさ

ほかながらほかならずしも悲しきにうちのうちこそ思ひやらるれ

○河津長夫　國學者、眞淵の門人。

賀茂翁家集　巻之二

雜歌

嵐

しなのなるすがのあら野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな

山

下野や神のしづめしふたら山ふたゝびとだに御世はうごかじ

瀧

あめなるやおとたなばたの織るはたの手玉みだるゝ山の瀧つ瀬

杣

陰高き高根の檜原(ひはら)そまたてゝとるや雲居(くもゐ)の宮木なるらむ

道

いにしへの奈良の御世よりふみわけし木曾の坂路のなれずもあるかも

磯

百くまのあらきはこね路越え來ればこよろぎの磯に波のよる見ゆ

○すがのあら野　信濃國松本市の南西にあたる地方。

○ふみわけし云々　一本「かけそめし木曾のかけぢのあれずもあるかな」

○こよろぎの磯　こゆるぎの磯。相模國酒匂川と大磯との間の濱。

船

おきつかぜ吹きにけらしなむさしの海みともせきまでいづ手舟よる

釣舟

大魚つるさがみの海の夕なぎにみだれていづる海士小舟かも

琴

あふさかやあづまてふ名のつまごとは清水にこゑの通ふなりけり

笛

うら安の國ぶりしるく萬代にくだてふ笛は音をたえにけり

鼓

うた舞のいつゝのふしも鼓てふものの音なくばうちもわかれじ

歌

そのかみはいつぬき河としらねども流れて絶えぬ歌にぞありける

書

見わたせばしもつ此の世のくまもなし古りぬる書や高嶺なるらむ

倭文

いにしへのしづはた衣きし世こそおりたちてのみ忍ばれにけれ

○みゝもせきまで　一本「大江の水門に」
○いづ手舟　伊豆國より造り出せる船、又五手舟の義。一手は艪二挺をいふ故十挺艪の舟、十人漕ぎの船。

○うら安の國　安泰なる國、日本國の異稱。

○絶えぬ歌にぞ云々　一本「歌は絶えずぞありける」

○此の世の　一本「千里の」

○みつのから人　三韓。

○うつゆふ　虚木綿、内方をうつろにまきたる木綿。内のせまきによりうらせはきの序詞とす。

○世にもあるかな　一本「世にこそありけれ」

まことが家に布引の瀧のいはほのくだけをすゑおきたるを見て

布引の瀧のたぎつ瀬おとに聞く山の巖を今日見つるかも

礒巖といふことを

沖つ船手向すらしも岩波のたてるありそにかゝるしらゆふ

四日枝直が家にて韓使といふ事を　これは五月韓人の來べきにて此の題を出しつ昔はかく東まで來たる事なきに近き御世にはめづらかなれはなむ

東路のふじの高ねの高しらす君が世あふぐみつのから人

御嶽まうでせるこゝろを

世の中になにをむさぼることもなし金のみたけの神ぞしるらむ

よのなかはとあるにもかゝるにもなづまずばなにか經がたからむなどいひあへりけるときよめる

かた山のやまべうつゆふうらせばく誰かこの世を行きそむくらむ

題しらず

眞柴たくはしばの里のうす瓦おもひくだくる世にもあるかな

伊久米の君へあかき木のみを奉るにつけて

千はやぶるあけの玉がきそをだにも越えてぞとりし君がみために

山本のをぢはあが母のすみける岡部の宿の前わたりするごとにかならずとひたうびたる人なり今はかくて海山をへだてゝあれどいかでか忘れむさるをいにし年其の國わたりすぎつれどいそぐことありてえ訪はざりしこそ口をしけれ今はかたみにしらぬ翁となりにてあるらめど心をしるべとして今一度むかしのことあひ聞えむとて猶思ひわたる

雲の居るとほつあふみのあははやま故鄉人(ふるさとびと)にあはでやまめや

飛驒人といふ事を

墨繩のまさしき筋を傳へなばあらぬたくみをなすなひだ人

こくすゐのえ(曲水宴)にのかたを

いはばしる水の玉うきよどをなみ心おそさの見えにけるかな

枝直の家にて紙繪の屏風に雪のふりたるに人々舟にのりて見るかたかけるを

白雲の中にながるゝ天の河うききにのれる今日にやはあらぬ

魚彥がもとにつどひてその所の歌とてよめる

かとりがた千重の潮瀨をせきあげて浪穗にたてる神のみとかも

紅子(もみ)が久しうわづらひたるをおやのかなしうおもひて宮づかへはかたへ

○飛驒人　飛驒匠。古昔飛驒國より每年交番に京に上つて公役に服せし工匠。又大工の稱。
○曲水宴　古、流水に杯を流し詩を賦して遊ぶ。支那より傳はりし風流なる宴。禁中御溝水にて催されしといふ。
○よどを　一本「よどみ」
○魚彥　楫取魚彥。下總香取部の人、眞淵の門人魚彥家集は本書に收む。
○紅子　片野紅子。和歌を眞淵に學ぶ。紅子歌集あり。

の人くるしければとて御いとまをしひて申し請ひてければ御氣色あしうて御いとまたびつるをひとりなげきて秋のころやつれゆくたもとの露のうへまでもおもふくまなき月はとひけりといへるをききて

行きめぐりなぐさむ時もあるものを思ひぐまなく月な眺めそ

岩水寺 此の寺の洞につらゝ石といふあり

岩水のしづくの洞のつらゝ石いくつら〱の世をか經ぬらむ

屋代山

四方も皆かべたちのぼるやしろ山大國玉やつくりましけむ

鹽屋煙遠

鹽やだにまれなる浦のよそめには煙の末も寂しかりけり

海眺望

はりまがたせとの入日の末晴れて空よりかへる沖のつり舟

山館雨

しがらきの外山のよるの雨のおとを都の人にきかせてしがな

田家鳥

なるこ引く門田の稻のほどもなくたちてはかへるむら雀かな

○鹽や 鹽燒く釜のある小屋。

○きかせてしがな てしは過去完了、但しがなの願望の意を强む。

○しがらき 信樂。近江國。

松平備後守の秋葉社に奉るとてすゝめらるゝに社頭杉といふことを

いく代經ぬいのるしるしもいちはやき國つ社にたてる神杉

古寺鐘

よしの山入りにし人は音せねど夕の鐘にありかをぞ知る

よそに聞きて思ひ入るこそあはれなれみ山の寺の夕暮の鐘

釋教

ながれ來てあづまにふかき法(のり)の水この行末はいづちなるらむ

述懐

たま〳〵に人とある世をうき時はそむかまほしく思ふはかなさ

獨述懐

おもふ友あらばうれしき身ならましありのすさみはある世ながらに

寄風無常

花もみぢさそふ色香を惜しむまに身の春秋も終(つひ)の夕かぜ

神山元廣が年ごろ吹きたりしひちりきのしたのいと多かるを牛が島の長命寺のうちにうづみてその上にしるしの石たてて人々に歌よませけるによめる其の石は大きなる椎のもとにたてりけり

○いちはやき　御稜威畏き。

○よしの山の歌　「吉野山みねの白雲踏み分けて入りにし人の跡ぞ戀しき」を本歌。

○人とある世　人界に生を受けて

岩がねの椎が下かぜ吹き傳へいくよろづ世かおとにきこえむ

稲垣求己齋冬の歌ども書きて筆くはへてよとておこせたるを物のうへにおきつるによさり雨のもりてしみづきたりければたはむれによみてかたへに書きつけてかへしける

もる山のしづえをのみと思ひしに人のことばも雨はそめけり

茂樹が天の橋立を見て松の枝を折りてもてかへりつるそれが歌よめといひければ

わたつみの波もてゆへるはし立の松をかざしに手をりつるかな

十二月のはじめつかた傳通院の室にまうでたるにあけむとしは増上寺へうつりて大僧正と聞えむまうけうち〳〵ありとききて

朝日影にほへる山にむらさきの雲立ちわたる春ちかみかも

枝直の二郎のうまれてはじめて神まうでせさせけるによみける

とこ世もの世にかをるべき種なれば梅の宮居の神ぞ知るらむ

やんごとなき御まへにまうす

みたみわれいけるかひありて刺竹（さすたけ）の君がみことを今日きけるかも

寶暦四年霜月殿の四十の御賀の宴に侍りけるに夜ふけていらせ給ふをり

〇しづえ　下枝。

〇雲立ちわたる。一本「雲ぞ立つなる」

〇刺竹の　枕詞。君、大宮等に冠する。

〇殿　田安宗武、將軍吉宗の次子松平定信の父。明和八年歿年五十七。その天降言は本書に收めた。

御ぞぬがせ給ひて眞淵にとてたまはせるはいと多かる人々の中にていとおもだたしく侍るもおもほえずかたじけなきにこといみをしもえしあへぬまゝに

あふひてふあやのみぞをも氏人のかづかむものと神やしりけむ

おのが遠つおやは山城の賀茂よりいでて文永の頃には遠江の岡部の郷をたまはれる綸旨などもありけりその後ふたらの宮の大神濱松にまししころ御軍にいそしとておほん太刀をしもたまはせしを其の後はさるさまのこともあらざりしにおのれおぼえず御紋の御衣をたまはれるかたじけなさいはむかたなし

羇旅歌

ふるさとにあからさまにかへらむとするを終にはいかにさだめむとするぞといふ人に

ふる郷にとまりもはてず天雲のゆきかひてのみ世をばへぬべし

ふるさとへかへらむとする時人にわかるとて

わかれ行きて又初鴈とともに來むめづらしと思ふ人もありやと

○こといみ　言忌、忌みて言はざること。遠慮して物言はぬこと。

○はてず　一本「はてじ」

○よの子　姓は鵜殿。縣門三才女の一人。歌集、佐保河は本書に收めた。遺稿「涼月遺草」あり。
○分け行くらしも　一本「分けぞゆくらむ」
○ひきもの神　道祖神の異名。
○ぬさしろ　幣代。
○木綿の山　豐後國由布嶽。

よの子が信濃路をへて紀のくにへゆくに立ちにし後おもひやりてよめる

けふもかも分け行くらしも大きそやをきその山の峯のしら雲

紅のひきもの神もまもらなむ旅ゆきしらぬ君がゆくへを

なにはへゆく人をおくる

百づたふ五十(いそ)のうまやになる鈴のおとづれをだにたえずせよ君

旅行く人をおくりて

よく行きてよくかへり來てたらちねのかはらぬみまへはや拜(をが)みませ

紀量が豐後國にかへるをぬさしろとおぼしくていろ〳〵に染めたる紙に書きつけける

たらちねのいはひてまたむ木綿(ゆふ)の山こえむ日までの手向(たむけ)にはせよ

ある人七月七日にまで來てこたび難波にいきて來む年の秋なむかへり來ぬべきといふに

たなばたにいかにならへる君なれば久しき程をまてといふらむ

大神垣守が土佐の國にかへるにわかるとて

むさし野の夏野のしげくおもふ事いふべき人にけふや別れむ

信益が美濃へかへらむとする別れに　信益は松平能登守の家臣にて美濃國岩村の城をまもれり

天飛(あまと)ぶやつるの郡をいく千世のゆきかひぢとか君ならすらむ

旅歌とて

あしがらの關の山ぢを北ゆけば空もをぐらきこゝちこそすれ

羇中關

みやこべのたよりなりけり白川の關行くほどの秋の初風

羇中海

はりまがたいかで都のつとにせむゑじまの波よかくよしもがな

羇中時雨

都いでて露をいかにと思ひしに時雨ふるなりみやぎ野のはら

物名

しもつふさ

神代より弓矢は手にぞならしもつふさはしからぬ人やなからむ

茂樹が家にて歌よみけるに　あらぞめを

えぞの海やちしまのあらそめを多みあらはれぬべきわが思ひかな

○みやこべの云々　能因法師「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の關」(後拾遺九、羇旅)

○ゑじま　淡路島の北端の東。

○あらぞめを　淺紅に染めた苧。

○あらそめを多み　荒磯に海布(め)多き故。あらぞめをかく。

〇いでゐ　應接間。

〇洲濱　洲濱の形を摸して作りたるもの。盤上に景物（木石花鳥等）を設けたるもの。洲濱臺。

〇檜破子　檜にて造りたる破子。破子は白木で作れる辨當箱、中にしきりがあり、かぶせ蓋折箱のやうなもの。

賀歌

いでゐをいにしへざまにつくりけるに九月二十六日人々つどひてほぎ歌よみけるによめる　寶曆五年の秋なり

飛驒たくみほめてつくれる眞木柱たてし心はうごかざらまし

これはけふつどへるはわが古の書の學びの道つたふる人々なればかくいへり

十一月十九日殿の大ひめ君へみちのくの守どのよりむすびの物まゐらせらるゝにおのれも御ふみ御手ならひの事つかうまつれば大かたなるべからねば洲濱奉れりそのさまかきの貝ながらなるを島にて作れる松をたてて笹など本にあり又鏡二つを水のかたにしてその鏡にしろいものして鶴のならびてとぶかたをかけり歌も小さくて波のかたにかきつ其の歌

大ぞらにはねをならべて飛ぶつるの千年(ちとせ)の影はけふよりぞ見む

とぞいと興ぜさせ給ひてこがねなどたうびつ長門どののおほば芳林院尼君の七十の賀に養壽尼が檜破子調じてふたとみに鶴と龜とを數おほく書きたるをまゐるに歌よめと殿のおほせごとありければ

天つちに千とせのためしおほかるは君いはふ今日のしるしなるらむ

とて青きうすやうをいとちひさく切りて松のつくり枝につけてそへたり此のわりごなどは殿のおまへにきこしめしててうぜさせて養壽にたまへるをおくりたりまたわりごに松の實いるべきにて

君が身にこもれる千世はあるものを松のみとしも思ひけるかな

よし田の家の母とじの賀に秋の祝といふことをよめとあるに

ことぶきをよし田の里にかる稻のちゞの年ある人ぞたのしき

おなじ賀をみほ子のするにすはま杖などてうじてよといひおこせつればてうじてつかはしける其の杖の歌もとむればふるき例によりて靈壽杖をつくれる其の袋にぬひつけたる歌

玉ちはふいのちありてふ此の杖は君こそつかめよろづ代までに

杖の長さ三尺六寸五分よこのはしともとゝを銀(しろがね)してさいはひ菱に作りてはる同じ菱(ひし)の紋をゑりつけたり又鳩はよこの上のかたへにつく頭背尾などうす青に黄をまじへむね鳩の色なり採桑老の樂の杖のさまにならへり昔のさまなればなり中頃の世よりは古今集に白がねにて竹の杖を作りたるよしあるにのみよりて竹の形に銀にて同じ葉をつくり又

○うすやう　鳥の子紙の薄きもの

○靈壽杖　靈壽と名づくる木にて造りし杖。漢書に見ゆ。

○玉ちはふ　人の靈魂に幸福を與へて助けること。

○さいはひ菱　幸菱、紋所の名。

○採桑老　舞樂の盤渉調の曲の名

○あしゆひ　足結、上古袴をかゝげて結び固むる帶の如きもの。

○かんするゐ石　大理石の一種。

○かづけわた　被綿、古、十二月御佛名の時、導師又は衆僧に賜はる綿。

鳩をばよこ木のかはりにやがてそれをにぎりてつくやうに作るめれど古今集なるは珍らしく歌にもかなへむとてのわざにしてさせるのりあるにはあらざなり賀には靈壽杖こそ唐にもやまとにもあとある事なれ又袋の形も今の世にすなるはいかにぞや寶劍の袋のかたこそかかるもののの袋の古きかたなれさればそれにならへりすはまは菊小松さゝなどを作れりあかゞねの板を鏡にとがせて下水の流れをなせり花の影おもしろく見ゆ足はさぎ足にてあしゆひの紅の組あげまきゆひてたれたり臺はごふんみがき上によきすなごかんするゐ石などをおきつ

松平備後守の七十の賀に菊によせてほぎ歌よめとあるにかづけわたにそへてまゐらす

萬代を君とともなふときくなれば花の眉しもひらく秋かな

あるやんごとなきわたりの賀に菊をもてよめとあるに

むさし野の一本菊を生(おほ)したててかぎりなき秋の露をまて君

松平遠江守の六十の賀に鶴千年友といふことを（此のぬし津のくに尼崎の城をしれり）

この殿になにはのことの千世はあれど契(ちぎ)りしるきはなるゝあしたづ

意成院權僧正行ひのしるかれば今年おほやけより御寺造らしめ給ふ僧正

七十にしもおはするを侍ふ人のことほがひするに歌よめとすすむれば

とぶさたていはひてつくる此の寺の佛のよはひ君もへぬべし

奥山のよ川の杉にしるし得て世をいのる君は千世もへぬべし

くすし津輕季詮が父の五十の賀に

龜山のいく藥ある宿にしもいはふよはひぞかぎり知られぬ

ある人の賀に松延齡友といふことを

世の中の友にはあゆるならひあれば松をしたしむ齡（よはひ）しるしも

みちのくになる人の五十の賀に松延齡友といふことを人にかはりて

ちぎりては籬（まがき）が島の松が枝（え）もおもひへだてぬ千世をこそへめ

ある女の五十の賀に春祝といふことを

十かへりをまつほど遠くわかえつゝいくらの春か花かづらせむ

源の敏樹が母の七十の齡を芝といふ所の海のつらの家にてことほぎすめるに歌よめとあれば

わたつみの常世（とこよ）の波をよるべにて祝ふよはひは數も知られず

遠江の山のおくなる浦川といふ所を廣くしめてすまふ雛島まさちかといふ翁今年七十なるを我も遠きゆかりあればことぶきてよと遠々にいひお

○ことほがひ　ことほぎの延音。言祝。祝賀。

○とぶさたて　枕詞。とぶさは古昔樵夫が木を伐りたる時その枝を折り切株に立ておきて山神を祭りたるもの。

○あゆる　肖ゆる。あやかる。

○源の敏樹　國學を眞淵に學ぶ。

○末はまさしかりけり　一本「末ぞまさしかりける」

○こゝのそぢまり八つ　九十八。

○平春道　村田春海の父。江戸の豪商。眞淵を己が居宅に招きて國學を受け子弟にも學はしむ。

こせしかばよみておくる

まさか山おくやまつみをいはひつゝ榮えむ世々はかぎり知られず

人の賀に杖をおくるとて

やま人の桃のしもとの手つか杖君こそつかめもゝといふ世も

人の七十の賀に橘によせて

橘の陰に道ふみうらとへば千世ゆく末はまさしかりけり

しはすのはじめ秋田泰林の六十の齡をその子泰因がいはふに竹不改色といふ事よめとあれば

くれ竹の雪かきわけてちぎるには千世の色こそことに見えけれ

年さむきあらしにかれぬ宿の竹はいでそよ千世の友にぞありける

わが友を竹のともともいはひおきて風に雪にもかれじとぞ思ふ

こゝのそぢまり八つなる人をいはふむしろに竹をよめとあるに

くれ竹の世の長人のすまふなる千ひろある陰に我は來にけり

平春道が父の賀に竹によせてほぎ歌よめともとめければ

人の子の千代もといはふまことには竹の心ぞさぞなびくらむ

まき田永正はゝの六十の賀しけり歌よみてよとあるにさることとなりむつ

ましきちかどなりなれば大かたにやはとて竹の枝につけてつかはしける

いはふなるこゝろへだてぬ中垣はこなたの竹の千世もゆづらむ

ある人の七十の賀のむしろにて月前竹といふ事を

よろづ世にすむべき庭の月なれば竹をうゑてやかげ宿すらむ

義陳が母の六十の賀の屏風に十二月竹おほきやどに雪ふるかたを

わが宿の竹のは山にふる雪はしらねなればや消ゆる世もなき

武算が母の五十の賀の月次の屏風に八月十五夜のかたかけるところに

長きよの秋のなかばにいとゞしく暮るればいづる月ぞたのしき

また十二月松竹ある庭に雪ふれる所

松がえも竹もけぢめのさまぐ\に千世をこめたる宿の雪かな

人の賀の屏風に十二月松に雪つもれるかたを

雪つもるいつはの松のいつもく\かはらぬ年はくれぬともよし

永正がもとにて枝直周武など歌よみけるに此の近きほどあるじの母の賀しける名殘にとて猶祝のこゝろをそへてみゆるものを題にてはやく咲きたる梅を瓶にさせるを

萬代の春まつやどの梅なればいとはやかめのうへに咲きけり

○かげ　一本「だて」と誤る。

○しらねなればや　一本「こしのしらねか」

○長きよの　一本「よもながき」

○いつはの松　五葉松。

○枝直　姓加藤。町奉行の與力。家集東歌は本書に收む。

まきを

おく山のおく霜やたびかさぬとも眞木のみどりは千世にかはらじ

永世が六十の齢を其の子千國がいはふ時よめる

みはかしを玉まき田ゐの五百しろに千五百の秋の初風ぞ吹く

とよくにの小笠原氏の家人の六十の賀に歌ひとつと白猪のぬしのせちにいふにかかること世に多きをうとき人のはかたくいなびのがるゝをこの人のまれにもとむるにはいかゞはせむとてとりあへず

豐國の鏡の山の松にかけて髮のみどりも千世にこそ見め

阿波守國滿おほやけにまうす事ありてわが家にある比人々とひ來て歌よみけるに寄神祝といふ事を

君が世に神の惠みの露そへて御謝山もとのうみぞたえせぬ

この國滿は遠江濱松の諏方社の大祝なりさて信濃國なる此の大神の社わたりに月池星池をいふあり御謝山のふもとなりその池のほとりに天つ露日ごとにふれば此の池の水たえずながれうるびてすはの海に入るその海のながれ遠江の天の中川におつとなむいふ

鶴千年友といふ事を人にかはりて

○永世　横田榮樹、延享年間眞淵に從ふ。
○みはかしを　枕詞。
○玉まき　玉にて飾りたる美しき
○五百しろ　五百代もある廣き田
五百代田。代は上古田地の面積をはかるに用ゐた語。

○阿波守國滿　杉浦國滿。濱松の人、眞淵の門人、阿波守と稱す。

○御謝山　信濃國諏訪郡今の富士見峠。

○天の中川　天龍川。詞人の用ゐる稱。

みしま江の玉江に千世をしめしよりあしべの鶴ぞ君が友なる

藤原常香のすゝめけるある女房の五十の賀に松樹契久といふことを

たをやめの同じ操をちぎり來てへぬべき千世も松ぞしるらむ

わかゆべき契りかまつの花かづらいく千世かけてをとめさびせむ

牧野駿河守のもとにて寄名所祝といふ事を（此の守越後國長岡の城をしるゆゑにこのこころをいふ）

霞みつゝ彌彦山（いやひこやま）にふる雨のいやます／＼にいへぞさかえむ

寶曆四年殿のよそぢの御賀の宴に侍りてよみて奉りける

大君の守りとなれる君なれば君がよはひは神ぞまもらむ

枝直が七十の賀の屏風に三月櫻のもとに弓いるかた

葛城の襲つ彦まゆみ引きつゝもますらをのとものの花を見るかも

擬神樂催馬樂歌

寶曆のはじめつころにや翁のかきつめられしものの中に神樂さいばらになぞらへてつくられたるあるを見いでたればこゝにのせぬおもふにこはやんごとなき殿のをりのかたちつくれる所にもがさのうれへをまもらひます神をいはひたまへりし事ありてその神のまつりせさせ給ふときたは

○彌彦山　越後國西蒲原郡。

○殿　田安宗武。歌を眞淵に學ぶ歌集天降言は本書に收む。

○まゆみ　まは美稱、弓。又檀の木にて造れる丸木弓。

○ますらをのとも花　花は櫻木人は武士。

○神樂　神樂歌、平安朝に於て朝廷の儀式又は諸神社の祭の時に行ふ舞樂に用ゐられし歌謠。

○催馬樂　催馬樂歌、平安朝の初め里俗の間に行はれし一種の歌謠

○もがさ　疱瘡。はうさう。

○しみゝに　茂みに。繁きさま。

○うらやすし　安泰なり。

○しめはふる　しめをはりわたす
○つかさ　丘。岡の高きところ。
○いもひ　齋。いむこと。

○かみのみまへ以下　一本「かざしにしつゝあそぶなるかも神のみまへに」

むれにつくりて奉られしにやとおぼゆそのことわりもありつらむをうせにしかばおしはかりに書いつくるになむ

玉籬をつけとてしもや昔より神さびけらしをかのまつが枝
　枝もしみゝに

むかしへのためしにならふ瑞垣はつくる日よりぞ神さびにける
　むかしおぼえて

すめぐにの上代のことはうらやすしならひてあれな安きためしに
　末の世までも

しめはふる岡のつかさの清ければいもひもやすし幣もやすけし
　神のまに〳〵

きみが代の長月こそはうれしけれ今日皇神（すめがみ）をまつりはじめて
　たえじと思へば

よろづ代のなが月にさく菊のはなかみのみまへにかざしつるかも
　神あそびして

しら菊の花をかざしにさしつれば袖はかへせど散らじとぞ思ふ
　秋てふごとに

御園生にいはひてまきし山あゐを今日の袂にすりあへにけり
　いろもしみゝに
うらやすのたやすの秋の初穂もてあなうらやすの今日のみにへや
　平らかにして
さいたまの里のとねらが造るゆふ神のみてぐらをゆひてけるかも
　きよきしらゆふ
この岡の松の木のまゆ見わたせば海もせきまでうくたからかも
　ともへならべて
しながどりあはにつぎたる末の山すゑもさやけしけふの日影は
いり江どの大門(おほど)の入洲(いりす)の蘆原も君ししむればみやことなりぬ
　よろづ代までに

酒飲

神のかうみき　たべゑうて　ようべもすんがら　まふよひぞ　とりはなくと
も　まふよひぞ　ながなきどりや　とこ世どり

同

あはれたふとさ　あなたふと　けふのなが月に　あふ人よ　神のまつりに

○御園生に　一本「このそのに」
○たやす　田屋に容易しをかく。
○みにへ　みは敬稱接頭語。新嘗。
○とねら　刀禰等里のとねは公事に關する村長、里長等をいふ。
○ゆふ　楮のあまかはにて製したる緒、祭祀の時榊などにとりつけ垂るゝもの。
○しながどり　枕詞。あは、ゐなに冠す。
○よろづ代までに　一本「のやまかけつゝ」
○ようべもすんがら　夜もすがら
○ながなきどりや云々　とこよのながなきどり。鷄の異名。「庭火たくとこよにありしながなきのとりの音きけは明けぬこの夜は」(夫木十八)

○老鼠　西寺の、老ねずみ、若ねずみ、御裳つんづ、袈裟摘んづ、けさ摘んづ、法師に申さむ、師に申せ、ほふしに申さむ、しに申せ(催馬樂)。
○くうげ　公卿。
○け　家柄、將軍家、公家、攝家
○おほため　御爲。
○もは　藻葉、藻の古名。
○みべ　にへ、新饗。
○まどこよの　まは美稱。常世。
○はれ　感動詞。拍子の詞。
○ふえしも　笛。しもは强めの助詞。
○あへたれば　取り合はせたれば
○とよこのとり　鷄の異名。
○まどしま　まは美稱。豊島。
○はたに云々　一本「はたにいも行くおきな　そのいもたばれ」

あふ人よ　とるみてぐらは　たふときろ

老鼠

このをかの　老ざか木　わかざか木　ちんよつんづ　としつんづ　としつんづ　くうげにまうさむ　けにまうせ　くうげのおほため　けのまうけ

同

西じろの　はつみとし　えりみとし　もはもつんづ　なもつんづ　なもつんづ　おほにへまうさむ　みべまうせ　おほにへまうさむ　みべまうせ

紀のくに

このしまは　とこよのしまぞ　まどこよの　しまによすがら　あそぶはれなぞもといへや

二段

ふえしもふいたれば　みことしもあへたれば　とこよのとりの　はれその鳥となふ

同

むさしのや　としまのはたに　まどしまの　はたにいも引き　おきなはれそのいもたばれ

二段

ひくしもやすければ　まるるこそやすけれ　いももる神も　はれそのやすみあへ

同

いにしへゆ　めでてしものの　みめづらし　ものとさかぶく　をばなはれ　そのかりみほを

二段

まくさしふいたれば　みたけもてつくれば　神こそめでめ　このなかじまは

黒木の代りに竹を柱とし尾花をふきたり

とりものの歌　ほこ

八千矛の神のゆづりし大君の御代の守りのほこぞこのほこ

長歌

殿の御賀に御杖たてまつる歌

かづらきや　ひとことぬしの　神のます　もりのさか木を
鵜じもの　頸(うな)ね突き貫き　倭文(しづ)機(はた)の　幣取り向けて

○さかぶく　茅の穂の方を下にして屋根をふく。
○みほ　御庵。
○とりもの　採物神楽の時舞人が手にとりて舞ふもの、榊、幣、杖、篠、弓、劒、鉾、杓、葛、韓神(カラカミ)。
○かづらきや　大和國葛城山。
○ひとことぬしの神　一言主神。素戔嗚命の御子といふ。雄畧天皇葛城山に狩獵し給ひし時現はれし神。
○鵜じもの　鵜の狀したること。
○頸ね突き貫き　額を地に突きて敬ふ。(鵜の水中にて水をかづく時の如くして)「宇事物頸根衝拔氐」(祝詞式祈年祭)

わが君の御つゑにとりき今日の日の御賀の庭の
庭雀蹲りゐて百ちゞのこともなにせむ萬代に
いませ吾君と一言申さもひとことまをさも
よきことを一言ぬしの大神のさちはひまさなむ杖たてまつる

奉賀新田家大夫人歌一首竝短歌

上つけやにひたの山は出で立ちのよろしき眞山
入り立ちのくはしき嶺かもいでたてば君を守る山
いりたてば家を守る山この家の世々に傳へて
幸弓の幸ある山ぞときはなすよはひもがもと
たらちねをよろづ代までに百づたふ五十の冬に
言賀ぎし酒ほぎなしていははせることぞよろしき
今よりは新田の山の新幸もいよゝはかさねむ
この家のはゝのみことのちとせもろ山

反歌

たらちねをとはにもろ山しめおきて祝ふよはひは限り知られず

侍從貞隆朝臣の京に御使し給ふをおくる長歌短歌

○にひたの山　新田山。上野國桐生の南太田の北。新田家大夫人にかく。
○出で立ち　山のそはだちたる姿又出で立つにかく。
○入り立ち　いでたちの對。
○くはし　美し。
○幸弓　幸を得る弓、獵弓。

みぬの山　おきその山は　靡かへと　衝けどなびかず
かく依れと　蹈めどもよらず　よしゑやし　なびかずありとも
よしゑやし　よらずとふとも　かけまくも　いともかしこき
あたら世を　ことほぎまるる　みことをし　もちて行く君
ひきるます　八十とものをの　駒の爪　岩ね蹈み割くみ
鈴が音は　山行きとほし　たひらけく　やすけく越えむ
おきそ山　みぬの山

大きそやおきその山の岩がねもなびきよるべきたびにやはあらぬ

右は寶暦十二年九月皇女御位を嗣ぎませる御喜びを東より申し給ふに横瀨侍從の此の御使にさされて信濃路より上らるゝを親しき人々に歌もとめらるればよみつ京の事などは人々皆つくせればかくのみいへり

詠松有榮色賀大木老人八十算歌一首并短歌（老人善圍棊）

松陰に　山人あそび　ときはなる　齡はしるし
御世の名の　ゆたにのぶてふ　新しき　はじめの年を
去年（こぞ）といひて　今年のはるは　いづこにも　杖つきまるり
あしびきの　山にもあそぶ　手束杖（たつかづゑ）　斧の柄すらは

○みぬの山　美濃國の山の汎稱。或は今の南宮山（みのの御山として歌名所）か。
○おきその山　木曾の山の總稱。
○靡かへ　なびけの延音。
○依れ　靡き從へよ。服從せよ。
○八十とものをの　一本「ますらたけをが」
○岩がねも・一本「いはむらも」
○皇女御位を嗣ぎ　後櫻町天皇踐祚。
○今年のはるは　一本「今年のはるし」
○手束杖　手に執り持つ杖。

○さかむごも見む　ごは圖莢、松の花咲かん期をかく。

○みのりの花　御法の花。佛法。

くちぬとも　くちせぬものと　松の　花　さかむごも見む

このぬしは　山　人の　ごと　山松のごと

反　歌

山人の千世の始めの春とてや松のみどりもことに見ゆらむ

僧祐達綸旨まうしにみやこにのぼるをおくる　時は正月十一日なりこの日春たちぬ

東　より　春こそたてれ　都　べ　に　花こそさけれ

その春に　君さそはれて　その花の　みやこに行くや

おのづから　みのりの花の　開くべき　春なりけらし

春の日も　かぎりこそあれ　咲く花も　うつろふものを

ときはなす　御法の花の　すゑ〲も　たえぬかをりを

つゝみもて　霞　の　袖　の　たちかへり　はやおほはなむ

世の人のため

東より春にともなふ行くへこそ法の花さくみやこなりけれ

大和のくにをおもひてよめる

神(かむ)ろぎの　神の御代より　天つ　嗣　日つぎしらしし

御(み)孫(ま)の尊と　が　吾　大王　の　外(と)つことは　雄々しくたけく

内らをば　直(なほ)く平らに　みし給ひ　聞したまへば
八十國も　いよゝ眞廣く　百のおみも　いや榮はえき
空みつ　やまとのくには　白雲の　とにたちわたり
山見れば　山いや高し　里みれば　さとたひらけし
春花の　うらぐはしくにぞ　こゝをしも　うべ敷きましき
八十くには　うべもさかえつ　いにしへの　その稜威(いづ)御代の
足り御世を　いまもみるかも　日高みのくに
大だから吾がこゝろさへゆたけしも大和國原はるみてしより

よし野山の花を見てよめる

ことさへぐ　人のくににも　聞え來ず　吾がみかどにも
たぐひなき　よしの高嶺の　さくら花　咲きのさかりは
馬なべて　とほくもみ放(さ)け　杖つきて　みねにものぼり
見る人の　語りにすれば　きく人の　言ひも繼(つ)がひて
天雲の　むか伏すきはみ　谷ぐゝの　さわたるかぎり
めでぬひと　こひぬ人しも　なかりけり　しかはあれども
世の中に　さかしらをすと　誇らへる　翁がともは

○日高見のくに　廣く平らなる土地の稱。

○ことさへぐ　言喧、外國人の言語の聞き分け難きこと。

○谷ぐゝ　谷蟇、ひきがへる。

○八百萬　一本「もゝ萬」
○見のおとろぞと　一本「見るはおとろと」
○ありなみ　拒み。否み。
○うつゆふの　枕詞。内方をうつろに巻きたる木綿なるより籠り、狹に冠す。
○ふもとを一本「ふもとゆ」

八百萬よろづの事ら聞きしより見のおとろぞといひつらひありなみするをみね見れば八重白雲か谷みれば大雪降ると天地にこゝろおどろきよの中に言も絶えつゝゆく牛のおそき翁がうつゆふの狹かりしこゝろ悔いもくいたる

もろこしの人に見せばやみよし野のよし野の山の山さくら花

夏日東海道中望富士山作歌一首並短歌

磯間より背かひに見ゆる駿河の海沖つなみぢはせばきかもふりさけみればさがみねの八重山みねは低きかも天の原なるふじのねのふもとをいでて風のまに横ほる雲にするがの海おきも隱ろひさがみねのみねも雨ふり時のまに神もなりゆけど水無月の照る日のそらにあらはれてくもるともなくとこ夏に雪ぞふりける富士の高嶺は

返歌

するがなる富士の高嶺はいかづちの音する雲の上にこそ見れ

不二のねのふもとをいでて行く雲は足柄山の峯にかゝれり

橘永世が屋を高くつくりてその見ゆるさまをよみてよとこひけるに

東なるとほのみかどに　百千里いへはあれども　とりよろふ山は見ゆれど　天の原不盡の高嶺を　やどながら朝ゆふ見つゝ　もゝちたる心は知りぬ　とりよろふいへにもあるか　百千々の時はゆけども　常夏にめづらしきかも　ふじの白雪

みな月の末つころ高き屋にのぼりてよめる

おいが身は人こそいとへ　ふる人は世にこそすつれ　わたつみやいとはざるらむ　山つみはすてやたまはぬ　見わたせば波をきよらせ　ひもとけば風をかよはし　世のひとのいとふてふなる　夏の日のてる日も知らず　高きやにつどひてうたふ　ふる人のとも

浦人のたひつりかへる伊豆手ぶねはやく涼しき夏にもあるかな

七日の夜縣居の翁が戯歌

七月のなぬかのよらは　七とりのつくゑをたて

○橘永世　横田榮樹。眞淵の門人。

○伊豆手ぶね　五手船。艪十挺、十人漕ぎの船。一説伊豆國より造り出す一種の船。

○七とり　七個。

○新桑まゆ　今年の蠶の作りたる繭。
○ちはり　千針。幾針か。
○あへ　堪へ。
○あえ　肖え。
○高圓野　大和國奈良市東郊。
○うむかしみ　感欣し。
○わらはそび　童遊。
○かぐろき　かは接頭語。黒き。
○をはなり　うなひ髪をくゝらず散らしておくこと。
○度會大夫　度會延佳。伊勢外宮の權禰宜、元祿三年歿、年七十六。
○ぬなは　じゅんさい(蓴)の異名

七種の　ものたてまつり　つくばねの　新桑まゆの
はつ引を　ちはり貫き垂れ　あめにます　たなばたつめの
五百機たて　そのせの君が　七重かり　八重かるきぬを
織りもあへ　縫ひもあへなも　おるわざに　あえてもがも
ぬふ手に　あえてもがもと　春日なる　高圓野べに
にほふちふ　七くさの花の　花かづら　今するこらの
みめづ兒の　しかぞ設けする　みめづ兒の　かくぞ言擧げする
うむかしみ　われもおもひて　眞白なる　七束髯を
搔き撫でて　琴をあそび　歌によび　わらはそびすも
ぬばたまの　かぐろき髪の　をはなりに　なりてしもがも
あえなも〱

權禰宜度會大夫二大御神の御池のぬなはに歌そへて遠くおくられたり八月十五夜しみ來りければこたふ

高知るや　天のみ影　天知るや　日の御影の
水に生ふる　ぬなはをくりて　ぬば玉の　よるの食す國
しきませる　月よみのみかげ　湛ふなる　八月の今夜

かき向くる　ことのよろしさ　日のみかげ　月のみ影を
かくしつゝ　汝もわれも　ぬなはなす　長く仰がな
長くあふがな

百ちひろ千ひろのぬなは結びあげて神の御池の心をぞ知る

獻三河國高次新墾之蕪時歌一首竝短歌

名ぐはしき　三河のくにの　新ばりの　にひ御世すらを
そこにしも　ひらきだまひし　大君の　惠みのひろに
大御名を　高すのはまの　にひばりに　つくるあをなは
ひさかたの　あめはさゆれど　あらかねの　つちはこほれど
いや生ひに　おひしみにけり　大君の　おなじ御胤の
吾が君の　御食に摘み來て　冬ごもる　時にはあれど
御こゝろを　はるのみまけと　みさかえも　千世のわかなと
けふたてまつる

反歌

天きらしみ雪ふれども三河なるしかすがにこそなは榮えけれ

岡部の家にてよめる　寶暦十三年の六月なり

○時にはあれど　一本「時にしあれど」

としぐ\に　しぬびまつれば　ふるさとに　いますがごとく
常はしも　おもひてしものを　なにしかも　もとなかへりて
あふ人に　ことどひぬれば　ちゝの實の　父はいまさず
はゝそばの　母もいまさず　しかはあれど　吾妹なねの
かしらには　しらがみおひて　かな戸より　いづるを見れば
母とじは　いましにけりと　立ち走り　いりてし見れば
面には　皺かきたりて　よろぼへる　われをしも見て
妹なねは　父來ましぬと　いぶかしみ　おもひたりけり
かたみに　ことをもとはず　しら玉の　なみだかきたり
むかひゐて　むかしへしぬぶ　ことぞさねおほき

倭文子をかなしめる歌

ちゝのみの　父にもあらず　はゝそばの　母ならなくに
なく子なす　われをしたひて　いつくしみ　おもひつる兒は
初秋の　露に匂へる　眞萩原　ころもするとや
まねくなる　尾花とふとや　しゝじもの　ひとりいでたち
うらぶれて　野べに去にきと　聞きしより　日にけにまでど

○としぐ\に　一本「としつきに」
○吾妹なね　なねは愛する義、妹又は妻の稱。
○むかしへ　昔。
○さね　實。
○倭文子　姓は油谷。縣門三才女の一人。江戸商家の女、年十五にして尾張侯の夫人に仕へ寶暦二年年二十にて歿す。その文布の歌本書に載す。外に倭文子歌集、伊香保紀行等あり。

うつたへに　こともきこえず　ちゝならぬ　われとやとはぬ
はゝならぬ　身とてやうとき　こひしきものを
初風の　吹きうらがへす　秋の野の　荷のうら葉の
うらぶれて　いにしその子は　はぎ見ると　行きやはしつる
霧わくと　まどひやはせし　うつし身は　かなしきかもよ
かへりこぬ　道に過ぎぬと　家人の　告げつるものを
おいらくは　おぼしきことを　ひたぶるに　おもふがまゝに
わするべき　わざならぬをも　たつきりの　まどひけらしな
まどひつゝ　あらばあらまし　なにすとか　まさかをしりて
さらくに　新喪のごとも　なげきしぬらむ

萩が花見ればかなしないにし人かへらぬ野べに匂ふと思へば

あらきするにひもの秋はたつ霧の思ひまどひて過しだにせじ

小野古道の妻の身罷りて翌年秋悲しみの歌よめとこひけるによめる

うつしみの　ことをもとはず　うらぶれて　いにし汝妹が
さねどこは　こともなありそ　疊はも　ゆめよあやまち
なくもがと　いはひまもらひ　天行かば　天路やすけく

○行きやはしつる　一本「行きやしにけむ」
○まどひやはせし　一本「まどひやいにし」
○うつし身　現身。

○まさかをしりて　眞實な事を知って。

○あらき　殯。屍を葬る前に暫くおをさめ置く所。
○小野古道　又、長谷川謙益、眞淵の門人、盲人にして鍼術を以て名あり。古道家集あり。

○さねどこ　ねどこ。

○大名持神　大國主命。
○八尺瓊　長き緒に多くの玉を貫けるもの。
○少彥名神　大國主命を輔けて國土を經營せし神。
○かけご　他の匣の緣にかけてその中にはまるやうに作りたる匣。

下行かば　下べことなく　八十の隈　もゝのくまぢを
い往きへて　かへらむものと　春べまち　夏をもすごし
もみぢばの　過ぎにし秋の　立ちかへる　ときになりぬと
眞袖もて　ちりうちはらひ　そむきぬる　枕とれども
朝牀に　妹は起きゐず　ゆふ庭に　妻は來まさず
去にしより　かへらぬ道を　今しはも　おもひ知りつゝ
こいまろび　ひづちなくらむ　君がかなしさ

夜をさむみつゞりさせてふ蟋蟀いたづらに鳴く秋にもあるかな

詠筥根山歌四首竝短歌

あしがりの　はこねの山は　大名持　その大神の
八尺瓊を　藏めたまふと　日本作す　少彥名の
御神やも　つくりたまひし　ちはやぶる　かみのみさかの
しらくもを　わけてのぼれば　くものへに　ひでたるねこそ
玉くしげ　筥形なせれ　立ちならぶ　二つのみねは
蓋とすら　かけごとすらも　とりよろひ　開き立ちなみ
よろづ代に　名にしおひくる　はこね山　ふたごの山ぞ

神さびにける

反歌

久かたの天つ御寶をさむとかはこねの山はつくりけらしも

○

神さぶる　はこねの山は　わたる日の　天をやへだつ
あらかねの　つちをかわかつ　手向する　み坂の上に
のほりたち　西にむかへば　夕影も　朝影のごとく
鳥がなく　あづまを見れば　朝けすら　夕けとぞもふ
ゆふべなす　雲霧がくり　はかりなき　ちひろの谷に
くだりたち　かへり見すれば　ふるさとは　空だにみえず
大君の　ふとしきませる　國内とも　おもひわすれて
あし引の　山のしづくに　そほちつゝ　東にくだる
みやこがた人

反歌

やほによしたひらの宮のあたら代に開きし道のなれずもあるかも

○

○つくりけらしも　一本「つくらせりけむ」

○神さぶる　かうぐ〳〵し。

○鳥がなく　あづまの枕詞。
○ゆふべなす　夕の如く。

○やほによし　枕詞。よ、しは助辭。やほには八百土、多くの土。

○ゆつ桂　五百箇桂、葉枝榮えたる桂。

○をつゝ　現。

○みすゞかる　枕詞。信濃に冠する。

○しなのゆかひゆ　信濃より甲斐より。

○をすくに　食國。

○日のよこの　南北向きの。

○日のたてに　東西に。

○道をはり　道路を開通し。

東路(ち)のはこねの山のやまのへにたゝふる海は
くろき海に白き波たち青雲のゐる空ちかみ
月讀の水かたゝふる天の河ながれかゞよふ
久かたのあめ尾羽張のみことかもせきたゝへけむ
神代よりかれせぬ海にわたつみの宮べにありとふ
ゆつ桂それならなくにちひろ杉生ひたちながら
みなそこにうづもれにつゝ八百世にも千世にもうせず
くちもせず今のをつゝに見るがあやしさ

○

鳥が鳴く東の國の道のはてに竝み立つ山は
外國(とつくに)の國のさかひとみすゞかるしなのゆかひゆ
とほ長く伊豆のさきまでなみたてる百の高嶺は
をすくにの中のへだてと八千矛の神のみことの
つくらしし山にぞありける日のよこのこれの百山
日のたてにゆきかふ人のおほければ岩きりとほし
あしがらの秋なの山に道をはり關をもすゑて

君が代を　まもらひこしを　するがなる　ふじの高嶺の
かぐつちの　神のみこゝろ　あらびたる　ことしありければ
八百によし　たひらの宮の　あたら世の　始めの時ゆ
玉くしげ　開きそめつる　はこねぢの　みちのをちこち
ちはやぶる　人をなごすと　いやひろに　くにををさむと
むさし野の　野のへさきまで　我が君の　ふとしきませば
都人　ひなびとさはに　ゆきかひて　しもとおしなみ
いはむらを　蹈みならしつゝ　時となく　雨はふりつゝ
ときじくに　雪のふるとふ　あら山も　やすくしこゆる
とほの都路

反歌

君が代のまもりなれとて神の世にはこねの山はつくりけらしも

詠蝦夷島歌四首並短歌

やすみしし　我が大君の　神のまに　しきますくにの
鳥がなく　あづまのくにの　みちのくに　すめる蝦夷は
むかしへの　ふみにしるして　みくさある　それがなかにも

○かぐつちの神　火の神。
○しもと　枝しげき若き木立。
○いはむら　岩群。
○ときじく　時となく。いつでも
○まもりなれとて　一本「まもりなれとし」
○みくさ　三種。

にぎたへの　にぎえぞとふは　出羽なる　秋田小國に
すまひつゝ　まつろひたるぞ　ふぢ衣　あらえぞとふは
沼代より　やゝ道さかり　うとかりし　えぞなりけらし
とほえぞと　いふははるけき　都賀留ちふ　をぐににありて
しゝじもの　木のねに臥せり　つち蜘の　穴にも居つゝ
ちはやぶる　ことをしなせば　そこばくの　御軍たたし
こゝばくの　守部を置かし　多賀の城や　かみの城こえて
あらえぞが　ひらほこ山に　御軍は　いはみたけべど
遠えぞの　かぎりをしらに　みちをはり　岩ねさぐゝみ
ものゝふの　ちゞの猛夫の　駒のつめ　つがるをぐにに
せまれれば　まつろはましを　心おぞき　えみしがともは
海のへの　はなれ小島に　船のまに　漕ぎか隠れし
そこもへば　むかしへえぞと　聞えしは　つがるぞとほき
きはみにて　今いふえぞは　その世には　むなし島にも
ありやしつらむ

○

○にぎたへ　和妙。こゝはにぎえぞといはん料の序。
○ふぢ衣　葛布にて仕立てたる衣　賤民の服せしもの、あらえぞといはん料の序。
○多賀の城　陸前國鹽釜の南西。
○かみの城　陸前國加美郡にあり
○ひらほこ山　羽前國北村郡平戈新庄の北に當る。
○いはみ　多く集まり居る。
○さぐゝみ　踏み分く。
おぞき　鈍き。

○なみのむた　涙と共に。
○いくり　いは接頭語、海中にある巌。
○いつゝのたね　五穀。
○つかさ設け　文化四年松前奉行を置く、後又箱館奉行と改稱す。
○ことさやぐ　言喧。外國の言語のききわき難きにいふ。
○わたどなる　海を隔てて鄰接する。

すめらぎの　神のみくには　船かぢの　いかよふかぎり
こまのつめ　つがるのうらの　えびすめの　昆布(ひろめ)のなびく
いやひろに　百年あまり　うちなびき　大まつりごと
あづまにて　まをしたまへば　なみのむた　よらぬものなみ
そのえぞが　今すむしまも　ひろめなす　廣しといへど
雲のゐる　山のみ高く　波の振る　いそこそあらく
ありければ　つがるにむかふ　わたの底　いくりにおふる
松前の　浦かたつきて　かきかぞふ　いつゝのたねを
おほすべき　つちのかぎりは　つかさ設(ま)け　守部おかせば
えみしはし　おのが幸なる　けものとり　魚とりをして
このしまの　北にさかれる　靺鞨(まかち)國(くに)　そがあはひなる
ことさやぐ　からふとじまに　けものもち　魚もて行けば
わたどなる　まかちの人は　青玉も　きぬももて來て
あひかへて　かよふとすれど　まかち人　えぞへしもこず
えぞ人も　まかちはゆかず　あるこそは　よろしかりけれ
しかれども　まかちの人も　えみしらが　なつくをみては

〇うまらに　甘く。
〇をやらふる　飲食す。
〇ゑらゝ　樂しみ悦ぶ。
〇ことなほし　こゝろなほし。言宜しく心直し。
〇あま足らず　滿ち足る。
〇くにたらす　天に對する國。

かくばかり　かしこきくにと　日の本の　やまとのくにを
あふがざらめや

この長歌四首なるが末の二首は寫しあやまり多く詞のおちたる所もありてよみがたければのぞけり重ねて善本を得たらむ時に補ひ載すべし

反　歌

駒のつめつがるのをちのえぞが島そをさへなつく君がのりかも
津輕舟北ふく風にこゝろせよえぞが浦和はなみたたずとも
いざ子どもこゝろあらなむみちのくの千島のえぞもやさしとぞきく

うま酒の歌

うまらにをやらふるかねや　一つき二つき　ゑらゝに　掌底(たなそこ)うちあぐるかねや　三つき四つき　ことなほしこゝろなほしもよ　五つき六つき　天足らしくに足らすもよ　七つき八つき

旋　頭　歌

この冬はいとさむからねば梅のとくさきてはやく散るもあり後の十二月

十五日に春の立ちけるを二十一日の朝雪いとふかくふりたりければ

梅のはな　ちりしく庭に　雪はふりにけり　春の來て　消えなむのちも　きえずやあらまし

賀茂翁家集　歌之部　終

天降言

田安宗武

○此はしがきは田安侯の臣下のしるせるもの。
○空かぞふ　枕詞。大城に冠す。
○大城の君　將軍。以下の文天降言の中なる歌によりて書く。
○村肝　心の枕詞。
○物にふらし　物に觸れ。

天降言はしがき

八十ひらはゆきくれど、猶し忘らえぬは、み盛りなりける昔なりけり。まづ空かぞふ大城の君をみことほぎまつらすとては、七月十五日に御漁をみ舟出せさせり。その折しも御かたはらにさもらへりて、歌仕うまつれと令言をうけまつりて詠みて奉り、猶さぶらふ人等己がじゝ村肝の心々にほぎ奉り、大御酒給ひ、御前も寛にうたげせさせし折々につけ、あるは人にも給ひ、物にふらし歌はせしには、桃櫻に姫御子を教へ示さひ給ひ、夏山の白雨をみそなはして歌はせるには暑さを忘らひ、佃島邊の月にめでましては、ふせやの蜑人をあはれと見給ひ、雪の夕のみうたげにいやつこをめでますみいつくしみ、心の奥かも知らえぬ御歌の數々そはりにたれど、またくつどへ書いつけ侍らむはかしこかれば、うつしみのうつしき折にふれて、己が恐れみ〳〵も口ずさみ、あるは人の聞えさせしをおろ〳〵書いつけ侍るになむ。

○天降言　此の表題は或は臣下がおほせたのであらう。奇抜なる作者の歌風と相協ひておもしろい。

○色まして　夕日にはえて。

天降言（あもりごと）

田安宗武

山家鶯

山ざとはまだ消えやらぬゆきの中に鶯のみぞ春を知らする

白菊如雪

ませ垣に咲きかゝりたる白菊はよそにつもらぬ雪かとぞ見る

將軍家の御庭の紅葉のいろ〳〵染みたるを見侍りて

うすく濃く色づく庭のもみぢ葉は時雨もことに心あるらし

平尾てふ所にて夕照をよめる

亂れ咲くちぐさの花の色まして歸るさ惜しき野路の夕ばえ

寄夢戀

あだなりと思ひながらも假初の夢にも人を見まくほしさよ

寄風戀

ひたすらに羨ましくも秋風の思ふ方まで吹きかよふらむ

○小朝拜　新年に親王以下六位以上清涼殿の東庭に列立して拜賀するをいふ。
○近衞家久　近衞家熙の子、官太政大臣准三宮に至る。
○見てを知る　をは歎辭。
○曲水の宴　川に杯を流し詩を賦して遊ぶ。支那より傳はる。
○みかはの水　清涼殿の東側を北より南に流る。御溝水。古昔これに曲水の遊びが行はれた。

屛風の繪を見て

おりゐつる蘆邊を渡る朝風に鷺はみの毛の亂れてぞたつ

九月二十三日田安に家作り出でて今日なむうつりすみて

吾が宿のかきほの松よけふよりは幾萬代を諸共に經む

小朝拜の繪を近衞家久公より給はりけるゐやまひによみて奉りける

見てを知る千代の初春雲の上に裾をつらねて君仰ぐとは

一位照子の君二のまろの殿に御わたましの日將軍家よりの御使に參り侍りけるに祝ひ奉りて詠める

この殿の軒端の松の綠まで幾萬代のいろをみるなり

三月の末の頃上の御前の遣水の邊にて曲水の宴のありけるを聞きて

いつしかと春も暮れ行く水の面に散りてぞ浮かむ花の杯

音にのみ聞きし昔もかくこそとみかはの水にうかぶ杯

武藏國飛鳥山といふ所に仰せごとにて櫻あまた植ゑさせ給ひぬれば春ごとにいみじき盛りなれば遠つ浦の海人深き山の賤夫だに雲をわけ波を凌ぎてつどふめるに蘆垣のまぢかき程にて今までおそなはりたることのいと本意なくて今年はと思ひて春雨のはれま求めてまかり侍りき

○あさみる　朝見るにあざみ草をかく。

櫻花さくと聞きつゝ行きてみればたゞ白雲の峯に棚引く

こゝに又千本の櫻うつし植ゑて幾萬世か君ぞながめむ

七月中の五日君を祝ひ奉るとて海邊に漁に出で侍りて

君がため今日を待ち得て幾度か浦こぎ出でて釣をこそせめ

あざみ草かきたる繪を見て詠める

花の上の露も光をそへにけむあさみるごとに色の増れる

瑞春院の尼君のませし殿の廢れぬる後そのかみを思ひいでて

見るたびに袖をぞぬらす古の面影もなき庭の草むら

題しらず

假初に積る心のちりひぢもよしあし引の山となりなむ

鏡だにすつれば曇ることわりや思ひてみがけおのが心を

五十の賀し侍りける人に詠みて遣はしける

今年よりまづ此の宿に杖つきてゆけらむ末はよろづよまでも

六十の賀し侍りける人のもとへ竹たてたる杯の臺に小袖をそへて遣はすとて

榮え行く色こそしるし竹の下(もと)に千代をこめたる鶴の毛衣

山居梅

梅の花まだき匂はぬ山里は雪ふみわけて誰かとふべき
うめの花盛りすぐれど山里は霰ばしりの聲も聞えず

廣度院暮雪　此の八景のうち夕照一首は前に平尾てふ所にて夕照をよめることてあそばしけり

みよしのの花もかくやと白雪の梢々をうづむゆふぐれ

赤羽橋歸帆

追風に力もいれで船人の帆かけて歸るけしきのどけき

新堀夜雨

住む人の稀なる野邊の物うきにあはれを添ふる夜はの村雨

祥雲寺晩鐘

夕暮はかすず響きそふ中にわきて此の野邊近き鐘ぞ異なる

衣干岡晴嵐

強かりし夜半の嵐も知られけり衣ほす岡の今朝の景色に

水車秋月

秋も早廻りてこゝに水車たてるほとりに月はさやけき

小田落雁

○新堀　東京市淺草區。當時は住む人稀なる野邊。

○衣干岡　定かならず。

あはれなり霧間に見ゆる山陰の小田にと落つる鴈の一連

右の御歌は享保より寛延までのうち詠ませ給へるが中を誦しおぼえてしるしぬ

春の歌

我が宿の杜の木の間に百千鳥きなくはるべは心のどけき

目黒といふ所へ行き侍りしに歸さの道のほとりに菜花のいみじく咲けるを見て詠める

いぶかしなやゝ春立ちしに女郎花咲きぬと思ふは菜の花ぞこれ

郭公をききてよめる

心よげに草木繁れる夏山に煩はしくもほとゝぎす鳴く

夏の歌

惜しむべき事にしあれど暑き日は秋立つ程を待たれつるかも

夕立

涼しくも降りくる雨は夏山の茂きこのまに露のたばしる

かたはらにつかふる人のさゞ波をと申しければ

○心よげに云々　傳襲を破れる郭公の詠。

○惜しむべき　光陰惜しむべき。

秋されば水底きよみさゞら波更にぞたてろ風吹くごとに

七夕風

星合の空靜けしな久方のあまつ河風すゞしくあるらし

七夕霧

ほしあふを見まくほりまつ人の爲に天つ河霧立ちな隔てそ

七夕契久

人皆は星の契りとあぢきなめど天と共にしをへむ契りぞ

七夕船

今はしも天つ川せに彦星のつまむかへ船漕ぎて行くらむ

七月十五日漁りに出でて

君がためすなどりせむと漕ぎ行けば萬代橋の松ぞ見えぬる

又の七月中の五日漁りに出で去年の冬將軍家御こゝち例ならずおはしませしも今はよろしうわたらせ給ふ

去年の冬のかしこかりしを思へれば今年の今日ぞわきて樂しき

またの文月なかの五日

永き代の橋を行きかふ諸人はおのづからにや姿ゆたけき

○星合の空　七月七夕牽牛織女二星の相會する夜をいふ。

○天と共にし　しは强めの助詞。

○彥星　牽牛星。

○萬代橋　今の萬世橋。集中江戸の地名が多い。

○永き代の橋　永代橋。

○鰭の狹物　魚類、鰭の廣物鰭の狹物（祝詞式）。

○月讀　月の異稱。

○千早ぶる　上三句さやけきの序

洲崎邊に漕ぎ出でてみれば安房の山の雲居なしつゝ遙けく見ゆも

　小松川をいこぎ廻るに邊つ方に小松竝みうゑたるを見て

小松川小松結びて木だるをも今日の遊びに見むとし契らむ

　七月中の五日例のごと深川てふ所に漁りに出で侍りて

鰭の狹物さはに獲られよ大君のおほ饌にあへむ今日の漁り

　又の年文月佃島にて

むら松のそがひを登る月讀の半ばにわたる雲さへうれし

眞帆引きてよせ來る船に月照れり樂しくぞあらむ其の船人は

　八月十五夜

こぞよりも今宵の月を見まくほり待ちつるものを雲な隔てそ

雨空の晴間もあれな我が戀ふる今宵の月をはつかにも見む

　夕ぐれになるまに〳〵雲晴れていとさやけき月のさし出でしをみて

うかりつる雲はれ行きてほりしごとさやけき月を見るぞ嬉しき

千早ぶる神寶ちふ玉纒の太刀のさやけき今日の月かも

　延享元年八月十五夜杯たび〳〵めぐり祐賢拍子正度笙のふえ正纒横笛長賴篳篥などし遊びけるに

いそのかみふりにし唐の笛竹を吹き立てて遊ぶ今宵たのしも

同じ夜

かくしあれと去年より欲(ほ)りし我が心今宵の月と共に晴れけり

またの八月望の夜

立ちおほふ雲間々々に影さえて雲間々々にあらたにぞめづ

旅のこゝろを

夕づく日はや隱ろひて旅衣ころも手さむく秋風ぞふく

仕ふる人の萩の花末になりけるをと申しければ

昨日まで盛りをみむと思ひつる萩の花ちれり今日の嵐に

仕ふる人の萩の下にたゞある石をと申しければ

萩咲ける山べの石は心ありと人やみるらむ假におきしを

九月十三夜

空に滿つやまとの國の風なれや今宵の月に圓居すること

恭しき大みことのりをうけて今日なむ吹上の御園にまうで來ぬるにまとゐさへ給はれる其のかしこまりを今日のまとゐの司達に聞ゆるついでに

大君のみことをうけて弟も吾も御園に遊ぶ今日のたふとさ

○九月十三夜　此の月は宇多上皇の仰せによりてめづる習はしさなる。歌の題にしば〳〵見ゆ。

豫め定め給へる今日はしも空さへ晴れて紅葉照り添ふ

不盡の山みそなはすうてなに參りて木々のもみぢせるを見て

古事に聞きしのみにて未だ見ぬ紅葉の錦今日見つるかも

寄螢戀

音になかで身をのみ焦す螢はもけだし吾がごと物思ふとか

紅葉を

もみぢ葉を見ればめづるぞいぶかしき枯れぬる色と我が知りにつゝ

さくらの紅葉を

雨ふれば青みいやます常磐木の木の間をよそふ櫻葉の色

雪のいたう降り積りぬる夕酒のみつゝ庭のさま見侍りけるによめりける

酒のみて見ればこそあれこの夕雪ふみ分けて往きかふ人は

享保十八年正月廿一日將軍家の五十の御賀に御杯の臺に添へて奉りける

鶴龜の齡なりとも何ならじわが君が世の數にくらべば

寛延三年正月二十一日將軍家の六十の御賀によみて奉る

天が下いやさかゆらし今年既に君が御耳の順ひませば

年毎に今日は我が君の生まれさせ給ひし日なれば祝ひ奉るにまいて今年

○古事に云々　紅葉の錦の詠は古來頗る多い。紅葉の錦神のまにまに。紅葉の錦著ぬ人ぞなき。渡らは錦中やたえなむ。

○御耳の順ひ云々　六十而耳順。(論語爲政第二)

なむ甲子に周り合へるに日さへ同じ干支に當りぬ甲子にこそても開けぬ
ると聞くに誠に君の榮えましまさむことの限りあらじとおぼして

吾が君の榮ゆくことは玉松のきのえ根ざしの廣ごるがごと

つかふる人の含雪亭をと申しければ

富士の山みむとしほりて山のべに作りし庵に入日さす見ゆ

御衝立の障子の畫に濱邊に千鳥のありけるを見て

五百重波よする浦わに何をかもあさる千鳥の羣れゐる見ゆも

九十の賀し侍りける人をほぎて

吾や妹や子等はいましにあえぬべし汝はなほも松にあえてよ

松竹增春色といふことを

此の春は園の松竹色まして今し千代經む祥(さが)を見すらむ

仕ふる人の熊笹の間の石をと申しければ

唐人の繪にも似たるかさゝ原のかたへに立てる石の形は

衝立さうじの繪を見て

千鳥すら友呼びかはし遊ぶなりなどてや人の獨り樂しむ

勸學のこゝろをよめる

○みむとしほりて　しは強めの助詞。ほりては、欲して。

○あえ　肖え。あやかる。

○城に代る璧を云々　秦五十五城を以て趙王の璧と易へんことを請ふ。趙の藺相如秦に使して璧を全うして歸る。

○今日のには　にはは海原をいふ

書もよまで遊びわたるは網の中にあつまる魚の樂しむが如

學ばざる人をうれへてよめる

天よりもうけし賜物徒らに知らずて過ぐる人のはかなさ

春秋を判ぜる歌

枯れ渡る秋をもえ出づる春にしはたくらぶるだに愚かなりけり

藺相如の繪を見てよめる

城に代る璧をかへせし其の人を我は其の玉にかへまく思ほゆ

學ばざる人をうれへてよめる

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれ猶し學ぶ

天地のめぐみに生るゝ人なれば天の命のまに／＼をへや

人の道を我が家の業としながらも學ぶ心のおこたりぞする

宇喜田といふ所に狩にものするとて船に乗りて行きけるに松かげに眞帆ひく船の往來ふを見て人々歌よみ侍りけるついでに

何事も眞帆にせよとて示す吾が心にあへる今日のにはかも

ふねはてにならむとほせり今一つ酒たうべつゝ遊べとぞ思ふ

濁りなく波さへもなく行く水は物知らぬ吾もかつ見つるかも

○子日　古正月初子の日野邊に出で小松を引き若菜をつみて遊ぶ。○我も行かまし　「茜さす紫野行きしめ野ゆき野守は見ずや君が袖ふる」(萬葉一雜)

○あかむがに　がに接尾語、飽かんが爲に。

庭にかひし鶴を

子を思ふ物てふなれど此の鶴は妻さへ持たず乏しくあるらし

右御歌享保より寶暦の頃までの御作なり

立春

打ちなびく春きたれるか久方の天の香具山霞みそめたる

宮人の袖つけ衣ふりはへて心のどけきはるは來にけり

子日

今日はしも子の日なりけり茜さす紫野邊に我も行かまし

をとめらが赤裳引きつれ小松原緣にまじる今日は來にけり

霞

春霞たな引くからに白雪のつもれる梢はなのごと見ゆ

燈火のあかしの門より見渡せばやまと島邊は霞かをれり

鶯

たかむらに家居やせまし鶯の鳴くなる聲を聞きもあかむがに

かげろふのたつなる岡に梅咲きて心のどけく鶯なくも

○白馬　古く正月七日宮中にて行はれし白馬節會。

○うず　髻華。古、冠の上にかざしたる飾物。

○佐保川　今奈良の西郊を流る。

若菜

いざ子ども若菜摘みてむ霞るる春日の野邊の若菜摘みてむ

宮人は白馬(あをうま)ひけり少女らは雪間の若菜いまや摘むらむ

殘雪

春されど雪消えやらぬ山里は猶ふる年の心地するかも

去年はさも思はざりしが青みます岩間の雪の清く見ゆかも

梅

種々(くさぐさ)の花はあれども宮人のうずにしせるは梅が花かも

匂ひさへ花さへ實さへ若葉さへ冬木のほども梅はことなる

柳

春雨はしば〳〵ふれり佐保川の岸の青柳色まさるらし

春風の吹くとはなけど青柳の姿にしるく知られぬるかも

早蕨

春霞かをれる野邊に少女らし早蕨をとる羣れつゝ行くも

わか草の緑が中のさわらびは紫ふかく尋ねてぞ折る

櫻

櫻ちる山路は知らに白雪の寒からなくに降るかとぞみる
みよし野の山の白雪消ぇぬると見しまに花の雪ぞ積れる

春雨

み冬野の枯生のまゝの淺茅原そぼふる雨に萌ぇ出でにけり
春雨は音靜けしも妹が家にい行き語らひ此の日くらさむ

春駒

信濃なる大野の御牧春されば小草もゆらし駒勇むなり
春雨の晴れにしからに笠原の露うち散らし駒あがくかも

歸鴈

さゞ波のひらの山べに花咲けばかた田にむれし鴈歸るなり
霞わけて鴈歸る見ゆ行く先の遙けきもへばあはれむ吾は

喚子鳥

打ちのぼる佐保の山べの呼子鳥よべど答ふる人もあらなくに
霧かをり月影くらきまきむくの檜原の山に呼子鳥なく

苗代

苗代にしめ引きはへて引く水の豐かなるにも年はしるしも

○大野の御牧　信濃國伊那部。飯田の南西。古の左馬寮大野牧。

○遙けきもへば　遙けき思へば。

○打ちのぼる　佐保の枕詞。

しめはふる小田の苗代奥山の雪消の水に水まさりけり

菫

櫻花散りしく野邊のつぼ菫色うちさえて摘みなむも惜し

はる日の春日の野邊に今日もかも里の少女ら菫摘むらむ

燕子花

かきつばた咲くなる池に風吹けば濃き紫にさゞ波ぞよる

名にも似ず淺澤沼の杜若ふかむらさきの花ぞ咲きぬる

藤花

時つ風いたくな吹きそ田子の浦に咲ける藤波散らまくも惜し

住の江の藤さきにけり香をとめて沖こぐ船もこゝら集へり

山吹

あが駒に水はほらねど打ち寄りて井手の山吹見てや過ぎなむ

山しろの井手の玉川水清みさやにうつろふ山吹のはな

三月盡

春はしも今日のみなれば綺（うすもの）の櫻のきぬもぬがで寢ななむ

今日のみと限れる春を春風よいぶきに吹きて返せ此の春

○はふ　延ふ。しめをひきわたす。

○はる日の　枕詞。春日に冠す。

○花ぞ　熊谷本「花に」

○こゝら　許多。數多。

○ほらねど　欲すを四段活用とした。

○井手　山城國木津町の北方。古來山吹の名所として詠に入る。近く玉水の名所あり。

更衣

大宮に縵(かとり)の衣(きぬ)のしり引きてつどふをみれば夏はしるしも

今朝も猶空は昨日にかはらぬを衣に夏はまづぞ立ちぬる

早苗

ほとゝぎす里なれにけりうま酒を三輪の山田は早苗とるらし

少女等が行きあひのわせを植うるなり立田の神に風祈りつゝ

照射

益荒男がともしすらしも小倉山暗き夜毎に星の影みゆ

晝だにもかしこき山に我がせこが暗き夜毎に照射するかも

五月雨

五月雨の晴間も知らに白眞弓ひだの細江も海をなすかも

ますかたの姿の池の五月雨あやめも見えず波ぞ立ちける

盧橘

たまにぬきて花橘を佩く人を見れば昔のおもほゆるかも

御階邊の橘さけりたちならす右の舍人ら弓な觸れそね

螢

○うま酒を　枕詞。三輪に冠す。大和國三輪市は古來酒に名高い。
○行きあひのわせ　夏と秋との行きあふ頃の早稻。一說、ゆきあひは地名とす。又一說、夏田を植うるに苗の足らざる時同じ苗にあらぬを植ゑつぐもの。
○照射　獵師が夏の夜かゞりをたき之れに近よる鹿を射殺す。

○白眞弓　枕詞。ひたに冠す。

○右の　右近衞の。
○な觸れそね　ねは完了ぬの命令形。觸るゝ勿れの意を强めたる形。

○かざし　挿頭。
○神山に　嶰谷本「神山の」
○杜鵑つまをとひつゝの歌　此の一首嶰谷本になし。
○血あゆ　血流れ出る。
○須兒　賤民の意。

繁りあふあしまの池に影みえて螢飛びかふ宵はすゞしも
ま玉つくをちのすがはら夕露に光をそへて飛ぶ螢かも

卯花

稲荷山祭ちかみか我が宿のかきほのうつぎ花咲きにけり
いなり山けふ祭るらし諸人の卯の花かざし羣れて行きぬる

葵

何故と事はしらぬをあふひ草かもの祭に吾ぞかざせる
皇神のかざしにせよと神山に葵ぐさをし植ゑそめぬらし

杜鵑

降る雨にしぬゝにぬれて杜鵑五月の山を鳴きぞとよもす
杜鵑つまをとひつゝ血あゆまで啼くなる聲を聞けば悲しも

菖蒲

昨日まで須兒（すじ）の刈りつるあやめ草豊のあかりの鬘（かつら）となりぬ
長き根をえらまくほしみ諸人の沼にまどひて菖蒲（あやめ）引くかも

蚊遣火

夕日影匂へる雲のうつろへばかやり火くゆる山本の里

飛火守見かもとがめむ蚊遣火の煙たちたつ遠方の里

蓮

しゞに生ふる池の蓮の花みれば風も吹かなくに心すゞしも

はちすおふる池の汀にたゝずめば衣にほはし清き風吹く

氷室

水無月の十五日(もち)にしあれど氷室山(ひむろやま)衣手寒く風冱えにけり

夏來より秋果つるまで緋幡(あかはた)のたえぬ氷室の山は寒しも

泉

足引の石間(いはま)をしぬぎわく水の落ちたぎち行く風のすゞしさ

風をなみ照りはたゝける夏の日も泉のみこそ涼しかりけれ

荒和祓

さくくしろいすゞの川にいぐし立て夏祓すと人つどふかも

切麻(きりぬさ)にみのさがなさをなでつけて祓ひ果つれば風の涼しも

立秋

琴の緒をさ渡る風の響かすに秋さり來ぬと今はしるしも

今はしも秋は來ぬらし白妙の衣手うすみ風の寒しも

○飛火守　のろしをあぐるを見守る番人。
○しゞ　繁く。
○心涼しも　嶰谷本「心涼しき」
○氷室　氷を貯藏する室。
○氷室山　山城國愛宕郡大宮村。
○しぬぎ　凌ぎ。くゞりぬけて。
○風をなみ　風がなくて。
○荒和祓　嶰谷本「荒木祓」
○さくくしろ　いすゞの枕詞。
○いぐし　齋串。幣をかけたる串。
○夏祓　夏越祓。六月祓。
○切麻　麻又は木綿若しくは紙などを細く切つて、神に供ふる物。
○琴の緒　嶰谷本「琴の音」

○いむき　いは發語、向ひ。

○とつ宮　離宮。

○廣しとふ　廣しといふ。

○たかまどの云々　高圓山は聖武帝の離宮があつた所。萩の名所。

七夕

天の河いむき立てりて戀ひにける心はるけむよひは來にけり

此の夕空に棚引く白雲は君がまうけの天つとばりか

萩

妻こふる鹿の音聞ゆ今もかも眞野の萩原咲きたちぬらむ

秋はぎの匂へる野邊は草枕たび行く人も立ちとまりつゝ

女郎花

わが戀ふる妹が垣根の女郎花白露重みかたむくもよし

狩人も情しあればか女郎花しゞ咲く野邊をみつゝ過ぎにき

薄

み吉野のとつ宮所とめくればそことも知らに薄生ひにけり

武藏野を人は廣しとふ吾は唯尾花分け過ぐる道とし思ひき

露

萩が枝をかざしにせむと思へれど露の散らまく惜しき萩原

たかまどの萩をおしなみ置く露に玉しく宮の昔おもほゆ

霧

待乳山今朝越ぇ來れば霧こめて隅田川原は見れど分かぬかも

名ぐはしきいなみの海も朝霧に見せず過ぎにき旅は憂きかも

朝顔

我妹子と相ふしながら朝な〳〵珍らしみ見ぬ朝顔のよさ

あした昇り夕まかづる宮人の家によろしき朝がほの花

駒迎

望月のみまきの駒は今もかも霧をわけてやあまのぼるらむ

ひだりみぎり馬の寮(つかさ)のさわぐなり貢の駒の今や來ぬらむ

月

かぐ山に生ふる眞榮木(まさかき)枝さやに冱えたる月は神もめづらむ

松浦(まつら)がた限りも知らず照る月に唐土(もろこし)までも思ほゆるかも

刈萱

紙屋川岸にみだるゝかるかやは紙戸の人の贄にや刈るらむ

ねぢけたる人にし見せむ刈萱のそよ吹く風に打ち亂れしを

蘭

鶉なくふりにし里の藤袴もとつかをりの懷かしきかも

○望月のみまき　信濃國の牧場、立科山の麓。今本牧村大字望月。「逢坂の關の淸水に影見えて今やひくらむ望月の駒」(拾遺三、秋)
○ひだりみぎり馬の寮　左馬寮、右馬寮。

○知らず　解谷本「知らに」

○紙屋川　京都市西郊を南流し桂川に合す。紙を製するところ。
○紙戸の人　紙屋の人、紙製造人

○もとつかをり　本の香り。

吾が衣に香はとめつ藤ばかま咲きつる野邊を分けてこしかば

荻

夏過ぎて秋さりくれば我が宿の荻の葉そよぐ音のさびしも

荻はそもいかなる氣よりなり出でしそよげる音の悲しくあるは

鴈

射部人(いめびと)の多かるこゝに秋といへば何をたのめて鴈渡るらむ

春さればきそひていにし鴈がねは心細げに啼きて來にけり

鹿

朝もよし木人ともしも眞土山夕越え行けばさをしかなくも

くだら野の萩の花ちる夕風に花妻こふるしかの音聞ゆ

擣衣

さが風の寒く吹くなべをちの里の衣うつなるこゑ聞ゆなり

松かぜにたぐへてさびし玉川の里の少女が衣うつおと

蟲

秋ふかみ萩の花ちる夕風に聲うらぶれて蟲の鳴くかも

白菅のま野の萩原ちりしけばすだける蟲もこゑ衰へぬ

○こゝに　此の國に。
○射部人　鳥獸を獵る人。
○朝もよし　枕詞。きに冠す。「朝もよしき人ともしもまつち山ゆきくと見らむき人ともしも」（萬葉集一）
○くだら野　大和國廣瀨郡。
○花妻　鹿に配して萩の花をいふ[illegible]谷本には「花のま」とあり。

菊

此の夜らはわたかもおほひ眞白菊豐のあかりに奉らばや

吹上の濱邊はしらず白菊を風のふければ波きよるかと

紅葉

風祭る龍田の山のもみぢ葉は散らでしあれや雪ふるまでに

東(ひむがし)の山の紅葉ば夕日にはいよ〳〵紅くいつくしきかも

九月盡

秋は今日盡きぬと知るにいとゞしく蟲の啼く音ぞ哀れなりける

この夕置ける白露夜のあけば霜となりなむ秋しいぬれば

初冬

今朝よりは冬さり來ると知ればにや外山の梢風荒くみゆ

けさよりは風ぞ寒けき白重かさね著ぬれど風ぞ寒けき

時雨

人皆は秋を惜しめりその心空にかよひて時雨れけむかも

もみぢ葉を染むるはほせり然れども時雨しば降る頃はわびしも

霜

○吹上の云々　「秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか波のよするか」(古今五、秋下)

○風祭る　立田山には風の神を祭る。級長戸邊命、級長津彦命、即ち立田姫、立田彦の二柱。

○知るに　蝌谷本「きくに」

○ほせり　欲すを四段活用とした
○しば降る　頻りに降る。しば鳴く(頻りに鳴く)の類。

をし鴨のすだく入江の村蘆にむら／＼白く霜置きにけり
霜はたゞ白しと思ふに霜おけば白菊あかく匂はすやなぞ

霞

松の葉のふる葉も降れり住吉のあらゝ松原霞ふれれば
神さぶる伊駒がたけは雲とぢて霞降りくる音ぞかしこき

雪

皇(すめらぎ)に奉るなるむらさきのみかさの山に雪はふりけり
天ぎらひみゆきふれれば巻向(まきもく)の檜原もわかず今はなりぬる

寒蘆

難波江のほり江の蘆の霜枯れて汀あらはに波のよるみゆ
風冱ゆる池の汀の枯蘆の亂れふすなる冬はさびしも

千鳥

白波の來よる浦わの月淸み此の夜ら更けてあそぶ千鳥みゆ
難波潟潮干の名殘夜はたけて淡路の島ゆ千鳥さ渡る

氷

よし野川淸き汀に氷るていよ／＼淸くおもほゆるかも

○天ぎらひ　天霧り。きらふはきるの延音。
○卷向の檜原　大和國初瀨山の西に竝びて卷向山あり。その山麓を檜原といふ。
○寒蘆　鵜谷本「寒」

妹が手をとろしの池の氷れれば水を戀ひてや鴨しなくらし

水鳥

泡雪の降りし敷ければをし鴨の心ゆるびて岸にすだけり

冬さればい訟し亂るゝ蘆村に味村さわぎあさりするなり

網代

網代打つ波の音聞ゆさ夜嵐もみぢ葉ごめに氷魚やよるらむ

夜半毎に網代もるなり篝火を氷魚は好みてよるにやあるらむ

神樂

風はやみ庭火のかげも寒けきにまことみ山は霰降るらし

天ぎらひ雪うちちれど諸人の星うたふなる聲さやけしも

鷹狩

降る雪にきそひ狩する狩人の熊のむかばき眞白になりぬ

ふる雪に御笠もめさず皇子(みこ)達のみ狩せすなりみ鷹勉めよ

炭竈

雪まだき冬木の山は炭竈の煙ならでは見らくものなし

炭竈の煙の末を見わたせば雪げの空にわかれざりけり

○妹が手を　枕詞。とろに冠す。「妹がてをとろしの池の波の間ゆ鳥が音けに鳴く秋過ぎぬらし」(萬葉集十)
○とろしの池　和泉國泉北郡。
○蘆村　蘆群。
○味村　あぢ鴨の群。
○見らく　見るの延語。

○わびしら　嶰谷本「わびしろ」とあれど寫し誤りであらう。

○除夜　嶰谷本なし。

○主水　官名。主水司。
○此の夜ら　嶰谷本「此の夜々」とあり、此の方がよからう。

○玉ほこ　道の枕詞。

○ふみ　關所を通過する切符の類

爐火

おいらくの獨りあるなるわびしらを埋火なくばいかで明かさむ

み雪ふる夜半は殊更埋火のほとりに人のさはに集へり

除夜

斯くしつゝ吾が身の老は增れども春さり來なる事ぞ嬉しき

此の夜らの寒けくもあるか主水(もひとり)のまつらむ冰いよゝ厚けむ

初戀

春の日の春日の野邊のさ蕨のもえでそめぬるわが思ひかも

玉ほこの道行きぶりに見し人は行末知らぬ戀となりなむ

人不知戀

水たまる池の玉藻の下にのみ吾こそ戀ふれ知る人なしに

山深み人もすさめぬもみぢ葉は我がごとあだに色增るらむ

不逢戀

道もなき荒山櫻めにのみしうつくしみ見て折りがてぬかも

我はやもふみをしもたぬ旅人か相坂山を越えがてにする

初逢戀

くれなゐに染めし長紐氣ながくも戀せし心今宵解けにけり

恨みわび月も經につゝ夏衣うらなく今宵著てふしぬかも

後朝戀

道芝の露踏みしだき歸りにし吾が裳裾ゆもわが袖濡れぬ

語らむと思ひしことの殘れれば今日をいかでか吾暮してむ

逢不逢戀

中々に逢はざらましをそれよりに日にけに人の戀しさましぬ

かへらむと我がせし時にわが紐を結びし姿いつかわすれむ

旅戀

常にみて安らにありし吾妹子を旅をしすれば戀ひ侘ぶるかも

大君のみことかしこみうつくしき妹を振り捨て旅する我は

思

渡津海の底し知らまくほりせなば吾を尋ねよおもひ語らむ

思ひ餘りいめにもがもと敷妙の枕しすれど目もあはぬかも

片思

吾はこへど汝は背くかも汝を背く人をこはせて我よそに見む

○後朝　きぬ〴〵。男女相會したる翌朝。

○中々に　「あひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり」（拾遺、戀二）

○日にけに　一日々々と、日のたつにつれて。

○旅戀　解谷本「旅衣」とある。

○目もあはぬかも　解谷本「目もあきぬかも」

置く霜をかたみに拂ふをし鴨もしやさしみするか片戀ふ我を

恨

秋風の吹きしく野邊の葛の葉のうらみ渡るを人知らじやも
相おかぬ人は恨めし四十餘り七つへにける吾が年をのみ

曉

ひむがしに向へる家は朝あけに明け行く空を見つゝ樂しき
うきものとせし曉をかきかぞふ老いてはたゞに待たれぬるかも

松

住の江の岸の松の木ものいはば神代の事を我聞かましを
住の江の苔むす松は玉ちはふ神の御代ゆか生ひ初めぬらむ

竹

淸らけく涼しき宮の吳竹は晝しさやがな夜なさやぎそ
百世ふる翁の舞のたちつ居つをがむおまへの竹なびくなり

苔

み吉野の青根が峯の苔筵八重敷ける如むしにけらしも
苔筵常に似ぬかも年ふればいよ／＼青くいろまさるなり

○玉ちはふ　神の枕詞。
○夜な　嶰谷本「秋な」
○百世ふる翁云々　藤原濱主の舞
○いろまさるなり　嶰谷本「色まさる見ゆ」

鶴

淸きかも白波來よる住の江の岸に羣れゐる鶴をしみれば

千年かねて遊ぶてふこと誠かもむしろ田に今も鶴遊ぶなり

山

二つなき富士の高嶺のあやしかも甲斐にも在りとふ駿河にも在りとふ

神代ゆは好(よ)せる山は空にみつやまとに立てる天の香具山

河

いよゝ淸く成りにしといひし象(きさ)川は今いかならむ見まほしきかも

唐衣たてぬき川に風吹けばさゞらがたなし浪の寄るかも

野

武藏野をい行く旅人つとにとかうけらの花を折りてかざせり

楯竝めてとよみあひにし武士の小手指原は今はさびしも

關

いにしへに行きはゞかりし不破の山關の關屋は跡だにもなし

相坂の關は名のみか過ぎにける世をば止めず又も逢はぬかも

橋

〇風吹けば　岡谷本「聞ゆるは」

〇小手指原　今の武藏國小金井附近。南北朝の古戰場。

○さゝがねの　蜘蛛にかくる枕詞
○八橋　三河國八橋。

○炎燒　蠏谷本「火燒」

○松下の社　蠏谷本「松のの社」

○園柳を　蠏谷本には此の題がなくて、前の去年植ゑし云々の題で詠んだことになつてをる。

春されば霞たな引く久方の天の橋立ゆたに見ゆるかも

せきつゝぞ水引くらむかさゝがねの蜘手に渡す是れの八橋

右の御歌は寶暦の年の中に堀川初度の百首の題にて遊ばしたるなりされど今十題殘り侍りたるをば殿の炎燒の事ありてよみのこさせ給ひたるなり

寶暦五年正月十四日に園の松下の社に詣でての歸さに日なみのいとうららなりしかば詠める

いつしかに池の氷の解け初めて心長閑けき春は來にけり

梅

雪よ霜降りにふるとも咲く梅の花のあたりはよきて降らさね

去年植ゑし柳のいとよくしげれるを見てよめる

植ゑし時は枯るべく見えし我が庭のしだり柳のめでたくなりぬ

園柳を

古の慕はしきかもかづらせでたゞに見むかもこれの柳を

九月十三夜　旋頭歌

いかさまに思ほしめせか遠つ御神のやゝ寒き此の夜の月に宴（うたけ）そめしか

明和六年七月七日

此の夕さやけき星は織女の君來ますぞとしける玉かも

おなじ九月十三夜

青雲の白肩の津は見ざれども今宵の月に思ほゆるかも

きくの花折りかざしつゝ諸人の遊ぶ今宵ぞ月照りにつゝ

時雨を

時雨ふる時はうけれど木々の葉の染まるともへば樂しくありけり

冰

長月に閏あればか神無月なかばにもたらず冰るにけり

ながめがしはを

丈夫（ますらを）のかぶとに立つる鍬形のながめ柏は見れどあかずけり

いはふことありて宴（うたけ）せし頃

人も我も心のどけししかれこそ萬代經らむ事の本なる

祈年祭

岩ばしる淡海（あふみ）の白猪ひこづりて神の御贄と今日祭りけり

○遠つ御神　宇多上皇。

○青雲の　白の枕詞。青雲は本白雲なれば冠すると（冠辭考）

○ながめがしは　柏の一種、芽の特に長く出づるものと。

○丈夫　嶰谷本「武士」

○しかれこそ　嶰谷本「こそ」とあり。脱字。

○ひこづりて　引きずりて。

春日祭

稻津實を春日の祭齋女(いつきめ)の妙手(たへて)ゆ神は甘(うま)うけまさむ

まつのへの神まつる年のはの十一月二十三日といふにぬさの樂とて舞樂をなむ供し奉りけるそが中五常樂の序と破のあはひに詠をなさせけるに詠めりける歌

瑞垣のかかれとてしも昔より神さびけらしこの岡の松

しめはふる岡の齋垣(いがき)の淸ければいもひも安し幣も安けし

奉る安御幣(みてぐら)のやすらかに守らひたまへ此のもろ〳〵を

諸々もいよりつかへよこの祭わぎへのみかは諸々の爲

鳥取の侍從の庭のさまえもいはずおもしろきが中に大御神の賜はせ給へるてふ五十まりの木のわきてめでたう榮えぬるに實に此の遠つ祖の朝臣は御惠みのこよなかりしぞかしと思ひ出でて

大神のいつくしみ深くませりとは庭のつらにも著(いちじろ)く見ゆ

仲子のもとより櫻に桃を折り添へておこせて歌をこひければ

櫻花はなにのみなもつかへそよ桃の實になる事を思ほせ

梧桐鳳凰

○甘うけ　甘心して受ける。心もちよく供米をうけ入れる。
○五常樂　五聖樂、舞樂の一。
○序　雅樂の緩急の拍子にて始めに起る調子。
○破　樂曲の拍子次第に細破なる義。(序、破、急の別がある)
○はふ　延ふ。ひきまはす。
○齋垣　社頭の垣。
○いもゐ　齋居。ものいみをして居ること。
○大御神　家康公。
○なもつかへそ　なづむ勿れ。かかはる勿れ。

み園生の青桐咲けり香をとめてうづのさが鳥今か來啼かむ

孔雀

たまどりの八尋のたり尾開き立てめぐる姿は見れどあかずけり

嘯鳥

いづこより籠ぬけ來にけむうそ鳥の吾家のつまの梅に遊べる

蔣澤鷄

蔣かげに浮むさはかけそのこもにとさかの匂ひはえていつしき

太平雀

さゞら枝をしばうつうへにうつ雀汝が打つ尾羽を吾みはやさむ

紫雲英椋鳥

かも草の咲ける岡邊にむく鳥の羣れてあさるは何得るとかも

蒲公英河原弱鳥

花散れるふぢなが草をすく弱のいたわめつゝも其の實はむしも

鴻　旋頭歌

吾が背子が門たゝくかと出でて見れば前の沼におほかりすだく聲にざりける

宿木鷲

○み園生　嶰谷本「み園部」
○うづのさが鳥　瑞祥の鳥。鳳凰
○たまどり　孔雀。
○たまどりの八尋めてぐるたのたり尾開き姿は見もあかずけり　下の如く嶰谷本によつて改めた。
○ら　さ枝の歌　さゞら波をしばうつらへようづ雀とあつたが嶰谷本によつて下の如く改む。
○ふぢな　蒲公英の古名。
○いたわめ　たわめ。
○鴻　嶰谷本「嶋」とあるが、誤りであらう。
○ざりける　嶰谷本「ざりけり」

古寺の垣ほの杉に夕さればさはにすだけりごゐ鷺はこれ

篦喙鷺

物もなさで世にふる人はへら鷺のむなゐざりすに猶劣りけり

鴛鴦によする

から國にありと聞くなるおもひ鳥思ふ心を妹に知ればや

白鴈

古にめづらしみせし白鴈の今は東にさはにし來なり

乞雨鳥

けさいたく雨乞鳥のなけりしぞさ少女まけて早苗とらさね

長尾鳥に寄する

天ざかるひなに多かるしなが鳥長き此の夜を獨りか寢(ね)らむ

安鳥

百鳥のそこばく啼けるそが中に安鳥(あとり)の聲の著(いちじる)きかも

都鳥

なが名をば誰か令(おほ)せし都鳥都には住まで鄙に住めるを

櫪鳥

○知ればや　知らせばや。れはらせのつまりたる音。

○來なり　なりは感歎の助動詞。

○まけて　豫め用意して。

○早苗とらさね　早苗とりてよとの意。ねはぬの命令形だが輕い形。

○鷗鵜の　枕詞。
○佃の島　東京市靈岸島の東。
○わらうづを云々　藁履を脱ぐ、地位を去れるをいふ。
○君が　解谷本「君に」
○こは云々　この奥書一本にあり藤原直臣は書寫した人であらう。序文の筆者は未詳。

吾が宿のそがひに立てる櫨の木に櫨鳥來啼く頃ははや來ぬ

　　佃島にいきける頃

かく來ては珍らしみきけど此の波の夜な〳〵響く蜑人の伏屋は

鷗鵜の佃の島にしばし居て波より出でし月を見しかも

　　茸狩に木下川わたりに行きけるとき小松川にて

名にぞおふ小松川邊に誰植ゑし小松の色は見れど飽かぬかも

　　茸とりて詠める

わらうづをぬぎ捨てし君が慰めと木の下川邊茸摘みてけり

　　中川を過ぐるほど

秋深き龍田の川はかくぞあらむ入日さす雲のうつる川面

　　歸さなれど景色いとことに見えければ

晝行きし川にしあれど夕されば靜けくゆたに新しき如

天降言　終

こは田安の故君のみ歌なれば文化四の年正月二十八日になも藤原のなほみ寫す

しづのや歌集

河津美樹

しづのや歌集

河津美樹

春たつ日よめる

春がすみたたるを見ればくゞもりし神代の昔思ほゆるかな

やんごとなき殿の御母君の五十の賀に　寄若菜祝言　松契遐年

君が齢のべてふのべに諸人の摘める若菜は千世のかずかも

きみがけふ契る心やかよふらむよろづ代うたふまつ風の聲

若菜をつみて人におくるとて

君をまつ思ひをのみぞ摘みぬればかたみにみたぬ若菜なりけり

古道が母の八十の賀に河のべの春といふ題をわかちてよめとありければ

鈴鹿河八十瀬こえぬる浪の上に行末とほくたつかすみかな

梅のことば書きたる奥に

此のゆふべ春風たちて梅の花ちりにも散らせさかづきの上に

春風に散りくる梅のさかづきにうかべるごとに酒は飲まなむ

○古道　小野古道、又、長谷川謙益眞淵の門人、盲目にして鍼術を以て名あり。古道家集がある。

○飲まなむ　なむは願望の助動詞

人の許にて

此の宿の梅の匂ひをとめくれば鶯さへもこゝら鳴くなり

夜の梅を

梅の花ものがたりしは夢ならむ香ばかりさそふはるの手枕

名所の花

ゆふづゝのか行きかく行き見れど飽かぬ吉野の山の山櫻花

さゞなみの志賀の山邊を越えくれば櫻かざして立つ人やたれ

春神事

春されば花折りもちて朝もよし紀人のいはふ三くま野の神

曲水の宴するかた

水上は唐土にまれ咲く花のもゝのみやびはやまと言の葉

櫻のふみかきたる奥に

こととはぬ花ならませば今もかも神代ながらの人もあらましを

花の頃に

さかぬまは嬉しと思ひし春雨の厭はるゝものと今は成りにき

水に花のちる所

○こゝら　數多。

○ゆふづゝ　金星。宵の明星。

○櫻かざして　「百しきの大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮しつ」（新古今二、春下）

○朝もよし　枕詞。きに冠する。

○曲水の宴　川に沿うて杯を流しその杯が己の前を通過する時詩を賦したもので支那より傳來した遊び。古、我が禁中御溝水にて行はれた。

さゞなみや比良の大わた風吹けばみなわにうかぶ山櫻かも

なせの君過ぎたまひて後人のもとより飛鳥山の櫻の枝をおこせけるに

去年の如(こと)あすかの岡に咲くらめど昨日の人はみえず成りにき

春大和國をおもひてよめる歌

今もかも咲き匂ふらむ大和なるこせの春野のつら／＼椿

ことさやぐくだらの原の鶯は春まちつけていかに鳴くらむ

山吹

昨日今日八重山吹はさきにけり井出の川瀬に春やゆくらむ

初夏藤の花を

なつかしきいもが衣のむらさきのにほひよろしき池の藤波

山里に時鳥ききにいきて

心とくきても聞くかな卯の花のうき世のほかの山ほとゝぎす

祭の御車にさずきより物いひやるかた

ひきつれむたづきもしらで諸蔓懸けつゝ今日を忍びつるかも

寶曆十一年あが君ふたらの大神の御祭の事うけたまはりて卯月十日あまり立ち出で給ふに從ひゆく道すがら詠める歌

○みなわ　水沫。
○なせの君云々　夫の歿後。
○こせ　大和國葛城郡と吉野郡との境にある。巨勢山。
○つら／＼椿　枝葉の繁き一種の椿。
○ことさやぐ　外國の言語の解し難きを云ふ。
○くだらの原　大和葛城郡。韓人の歸住したる地。
○井出　山城國木津町の北方。古來山吹の名所。
○さずき　棧敷。

夏きてもまだ袖寒きさごろものをつくば山にのこるしら雪

ゆけど猶行き過ぎがたき杉村のしげきがなかにかほ鳥のなく

ふたら山にのぼりて

夏來てぞ櫻さくなるふたら山ふたゝびはるをけふ見つるかな

御みやにまうでて

下野やふたらの山の二ごゝろなくてぞ靡く四方のたみくさ

くろかみ山を見やればかほ鳥の聲遙かにきこゆ

をとめらが黒髪山の木の間よりあをよぶこ鳥聲きこゆなり

かへさの道は夜をもわかず急ぐためしのまゝに誰も〳〵足はそらにてかつねぶりに眠る壬生てふ所をゆくにこゝに河なむあるわたり給はむ程だにめさまし給へとおどろかされて見やるに目もいとたゆし河の名をとへば姿川となむいひけるに

都出でて幾日もあらぬにすがた河やつるゝ影ぞ波にうつれる

祖父の九十八になり給ふ年のさ月二十日あまり賀茂の縣主荷田の在滿のうし橋の枝直千蔭など數多までき給ひて前栽の竹を詞にて齢の高きをことぶき給ふ歌どもよみて給ひければ

○かほ鳥　よぶこどりの異名。

○ふたら山　二荒山。下野國日光山。

○黒髪山　男體山の異名。

○壬生　下野國。栃木町の北東。

○姿川　宇都宮市の西を南流して思川に合する。

諸人のよろづ代うたふことぶきに竹も心のなびくべらなり

村田の春道がなり所にいきて人々と共に物をよめる　うきくさ

池なみにかよりかくより萍のうかれてのみやけふは遊ばむ

遠山夕立

あしほ山夕立すらし筑波ねのそがひの雲にかみの音する

玉河のほとりに日くるゝ

玉川のかは戸ゆきくれ島つどり鵜飼がともといほりす我は

ふみ月七日の夜人々つどひてよめる

天の河みくまり草ぞなびくなる今やわがせこみ舟寄すらし

萩が花を折りて人のがりやる

見せばやにしひて手折りしみわ山のしげきが本の露に濡れつゝ

すまひを

めしあはすすまひの庭を蹈みさくみ我は貌にてたつ人やたれ

かた庭を蹈みはらゝかし立ち向ふ人こそ今日のぬきてなるらめ

八月望の夜

秋の夜の月清ければしきたへの枕の夢ぞうとく成りぬる

○村田春道　春海の父。
○なり所　別邸。
○あしほ山　筑波山の北。今の足尾、加波、佛頂等の總稱。
○すまひ　相撲。
○蹈みはらゝかす　踏み散らす。勢ひよく蹈みなす。

晝みれどあかぬ玉河きよき瀨の浪に最中の月すみわたる

寶曆五年八月ばかり賀茂の大人の出居造り給ふに人々つどひて祝の歌よめる時によめる

昔なすま木の柱のふとしくもたてる心は代々に動かじ

雁

秋のきる霧のころもの薄ければ雁がねさむく猶きこゆらし

見わたせばわさ田の穗のへ霧りあひてみ吉野の里へ雁鳴き渡る

夜深く雁を聞きて

ぬば玉の夜更けて來鳴く雁がねは物思ひをる我ぞききをる

落葉を

かひもなく散るもみぢ葉か白雲の龍田の神にまひはしつれど

かみな月のもみぢを

かんな月しぐるゝ雲に隱ろひて色みえぬまに散りか過ぎなむ

時雨を

むさし野のをぐきを出づる月影を見るまさかりに時雨降りきぬ

冬遠情

〇出居　客間。

〇をぐき　小岫。をは接頭語。岫は山の洞穴あるもの。

夕あらしふかぬ都もさゆるかな比良の高嶺にみ雪ふるらし

雪のふりたるに人々船にのりて見るかた

漕ぎかへり見れどもあかず湊江の入江の蘆にふれるしら雲

こしの白山に雪のふるかた

おしなべてよそにもふるか白山の雪の碎けて散るにやあるらむ

詠雪

秋過ぎて　冬しきぬれば　吹く風も　日にけに寒く　をちつ日も　きそもくもれり　今日もかも　雪はふらなむ　とほじろき　野に打ち出でて　降る雪に　雪の遊びせむと　ますらをの　友かきつらね　駒なべて　武藏野の原に　我は來にけり

あま雲のはるゝまに〱武藏野はみながら雪に成りにけるかも

詠道

青雲の　むかぶすきはみ　天地の　そこひのうらに　八百萬　千萬國の　國のするゝに　道あるとへど　そがみちは　さかしら人の　心もて　つくれるからに　そが戸より　いゆける人は　道のまがに　あふと聞くなり　いはまくも　かしこけれども　すめろぎの　神の御國は　天地の　始めの時し　神ろ

○日にけに　日數の經過するにつれて殊に。
○をちつ日もきそも　一昨日も昨日も。
○むかぶす　向伏す。
○道あるとへど　道あるといへど

○はり給ひ　開き給ひ。
○うらやすの國　心安泰なる國。
○井出の山吹　山城國木津町の北方。古來山吹の花の名所。又近くに玉水の名所がある。

ぎの　大みこともて　あめつちの　なしのまに〳〵　はり給ひ　定めたまひて　久方の　天のます人　かれゆかば　よき戸ならまし　これゆかば　やすけからむと　神ながら　をしへ給ひし　とほじろき　道にしあれば　うらやすの　國と名におひて　たぬしかりけり

あめつちのなしのまに〳〵すめろぎの定め給ひし道をゆけ人

人のもとより玉河の花のいろとは契れども今は蛙のねにもこそなけとあるに答ふ

かくもれむ終のためしと成りにけりかはづ鳴くてふ井出の山吹

又忍ぶ身の涙は袖につゝめどもやるかたなきは心なりけりとありければ

誰故にしのぶ涙を袖につゝみもらしもやらで戀ひやわたれる

又春くれど涙の氷觧けやらで物おもふ身と人もしらずやと有るに

我はたゞなみだの雨のいやつぎにつぎて降れゝば氷るまもなし

世にたづきなき人三人四人吾を頼みこしけるに今はいとわびぬれば人やしなふべき身にあらずされどいかでと思ふ頃たづの鳴き渡るをききて

世の中のうき人の子をはぐゝまむ翅かしてよあめの鶴むら

又おもひわづらひて

○飛驒人　飛驒工匠。古昔每年飛驒の國より京師に召し出されし工匠。こゝは立派な工匠。
○おしてる　枕詞。

○しづ子　弓屋倭文子。縣門三才女の一、尾張侯の夫人に仕ふ。寶曆二年歿、年二十。歌集「文布」は本集に收めた。その外、倭文子歌集伊香保紀行の著あり。

天地におほふばかりのつばさもが憂世の人をはぐゝみなまし

我がぬしの君おしてる難波の大城まもるべき仰言給はりて文月二十日まりに立ち出で給はむとすうまきは先づゆきてしか〴〵の事はかれとのたまふめれば二十日の日のつとめて立ちいづおくりする人々板橋といふ所より皆歸ればはたわかるとて母の御もとへきこゆべくて

飛驒人のけづる板橋たひらかにいゆき渡ると人につげこそ

ゆくてに伊香保ろの山みゆいにし年しづ子といひしがそこに湯あみせし時の道行ぶりの言の葉のをかしかりけるなど思ひ出でらるゝに其の人も今は世にあらずなむなりぬる

いかほ風吹きな亂りそしづ機の袖にほはせしそひのはり原

武藏と上野のあはひにかんな河てふ河を渡る

ふる里のかたに流るゝ神な河水のまに〳〵ことづてやらむ

松井田の驛を過ぐる程より左も右も前も後も白雲の八重たつ峯のみいやたちに立ちたり

けふよりは見るまさかりに山々の姿ことにもなりまさるかな

碓氷の山を越ゆる日夜の間にいさゝか雨降りてやみぬ在明の月は山のは

に猶つれなくて空はあけわたれりゆくてに千種の花咲きみだれつゝこ萩が本をわけつゝゆけば旅のしるしににほふものから衣手はいと露けくさむし

ふるさとをいでしながらの麻衣うすひの山のみねのあき風

たむけに到りて行く先かしこき道をも平らかならむ事を神にや申すこゝは上野と信濃のさかひになむあるは昔小碓の命えみしをことむけ給ひて歸ります時相摸の海に沈み給ひし橘姫のみことをしのびましてあづまはやとみ言のらせ給ふ所となむききて顧みすればあづまの國ばらの山どもいとよくみゆ

うすひ山わが越えくればさ衣のをつくばやまに雲かゝるみゆ

下の諏訪にいたりて大神に詣づ木立いとふり宮居かんさびて尊し湖の面青くめもはるばるなり

今日幾日山より山を見つゝきてともしくもあるか諏訪の湖

鹽尻の嶺をこえて洗馬てふ所へうつりゆくあひだは限りもなき大野らになむ有りけるこゝは昔甲斐と信濃のますらたけをの軍したる所にしてうたれたる者の塚ども今もありと聞きて

○ことむけ　討ち平らぐ。

ものゝふの草むす屍としふりて秋風さむしきちかうの原

ゆくてに左に宮の尾といふ山なむあるこは木曾の義仲の太刀の痕ありとぞいふ

落ちたぎつ谷の岩浪山ひゞきおとたかしもよ代々はふれども

妻籠のやどりを立ちいづやう〳〵信濃國をはなれて美濃國にうつれり猶山路にはあれど國がらにや山の姿ものどかにして道のほどはじめてやすかればいとゞ故郷は遠ざかるものの人も我も嬉しとおもへり

みすゞ刈る信濃の山路越えはててみの安けくもおもほゆるかな

うるまといふ大野を行くに村雨降り來れり蓑笠を乞ふにもてこしは失ひついかゞせむと下部がいへばかたへなる人うるまにて失へる事やはあるといふに

うるまにてわが失へるかゞ蓑を取りきし人やなづけ初めけむ

美濃と近江のさかひなるいぶき山横をりふせりこの所は昔清見原の天皇大友の皇子と御軍ありしをり天皇は野上の行宮におはしまして高市の皇子はわざみ野にそなへたてて御いくさをあともひ給ひ天の下をさだめ給ひしよりいと後の世にしも數多たびの戰ありて世々の天の下はこゝにし

○きちかうの原　桔梗原。

○妻籠　信濃西筑摩郡。今の吾妻村。

○みすゞ刈る　みは接頭語。すゞは篠。信濃につゞく。

○うるまにて云々　得るにかけて失ふことなしと。

○清見原の天皇　天武天皇。

○高市の皇子　天武天皇の皇子。壬申の亂に大功があつた。

○わざみ野　今の關ケ原近く。

て定まりぬる哉とゆゝしくも畏くもおぼゆ

山も動き河もなりつゝ天の下さだめ給ひしわさみ野ぞこれ

夜をこめてやどりを立ち出ですり針峠にいたりぬればやゝあけはなれたりみわたせば

いぶき山いぶく朝風吹きたえてあふみは霧の海となりぬる

おいその森を見つゝ過ぐ

あふみなる老その杜のはゝそ原風よりさきに立ちかへりみむ

露しもはいたくなおきそ柞原おいその森にたてりと思へば

猶道ゆきぶりの事どもは日記にしるしつ難波にいたりてまた人の家に在りけるほどに月のいとおもしろかりける夜舟をうかべて

難波戸を漕ぎ出でてみれば吾妹子とすみだ河原の月をしぞ思ふ

九月十三夜人々と共に月を見て

なが月の月清ければさきもりはなべてあづまの方に向へる

しはすのつごもりに人々つどひていふことは只故郷の事のみなり立ちかへらむ日を今よりしもおよび折りつゝ

一夜あけば今年といはむ嬉しさに暮れ行く年は思ふ人なし

○はゝそ原　はゝそに母をかく。はゝそは柏の古稱。

○および　指。

○秋成　上田秋成、文化六年歿、年七十八。

きさらぎのすゑ墨の江にあそぶ

すみの江の岸による波立ちかへり又も來てみむ岸による波

つゝみもて歸るよしもが墨の江の濱邊にかすむ松のむらだち

やよひの半ばばかり雨のふりければ

思ふ人ありとはなしに春雨のふるさとのみぞ戀しかりける

同じ時鴈を聞きて

春雨にうらぶれをれば霞みつゝ越路へ歸る鳥の音ぞする

高月叔邦が吉野へゆくと聞きて

よしの山雪か雲かのけぢめをもよく見てきませよき人よ君

難波なる秋成が馬のはなむけして白雪もいゆきはゞかる富士のねのあなたにかへる人のわかれはとよめるに

あづまぢの富士のしば山しば／＼も馴れて物思ふ別れするかも

一とせの任はてて八月十日あまり大城を出でて二十日まり三日故郷に歸りぬうからやからつゝみなくてつどひゐたり嬉しき事限りなし歸さの道は君にしたがひこしかば夜もいをねぬばかり事繁くて何事をもえかきつけず

師がよみすて給ひし種々のわづかに心にしるしとゞめて侍りしを、さぬるとりの年十餘り三年のたむけ草に物すべくはかりつるを、打ちつゞきてあらぬのこき色にそみつゝ籠りてのみ侍りしかば、今は徒らになしはつべきを、こたみ縣居の歌集おほしたてるたよりのよろしきにとりそへて侍るも、このふた本の過ぎにし人々の言の葉を行く水の世に絶えせずば、はつせ河ふる河のべのふるきを忍ぶ人のてならひにもとてなむ。

阮　秋　成　書

○たむけ草　手向の爲の料。

○縣居の歌集　賀茂眞淵の歌集。

しづのや歌集　終

杉のしづ枝

荷田蒼生子

蒼生子家集杉のしづえ

花をこひ月を思ふにつけても心々を見給ひけむ古の例は、かけまくも畏きものから、今も猶ことにつけつゝいひいづる歌にしも人の心は現はるゝものぞかし。荷田の刀自はつぎねふ山城の稲荷はふり東麿の翁の娘なるが、よしありて此の東の大城のもとに參りきて年月をへにけり。ちゝのみの父の教へを守りて千代のふる道ふりぬる書どもよりして、後の物語ぶみをさへによく見渡しつゝ、暗部の山のたど／＼しき限なく、朧の清水覺束なからねば、やんごとなきわたりにも春の梅津のかぐはしき名を聞えあげて、鳥羽のわたりのとはにめしまつはしき。刀自の歌のさま男山のをゝしきもあなるは、常の心おきていさゝめにもたをやめのくね／＼しきならはしなくて、賀茂のみたらし底清く、淀の川水淀める筋しもあらぬ心から、おのづからいひいづることもしかなめり。されば音羽の山の音にききてくるす野のくる人多く、友間の友垣にしもともしからずなむありける。まろいはけなかりしより物學べり

○つぎねふ　山城の枕詞。

○暗部の山　鞍馬山の古名。暗黒の義に因む。

○音羽の山の　音といはん料の序（くるす野　山城國の栗栖野。くるといはん料の序。

し水鳥の賀茂の大人は、かの荷田の翁によりて古き書らもあきらめられつれば、刀自がいろせ在滿甥ののり風ら共に武藏野の縁(ゆかり)あるが中に、刀自は殊に深草の里の深くむつびかはしにけり。縫子は刀自に年頃物學びたりけるが、殘れる言の葉の山の名におふ嵐の風にちりぼひなむことを、をしほの山のをしみ歎きて櫻木にゑりて、長岡の長く傳へなむとするに、此の集に名を記して其のわきかいつけてよとこへり。刀自のおひたち常の有樣は、淺草の金龍といへる寺のおきつきの石文に詳しければいはず。そも〳〵荷田の翁よりしも、其のいろせ在滿この刀自まで、稻荷山をのへにたてるすぎ〳〵に、其の名高かるはいとしもめづらかにめでたきわざならずや。かれ此の集の名を杉のしづゑとおほするなりけり。時は寛政七とせにあたる年の彌生に、橘の千蔭しるす。

○水鳥の　枕詞。鴨、立つに冠する。
○いろせ　兄又は弟をよぶ稱。
○在滿　東滿の甥、その養子となつた。作者蒼生子の兄に當る。
○のり風　荷田御風、在滿の子、作者蒼生子の姪に當る。
○縫子　菱田縫子、作者蒼生子の弟子。
○をしほの山　山城國大原山の別名。大原山は嵐山の南方。淳和天皇の御陵あり。小鹽村近くあり。

○よみそむる　數へはじめる。

杉のしづ枝

荷田蒼生子

む月朔日春たちければ

む月たつけふを始めによみそむる春の日數は長くもあらなむ

年のあしたによめる

あけぬとて名のる鳥の聲の中に山際かすみ春はきにけり

元日ふるき男の女の許にきて物などいふ

けふばかりこと忌すればふる年のふるき歎きを人はそへけり

春のはじめによめる

み吉野の岩のかけ道とほければ又も憂世の春にあひにけり

四十になりける年の春の始めによみ侍りける

けふよりは老といふ名をおほすなる年とはしれど春ぞ嬉しき

元日筆とりて

春といへどまだ霞まぬを人皆の睦ましむてふ月はたちけり

○兼好のぬしのいひおき云々「命長ければ恥多し長くとも四十に足らぬ程にて死なむこそ目やすかるべけれ。」(徒然草)

○松もひき云々　古、正月子の日に野に出でて小松を引き千代を壽ぎ若菜をつみて遊ぶ。

春のはじめに兼好のぬしのいひおき給らける言の葉おもひつゞけて今年四十あまり一つの年になりけるを思ひてひとり言にかくぞ

たらぬ程と人のいひてし數よりも餘れる年を數へそへけり

春の始めに

朝日かげ昔の春にたちかへる心づからや殊にのどけき

春の始めの歌に

松もひき若菜もつまむとばかりを思ふがほどぞ春は樂しき

元日に林諸鳥のもとへ文やるとて藻をつゝみたる紙に戯れに書き付けゝ

此の年もかよりかくよりなびかひて契るしるしの玉藻なりけり

六十あまり三つの年元日筆を試むとて

嬉しきもうきも數へて六十あまり三つの朝に又あひにけり

辰の年の始めに

人皆のあなうといひし年はくれてけふたつ春ぞ豐けかりける

去年は世の中さわがしく人々うきことありければなり

春のはじめの歌とてよめる

あだなりと人はいふとも此の春は花に心をそめつくしてむ

○袖ふりはへて　袖を連ねてわざわざ。

○は山　しげ山の對。

おいぬとて心はなどか花鳥の春のいろねを思ひすてめや

名所早春

富士川の氷くだけて流るめり高ねの雪も春をしるらむ

海邊初春

青海原かすみわたりて千早振神代のまゝの春を見るかな

名所早春

不二のねの雪もかすめる昨日けふ田子の浦びと春やしるらむ

富士のねの煙とともに霞むめり裾野の小草もえやそむらむ

霞を

春日野に袖ふりはへてゆく人はなべて霞の衣著にけり

野徑霞を

心ゆく春のみやびは思ふどち霞める野路をわくるなりけり

遠山霞

ふりさけて見るものどけし筑波山は山しげ山霞みわたるを

山霞を

草も木も萌ゆる春べと足びきの山は霞にうちけぶるなり

海邊霞を詠める

春なれや白浪わけてかづきする海人も霞のころもきてけり

浦遠く汐路霞めるあけぼのは波も緑に立つと見ゆめり

里霞

炭がまのおもかげ見せて春霞ほのかにけぶる小野の山ざと

春の不盡の歌とて

時しらぬ不二の高嶺の白雪もかすみのころも春はきにけり

春の始めに雪のいたくふりければ

春のきてつもるみ雪の深ければ花と見えぬも殊にめづらし

諸鳥の許にてこれかれ子日すとて

若菜をも共につまむと思ふどち今日の子の日のまつぞ樂しき

諸鳥のあがたの家にて子日せむとてこれかれつどひて

ひきつれてけふの子の日に集へるを千代のどちとや松も思はむ

松有春色

朝にけに緑そはれる春の色は子の日のまつにまづぞ見えける

若菜知時

○小野の山　山城國丹波國との境炭燒のところとして古來名高い。

○諸鳥　林諸鳥。本姓は際瀨氏。眞淵の門人。

○子日せむ　正月子の日小松引き千代を壽ぐ遊びをしよう。

○かたなり　かたは片、完成せざる義。

○ひとよふたよ　節〻夜〻をいひかく。

春日野の野守が門の初若菜摘みてや妹にはるを見すらむ

春の始めに鶯のなきけるを

昨日かもけふかも春は來にけらしおぼつかなげに鶯のなく

鶯出谷

春はまだやなぎも眉にこもれるをいでて鳴きけり谷の鶯

山里にて鶯をきくといふことを

昨日かも巣だちにけらし山ざとにまだかたなりの鶯のこゑ

野鶯

冬の野にわびてなきにし鶯の聲のこほりも解くる春風

人の許にて鶯のなくを聞きて

梅の花さきの盛りは鶯の人をいとふも憎からなくに

人の家に鶯のなきければといふかけうた

山里も春やきぬると問ひよれば軒に答ふるうぐひすの聲

春もまだひとよふたよの笹がきにさゝやかに鳴く鶯のこゑ

たちよれば人くといとふ聲すなり誰(た)がかくれがぞのきの鶯

早春梅を

鶯に驚かされて閨ちかく今朝ひらけたる梅をみるかな
春霞たつときくよりこひぬるを今日ひもときし梅のはつ花

梅薫枕

こぬ人を我がおもひねの手枕にうたてにほふか風の梅が香
風ならでとはれぬ閨の手枕にいづこの梅の香か通ふらむ

路梅

誰が袖もうべこそ薫れ行きかひの大路にたてる梅さきてけり

天滿神に梅を奉るとて人々歌よみてよといひければ

うつしうゑし花のあるじも榮えまし梅が香めづる神の惠みに

故鄕の梅を

見し世には酒に浮べしこともありし我が古里の梅さきにけり

土佐の姫君の御歌會始うち〳〵にせさせ給ふ時梅薫袖といふ御題にて祝の心こめて

我が君が千代のかざしの梅が香のうつれる袖ぞおき所なき

水邊柳を

袖ひぢて結びやせまし水底にうちはへ見ゆる青やぎのいと

柳におもひよすることありて

めかれせぬ柳の絲にぬくものは袖よりおつる玉にぞありける

行路柳を詠める

春風のやなぎの絲をしらぶればゆききの人も袖かへすめり

贈答の歌よみける時柳を折りて人にやる心を

よりてみる人しもなければ青柳の絲はかくこそ思ひ亂れし

又同じ事を

うつろはぬ心に似たる青柳の花田の絲をとりてだに見よ

同じ時いせ子にかへし

心ある柳のいとをくりかへし賤が手わざにあへてこそ見れ

此のおくりもの絲をくる車なりければなり

道　柳

玉ぼこのゆききの道の青柳はかづらにすべく早なりにけり

諸鳥ぬしへ春の贈物とて白きに青きさいで重ねて疊紙をりてやるとて

青柳のはなだは春もにほはねどかはらぬ色を心とみななむ

源俊邦の許より庭の絲柳のまだ短きを根こじてたうびけるにみづからと

○めかれせぬ　目離れせざる。

○しらぶれば　春風と柳の絲との縁で風の吹くことをいふ。

○あへて　肖かりて。

○玉ぼこ　道の枕詞。

○諸鳥　林諸鳥。眞淵の門人。

○さいで　裂帛、絹布の裁ち端。

○根こじて　根ごめにぬきて。

○かぞいろ　父母。

○ふる　降ること古ることかく。
○つばな　茅花。禾本科の植物ちがやの花。

倚志にとて青柳の絲の絲の末長く結ぶちぎりのちかごとぞこれとありし返しに

うつろはぬ心の色をくりかへしちらぬ花田の絲にこそ見め

二月餘寒を

うちきらし雪にぞくもる二月のそらごとなれや霞む春とは

春雨ふる頃おもふこと多く心地もあしかりければ

かぞいろと何かたのまむ春雨のふるにかひある身とし知らねば

里春雨

ふるとても物はながめぬ里の子はつばな菫にぬれ暮しつゝ

春雨ふる日定前君へ

あぢきなくまつと知らずや打ちしめり梅も薫れる春雨のころ

御かへし　定前

梅が香にまつとはしれど訪ひよらむ晴間もみえぬ春雨の空

同じ時に貞丸ぬしよりとはぬまの春のながめに移ろふを惜しみて折りし梅の一枝、かへしに

春雨にうつろふことを惜しまずば我にをしまむ梅のひと枝

夕春雨

いとゞしく花まつ頃の永き日をながめ暮すぞいぶせかりける

春の夜月をみて

見し世には似るべくもあらぬ春ながら月の哀れぞ變らざりける

歸雁の歌とて

すてがてになど歸るらむ故郷も旅ねも同じかりのうき世を

歸雁知春

こちふけば雁かへるなり小山田の雪げの水に時をしりてや

雉子

若草の妻もこもれる春の野に忍びかねてやきゞすなくらむ

まだ淺き小草がくれに忍びかね哀れきゞすのあらはにぞ鳴く

蕨を折りて人にやるとて

山守にしのびて折りし下蕨したに燃ゆるをそれとだに見よ

春述懐の心を

亂れつゝ物思ふこゝろは常よりもうちまもらるゝ青柳のいと

若草の緣おひそふ春雨にいとゞふりゆくわが身しられて

○見し世　嘗て經過して來た世。

○若草の云々　「春日野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」（伊勢物語、古今一春上）

つく〳〵しを聊か包みて牧子より霞たつ野邊に心をつくしてし縣の春のしるべばかりぞとある返し

折りてこし心づくしを見るからに縣の春もきみもゆかしき

野邊の春駒を

かげろひのもゆる荒野の荒駒もうら若草になるゝころかな

菜花をよめる

足引の山吹にしもます色をあやなの花といひやくたさむ

櫻を植う

うゑて見る花には風を厭ふかないづれを先としらぬ身ながら

山花盛

よしの山さとにもかゝる白雲と見ゆるは花の盛りなるらし

さく花のいろに心の移りしはあかぬ櫻のとがとかこたむ

土佐のからの殿の北の方の御許より櫻山吹などをらせて給ふとて春雨の色やあせむとさく花を打ち折りてもまづ君にとぞ思ふとのたまひおこせ給ひけるかへしに

ぬれつゝもしひて手折りし我が君が心の色をはなにこそみれ

○いひやくたさむ　卑しむべき花ではない。

○いづれを先　どちらが先に死ぬやら

○はてて　泊めて。泊りて。

同じ殿の近きあたりをすぎさせ給ふとて近うつかうまつる人々して櫻花匂へる宿をいかにして訪はずやすぎむ春の道のべとのたまひおこせ給ひけるかへしに

ゆきずりの君が言葉の花の色に匂はぬ宿も春をこそしれ

湖上花を

さゞなみの近江のうみに舟はてて比良山櫻ちるまでも見む

望山花といふ題にて

白雪か雲かあらぬか吉野やま眞白にみゆる花のよそめは

花の歌とて景雄ぬしの會に

櫻花うちむかふ程のあはれには風に散るらむとがも思はず

花もしれ花てふ花のなかにしも櫻ひと木にうつす心を

關路花

香ばかりは關もる人もゆるしてやあかしに通ふ花の春かぜ

ゆるさねど若木の櫻さくころは關ふきこえてかをる浦風

風靜花芳

いく春も風にさはらぬ陰しめてかぐはしげなる花のした庵

松浦のからの殿の北の方の御前にて御庭の池のほとりの花見よと仰言ありければ立ちいでてこゝかしこ見渡し侍るにいはむ方なきけしきなりければ

何れをかいづれとめでむ春の池を鏡となせる花のすがたは

花といふ題にて景雄ぬしの會に

花はたゞよそに見よとてさくらめど飽かぬ心に折るがわりなさ

峯花を

思へども折りかざされぬ心をば峯の櫻につくす此のごろ

心地みだりがはしき頃人の桃の花を壽にとて折りておこせければ獨りごとに

今年のみ見るらむ花を三千年と祝ふものは我ぞかなしき

桃の花を見て

梅櫻うつろふ色のあはれをば獨りふかめし桃のくれなゐ

春鐘

入相の鐘は春しもうかりけりはかなさ見せて花の散れれば

暮春

○思へども の歌　手折ることが出來ない、近よることが出來ない、思へども及び難いといふやるせない心は、丁度、手も屆かぬ峯の櫻を見ると同じであるとの意。

〇かとりの衣　かとり（絲、織物の一種）にて仕立てたる衣。夏の初めきる。

花鳥もさもあらばあれゆく春は其の事となく惜しまるゝかな

更　衣

猶殘る花には袖をふれてまし薄きかとりの衣にはあれども

卯月にさける櫻を

宮人にあすはかたらむ夏かけて北山ざとの花を見てしと

あはれにも卯月にさける山櫻はるすぎてとや敎へられけむ

ひとり咲きて獨りちるらむ櫻花まだなつ知らぬみ山がくれに

殘花を尋ぬるとて山路わけいる心を

さき殘る花もやあると山深く入りもてゆけばうぐひすの聲

山　新　樹

花紅葉いろ〳〵に見る山のはも夏のよそめは常磐なりけり

卯月ばかりに山里をとふ

春すぎて見るもめづらし山里の門田のさなへ垣の卯の花

殘　花　を

時鳥たづねていりしみ山路になほさかりなる花を見しかな

郭公をまつこゝろを

○こりずま　まは助字。前の失敗にこりずに再びすること。

こりずまの恨みつゝまつ時鳥つれなかりしも去年の此の頃

待郭公

時鳥この夕ぐれのむらさめに待ちえてきかば物は思はじ

忍びても一こゑはなけ時鳥まつよひ過ぐるむらさめのそら

曉時鳥を

八聲なく鳥も有明の月かげに二こゑもせでゆくほとゝぎす

羇中時鳥

み山路を語らひくらす時鳥聞きにといでし旅ならなくに

村雨の頃縫子のもとより村雨を空だのめにはなさじとや忍音もらす山時鳥とある返し

むらさめはふりも降らずも時鳥君がためにと聲もらしけむ

山家郭公

都よりはとく聞きそめて郭公ともしくもあらず夏の山ずみ

時鳥のあまた鳴きければ

なれだにも憂きことあれや時鳥夜たゞ音になく聲の悲しさ

行路卯花

○そは　側。

○こころえがほに　此處こそ我が意を得たりと。

夕やみの道もたどらじ賤の男が山田のそばにうつ木さく頃

谷卯花

光なき谷とはいはじ夕やみも月かとみせて咲ける卯の花

卯花を

あしびきの山里びたる垣根にはところえがほに咲ける卯の花

縫子のもとへ幻の巻の心を

さだめなき世をうつ蟬の夏衣たち返してもねをやなかまし

かへし　　　　縫子

ながらへて今日たちかふる夏衣うすき契りをなほしのぶかな

人の衣を春かりて夏かへしやるとて

君がぞとこゝろとめてし花衣時うつりぬる香をないとひそ

卯月の末の頃戸澤の殿の北の方觀世音へ詣で給ふとて近きあたりの寺にみこし留め給へりしにまかでて御前に參りけるに殿より御短冊たまはりける御こと書に妻なるものの其のほとり近くゆくにとありて時鳥なれにならひて我もはた五月の空をまつは久しきとて給はりし御かへし女君の御もとまで奉る

言の葉の匂ひにいとゞ五月まつ花たちばなの陰ぞ戀しき

閑庭の橘を

今しはと昔をすてしかくれ家に猶しのべとや薫るたちばな

雨中橘

いひしらぬ花の雫のぬれにけりかくの木かげに雨やどりして

五月五日

折にあふ花もむすびて菖蒲草ま袖にかくるけふは來にけり

烏羽玉の髪にもかけつ袖にしつ菖蒲のかづら長きためしに

さうぶにそへて人にやる心を

あやめ草ひくてあまたが中にしも長き根ざしをとめしなりけり

かくれ沼の深きこひぢの菖蒲草けふより軒のつまと見ななむ

五月雨の頃述懷の心を

春雨は花をみつゝも慰めきせむすべしらぬ五月雨の頃

夜五月雨

終夜ふるともよしや五月雨のしめやかにだに語りあかさば

五月雨のころ人に

○かくの木　橘の異名。

○こひぢ　泥。

〇ここなつ　撫子の異名。

いとゞしく五月の雨のふりそひて袖の水嵩もいや増るころ

五月雨晴

とぢはてて眺めやる方なかりしも晴るればはるゝ五月雨の空

早　苗

語らひてとるもむつまし妹とせの山田のさなへ賴みありけに

夜水鷄を

終夜たゝく水鷄のあはれさを人ならずとてよそに過ぎめや

撫子を折りて人にやる

はらはねば思ひも塵もつもりけりわが一人寢のとこなつの花

夏門車

飛鳥井に宿るともなき小車を門ひきいるゝほどぞうきたる

夕顏を

立ちよりて今一ふさやをりてましみすてがてなる花の夕顏

夏富士を

高ねには夏しも雪のふるといふあやしき山ぞ不二の芝山

夏思を

花に厭ひ紅葉にうとむ風をしも思ふぞ夏の心なりける

窗前螢を

奥深き窗に涼しきひかりあるは誰があつめにし螢なるかも

前栽に螢とぶを

夕風のをすのゆらぎにそこはかと亂るゝ玉は螢なるらし

螢をあつめたるが光りあひたるを

たが身にも忍ぶ思ひはあるものと燃ゆる螢を見てもこそしれ

六月ばかり川邊の宿に人々集ひて

ゆふ風も月も心にまかせつゝなつをたのしむ河づらの宿

船にのりて夕すゞみする心を

すゞしさは五百夜つぎてもあかめやは月のみ舟と共にこぎ出て

河邊の家にて夕納涼すとて

川原風かよへる宿にをすまきて月まつほどの袂すゞしも

杜納涼

水無月のてる日もよそにへだてたる茂木がもとの庵涼しも

涼しさに秋もしのばずしのだなる千枝の木陰に庵しをれば

〇をす　簾。をは接頭語。

○扇合　古昔行はれし遊戯の一種　左右に分れ互に趣向をこらしたる扇を出し、判者その優劣を定む。

池蓮をよめる

池水のいひしらぬまで薫るなりはすの浮葉に風わたるころ

夏　紵

秋さらばいとまもなみと賤の女が靜心なく夏そ引くらし

丑の年六月中の五日扇合に夏扇にして白きうすものひとへを月と思はせたるばかり殘して皆金のすなご地にて

夏深きねやにならせば秋風のすみかたづねて月もとひけり

寄蟬述懷

ねにたてて鳴くと知らずや空蟬の身の秋ちかくなれる頃はも

秋近うなりければ人の許へ

秋またで我が身はかなくなりもせば世を空蟬のからをだに見よ

同じ時のうたの中に

うかりしも忘れて人の戀しきは身の秋近くなりやしぬらむ

秋近みあすか咲くらむ萩よりもけふこそ君を見まくほしけれ

秋近くなりゆくも惱ましき身にはいと心細くおもほえて

まだきにも秋風たたば一葉より先に我が身はさそはれなまし

物思へばそゞろに結ぶ袖の露あき風たたば消えむとすらむ
すみわびぬ世に秋風のたたぬまにいかでか露と我はきえばや
身の秋や近くなりけむ端居してながむる袖に露ぞ亂るゝ

物思ふ頃いつしか秋になりぬと人のいふを聞きて

うき秋はまたも來にしか露の身のおき所なき心地する世に

立秋風

一葉より先に我が身をさそひなば世に秋風のたつも知らじを

早秋露を

くれ竹のはげしき音に驚きぬ秋のいりたつ窗のあさかぜ
朝まだき庭の淺茅におく露のめにさへ見えて秋はきにけり

七夕に

彦星の年にこがるゝともし妻こよひ迎ふる舟いそぐらし

二星適逢

近からばゆきても見まし棚機の稀のわたりの舟のよそひを

殘暑

秋なれや土さくるまで照る日にもさすがに荻の聲はありけり

秋の風荻をふくといふ事を

○彦星　牽牛星。
○ともし妻　逢ふこと稀なる妻。多く織女に云ふ。

荻原にそよまちとりし風の音を秋の聲とはいふべかりけり
閨近き荻の葉すぐる風の音は身にしむものの友とこそ聞け

同じ題を人に代りて

秋風のやどる爲とはうゑなくに待ちとり顔の庭のをぎはら

秋になりて萩のいと匂はしく咲きたりければ獨りうちながめて

我が宿にながき花妻は咲きにけりあはれを鹿のとめもこよかし

庭の萩をめでて歌よみける中に

錦とも我のみ見むはえもなし思ふ小萩を折る人もがな
風はよしふくとも散らじ錦しておほふと見ゆる秋はぎの花

二葉よりおほしたてたる萩の花ちりがたになりければ

こむ秋はたが花妻とめづるとも庭の小萩よ我をわするな

うつろへる萩につけて女の許へ利安いかにせむ人の心は秋萩のかくうつろふと思はざりしをとあるかへしに

折りてこし小萩が花のうつろふに君が心のあきをこそ見れ

庭盡秋花といふことを

我が袖もくさの袂となりにけり庭の千ぐさのはなにまじりて

○せざい　前栽。

○心地そこなひて　病氣して。

女郎花

嵯峨野にせざいほる

白露のたまをよそひて女郎花なまめくやどは人もとふらむ

人ごとはさが野の原の女郎花をみなの宿にうつし植うとも

七草の花のいろ〳〵ほりうゑて嵯峨野の秋を宿にうつさむ

やどりかへてむと思ふ頃庭の花薄を掘りて人のがりやるとて文のはしに

故里とあれなむのちは花薄かりにも人の問はじものゆゑ

源定前君の母君より尾花にそへて忍びかね今は亂れし絲すゝきほにいでてまねく心とも見よとあるかへし

篠薄ほにこそいでねこゝにしも亂れてこふと見ても知れかし

大村通照の妻よし子の許より花薄に小草とりまじへて我がせこが折りてかざせる花薄家づとながら君にみすめりかへしに

秋の野をつとにこそ見れ花薄まねく方にもゆきがての身は

此の頃心地そこなひて久しうひき籠りゐ侍りければかくなむ

尾花につけて人にやるといふ贈答題にて映慶ぬしの許より秋風にもつるる野邊のいと薄うちとけぬべき君にしあらねば是れがかへし

○名たゝる　名に聞えたる。

秋風にもつれてしより絲薄いと逢ひがたきなかとなりにき

采女君の御許より野草花といふ御題を給はりけるに心地そこなひし頃走りよみに詠みて奉りし

心ある野守やうつしうゑにけむ殊にさき匂ふ七くさの花

淺茅

萩もちり人まつ蟲も聲かれて露のみしげきあさぢふのやど

露ふかし

草の葉にかず〳〵結ぶ白露は袖の上にもしげき秋かな

野外夕蟲

秋も今末野のはらの夕つゆに結ぼほれたる機おりのこゑ

あげまきもかへる野末の夕風に誰まつ蟲のみだれてやなく

長門の北の方のおまへにて鈴蟲のなきけるに歌とくよめとありければ

おく露の玉の臺にところえて名だゝる蟲のふり出てや鳴く

御返しとてあやしの宿の蟲のねもことをかしうとりなし給ふに榮えある心地して哀れしる君まちつけて今宵しも心ある蟲やふり出でてなく

秋夕

ながむれば心の外のあはれさへそらに數そふ秋のゆふぐれ

初秋三十番歌合に初鴈を

はださむき夜半の野分におどろきて衣かりがね今朝はきにけり

秋　夕

秋といへばうしと哀れとふたしへに夕の空を詠むるやなぞ

新室にて初鴈のなくを聞きてといふことを人々よみけるついでに

かり〳〵と鳴きてぞ來ぬるこゝも又かりの宿りと汝もしりてや

旅のやどりに鴈の聲をききて

旅にして古里しのぶさ夜中におなじおもひか鴈もなくなる

野枝子の許より文の中に君があたり鳴きてすぐなる鴈しあらば我が戀ひ渡る聲としらなむ　返し

いづこゆか鳴きて來にけむ鴈がねとおほに聞きしが今ぞ悔しき

秋旅行

故郷を思ふこころしもくる鴈よ旅ゆくわれに聲なきかせそ

秋　夕

秋といへば夕の風のなにすとか戀せぬ人の身にもしむらむ

○ふたしへ　二重。しは助詞。

○いづこゆか　いづこよりか。

○いりにけり　弓張月といふより入るど射るとに通はせた。

○いでがての云々　花には喜びながめた山も、月には聊か邪魔にな

秋田

さ苗ぐさあをむと見しも昨日今日秋田刈るにぞ驚かれぬる

田家秋風

穂波よる秋の田づらにかり庵(ほ)して風の姿は見るべかりけり

遠近秋風

吹く音は窓にきかせて秋風の姿は庭に見するなりけり

弓張月を

あかなくに弓張月はいりにけりいづこの山のかげや尋ねむ

待月

花にあかで打ち向ひしもいでがての月にはかこつ秋の山の端

八月ばかり月のあかき夜野草花を見る

すむ月にあこがれざらば見ざらまし秋野の花のよるの錦も

月前萩を

風ふけば小萩が露のしら玉にやどれる月の影もちりけり

萩上露

白露は柳にのみと見したまを萩がえだにも貫きとめにけり

月映露

ふたつなき今宵の月を百くさの露に宿してちゞにそめけり

月前露

露しげき尾花が袖に風ふけばやどりし月の影もみだるゝ

月前萩

うらぶれし鹿も心やなぐさまむなが花づまに月やどるころ

月に琴ひきたるをききて女

うきことと聞くともしらですむ月のよそに調ぶる松風のこゑ

八月十五夜海の邊の家に月を見るといふことを

心ある海士の苫屋に宿かりてこのうら島の月を見るかな

八月十五夜土佐侍從の君の御前にて松閒月を

松がえにかゝれる月の鏡には君がちとせのかげぞ見えける

松がえに今宵やどれる月かげを千代のどちとや君もみるらむ

月前草花

秋の花の色々ごとに見る月はやどれる露のそむるなるらし

月前管絃

○花づま　鹿に配して萩を稱す。

○ふりさけて見む　ふり仰いで遠く望み見るであらう。

すみのぼる影にうかれて絲竹のしらべにあかす月の此のごろ

土佐のからの殿よりたまへる題月前遠情

かくばかり限なき月は千早ぶる朝倉の森ももりて照るらし

いかばかりすむやと月に思ひやる遠方人もふりさけて見む

海邊見月

天の海の月のみ舟を名ぐはしき大湊べにきみ見るらむか

宿かへて月見るとて

露の身の宿りかへても袖の上になれぬる月はたづね來にけり

蓬生のやどりかへても我が袖の露をよすがに月はとひけり

月を翫ぶといふことを

まち惜しむ心々を夜もすがら月にいひつゝめで明かすかな

望の夜の月を

いつよりもてりと照らせる望月の眞澄の鏡みるにあかめや

月照瀧水といふことを

石ばしる瀧つ白波はやけれど月の鏡はかげとめてけり

月前思を

影はれて何に見すらむ秋の月やみには物を思ひけりやは
うち向ふ月はひとつの影ながらうかぶは千々の思ひなりけり

水邊月を

大空にすむ影よりもめにちかき水にて月は見るべかりけり

月不選處といふ題にて

人ならば人やへだてむ隔てなく賤がいへにもやどる月影
いづことも月の光はわかなくに見る人からや晴れ曇るらむ

海月を

白波のたつも厭はで荒磯海をわたるは月のみ舟なりけり

浦月を

蘆がちるなには思はず難波なるみつの浦わの月をみつれば

山月入簾といふことを

ふる雪にかゝげしと聞く玉簾さながら峯の月を見るかな

嶺上月を

かたぶかで有明の月の月影を山のつかさにかくみてしがな

松間月を

○わかなくに　なくはぬの延音。區別せざるに。
○みつの浦わ　難波の大伴の郷。御津の浦。今の道頓堀長堀の邊。古、重要なる泊港。
○ふる雪に云々　香爐峯雪撥簾看
○山のつかさ　山の凸起せる處。

秋なれやもみぢぬ松の木の間をもる月影は照りまさりけり

もみぢせぬ松の木の間をもる月も秋は殊にぞ照りまさりける

月多秋友といふ心を

月ばかり我にそむかぬ友はなしくる秋ごとにうち向へども

月前鴈

望月のくまなき空に三つ二つ亂れてわたる鴈もめづらし

月前杉

三輪山をしかもてらせる月影にかくさふべしや杉たてる門

月似鏡

増鏡かけしばかりにてる月のかげをうつさぬ海山もなし

月前述懐

見る人の心なりけり秋の月ものおもへとて澄めるかげかは

山家月

花の後とぢはてにける柴の戸をふたゝびあけて月をみるかな

名所月

今宵はも月の夜よしと吉野山春のしをりをたづね入りけり

○三輪山　大和初瀬の西。
○かくさふ　かくすの延言。

杜月を

見る人の心も千々にみだれけりしげき信田の杜のつきかげ

月前述懐

みるが中に涙くもれば物思ふあたりは月のすむもあやなし

八月ばかり三島景雄ぬしの扇合に月の歌須磨の巻花ちる里の別れによせてその心ばへをゑがきたる扇にそへていだしたり

やどりぬる袖に別れてゆく月のあかぬ光をいかでとめばや

月多秋友

くまもなき心の友と見る月はこゝらの秋にあかずもあるかな

土佐のからの殿より浦月といふ題をたまはりければ

今宵もや君がみ國のうら船に月をうかべてうたげすらしも

十三夜月

こむ年の最中ならでは長月の今宵ばかりの影を見ましや

月前蟲

長月のつき影うとくなるまゝに音になく蟲の聲もよわりて

月の前にきり〴〵す鳴きけるを

○信田の杜　和泉國の歌枕。今泉北郡信太村。狐を以て名高き所。

○三島景雄　三島自寛、江戸の人、縣門の一人、文化九年歿年六十八。

○うたげ　宴會。

今宵はと尾花はまねききり〴〵すなきて待ち出でし長月のつき

月前杵

影やどす杵の色のうすきこそなか〳〵月のにほひなりけれ

秋のふじを

不二のねに上りて見ばや秋の月手にとるばかり近からましを

空にしも近しときくを不盡のねに上りていざや月は見てまし

秋述懐

我が袖にあやしく露のみだるゝは世をあき風のふけばなりけり

故郷鶉を

人ふるす里をうづらの牀はあれて音にのみなくもなれ獨りかは

古渡秋霧

こはいかゞありその渡こぐ舟の上にも霧の海なして見ゆ

里擣衣

あはれさはにひさきもりが妻ならしかたやま里に衣うつ音

菊露

仙人にあえもやすると露ながら折りてかざさむ白菊のはな

○にひさきもり　新防人。新たに差遣せられたる防人。
○妻ならし　しは未來の助動詞むに同じ。
○あえ　あやかる。

人の前栽の菊をよめとありければ

仙人にいかで見せばや君が植ゑし籬の菊のかかるさかりを

ぬひ子の許へ菊の枝につけて

仙人の友としきくの花なれば見てもよはひを延べぬべらなり

かへし　ぬひ子

匂ひさへ花さへ葉さへ異なるはうべ仙人のうゑしなるらし

重陽宴を

けふといへば大宮人のかざすてふ菊こそ千世の秋はしるらめ

重ねつゝくみかはすらし都にはけふ九重のきくのさかづき

朝鹿を

朝霧にたちかくれつゝさを鹿のなほ影のこる月になくらし

遠山鹿を

花づまもうらがれぬとや山ふかく遠ざかりゆくさを鹿のこゑ

奥山のなが花づまぞ散るならしを鹿の聲のことにとよむる

おなじ題にて泉君にかはりて

山深くいりにし妻やしたふらむを鹿の聲のとほざかりゆく

○花づま　鹿に配して萩の花をいふ。

海邊鹿を

千鳥にはあらぬを鹿も妻戀ひに身をうみべまでなき渡るかな

鹿聲何方

とよみしも聞きまどふまでなりゆくは何處に鹿の聲弱るらむ
聞きまどふ妻や恨みむ夜もすがら所さだめぬさを鹿のこゑ

紅葉の陰にこれかれ月見る心を

影やどすたち枝の紅葉ちりすぎて洩りくる月の顔ぞ匂へる
てりまさる月の桂やちりくると思ふは木々の紅葉なりけり
すむ月をなほ吹きはらふ山風におつる紅葉ぞあかぬくまなる

雨後紅葉

かくそむるほどはふるとも見えざりき時雨の跡の峯のもみぢ葉

眞柴に蔦の紅葉のかゝりたるかた

秋のゆく片山里につたかづらかゝるもみぢは猶のこりけり
木末には色ものこらぬ山里のましばにかゝる蔦のもみぢ葉

又蔦のもみぢしたるに鳥宿れるかた

山陰の蔦のもみぢのあかければねぐら急がぬ鳥もありけり

照りまさる蔦の紅葉になづさひて暮るゝを知らぬ鳥もありけり

折りにくる人しなければ蔦かづら心ながくや鳥もやどらむ

人の許にて紅葉を見て

世にしらぬ時雨やこゝにふりにけむまだ見ぬ程の庭のもみぢ葉

紅葉のいたくちりたる山を越えたるところ

もみぢ葉の錦にしける色もなし花にもこえし志賀の山みち

長月の末のころ土佐のからの殿より楓の葉の色こきをたうびたるにそへて思ひやれ紅葉の色は薄くとも心をこめて手折る一枝とありしかへしに

御心こめてのたまふにいとゞ千入も添へてこそはめで畏まり奉れ

こや君が袖かけにけむ紅葉ぞと怪しきまでもめこそとゞむれ

暮秋

あかず見し千種の花も移りゆきて紅葉になげく秋の暮かな

秋のはつる心を立田川に思ひやりて

山風のたつ田の川にとめこずばあきの限りのいろを見ましや

立田川くれなる流す秋の色をとゞむる風のしがらみもがな

冬たつ日山里をとふ

今よりの哀れは來てぞしられける軒端のしぐれ峯のこがらし

初時雨を

里はまだふるとも見えぬ初時雨山風さむみ雪まよふなり

小山田はしぐれそめしやをしねかる賤が袂のぬれひぢて見ゆ

時雨をよめる

木枯の音するよりも草の庵のよるの時雨ぞ聞きうかりける

春秋もながめふりしか山里はしぐるゝ頃ぞ住みうかりける

さらでしも見果てぬ夢を幾たびか閨の時雨のさそひゆくらむ

川時雨を

立田川そめし錦はあともなくつれなき水にしぐれ降るなり

峯時雨を

木枯にふもとは晴れてむら時雨またも高ねにかゝるうき雲

いくたびか時雪降るらしうち向ふ高嶺の松にまよふ浮雲

時雨ふる日人の許へ

ふりはへて訪はむと思ひしけふもまた僞りになす村時雨かな

落葉交雨

○をしね　をは接頭語。稻。

○ふりはへて　わざ〳〵。

むら時雨むら〳〵誘ふさ夜風にまた降りくるは木の葉なりけり

河上落葉

河の上にたが織りかけし錦ぞと見ゆるは風の木の葉なりけり

松下落葉

冬なれやときはの松の下陰によその紅葉をさそふ木がらし

紅葉せぬ常葉の松のもとにしもよその錦を風ぞしきける

時雨にもつれなき松の下陰に風のもみだす木の葉なりけり

田霜を

昨日かもをしね刈りてし小山田にけさはや霜の花咲きにけり

霜をよめる

今ははや置きまどはせる色もなし折られぬ霜の花のみにして

諸鳥の許にて霜月の歌とて

冬ごもる縣の庵に來て見れば庭には霜の花さかりなり

野寒草

秋はてて冬野の霜にしをれゆく小草のさまぞあはれなりける

寒草霜

○諸鳥　林諸鳥、本姓は鵜瀬氏。眞淵の門人。

○その原　信濃國伊那郡。美濃の國境近くにある。山に目立つ欅の木があると。
○帚木　はうきぐさ。「その原や伏屋に生ふる帚木のありとて行けどあはぬ君かな」（六帖五）
○志賀の大わた　琵琶湖。

風寒み庭もはだらにおく霜のあさきや草の殘るなるらむ

冬物へゆく道にて

その原の帚木ならでありと見し草もみながら枯れし野らかな

河冬月

さえわたる影は流さじ河の上の冰を月のしがらみにして

湖上冬月

さゞなみの志賀の大わた冰る夜も月のみ舟は淀まざりけり
千早ぶる神や漕ぐらむ諏訪の海の冰をわたる月のみ船は

網代寒

埋火のもとにも風を厭ふ夜に網代もる身もあればありけり

雪をよめる

影はるゝ月だに隈はあるものを夜をま白にもふれる雪かな

山雪を

雪ふればこゝにも不盡の山なすを駿河にのみとなに思ひけむ

竹雪深

靡けども折れはてもせずなよ竹の強き心ぞ雪にみえける

雪満衣

雪みむとわかの浦わにたちいでて知らず著にけり鶴の毛衣

常磐木雪

冬がれのしらぬ縁の常磐木にかゝるぞ雪は花と見えける

依雪待人

拂はねど人まち顔におきかへる松の雪だにきても見よかし

忘れても故里人のとひこかし小野のあたりの雪のこの頃

思ひいでてとへかし花の山ぶみを雪になりぬる三吉野の里

薄暮雪

まつほどの思ひを見せて積るらしこぬ夕ぐれの軒のしらゆき

靜けさは入相の鐘も埋もれてゆきに暮れゆく冬の山寺

長門の女君の御前にて雪のふりけるを見て

此の殿のみつばよつばに咲きかゝるむつの初花見るも珍らし

雪のあした人の許へ

白妙の袖ふりはへて武藏野にいざ雪見むとおもひ立たずや

連日雪

○鶴の毛衣　鶴の毛で作ったといふ衣。雪の身に降りかゝつたのを譬へたもの。

○山ぶみ　山を踏み歩くこと。

○むつの初花　初雪。

○たいまつる　奉るの音便。
○三つの友　月、雪、花。

月も日もよそに隔ててふりぬれどよに光ある雪のこのごろ

松の雪を見て

世にふれば又もうき身につむ年を老木の松の雪にこそしれ

常陸の宰相の君の御妹君の雪見給ふ時に御心ありてよみ給ふ御歌とて見せ給へる御文には言の葉の道しるべせる人に見せばやとのみ思ひ續けていとゞ戀しさもいや増りに増るをたゞに見むやはと思ひおこして匂ひなき言の葉を拾ひ集めて手習にとありて心ある人に見せばや白雪のつもるまゝなる冬の夕暮見せばやな向ふ外山も白妙に花さく木々の雪の夕を此のみ歌をめで奉りて返したいまつる奥にかきてまゐらせし歌

さきぬやとたゞにまがへる雪よりも君が言葉の花ぞ匂へる

寄雪述懐

三つの友と見し月花の面かげもみ雪ひとつに今は忍びて

雪の日人のもとへ

見せばやと思ふ心はつもれども雪ふみわけてくる人もなし

雪中待人

ふるまゝに積ると見ずや契りおきて雪に人まつひとの思ひも

常葉木雪

かかれとて君がうゑけむ常磐木のかげおもしろき雪の朝明

高砂の尾上の松もかかるらむ君がのきばの雪のあけぼの

千蔭うしの兼題に雪ふる日山里をとふといふことを

花ののちはとはでふりにし山里の櫻にかゝる雪を見るかな

これが返しの心を稲子がよみて給へる花の後に訪はぬ恨みも且消えて深き心を雪にこそ見れ又かへし

ふみわけてあすも訪ひこむ山里のゆき面白きけふの名殘を

木々の枝に雪つもれり

夜嵐のさえしにも似ず木々は皆あたゝかげなるゆきの朝あけ

早梅を

年の内にまづ咲きにけり梅の花折りかざしつゝ老隱せとや

三十ばかりの頃しはすに始めてわらはやみしてしゞこらかしつればいと弱くなりて死ぬべく覺えし頃瓶にさしたる梅花を見れば昔の人の先づかざしてむと詠み給ひしも身の上のやうに哀れにおぼえて

春までの命ししらば年の内にいろづく梅もかくはめでしを

○わらはやみ　おこり。
○しゞこらかす　病をなほし損ふこじらかす。
○昔の人の云々　「鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」（古今一春上）

しはすばかり女のもとへ衣をおくるといふ題にて

冬ごもる花田のきぬは薄けれど春は柳のいろにくらべよ

人々つどひて十二月のうたよむに

いざけふは年と春との行きかひをまち惜しむてふ言盡してむ

年のはてによめる歌

あればある身はさる事につむ年を人に數へてをしむ暮かな

四十になりぬる年の終りに鄰なる人の許へ思ふことありて夜ふけて遣はしける

君ならで誰と共にか惜しままし我が世ふけゆく年のなごりも

冬のはつる日雪のふりければ

身につもる思ひもなくて見てしがな此の山ざとの雲のゆふべを

あすよりは去年の形見と見だにせむ猶ふり積れけふの白雪

除夜に人の鬼やらふを聞きて

年こゆる世のならはしとおのがじゝなやらふ聲ぞかしましげなる

人の七十の賀に

いく年も頭の雪のつもれかし知らぬ翁と人のみるまで

○なやらふ　おにやらひ。追儺。

土佐のからの殿の若君生まれ給ひし御七夜に人々祝歌よみける序に

雛づるの聲にもしるし九つの皐(さは)にあそばむ千代のおひさき

松延齡友といふことを

二葉より千代の根ざしの松をうゑて齡くらぶる友と見ななむ

寄鶴祝

豐かにも澤邊にたづのとり〴〵に君がちとせをよばふ諸聲

鶴砌馴

たちなれし砌の松にすだちつる今年よりこそ千代はよそへめ

春祝

青柳の絲くりかへしことしより八百萬代のはるも經ななむ

諸鳥の姉の七十賀のうしろの屏風の繪千代古道を

今年より千代の古道ふみなれて春をあまたに若菜つみてむ

映慶の子の五つの年祝事に七首の當座題の内卷頭春寄若菜祝　春日に思ひよする事ありて

思ふどち春日の野邊に打ちむれて若菜つみつゝ千代もへななむ

また五葉枝につけて柳筥にすゑて

○九つの皐　九皐は曲れる深き澤詩經に、鶴鳴二九皐一聲聞二于天一。

○青柳の絲　くるの序。春の緣語。

○柳筥　柳の木にて製したる一種の箱。筆硯墨短册等を納るゝに用ゐたるもの。

○子の日の松　正月子の日に引く小松。

○白木綿　白き木綿。幣に用ゐる。

千代こめし松のいつはの五つより五百枝さしそふ陰も仰がむ

やんごとなきわたりにつかうまつれる人の八十賀に寄梅祝を

長らへて八千代の春も世に匂ふみ園の梅を折りかざさなむ

松契多春

春毎の子の日の松に契りおきていくらの千代も君やかぞへむ

姫路の侍従の君の北の方より稲荷社へ奉れ給ふ題とて春祝を

君が代を千々の春もと咲く花の白木綿かけて祈るけふかな

春の祝といふ心を

花園に多くの花をうゑおきて千年の春も折りかざさなむ

春祝るをはじめにて

ゐるもなき花を数多にうゑおきてこゝらの春の盛りみななむ

よき君の御許へ子の日にひきける小松を植ゑてまゐらすとて思ふ心こめてかくなむ

生したてて君が常葉の友と見よ二葉に千代のこもる小松ぞ

寄鶴祝といふ事をよみて堀田の君の小姫君に奉りける

千代ふべき陰に巣だちし雛鶴の雲居にひゞく聲をしぞまつ

やよひばかり豐後國の岡の殿の六十賀に竹遐年友といふ題にて人々の歌高きも賤しきも集めて奉る時に其の御題の歌にはあらねど祝ひて奉る旋頭歌一首六角の臺にこゝろ葉と思はせて松と竹と桃の花とを二本づゝかどかどにさして土佐國尾戸といふ所の土もて燒きたるかはらけを三つ重ねて中にするゑて歌は桃がさねの紙にかい付けて稻子の許までとて姫君の御前に奉りつ

豐國の直入の山のたかきよはひを今年より君こそは經めたかきよはひを
豐國の岡べの松も千代はしらめども千代の後は君がよはひにあへぬべらなり
三千年も樂しくませや豐くにのきみ桃のはなかづらにかけつ酒にうかべつ

右直入の山を奉りき

同じ時泉君に代りて竹遐年友といふ御題にて

窗ちかくおふしたてつゝ此の君の操を千代のともと見ななむ

又人に代りて

うゑおきて千尋なすまで此の君を一日もかれぬ友と見ななむ

又

數へ見よいさゝむら竹幾むらも變らぬ友としげりゆく世を

○こゝろ葉　贈物などの苞に金又は絲にて梅松の枝などを作りて飾り添ふるもの。
○豐國　豐後國。
○直入の山　豐後國直入郡。

○朝もよし　枕詞。きに冠する。
○よゝのさかえ　よは竹の節と節との間、これに代々をかく。

○つら〳〵　つら〳〵椿にかく。つら〳〵椿は枝葉の繁く生ひかさなりたる椿。

朝もよし君が友なるさゝ竹のよゝのさかえを仰がざらめや

池水久澄といふ心を

千代もすむ水を樂しむ主人とは池の心のひろさにぞ知る

豐前國岡の殿の姫君水無月末三日に播磨の赤穗をしろしめす御祝事とみの事ならば思ひめぐらす程もなく只取りあへず檜扇の臺に中に短冊を其のさまにして入れて蓋の上に若松若竹をいさゝか縮と見せて絲にて作りてさしたるに萌葱の薄様に歌かきて奉る

千代萬よゝに榮えむ枝かはす松と竹とのかげをならべて

土佐のからうの殿と女君との御前にて春の祝の歌とて詠みて奉る

千代ふべき松と竹との陰にゐて若葉の春をみるよしもがな

椿葉綠久といふことを

色かへず葉がへぬ椿うゑなめてつら〳〵見つゝ八千代へななむ

松契多年といふことを

足びきの山松が枝に契りおきてとし高かれと仰ぐなりけり

ある人の新たに造らせ給ふ御館に始めてまゐで侍るに土佐國の尾戸てふ所にて調じたる小甑をまゐらすとて松と竹とに結びて祝事を

龜の尾の長き世かけて祝ひつる松と竹とのやどのさかえを
此の殿に千代をしらぶる松風はみつばよつばの軒にひゞきて
賀の屛風に七月萩の中に鹿たてるかたを
秋ごとにあかず匂へる花妻をまちえて鹿の立ちもはなれず
八月十五夜土佐の侍從の君の御前にて秋祝を
かりつみし秋の山田の稻塚のかずある年といはふみたから
學之魚足の六十賀屛風の繪四季の歌の中秋ふみ月とおもはせて宮城野萩あまた咲きたるかた人にかはりて
紫につゆもにほひて宮城野の萩のはつはな咲きそめにけり
冬十月と思はせて田子の浦に不二山あるかた
目にちかく富士の高ねの雪みむと田子の浦より舟出してけり
月前祝
長月の月のよすがらうたげして思へば秋は飽かぬときかな
長月の今宵の月を五百夜つぎ千々夜つぎても見るにあかめや
知足五十賀屛風繪八月川邊に月を見るかた
雲の海のものと見てしを河瀨にも月のみ舟はまほに浮べり

○花妻　鹿に配して萩の花をいふ

○まほ　眞帆。片帆の對。帆を正面に向けみな風をはらませたる帆こゝは眞帆にたとへいふ。

○あえ物　あやかる物。

○はなりの髪　うなゐはなり。又うなゐ。童子の髪の結はず垂れたるをいふ。

百たらず五十鈴の川に影とめて神代のまゝの月を見るかな
ゆく水に月の鏡をかけとめて千代もかはらぬ影見てしがな

寄菊祝といふ事を

仙人(やまびと)のかざしときくの花をうゑて君が千年のあえ物にせむ
ながづきの長く匂へる菊をうゑて多くの秋をあかずかざさむ

竹不改色

かぞへ見よいさゝ村竹いくむれも變らぬ友と茂りゆく世を

人の六十賀に鶴契齢といふことを

かぎりなく契り置かなむ白鶴もしらぬ千年ののちのよはひを

うなゐ子を祝ひて

うなゐ子がはなりの髪をうつくしと見つゝ撫でつゝ思ふ生先(おひさき)

寄松祝　ある法師の賀とて

古寺の軒にふりせぬ松風の千代のしらべやたのしかるらむ

寄道祝

文見ればかしこかりけり千早振神代の道のあとをたづねて
ひさかたの光あまねき御代なれば誰もまなびの道はまよはじ

夏　祝

松も竹もしげりあひつゝ此の宿のさかゆく陰は夏にみえけり
　親しき人に別るとて
ひたぶるになきはならひの世の中にある身ながらの別れ悲しも
　筑紫へ歸る人にやるとて
松浦潟ひれふるとても留まらぬ別れと思へばせむすべもなし
　大癡大德の五月七日ばかりに都に登り給ふよし頓にきき侍りて文やるとて中に
なき人の形見に殘る君もまたある世ながらのわかれ悲しき
　若狹の人に馬の餞に
しばしだに別るゝはうし若狹なる後瀨の山の後にあふとも
　陸奥の會津をしろしめす中將の君に仕うまつる越智直陽ぬし故鄕に立ち歸り給ふ時みやびたる種々をつどへ入れて參らすとて桐もて長き箱を調じたりし其の蓋の表にかいつけける
みちのくのしのぶ種にと武藏野のくさぐ〵をしも見するなりけり
　又馬の餞とて紫のゆかりあるばかりにうるはしみつる君の今は陸奥へ立

〇ひれふる　領巾振る。大伴狹手彥任那に使する時その妻松浦佐用姬領巾振りて別れをゝしみたりといふ故事。「遠つひと松浦佐用姬つまごひにひれふりしよりおへる山の名」（萬葉集五）

〇ある世ながらのわかれ　生き存へて居ながらの別れ。生別。

〇みちのくのしのぶ　陸奥の名産しのぶ草にしのぶをかく。

ち歸り給ふ名殘はせむすべしらに淚さへ留めかね侍る心の奥は中々に壺の石文かき盡すべくもあらずなむ

會津根の國遠ければ玉梓のつかひさへこそともしかるらめ

常に祖母など聞え給ひし思ひつゞけられて

親の親とむつましみしも限りあればこの別れ路にまどはるゝかな

土佐のからの殿の旅だち給へるに紐鏡といふ果物をたいまつるとて箱の中に書きて奉る

君を惜しむ淚が思ひもかゞみにし寫らばしばしかけ留めましを

同じ心を

浦遠く君がみふねの渡る日もかゞみのごとに海てらさなむ

二月ばかり越えゆく人にやるといふ心を縫子の許へ

なれてくる秋をたのむの鴈だにも別れはうしと君はしらずや　縫子

かへし

歸るさを今こむ秋とたのめても覺束なしやかりのうき世に

土佐のからの殿の御國へたたせ給うける御馬の餞に例も奉りものし侍れど今年は我が身のなやみもいや增し侍れば來む年の事も覺束なければ何

〇紐鏡　裏面のつまみなどに紐の附きたる鏡。但しこゝは果物とあり詳にせず。歌は鏡にかけたのである。

わざして參らせむと思ふ心も及ばねば此の頃好ませ給うける御將棊の駒といふ物參らすとて鹿の角にて作りたるに金して文字を入れたるを調じて紅の袋に入れて香箱に入れて奉る其の袋にかきつけて參らせける

うちすてて君はゆくとも別れ路をしたふ心のこまはおくれじ

未の年の卯月末の五日に土佐のからの殿御國へ出でたたせ給ふをよそながら見奉り送らむやと宣ひし畏さにはる〳〵と大森といふ所までまゐでたりしが遲く御館を立ちいで給ふ事になりてまちに待ちわび奉りて程遠き所なれば今はとて歸さの道に向ひぬるに野近きあたりにてことなりぬと里人ひしめく聲するが嬉しうてやがてわたり過し給ふを御こしの內に見奉りしはいとまばゆき心地しながら爰まで來つる本意かなひて嬉しうも忝うも夢のやうになむ海づらなるに風いたうふきける日なれば御供の人々あわたゞしげに立ち續きて御傍にだに立ちよることの難けれど御目とゞめさせ給ふのみを思出にして御名殘を見歸り侍る程に御供なりける山田の何がしに仰言給はりしとて御こしに一人たちおくれて殊更に賤が屋によび入れて御言の葉いひつゞけて萬くち語らひはべりしぞ面だゝしうも忝うもおぼしはべりける折よくばと心して五葉の松に歌むすびて懷

にし侍りしを此のぬしに奉れ給へかしとて遣はしけるにかくぞ

別れをば惜しむ心も忍びつゝたゞこむ年をまつと知らなむ

かしこさにとのみありしや程へてかなたより御かへしに來む年をまつ
てふ人の言の葉にいや名殘そふ旅のわかれ路

同じ殿に文奉る中に卯月の末の八日ばかり箱根の山中にて時鳥きき給う
て詠ませ給ひし御歌とて女君より傳へて見せ給ひし東路にゆきてなけか
し時鳥箱根の山路けふこえにきと此の御歌によりてかくなむ書きて奉る

筥根やまこえゆく君を惜しむとて時鳥さへねにやなきけむ

又五月雨ふりつゞきたる頃詠み侍りしとて書きそへて

人しれず心みだるゝ五月雨にきみが旅寝もいかゞとぞ思ふ

冬旅行く人にといふ心を

君がゆくを荷前（のさき）の箱のをしまずやあふごありとも頼まれぬ身は

山ごしの風寒からし筑波ねのこのもかのもの陰もなきころ

ふる雪をうち拂ひつゝゆく道はわびしきものの樂しとや見む

同じ心を諸鳥の許より野も山もかれゆく頃の草枕何をまきてか旅寝はす
らむ　かへしに

○あふご　會ふ期。遇ふをり。

野も山もこえやわびまし君と我と手枕まかぬ夜をし隔てば

諸鳥のいもとせつれて伊豆のゆあみにと出で立ちける時にはらからよりも親しき中らひにかかるやましき身をふり捨てて長き旅ねに勇みたち給ふがにくければはふ蔦の別れのうさは中々にいはぬをいふに增るともおぼし知り給へかしな

たびねする鄕にだにも鼻ひせば我が戀ふらくのかよふとをしれ

又尼とじの許へしばしばかりの程だに別れといへば心細うもさびしうも思ふ給へらるゝを萱の根の長き日數を數へつくすらむ手もたゆく待ちわびむかし

旅衣うらめづらしみいそぐとも秋風たたばかへり來ななむ

故鄕なりける稻荷山の近きわたりに立ち歸るといふ人に言づてをだにとて

わけていはむ言の葉もなし稻荷山やまず戀ふると人に告げてよ

春旅ゆく人にといへる贈答題に鶴尼より歸る春と共にたちわかれゆく人にはひまつはれよ藤浪の花とありけるかへしに

ゆく春と共に急げど藤かづらまつはれもせばとまらむものを

○鼻ひせば云々　鼻ひる（嚏をする）時は他より噂されをるといふ俗說による。

○故鄕なる云々　作者は荷田春滿の娘。

いなきが伊香保のゆあみにゆきて文の奥にさらてだにうきはならひの草
枕旅ねの秋を思ひこさなむといひおこせければ返事すとて

草枕秋のたびねの袖のつゆおもひやるとは思ひしらずや

とかくいひける人に始めてかへしやるといふ心を

わけいれば苦しと聞けどわりなくて今日ぞふみ見る戀の山道

いひはじむ

おもなくも何なか〳〵に池水のいひ出でし後をいかにせましや

戀のうたに

月たたば戀ひしねとにやいな舟のいなともいはでつらき君かな

返事せぬといふ心を

幾そたびいふかひなきは耳無の山のくちなしえてし君かも

戀の心を

月草のうつし心のうすければ變るとなしにかれやゆくらむ

忍ぶことある人に代りて

思ひでにとばかりいひて別れにしその曉の夢ぞこひしき

逢戀

○いな舟の　枕詞。いな、輕しに冠する。稻舟は稻を積みたる舟。

○くちなし　山梔と口無しとをかく。

○耳無の山　大和國。磯城郡、耳成村。

鳰鳥のおき長川のながかれと契るあふせはかはらずもがな

夢逢戀

はかなしやくらぶの山に宿りして逢ふと見てしも夢にやありけむ

忍逢戀のこゝろを

此の世にはさめぬ夢路に迷ふともくらぶの山に宿りとらばや

不逢戀

厭はれてすぐるとならば中々にあはぬ月日もかくは怨みじ

源氏物語によせて契戀の心を

わりなくてしるしばかりの扇さへとりあへぬまに有明の月

戀の歌とて

おもはずも契りけるかな有明のつきぬなげきの始めなりとは

後朝の時雨といふことを題にて

思ひやれさらでも露のおきかへるあしたの原の袖の時雨を

朝戀の心を

朝な〳〵向ふかゞみに我ながら思ひやせぬと見るが悲しき

見増戀

○くらぶの山　山城國鞍馬山の古名。暗部山。

○後朝　男女相會したる翌朝。

○さゝがにの絲　蜘蛛の絲。

浦の名のみるめにだにも餘りにし涙を今はいかにせましや

月前戀を

涙のみこゝにはくもる月の夜も夜よしと人はよそにとふらむ

玉かづらといふ句題に

よそほしき君が髪插（かざし）の玉蔓かげに見えつゝこひぬ日はなし

戀の歌の中に

秋風にみだれて中はたえにけり淺茅にかゝるさゝがにの絲

片戀を

ほのにだに逢ひ見ぬ程は三日月のわれやまめやは片戀にして

相思はぬ

思へども思はぬ人としらぬまに戀ひ死なませば安からましを

冬戀を

戀草はかれずもあるかな秋はてて時雨ふりぬる我が身ながらに

羇中戀を

草枕旅のながぢのうきにしも戀てふことはわすられなくに

題戀

契りをも結びあへぬに岩しろの松の猜くもあらはれにけり

祈戀

ことならば戀ひ死なましをあふまでの命を神になにいのりけむ

逢ふまでと神にかけしは昔にていまはたえねと祈るたまの緒

寄木祈戀

かしは木の葉守の神に祈りてもおぼつかなしやもとの心は

逢はでのみふるの神杉年へてもつれなかれとは祈らざりしを

顯戀

顯はれて松のねにのみなくとても今はた人を思ひやまめや

恨戀

うき身にて思ひこそしれ死にかへり恨みを人にのこすためしも

冬恨戀といふ心を

秋風にこゝろさわぎし眞葛原うらみし程にかれにけるかな

恨戀

朝な夕な隔てぬ中とならひなばよるの衣のうらみしもせじ

恨身戀

○ことならば　同じことなら。

○神にかけし　神に願ひをかけた

○葉守の神　樹木を守護する神。

御祓せし身をこそ恨め今更にかけて祈らむ神もなければ

絶戀りを始めにて

りちの音も心も共に亂れけりよりあふことの中絶えしかは

絶　戀

忍ぶれど今はかひなきみちのくの緒絶の橋のふみも通はず

あき人にふみつくる戀といふ題にて

ゆかりあらば文やりてまし末終に浮名をたつの市女なりとも

戀の歌の中に

やまとにはたぐひもあらぬ戀すれば唐紅の涙おちけり

わたつみの深き心は通へどもみるめからぬぞ思ひなりける

絶　戀

笹蟹のいとかれ〴〵に見えぬるや中たえぬべき始めなりけむ

土佐のからの殿より寄國戀といふ題をたうびければ

厭はめや世におふけなき戀すてふ浮名は君が國にみつとも

寄橋戀を

旗すゝきくめぢの橋の中たえて年をへむとは思ひかけきや

○りち　律。

○緒絶の橋　陸前國志田郡古川町にありし假橋。古來陸奥の名所の一。

○たつの市女　辰市の女。大和國添上郡の村の名。舊平城の左京・九條二坊より四坊の邊に當る。浮名を立つゝ上よりかゝる。

○笹蟹のいと　蜘蛛の絲。

寄七夕戀

あふ事をまたこむ秋と頼まねば今宵は星ぞ羨まれぬる

寄草戀

うき人の心にしげる草の名の忘れても我はわすられなくに

水鳥によする戀の心を

なぞやかくうき水鳥のそれだにも青羽の色は變らぬものを

寄川戀

三瀨川かはる心は頼まれず玉手のさきのたすけばかりも

寄木戀

つれなしや松にもなれて宿り木の宿ればかれぬ習ひある世に

寄橋戀

橋柱たえぬる中は津の國の長らふるともかひやなからむ

寄篷戀

ぬれそめし袖は厭はじ浦づたふ磯の苫屋のとまれかくまれ

寄筵戀

さ筵に衣かたしきぬる夜おちず夢にも人をまつと知らずや

○津の國の云々　攝津國長柄に長らふるをかく。長柄の橋は古き例に用ゐる。「世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり」（古今十七、雜上）

○足乳根　母の枕詞。
○かふこ　飼蠶。

○きなれそなれて　著馴れ磯馴れて。著なれて。

寄蟲戀

足乳根の母のかふこにあらぬ身も戀てふ物はいぶせかりけり

寄川戀

たえざりし逢瀬も淀む飛鳥川あすかかはらむ中ぞかなしき

寄弓戀

おもひいる心はしらで梓弓つらくも人のなりまさるかな

相知りて侍りし人の物よりきて背に文をさして是れはいかゞ見ると云ひたるに詠みてやる心を

山菅のやまずこふらむ中ぞとはよそながらだに見しらざらめや

ぬれ衣

今更にぬぎかふるともたけからぬ波の濡衣きなれそなれて

寄夕戀

けふに限る命なりせば中々にあすの夕はとはれもやせむ

らを始めにて戀の心を

羅綺にだにたへぬ姿をほのみてし其の夕より思ひそめてき

馴不遇意

年へてもあひ見む事は片岸の松のねたくもみなれそなれて

世の中の常なきを思ひて詠める

はかなさをよそにきく身もあやふさに人ぞ戀しき物ぞ悲しき

町子の母の一めぐりに春無常の心を

うぐひすとなき暮すらむ春雨のふりにし人を忍ぶけふはも

八百君の身まかり給ふときゝしに世の中のはかなき事を思ひまして

君はいかで影かくしけむ三日月の我こそ先にと思ひしものを

はかなしや身にかへてとも惜しみぬる君は夏野の露と消えつゝ

君が齢やほ萬代といのりしは歎かむことのかずとなりしか

近き頃給はりし文を見て

袖ぬらす爲となりしか淺からず心とゞめしみづぐきのあと

葉月なかばの頃豐信君の許へ文まゐらす中に八百君の御事かへす〴〵いたみて其の文の奥に書きてまゐらす

袖の上の露もはらはで此の秋はひとりや君が月を見るらむ

秋懷舊

秋さればあるをも戀ふるゆふべ〳〵ふりにし人を忍ばざらめや

○一めぐり　年忌。周忌。

○うぐひす　鶯のうぐと憂くことをかく。

○りんたう　龍膽。多年生の草本。

○さきたたむ　母より先に死ぬこと。

秋無常

おちそめし其の一葉よりはかもなき人の秋にぞ驚かれぬる

長月十日の朝八百君の御墓に詣づとて庭の薄を手折りて思ふが儘にかいつけて手向けぬ

招きてもかひもなければ花薄露けき野邊を尋ねきにけり

寄雲無常

ふく風にまかせていにし白雲のなごり戀しき西のやまの端

往事如夢といふ題にて。りを頭におきて

。りんだうの盛りと見てし昨日をも今日は胡蝶の夢かとぞ思ふ

人の女の一めぐりになりぬるを思ひてよみてやりける

よそにしも露けきものを撫子の花をみつゝや袖ぬらすらむ

母君におくれし時よみ侍る

さきだたむ事は厭ひし露の身も遲れむとはた思はざりしを

はかなくて一夜の夢となる君を千代もと何に祈りけらしも

足乳根の老となるまでめでぬるを思へば月もうき形見かな

秋の頃ある人の墓にまうでて

淺茅生の露にしをれしかひもなく蟲のねばかり聞きて歸りき

往事如夢八百君の一めぐりに信富君集め給ふなり六月十日なり

一年をさめぬ現にかぞふれば猶も見はてぬ夢かとぞ思ふ

母君の身まかり給ひて一めぐりになり給へる日よみて手向け奉りぬ

別れぬる今日にあふかひもなき玉の影だに見えぬ習ひ悲しも

うかりける後はうき身の數そひてうき一年を數ふるもうし

殘るみのうき一年のうき數をかぞへてもまづ君ぞ戀しき

冬懷舊　思ふことありて

あかざりし其の夜の月を忍ぶれば空しき空に木がらしの聲

無常の歌。るを始めにて

。るゐもなくなぞらへもなき心地して歎くぞかつは愚かなりける

文月の中の四日は父君の三十三年の忌日なりければ形代ばかりの手向せむとて手づから花奉りなど營み侍るにも我をさなかりける頃都をたち別れまゐらせしより總て安からぬ身のあらましを來し方思ひ續くるに悲しき事は數しらず猶行末も今は短き齡にもなりぬるをいかで御跡尋ねて同じ所にだにとく行かまほしくそゞろに涙ぐみて拜みまつる

○あかざりし其の夜の月　嘗て見聞かなかつた月。

○父君　荷田春滿。

○うつしみ　現身。
○言の葉の花　和歌。
○七めぐり　七回忌。

君が跡を慕ひもゆかでちゝのみの千々に悲しき世をばふるかな
三十年にあまる月日の數よりも涙のかずぞ盡きせざりける
なき影もあはれとや見む徒らに玉だすきなる世をばふる身を
　人に代りて無常の歌む°を始めにおきて
°むすびおきしはちすの露の白玉もうき世の風に消ゆるはかなさ
　同じ時たを始めにおきて
瀧つせの早き流れのそれよりもとまらぬものは人の世の中
　豐信君の御はての日に寄花無常を
うつしみは世にはかなくて言の葉の花のみ見むと思ひかけきや
なき人の心とゞめし言の葉のはなを見るにもしのぶ春かな
　豐信君常に歌好み給ひて心深くよみ給ひしをよそへてかくは
未の年の卯月中の七日は長門のかうの殿の北の方の七めぐりの日に當り
給ふとて御寺に詣でて御佛に杜若を手向け奉るとて疊紙にそへ侍りし歌
杜若さきにほふ頃になぞや君此の世へだてていづちいにけむ
けふの御手向にとて世代君の御許より寄夢懷舊といふ御題を出し給ひて
人々によませ給ふに詠めよと仰言ありければ返しにたゞちに奉りぬ

悲しきは夢と思ひしに年をへて現と知るぞせむすべもなき

夏懷舊を

思ひ出でてながむる空に時鳥なくもかなしき去年のふるこゑ

五月中の八日ばかり源政よし君の身まからせ給ひしは昨日ばかりの夢かとのみたどり侍る程にいつしかも一めぐりの今日になり給ひしを現の日數ともわき侍らず只畏くも世におはしましし事を戀ひ奉りて好み給ひし物をとてはしがきして歌よみて手向け奉りぬ

五月雨にふりぬる君をこひわびて軒のしのぶも袖も露けき

菅沼の定前君の姉君身まからせ給ひて此の四月七日なむ早三年になり給ふを歎き奉りて御母君へ文の中に書きて奉る

うきふしを思ひいでつゝ若竹の葉末の露のきえかへるらむ

文月の二十日ばかりや百年の昔とふりにし堂白翁の忌日なりとて人々つどひてかぐはしき燒物し悲しき歌よみなどして手向け給ふをよそに聞かむも心なしとそゝのかす人のありければ主しらぬ事なれど藤袴によせて詠みておくりける

をりにあひていやしのべとや藤袴昔の秋の香にぞにほへる

かぐはしき人の形見か藤ばかま今もこゝらの野べを匂はす

八月十日に人々彼岸の中の日とか佛に心ざしみゆる日といふめるが其の事はしらぬものから清涼院の忌日なりければ御墓に詣づとてありし庭の薄を手づからもて行きて佛に奉る

去年よりも今年はいとゞしの薄忍ぶかひなき露に亂れぬ

まことや去年六月十日に身まかり給ひし其の文月にも此の薄を折りて手向け侍りしにもかくぞ

ありし世に君が見なれし篠薄亂れて戀ふるくさとなりにき

寶のこよみ十あまり二つ未の年兄君在滿の十三年になり給へるを數へて八月三日によみて手向け奉りし

君なくて猶あしたたず歎くかな手を折りはてて三年へぬれど

冬懷舊を

身に積るうさに思へばたらちねの頭の雪はなげかざりけり

三好貞陳の七回忌に桃林寺といへる寺にまうづとて書きて手向け侍る此の神無月中の三日は白雲窩の翁の七年めぐりし忌日なりとて人々集ひてみ寺にまゐり給ふに我も罷りあひて同じ心に昔を忍ぶ事のみをいひかは

○寶のこよみ云々　寶暦十二年。

○手を折りはてて　十指を屈して

し歎きかはすもかひなきわざなりければなき人の好み給ひし言葉をだにと手向け侍るなりいにし頃みづから遠きさかひに別れし程も常に只まつまつとのみいひおこせ給ひしあらましを思ひつゞくるも胸ふたがりてなむ

七年のけふもとひけり山里のまつといひてしこと忘れねば

白雲のいはやにすみし山人はいづちいにけむ戀しきものを

春懐舊

松の葉の若葉さしそふ春毎に植ゑてし人の昔をぞおもふ

同じ題にて人に代りて

春雨のふりぬる人やしのぶらむ田づらの蛙うちむれてなく

亘昌大德去年子の年の霜ふり月十五日に身まかり給ひしを忘るゝ折なく戀ひ悲しみ侍るに今年大人の年卯月二十三日に例の作法の規式つかうまつりしとて御弟子なる亘雲大德のおはして來しかたの事物語りなどしつ此の團扇は古大德の二度ばかりや手にならし給ひけむを形見に見よとていと光ことなるを携へてたまはりければ打ちまもらひていとゞ涙ぐましうかくぞ獨りごち侍りける

○ふりぬる　降りぬると古りぬるとをかく。

○くさはひ　物事の種となるべきもの。

○菖蒲草あやなく　菖蒲草はあやなくの序。根長くは其の緣語。

よしなしや今はこれして招くとも西にいりぬる月は歸らじ

中々に忘られがたきくさはひにこそはと包紙に書いつけ置きける

五月二十の七日にきき侍れば末の四日より土佐のかうの殿の一の人と聞ゆる綾野のおもとの腹をいたく病みて横にふす事だにかなひ侍らぬさまにて二十八日の朝の辰の時すぐる頃あへなく失せ給ふと其の日に聞き侍りしいと〳〵驚き侍るといふも更にて常に母よ娘よなどいひかはし露の隔てなく君に聞えあげ奉る事も承る事のみそかなるをも打語らひ侍りしそれも心もてのみにあらずなき女君の仰事にて賴み少なき身なれば蒼生が娘とも思ひうしろ見てよなど宣ひしからにいとゞ深く契りかはし侍りしを思ひつゞくるに胸あきがたうなむ只さが事か僞りかとのみぞ猶ある人のやうに思う給へらるゝに歌も口にいで來ず淚のみ日に幾度も鼻うちかみて歎きくらし夜は夢のやうに面影おもほえぬ且は君の御心にかなひ給ひぬれば御國にてきかしめし歎き給ふらむ御跡のみ殿の內の事などうしろめたうや思しつゞけ給ふらむなど二かたにかなしき事のかぎりになむ只うちぎきにかくぞいはれける

根長くと契りしものを菖蒲草あやなくかれしことの悲しさ

はかなしや君をも身をも隔てじと契りしことも夢となりにき

夏懐舊を

思ひきやさらでも我は五月闇はるゝ時なきなげきせむとは

山内の大とじ君常に倭歌好み給らて御後見奉りし事をいと樂しき事に思し給ひしが本意叶ふ心地し侍りていかでか御心を慰め參らせむいかなる時か逢ひ見奉らむなど行末長くと思ひ頼みまゐらせしも今は夢となりはてて現に世を去り給ひしを返す〳〵歎き奉りて御手向に

ゆきてしもまだ見ぬ山のもみぢ葉の染めも盡さでちりしはかなさ

同じ時やほ子より秋夕傷心といふ題にて

大方もながめせしかど此の秋のゆふべは殊にかなしかりけり

今は身のあつしさの年に月にいや増しゆけば兄君の三十あまり三とせになり給ふわざするも此の秋や限りならましといとゞ今更のやうに悲しくて萬に思ひいづる事のみ多かれどかひなければ只くりかへし秋舊を思ふといふ心の歌どもを高きも賤しきもこひ集へてけふの手向となし侍るついでに同じ事をのみ書いつけける

一日だに見ねばと思ひし君なくて三十三年(みそぢみとせ)の秋もへにけり

○兄君の云々　荷田在滿の三十三回忌。

○なすてそ　捨てたまふな。

○御風　荷田在満の子。光格天皇の天明四年(二四四四)歿。年五十七。御風家集、西遊紀行の著がある。作斎蒼生子は天明六年六十五にて歿した。

ほのにだに今も見てしが三十あまり昔の秋の三日月のかげ

あな戀し昔のあきの中空にひかりかくれし三日月のかげ

昔の御教へを思ひつゞけて

なすてそといひしを君が形見ぞと拾ひし事のはづかしきかな

ちか子の許へ娘のいたみに詠みて遣はしける身の悩ましさにくらされて心ならずうとき月日にそへても折からの空いかにやながめ給ふらむと老の寐覺に

思ひやるも袖に時雨のふりにけるこのよの闇にかきくらすらむ

甥の御風(のりかぜ)が一めぐりの手向に

七草の花のいろ〳〵見せましと植ゑにしかひもあらぬ秋かな

去年甥なりける御風に別れしを思ひつゞけて

いつよりもうきになれぬる此の年と思へばいとゞ空を眺めて

春懷舊　人の十三回忌に歌人なりければ

見し人は昔の春のことのはの花をしのびて鶯も鳴く

寄冬月懷舊　霜月十五日眞昌大徳一周忌追善勸進蒼生

去年の今宵あかずいりにし山のはの月ふき返す木枯もがな

○身をはづかしの　恥かしと羽束師の森(山城國乙訓郡)と。

○香合　かうがふ。香を入れる器。香箱。

○さいで　裂絹。帛布の裁ち端。

木枯に磨かれいづる月見ても飽かでいりにし影をしぞおもふ

冬懐舊を

若葉さす頃もありしをふりはてて身をはづかしの森の木枯

往事如夢

又見むと思ふ心にまかせねば過ぎにしことぞたゞに夢なる

三代子の去年のしはすばかりよりそこはかとなく惱みけるが今年となりては歌よむことだに筆も心も及ばぬなどいひおこせたるをあはれがりて常にとぶらひ消息通はせし程にいと重くなりゆきけるとて卯月の十日頃にやありけむ高村の千古に言ひ傳へて手馴らしぬる香合を淺緑の二重のさいでに包みて中に歌かきて入れたるを形見にとておこせたるがいと悲しうて涙ながらにあけて見れば殘しおく言の葉もなし露の身の消ゆればもとの野邊の夕風とか有りしかへしに短尺に心清らかにしたまへとてと書いて

言の葉の露も心なのこしおきそ我も遲れず消ゆる身なれば

包紙に玉の箱は二つなき形見と我世にあらむ限りは身にそへ侍らむ涙かすみて書きさしつとかきたり

祐天寺の大徳の十七年の忌に

法の師のためには何かやまの井のあかくみてこそ奉りてめ

梅のけづり花につけて姫路の侍從君に奉る

あなうめと見すてなはてそ君をのみおもふ心は常なるものを

曙に烏のみだれてとびゆくかた

三つ四つと見てし昨日の夕がらすこゝら名のりてわたる曙

寄鐘述懷といふことを

きぬ〴〵に恨みし事もありし世を今はかぞふる曉のかね

獨述懷の心を

嬉しきは共にと人もいふめれどうきを歎くは身一つにして

古寺曉を

山寺のあかつきおきの袖の露かゝるばかりも厭はしの世や

古寺夕を

くれゆけば菜つみ水くむ人影もたえて寂しき峯のふる寺

古寺嵐を

ふきはらふ松の嵐のなかりせば雲にうもれむ峯の古寺

○あか　佛に手向くる水。

○梅のけづり花　梅の木を削りかけて菊の花のやうな形にしたもの昔時は柳楷などでこしらへ、正月注連飾を取りのけた後の門戸に吊して、呪とした。

○きぬ〴〵　後朝。男女相會したる翌朝。

○菜つみ水くむ　「法華經を我が得しことは薪樵り菜つみ水汲み仕へてぞ得し」(拾遺二十、哀傷)

蘆かりつみたるところ

こちたくも刈りにけるかな難波人蘆火たきつゝ圓居せむとて

名所松

さゞなみの志賀の浦松二木あらば一木は庭に植ゑて見ましを

久しうこゝちそこなひて世のなかのはかなさを聞くにつけても思ひつゞくる事のみしげければ手ならひに

なき人もよしや惜しまじありとても難波の蘆の短かかる世に

温泉を

くる人は見ても命やのばへましつくまのみゆの瀧つしら絲

聊か恨むる人に書いてやりける

世のうさと身のくるしさを思ふには人のつらさも何か恨みむ

又思ふ事ありて友どちの許へ

行末をながくと何にたのめけむ我が世短くなりぬるものを

かしこき御庭の梅花をおし花にしてよき君のたまはりたる御心ざしのいといと嬉しきをたゞにやはとて及びなき御庭の花を君がつてならで今はいかでかはといとゞ

〇のばへまし　のぶの延音、のべよう。
〇つくまのみゆ　つくまは今伊豆國下田の南西の地。
〇おし花　紙などの中に挿みて押した花。

淺からぬ君が心のいろも香もそへてみそのの花ぞめかれぬ

やよひ五日許り戸澤の殿の御館に召しにしたがひて參りて侍りしに六日に姫路の侍從の君もそなたにおはして何くれと遊び給ふ折しも翁二人と伴ひて御庭にいでまじらひ侍りければ女の童して侍從の君の御許より御短冊にかくぞありける老の身にたちまじはれば咲く花を白髮に似よと折りかざすらむとのたまひおこせけるをいと疾く御庭にて懷なる筆して短冊に書きて奉りし老をあはゞめ給ふがうれたさにかへし

君もいざまじりて見よや櫻花をりてかざせば老もかくるを

かくきこえ奉りし

山家水

にごりなき心にまかす山清水くむも流すも手づからにして

雜露を

秋にのみ露はおくかはもの思へばとはにも袖に玉みだれけり

雜火を

晝はもえずあればこそあれ御垣守衞士のたく火も人の思ひも

雜のちりを

○めかれぬ　目離れぬ。遠ざからぬ。

○あはめ給ふ　あはれみの約、あはれみ給ふ。

○御垣守云々　禁中の諸門を警固する衞士。夜は警備の篝火をたく。「み垣守衞士のたく火のよるは燃え晝は消えつゝ物をこそ思へ」(詞花集七、戀上)

うはの空の風にまづたつ塵よりも輕きは人の心なりけり

雜風

花の香も紅葉の色もしるべする風てふものはにくからなくに

門杉

幾としも人はとひこですぎの門ならぶ梢はまつと知らずや

宇津山

年ふれば夢路も遠き宇津の山うつゝにこえし事もありしを

あるうま人の御戲れに月花によそへて物歎きし給ふ御歌どもくり返しみ侍りて其の卷の奥にかいつけ侍りて奉りし歌かつはめでかつは歎きてとかきて

月花の深きあはれをしるとしも知らずともいはで袖濡らしけり

或人の許に人々集まりて夜一夜遊びあかしてつとめて主のまだ目さめぬに忍びて歸りきて詠みておくりける老の寐覺も忘れ給ふにやいといぎたなき御事になむ

ねもやらで我は歸りきあたら夜のあかぬ宴を夢になさじと

或君の御前にて蛤といふ貝の片われを人にやる心をよみ侍りける

○しるべ　案内。

○宇津の山　「するがなる宇津の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」（伊勢物語）

○いぎたなし　容易に目さめず。寢坊。

忘るなよかたみに思ふかひあらばわれても末にあはむ頼みを

　侚志が京にありし頃よみおきし歌くさ〴〵書きてやるとて其の奥にかいつけける

語らはむ人しあらねばつく〴〵と一人都をしのびてぞふる

　御くらまちに住みける井田の何がしが娘に婿迎へてほぎあへるに海つ物にそへて折にあひたるとてぼたんがさねのさいで二重に上下と別ちて書いつけてやりける

さかゆべき人の契りもふかみ草ふかき色香をとしにそへつゝ

　人の衣をかりて遲く返しやるとて袖の中に

かり衣うらなければぞとゞめしを心なしとな思ひ隔てそ

　いの寢られぬ夜曉の鐘をききて

いねがてに我がよふけゆく鐘の音を數へ盡さで身を盡すらむ

　富士の歌よめと人のいひければ

たぐふべき山しなければ不二のねはたゞ大空のものとこそみれ

　下野なる人の許へ栞に書きてやりし

古の道のしをりをわけいりて猶たづね見よことの葉のみち

○ぼたんがさね　表は白、裏は紅梅。
○さいで　裂帛。絹布の裁ち端。

○いの寢られぬ　牀に就いて眠られぬ。

○古の道のしをり　古の和歌の道のしるべ。

後世心にかくる人のしをりに人に代りて

ふみみるを君が心のしをりにてみ法の道も分けは迷はじ

又槇子のしをりに

吉野山わけいらずとも言の葉の花を尋ねむしをりなりけり

或人にいざなはれて片田舍に出でたちて若苗植うるを見むとてまかりけるがいと珍らかに淸うありけれど常に物思ふことのたえやらぬ身にしありければをかしと見ゆるふしども果て〳〵は哀れとのみ思ひなされてともすれば眺めいらるゝぞわびしきや

さ苗とると山田に田子のたつよりもみる袖ぬらすみづからぞうき

裳裾のくるしげに濡るゝを厭ふけしきもなく心をやりて植ゑ渡すを猶みやりて

あはれとも羨ましとも思ふどちおもひもなげの賤のしわざは

姬路の侍從の君より柏木の巻一條宮にての心ばへして大きなる柏と楓の枝をかはしたるを柳筥にのせてしる人はよりても見よや事ならばならしの枝の同じ緣をといふ歌を短尺に書いて給へりしかへし柏の色のかはりたるやうの紙に書きて奉る

○柳筥　柳にて作つた筥、古、これに筆硯墨短冊等を納れた。

○田子　田人。農夫。

○年の内もたのまれぬ身　春はさておき年内に死ぬかも知れぬ身。

○玉いづるてふ　玉出島。和歌浦玉津島。

たちならぶ緑にかへて柏木のいろはかはりし宿としらずや

やまひにふしけるころ明石の君の母ぎみより海邊のけしきなど見せまほしとのたまひおこせたまひければ

かくとしも君はしらじな五月闇心も空もはれやらぬ身を

久しく訪はざりける人の春になりてといひおこせけるに

年の内もたのまれぬ身を人はまた花さきなばと契るはかなさ

板倉の八重君の御許より御文の奥にしらじかし池の玉藻の底にのみ思ひ亂れてこひまさるとは　かへしに

亂れつゝありとし聞けばいとゞしく思ひ増田の池の玉藻の

いつよりあひ奉らむやと聞えたりし

住み馴れにし宿りを外にうつろふとて近鄰なる人の許によみてやりける

今よりは誰と語らむ君ならでおほかた人にへだてある世を

世のうさも身のわびしさも語らはぬ昔になぞや別れざりけむ

名所松

言の葉の玉いづるてふ島近き和歌の浦まつこゝに植ゑばや

嶺松を

子の日にも人しひかねば峯たかき山松が枝ぞ八千代へぬべき

山家鳥

明暮もおどろかされぬ柴の戸になれて小鳥のあさるあはれさ

軒の風鈴に

わび人の宿にかよへる松風のすゞろにものを思はするかな

閑居友

心から人離れたるすみかにはけしきある鳥の聲も友なる

岸君の常に物忘れすとて笑はせ給ひければ文の奥にかきて奉りける

住の江の岸てふ君になれぬれば忘るゝ草ぞ生ひしげりける

姫路の侍從の君の北の方より始めて御歌みせさせ給ふる御詠草の片つ方にみちしらば蕁ねても見む和歌の浦にふみなれにてし人をしをりにと書きてたまはりければかへしとはなけれど奉りつる歌

ふみなれて君し拾はば和歌の浦の玉の光はいやまさるらむ

心地そこなひて年月ふりぬる身なればば物心ぼそくおぼえて草にも木にも大かた心とゞめねど軒の一木の松ばかりは常に友と見つゝあかざりければ

○子の日にも　正月子の日の小松を引きて遊ぶ古のならはし。

○あえむ　肖えむ。あやからむ。

○わか竹　若と和歌とをかく。

色かへぬ友とこそ見れ軒の松千代にあえむとは思ひかけねど

海邊夕

いさなとり海邊を見れば夕なぎにほこらしげなる蜑の釣舟

屛風の繪の歌竹の葉茂し

草木にも見えぬ緣はわか竹の若葉に露のかゝるあけぼの

唐松あるかた

姿さへ枝さへ葉さへこと木には異なる松を植ゑてこそ見れ

風鈴の歌とて人の爲に

千代かけてかはらぬ宿の松風はたのしきことのねにや通はむ

おのが宿りの軒にかけたる風鈴といふ物の短尺に

すむ人はあすをも知らぬ軒端にも千代をしらぶる松風の聲

風鈴につくるうたとて日音院大德のもとよりみやびたる短ざくおこした

まへりしに詠みて書いつけける

山寺のゆふべの鐘にひゞきあひて心すむらむ軒の松風

鐘

ひとりねのゆふべ曉聞きなれてうしとはいはず山寺のかね

○宇多の松原　土佐國香味郡岸本村より赤岡町に至る間の海濱。
○これして　この歌を書きつけた團扇。
○をみなのあらむさま云々　女さしなすべき凡ての道を知りつくす
○こめきて　子供らしくて。おほやうにして。
○こゝろしらひ　心構へ。
○さり難きよすが云々　婚約の出來たのをいふ。

名所松

たちよれば枝毎に鶴の聲すなりいくよかもへし宇多の松原

卯山翁の常に棊うつことを好み給ふに懐なる物に歌かきてよとありければかくぞ

斧の柄はくちなば又もすげてまし昔の人のごともうたなむ

或翁の團扇に歌よみてかけとありければ

二つなき心の友とゆふべ〳〵これしてまねけやまの端のつき

尾張の御殿の宮つかへ人より短尺にかずの歌かきてよとあるにいなみあへずて十二首かきてやりしにそへてかくなむ

かきやるも苦しかりけり世をうみに年ふりにける蜑の藻屑を

尾形昌軒といふくすしの女恆子といへるはをみなのあらむさま殘るところなうおもひたどりはたかどありて才も男子にもまさるばかりありてもいと〳〵こめきて一文字をだにしらぬやうになごやかにもてつけて顔かたちもおのづから一きはまさりて見ゆるもこゝろしらひのよきにうつるなりけり常に親しういひかはして娘などいふばかりに恆子も母代とのみ文にも上に書きなど親しかりしかどさり難きよすが定まり給ひて卯月の

○うら　衣の裏とうら（心）とをかく。

○せうまう　燒亡。

○我が世は末の云々　末の松山は陸前國瀧釜の西にありし歌枕。以下三首皆「契りきなかたみに袖を絞りつゝ末の松山浪越さじとは」（後拾遺十四、戀四）による。

○しら浪　白浪と盜賊とをかけた

末つかた人に迎へられ給ふがいとゞねたき上に惜しまれ侍れど人の幸なるをいかゞはせむ只今よりうとくなり侍らむ事に萬心にこめたる文まゐる序にきぬ一むら贈るとて包紙にかくぞ

千重にとも思ふ心は及ばねどうらなきをのみ見するばかりぞ

せうまうにあひていとゞ萬ことあはざりし又の年の彌生はつる日盜人の閨に入り來りてくさ〴〵を取りてゐてゆきしを見つゝもいかゞはせむ思ひかけぬ事のありけるにもすべて心の安からぬ身を思ひつゞけ侍りて

とにかくに我が世は末の松なれやうきみる上にかゝるしら浪

かかる伏屋に何を思ひかけけるにやとあやしうて

かくばかり世をうみ渡る我としもいさしら浪や心よせけむ

末の松も何かたのまむ時しあれば我が宿にしもこゆるしら浪

今戸てふ所の慶養寺の亘昌大德は我が門の人の中にしもいと殊に思ひかはし侍るに去年の夏の頃より折にふれつゝ惱み渡り給ひしが今年となりてはいと〳〵あつしさの常のやうになり給ふをうしろめたうのみ思ふ頃しも空かきくもりがちにて卯月の末の日殊に雨のふりて物わびしき頃文やるとて奧にかいつけ參らせし

昨日けふ君が心地や村雨のふるにつけつゝいかにとぞ思ふ

山家雨

ましらなく片山里の雨の夜は戀せぬ人もいねがてにして

山家夢

現には心うごかぬやまずみも夢はうき世にかへるとぞ見る

紀伊國和歌山にありし頃縫子の許よりいと心ある言の葉をよせ給ひしをつれなく月日へにけりさぞな恨みやし給ひけむ

心になかけて恨みそたち歸るほどはへだてぬ和歌の浦なみ

同じ頃縫子のもとへ扇を送るとて

年へてもあふぎてふ名を忘れじのしるしと見つゝ手にならしてよ

ある人の許より扇の面に歌かけよとておこせ給ふにかずかず書いつけけるが竹に雀のやどりたるかたに詠みてかいつけける

直ければうきふし知らぬ呉竹に宿りなれぬるむらすゞめかな

又櫻の開きたるにかはほり一つあるかたにいかゞ詠み侍らむやと思ひめぐらして夏の櫻の歌を書きつけける

夏しらぬ片山里にたづねきてなほ盛りなる花を見るかな

○かはほり　蝙蝠の古名。季は夏の夕。

○折句　句の頭字にまささし君を含めた。

人の扇に冬の富士の歌よめとありければ

白雪のふりしく頃は富士のねのいつよりもけによそほしく見ゆ

白雲もいゆきはゞかる不二のねにいかなる雪のかく積りけむ

板倉の八重君の扇に書きてまゐる

大空にしられぬ風の通ひきて閨のあふぎぞ思ふともなる

魚足ぬしの扇に天の橋立の繪かきたるに是れが歌よみて書きてよとありければ

ふみ見ずばそこともしらじ大江山松よりつゞく天のはし立

九月許り或人の扇に唐人のかける繪に片へは海と思はせて木立ありげにて下に唐人たちたるに歌詠みてかけとありければ其の裏に書いつける

から人も青海原にたち出でてふりさけ見よや長づきの月

常陸の姫君の御許にて前田まさとし大人に書きて見せ侍りし歌折句にして

まつ程はさもあふ事のともしくて忍ばえなくに君がきませる

肥前の平戸しろしめす殿のつかへ人聊かのけさう事のふるき罪にあらたにあたりて御國の島に流し遣はされしを悲しみ傷みて伊之といふ人御ゆ

るしの御惠みをうけむ爲にとて紫の緣にしもあらねど友どちの深き惠みにて其の人の爲にとみに法華經八卷を自ら書きて其のよるべの寺に納めてむとて書き終りて見せ給ふる心ざしを感じて九つの牛の一つの毛にも及ばざる事ながらに伊之のそゝのかしにて其の經の裏にかきつけぬ

松浦潟なみならぬ罪もきえぬべし君のめぐみとのりの惠みに

病にふしける頃うま人より給はりし芍藥の花をみて戯れに詠みて見せ參らせし

ふしながら花をめづるも畏しやくや〳〵とのみ君まつらむに

源氏物語卷の名を贈答の題にして桐壺を

紫のはつもとゆひを始めにてひとつゆかりに匂ふ言のは

空蟬を

忍びつゝねはなかれけり空蟬の身のうき程を思ひしるにも

土佐のからの殿より御文たうびける中に君がまつ心さこそとおもふにぞ見まくほしさのいとゞ增りてとて給へるかへしに奉る文の中に

戀しさをいかにせよとかとはぬをもとふに增りし君が言の葉

きさらぎ六日の夜火の騷ぎありて大方殘りなう燒けうせ世の人もあるは

○紫の緣　草のゆかり。一つの關係より情愛の他に及ぼすこと。出所「むらさきの一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」（古今一七、雜上）
○九つの牛の云々　九牛之一毛。

○くや〳〵　來るや〳〵。畏しやに添へて、しやくやくを詠み込んだもの。

○若菜の卷云々　源氏物語の卷名

燒け失せあるはさすらへぬとあまた聞き侍り我が住居もやけにける後友どちの許へいひやりし

大空にもえし煙も世の人の身のうきくもと今はなりにき

うきことの侍りし頃若菜の卷の言葉を思ひいでて

我はさは物思ふ頃のありけりとしのびにおつる涙にぞしる

卯月五月と心地のいと苦しうてもとよりのやまうのはらの高くなりゆくが今年になりて牛のあへぎにあえたるやうにほと〳〵息も絶え〳〵にのみ息づき苦しう侍るが上に身のぬるみ足らず頭の痛みさらず夜となく晝となくそゞろ寒く手足も寒きなど樣々になやましさの暇あらねば物心細き物からみづからは今は世に心殘りもあらずもとよりあつしき身にて萬のねぎ事もかなはざりしを六十に餘るまで長らへしだにあきたき心地すれば惜しき命にしあらねど高き君達もさあらぬも心ざし深きはいかにやいかにやなど數ならぬ身を惜しみ給ふるがかたじけなうも痛はしうも且は思ひ歎かれ侍りてはた昔は身にかへてと生したてつゝうしろ見かしづき侍りしうま子の訓志が今年二十餘り一つの年になりにしを獨り行末の榮えをいかで長くは見ずとも今しばしだに對面の數も數へまほしう又は

これかれめさめしやらに驚き惜しみ歎くらむ有樣もしたり顏ながら思う給へつゞけられて兼好ぬしには笑はれぬべき心地もし侍るにつく〴〵と空を打眺めて手習に

つく〴〵と眺めくらしてこし方を忍ぶをりしも入あひのかね
五月雨のふりいでてなけ時鳥きくも今年やかぎりならまし

思ふ事あまたあるに獨り庭をながめて

思ひしる人もなつ野の草の露風まつほどの心ぼそさを
我が世をばのこり少なくおもふにぞ戀しき人の數まさりける
今はとて憂さもつらさもあまらねど戀しきことぞ殘り多かる
よわりゆく身はをしまねど夕露のけなば歎かむ人ぞ悲しき
五月雨に身をしる雨も降りそひてながめわびぬと知る人もなし

身の病くるしければ

光なきを今はなげかじ我も世に長かるまじき露のたまの緒

佐藤豐信君の女君といと〳〵睦ましく聞え交し侍る頃みそかに書きかはしつる事のありし文の奥にねぎ事は數々あれど織女にかす衣もたぬ身の程ぞうき憂きにのみ今年もなかばたつか弓八百萬神も祈りつくして心の

○兼好ぬしには云々　「命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬ程にて死なむこそ目やすかるべけれ。」（徒然草）

○たつか弓　手束弓。手に執れる弓。

○歌のよしあし云々　和歌の指南役をして。

中なる事も誰にかはとありけるかへしに

唐衣うらなき君が心をばたなばたつめも淺しとはみじ

神もうし人もうらめし君さへにうきを數ふる憂世と思へば

是れは秋文月の事なりけり其の又の年に身まかり給ひてけり

逢子の許よりあら玉の年も二年こえぬれど對面給はざれば戀しさのあまりにあふ事も稀なる中となりぬればいかに契りて君は戀しきといひおこし給ふかへしに對面の程ふりしを心ぐるしげにいひおこし給ふが嬉しき物からなぐさめて

戀しさの心かよへば逢ふことはとまれかくまれ何か恨みむ

十年あまりいにし頃より歌のよしあしうしろ見て思ひかはしつる下野國粟野の里の簾蘆といふ刀自の今年うまの年といふ長月の八日になむ始めてこゝに登りしとて先づこゝに訪らひ給ひて對面し侍りしを物よりことに喜びて此の淺草といふ所に名だゝる觀世音のおはするに其のみ佛よりもみづからをたふとみ給ひてよみてみせ給ふ歌簾蘆うき秋も心は春にうれしきは花の都の君にあへばか　かへしに

嬉しきはたなばたつめのそれよりも稀なる人を秋に待ちえて

○諸鳥　林諸鳥、本姓鹽瀬、眞淵の門人、寛政六年歿。○あつらへよ　ことづてよ。

しばしわが家に宿りて歌の事をはじめて東ぶりの物語きこえしをいと
いと喜びて十日まりすぎて故郷に歸り給ひき
諸鳥のいもせと伊豆の熱海といふ所へ湯あみに行きけるに日數ふれどこ
こには消息もせずよそにのみよすがもまれ〳〵聞きはべる頃しも悦子と
いふ人の許よりかう〳〵明日なむ又船のたより侍るを文やり給はばあつ
らへよなどまめやかに聞えたびければかへしに文の奧にかく書きてやり
給へとて

ふく風のよその傳（つて）にもいかにぞと問はぬつらさにとはじとぞ思ふ

さはれ秋風たちなば立ち歸り給へよといひやり給へかしといひやりつ
貞丸ぬしの御許に文やるとて此の一日二日いさゝかも心地安らかなるや
うなれど猶はらのくるしさなどは同じやうと書きたる片はしに

白露のおくと見るまも夏草のはかなき程のたのみなりけり

とか筆にまかせ侍り
長年のもとより藪澤氏の好みとて五衣きたる女房のかたにうたよみてと
ありければ心しらひなくてはみづからその女房になりたらむやうに聞ゆ
るもはづかしければ思ひめぐらしてよからねどかくぞ色紙に書きてやり
ける

○玉垂の　枕詞、をに冠する。
○をす　をは接頭語、簾。

玉垂のをすのゆらぎにさしかくす扇の様もなまめきにけり

元愷より市隱といふ事をよめとありければ

ゆきかひを大路の中にをすたれて文よむ君の心ゆたけさ

二月朔日の夜いといたう雪ふりける又の日元愷の許より昨日まからむとしけれどとて沫雪の積る大路の行きかひに跡よりあとの消えつゝぞふるといひおこせければかへしに

沫雪のあはにはふらで大路にも跡つけがてに人やなづまむ

君も今宵は旅ねし給へかしといひやりつ

元愷のもとめにて紫式部と莊子と釋迦と三つの繪のうちに釋迦の像のかたに歌よみて書きてよとありけるがつゝましきはさる事にていと／＼いひ出でにくく苦しかりけれど久しくとゞめおきて罪うるわざなればおぼめきながらに此の歌かきつけつ

嬉しきもうきも思はじ世の中に何かさだめのありてなければ

源定前君にゆゑありてふるく持ち傳へ侍りし三河國の八橋の橋杭もて作りし香合を奉るとて短冊をそへたり

名にしおふ君がみ國のはし柱千年をかけて朽ちせぬを見よ

三河國の新城てふ所を領じ給ふ故に奉りしなり

土佐のからの殿の東におはし給ふに道ゆきぶりを書きしるし給ふべくちひさやかにとぢたる二卷奉るとてつゝみ紙に

春深くいろそふ松の言の葉をかき集めてよみちのなぐさに

夕雨

雨そゝぐ軒端の松にゆふ風のすぎにしことも亂れてぞ思ふ

男女舟にて遊ぶ心を

妹とせの中とや人のとがむらむ吉野の川の舟ならなくに

浦松

蜑のかる物ならなくに此の浦のみるめとなれるすみのえの松

秋の頃川村貞紹の許より述懷の歌ども見せ給ふ返事に文の奥に書きつけてやりける

誰が袖も露けかりけり大かたのうき世をあきの心ならひに

老いぬれば身はそれながら人の上に思ひたえせぬあはれ世の中

うしとのみ思ひな捨てそながらへば又忍ばるゝ事もある世を

秋の末つ方侍從貞臣の君より綿を給はるとて其の包紙に此の綿の一重心

○新城　三河國南設樂郡、今は新城町。
○ちひさやか　小さきさま。
○みちのなぐさ　道の慰み。
○吉野の川の舟　妹山と脊山との間を吉野川流る。
○身はそれながら　いつも同じ身でありながら。

○はひり　這入。家の入口。

○なめげ　無禮氣。

○こわ作る　聲作る。殊更の聲を出す。せきはらひす。促すなり。

も身につけて先づ秋風をいとへとぞ思ふと書きてたうびけるかへしに奉る

不知火の筑紫の綿をみにつけてあつき惠みに風もふせがむ

神無月六日ばかり思ひかけず土佐のからの殿の此の近き大ひざへ詣で給ひしとていと忍びて此の伏屋にたちよらせ給ひける畏さも面たゞしさも夢の心地して御顔拜み奉るも涙さへこぼるゝばかりにめはそらにのみにて聞えあげむ言の葉もいでやらずぬかをつきつゝうつし心も侍らぬに歌をだに奉れと山田のぬしが敎へ給ふをやゝためらひても何とかはいはれむ折にさしあへて片へには横瀨の侍從の君を始め奉りて人々つどひ給うて歌合催し給ふ日なりければ只はひりの方に屛風ひきたてて御まし所設けたるがなめげなるに汗あゆるのみにて辛うじて日もなかばたけゆく夕かげになり侍りければ御供の人々こわ作るもにくき物から苦しさの心やりに何とかかきて奉りし

した紅葉したにこがるゝ山陰をかしこく照らす夕づく日かな

名所鶴

所えてすだちし和歌の浦鶴はまだ雛ながら千代よばふこゑ

○うかれめ　遊女。
○ゆほびかなる　寛やかの。廣やかの。
○めでくつがへり　甚だしく賞美した。

しはすの八日ばかり思ふどちうちつどひて源氏物語の巻の心々に贈答の會し侍る時さかきの巻御息所のこゝろにて三重がさねのにほひに野宮の榊葉をつゝみて豐後國岡の殿の巻姫君にたてまつる

しめの外にかけはなれめや榊葉のかはらぬ君が心なりせば

同じ時に帚木の巻の中光源氏の心を姫路侍從の君の女君より打ちとけて夢だにも見ずつれなさを歎く涙にぬる夜なければとあるかへしに空蟬の心にて

さめやらであるかなきかの憂き身をば夢にも今は見えじとぞ思ふ

同じ時蓬生の巻の心を槇子よりいにしへの人をこそまて蓬生のもとの心を露わすれめやとあるにかへし

紅の色をふかめて契りおきしよもぎがもとの露わすれめや

遊女の心を

えにしありてまめに思ふもあだとのみ名に立つ浪のうかれめぞうき

後のやよひはじめつ頃ゆくりなう明石の殿の御供につかうまつりて大崎てふ御館にまゐで侍りしにききしにもいや增りてゆほびかなる御庭のけしき中々にいひつくすべくもあらねば只口をとぢてこそ心にしめてめで

○ひきやらせ給へ　引き破つて御捨てなさい。

くつがへり侍りつれ

花紅葉いつとかめでむ春秋のあかぬみやびのうつすみ園は

只こゝもとに名にしおふ駿河の山も見え侍りければ

樂しさの類あらめや不二のねも君がみそのの山とみなして

醉のまぎれに筆とりしぞくだ〳〵しやひきやらせ給へかし

土佐の侍從の君の三田の御館へ渡らせ給ふ御供にまかりけるに御庭の秋ふかき木々のけしきより始めて見るにあらず思ふにもたへてなむ聞えいでむ言の葉も侍らずてたゞ

いづれをかいづれとめでむ常磐木も紅葉も菊もあかぬみ園に

千々の秋も君ぞきて見むしめゆひしこの山姫のそむる錦を

神に奉るとて

あはれとは神もみそなへ心にもあらぬ憂世に住みわぶる身を

播磨の名だゝる明石なりける人丸社に奉納し給ふとて其の國の殿の女君泉君夢によみ給ひし歌の文字を句のかしらにすゑて三十あまり一くさの歌あつめ給ふ奥に神祇といふ題に旋頭歌にて。もを始めにおく

。もしほ草かきあつめつゝ君が手向を玉がしはちびきなすまゝで神もみそなへ

津の國住吉にすむ人杯に卷縮してかかすとて乞ひける歌の中に詠みて遣はしける二首

難波江のあしたたぬ身は及ばねど住みよしときく里ぞゆかしき

しくものは又なき友と古のかしこきひともほりしこのさけ

○しくものは云々　「古の七の賢き人たちもほりせしものは酒にしあるらし」（萬葉三、雜）

稻城が歌の集みせければ其の奧に文の匂ひ言の葉のあやめもいづれとわきがてになむくりかへすたびにめでくつがへるにも餘りあるぞや

筆の海のふかさもそへてみる人の心なびかふ玉藻なりけり

杉のしづ枝　歌の部　終

此の集は荷田の蒼生子のよみおきたる歌どもを、菱田の縫子は此のをむなにあまた年ものまなびたれば、かき集めてこたび梓にゑりぬるなり。是れを見るに、おのれ若き程より親しくゆきかひて、花のあした月の夕もおなじ心に興じつゝ、歌など詠みかはして變らずなれむつびけるも、早十といひつゝ四つあまりになりぬることの、只夢とのみ思はれて、今もたいめする心地せられて、老の涙のこぼれいでつゝ、いとゞありし世の戀しくて、年久しくなれぬる人の歌なればと思ふものゆゑ、なつかしくてふようなる事ながら、紙の末に書きつけぬるにこそ。

桑　門　自　寛

○桑門自寛　三島景雄、縣門。

楫取魚彦家集

伊能魚彥は下總國楫取あがたの人なり、常の名をば茂左衞門といひき。明和といふ年の末つかた、此の大江門にまゐ來て縣居翁に名簿をたいまつり、翁の住み給へる濱町といふ所に軒を竝べ、朝夕に隨ひむつびて學びの道に心いれつゝ、よく古言の葉のおくかを極められしかば、常につみいでらるゝ言ぐさ、いさゝかも後の世のを混へず、心の儘に古言もて新しき事どもいひとられにけり。かくて天明の二年彌生許りに、齡六十にて濱まちのやどりに身罷られぬ。今も其のうから伊能を氏にて楫取にあるが、其の家に傳へもたる家集一卷あり。みづからの筆にて、安永五年と六年と二年のをかかれたるのみなりけり。猶こゝに寫し傳へかしこにちり殘れるあるべきを、何かはかくてのみも此の主のみやびに思ひあがれる心の程はしらるゝを、強ちに多きを求めむは要なき事とて、とかくよみかうがへて板にゑらせたるなりけり。

文政四年秋

清水濱臣

楫取魚彦家集

楫取魚彦

春の始めの歌　安永五年

皇神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やまづ霞むらむ

東の比吉の大宮にまうでて

春の日の光たゞさす日の御子のみやの櫻ははやも咲かなむ

ある人兄の家をうけ繼ぎて兄の妻のいたくめでたりける紅梅を其の人とかしづきてあるがそれが木に名をおふせてよと請ひければやがて刀自が梅とこそ呼ばめといひて詠める

しぬべとてとじが植ゑけむ梅の花うめも似つかふ色にざりける

正月二十二日源隆辛蹄がり人々集ひて歌よみけるに山の櫻を

白雲の八重たつをちにさき匂ふ吉野のやまの山櫻花

雉子を

贄人のまつらむ知らにあしびきの片山きゞし鳴きとよむなり

○色にざりける　色にぞありける

○贄人　贄狩をする人。

春のゆふべ隅田川に船を浮ぶといふことを

さねさし　武藏の國は　御心を　廣し御國　梓弓　春片まけて　少女らが　はなりの髮を　ゆふ川に　うちいでて見れば　鷲のすむ　筑波の山は　そがひに　雲ゐたなびき　しみたてる　青垣山　吾がもすそ　返り見すれば　霞ゐる　富士の高ねは　影面(かげとも)に　ときじく雪の　ふりしきて　ま白に見えつ　二山の　中ゆく川の　角田川に　舟うけすゑて　思ふどち　遊ぶ此の日は　常にもがもな

反歌

とほじろく清くさやけき山川の變らずたえず常にもがもな

春の海とふことを

天雲のむかぶすをちの渡つみの霞めるかたゆ舟ぞ見えくる

雲雀を

春の野に雲雀きかむととめくれば八重棚雲の上にぞありける

布

玉川に玉ちるばかりたつ波を妹が手(た)づくりさらすとぞ見る

猴をよめる

○さねさし　武藏の枕詞。
○春片まけて　春に向って來て。
○はなりの髮　うなゐはなりの署うなゐに同じ。小兒の髮の切り垂れたるもの。
○しみたてる　木立の茂き。

○春の海とふ　春の海といふ。
○むかぶす　向うの方の低く下って居るやうに見える。

○手づくり　手製の布。

○鳰鳥の　枕詞。かつに冠する。

○はし　愛すべくあり。

○豐國　豐前國。
○香春の里　豐前。小倉市の南方。

奥山の木の實とりはむさるすらも春は花さく枝にまじれり

若菜

日ならべて春雨ふりぬけだしくもしめ野の若菜時過ぎむかも

同　旋頭歌

鳰鳥のかつしか川に朝菜あらふ子あさ菜にもなりにてしがも朝菜あらふ子

木の花常より早しとふ事を

足びきの山の櫻ははしきかも風ふかぬ間ととく咲けるらむ

神に誓ふとふ事を

誓ひてしことばはかへじ葛城や一言ぬしの神ぞしらさむ

一夜隔てたる二夜隔てたるなどいふ事を人々詠めるに我は三夜隔てたるとふ事を

一夜だにありがてなくに二夜すぎ三夜來ぬ君によゝとぞ泣かる

源秀城が馬の餞によめる

豐國に香春とふ里ありときくかはらで來ませ年は經ぬとも

左京の君より忘貝を賜はせける時

こゝながら遠つ磯貝えつるかも鹿取の海士のかひはあるはも

四月大君二荒山に登り給ふを畏みほぎ奉る歌

千磐破　人乎和志　不服惡氣伎輩乎　掃清　治給弖　可幾加增布　百歳餘
外國毛　弓弦不鳴　鉾不執　浦安國等　安良計久　鎭賜志　神之坐　二荒乃
山波　御繼々々　不動祥登　巖之根之　凝敷山　萬代爾　不絶瑞登　落瀧津
佐也計伎山　山杉乃　過去時從　樛之樹乃　彌繼々爾　政申　給倍利　御裔
之御孫之命　御祖之　神津三諸爾　今年志毛　參給倍婆　御供之　麻倍都伎
美多知　諸々之　官人等　吹風爾　往雲如　御跡先爾　隨奉國中之　大御寶
波　夏草之　靡氣留奈志弖　畏　仕奉都　山川乎　倍奈禮流國毛　御座
爾　伊麻世流如　御園乎　往麻須如　神宮爾　到給奴　御靈毛　天翔末志
見志給比　宇禮志美麻佐武　今之此時

反歌

靈治波布神之御稜威爾眞鳥住荒伎其山毛御園等成努

此神之鎭母利末世婆巖疊恐伎山毛御坐等奈理幾

同時中津侯御供に仕へ奉り給へば奉幣袋歌二首

大君のまけのまに〳〵前つ君くさ葉おしなみ借廬せすらむ

大君のよさしのまゝにつゝみなく事竟へませと幣たてまつる

○二荒山　日光山。
○落瀧津　華嚴瀧。
○山杉の　過ぎにかくる序。
○麻倍都伎美　伺候する高貴の臣
○靈治波布　靈魂に幸福を與へ助け保つこと。
○眞鳥　多く鷲に云ふ。
○まけ　任。官職に任ずること。
○よさし　寄さし。任。

○針袋　針を入るゝ袋。「はりぶくろおびつゞけながら里ごとにてらさひあるけど人も咎めず」（萬葉集十八）
○火打袋　火打道具を入るゝ袋。

同時苑狹清明ぬしに針袋をおくる歌

はり袋たびのみ爲とおくれども妹こひしらのまさむものかも

同源隆羊跡ぬしに火打袋にそへて

君が爲ぬへる袋のひだおほみ日だに經ずしてとく歸りませ

同那賀維寧ぬしに

驛路を思ひてまたすすり火打日もかさねずて歸りませ君

五月の始めに遲れて二荒山に登る人に紫の火打袋を花にして菖蒲の葉につけて

菖蒲草かづらにしつゝ遊ばむ日うち越えまさむ荒きその山

中津の君の御許なる菅根とふ人の身まかりけるを悼める歌

足引の山菅根の子ねもころにしぬべとおへる名にこそあるらめ

六月朔日中津の君のみ前に氷を奉る歌

とこしへに夏冬ゆけど水無づきの今日しも氷奉りけり

寄驛相聞

驛路のはゆまうまやの早馬のはやくぞ人をおもひそめつる

いさよふ月とふ事と船とを

雲にとぶ翅もがもよ山をしみいでがてにする月を見てまし
雲にとぶ翅あれかも月よみの浮べる波の上漕ぎわたる

六月の末に旅だつ人をおくりて

水無月の望にけぬとふ富士のねの雪解の川や涼しかるらむ

はらへ

浪の上の塵ふき拂ひさやかなる河瀨にたちて祓するかも

七月七夕雨

此の夕雨は降りきぬひさかたの天の河なみこゝに散るかも

秋野

野阜を霧たちかくすこの頃はをとこをみなの花のときかも

中津の御嗣君新殿に移り給ふ時鯉の繪を書きて奉るとて

新巢の御巢の御饗に奉らまくほり綱下し水沫畫きたり潛き得し鰭の廣物是れ

菟狹のあかしぬし伊勢國にゆかむとする時東の海つ道ゆ歸さは木曾の山越せむとて其のゆきへむ國々の古き歌ども思ひいづるまゝに書きてよと有りければ書きて送るとて其の奧に

伊勢の國に君がいゆけば上毛野いかほの沼のいかまく思ほゆ

○月よみ　月讀尊の略、月の異稱。
○望にけぬ　十五日に於ても消えぬ。水無月十五日は酷暑の最中。
○野阜　野中の丘。
○上毛野　かみつけの、上野國。

千賀眞恆の新室ほぎに

たくみらが柱築い立ていまつくる新巣の凝煙(すゝ)の八つか垂るまで

中津の君の新殿にして

海潮のみちくる殿のみ庭には遠じろく咲きいろくづ遊ぶ

同詠月

夕さればたちくる波にさし昇る月も岸べによるかとぞ見る

同詠鹿

妻こふと聞きつる宵の鹿のねの夜深くなくは別るとならむ

同詠霰

かききらし霰ふりきぬ眞玉(またま)の玉のすだれをかくと見るまで

人をしのびに逢ひしりて逢ひがたくありければ其の家のあたりをまかりありきける折に鴈のなくを聞きてとふ事を

天とぶや鴈がなくねは聞くらめど近くある我をしる人ぞなき

詠舟

さきだてる浪ほの上を潮のむたい漕ぎわたらふ浮き寶かも

八月十四日隅田川に舟を浮べて

○遠じろく咲き　沖の白浪。
○いろくづ　魚。

○潮のむた　むたは接尾語、と共にの意。

○ちふの　茅生の。

○例ならず云々　病氣。

○菊のつゆ　古の俗、之れを飲めば長壽を保つとした。

秩父嶺ををちにみさけて久方の天ゆく月のてれる國原

望の夜家にありて

淺茅生のちふの露はら露しげみ月こそやどれ茅生の露原

十六日亦月夜よし人々と共に海邊に遊ぶ

海神(わたつみ)のかざしの玉やみだるらむ八重をる浪に月の照りたる

其の夜物の音などふきあはすめるを

わたの底うまし小汀(をはま)に至らなむ月すみのぼる夜々の笛のね

中津君例ならずいますかりける頃とくさわやぎ給はむ事を奉禱歌

君が代の長月ちかし菊のつゆ千年まけなむみ藥ぞこれ

九月九日同じ御殿の御室ほぎに

大土(おほつち)に　所建御柱(たつるみはしら)　天津水(あまつみづ)に　所練御壁(ねれるみかべ)　御柱と　長く御壁と　平らかに
おはしたばねと　御室ほぎする

同じ御殿にして御母君御手づから摺らせ給へる御衣を賜はせければ

千種さく秋の野深くいりぬれば花ずりごろもきて歸るなり

同黄葉たやに染む　花摺衣　九月八日とふ三くさをよませ給ひけるに

やま姫もまつ人あれや夕ぐれはもみぢ葉衣ことに染めたる

二

秋はぎの花ずり衣きるときを胸わけにすといふべかりけり

三

待ちくて明日かざすべき今宵だにわぎへの菊に露おくなゆめ

九月十三夜

おくれさく櫻のめでか長月のてれる月夜をみるはしよしも

中津の殿の幼君一めぐり日たらしませるをことほぎ奉る

さにづらふ君が八千代を今日よりぞ先づ一年と數へそめつる

九月二十五日の夜同じ殿の御母君の御許に琴笛のすぐれたる人々をめして終夜あそびし給ふに歌よめと仰言ありければ

常世かもわたの宮かも絲竹は田鶴の聲かもたつのこゑかも

同じ月の二十八日におなじ御殿の御嗣の君の御前にして軍人又寄巖相闘とふ二つをよめと仰せられけるに一首にてまをす

巖すらふみさぐゝめるみいくさや妹が閨戸を見ずてはやまじ

其の日御殿の上に鶴の羣れ遊びけるをまをせと仰せられければ

千年の友と思ひてやむらたづの尋ねてきけむ濱松のうれに

○胸わけ　獸などが胸にて草木などの生えた所を分け行くこと。

○わぎへ　我が家。

○一めぐり日たらしませる　一周年に滿たれたること。

○さにづらふ　枕詞。君、妹、少女等に冠する。

○わたの宮　龍宮。

○ふみさぐゝめる　踏み分くる。

水鳥

比良山の山おろし風の寒きなべ志賀の大わたに鴨がね聞ゆ

□かなるといふ戀の心を

こむとふもこぬ空言になれ〳〵て今はたこじと思ひなりぬる

中津の君難河菅笠とふ御歌たまへる時

妹がきるなにはすが笠水鳥のかづきてゆかな浪花すががさ

十月の始めつ方或人の家に盜人の入りけるが書のみをとりて行きつと聞きて

初月のかげをともしみうま人は文見むためと壁やうがてる

十月十八日薩摩中將君備前侍從君中津の君の御館に入らせ給へる日御前に侍りて親しき御中らひをことほぎ奉る歌

茂りあふ五百枝橿原々々に風はふくとも霜はおくとも

十一月十日中津の侯御出題野雪　とりものの歌

やちくさに　匂ひし野邊を　久にあれとや　たくぶすま　おほへるなして
雪のふりたる

榊

○寒きなべ　寒きにつれて。

○こむとふも　來むといふも。

○ゆかな　行かなんと同意。なは願望の助動詞。

○ともしみ　珍らしく思ひ。
○うま人　貴人。

○とりもの　採物。神樂の時舞人が手に採りて舞ふもの。榊、幣、弓劔、鉾、杓、杖、篠、葛、韓神。
○たくぶすま　栲衾。枕詞。白きものなるより白にかく。

○山をさかしみ　山けはしき故。

○よとの遠音　夜聞ゆる遠音。

○ひろりいませ　ひろごりいませ

眞賢木の榊のうれにおく霜を面白しとはいふべかりけり

幣

皇神にまつる千座のおきくらに置きたらはせる神のみてぐら

杖

山人の山をさかしみつく杖のつくる時あらむとよの遊びかは

篠

あさひこがさすや岡べの玉篠のたまさかなれやかかる遊びは

弓

梓弓夜音の遠音も守りとはなるといふものぞよとの遠音も

劍

春の宮の宮のたちはき太刀が緒をときて遊ばなさ夜は更くとも

鉾

大汝神のみことのとりまし御ほこの廣にひろりいませ君

杓

逢坂の關のま清水ひさごもて汲みてもしれや盡きぬ御代とは

蘿

榊葉にゆふとりしでていはふなる神のみや人山かづらせり

同じ日人々唐歌うたふ題少年行此の意を大和長歌に戯れよめる二首

うめつ道　武藏の國は　御心を　廣し御國　民草の　豐けき國　其の國の國のまほらに　大城を　高く尊く　しきまして　遠く久しく　浦安に　治め給へる　畏きや　吾が大きみの　御膝方に　生ひ來し我ぞ　うら狹く　物は思はず　天雲の　むかふすきはみ　天傳ふ　日はてらせるを　しれ人の　えまくほりする　金は　寶といへども　雲の如　涌くちふ國ぞ　土の如　積みて何せむ　百年の　人は在らぬを　天地に　思ひたらはし　萬代に　淸き其の名を　語りつぐべし

反歌

白がねもこがねも玉もあめつちの賜はる國ぞなにかなげかむ

ますらをや命死ぬとも萬代に名は朽ちめやも波頭迦志美思倍

又

とりよろふ　筑波のやまの　男之神を　背向に見つゝ　馬なめて　遠方野邊に　朝獵に　五百つ鳥たて　夕狩に　千鳥蹈み起て　酒みつぎ　歸らふときに　走出の　堤にたちて　遊行女婦が　ふらへる袖を　見つゝ來しかも

○ゆふとりしでて　木綿の精を榊に取り垂らして。

○まほら　まは美稱、らは助辭。ほは含まるゝ義。丘山に圍まれて籠りたる處。

○むかふすきはみ　向伏す極み。

○えまくほりする　得んと欲する

○思ひたらはし　思ひ足らはす。

○波頭迦志美思倍　恥を知つて名を惜しめ。

○遊行女婦　遊女。さぶるをとめ。

反歌

人の見むことをやさしみ遊行女婦に心は雖レ念不レ云來にけり

霰

山おろしの風もいぶせき曲庵の軒端もたわに霰うつなり

源是傚翁去年の冬の宴には歌給へりしが今年なき人となりませるを悲しみ思ひて卽ち彼の歌を始めにしてよめる

朝倉の　宮のみ民の　あへりけむ　龜の齡の　萬代と　ほぎけむ君は　去年の今日　いませしものを　玉くしげ　ひらきも見ねば　白雲の　棚びきけめや　今日はまさなく

反歌

一年に千年やへけむ家にゆきていづらと問へど君がまさなく

いにし十日集會にやごとなき御許ゆ賜へりけるくさ〴〵の物を題にて後の日奉りける歌六首　鶉　鴈　雉　御母君より

君が光うつらざりせばかくばかり岸の埴生の匂はましやは

歌袋　殿の御前より

もろ人は唐の大和の歌うたふ黑酒白酒を汲みて遊ばな

○人の見む云々　人の見るのが恥かしさに。

○朝倉の宮　雄略天皇。

○埴生　いぶせき賤が家。
○黑酒白酒　黑酒は醴酒にくさぎの灰を入れて黑くしたもの。後世は黑胡麻を入れる。白酒は醇酒。
○遊ばな　遊ばなんの意。なは願望の助動詞。

心葉のふくさ　女君より

ものゝふのますら猛夫もま心はのぶくさはひと歌によひすも

料紙　若君より

風流士（みやびを）のさはにあなるもことわりようしろ安かる世にし住へば

うちみだりの箱　思ふ人より

人みなは雲か浪かとうちみたり野はこの頃の雪に埋めば

山吹　をれたか　同じく

ふる雪を山吹きおろし花とこそ見つゝ我がをれ誰がさやは見ぬ

同二十五日大江眞楯ぬしに馬の餞する歌

豐國の企玖の濱波なみならず日にけに君を思ひいでむかも

中津の御嗣君の御許へ薩摩の姫君迎へ給ふべき御契りはありながら姫君いまだいと幼くおはしけるを奉祝歌

若草をけふより結びそめませる君が千年ぞいや遙かなる

酒をよめる

他國（ことくに）にありとふ酒の泉もが思ふともどち船うかべてむ

十二月二十七日大垣の君のみ許に姫路の君中津の君長岡の君神戸の君ら

○心葉　昔贈物にそへた飾り。絲で、花、紅葉など結び又種々の美しい物をこしらへる。
○くさはひ　物事の種となるべきもの。

○うちみだりの箱　今のみだれ箱

○企玖の濱　豐前國北西の端。

つどはせ給ひて御歌よみし給へりける日に侍りてよめる御題二つ

庭早梅

冬ながら今日の御爲といと早もみ園の梅は咲き出づるかも

しらぬ人

兼てよりかからむとわは思はざりきまだ見ぬ人を戀ひむものとは

相聞二首

浪の音の荒きいそわの白眞砂まなく時なしわが戀ふらくは

玉垂の小簾のたれ簾の誰により千名の五百名にたてる我が名ぞ

詠國

大汝少彥名の作らしし大八しまぐには廣らにあつらに

年の暮に中津しらす君の御剛の君ゆ振袖の御小袖給ひければ畏み悅びてよめる長歌

深草の　天皇の　大御代に　尾張の翁　百餘り　十まり三つの　極みたる　老の身ながら　袖たれて　舞ひいでし時は　高麗劍　わかき像を　ほめたまひ　ねぎらひ給ひ　君がける　御衣賜ひぬれ　吾もけふ　殿のわく子の　畏しや　著ならしまして　袖長く　こくびやすらに　よく縫へる　御衣をかづ

○あつらに　厚らに。厚やかに。

○深草の天皇　仁明天皇。

○わく子　子。

けり　百年の　老翁にならひて　かきかぞふ　五十の翁　眞袖ふり　足ふみならし　わかえ舞ひいでむ

正月元旦　安永六年

昨年の冬春たちけりと人はいへどいともしるきは今朝にざりける

人の許よりいとめでたき花をえさせければ

異木にはいとも異なる梅の花折りけむ人の香も添はりつゝ

二月十八日中津の御嗣君の御前にして臣とふ事を

今更に何か思はむ早くより君にまたせる屍なるはや

其の夜おもと人の許へ伊勢の濱荻を軸なる筆を賜ひければかなたよりもいと美しきくさ〴〵をおくられければ

神風の伊勢の濱荻かきわけてきよきなぎさに玉ぞひろへる

ある人武藏なる多摩川にしてあやしき石をとり得ぬとて歌をこはれければ

天地のなしのまに〳〵龜なして玉河の瀨にありけむその玉

詠　虎

さす竹の君がおましともろこしの虎とふ神の衣たてまつる

〇わかえ　若がへつて。

〇またせる屍　さしあげた身。

〇屍なるはや　は、や、共に歎辭。

冬の風

冬されば千草がうれをおしなびけうちの大野を風ふき渡る

大和國へゆく人に其の國の名ある所々の道のついでなど書きて送るとて
其の紙の裏にかける

大和路の道のくまわの八十隈にこめし心をたぐへてぞやる

猫妻戀すとふことを

東屋のまやの軒端に聲するは手がひの虎の妻やこふらし

商人に寄する戀とふ事を

我がつめる戀の重荷を市中のあきじころ人にゆきて賣らばや

呼子鳥

ゆき通ふ人もなげなる大野らにひとりわびつゝ誰よぶ子鳥

八王子とふ所の女の許より手づから折れりとて蕨をおこせたりければい
ひ遣はしける

手弱女の赤裳裾びきたま〱に玉のよこ山に折りけむさ蕨

下總國にゆかむとする頃人々集ひて名殘を惜しみけるに酒などたうべて
ある人月日星の歌をよめといへりければ

○うちの大野　内大野。大和國宇智郡坂合部村大字大野に在る野。

○手がひの虎　猫。

○あきじころ人　商業にこりかたまる人。又一説、買ひかぶる。

○まつらまく　奉らむと。

此の卯月二つかさなる月日ほし香取あがたにゆきて早こむ

夏の始めに景序が改め造れる家をいはひてよめる

つきたつる稚室葛根うみの子の八十つぎ〳〵に絶えず在れとぞ

四月二十三月父まさずなりて四十九年なれば後のわざすとておきつきの前にして詠める

ちゝのみの父いまさずて五十年に妻あり子あり其の妻子あり

花田色なる扇の紙に香取の浦浪のかゝりたるがゑがけるさまなるを持ちてかへりて中津の君にたてまつるとて

香取潟遠の濱づとまつらまく立ちしく浪をかけて來にけり

同御母君に拾へる濱貝を奉りければ立ちかへる香取の波の嬉しきにまちしかひあるつとを見しかなと仰せ下されければ

かひありと君が賜へるみ言こそ香取の浦のかひにはありけれ

多摩の里人の許よりめづらかなる螢をさはに送られけるに

常よりもひかりことなる螢はもうべ玉川にありしなりけり

桃の花によせて久しく戀ふる心を

實植ゑせし吾が家の毛桃花さきて實になりぬべき時まつ我は

○にはをよみ　海上波靜かであつて。
○はら〻に　ばら〱に。
○しらす　領する。
○とふ　と言ふ。
○さす竹　君の枕詞。
○かぐの木の實　橘の實の古名。
○鵙の草ぐき　鵙が草の中を潜ること。
○打ちきらし　うち曇り。

浦を

風の音の遠つ大浦にはをよみはら〻に浮ける海人の釣舟

近江の膳所しらす君の御館にして夏水鳥とふ事を

すゞみとる君がみ池は常世かも沖つ鴨鳥(かもどり)のあそばふ見れば

同御庭の橘

さす竹の君がみ園は常世かもかぐの木の實のかぐはしみその

中津の君の御館にして詠百舌鳥

めにあかぬ事はなしとふ都人にいでや見せまし鵙の草ぐき

詠日

六月(みなづき)のなかの十日の中ぞらにいともかしこき日のみ面かも

御くだものにありける桃の實を賜はせて是れによせて相聞の心をよめと仰せられける時

言のみは花にやあらなむ桃の實のなりもならずも植ゑてこそ見め

橘千蔭の雨の日釣するかたを書きたるに此の意をよめと姫路の君の仰せに隨ひて詠める

打ちきらし雨はふりきぬしかすがに魚(いを)一つだにえでや歸らむ

秋の初風

土はさけ水はかわける夏すぎてけさの朝けの風の寒しも

七夕雨

あすゆ又戀ひつゝあらむ此の雨に笠なしといひて君をとめまし

秋の花野

秋の野の尾花くず花はぎの花しらえぬ花もいま盛りなり

いはで思ふ

丈夫(ますらを)やしたには人を戀ふれどもますらをさびてあらはさずけり

うらむ

石(いは)ばしるたぎつ早瀬のはや川の早くいひてし言はいづらは

葛を詠める

しばの野に葛ひく少女家のらへこの野司(のつかさ)にくずひく少女

立秋

草そよぎ簾うごきて今しはとたちくる秋のけはひしるしも

柿本朝臣人麿を

くちぬ名を長く殘してかも山の雲となりけむ柿の本のうし

○あすゆ又　あすより又。

○しらえぬ花　名も知らぬ花。

○石ばしる　たぎの枕詞。

○家のらへ　家の在所を告げられよ。

○野司　丘。

蛇を

雲をおこし雨をふらする神すらも小をハちなせる朝倉の宮

をのわらはを思ふとふ事を

兄ならぬ兄をあにとし弟ならぬ弟をめづるますらをのとも

七月朔日姫路君の御許に召されけるに御題五　吉野川に鮎子さばしる

花ちらふ嵐に水はよどませて六田の淀にわかゆさばしる

上總の末の珠名を

金門(かなと)にし人の來たてば招きけむ尾花が末の玉名しおもほゆ

筑波山に登りて國見す

筑波ねに汗かき登り見さくる國生ましけむ女の神男のかみ

越の中の國の二上山のもとにて

大和なる二上山の名たぐひにこれや越(こし)へのはしき山の名

紀の海に忘貝ひろふ

きの國の名草はあれどなぐさまず戀忘るとふ貝拾ひてむ

同じ日御庭の草の花を種々つませ給ひてそを題にてよめと御言ありて

葵の花を

○わかゆ　若鮎。

○金門　鐵のくぎで固めた門。

○越の中の國　越中國。

○二上山　大和國葛城郡の西嶺男嶽、女嶽。又越中國伏木の西一里。

○はしき山　愛しき山。

玉しけるみ園に生ふる草の名の今日にあふひぞ畏かりける

又からすあふぎを　又檜扇ともいふ

茜さす大宮人の手にふれてさしかざすめる花の名ぞこれ

秋の雨といふことを

櫻さく山べに雨をいとひ來つ秋の園にもしづこゝろなし

彼の御殿を鶴島といふ松に寄すといふ祝歌を

五百枝さす木垂玉松たづがねの御殿に千代をいや重ぬべし

源義臣といふ人は中津の君の近つ御臣なり生ける日にまめに私なく七十餘にして御殿にありて終に事なく身まかりしを

御代三繼仕へまつりて君のへに身を終へきといふいそしの翁

天の沼矛を

久方の天のぬ矛のしたゞりゆたれる御國となりにけらずや

浦島の子を

堅魚つり鯛つりほこりほこらしく渡つみの宮に年はへにけむ

雲を

天の原ふきすさみける秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

○あふひ　遇ふ日と葵とをかく。

○茜さす　大宮の枕詞。

○たづがね　鶴が音、つるの鳴く聲。

○いそし　恪勤。

○したゞりゆ　雫より。

○渡つみの宮　龍宮。

○三枝の　枕詞。みつ、なか等に冠する。
○東大城　江戸。
○猪自物　枕詞。いはひ、膝折に冠する。
○鵜自もの　じものはの如きさまにの意。
○ひりひ出で　拾ひ出で。

・轡蟲を

行幸の御供の馬のくつわなす志賀のやまぢの蟲のこゑかも

梓弓引く豐國福草の中津大城しらせ給ふ君此の秋かの御國に歸らせ給ふされば相摸なる鎌倉山ゆ豐國の企玖の長濱わたりまでいたり給はむずる國々の歌の萬葉集に見えたるをおのれが拙き筆もてうつしいでて御脇つきの下へに奉りおきける其の奥にかける歌

三枝の　中津の國を　しきませる　我が君はしも　とりがなく　東大城に年かさね　おはしましぬれ　しきませる　御國み民は　天つ水　仰ぎてまてしば　武夫の　八十伴の雄を　ひけ鳥の　率ゐましつゝ　今年しも　歸らひましぬ　天地の　神に乞禱み　幣奉り　齋瓮居ゑて　經給はむ　國の隈路の百隈の　八重の山路を　御殿なし　やすけくませと　猪自物　膝をりふせ鵜自もの　うなねつきぬき　齋まはりつ　しかいはひては　玉鉾の　道の長手の　御なぐさと　至りまさなむ　日の經の　くぬちことゞく　青丹よし、寧樂の都の　古歌を　ひりひ出でつゝ　辿るく　書きてまつりぬ　たまくも　見し給へらば　かしこけど　御供にある如　おもほせ我が君

反歌

こゝながら御供ともひて經給はむ國の古言かきてまつりつ

同源隆羊蹄ぬし御供として旅だつを

豐國のくにつみ神のまもります君がみともの道は安けむ

同横山頼庸ぬしは筑紫にありける人の東にありてこたび御供なるを

東路も筑紫も君がしめのうちは家より家ぞ旅となおぼしそ

猴を

奥山に蚊火たく翁夜くだちてましらなくねに寐覺すらしも

姫路の君の御許より月多秋友とふ事を詠みて奉れと承りて

此の秋もいで我が庵にかたらはむ常入り來ませさゝらえをとこ

同詠月

大君の東の海にいづる月もりてめづらむ他(あだ)しくにびと

鴈を組に載せたるを

しが妻の待つらむ知らに空蟬の世をばかりとやこゝにこやせる

月影に文見るとふ事を

てらしよむ文の心も見もはてず傾く月の惜しきのみかは

藤原の宇萬伎の身まかりし頃鴈の聲を聞きて

○夜くだちて　夜ふけて。

○さゝらえをとこ　月の異名。

○しが妻　其が妻。汝が妻。
○こやせる　臥して居る。

○藤原の宇萬伎　作者と同じく眞淵の門人。後桃園天皇の安永六年(二四三七)歿す。年五十七。作者の歿に先だつこと五年に當る。

吾が如くいましも友や惑はせるよわたる鴈の聲の悲しも

濱のべの御館にしておの〳〵題二つづゝ得たるにおのれは大刀と蜆との
二つを一首にてまをす

丈夫の大刀とりはきて妹が爲住の江のはまにしゞみ拾へる

かく申しければ御前なりける日々花と蘇鐵との二種をよみて奉れと承り
て

宮人は日々に花見て遊ぶらむ袖つけ衣ゆたにとりきて

氷室を詠める　旋頭歌

鬪鷄の野のむろの氷のとくるまに〳〵てりと照る六月の空に去年の落葉みつ

東の比叡の山の麓なる不忍の池にして或人の得たりける柿本朝臣の像を
こたび中津の御嗣君に奉る歌

鳥がなく　東の國　高ひかる　比えのみ山は　春べは　花さきをゝり　夏ま
けて　蓮葉淸き　池の方に　住きけむ人の　水際の　木積に交る　神なす
御像拾ひて　塵拂ひ　水沫かきすて　淺茅原　つばらに見れば　柹本の　あ
その御像　嬉しと　家にもて行きて　幣まつり　いはひべすゑて　朝夕に
ぬかづき來しを　年ありて　我にえさせつ　靑みづら　依綱の兒が　けふけ

○ゆたにとりきて　ゆつたりと取り著て。
○氷室　冬の氷を夏まで藏し置く室。
○鬪鷄の野　鬪鷄の國の野。鬪鷄は上古の國今の大和國の一部。
○夏まけて　夏に向って。
○いはひべ　齋瓮。
○靑みづら　枕詞。よさに冠する。

ふと　我がまつ君は　石川の　貝に交りて　ありとかも　歎きけましは　遠き世ゆ　今のをつゝを　みるがごと　いひいづるかも　そこもへば　荒れたる茅生の　庵の中に　まさしめむはた　かしこしと　思ひはかりて　菰枕　高き御殿に　さゝげもて奉れ　今日よりは　妙なる殿の　みがける　玉の臺に　常しへに　しづもりいませ　御園生の　紅葉てりてる　柹の本の大人

反歌

柹本のうしの眞魂よ石川のかひある時を待ち出でつるかも

姬路の君ゆ對菊待月とふ事をよめと仰せかゞふりて

月よみの神の御影をまつ宿にしらゆふなして咲ける花かも

同じ御前へ宮づかへに出でたりける人の許へ申し遣はしける

さく花は八重もこそよき君が爲は一重心に仕へたまはね

九月十三日の夜濱邊の御館に侍りて

長月のつきの光に四方の山はあらそひかねて紅葉ぢそむらむ

恨みじとふことを

恨むべき人こそ人を恨むなれ我はうらみじ恨むかひなし

ある御許にて歌よみけるに種々の題の中に柏山彥とふを探りて詠みわづ

○今のをつゝ　現今。うつゝ。
○菰枕　枕詞。たか、まき等に冠する。
○かゞふりて　被りて。

らひける人あり我は熊とふ事を得たりければ三つを一首によめる

山びこのこたへする山の柏原熊とふかみもこゝにますらむ

九月十日姫路の君の御館にして男御子生れませるを奉祝歌

嚴穗（いかしほ）のたりほの秋にあれませる君御壽は千秋五百秋にいませと祝ひき

あわをとふものを作りて中津の御嗣君に奉りける時月と鳥を得て

てる月に天つ空とぶ鴈がねはそらにむすべる紐かとぞ見る

又手束弓とふものを同じく作りてこは露をえたり

手束弓手（た）にぎりもちて丈夫がかりばの露にあゆひぬらせる

詠　鳶

久方の天とび下り飛び上り雲居のよそにとびの飛ぶ見ゆ

詠　鯨

大海（おほわた）に島もあらなくにおきべゆもおほ島なして鯨寄せ來も

あしたの鳥

五百つ鳥ふみ驚かし御狩人朝けの風にそで吹きかへす

ゆふべの鳥

あくる夜を待ちよろこびし村鳥今ぞむれ歸る夕山のへに

○あわを　沫緒、紐の結び方、あはぢむすびに同じ。

○手束弓　手に執れる弓。

○あゆひ　足結、古、袴をかゝげて結びかたむる帶の如きもの。

しぐれ

暮るゝかと見つれど未だ暮れやらぬ空もしぐるゝ雲にぞ有りける

詠靈芝

種蒔かずうつしも植ゑずおのづから草野女神(かやぬめがみ)のみづたまはせる

奉甲斐國酒折宮歌二首

詠八尋矛

比々良藝(ひゝらぎ)の嚴(いつ)し御矛の御稜威はや嚴し御國と國しづめます

詠薙草劍

賊人(あたびと)のやきし燒津(やいづ)のあら草を薙(な)ぎて名におふ神たからかも

佛を

西の方に黄金なす人ありとへど我が日の本の日こそ照らさめ

人々國の名を探りて詠めるに

薩摩

さにづらふ君に見せばや隼人(はやびと)のさつまの小門(をど)によする濱貝

壹岐

ゆきの島ゆきて見よかし天ぎらひ雪と見るまでたてる白波

○酒折宮　西山梨郡里垣村。日本武尊を祀る。尊の「にひはりつくはをすぎていくよかねつる」を歌はれた所と傳ふ。

○さにづらふ　枕詞。君、妹、少女に冠する。

○天ぎらひ　天霧りの延音。

○ゆづる　弓弦。
○矢口の川　荏原郡。古、東海道驛路の多摩川渡場。太平記に載せられて名高い。風來山人の院本に書かれて更に名高くなつた。
○如魚鱗宮　龍宮。鵜茅葺不合命の母豐玉姫は海神の御子なりとする故。

武藏に名ある所を

武士のゆづるおしはりひき放つ矢口の川のいにしへ思ほゆ

大和國を名所ならでよめとあるを

名ぐはしき所はいはじ大和路は聞えぬ山も川も見がほし

數の文字のみにて歌よめと人のいへりければ

一九二八、千萬四四八、十四三九二、八萬十九二三四、四九九二八七四

ひと國は千萬よしや豐みくにやまと國にししく國はなし

まつちやまとふことを句の上にすみだがはを句の下におきてよめる

松てらす月をさやけみ秩父あがた山の獵夫が圓居せむかは

雪をまつとふ事をよむに詠みわづらひける時又鬚人とふ事をよめと人のいへりければ

降る雪はまてどもふらず待たねども積るは鬚の雪にぞありける

十二月二日古事記上卷よみ終へて各其の卷の條々を別ちよめるに鵜葺艸葺不合命を

味御路　如魚鱗宮從　海潮之　來寄波限爾　至麻志　生末世流御子之　大御裔　如海　迦藝呂那氣無毛　如潮　盡時阿良賣也毛　與能許々登々爾

同片歌

鵜葺草葺不合尊御名爾於婆須毛

同じ筵にして各神寳種々を探りよめるに

土かたになれる黑馬の手綱くり繰りたねゆか む妹が金門に

脇息

人も見ぬみやま櫻木板にさきうま人のへの脇づきにもが

硯

時じくに硯は潮の滿干なしすれる墨はも雲のわくなす

牀几　けふの宴に高き御前ゆ御歌賜はり又種々のをしもの賜へるを畏み喜ぼひて侍ふ人々の中へまをす

諸人の今日のうたげを君がます御あぐらのへにとり申さしめ

十二月八日の夜濱の邊の御館に侍りて墨師疊剌辻君の三つを詠めと仰せられければ

ます鏡すみし月夜を心あさくたゝみさしてや君がゆくらむ

詠天

九萬里に飛びかふ鳥すらも鶺鴒なすらむ天つみ空かも

○あぐら　牀几の類。

○九萬里に飛びかふ云々　莊子逍遙遊第一。

嫗戀すとふことを

舌いでて皺める口の口やまず君をもひやむ時も日もなし

ある御前に櫻鯛を奉るとて

櫻さく春をちぎりて年のうちに花の名におふ魚たてまつる

中津の御嗣君十二月二十二日に年を惜しませ給ふとて侍ふ人々を召して

歌よませ給ふ御出題七つ

年の終

春の來む爲とくれゆく年なれば暮れゆく年ぞ嬉しかりける

待春

草はかれ木の葉皆おちて野も山も春まつ時になりにけるかも

朝雪

朝戸あけて眞白にふれる雪見れば吾や海神(わたつみ)の宮にきにけむ

寄野

秋風に萩が花ちるいなみ野のいなみしといはば我戀ひめやも

下に戀ふる

葉をしげみあさゞ花さく青淵の上はつれなき戀の苦しも

○おひやむ　思ひ休む。

○いなみ野　播磨國加古川の東南の平野。

○みづら　角髮、上古、男子の髮の結び方、髮を左右に分けて總角のやうに結ぶ。

○珠洲海　能登半島の先端。今珠洲岬といふ。

○はれ　感動詞。

櫛

御みづらにとりなせる五百津爪櫛はくしき御神の御はかりぞこれ

杖

老いらくの身の寶かも千束杖たづくしくも道のあらなく

又二題擬催馬樂調

丹生山　春

丹生山に　はたうつをぢ　たが畑やうつ　吾がはたうつや　はたうつをぢ

水葱岡　秋

水葱のや　岡のかやぐさ　かやに刈り　假庵にやふかむ　薄からましや　尾花からましや

珠洲海　冬

すゞの海　水も流れや　渡れらば　はれ　渡れらば　のとの國人や　橋にてこむや　あはれ　そこよしや　長濱の浦に

伊勢國山田なる宇治五十槻ぬし能煩野にて拾ひ得たりとふ古代の玉を贈られければ詠みて遣はしける

神風(かみかぜ)の　伊勢國(いせのくに)　百船(もゝふねの)　度相在(わたらひなる)　足日木乃(あしびきの)　山田(やまだ)の原(はら)に　吾(あ)が友(とも)の　つゝむ

事なく　安らけく　在りとは雖聞　白銅鏡　不相見久に　可伎可増布　十年者過ぎぬ　乏志久母　問須流泣に、能煩野に　在伎登布玉の　石上　古代迺玉能　丹乃穂なす　眞玉賜比都　白玉之　五百津都抒比乃、何時毛々々々御疏乃　玉乃見末久保利　吾須流君乎　見奈須　玉纏持弖　朝夕爾　見都々志努婆奈將相日左右二

反歌

狹丹頰布爾乃保奈須玉伊勢乃海乃那美爾波不思示乃保奈須玉

楫取魚彥家集　終

○可伎可増布　枕詞。二(ふた)に冠する。又かざふに同じ。
○丹乃穂　赤く外にあらはるゝこと。
○五百津都抒比　數多聚集せること。
○疏　古昔多くの珠を絲にて統べ貫きて頸飾としたるもの。
○志努婆那　忍ばんの意。

佐保川

鵜殿よの子

佐保川

上巻

水上秋月てふことを

ふるさとのさほの川水ながれての世にもかくこそ月はすみけれ

秋ごとにことなる影を宿せばや月のかつらの名に流れけむ

古今集よみときたうびつる果てのえんの歌

しき浪の下にかくせる伊勢の海の玉の光もいまぞ見えける

あまびこの音羽の山の春がすみ包めどもるゝ鶯のこゑ

人のするがの國へゆくを二月の末つかた

不二のねのさやにもみえば春霞たちわかるとも慰めましを

わかるともことだに傳てようつの山うつゝか夢か思ひわくべく

卯月ばかり人のなり所に遊びて

夏引の手びきのいとの長き日もよりて語らふことは絶えせじ

夏のはじめのうた

○あまびこ　音の枕詞。

○なり所　莊。別

ほとゝぎす聞きつやと問ふことぐさを誰も語らふはじめにぞする

卯月ばかりこれかれつどひて萬葉集をよみ侍る其のむしろ新樹を

茂りあふかげになみ居てならの葉のふるごとをしも語る今日かな

おなじころかへでを

青葉よりくれなゐ匂ふ若楓もみぢむ秋の色ぞゆかしき

心地そこなひてこもりゐ侍る頃もみ子の許より御心地はいかにおはすら
むよべの暑さのたへがたうあかしわび侍りつるを折しり顔なる一聲にな
むかつなぐさめ侍りきとて

深き夜のあはれこと問ふほとゝぎす君が枕も過ぎやしぬらむ

と侍りつるをりことにこゝよりこそ聞えまほしかりつれどくしいたうた
めらひ侍る程になむおどろかし給へるはげにおぼつかなう思ひあかしつ
る心もゆき侍りぬかし

わが心空にしりてやはとゝぎす君にもおなじ初音告げけむ

夏の末つかた賀茂のあがたぬし出居つくり給うけるに人々つどひあそび
はべる長歌

日をさふる　ならの木陰は　所せく　はたたちつゞく　三枝の　みつばよつ

○くしいたうためらひ　甚だ當惑して躊躇し。

○出居　應接間。

ばも　こちたきを　ことそぎつくる　ひだたくみ　ひくすみなはも　古きよ
の　すぢをおもひて　住みなせる　宿はあかじと　おもふどち　こゝらつど
ひて　みな月の　あつさもしらず　ひめもすに　かたらふことの　まめごと
も　たはむれごとも　いそのかみ　ふりにし道の　まどひをば　とひあきら
めて　青雲の　あがれるよゝの　みやびをも　かけてぞしのぶ　をすだれの
遠をみやれば　ふじのねに　降りつむ雪の　今もなほ　けぬがうへより　吹
くかぜの　袂にかよひ　いさなとり　海原見れば　はる〴〵と　あはにつき
たる　すゑのなみ　ちかくよせくる　蘆がきの　中に生せる　草木まで　夏
によりつゝ　くれ竹の　なびくすがたも　しのすゝき　みだるゝ露も　まだ
きより　秋ぞかよへる　かよひきて　しゞにみるとも　ゆゑよしの　つくる
よはしも　あらじとぞおもふ

反歌

ふりにけるみやびのことは知らねども心をやれるあたりとは見ゆ

ある局に二人三人より合ひて夜更くるまでも語らひ侍るよし聞きて月の
かたぶく比にかくいひやりける

ふかき夜のあはれをみする月影にいるさの山の奥ぞゆかしき

○こゝらつどひて　多人數集合して。

○いそのかみ　ふりの枕詞。

○いさなとり　海の枕詞。

○しゞ　繁く。

かへし　　　　　　　　　　　　　さよ子

ふかき夜のあはれはとはで月影の雲のそなたにいさよふやなぞ

又

ふくる夜の空には限もなきものをへだて顔なるいさよひの月

みな月十六日の夜なりけり萩の花折りて人のもとに

今はとてぬれつゝも折る萩がえに露のかごともかけつべきかな

野草欲枯

撫子の花野の露のかぞいろもかかれとてやはうら枯るゝ頃

すゞみがてら船にて樂するを

かはなみの音にきほひて涼しきは秋の風そふしらべなるらし

物の音もながるゝ水に聲すみて夏のほか行く船のうちかな

みな月二十日あまりよひ過ぐるころむらさめ打ちそゝぎてなごり涼しきにこれかれつどひてかたらふ更けゆくまゝに空いたう晴れて月の光も風の音も身にしむこゝちしけり

告げやらば鴈も來ぬべき夜ならし秋おもほゆる月の下風

月あかき夜例の人々と物がたり文などよみつゝあはれなる古ごとどもう

○しらべ　樂の調べ。

○夜ならし　しは未來の助動詞む

ちずんじ明かしけるつとめてひとりがもとに

あはれてふふることの葉の露をこそ月にかたらふ袖にかけけれ

賀に若菜おくる人にかはりて

かぎりなきよはひを祝ふ武藏野のけふの若菜に千代もこもれり

川の邊の春てふことを

末遠き息長川を見わたせば霞をかづく春のにほどり

春のはじめのうた

春くれば垣ねの雪もうぐひすの聲とともにぞうち解けにける

むつきの十日あまり春立ちける日

待ちわびて早くも梅はにほひにきみ雪吹きとけ今日の春風

花の歌とて

あひ思はで移ろふ花をはかなくも身にかふばかりなど惜しむらむ

書てふ題にて

いそのかみふりぬる道のかしこさも文見し人に問ひてこそしれ

野紅葉を

牡鹿鳴くさが野の眞萩散りしよりなべて草ばの色ぞかはれる

○人もときくる 題のひともと菊を隱す。
○すはま 洲と濱との出入せる形を摸して作つた盤上に木石花鳥などの景物を設けた飾り物。

十四夜の月

滿ちぬればかくるならひを思ふにも今宵ぞ月は見るべかりける

十五夜の月

てりまさる月の桂のもみぢ葉も最中の空やさかりなるらむ

十六夜の月

山の端にいさよふ月の今宵こそまつに心を盡しそめぬれ

影やどす露のけぢめも思ほえずきのふに似たるいさよひの月

ひともと菊

山ざとのあはれを知らですむ人もときくるからに秋は悲しき

賀に住よしの濱をすはまにつくりて贈るとて松につけ侍る歌

生けるかひありといふなる住の江の松にかけなむ千代の老波

木のもとにもみぢの散るを惜しみてたてる程さと打ち時雨れて山風にきほひがほなり

やよしぐれ何ぞは染めてそのかひも今はあらしの風にまかする

神無月ばかり紅葉をみて

紅葉ばは物おもふ人の袖なれやしぐれ〳〵て色變りぬる

十月更衣

さま〴〵に今日はかさぬる袖もあれど猶あかざりし萩が花ずり

賀に秋の祝てふ題にて

かぎりなき秋をかさねよ武藏野の一本菊の所せきまで

きくの花よはひのべよと引く眉に人のちとせの秋もこもれり

くれなゐ　物名

もみぢばのちらまく惜しき夕まぐれなゐそかし鳥枝撓むまで

神無月ばかり山ざとに宿る

木枯の吹く夜も月の曇れるや柴といふものの煙なるらむ

しばしとて時雨をよきし椎が本やがて一夜の宿となりぬる

霜がれの草を見て

わび人の心にしげる物おもひの草は霜にも枯れせざりけり

衰ふる憂世のさがの女郎花霜おくまでは殘らずもがな

禁中雪

世の中に見る物としもおもほえず雲居の庭にふれる白雪

ある人壽すとて寄弓祝てふことをよませ侍りし

○なゐそ　ゐやるな。留るな。

○かし鳥　かけす。燕雀類の鳥。

○時雨をよきし椎が本　「たちよらむかげと頼みし椎が本むなしきとこになりにけるかな」（源氏物語椎が本）又、「先づたのむ椎の木もあり夏木立」（猿蓑集）

四方山の守りなるてふ梓弓君が鳴らさむ末ぞ久しき

おもひをのぶ

朝な〱削るとすれど黑髮のおもひ亂るゝすぢぞ多かる

すみわびぬとすればかかる世の中をあふさきるさに思ひみだれて

春のはじめの歌

うちつけに霞むとみしは春を淺みあまぎる雪のそらめなりけり

春の祝　五十賀

老の來む道にかすみの關しあればうしろ安しや萬代の春

花の歌とて

散ることは夢になしてよ山櫻あかぬあまりに旅寢しつれば

賀　花忘老てふことを

老いらくもしらでや千世の春も經む色香ふりせぬ花し匂はば

土佐國なる人母の七十の賀し侍るとてよませはべりし

老の浪はさらにもよらじ水もなき池の若菜の千代をつむとも

春雨ふる日

つれ〲とはるゝ空なきながめにはなげきしもこそおひ增りけれ

○あふさきるさに　あれやこれやと。

ふるとしも空にはわかず霞みつゝ柳が枝の露ぞおもれる

落花

雪とのみ今年も花のふりゆけば消えかへりても猶をしむかな

社

杉たてる國津社はねぎごとのしるしぞ世にも賴まれにける

梅にきじつけて贈る人にかはりて

かをるめる梅はあやなきしるべにて家路遠くも惑ひつるかな

山吹ある家に人來るかた

山吹の下行く水も淀みなむ立ちよる人のかげや止ると

山ぶきの花のまがきの夕ばえを夜はこえじと見る人もがな

みたけまうで

なほのこる花の香とめてみ吉野の山わけ衣家苞にせむ

まがひつる花は殘らで吉野山雲にわけ入る岩のかけ路

祭の物見車にますきよりいひ入れ侍りけるてふはし詞にて

片岡の森の木の間の時鳥ほのかたらひし心地こそすれ

かへし

(一)物見車　見物の爲に立てる車。

ほとゝぎすそのかみ山のふる聲も忘れぬ人は辿りやはする

人を別るゝにほとゝぎすなく

たちわかれ雲居のよそに行く人を鳴きてもおくれ山時鳥

かへし　行く人の

わかれ路を催しがほに鳴くもうし越ゆべき方の山郭公

餘花如春

ぬぎかへて後しもなるゝ花の香に袖さへ春の心地するかな

川逍遙

時しあれば涼しき浪のあかぬかな墨田川原に日は暮るれども

夏ふかき夕風わたる柳かげこゝを瀬にこそ舟とゞめけれ

元服

むすび初むるはつ元結のあげまさり猶ねびゆかむ末ぞゆかしき

旅のやどりにほとゝぎすきく

やよや待てなれも旅なるほとゝぎす明けなば共に山路越えなむ

思ひねの夢かうつゝか郭公なきて別れしふるさとの聲

音羽山をこゆるに郭公なく

○あげまさり　髮を結つて美しさのますこと。

○ねびゆかむ　年たけゆかん。

あまびこの音羽の山の郭公まだ忍び音もさだかにぞ聞く

いざやいざ都にちかき山里は今日の初音に何か如かまし

夏の夜琴ひくを聞きて

そのことと聞きだにわかで更けにけり怪しかりつる松風の聲

夕月夜ほのめきそめし琴の音を聞くとしもなく更けにけるかな

橘

たち花のかをりを袖にとめおきて散りなば更に今を忍ばむ

夏戀

ながき日の戀に姿もみだるゝを暑けさ故と人は見るらし

うつり香も薄き袂に夏の夜の見はてぬ夢を猶しのぶかな

後のみな月に秋立ちける日

いつよりもまち遠なりし秋風をとしとやいはむ水無月の空

名所擣衣

須磨のあまの潮なれ衣手をたゆみ打つ音さへや間遠なるらむ

ふかくさや野となる里の秋風をたれ身にしみて衣打つらむ

雪中遠情

○あまびこの　音の枕詞。

○潮なれ衣　潮水のしみたる衣。

○たるひ　垂氷、つらゝ。

玉すだれかゝげて向ふ嶺の雪に人の國こそ思ひやらるれ

屏風のゑに氷をくだきて水くむ所

我が門の板井の清水我ならぬ氷もねたく結びつるかな

しはすの末つかた有明の月を見て

行く年は更にもいはじながめこし月もなごりの有明の空

年の暮に思ふどち集ひかたらひ侍るに

年くれて軒のたるひは結べどもまとゐの中ぞうちとけにける

ふるとしの雪と積れる思ふ事今日こそともにかき崩しける

梅の花を折りて人のがりやる

あやなくて過ぎなむ事のをしければ惜しと思ふ花をけふは折りつる

おもひをのぶ

思ひこそなぞへなくとも數ならぬ身には憂世のすてよかれかし

夕待戀

待つは我が心ならひの夕月夜頼めぬ空におぼめかるらむ

落花入簾

こすのうちに花吹き入るゝ春風はつらき物ともえこそ恨みね

散りたる花をつゝみて人に

いままでも散らぬ心とちる花といづれうつろふ色のふかけむ

よしさらば雪とだにみよ散りぬるを待ちし日數はあだにふりにき

年ごろ仕うまつりし宮うせ給ひて御はふりの日雨降り侍りけるに

とゞめあへぬ今日のみ立ちは泣く涙雨と降りてもかひなかりけり

いでさせ給ひつるほどは中々物も覺えず夜更けて殿の御有樣を見奉るに

いと胸いたし

おもひやる君が方にぞなびくらし今はとのぼる空のけぶりも

又の日御寺にまうでて御ひつぎのもとにしばしさぶらふほど心きもも失せ果てぬ泣く〳〵立ち歸らむとするとて

心をばこゝにとゞめて立ちかへる我(われ)もなきがらの數にやはあらぬ

二たびまうで侍りつる日

をちつ日もけふも遙々きつれども有りし御影は仄かにも見ず

常に佛の御名をとなへ給ひしかば六字を上におきて御三七日に

なみだのみかけてぞ忍ぶふぢ衣やつるゝ袖もかたみと思へば

むすびおく三世の契りの朽ちせずば誰も終には廻りあはまし

○今はこ　今はこれまでと。

○をちつ日　遠つ日、彼の日。

○六字　南無阿彌陀佛。

あひにあひて手向の露もあだならぬ法の蓮の花のいろ〳〵
みそぢあまり二つに叶ふ姿こそあかぬ齢の數となりぬる
たむけつる花の中にも撫子はわきてあはれとみそなはすらむ
筆にかき繪にうつすともたぐひなき君が姿を誰かまねばむ

初の御いみの日

かきくらしいつをいつとも分かねども今日更にこそねは泣かれけれ

御七なぬかの比おもひつゞけ侍りし

かけまくも　あやにかしこく　いはまくも　えものべやらず　いはむすべ　せむすべしらず　五月やみ　日月もわかで　まどひつる　其のをりふしは　うつそみの　うつしごゝろも　あらざりき　今はた更に　倭文たまき　過ぎにしかたを　數々に　おもひ出づれば　むらぎもの　心くだけて　たまきはる　よのことわりも　思ほえず　千五百の代をも　さかゆべき　かげとたのみし　なゆ竹の　とをよる君は　うちひさす　都をいでて　鳥がなく　あづまの國に　はろ〴〵に　くだりいまして　かぎりなき　契り結べる　武藏野に　萬代ねみむ　わかくさの　つまのみことも　すゝたくに　おふしたてける　なでしこの　花をもおきて　玉つしま　みまくほしとや　せの山も　い

○たまきはる　枕詞。魂極まるの義か。命、世等に冠する。
○とをよる　たをやかにたわみ寄る。撓寄る。
○うちひさす　枕詞。宮又は都に冠する。
○わかくさの　枕詞。

ゆき別れて　あさもよし　紀路をさしつゝ　たゞひとり　おはしましけむ　たれもみな　おくれじものと　ふしまろび　さけび袖ふり　なく子なす　したひまつれど　常もなき　世の道なれば　あさなけに　いや遠ざかる　君がかなしさ

反　歌

暫しだにいかであらむと思ひしにかくても經ぬる月日なりけり

かつら子といへるが身まかりて又の年の五月に

さみだれの　雨降る空に　ぬば玉の　よみの國より　來なくてふ　山郭公　ふたがれる　岩とはあれど　ひら坂は　さかしからめど　ゆきかよふ　みちしあればや　五百重雲　八重雲わけて　たちばなの　もとのやどりを　年ごとに　定かにとへる　ふる聲は　かはらぬ物を　ゆく雲の　すぎにし君は　いかさまに　おもひへだてて　よみ路ゆく　しるべの使　それにだに　ことをもつげず　なりにけむ　是れをおもへば　うつし身は　大かたにだに　かなしきに　おなじよどのの　あやめ草　根をふかめつゝ　おもひけむ　人いかばかり　玉かづら　面影をのみ　身にそへて　戀ひわたるらむと　おもふにも　たもとひづちて　降る雨の　みぎはまされる　こゝちこそすれ

○あさもよし　枕詞。きにかゝる。

○ぬば玉の　よの枕詞。

反　歌

あれにけるよどののあやめ枕にも結ばずなれるよを歎くらし

君が名に何ぞはかけし玉かづら絶えぬ歎きのすぢとなるもの

おほぢの二十五年忌にあたり侍るとてそのわざいとなみ侍るにいはけなくてむつれ奉りしも夢のやうに思ひ出でられ侍りつゝ葉月十一日の月さしのぼりたるを打ちながめ居りて

つれ〴〵と月の顔のみまもるかな見し面影のさだかならねば

倭文子の身まかりけるをなげきて

秋といへば　かならずそでに　おく露も　しばしひるまの　なぐさめは　有りつるものを　うつそみの　うつしき時の　うつくしき　こゝろのかぎりかよはせし　其のことのはも　今のまの　おなじふ月の　するにだに　まだ入りたたぬ　眞萩原　はしたなかりし　夕風に　さかりもまたで　散りにきと　聞きつる折は　中々に　夢うつゝとも　わかざりき　とばかりしてぞかなしさを　袖にまづしる　初しぐれ　しぐれ〳〵て　てる日にも　かわく時なく　月夜にも　目のみきりつゝ　とことはに　はるゝかたなく　ながめわび　思ひまはせば　おもふどち　かたらましかば　淺らかに　わたらむも

○きりつゝ　絕えず霧る。たえず曇って。

のを　澤田河　何に深めて　とし月に　みなれそめけむ　くやしさも　ながるゝ水の　かへりこぬ　むかしがたりと　いつしかに　なりてはかなき　世をいかにせむ

反歌

おほかたのあはれなりせば哀れてふ言の葉にだに慰めてまし

賀茂のあがたぬし身まかり給ひけるを悼みてよめる

鳥がなく　あづまむさしの國は　おしなべて　蘆荻のみぞ　しげりおひし　あら野なりしも　とき來れば　今はさかゆく　春花の　都となりて　しげかりし　蘆荻のごと　人はしも　しゞにあれども　我がたのむ　あがたのぬしは　青雲の　あがれる代々ゆ　よき人の　記しつたへし　文どもの　さはなる中に　よきとよき　ことのかぎりを　つばらかに　みし明らめて　とし月に　あげつろひつゝ　しきしまの　やまとだましひ　いたらひて　問ひ來る人は　かしこきも　おろかなるをも　あまさはず　みちびき給ひ　ねもごろに　をしへ給へば　いそのかみ　ふりにし道に　わけいらむ　たづき知らむと　うなる子の　かた生ひのときゆ　其の家に　ゆきかひしつゝ　ちゝの實の　父にもあらず　はゝそ葉の　母ならなくに　なく子なす　したひまつるは

○鳥がなく　あづまの枕詞。

○しゞ　草木などの生ひ繁りたるさま。

○いたらひて　いは發語。足りて。

○あまさはず　餘さず。

○かた生ひ　十分に生長せざる事

○ちゝの實　父の枕詞。

○はゝそ葉　母の枕詞。

り　はふ蔦の　いや遠ながく　萬代に　まさきくませと　人みなの　祈りしものを　いかさまに　おもひましてか　神無月　しぐれにきほふ　もみぢばの　ちりのまがひに　いづちとも　ゆくへしらずも　いましつるかも

反歌

時雨ふる山邊を見ればもみぢばの過ぎにし君がゆくへ忍ばゆ

あま雲の中にや君はまじりにし時雨るゝ空をみればかなしも

おなじぬし一めぐりの忌の日に

天つちの　神もたすけて　萬代に　ますらむものと　たのみつる　かものうしはも　うつそみし　神にたへねば　かみなづき　しぐるゝ宵に　あがたるの　宿をしかれて　いさなとり　海邊をつたひ　梓弓　いさらご過ぎて　白露の　おきてはけぬる　芝の浦の　こなたにたてる　ものゝふの　やつ山のへに　はるばると　いゆきいたらし　もみぢばの　散りかふかげに　ゆくりなく　かくれませしと　聞きつるは　まがごとならぬ　しかすがに　かくてゆのちは　玉づさの　つかひもこねば　ことづても　たえて聞えず　月も日も　遠くへぬれば　せむすべの　たどきをしらに　こぞのけふ　入りましぬとふ　その山の　君がよすがを　山守に　言問ひやりて　何しかも　まさか

○ちりのまがひに　散るをりのまぎれに。

○いさなとり　海の枕詞。

○やつ山　東京市品川驛の邊、御殿山に接す。

○まがごと　禍言、緣起のわるき言。

○たどき　よすが。てだて。

○まさか　正しく目前のこと。

○まける　枕ごせる。

○しく〳〵に　頻りに。

○けにや　故にや。

○花ぐはし　よしのの山の枕詞。

○こゝだく　許多。

をきける　ことのくやしさ

反　歌

おきつ波きよるありそのこなたなる山の岩根しまける君かも

吹く風ものどに吹かなむ浪の音の荒き磯邊に君しますとふ

あら磯に寄する白浪しく〳〵にかけて思ほゆ君がおもかけ

故中納言宗時君をいたみ奉る歌ならびにはし詞

明和二年二月二十五日にうせ給ひぬやよひ三日御はふりとてのゝしるをすのこのもとによりて見奉り送るほど更にうつし心もあらず又の日なむおもひつゞけ侍りし年ごろ御藥のこと絶えまなく物し給ひつるけにや此の春はやゝよろしうならせ給ひて二月十三日花の宴し給ひつる其のよさりよりなむ御なやみにはかにおもらせ給ひ終にほどなくうせ給へればたれも誰も夢の心地していひやるかたなくなむ

しきしまの　大和なるてふ　花ぐはし　よしのの山を　こゝにしも　思ひいたらし　この殿の　しりへの岡を　丸山と　名づけ給ひて　そこばくの　御園を開き　こゝだくの　櫻うゑしめ　春花と　さかゆく末を　さきつれど　祝ひおきてし　そのかみの　遠つみ祖の　御こゝろを　今もかしこみ　年の

はに　いや栽ゑそへて　あづさ弓　春くる毎に　いつしかと　待遠にのみ思はしし　み園のさくら　いつよりも　とく咲きぬるを　めづらしみ　山わけ衣　いろ〳〵の　袖ふりはへて　ひめもすに　心をやれる　御あそびは千代とことはに　かくしこそ　樂しからむと　大船の　おもひたのみて　ほこらしく　笑みさかえつる　人皆の　姿しをれて　青はたの　小はたたてなめ　あらたへの　衣手ひづち　しろたへの　花の白雲　散りみだれ　出で立つみれば　むらぎもの　心消えつゝ　うつゝとも　夢ともさらに　わかざりき　とばかり有りて　つく〴〵と　思ひいでつゝ　かぞふれば　幾日も過ぎぬ　此のころの　まとゐのむしろ　そのまゝに　しき忍べとや　三日月のほのめく影に　きほひにし　君が行方を　いづちとも　誰にとひてか　したひ行かまし

反　歌

花すらもともに散りゆく別れ路にやる方もなき身を如何にせむ

あはれ君この入相をとぢめとはいつの夕に契りおきけむ

同じ御忌に籠り侍る程はよろづ哀れなる事のみ多かれど物も覺えねばただ片はし許りこそ二月二十五日の曉がた手洗ふとて端近く出でたるに月

○かくしこそ　かくこそ。しは强めの助詞。
○青はたの　枕詞。旗を立て押し行く意にて忍坂に冠する。
○あらたへの　枕詞。布、衣等に冠する。
○衣手ひづち　袖をぬらす。
○むらぎもの　心の枕詞。
○とぢめ　死にぎは。最期。

○玉きはる　枕詞。魂極まるの義で、命、世、憂に冠する。

のきら／＼とさし入る影春の空ともなくいと凄う覺え侍りて

いつの世に忘れむものか二月のすゑの五日のありあけの月

またこの折の忍びがたさを

涙のみ袖に亂れて玉の緒のつれなくたえぬ身をぞ恨むる

春の夜の夢のうきはし夢にだにかかるうつゝを思ひかけきや

玉きはる憂世しらせて咲く花の移ろはぬ間を誘ふはる風

散る花はまた來む春も咲きなまし君が別れを何にたとへむ

終にまた誰もとまらぬ世なれどもおくらされぬる程ぞ悲しき

秋よこのかりの別れも戀しきをまた歸り來ぬ旅をしぞ思ふ

佛の道にも深く志し給ひつる事を思ひて

咲く花の色をも香をもかりの世の思ひすててや君はいにけむ

春の夜の闇にぞ誰も惑ひける君はさやけき月や見るらむ

御はふりのまたの日つとめて

いづこともかすめる空はわかねども朝の雲を哀れとぞ見る

故うへに遲れ奉りしも遠からぬ心地し侍りて

かきくれし五月のやみも晴れぬ間に又こそたどれ春の夜の夢

やよひ十三日雨そぼふる今日は箱根路にかゝらせ給ふと聞くにもいとゞかきくらす心地ぞする

そなたぞと見つゝ忍ばむ山の端をしかも隠すか雨雲のそら

いくとせもかぎりなく行きかひ給ふべき事をこそねぎ聞え奉りつるをかへらぬ道にはいかで出でたたせ給ひけむ

天の戸の明けてくやしき箱根山ふたゝび越えぬ今日ぞと思へば

下巻

父の八十の賀し侍るに杖に結びつけてたびまつる

千代の坂越えむためにときる杖はつきもつかずも君がまに／＼

籠に橘を入れて

ときじくの色にあえつゝ萬代も匂ひてませと折れるたちばな

秋の末つかた遠き所にまかりぬる人のもとに神無月ばかり文つかはしける序に殘れる菊をつゝみて

行く秋におくらされにし菊の花萎るゝ色を哀れともみよ

難波にまかれる人に二月ばかり

住の江のきしの埴生に今日もかも袂匂ひて君がゆくらむ

又おなじ人に堀江わたりも今は人つどひてと聞くこそいとうしろめたくやなどたはぶれにいひやるとて

みやこどりすだく渚に故鄕をわすれ貝こそよると聞きしか

此の返事聞ゆるとて　藤原宇萬伎

住の江の浦波とほくかすむ日も我はあづまの春ぞ戀しき

○色にあえつゝ　色にあやかりつゝ。

○埴生　埴のある土地。

○藤原宇萬伎　又加藤美樹、眞淵の門人、家集靜舍集は本書に收めた。

戀しさをしばし渚にわすれ貝ひろへど今日は名のみなりけり

むつきばかり梅の花につけてひさしう音づれざりける人に

うぐひすの聲まつ宿の梅の花あやなく散らむことをしぞ思ふ

故らへを夢に見たてまつりて

悲しとも悲しきものの嬉しきは昔をみつる夢にざりける

ある人の賀に寄松祝てふことを

久にふるしらゝの濱の松が根にかけてを契れ千世の老浪

西のとのに住み給ふおまへの御七十の賀に松にあまたの年を契るてふ事をよませ給ふに

千世ませと松にかけつゝ祝ふかなまさきのかづら永き齡を

おなじ時のすはまのうた

琴の浦に田鶴の遊べる濱松を君が齡のためしにぞきく

またおなじ御賀に人にかはりて

おきつ風なぐさの影の濱松にのどけきかけは千代もふりせじ

かぎりなき君が齡は幾世ともしらゝの濱の松ぞしらまし

屛風のゑ水の面に螢とぶ蘆あり

○わすれ貝　瀬戸内海に多く産する一種の貝。

○しらゝの濱　紀伊。田邊灣の南方を塞ぐ瀬戸浦。

○すはま　洲濱を形どりたる臺、祝ひの飾り物とする。島臺。

ほたる飛ぶ影もすゞしき波の上に蘆のひと夜は浮寝してしか

野に萩咲きたる所月落ちたり

夕月夜つゆをも露とたれか見む風に亂るゝ野邊の絲萩

蔦のもみぢしたるかた紙してつくれるにさる心ばへの歌かきてよと人の云ひ侍るに

しぐれ降る常磐のやまの蔦かづら松にも秋をしらせがほなる

子の日すとて人々御庭に出てあそぶにうぐひすの鳴き侍りければ

小松引くおまへの山の雪とけて初音うらゝに來なくうぐひす

いときなき子どもに袴著せ髮生しなどしてことぶく人冬の祝てふことよめと侍るに

ゑみの眉ひらけゆくべき千代の春をふゝみてみゆる雪の梅が枝

賀のびやうぶに十一月のさゝの葉に霜置きたるところ

朝な／＼霜はおくとも玉笹の千代の綠の色はふりせじ

正月ばかり雪降りける日柳のまだ芽も出でぬ枝につけてりうこのもとより

白雪のまゆにこもりて春寒みみどりぞおそき青柳の絲

○小松引く　昔正月初の子の日に行はれたる行事。

○ふゝみ　含み。

かへし

みどりまつ柳のいとは白雪のかゝるほどこそこよなかりけれ

おなじ人宮仕に出で立たむ事をねぎ侍りつるがしばしとゞこほりけるほど御前の櫻を折りてつかはしける

千々のはる馴れみむ花の影なれば霞へだつる空ながらみる

かへし

さくら花しばし霞はへだつとも木陰に馴れむ春をこそ待て

卯月ばかり來むといひつる人音せぬ夕つかた雨ふりけるに

誰が里に語らひ馴れて郭公今宵の雨におとづれもせぬ

かへし　　　　筆子

五月雨の空ゆきなやみ時鳥軒ばのよそにをちかへり鳴く

すけ子の許より賀茂のうしの書き給ひつる反古をおこせける包紙に袖の上にかつながれそふと侍りける返しに

いづこにもおなじ涙の落ちそひて淵とやならむ水ぐきの跡

いと暑き頃みつ子の許よりうちはとほしいひ送るとて

打ちはらふ草木の上を知らまほしいひ知らず吹く風のけしきに

○をちかへり　折り返し。

○ほしいひ　乾飯。

○よし野よくみし　「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」(萬葉一、雜歌)

○たまもひづちて　玉裳を川水にぬらして。

○またす　贈與する。

かへしにはあらでそのかたへにかきつく

天つほしいひしらぬ数もよみてまし雲打ちはるゝ夕風の空

みそののうちを吉野山になぞらへて櫻をいと多く植ゑさせ給へる盛りのころ花見にまかりて

またも世にかゝる櫻の種やあるとよし野よくみし人にとはばや

玉河の鮎を人のたうびたるを宇萬伎がりおくりて侍ればかれより

玉川のかはの瀬ひかり山姫のたまもひづちてつりし鮎かも

和うた

山姫のつりてまたしし若鮎はやまに川にもまさきかれとぞ

六帖の題にて人々よみ侍れば手習にとてよめる

しらぬ人

足曳の山邊に立てる白樫のしらず知られぬ戀もするかな

一目だに見し人ならばかぞへても慰むこともあらましものを

いひはじむ

おきつ舟たよりの風にまかせても漂ふ浪のよるべしられず

濱千鳥あとつけそむる眞砂地にちゞのひとつもえこそつくさね

○まゆみつきゆみ　まは美稱。槻木の弓。

○はた隱れたる　端隱れた。半かくれた。

年へていふ

白眞弓まゆみつきゆみ末つひに我にしよらば年は經るとも

人しれぬ

逢ふことを松にかけたる葛かづら色にないでそ絶えじと思はば

知らるな

秋霧にはた隱れたるはたすゝき穗にし出でずば人も知らじを

逢坂を越えてしこえば鈴鹿山よに音高くなるもいとはじ

道のたより

逢ふことをかた野に住める我なれやかりにのみ來て立ち歸るらむ

ふみたがへ

かきそへてやりやしなまし我もしか言よきにこそ計られてしを

ひとづて

玉だれの隙もる風のつてにだにそよとばかりは知らせてしがな

たのむる

大船のわたりの山は崩るとも君にたのめし言はたがへじ

くちかたむ

○せこがたなれの　兄子（男を親しみいふ）が手馴れし所の。○なづくがに　なづくために。がに又がねに同じ接尾語。

難波なるみつとは人に語るともゆめ逢ひきとはかけずもあらなむ

人知れず又もあふひはありなまし言に出でそ今日のかざしを
　くれど逢はず

つれなさに泣く〱歸るうしろでをいかに見るらむ有明の月

かいをなみ寄すとはすれど荒磯の岸にたゞよふ海人のすて舟
　人をとゞむ

門ちかきいさゝむら竹な刈りそねせこがたなれの駒なづくがに
　とゞまらず

入る方のありとも知らで悔しくぞ胸ときめきし夕月のかげ
　名を惜しむ

いさや川いさまだ知らぬ君ゆゑに浮名ながさむ事をしぞおもふ
　をしまず

人ごとに夏野の草のしげくとも猶踏みわけてやまず通はむ
　かるかや

わきてしも吹かぬ千草の秋風にひとり亂るゝ野邊のかるかや
　こも

水まさる澤のわかごも五月雨にみだれやはてむかる人もなみ

うきくさ

浮草のひまなく生ふる池水はあさみどりなる波ぞ立ちける

水の面にあやおりかくる浮草は波の立つにぞむらは見えける

葎

わが宿は訪ふべき人もなきものをあやなく閉づる八重葎かな

わすれぐさ

わすれ草うさは忘れでうき人の我を忘るゝ名にこそありけれ

しのぶぐさ

露しげきまやの軒端のしのぶ草しのびに立てる袂ぬらすな

忍ぶぐさ茂さまさらばおのづから露のみだれを人やとがめむ

玉かづら

たまかづら心に絶えぬすぢゆゑにいかにうき身のなるも厭はじ

くず

岩を廣みかなたこなたに這ふ葛も引けばひかれて寄りくるものを

さねかづら

さねかづらさぬる夜もなき物ゆゑに絶えずも人のくるがあやなき

ぬなは

隠れ沼の底に生ふてふねぬなはのねも見ぬからになどか戀しき

池水に浮きて漂ふねぬなはもあだなる波にひかれやはする

青つゞら

ところせく山路に生ふる青つゞら來る人ごとにまとふべらなり

すみれ

春日野の若紫のつぼすみれゆゑなつかしき色に匂へる

ゆり

ひともとは手折りて行かむ道のべの草ふけ百合の草かくるとも

すげ

雨も日もよくといふなる菅の笠旅ゆく人にきせてやらまし

まさきづら

常磐なる松にかゝれる正木づらあきはくるとも色はかはらじ

はじめてあへる

まさ夢のまさしかりつる今宵だに宿のうつゝの現ともなき

○さぬる夜　さは接頭語、寢る夜。「たづがなき蘆邊をさして飛びわたるあなたづ〲しひとりさぬれば」（萬葉集十五）

○ねぬなはの　枕詞。繰る、長き又はねぬに冠す。「ねぬなは」は植物蓴の異名。

○つぼすみれ　各地の山野に自生す。一名こまのつめ。

○草ふけ百合　草深き處に生えたる百合。

はやう仕うまつりし君うせ給ひてことし御七めぐりに當らせ給へるにおくらされにしもたゞこの頃ぞかしと思ひ出でつゝうち見る物ごとにかこち聞ゆるもかつはわりなしやまづ柳をいふべし

わが涙たまにもぬかぬものゆゑに靡く柳のいとも恨めし
　花こそ人の心はつくめれ
こよなしとかつ見ながらも櫻ばな猶うとまれぬ折りしうければ
　櫻のみいふべきものか
うつそみの世のはかなさに比ぶれば櫻はなほも久しかりけり
　うらゝなる空のいとゞ昔おぼえて
かげろふのもゆる春日の空みれば行方も知らぬ君ぞ戀しき
　まだ曇りがちなるは春のものとてや
春雨は降れどふらねど古を忍ぶ袂はかわく間ぞなき
　くらべぐるしうとも
うぐひすと鳴くてふ鳥の翼にも我が袖こそはぬれ勝りけれ
　物いはぬはすべて思ひくまなくこそ
古の春戀しらに手折りもてあやなき花にかごとかけける

○かげろふの　もゆるの枕詞。

賀に花によする祝てふことを

ひととせに一度咲ける花なれどかざさむ千々の春ぞ久しき

春風は吹けど吹かねどさくら花千代をしめたる影ぞのどけき

筑紫より來し人に五月五日うたげすとて

松浦潟まつとないひそ相摸なる足柄山に關もあるものを

花もみな玉にぬく日のたま〳〵に逢ひ見る事のいや珍らしき

夏の歌をよめる

まはぎ原まだうら若きこもり妻とふか牡鹿のすゑたのみつゝ

賀の屏風の歌八月人々はし居して月みるところ池あり

秋されば月すむ池のねぬなはの長き夜あかぬものにぞありける

母のおもひに侍りける頃

ありし世も逢ふこと難きはゝき木のはては行方も知らず惑へる

こはさとにおり侍る事のいとたまさかなりしを常に戀ひきこえ給へりし事を思ひいでていへるなり

又おなじ頃かの住み給へりし方の前なる花ども折りておこせたるに

ふるさとの花に昔の事とへど答へぬ色はかひなかりけり

○ねぬなはの　枕詞。長きに冠する。

○はゝき木　はうきぐさ。「その原やふせやに生ふる帚木のありとて行けどあはぬ君かな」(六帖五)又母にかけていふ。

とて山吹に結びつけつ

又のとしの春かしこなる梅の花を見侍りて

梅の花はるや昔の袖の香も誰忍べとて植ゑおきにけむ

歳暮の戀といふ題を人のよませ給へるに

明日よりは年をへだてし歎きさへ添ふべき事のかねて苦しき

夏のはじめの歌

あかざりし花を戀ふとて夏山の木の下闇にまどひつるかな

短夜と人はいへれど郭公待つに更けゆくほどの久しき

郭公いかに契りて藤なみの松よりこゆる陰に鳴くらむ

郭公はやも鳴かなむ初聲をまつにかゝれる藤咲きにけり

神無月ばかり物へまかる人に

山里にもみぢ見にとて行く人を散りなむ程や待ちわたるべき

海のほとりなる家に月見るところ

月清きおきつ島もり言問はむまなく寄するは雪か浪かと

山里に紅葉見にまかりて

暮れぬとも紅葉の影しあかければ歸る山路は急がざらまし

○梅の花　「面影のかすめる月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に」(新古今十二、戀二)の表現法にならつたもの。

○まなく　絶えず。

山吹咲きたる家に見る人あり

暮れて行く春だにとまる山吹の籬がもとに立つな咎めそ

山吹の下ゆく水に住む蛙鳴きてもしばし春をとめなむ

訪ふ人もなくて移ろふ山吹の下ゆく水に蛙鳴くなり

わが宿の池の汀の山吹に立ちよるものは浪にざりける

さくらを

櫻ばな散るを恨むる影よりやかしらの雪も積りそむらむ

惜しと思ふ花をも風にまかするをやる方なきは憂き身なりけり

淸らなる色こそは似め櫻花などはかなさの雪にあえつる

賀の屛風のかた木のもとに淸水流るむすびて飮む人あり

明日もこむ片山影の岩淸水ゆめ音たてて夏にしらるな

春都よりくだりし人のふ月末つ方歸り上らむとするほどふゝめる萩につけ送り侍る歌はし詞

まはぎ咲く頃にしもおぼし立ちぬるにすみれ咲く野をなつかしむ人は侍らずやとあながちに聞えまほしきもかつはわりなきわざになむ

かこつべき故だにあらば武藏野の秋待ちてともいはましものを

○移ろふ　花の色が褪せてゆく。

○ざりける　ぞありける。

○あえつる　育て居る。あやかつてをる。

月前行客てふ題を給はれるに心も得ず

澄む月に吹きすさみゆく笛の音をこちくと聞かば嬉しからまし

あくがれてそこともいはず行く人はたのめぬ里や月にとふらむ

はまの月を

露ながら伊勢の濱荻刈りしきて月見むための旅寢をぞする

あかず見る秋の海邊の月きよみむべ住吉と海士は告げけり

醫師まさとしのもとより桃の花につけて

梅が枝のやせもしぞきて桃の花太く肥えよと祝ふとを知れ

返し

枯れにけるもぎ木の枝も桃の花にあえてや更に若がへらまし

またかれより

三千とせになるてふ桃を重ねては數へもつきぬ春とこそみれ

かへし

仙人(やまびと)のめづてふ花を手折りもてつきせぬ春を君ぞかぞへむ

また數多の花にもきぬにも紙にさへもゝといひてめでらるゝは此の花のいさをしなるべしとて

○こちく　胡竹。胡竹の笛。此方來にかく。

○もぎ木　枯れて枝なき木。

○あえて　あやかつて。

○三千とせの歌　西王母の故事による。

○仙人のめづてふ花　桃花。

○物いはゞ　口をきいたら。

○みくま野　みは美稱。紀伊國熊野。

○はまゆふ　濱葉又はまおもと。

物いはゞとはましものをおのが色のよに名だゝると知るや知らずや

こたふ

げにも世に名だたる宿の花なれやこゝろ目馴れし色にしも似ぬ

卯月の末つ方郭公は聞きつやとたび〳〵いひおこせける人の許に

御園生のしげき木の間にかくろへて鳴く時鳥こゑの乏しき

はまゆふを植ゑさせ給へるがはじめて咲き出でたるを見はべりて

みくま野の神のおまへの花ぞとはげにいちじるく咲ける濱ゆふ

社頭月てふ題をたまはりて

稲荷山杉の木の間を洩る月のひかりも淸きみづの玉垣

月照花

あくがれて月に寢ぬ夜のつもれるを枕の塵ぞかこち顏なる

はらからなる人の重くわづらひ侍るよしを聞きていとおぼつかなく思ひわたり侍る頃とぶらひ聞えける文のはしにかきておくり侍りける

おもひやる心にたぐふ身なりせば日には千度もとはましものを

終に果敢なく失せにけるを限りなく思ひ歎き侍りける頃まさとしの許より殘れる菊につけて

いかばかり袖のぬるらむおく霜につらなる枝のかた枝枯れては

返　し

枯れ殘る片枝も霜に結ぼほれあるかなきかに消えつゝぞ經る

みつ子の許より

今更にはかなの世やといはれけりとはれし人をとふにつけても

文月はじめの頃みつ子の母の身まかりしをとぶらひ侍りし

依月思秋てふ事を

かばかりの月にめでてや露しげき尾花が末を秋といひけむ

月前燈

仄かなる火影しなくば小簾のうちを晝とや見まし秋の夜の月

くすし何某のぬし八十の賀に寄松祝とふ題にて

いく藥ありてふやどの松が枝に老いせぬ千代をちぎりおかなむ

このかみ藤原の長かず身まかり給ひて又のとし神無月二十二日はこの日

なりければ

去年のけふ別れし君をあひ見ずて千とせ過ぎぬる心地するかも

おなじ日殘れる菊を折りて

よろづ代のかざしといひし菊の花けふの手向に折れる悲しさ

同月のつもごり賀茂のうしの七めぐりにあたり給ひけるに

露霜のけやすき命ながらへて別れし今日に又も逢へるかも

ゆくへなき時雨の雲をかこつかな遅らされにし君を戀ひつゝ

むつまじかりける友垣の年頃遠き所にゆきわかれて侍るがよはひことぶくとて贈りものし侍る中に白がねの玉を長き絲して貫きたるに結びつけ侍る

玉の緒をなほ長かれと祈るかなめぐり逢ふべき身をばしらねど

紀の吹上の殿に侍ふ人になむありける其の六十の賀かしこの西の御館より賜はするに松久しき友となるてふことをよませ給うける

吹上のはま邊に立てるそなれ松なれつゝともに千代を經なまし

賀の屏風の歌

正月　子の日するかた

しめ結ひし小松が原にきて見れば霞こそまづ棚引きにけれ

二月　苗代に水まかする處

せき入れて畦こす水の下にしていかでか苗のいや萌えぬらむ

○そなれ松　磯馴れ松。

○子の日する　子の日の遊びすること。古、正月子の日人々野に出で小松を引きて千代を祝ふ。

五月　早苗植うるかた

此の頃の田に立つ賤の暇なみ小櫛もとらで早苗とるなり

六月　河邊に祓する處

夕波の涼しき瀨々にみそぎして心もゆける今日にやはあらぬ

八月　はしゐして月を見て

夜もすがら月の心のあくがれて小簾の外ながら明かしつるかな

は月末つ方みつ子の許に朝顏おくるとて

秋たけて露ふりはてし籬には面なげにこそ花も咲きけれ

返し

言の葉のひかり添へたる朝顏の露のふるせる色としも見ず

おなじ頃すけ子のもとより朝顏につけて

君がため裳のすそぬらし折りつれど心にも似ず移ろひにけり

返し

折る人の心に花もあえぬらし世になつかしき色に匂へる

葉月十五夜十五首の題をたまはりてよみて奉れる歌

秋朝風

○今日にやはあらぬ　今日にあらぬやは。やはは反語。

○露ふりはてし　露降りに舊りはてしを掛る。

○言の葉のひかり添へたる　めでたき和歌をそへた。

○心にも似ず　我が心の切なるにも似ず。

○えこそ寝られぬ　よく寝つかれない。

○老となる　「大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」(古今一七、雑上)

夜もすがら月にうとみし浮雲を拂ふもあやな今朝の秋風

秋夕雲

秋風は拂へどもなほ夕月のほのめく雲にまよふ浮雲

秋夜雨

はれゆかむ空を待ちつゝ雨の夜も月ゆゑ秋はえこそ寝られね

秋野蟲

月かげはくまも殘さぬ秋の野に何をうらみて蟲の鳴くらむ

秋待月

まだきより月に心のあくがれて幾度むかふ遠の山の端

秋見月

老となるものと知りつゝしかすがに猶こそめづれ秋の夜の月

秋惜月

秋の野は入るさの山に宿もがな月の行方をそことだに見む

秋題戀

夜な／＼の月しとはずば袖の露を秋の習ひといひもけたまし

秋變戀

たのめつゝ待つ夜更けゆく月影に人の心の秋ぞ知らるゝ

秋恨戀

ほのかなる影だに見えば秋の夜のつきせず人を恨みはてめや

秋古寺

初瀨山きり吹きはらふ秋風に尾上の月の影ぞ澄みゆく

秋田家

住み捨てし田の面の假庵秋たけて月のみ夜は守り明かしぬる

秋水鄕

流れこし水上とほき水無瀨河いく夜の秋か月もすむらむ

秋旅行

夜もすがらさやけき月にあくがれて宿り定めぬ秋の旅人

秋神祇

秋はなほわきてさやけき月よみの神のみ影を仰ぐもろびと

神無月二十日の夜かめに植ゑたる梅の咲きたるを見て

火影にも小春てふ名はかくれねどはつかに匂ふ夜の梅が香

としのくれに

○水無瀨河　今の山崎驛のあたりを流るゝ淀川の支流。

○白雪の消えかへり　白雪の消えてなくなるやうに、死ぬばかりに。

○たはやすくの歌　たはやすくはたやすく、容易に。「櫻花散りかひ曇れ老いらくのこむといふなる道まがふがに」（古今七、賀）を本歌。

白雪の消えかへりつゝ惜しむかな我が身ふりゆく年の名殘を

手を折りて春まちかねしうなゐ子の昔を戀ふる年の暮かな

梅によろこびの色ありてふ事を

ほゝゑめる梅にめでてや鶯もゝ喜びの音をば立つらむ

浦の霞てふ題にて

見てもまた見まくほしきを春霞立ちな隱しそ浦のはつ島

屛風の繪家に櫻あり木のもとに集ひて花見るところ

嬉しくも植ゑてけるかな櫻ばな咲けばぞうとき人も訪ひける

たはやすく立ちもかへらば櫻花散りかひ曇れ道惑ふまで

春のあけぼのの歌とて

横雲もかすみに消えて山の端の花よりしらむ空の長閑けさ

山家夢

松風も瀧のひゞきも聞きなれてしばしは結ぶうたゝ寐の夢

寄琴戀

戀ひ侘びてかきなれ琴の緖を弱みいとゞかひなき音をぞ添へぬる

かしは木村てふところに三月末つ方姬君の御供にまかりつるに或人あな

がちせめ聞え侍るにまけて所の名を首におきて詠み侍るさるはこの頃人
人のすなるさまをまねび侍るもおこがましらなむ

かぎりなき春を重ねて君ぞ見む御園に繁き木々のおひさき

茂りそふ夏の木陰の涼しさも今よりしるき庭の松が根

はつかにも一木に花の残れるや君が見はやす今日を待ちけむ

[illegible]子なくこゝろも長閑けき春の野に長き日あかず遊ぶもろ人

むら／＼に小草花咲く春の野を錦しけると誰か見ざらむ

らに匂ふ秋はありともこの野邊の菫花咲く春にしかめや

ころもがへ

夏ごろもかへにし今日の肌寒み下にを著なむ花染の袖

はじめの夏

神まつる卯月きぬらし榊葉の常磐のかげもいや繁りぬる

殿の御五十の賀に菊よはひをのべともなふといふことを

露の間に千とせ經るてふ菊の花御袖にふれていや若えませ

紀の吹上のお前に御六十の賀に竹に齡を契るてふ事を

茂りそふ御園の竹によろづ代を契る御影ぞますかげもなき

○らに　蘭に同じ。

○下にを　をは歎辭。

○露の間に　菊の露積りて淵となるといふ意を人の齡の甚だ高きに譬ふ。「我が宿の菊の白露今日ごとに幾世つもりて淵となるらむ」（拾遺集、秋）

おなじ御賀に御ふみおさへの料に白銀の菊の枝奉るとて結びつけ侍る

吹上のはまの白菊千世ふとも老の波をばかけじとぞ思ふ

二月ばかり故うへのおはします御寺の梅の花を折らせ給ひて御たゝう紙におしつけて給はせるを見侍りて

そのかみの花の袂を梅が香にかけて忍ばむものとやは見し

ちゞの思ひにて侍る年やよひばかりに

くさ〲の花は咲けどもかぞいろのなきよの春は寂しかりけり

九十近くてうせ給へるをあえものなど人々聞ゆるよしあかず悲しうのみおもほえつゝ

千世ませと思ひし君は百年にあまた足らでも別れぬるかな

年ごろ手ならし給へる硯を得て

かひなしや涙は海と湛へても君が御影をみるもおひせぬ

立田山しぐれふるかたを見て

立田山しぐるゝ頃のもみぢ葉を袂のほかとなど思ひけむ

かきうつし給へるふみにむかひていとゞかきくらす心地す

面影の浮ぶもはかな歸りこぬ君が形見のみづぐきのあと

○たゝう紙　疊紙。懷中して鼻紙又は歌の詠草に用ゐる。懷紙。

○かぞいろ　父母。

○あえもの　あやかりもの。

○みるもおひせぬ　見ると海松〔ミル〕をかく。

おほぢの五十年の忌日は八月十二日寄月懷舊といふ事を人々によませ侍るとて

夜もすがら月やあらぬとかこつかな五十ふりにし秋を戀ひつゝ

膝の上に指さして見し古の秋の月こそ戀しかりけれ

月前女郎花

秋もやゝ更け行く庭の女郎花面はゆげなる月のくまなさ

野の月

秋の野の千草おしなみおく露をいろことにに月ぞ見せける

八月十五夜おなじ心を

むさし野のかぎりも今宵わけ見まし月に心の行くに任せて

待月

月まてば心そらなり浮雲の漂ふみねに風も吹かなむ

よひ〳〵に空だのめせぬ月影もさはりやせまし峯の浮雲

人の御許よりめづらかなる菊の花にさま〴〵の名つけたるを奉り給へるその名を題にてよめと侍りければたはぶれに

葵まつり

○膝の上に云々　幼き時膝に抱かれて見た月を懷かしく思ふ意。

○葵まつり　山城の賀茂神社の祭禮。四月中の申の日に行はれる。

○唐土の鳥の翼　孔雀の羽をいふ

○雲のはたてと云々　雲の端の夕焼に赤く色づいた様に見まがへる

二葉より色のこもれる菊のはな神まつる頃や移し植ゑけむ

ねみだれ髪

朝ねがみ思ひみだるゝ面影や露にしをるゝ菊の一枝

富士おろし

時しらぬ雪とや見まし秋の風吹きしく庭のしら菊の花

大峯さくら

思ひきや吉野の奥の山ざくら秋のまがきに咲くを見むとは

金龍

天雲の中にかくれて住む龍も花にめでてや姿見すらむ

孔雀

よそへ見るまがきの菊は唐土の鳥の翼のあやに珍らし

紅雲城

夕日さす高峯の菊をくれなゐの雲のはたてと見ぞまがへつる

白衣孃

名にしおはば學びもやせむ花の上にかけて悔しき露の言の[illegible]

とらのまき　折句

○らに　蘭。
○手ふれじや云々　釋迦がたけを隠す。
○姿覺ゆる　姿を思ひ出される。

時くればらにも咲けれど野を遠み間近き菊の花ぞこよなき

釋迦がたけ

人の守る園の菊には手ふれじや香がたけからば咎めもぞする

沉香亭

おばしまに袖打ちかけしたをや女の姿覺ゆる菊のひとえだ

襄陽樂

おく露もさはらばおちむたはれ女が戯れて遊ぶ菊の花ぞの

白紵辭

さくら麻のおふの下草それならで朝露しげきませのしら菊

香襄

菊の香は匂ひゆかまし秋寒み庵にほ火吹く爐のあたりにも

長月晦日菊の宴し給へるに

御園生に千代を契りて咲く菊は秋の名殘も知らず顔なる

お前の紅葉いろづきたるを見て

目に近き一木二木のもみぢ葉に山の錦をおもひこそやれ

紅葉御覧じける御供に丸山といふ所にまかり侍りけるになべて色濃き中

○てへる といへる。

○そら目 見違へる事。ひが目。

にまだ青葉なるもまじりて見えければ

またも來て見まさむ君がためとてやなほ染め殘す山の紅葉ば

池のほとりにて

もみぢ葉のうつれる影を小波のあやに重ぬる錦とぞ見る

はつ雪ふりける日賴德君の御かたはらまできこえ奉る

君は今朝いかに見まさむ人みなのめづらしてへる初雪降れり

御返し

人みなのめづらしてへる初雪はけだしや今朝の霜にこそあれ

また聞え奉る

花のごと散り亂れつゝ降る雪を霜とは君がそら目ならまし

雪麿君よりよみおける歌御覧ぜさせよと宣ひおこせしかばかいつけて奉りしにかく聞え給へり

むさしのの尾花がうれにおく露の玉つらぬける言の葉ぞこれ

御返し枯れたる薄にさして奉る

霜枯れていとゞはえなき言の葉の露をとひくる月ぞやさしき

御みづからの御歌ども見せ給へりしをめで奉りて

たちばなの花さへ實さへ足らはせる君が言の葉今日みつるかも

また師走ばかりに梅の花を宮の蓋に入れて初雪てふ薫物を給へりその包紙に尾花の御返事とおぼしくて

霜枯のわが宿ながら言の葉に梅はをしくも思はざりけり

いとこと繁き折なれば只かくいらへ奉る

おもほえず日影さやけきみ空ゆも降りくる雪のあやに薫れる

ある人子日に六十賀し侍りけるに

若草の妻もこもれる武藏野にかぎり知られぬ子の日すらしも

かの家とじなむ久しきとくいなりければすはまてふして送るとて鶯居たる小松の枝に結びつけ侍るうた

曳き植うる小松がうれの鶯は千代の初音をならしがほなる

早春の水てふ題にて

若水に君がむすべる玉川の清き流れは千代も絶えせじ

丸山の花御覽じける日御供にまかりて

花くはし吉野の山のやま櫻はなの盛りもかくぞあらまし

賴やす君の御許より眞淵のかけるふみども返し給へるとて

○たちばなの歌　「橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいやさはの樹」（萬葉六、雜）

○若草の云々　「武藏野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」（伊勢物語）

○すはま　洲濱臺、しまだい。

○撫子の花のさかり　愛子の世盛り。

現身の同じ世にある身にしあれどかかる人にはなどおくれけむ
世の中に君しあらずば敷島の大和の道は誰か知らまし

と聞え給へる御答へ

ふみおける道のしるべの跡とめばおくるゝ人も惑はざらまし
敷島のやまとだましひ君こそはあれつきまさめ萬代までに

おなじ君此の殿にまでおはします度ごとにやんごとなき御使に出で侍り
ければ卯月ばかり

ほとゝぎすなが鳴く聲の珍らしとわが思ふ君がきます今日かも
生き憂しといひても今日はやむべきを仕ふる道ぞすべなかりける

御返し卯の花に結びつけて出でたり

しるしなき音をしも鳴くか時鳥しばしとだにも呼びはかへさで
待ちつゝもあらましものを時鳥おもひ限なくいづちいにけむ

五月のはじめつかた典子が身まかりけるを悼みて撫子の花につけてかの
家あるじの許におくり侍る歌

撫子の花のさかりも見はてずていづち行くとか往にし君はも

五日の夕さり菖蒲につけて

○音無川　紀伊國能野本宮の近くなる熊野川の小支流。

○玉はゝき　古、正月初子の日に蠶室を掃く爲はゝきぐさを用ゐて作りたる帚。

あやめぐさかをりし袖も引きかへて今日は涙の玉やぬくらむ

紀の國音無川の梅を

梅さそふ風もおとなしの川浪にうかぶ水泡の香こそしるけれ

若菜

若菜摘む衣手寒し沫雪の降るから小野の春の朝風

あかつきの鐘を

いつよりか待ちならひけむ曉の枕にうとき鐘のひゞきを

現有滅不滅てふことを

常磐やま千代のみどりの松が枝につもりもあへず消ゆる沫雪

やんごとなき人の賀に玉はゝきを小松にそへておくる人にかはりて

玉はゝき初音の松にとりそへて千歳の春も御手に觸れなむ

紅葉の歌とて人のよませ侍りけるによめる

神無月まなくしぐるゝ頃しもぞをぐらの峯はてりまさりける

をちゝの八十の賀に蓬萊のかたを洲濱に作りて結びつけける歌（公の御醫師なりけり）

かぎりなくいく藥あるやどなれば萬代ふとも君は老いせじ

みつ子の許に父の一めぐりに撫子の雨にぬれたるにつけて

なでし子の雨に萎るゝ花よりも君が袂はひぢまさるらし

おなじ人の故郷なるはらからを思ひやりて

うぐひすのかひこに巣だつ時鳥ちゝに似るてふ聲もなつかし

父まさとしのぬしは古きとくいにて侍りしなりかぞいろはともにおくれて後のはゝとじの生したてたると聞き侍ればかくよみつ

春立つ頃ゆうちはへ惱ましかりつるがやゝみな月ばかりおこたりぬ葉月十五夜めづらかに空晴れたるに

ながらへて今宵の空の月も見つまたこむ秋はいのちなりけり

尾張のこれなり長月の末つ方下つふさのなり所に歸るときゝて

野邊山邊いろづく頃のあがたゐにいざともいはでいぬる君かも

橘のもろなりのぬし初めてとひおはして昔賀茂のうしの事などかたらひたうびつる後消息の序にかくいひおこせ給へり

神のごと聞きてありへし君がめを見るになかるゝ言とひはせし

返し

こととはす君をし今ゆたのめればたどき知られぬ世をも歎かじ

さゝやかなる紅梅をかめに植ゑてすけのぶの許より

○ひぢ　濡れる。

○うぐひすのかひこ　鶯の卵。

○かぞいろ　父母。

○なり所　別邸。

○賀茂のうし　賀茂眞淵。

ふゆごもり霜に雪にもつゝみなく君あゑませと見するこの花

いづこにも咲きはすらめど朝なけになづさひ給ひ哀れとも見よ

返し

われもしかみつれずあらまし霜雪にいとゞ色そふ花にあゑつゝ

朝にけにいやめづらしみ梅の花めぐしとぞ見る君によそへし

もろなりのぬし淺香の沼より根こじたるかつみを給へるに

陸奥の淺香の沼に生ふるてふ草いとりきてかつ見ることのあやにともしき

もろなりのぬし清良ぬしとひおはしてひめもす古ことら語らひ給へるついでに賀茂らしの事など語り出で侍りて

いそのかみふりにし事は知らねども今日か古の心地するかも

もろなり

あさもよし紀路にありてふあかの浦のあかずもあるか今日の語らひ

きよら

あし垣のへだてもなくて語らへばながき日すらもはた短かる

ある人の娘花と名づけてかしづきつる身まかり侍りて又の年花によせて昔を偲ぶことを人々によませ侍りけるによめる

○朝なけに　朝毎に。
○なづさひ　馴れ添ひ。

○朝にけに　朝なけに。
○めぐし　可愛らし。
○根こじ　根のまゝぬきとる。
○かつみ　菰(マコモグサ)の異名
○いとりきて　取り來て。いは發語。
○あやにともしき　甚だ珍らし。

○いそのかみ　ふりの枕詞。

○あさもよし　枕詞、きに冠す。
○紀路　紀伊路。
○あかの浦　和歌の浦。あさわさ通音。

○しづにさえだ云々　枝が繁くさすから。

○みなもとの昌鹿　奥平昌鹿。豊前中津藩主。県門の歌人。安永九年歿、年三十七。

年のはに見つゝ忍ばむものごとは思はでしもや花をめでけむ

清長主の母とじ秋の頃より悩ましかりつるが師走許りおこたり給へるを悦びて老いたる松雪の中に色をますてふ事を人々によませ侍るによめる

ふりにける陰とも見えず雪の中に瑞枝さしそふ岡の邊の松

おなじ人の娘一時のほどに小松しき〳〵におよのきたりといへる題にてよめと侍るに

小松原しづにさえだのさすからに木高かるべきかげはしるしも

紀の吹上の殿にいまそかる清信院の君の七十の御賀に櫻の作り枝につけて奉る

ちゞの春あかずめでまさむ吹上の浦の花園神さぶるまで

雪まろの君を悼み奉れる歌

こは奥平大膳大夫みなもとの昌鹿君なり古ごとに心よせ給ふあまりさるたよりもとめて折々消息きこえ給ひつるがゆくりなくかくれませしと聞きてかくよみ侍るもいつしか十とせばかりになりぬるを反古どもの中より見出でてこゝにかきつく

水無月の　望(もち)に消えては　消えがてに　其の夜降りつゝ　時じくに　たゆる

ことなく　とことはに　いや降りつみて　立ちおほふ　雪もかすみも　かくさへぬ　高嶺の雪を　御名にしも　おはせる君は　またと世に　たぐひあらめや　あづまなる　大城にこそは　をちこちの　國しらすなる　君たちのつどひましぬれ　そが中に　誰か知らめや　しき島の　やまとだましひ　明らけく　あれますからに　大君の　御ことかしこみ　しらぬ火の　つくしのはてゆ　年のはに　行きかひしつゝ　おごそかに　つかへまつらし　をし國を　治めまつろへ　まめごとも　たはぶれごとも　いにしへの　みやびをなさし　いそのかみ　ふりにし道の　八十くまを　くまものこさず　つばらかに　分け見たまひて　まどへるは　みちびき給ひ　ねもごろに　をしへ給へば　むさし野の　尾花が末の　風のまに　なびけるがごと　みよし野の　たのむの鴈の　たのもしき　かげによらぬは　なかりけり　かくしもませば　おのづから　其の名は四方に　なる澤の　音に聞きつゝ　よそにても　あふぎたふとみ　やほよろづ　ちよろづ代まで　うごきなく　さかえますべきことをのみ　いのりし君は　思ほえず　すそのの眞萩　このあきの　さかり見むとや　あさぎりの　たちのまよひに　ゆくりなく　いゆきましけむ　行方をも　知らずときけば　せむすべの　たどきもしらに　むらぎもの　こゝ

○かくさへぬ　隱すことのできぬ

○あれます　生まれついて御所有なされる。
○しらぬ火の　筑紫の枕詞。
○をし國　食し國。領國。

○たのむの鴈　田の面の鴈。歌に多く賴むにかけていふ。

○むらぎもの　心の枕詞。

○なく子なす　枕詞。ねのみしなく、こゝだにこはず、ゆきこりさぐり、したふ等に冠する。
○なづさひ　馴れ添ひ。

○あいなだのみ　はかなきたのみ

○後せの山　筑後國八女郡御前山か。

ろくだけて　うつゝとも　夢ともわかず　うつそみに　ましつる時に　なく子なす　したへる人を　なぞへなく　なづさひ給ひ　さま〴〵に　たづねとはして　をみなへし　霜に枯れぬる　朽葉まで　かゝれるつゆの　かしこさに　うしとやさしと　思ひつる　身をも忘れて　おふけなく　たど〴〵しかれと　いや高き　山路わけ見む　ことをしぞ　折しあらばと　ねぎにしもあいなだのみと　なりにけり　わがたもとだに　かくばかり　ひがたきものを　まのあたり　仕へし人は　いかばかり　歎きそふらむ　若草の　つまのみことも　なでしこの　君もさこそは　あさよひに　戀ひ給ふらし　よしやさは　御名にかけせる　しらゆきを　君がかたみと　あしたには　見つゝ忍ばし　ゆふべには　見つゝ戀ひませ　かたりつゝ　いひも傳へて　すゑの世に　しのばむ人も　かくしこそ　あはれとは見め　時じくに　たゆることなく　とことはに　いや降りつもれ　富士の白雪

反歌

不二の嶺に降りつむ雪のいやたかき御名は消えせじ萬世までに

つくしなる後せの山の後にまたこと問ひせむといひし君かも

後せの山は君のしり給へる國の山なりいにし年その山の萩もて管とせ

し筆を白銀もてつくれる雀の文のおさへに添へて筆船てふ器にいれて
たびし事あなりし其の時しもくさ〳〵の歌なむ書きつめて見せ給うけ
るに其の御文しも今はいづちやりけむ

雪麿君の御許より睦月の初めなむよみておこせ給へる歌

ものゝふの八十のともものを引き連れて今日ぞ大城（おほき）につどひぬるかな

みかどべの松のしめなは引き延へて春に來にけりあづまくにはら

おなじ君のはじめてしり給へる國に下り給ふ時其のたらちねの君のよみ
て馬のはなむけし給へる歌

民草は父とおもひて待つと聞くわが子とおもへいましたみくさ

おなじ君身まかり給ひし時よみ給へる歌其の御もと人より傳へぬ

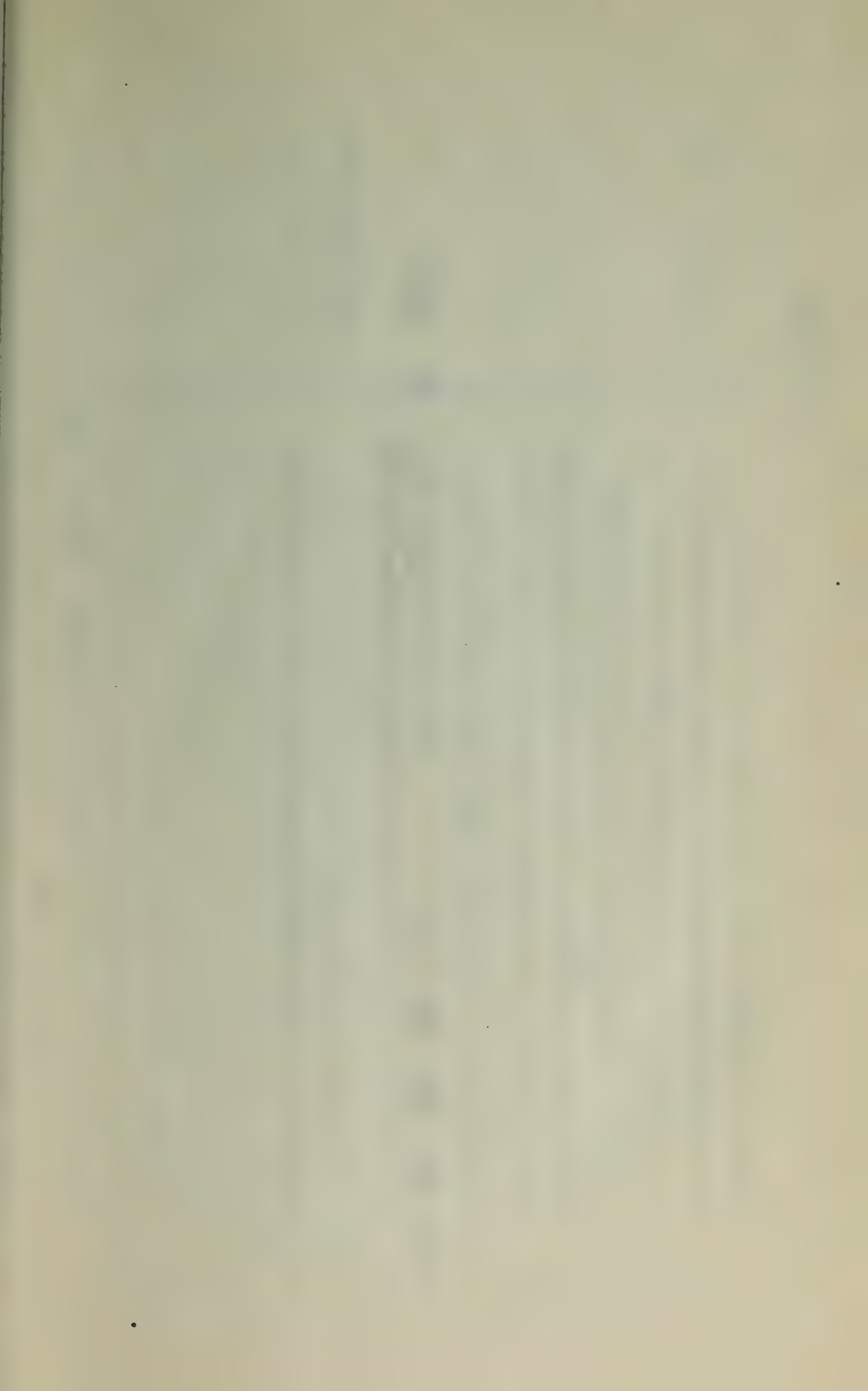
ますらわれかくもめでたき御代にあひて醫師（くすし）の業をつくしつるかも

○御もと人　侍臣。おそば。

佐保川　終

散のこり

弓屋倭文子

○春こしも　しもは强めの助詞。
○さだの庭　奉行所。裁判。
○まで來て　詣で來て。參り來て
○田居　田の面。居は添辭。
○氷とくらむ　判決を掛く。
○さほ姫　さほひめ、春の神。佐保は奈良の都の東にある地。東は春に配する義より云ふ。
○肖えまさらなむ　あやかつて上手になりたい。
○さけなくに　さけぬのに。なくはぬの延言。

散のこり

いつばかりの春の初めなりけむ

雪深き谷のふるすの鶯はまだ春としも知らずや有るらむ

常陸なる人さだの庭に訴へ申すべき事ありてこぞよりこゝにまで來てあるが年かへらばよろしう定めらるべしやと侍るといふなれば春立ちてのやがて訪らふとてつらゝのかゝりたるすゝきに結びてやりつ

春風は吹き初めにけり筑波嶺のしづくの田居(たゐ)や氷とくらむ

年の初めにもの縫ひて神に奉るつゝみにぬひたる

さほ姫の霞の衣春をへてたちぬふわざも肖(あ)えまさらなむ

いつにかありけむをみなともだちの花うぐひすの無き處には春もいたづらならむやなどよしなしごといふに

花の色に心もそめぬうなゐ兒の昔よりこそ春は待たれし

む月のなかばばかり猶さゆるに山里にて

いづこよりたちかへりこし春ならむ岩まの波はまだとけなくに

ふるさとの別れてふ事を人もよむを

とぶ火野の野守はすまず成りぬれど春を告ぐるは若菜なりけり

とやまの君のおまへよりつくしの府の大がみに奉り給ふとて二くさの題たうべたるに梅の花軒端にかをるてふ心を

玉だれのをすの外ちかき梅の花いとしもふれぬ袖にかをれる

松とし經たる

幾代々を遠のみかどにふりぬらむ老木の松の色もかはらで

同じ外山のとのに侍りけるとき鶯を

梅の花にほへる日より鶯はもゝよろこびの初音をぞ鳴く

いかなりける時にか

雪ふかき垣ほの梅に鶯の聲きく時ぞにほひまされる

青柳の色やゝ染むるをりしもぞいとによるてふ鶯のなく

屏風に河べに柳たてり人ゆく

われのみや見つゝ過ぎなむ打ちのぼる佐保の河原の青柳の絲

春はことぐさのやうに吟(によ)ぶ

いつしかも行きて見てしがみよしのの吉野の山の花の盛りを

○とぶ火野　奈良朝の頃春日野の内にて烽火(トブヒ)をあげし所をいふ。古今春上に「春日野のとぶ火ののもり出でて見よいま幾かありて若菜摘みてむ」

○つくしの府の大がみ　太宰府神社。

○二くさの題　二種の題。

○たうべたるに　賜ひたるに。たうべは賜べの延音。

○玉だれの　枕詞。緒に冠する。

○をすの外　簾の外。をは接頭語。

○垣ほ　垣。

○佐保の河原　大和國佐保川。奈良市の西郊。

○ことぐさ　常の言ひぐさ。

○見てしが　見たいものだ。

○はとりの神　機を織る神。

○いさめぬ　禁止せぬ。

○かたを　繪を。

○山吹の影しの歌　「かはづなく神なび川に影見えて今か(ヤ)さくらむ山吹の花」(新古今二、春下)

○井手の里　山城國にある。

○衣がへ　季節に應じて衣を著更へることで、古は陰曆四月朔日と十月朔日とに行ふを例とした。

○衣手　袖。

櫻のさかりに友だちとともによめる

春のきる花の錦は天にますはとりの神やおり初めけむ

おなじ頃

いひしらぬ庭の櫻も有るものを野山をかけてなど思ふらむ

昔より神もいさめぬわざならし花にうかるゝ春の心は

山吹の咲きたる水のほとりに人のぞきたるかたを

山吹の影しうつれば神なびの淵も恐(かしこ)きものとやはみる

田舍へ行きて住み侍る人のもとへ文のはしに

山吹の花の盛りになりなめど井手の里人おとづれもせぬ

衣がへ

衣手のかへまをしさも忘られて今年も花の香をぞしめてき

卯の花

うの花の盛りになれば夕月の影をそれとも見わかざりけり

卯月の半ばばかりにやあるらむ外山のとのの木立おぼつかなう隈多き物からさすがに薄綠なる若葉の夜のけはひ面白う見渡さるゝに桂の追風のそこはかとなく匂ふも艶なる夜なり人は寝たるにや遣水の音のみこまや

かにさわめくが曹司の戸口些かあけながらなるに月はさし入りて猶まばゆからずひとりかたりしめやかに物語などしつゝ忍び音いかならむなど思ふほど馬道に衣の音なひ聞えてあはれをかしき宵かなまだしきほどの聲もえ堪へじやなど云ひてはざまより入り行くもののしばしありて

ねもやらで待つとはすれど郭公空にはえしも知らぬなるべし

と笑はしていはせていにけり誰ならむかくてのみ夜をふかすをもどかしと思ふなるべしかげも見えねば答へすべきにもえあらでひとりごとに

おのづから問ひもこそ來れほとゝぎす忍ぶるほどをあさるものかは

といふも立ちぎきする人やあらむ

扇に森の木深うて郭公鳥の空になくかたかきたりけるをよめといふによみつ此のぬし老いたる翁なりければ物しとおもひけむ後にこそさも思ひなされつれ

近江なる老蘇の森の郭公ふるころにのみ鳴きわたりけり

みな月の初めつかに郭公のたゞ一聲ぞ鳴きて行くをききて

一さかり過ぐれば秋にあふことを人こそえしも思ひ定めね

はちすを

○忍び音　ほとゝぎすの初音。

○あさるものかは　探索しない。

○物し　氣ざはり。

○思ひ定めね　ね、はずの已然形

玉と思ふ露はくだけし蓮葉に又こそけさはあざむかれけれ

六月船にて音樂するを

川波の音の涼しく聞えしは秋風をしも遊ぶなりけり

屛風に六月神の社の木陰に人たてり

夏の日のあつたの杜といふなれど木陰れて吹く風は有りけり

のちのみな月に秋たちける日

とこなつと思ひし花のませの内も涼しさごとに露ぞおきける

障子にみそぎするところ

たつたこえ御津の濱べに身そぎしてなにはの事のうさも殘らず

いかなる時にか

秋こそは立ちて來ぬらめ波風をなべてなごしの祓へするころ

田居のはつ秋の心を人のよます

いとはやも岡べの早稻田(わさだ)秋立ちてひたの音さへほに出でにけり

七日のよひ

たなばたの逢ふてふことも語らはじさがなのわざと空にもぞしる

又ある年の秋

○玉と思ふの歌　「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」(古今三、夏)

○ませ　ませ垣、竹木にて作った低く目荒き垣。

○みそぎ　河原に出で水にて身を洗ひ淸めること。

○御津の濱べ　攝津難波にある。大伴の津。今大阪市島之内道頓堀の邊。

○なにはの事　萬事に難波をかく

○なごしの祓へ　名越祓、六月晦日諸社にて行はるゝ神事。夏祓。水無月祓。

○ひたのおと　鳴子の音。

○たなばたの逢ふてふ云々　七月七日夜牽牛、織女の二星が天之川を渡って相會ふといふ故事。

○さがなのわざ　さがなはさがなしの語根、邪のわざ。

秋くれば露のかゝらぬ袖もなしたなばたつめに何を貸さまし

たなばたの明くる夜をしむ頃よりぞ草葉の露もおきまさりける

をみなへし

秋ごとにおもがはりせぬをみなへし幾世の人をあだに見つらむ

萩

ことさらに衣はすらじま萩原分けゆくからににほへるものを

秋の歌とて

秋の野はあはれなりけり夕風にを花みだれてちれる白露

月みればおふけなくしも成りぬかな知らぬ千里も思ひやられて

は月のとをまりよかの夜さり

世にしらず月夜よしとは思へども明日の夕を待たずしもなし

もちの夜によめる

おもなくも照らせる月の光かな中なる人やいかゞ見るらむ

ある人東にまうで來て八月十五夜の心をよめるによめと侍ればといふ男にかはりて

ぬば玉の黑かみ山はこえ來れど今夜の月ぞさやかなりける

○たなばたつめ　棚機津女、織女星、初秋の頃天の川邊に現はれる星。

○衣はすらじ　衣に草葉を摺りつけて模様をつけることをせぬ。

○ま萩原　まは接頭語。

○おふけなく　身に不相應なこと

○知らぬ云々　「三五夜中新月色。二千里外故人心。」（白氏文集）

○さをまりよか　十四日。

○おもなくも　恥かしくも。

○黑かみ山　男體山の異名。

身につけたる様をもまだしられぬを男にしもかはれらむよ猶手ならひにとてなむ

月あかき夜ひぶねにて

月影にのれる心のまゝならばいづこのうらやとまりならまし

秋の旅の心を友だちとともに

はりまがた明石の浦の月も見つ旅をうきものと何思ひけむ

ある時よめる

袖の上におぼえずおつる涙にもすゞろに月はやどりぬるかな

秋の興てふことを人のよませたる

秋はぎの花づまにほふわが宿を知らでや鹿の聲も聞えぬ

かりがね

岡のべの松風寒き夕ぐれを過さで落つる初かりの聲

風はやみ浮きたつ雲に誘はれて鴈はやどりもせでや來つらむ

秋のあはれと思ふ心をよまむとて人もよむに

秋はたゞ野べのを花のほの〴〵と見ゆる夕のさをしかの聲

山ざとの色こき稻にまじりつゝをじか鳴くなり秋の夕ぐれ

○ひぶね　檜の木にて作れる船。

○花づま　萩の異名。

友だちのもとなる菊の花を人のがり折りてやれりけると聞きていひつかはしける

行きてみむまがきの花と思ひしはよそに聞くべき名にこそ有りけれ

かへし

うつろへる花ぞと聞くがうれたさに思ふ人には見せむともせず

ひともとぎく

思ひわび友と聞くべき蟲のねもうらがれ行くか淺ぢふの宿

九月十三夜

今宵とてめづるほどなく更けにけり長月の名やいかゞ有るらむ

山ざとにて

山里のもみぢの色を見ぬ人は秋に心を染めずや有るらむ

又こと秋に

かた山のつたはふ道をわけ來れば巖も秋に成りにけるかな

野の草かれなむとするてふ題を

萩が枝に待ちつる風の秋ふけて露もおきあへぬ宮ぎのの原

かた山ざとに親しき人の住みけるを問うて十月ばかりなり

○うれたさ　憂れたさ。

○思ひわび友と聞く　ひともとぎくを隱す。

○うつろひざかり　色香の盛り。

○かれふ　草の枯れたる地。

○むすぼほれ　結ぼる。かたまる
○招きもあへぬ　招かうとしても
招き得られぬ。露にむすぼゝれた
袖の故に、又枯れたすすき故に。

○思草　女郎花の異名。君を思ふ
心に掛く。

寂しとはこれを云ふらむ木の葉ふり月影すめるよはの山風
柴の庵に夜はのしぐれの音聞きてぬらせる袖はいつか乾かむ

菊のうつろひざかりなる頃たはれごとどもをいひて

時過ぐることをうき世ときくものをなどふりがたく匂ふなるらむ

冬の草てふことを

荻原や庭のかれふに風さえて秋にも聞かぬ聲のみぞする

枯れたる薄にさして人のがりやる

君をまつゆふべの霜にむすぼほれ招きもあへぬ袖を見せばや

かへし　同じ薄にさしてあり

秋過ぎて心かれ行く花すゝき招かぬやどは誰か訪ふべき

立ちかへりこと草のまだ枯れぬにさしかへて

霜がれの野べとはいへど思草を花がもとに有りとしらずや

又かへし

かれ〴〵のを花が袖はかくすともたのまむものか霜の下草

雪ふる日あまたよみたりける中に

白雪のふりとしふれば常盤なる木々こそあらず埋もれにけれ

松杉もひとつに埋む雪ながらもとの姿は猶ぞ見えける

女ともだちの許にいひやりける

たをやめのわが身とふべきものならで雪には人のなど待たるらむ

かへし

もろともに問ふべきことの難ければ心のゆきと名づけてぞふる

しばらく有りてかなたより

よしさらば雪の山をも作らまし外の消えなむ後にとふやと

かへし

やどごとに雪の山のみ高かるをいづれをさきに消えむとかしる

又こゝよりいへり

わがやどは不二のみゆきと積りにき消えぬをとはむ心定めよ

といへるにくれ過ぎにければにや答へはなかりしさて明くる朝ぞかへしとて侍りつるを忘れて書きも止めざるなり

としの終るほどに親しきどち集ひて物がたりし侍るに

思ふどち語らふほどに暮れて行く年はふるともよはひ伸びてむ

いづれの年の暮なりけむ

○はじめてあふ　これ賜ひたる古き題。
○たうべたるを　賜ひたるを。
○おもなさ　恥かしき。

いたづらに過ぐるも知らで暮れにけりことしは年の餘りだにあれ

古き題にてよめとて賀茂の主のたうべたるを心も得ず　はじめてあふ

はかなくて明けはあけなむ美しきことをば後も盡しこそせめ

あした

ねぬる夜は夢か現かおもほえでおもなさのみぞ今朝はことなる

相思ふ

かよふべき身にしもあらばさよ更けてしぐるゝ道に君はぬらさじ

相思はず

いでやたゞ扠も思はぬ世の中はうるはしびてをやまむとぞ思ふ

一夜へだてたる

一夜ふといへばた易し昨日今日おぼつかなさの數をやは知る

二夜へだてたる

末いかに塵や重ねむ手枕の新しきほどにふた夜こぬ君

人を待つ

思ふなる心に數はなきものを猶こそ待ため三年過ぐとも

待たず

こじといはば來む夜もありと待たましをこむと賴めてこしやいつなる

人しれぬ

よひ〳〵に淚はゆるす折も有るをやるかたなきぞ心なりける

人にしらる

三輪の山しかも霞はかくせども花は名にこそあはらはれにけれ

ふみたがへ

いせじまや磯のうへゆく浮波は寄せこそまがへよその玉づさ

たのまず

なびくかた定めぬものを青柳のいとしも人は思ひたのめじ

わする

なにはがた御津のうらわの忘れ貝君ひろはむと思ひかけきや

わすれず

忘れずよ花ずり衣露分けてうつるといふもいにし昔を

人を祝ふにかづらのかゝれる松にさして

松が枝に契りをかくるさねかづら千代ともちよを榮えこそせめ

ことぶくべきこと侍りて人のがり行きたりけるにかたへなる屛風に

○淚はゆるす　淚は出ないをり。
○三輪の山　大和國磯城郡。初瀨山の西。
○いとしも　青柳の絲に副詞のいとを掛く。
○たのめじ　たのまれじ。
○御津のうらわ　御津の濱に同じ攝津國難波にある。大伴の鄕。
○忘れ貝　瀨戶內海に多く產する一種の貝。忘るに掛く。
○花ずり衣　花摺りにしたる衣。
○さねかづら　木蘭科植物。かくるの「くる」と緣語。

○かた 繪。

○みつの峯 山城國稲荷山の高頂をいふ。

○うき事に云々 上の句はいかにと問ふ爲の序詞。

○ゆほびか ゆたかにひろ〲としたるさま。

○いそな 磯に生ふる草にて食用とすべきものの稱。

○道ゆきぶりの心やり 道中の氣はらし。

山川の堰にもみぢいと多く散りかゝれるかた有るをよめといへば

せきつれば秋の常にやなりぬらむ瀬々のもみぢば絶ゆる日もなし

ある人の賀の屏風に田刈るところ

よろづ代の秋の山田にかる稲の數こそ積まめ君のよはひは

稲荷詣でしたるかたを

ひとすぢに我がねぎごとの深ければみつの峯をも今日ぞ越えける

心うき事侍る頃ある人のもとへ

うき事にあふみの海のいかだこぎやよ如何にとも問ふ人のなき

相摸國の江の島にまうづとてつとめて立ち出でてけりゆほびかなる海のつらを見つゝ行くほどよにおぼえぬ心地す

思ふどち浦よりをちの浦づたひ玉もひろはむ沖にたれ波

今少し浦づたひせましかばいそなも摘みてむといふ人あればこは久しぶりなめりとて笑ふもありとてもかくても道ゆきぶりの心やりにこそ夕しほみつる頃なむ江の島のわたりに到りぬしほの行きあひの所波いと白う立てり

わたつみの引きわたしぬる白布は浦のあまこそかづくなるらめ

といひてそを渡るほどいと恐ろしかりきさてさるべき宿りもとめて侍れど磯ぶりの音に枕ひゞけばねむかたもなしとて人々起きゐてよもすがら詣づる人の江を渡るをおばしまによりて見るこゝは潮がれにはいと淺かりけり

潮干潟袖つく波を渡りつゝ月をいざなふ秋の旅人

などいひつゝ辛うじて明けぬおまへにまゐりてまかる道にいと〳〵小さくてらうたきかにのゐたるをふと取りたりけるにこゝにしも蟹を得るはよきさがぞといひ傳ふめると人のいふを喜びて

神のます浦のあしがに足たゆくはこぶあゆみのしるしをぞ得し

此の大神にねぎまつる事ありて七たびなむ詣でむとするをこたびは四たびにぞある

○磯ぶり　岸打つ波。

○潮がれ　干潮。

○おまへにまゐりて　辨財天に參詣して。

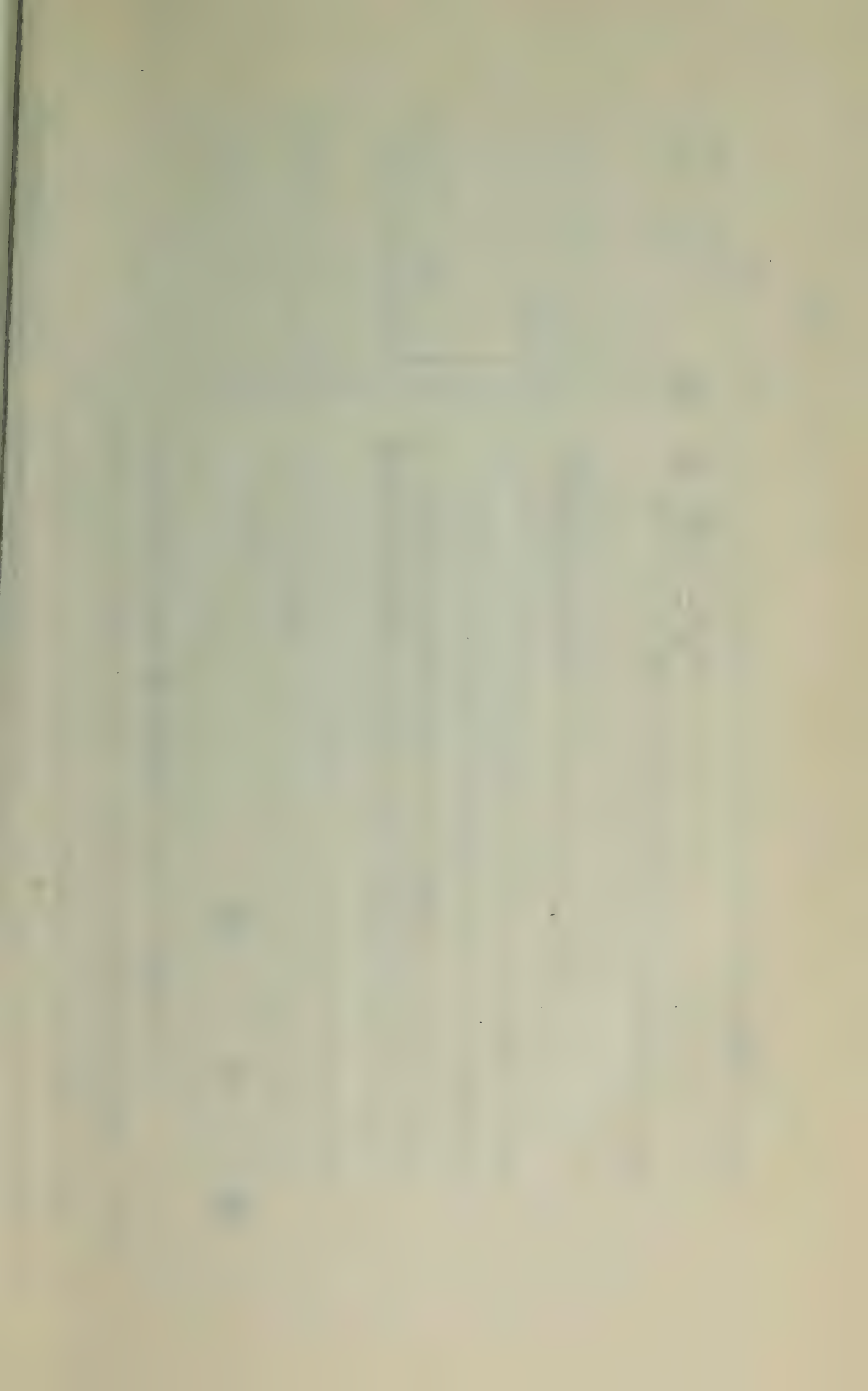
○さが　きざし。前徴。

○あしがに　葦蟹、蟹の一種。

あしびきの山ぐち云々　行末は大成する素質が際だつてあつたこ。

若くまだしきほどのわざぞとはいへど、心はいたりぬるもはたあれば、あしびきの山ぐちしるかりけるをと、あが賀茂のうしの悔い惜しまるれば、おのれらあづかりて拾ひたるなり。いでやことなる色なりしも有りつらむを、いづちいにけむ、嵐の後のさ枝にのこれることの葉ぞこれ。

橘　常　樹

散のこり　終

筑波子家集

土岐茂子

○古歌　「つくは山葉山繁山しげきをぞたがこもかよふしたにかよへ我が妻はしたに」（風俗常陸歌）

○點あはせ　和歌などを評するに佳きものに點をかくることゝ。合點。

筑波子又しげい子ともいへりき。筑波山は山茂山といへる古歌の詞によりて通はしおほせたる名なるべし。進藤正幹ぬしの養ひ子にて土岐頼意ぬしの妻なり。縣居の翁に物學びて歌よむわざをよくせり。限りなく來れども同じとよめる初春の歌に評せられて、天暦の頃の女房の口つきとおぼゆなど翁もほめきこえられたりけり。こゝにおのれ近き頃此の刀自の歌の一卷見出でたるが、こは皆翁の點あはせられたる限りをえりて、自らの筆して書きおけるになむありける。珍らしくおぼえて一わたり見およぼすに、年久しくかたみの底におしいれたるまゝと見えて、字ども蟲ばみ紙などすゝけにたれば、所所よみとりがたきも少なからぬを、思ひよるまゝに一つ二つかき淸めてかく寫しをへぬるを、やがて板にゑらせたるなり。いでや此の刀自の名にしおはば、繁き言の葉かずつもりたりけむを、筑波ねおろしいかさまにさそひいにてか、このもかのもにちりぼひうせけむ。猶朽ち殘れるもあらば、すぎ〳〵に拾ひあつめぬべしかし。今かきあつめし限りは短歌もゝといひて餘れる數六十ぢまり八うた、長歌二うた、詞は唯一つのみなむ。

文化九年四月　　　　清水濱臣

筑波子家集

土岐筑波子

春部

年の内に春たちける日

あら玉の年のこなたに春くれば雪もちりつゝ梅もさきけり

冬深き水もぬるみてうすらひのとくる心に春ぞくまるゝ

しはす閏なりける年の暮に春たちけるに雨のふりければ

一年は猶のこれどもふる雨のうるふたよりに春やきつらむ

むつき

限りなく來れども同じ春なればあかぬ心もかはらざりけり

何となく心ぞ春になりにける霞みもあへぬ空を見つゝも

花といふ花のさくべき春なれば匂はぬ程もめづらしきかな

うら／＼と春しきぬれば鶯の聲もまたでぞ聞きそめにける

○うすらひ　薄き氷。

○限りなく來れども　年々來るけれども。

足引の山べにおふるまさきづらくれども春はつきせざりけり

葛飾の野邊の霞に立ちまじり若菜つむべき春はきにけり

見渡せば霞のころもよそひつゝ今朝珍らしき春はきにけり

うら／＼と霞みそめけり此のねぬる朝けの空に春やたつらむ

霞たち梅のかをりもまさりゆくむ月の空ぞ嬉しかりける

さほ姫の手染の絲の打ちはへてくれどもつきぬ春にもあるかな

元日子日なりければ

む月たつ今日さへ松を引きつれば心ゆくべき春にぞ有りける

殘雪を

花もやゝにほはむと思ふ山里におぼつかなくも殘る雪かな

わかな

春日野につむや若菜は一とせの心ずさびのはじめなりけり

しる知らぬ共につめども春の野におふる若菜は盡きせざりけり

人のもとへ若菜やるとて

つめど猶つきせぬものは野べにおふる若菜と君が齢なりけり

梅をみて

○まさきづら　まさきのかづら。

○松を引き　古、正月初子の日に野邊に出て小松を引きて千代を祝ふ。

○つむや若菜云々　正月若菜を摘みて食料とし邪氣を拂ふ。後専ら正月七日の行事となる。

春たちてにほへる花の顔見れば我さへ共にほゝゑまれけり

梅を見る翁かけるおくに

もろ共に花にむつるゝ鶯は思ふどちとぞいふべかりける

鶯

けさよりはつぎてとはなむ我が宿のあさしぬ原にきなく鶯

よの中のうきもつらきも鶯の聲をし聞けば忘られにけり

歌合に梅の花のちりすぎたる後に鶯のなくを聞きて

山里は人めかれ行く此のごろの春をさへ訪ふうぐひすの聲

きさらぎ

きさらぎの空にしなれば一年のかくて有れなと思ほゆるかな

かすが野の霞もいまだ分けなくに春は半ばになりにけらしも

花を見て

春霞たちそめしよりいつしかと空にまたれし花もさきけり

花のころ山路をすぐとて

なほざりに打ち過ぎぬべきかげもなく匂ひあらそふ山櫻かな

家の花さかりなる頃

〇人めかれゆく　人目離れゆく。人から見られなくなる。

○いたづかで　つかれないで。
○たつの都　龍宮。
○ねぎごと　願ひごと。

とはれなばやさしかるべき宿なれど花し匂へば人ぞ待たるゝ

山里へ花見に行きて

山は皆花のすみかと成りはててもと見し庵ぞたどられにける

櫻山吹などの錦のやうなる枝どもの清らなる池の底にうつりぬるはたゞちにむかへるよりもこよなうをかしうて

わたつみのかしこき浪もいたづかでたつの都の春を見るかな

石清水りんじの祭

花をしも見つゝ越ゆれば男山よにねぎごともあらぬ今日かな

三月松に藤のかゝれる所

よと共にかはらぬ松の心にはあやなく浪のこゆるとや見む

ふぢを

立ちかへりみれども岸の藤浪はよせくるたびに袖ぞ濡らさぬ

夏部

おそざくら

などてかく春にもあはで山陰に木隠れてのみ獨り咲くらむ

のこりの櫻

心して風も吹かなむ春だにもさそはで過ぎしみ山ざくらぞ

ほとゝぎす

五月雨のながめまされる夕ぐれにうたても鳴くか山時鳥

卯の花の咲き初めしよりほとゝぎす契らぬものの待たれこそすれ

ほとゝぎす鳴くやさ月の橘の花ちる頃のあかずもあるかな

さつきの頃しも鶯の音のさらがへりてめづらしくおぼゆるに時鳥のおのが折しりがほに鳴きわたるをききて

鶯にこゑうちそへて春夏を語らひかはすほとゝぎすかな

さつき五日の日おもひにこもりて

墨染の闇にこもれる我が宿はあやめも知らぬ音ぞなかれける

菅原ぬしの家にさ月六日の日人々と共にうたげして

諸ともにあそぶなりけり物のねに聲うちそふる山ほとゝぎす

村田ぬしのなり所に人々と共にまかりて

思ふ事なくしてくらす今日のみは郭公さへ待たれざらなむ

五月道ゆく人郭公をきく

○吹かなむ　なむは願望の助詞。

○おもひ　喪中。

○なり所　別邸。

おくれずもゆかましものを郭公いづちの空に鳴きてすぎけむ

ゆふがほ

中垣のあらはなりしも夏くれば這ひもてかくす夕がほの花

さゆり

あつさには亂れながらもえならずよ匂ふさゆりの花の姿は

夕顔の苗を人のがりやるとて

夕がほの花見る時につゆ深きあさぢが庭も思ひいでなむ

ほたる

夏のよの螢や何ぞ明けゆかば露よりさきに消えむとすらむ

浦風に螢みだるゝ蘆の屋の里は夜こそとふべかりけれ

六月海のほとりにすゞみする所

みわたせば涼しかりけり浦風にゆくへをまかす海士の釣舟

風そよぐ浦のあしべの涼しさにいかでか浪の立ちかへるらむ

みなづき

風をのみしたしき友と賴みつゝあやなく暮す六月の空

わくらばに涼しき風も通はなむさばかり遠き秋ならなくに

〇えならずよ　いふにいはれず。

〇わくらばに　たまさかに。

秋部

秋立ちける日おもひにこもりて

よもすがらいとゞ物をや思はまし蟲のね侘ぶる秋はきにけり

歎きつゝくらせるものをもの思ふ秋さへ今日は立ちにけるかな

七日の夜

天の河渡りわたらず夜もすがら覺束なくぞ眺められける

あまの河かはせ涼しき夕月もよそにみつゝやこぎ渡るらむ

逢瀬なき中だにあるを天の川年のわたりとかこたざらなむ

限りなき天つみ空の棚機の中さへ名にはたちにけるかな

あした

立ちかへりかたみに物や思ふらむきのふわたりし天の川なみ

秋風

吾が背子がとき洗ひ衣も縫はなくに荻の葉そよぎ秋風の吹く

秋風はしかなく野邊の萩が花ちりゆく頃ぞ身にはしみける

むし

○年のわたりと云々　一年一度の逢瀬とかこたずあれよ。

○かたみに　互に。

○とき洗ひ衣　解いて洗濯した衣

○うひなる　初なる。
○秋の最中の月　八月十五夜の月

秋の夜は寐られざりけりあはれともうしとも蟲の聲を聞きつゝ

秋の野にあそびしつとめて人のもとへ花どもおくるとて

ひとりみむ千くさの花をあたらしみ心なげにも數多手折りつ

八月十五夜

端居して今宵の月の影みれば面なきまでぞ照りわたりける

一とせに一夜のみ見る月なればひたすらにこそ向はれにけれ

照りわたる月をしみれば心さへいたりいたらぬ海山もなし

秋毎におもなれにける月といへどいつもうひなる心地こそすれ

秋の夜の月にぞ物はおもほゆるいたくも空の晴れずあらなむ

秋の最中の月よもすがらいたう曇りければ

見る人と月との中を隔てつゝ心なやます雲にも有るかな

いかなる時にかありけむ月を見て

ともすれば月みる空の曇りつゝおぼつかなくもぬるゝ袖かな

はぎ

何となく鹿の音さへぞおもほゆる籬の萩の花のさかりは

秋夜

○音すなり　なりは詠歎の助動詞

○まさきづら　まさきのかづら。

此のごろのよるはきぬたの音すなり鴈の聲はた打ちそはりつゝ

鴈

ながめつゝすゞろに物を思ふかな鴈鳴きわたる夕ぐれの空

夕ぐれの霧のまよひに鳴く鴈はあやなく誰をとひ渡るらむ

衣うつ

露霜のおくらむものをあさぢ原あかつきかけて衣うつ聲

秋の末つかた友だちつどひて紅葉の宴すときくにゆかむ事のえまかせぬをかこちて

いたづらに袖のみぬるゝ時雨かな山邊はさこそ紅葉しつらめ

まさきのかづらのもみぢしけるを見て

ともすれば下紅葉するまさきづら秋なきものの秋ぞ見せける

冬部

冬の始めの歌とて

しぐれつゝ淺ぢ色づく鳰鳥の葛飾野べに冬はきにけり

氷の結びはじめたるあした

ひも鏡結び初めぬる今朝よりは朝いせでこそ見るべかりけれ

紅葉殘れり

もみぢ葉はともしくなれど神無月しぐるゝ頃ぞ見るべかりける

神無月

都には衣更へする神無月やまざと人や冬ごもるらむ

あらし

筑波ねの木の葉みながら吹きみだりかしこきばかりたつ嵐かな

紅葉おつ

もみぢ散るふもとの里の山がつは唐錦をぞこゝらかづける

あかなくにもみぢ葉拾ふ木の本はいとふものから風ぞ待たるゝ

時雨

今こそはふり來にけれと思ふまにやがて時雨の音ぞ絶えぬる

冬人にわかる

別れ路の空にうち散る白雪の心亂れてゆくへ知らずも

鴛鴦

難波がた蘆間の牀も霜がれてぬるよなげなる鴛鴦の聲かな

○ひも鏡　氷面鏡。氷の面の鏡に似たところからその異名とした。○朝い　朝寢。

○こゝらかづける　許多被いてゐる。

火をけを手まさぐりにして

山がつの歎きこりにし炭なれば今も思ひぞもえ渡りける

埋火

とばかりも立ち離るれば堪へやらでやがて寄りそふ埋火のもと

雪

春ならであらじものとは思へども空に花こそ散りまがひけれ

散り亂るみ雪は冬の常ながら思ひふるさむものとしもなし

戀部

しらぬ人

ほのかにも見し人ならば思ひねに慰む夢もあらましものを

年へていふ

谷川の岩ねの杣木いつまでか浮きてはかなきよをば過ぐべき

始めてあへる

思ひねの夢のすさびにならひきて現ともなき今宵なりけり

あした

○山がつの歌　歎きに、木、思ひに、火を含む。

○とばかりも　暫時も。

○思ひねの歌　人を戀ひつゝ寢ては夢に人の面影を見ることにふけつて、今宵などはもう夢も現も區別がつかないやうになつてしまつた。

うつり香の殘るばかりは夢ならで夢かとたどるよはの面影

相おもふ

年ふとも亂るゝ事のなくもがなうらなく馴れし君が衣に

うちきてあへる

笹分けし裳裾の露はさしながら待つにひぢぬる袖も見よかし

人をまつ

誰が里の花たちばなかまさるらむ時鳥だにとはぬよひかな

おもひいづ

故鄕のつゝ井の水にみし影のこひしきごとに袖ぞぬれける

契れる夜しも人めしげくてえあはれぬに

恨むらむ人の心ぞおもほゆる我が身にそはる憂きにつけても

思ひつゝいもねぬ曉に

つらかりし鐘も今こそ聞ゆなれ逢ひ見しよはを偲びあかせば

寐覺の戀

うたゝねに見えつる夢ははかなくてつれなく殘る人の面影

祈る戀

○うらなく　隔てなく。

○ひぢぬる　ぬれる。ひたる。

○かれ〲なる　うと〳〵しき。

○ことかたに　他の女に。

わびぬれば神のみ前にもらすなり人しれずのみ思ふ心も

雨のふる日人をかへして

ひとりのみぬるとや雨をかこつらむ殘れる袖も露けきものを

かれ〲なる男のもとへ

ことかたに人の心のかよへばや夢路にさへも見えず成りゆく

まだきしぐれのと恨みつれば返し

思ひつゝぬる夜なければ通ひてし夢ぢも今は絶えやしぬらむ

いにしへの蘆やの里のうなゐ少女のはかなかりし事どもを題にて彼の三人になりてよめる　よばふ男よもすがら女の家の門にたちて

われならぬ人にもつらき心とは思ふものから猶ぞ恨むる

又ひとりの男

歎くともこふとも知らで人はしもいかなる方の夢か見るらむ

身をなげむとする時女

いづちとも思ひわかれぬ身の果てはうたかた浪をよるべにぞする

みまかりて後男

今は身のうき鳥とこそなりにけれ競はで共にみつべきものを

河の瀬にこゝら浮べる水鳥もおのがじゝこそ底は定むれ

女かへし

水鳥のうきねの牀を定めかね音をのみ鳴きしはてと知らなむ

雑部

天

よと共にみつゝくらせど様々に飽かぬは空の景色なりけり

雲

風をいたみすぎに過ぎ行く浮雲のかさなる果てやいづこなるらむ

都

のどかなる都の程ぞ知られぬる行きかふ人の袖のさまにも

鄙

とにかくにいとなきわざは多かれど心安きは鄙にぞ有りける

旅

我がたもとうたても露にぬるゝかな人やりならぬ草枕して

くゞつ

○いとなき　いとまなき。

○人やりならぬ　人の爲でなくて自ら進んで行く旅。

○くゞつ　舞妓又は遊女。

はかなくて夜な〳〵かはるかり枕共に旅寝と思ひやはせぬ

あき人

わたらひの心細さも知られけり絲うる賤の絶えずくるには

人のもとより濱ゆふおこせたりけるかへりごとに

よる浪の音にのみ聞くみくま野の浦の濱ゆふ今日みつるかな

家こぼちて新たにつくりかふるに年頃の名殘のみかは昔の事のいよ〳〵
遠くさへなりもてゆく心地して

家はみなあらずなりてもなき人の面影のみぞ立ちかへるべき

馴れにけるまきの柱し殘りせば忘るなとだに書きつけてまし

或人のもたる扇の繪に海邊に人やすらひて涼みをるかたかけるにこれに
歌一つとありければ心もえねど

ふくからに立ちよる浦の浪ならで涼しき風にさそはれてけり

あらじ我が身を

露のみはおきそはりつゝ葛の葉のうらみむ風よ音便(おとづれ)もなき

哀れとぞきく

終夜つがはぬをしの鳴きまどひうたかた浪の牀もさだめず

○わたらひ　なりはひ。

○みくま野　みは美稱。紀伊國熊野。

○濱ゆふ　濱菜、又濱おもと。

○つがはぬをし　つがひで無い鴛鴦。

たぐひあらじかし

橘の花ちる里にながめして暮せるよひに鳴くほとゝぎす

二月ばかり旅にいにし人をおもひやりて

よしといひし吉野の山の隈もおちず分けや見るらむあはれ此の頃

讃岐國へゆきてある人の許へ

松が浦の岸によるてふ白浪のまなくも人の立ちかへらなむ

よの子をおくる文のおくに

心をし君はたぐへてやりつれば思ひ殘せる海山もなし

人のうせぬと聞きて

あかずしも染めし紅葉をゆくりなくいづちか風の誘ひいにけむ

消息していはするやうはかなの世やいつも時雨はとさこそ打ちながめおはさうずらめと思ひまゐるにあへなくこぼるれば

里わかずしぐれやすらむ君と共にこゝにも袖はかわかざりけり

空にもしぐるれば

大かたの空にもあらであやにくに時雨や人の袖ぬらすらむ

いかさまにかと思ひやられて

○よしといひし　「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」（萬葉一、雜）

○ゆくりなく　思ひがけなく。

わたり川渡りはつやと思ふにもはかなく袖ぞひぢ増りける

あひしれりける人のみまかれるをり

とまる身も風まつ程の露の世と思ふものから人ぞかなしき

なきは數そふ世の中にあるが中にもかつら子の刀自はまさきづら長く頼みて思ひむつびつゝすぎにし祭の頃は必ずあふひの名をも契りつる物をいたづらにすぐいたるこそあいなうくやしけれ墨染にやつるゝ身にもあらぬすら闇にまどへる心地するを男あるじのなげかすらむほども思ひそへられてあさましうたてあれば

あま雲のかからむとしも思ひせばあくまで月の顔は見むもの

うちきらし降るやさ月の雨もよに山時鳥ひとりきくらむ

ものゝふの袂もいかに朽ちぬらむ雨も涙もさみだるゝ頃

いたう古りておもしろき松を物に植ゑて父君の朝夕かたへさらずすゑ置きていくよてふ名をさへおほせてこと木よりもめで給ひつるを今は只松のみ殘りければ

今はしも君に契りのたがへれば松も幾代のなげきとぞ見る

いとけなき子のうせし頃

○なきは數そふ　「あるはなくなきは數そふ世の中にあはれ何時まであらむとすらむ」（榮花、月の宴）
○まさきづら　まさきのかづら（眞析葛）に同じ。長くといはん爲の序。
○すぐいたる　過したる。いは音便。

結びつとみそむる程もあらなくにはかなく消えし草の上の露
なき魂のあるを戀しと思ひせば夢路にだにも立ち歸らなむ
いはけなくいかなるさまにたどりてか死出の山路を獨りこゆらむ
　をとこにおくれぬる頃
歎くとも戀ふとも知らでいかならむ方にのどけく君は住むらむ
みし夢のさめぬ程にし消えもせば今のうつゝに物は思はじ
　かくいふ程に雪のうち散れば
見る程もあらずなりぬる雪ならで消え殘るとも思ひけるかな
　人の六十の賀に
こゝら世をのどけく遊ぶ長濱のたづの上しも誰ならなくに
　橘の枝直ぬしの七十の賀の屛風に海に舟を浮べて月みる人あり沖の洲崎に松多くたてり
いくそ秋くまなき浪に照る月をかくて見るらむ沖津島もり
　人の八十の賀に松契多年といふ事を
いくそたび若がへりてか君もみむ友と緑の松にならひて
　杖の歌

○死出の山　死んで行く冥途にあるといふ山。
○橘の枝直ぬし　千蔭の父、眞淵の門人。家集東歌は本書に收めた。

○やま人　仙人。

○くだに　龍膽（りんだう）の異名

○しをに　紫苑（しをん）の異名。

○らに　蘭。

○なぎ　雨久花（みづあふひ）の異名。

いほへ山千重山深くもとめつゝきれるしもとはやま人の杖

若菜にそへて人をいはふ

萬代の春を今よりまつものは野べの若菜と君にぞ有りける

物名

かるかや

誘ひゆく風こそ絶えね梅の花いかにおほかる香やもたるらむ

くだに

片岡の水せく田には植ゑし稲のほに出づるまでかはづ鳴くなり

しをに

もみぢ葉の色競ふべくよそにしも散りしを庭に風ぞしきける

らに　すゝき

咲く花はこゝらにほへど朝まだき霧のまよひにみず過ぎにけり

なぎ　おもだか

いつのまにいはけなき子の生ひ立ちて今しも見れば面たがふらむ

長歌

みな月ばかり縣居の大人の高殿につどひてよめる長歌みじか歌

草の葉に　露も乾きて　木の本の　風もふかねば　殘りなく　をすをもまきて　とばりをも　かゝげてをれば　つゝましき　事もおぼえず　暑さには亂れてあるを　はしたなき　心地はすれど　思ふどち　いざなふまゝに　たをやめの　はしなきわざを　はしだての　高きに登り　語らひも　見さけもすれば　富士のねの　雪のよすがか　あはの海の　波やかくらむ　白妙の衣の袂　あきつはの　うすさおぼえて　かげろふの　夕さりくれば　夏知らぬ　月の霜おき　秋ならぬ　風もおとして　春秋の　好ましとする　折よりも　はかなくふくる　夏のよぞ　かげおもしろき　ものにはありける

世の中のなにはの事のおもひをも涼しき風や誘ひゆくらむ

秋のはじめつ方しづ子のなくなれるを悲しびて

わたつみに　くむとはなしに　ひを重ね　潮たれまさる　蜑衣　までほにだにも　逢ふ事の　かたき別れと　なりにける　玉のゆくへと　きくからにことぞともなき　空をのみ　眺めてふれば　雲まよひ　おちくる秋の　夕風

○をす　をは接頭語。簾。

○あきつはの　蜻蛉羽の、うすものなどにかけていふ。

○なにはの事　何事、萬事。

○しづ子　弓屋倭文子。作者と同じく縣門三才女の一人。寶曆二年歿、年二十。

○までほに　間遠に。

の　うたても萩に　音づれて　いとゞ心も　みだれぬる　露のみ繁き　淺ぢふに　誰をまつ蟲　かひなしと　思ふものから　何しかも　我もきほひて泣かるらむ　花の朝も　月の夜も　嬉しき事も　うきことも　あるにつけては　友垣の　隔てざりつる　なからひは　いかなるすぢか　玉かづら　面影にのみ　たちそひて　つきしもはてず　したひつゝ　ふるの中道　中々にうき數そはる　かなしさを　伊香保の沼の　いかさまに　いひしもやらば水のあわと　消えにし人を　わすられぬべき

ある世にもありのすさびは思ほえぬ人に別れむものとやはみし

ありてだに程をしふれば戀しきを又みるべくもなきぞ悲しき

君まさぬ歎きを誰にかこたまし憂きもつらきも共にとひしを

○つきしもはてず　盡き果てず、しもは強めの助詞。
○ふるの中道　布留の中にある道。布留は大和の石上にある地。中々にといはん序。「いそのかみふるの中道なか〳〵に見ずは戀しと思はましやは」（古今一四、戀四）
○伊香保の沼の　いかさまにといはん序。
○ありのすさびは云々　「ある時はありのすさびに語らはで戀しきものと別れてぞしる」（六帖五）

文部

東麿うしの祭を賀茂の翁の家にてし給ふをり

嶺の雲あがれる世の心詞をし、いさゝかも辨へしらざめるは、うつせみの世におひ出でぬるかひやはある。花紅葉のもとに遊び、月雪の宴など折にふれつゝ、はかなき事のついでにも、いひ出でむ事の拙かるべきは、人笑へにぞ

○東麿うし　荷田春滿。

○水鳥の　かもに冠する枕詞。
○萬の言の葉てふ書　萬葉集。
○からのもやまとのも云々　唐土大和の學問の道。
○在滿　荷田春滿の姪、その養子となる。田安侯に仕へ後眞淵を薦めて己に代らしめた。

ありなむ。いでや水鳥の賀茂の大人なむ、ち早ぶる神代の書よりはじめ、萬の言の葉てふ書など、いそのかみふりぬる事どもの限り、ときあきらめ給はずといふ事なかりし。折々うちいで給ふ歌は、古の人麿赤人といふにも、をさをさ劣るまじう、貫之躬恒などの身をかへ給ふにもやと、あやしきまでぞおぼえける。此の賀茂川の淸らなる流れに年頃心うつしつゝ、くみ見るとはすれど、深き淵の底の心まではえもはかりやらで、唯淺らかなる瀨をのみ、よと共に辿りぬるこそはかなう口をしきや。こゝに大人のすべての學び傳へうけ給ひける荷田の宿禰よ、身罷り給ひてより、今二十とせ餘り五年になむなりにたれば、いといかめしうかう〳〵しう、みたままつり奉れ給ふ。かかれば誰もおやのおやとし尊び思へば、人々も何くれとたむけ奉れ給ふ。千種の花の言の葉の、いとにほひやかなるが多かなる中に、刈萱の色なくみだれたるがさしまじりたらむは、いともつゝましけれど、露ばかりだに數まへ給はらむかしとてなむ。かの御魂はやうつせみとませし程、からのもやまとのも學びの道つくし給ひ、日のもとにありとある書ども、みしあきらめ給ひ、くだれる世に廢れたる古言をしも興じ給ひけり。其の道々をわかちつゝ、人人に傳へ給ふが中に、在滿の主へは、もはらおほやけのつかさ位のすぢをゆ

○あがた大人　賀茂眞淵大人。

○宿禰　荷田春麿。京都稻荷山の祠官であつた。

○みさご　雎鳩、猛禽類。

づり聞ぇ給ひ、わが大人へは、古ことの學びの道を教へ殘させ給ひけり。在滿のぬしも、わがもとに折々はとひわたり給ひつゝ、何くれと學びのゆゑよし人々に語り教へ給ひし事も有りしを、かたはらにさぶらひて聞きもしつれど、まだ幼なきほどの事なれば、片はしをだに聞きしる事もなかりき。幾程もあらで、此のぬしさへゆくりなくなき人の數に入り給ひしかば、今はたゞおのが教への君のみぞ、ひな鶴の千とせをかけて、のこりとゞまり給ひ、いやさかえにさかえ給ふを、宿禰のみたまも、さこそ天がけりつゝ、めでよろこび給ふらめ。今より後も、しづのをだまきくりかへしつゝ、ふることは萬代ふとも、うちはへてたゆる事なく、めぐみ給ひなむと、たのもしうなむ。

秋霧に道やまどはむかくばかり照らせる月のなからましかば

言の葉は昔を今になしぬれど過ぎにし君はかへらざりけり

みさごゐる磯の白浪たちかへり昔の人をしのぶころかな

筑波子家集終

松山集

塙保己一

松山集上

春

年内立春

年なみもまだ越えなくに春きぬと霞み初めぬる末の松山

春きぬと霞み初めけり水無瀬河のこる日數も有りて行く瀬も

立春

我がたのむ北野の森に引くしめの長き日影の春は來にけり

老いらくのわが身こす波立ち歸り今年もおなじ春は來にけり

みよしのの峯もはるかにかすめるや唐土(もろこし)かけて春は立つらむ

立春のこゝろを

月の入る西の國まで行く春や我が日の本をはじめなるらむ

初春梅

咲く梅の木の間ほのかに三日月の光も匂ふ軒の春風

早春

○水無瀬河　山城國山崎の近くを流るゝ淀川の支流。

梅かをり松の葉霞む長閑けさにはや里馴るゝ谷の鶯

早春川

小松引き若菜つまむと諸人の雪間もとむる春日野の原

河早春

よしの河春と岩間に音たてて氷も今朝は浪の初花

冰ゐしそゝもの小河打ち解けて根芹摘むべき春はきにけり

河ぞひの柳の絲はむすべども氷解け行くみつの春風

春生人意中

なべて世にかすめる春の長閑けさも人の心や初めなるらむ

風光處々生

筑波山峯の白雲かつ消えてしづくの田居も氷解けけり

瀧音知春

冰ゐし岩根も水の音羽山瀧つせよりや春はきぬらむ

雪解冰又釋

峯の雪岸の冰にとぢられし朽葉流るゝ春の山河

子日

○小松引き云々　古、正月子の日に野邊に出で小松を引きて千代を祝ふ。又若菜をつみて食料とし邪氣を拂ふ。(今七草の粥。)

○そゝも　そともの誤りか。

子の日して猶引き植ゑむ小松原見わたす千代の末もはるかに

野をひろみ生ふる小松の數々はいづれを千代と分きて引かまし

心のみ野邊にひかれて松の戸を猶出でやらぬ老ぞかひなき

霞初聳

時しらぬ山ともいはじふじの嶺の霞も今朝は空に聳えて

霞知春

なべてよにおほふ霞や大空の春より先に春を知るらむ

濱霞

氷ゐし汀も解けて春風にかすめる波のうち出での濱

霞中瀧

春風に岩波高き音ばかりかすみ殘せる峯の瀧つせ

よにひゞくかひこそなけれ春のきて水上霞む音なしの瀧

河霞

打ちかすむ水上遠くかへりみて下しもはてぬ春の河舟

鶯

鶯のこゝろ高くもたゞひとり野中の松の梢にぞなく

○子の日して　正月初子の日野邊に出で小松を引きて遊ぶ。

○音なしの瀧　紀伊國熊野本宮の近邊にある音なし川。

いと竹にもゝ囀りの名もしるくしらべあはする春の鶯

野鶯

いと近く誰か聞くらむ朝な〳〵かすめる野べの鶯のこゑ

竹間鶯

日影さすそともの竹にうつり來て鳴く音長閑に春の鶯

竹中鶯

ふしながら聞くも長閑けし窗近き竹をねぐらの鶯の聲

若菜

老いらくの身は七草の七十もちかき野べにや若菜摘ままし

澤若菜

日かげさす淺澤水の薄氷ひまもとめてや根ぜり摘むらむ

春雪

沫雪の風に亂るゝ梅が枝はまだみぬ花の散るかとぞ思ふ

谷春氷

谷風はなほ春寒み氷るていつか咲くべき浪の初花

梅

○ひまもとめて　氷の解けたあひまを見つけて。

咲くやこの言葉の花も代々かけて匂ひ殘れる難波津の春

見るふみも南の花の名にかけて紐とき初むる窗の梅が枝

梅の花誰がたくみより紅のかたへに雪の色をみすらむ

ふみこのむあるじがらにや窗近き梅の一木は色香そふらむ

梅初開

咲きそむるこの一花になべてよの春もしられて匂ふ梅が香

曉梅

雪晴れて月も有明の窗の内に驚くばかり匂ふ梅が香

わぎも子が袖やふれけむさし櫛の曉ふかく匂ふ梅が香

夕梅

鶯のねぐらもとむる羽風にも先づ匂ひくる軒の梅が香

夕闇は色こそ見えね咲く梅のありとやこゝに匂ふ春風

梅薫袖

いかばかり咲き滿ちぬらむ佐保姫の霞の袖にあまる梅が香

里梅

里の名はとはでもしるし餘所までも匂ふ梅津の木々の梢に

○咲くやこの歌　梅花の香と共に「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くや木の花」(仁德紀)の歌も人口に膾炙せられて居る。

○南の花　梅花をいふ。南枝先づ綻ぶといふよりかくいつたもの。

○梅津　山城國葛野郡。京都市の西桂川に近し。

故郷梅

植ゑ置きし人は軒端の梅の花誰がため匂ふ春のふるさと

紅梅

我妹子が顔の匂ひもそふばかりあか裳の色に咲ける梅が枝

紅梅遲

夕月の光と見しはかつ散りて朝日に匂ふ梅のくれなゐ

柳

我が門の五本柳今ははやともに老木の影ぞさびしき

打ちなびく姿のみかはすなほなる心もならへ風の青柳

柳露

ぬきとめし露もさながら玉すだれ軒端にかくる青柳の絲

水邊柳

たつた川春は柳のうつろひてから藍くゝる水のしら浪

鷺のゐる堤の柳吹くかたに身の毛もなびく春の川風

山家柳

淺緑山櫻戸によりかけて來る人や待つ青柳の絲

○我が門の五本柳　「我がかつの五本柳いつも〳〵おもがこひすな(ス)なりましつしも」(萬葉二十)

○くゝる　くゝり染めにすること

初午

稲荷山杉の青葉をかざしつゝかへり坂とやいそぐ諸人

里かぐら杉の木の間に聞ゆるや是れも稲荷の宮居なるらむ

稲荷山きねがつゞみの音ばかりかすみ残せるきさらぎの空

若草

稲風の宿りなるべき草葉とも見えぬ雪間の荻の下もえ

草色青々送馬蹄

打ちなびく末野の茅原ふむ駒の跡も緑に春風ぞ吹く

蕨

いはね踏みかさなる山の下蕨目にかけながら折りもとられず

かへるさに休む妻木の下蕨思ひもかけず手折りてぞこし

早蕨

ちりばかり萌ゆと見えしは紫の名におふ野邊の春の早蕨

春月

立ちならぶ花の梢はあらはれて柳にかすむ春の夜の月

明けやすきならひを春に恨みても猶こりずまの朧月夜や

○きね　神に仕ふる人。禰宜。

○紫の名に　紫野京都市の北郊。今大徳寺邊の舊名。

○こりずま　まは助字。前の失敗にもこりもせず。

春月幽

秋よりも心づくしの影なれや花の木の間にかすむ夜の月

雪ながら霞むとみしは山の端の櫻に曇る春の夜の月

浦春曙

霞立つ浦のみるめもしらむ夜に松かげ暗き波の曙

都春曙

木の間もる月の都も霞むよの花よりしらむ春の曙

おなじくば月をも見ばや名にしおふ花の都の春の曙

霞中春雨

そことなく霞む夕も沓の音にやがて雨しる庭の眞砂地

蜘のいに露かゝりてぞ霞む日の降るとはしるき軒の春雨

歸鴈

咲く花を己がこしぢの目うつしに雪と見つゝや歸るかりがね

歸鴈幽

峯越ゆる翅も花の雲間よりほのかに見えて歸る鴈がね

春駒

友さそふ聲は雲にもいるばかり霞む末野のひばり毛の駒

野外雉子

狩人のいる野のきゞす草若みかくろへかねて音にや鳴くらむ

若草のつまやこもれる武藏野の霞がくれに雉子鳴くなり

雲雀

緑そふ茅原の若葉打ちなびき雲雀立つ野に春風ぞ吹く

色そふる芝生の牀の白露をうしとや空に雲雀鳴くらむ

蝶

花園のさかり知られて舞ふ蝶の翅もかをる庭の春風

花

としく\に猶植ゑそへて山櫻こゝもよし野の春となさばや

待花

花かづら心にかけて今日いくか空しき空を峯の白雲

谷河の波の初花みてしより峯の梢にまたぬ日もなし

尋花

とぶ蝶をしるべとなして咲く花の木陰尋ねむ春の山路

○ひばり毛　鬣尾黒く脊に黒き筋ある馬の毛色。

○若草のつまやの歌　「武藏野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれり我もこもれり」（伊勢物語）

○谷河の波の初花　「谷風に解くる氷のひまごとに打ち出づる波や春の初花」（古今一、春上）

たづね入る花やま近きみよしのの岩のかけ道風かをるなり

櫻

つぎて咲く花はあれども春はたゞ櫻にかぎる色香なりけり

花未飽

花に飽く時もありやとよしの山分け入る袖に匂ふ春風

朝花

けふいくか馴れてもあかぬ花衣いかに染めます心なるらむ

おもひねの夢まさしくて見し花の朝いの牀にかをる春風

夕花

立田山梢は春もくれなゐの入日や花の色をそへけむ

月前花

あひにあひて月も盛りの芳野山花によごろを重ねてぞ見る

日照花

咲く花のうつろふ方や曇るらむ月も梢に有明のころ

近花

只一木砌の花になべてよの盛りうらやむ老ぞかひなき

○よごろ　夜頃。毎夜々々。

山花盛

葛城のよそめはおなじ白雲のかをるや花の盛りなるらむ

山路花

岩がくれ猶尋ねばや吹く風の目に見ぬ花も匂ふ山路は

峯上花

雲と見し遠山櫻咲きそひてかさなる峯に匂ふ春風

庭花

いやつぎに咲きつぐ宿の庭櫻盛り久しき色香とやみむ

鄰家花

中垣のこなたに花の枝たれて植ゑぬ我が身ぞあるじ顏なる

池邊花

池水のみぎはの櫻咲きしより散らでもよする花のさゞ波

水上花

吉野河岸根の櫻咲きそひて匂ひの淵や花にせくらむ

浦花

有明の月はうしろの山櫻浦波かけて花ぞ白める

〇いやつぎに　彌繼ぎに。引きつゞいて。

羇旅花

故里の梢いかにも旅ごろも袖にまちとる花の下露

花雲

山の端にめなれぬ雲や花ならむ松を残してかゝる一むら

匂はずば花ともいさや白雲の梢を埋むみ吉野の山

花浪

山河の底ひも見えず散る花にみなぎり落つる瀬々の白波

花やおそきと

此の春は花やおそきと初蕨つま木にそへて歸る山人

堅田侯の別莊にて花を見て

入日さすうす花櫻くれなゐの紅葉にまさる庭の夕ばえ

夕落花

歸るさの道吹き分けよ散る花の踏ままく惜しき春の夕風

落花滿庭

盛りには待たれし友も雪と降る花ゆゑいとふ庭の通ひ路

寄花神祇

○いさや　いさや知られぬの意を白雲にいひかく。

○つま木　折り取つた小枝の薪。

○花ゆゑいとふ云々　雪と散りしく花をふみあらされるのが惜しいから。

かげそふる白ゆふ花も匂ふらし名さへ櫻の宮の春風

野遊

打ちつれてつばなぬかまし老も今心を野邊のうなゐ少女に

つばなぬきすみれ摘むとや絲ゆふのみだれてあそぶ野べの諸人

尋桃花

仙人のすみかやそこと咲く桃の梢はるかに尋ねてぞ入る

春田

散る花を苗代水にせく程はうき業としも見えぬ千町田

里遠み摘み殘されしたびらこの花咲く小田はいつ返すらむ

春山田

山畷が種まく程や水越えて往きき絶えぬるあぜの細道

田家春

此のごろは門田のくわゐ拾ふとや袖つどひかへる里のうなゐ子

躑躅

誰がために白きもあまた植ゑまぜて砌のつゝじ色を分くらむ

歸るさはくれてもよしと岩躑躅こりしく山の花の光に

○つばな　ちがやの花。

○絲ゆふ　かげろふ。

○仙人の云々　桃源境。桃花源記の故事に出づ。

○たびらこ　植物、かはらけな。春七草の一。

○こりじく　一面に密集して花の咲くこと。

○草の名のはつかに　牡丹を二十日草といふ故草の名のといひその二十日に僅かを懸けた。

款冬

それながら手折りてみばや夕露に胡蝶も寐たる山吹の花

款冬露

行く春を花もしたふか山吹の枝たわむまで結ぶ夕露

我妹子が手折りにかゝる露までも衣の色に匂ふ山吹

菫

ひと夜寐し名殘あかずも朝露にぬれて菫の牀ぞ閒近き

眞萩原散りし草葉と見るまでに菫花咲く野べの春風

牡丹

草の名のはつかに見しも咲く花は白き赤きのませ狹(せは)きまで

藤

行く袖にはひまつはれる藤かづら誰引き過ぎむ松の下道

此の程はまだ初花の藤かづら盛りを夏にかけてこそ見め

咲きかゝる松は老木の名にも似ず若紫の春のふぢ浪

藤花久盛

花の色はおなじ汀の杜若うつろふ後もにほふ藤浪

春風

なべて世の花咲かぬ間に吹きはてよ櫻のこのめ春の山風

雲雀たつ芝生の若葉打ちなびき吹くほど見ゆる野べの春風

春晝

幾度か結びかへても暮れがたき晝ねの夢に春ぞ知らるゝ

春山

梅にとひ櫻に馴れて日數ふる我が身や春の花の山もり

春海

のどけしな干潟を遠みゐる田鶴の翅も霞む和歌の浦波

難波がた入江のあしの若葉より末も緑にかすむ海原

春鳥

子をおもふ心やおなじ空高くあがる雲雀も野べの雉子も

雨かすむ苗代小田の水口にみの毛しをれてたてる白鷺

春獸

埋火のあたり離れてはし近く日影長閑にねぶるうしねこ

春人事

○櫻のこのめ春の山風　櫻の木の芽はる春の山風。

○みの毛　鷺の頸の廻りに蓑のやうの狀をした羽毛。

○うしねこ　牛のやうに寢てゐる猫。

種おろす賤や知るらむ雨霞む田中の道のこゝろ細さは

暮春

こし方に春のかへらば東路の空にかすみの關やすゑまし

散る花の形見の雲もあらし山つれなき松に春ぞ暮れぬる

暮春雨

村雨の古巣にかへる鳥も今翅しをれて春やしたはむ

雨そゝぐ櫻が枝のうす綠ま近き夏の色も見えけり

暮春藤

匂へなほ花のしなひの長き日もひと日二日の春のふぢ波

暮春鐘

散る花にいとひし鐘のけふは又春をもさそふ夕暮の聲

別れ路に誰うらむらむ行く春も今日ばかりなる曉の鐘

夏

首夏

しげりそふ若葉涼しく吹く風も目にこそ見えね夏は來にけり

○種おろす　種を蒔く。

○花のしなひ　花の垂れ下ること

はしのもとに咲く紅の花にこそいつしか夏の色は見えけれ

更衣

いつしかと今朝はかふらむ夏衣もとより薄き人の心に

首夏更衣

夏きぬと心かろくもぬぎかへて世の有樣を袖にみすらし

新樹

今も猶たつことやすき木陰かは櫻の若葉風かをり來て

山新樹

見し春の花のしをりはそれながら茂る若葉にたどる山道

夏山のしげみが中の花なれや秋に先だつ露のわくらば

谷新樹

初瀬山夏は若葉に吹きのぼる谷風涼し木々の下かげ

卯花

しげりそふ木の下闇も卯の花の垣根は月の盛りをぞ見る

山賤がすみ家ばかりに降る雪や世を卯の花の垣根なるらむ

葵

○更衣　古、四月十月の朔日衣を著更へる行事。

○わくらば　夏季紅葉の如く赤くなり朽ちたる葉。

露ながらかくる葵の玉すだれそれも縁の色をそふらむ

神山の葵の二葉ふたかたに君と臣とのさかえをぞ思ふ

葵草二葉ながらに千代かけて茂りそふべき色ぞ見えける

松の尾のまつも二葉の葵草その神山の契りをぞしる

郭公

思ひ寐の夢より馴れて郭公今ぞうつゝの曙のころ

待郭公

蚊の聲はいとふばかりになりにけり山郭公待つとせしまに

一聲は花も紅葉も餘所に聞く我がためもらせ山郭公

尋郭公

花にこそ枝折もせしか郭公尋ぬる山の道やまどはむ

などほとゝぎす

聞き馴れし山路にもなど郭公今年はいまだつれなかるらむ

曉杜鵑

杜鵑八聲の鳥のはつ音よりさだかにぞ聞く曉の空

一聲の行方も見えて有明の山郭公月に鳴くなり

○枝折　しをり。道しるべ。

○八聲の鳥　曉方に屢なく鷄。

○あなかまと　あな喧しと。

○朝倉の關　筑前國朝倉郡。

暮山郭公

なれも今雲間を出でて夕月のほのめく峯に鳴く郭公

郭公頻

ほとゝぎす草かる賤があなかまといはむばかりの此の頃の聲

夢後郭公

聞きそめし夢まさしくて時鳥さむる枕になのる一聲

里時鳥

村雨にさそはれきぬる郭公己が鳴く音も里を分くらし

原郭公

尋ね來て山田が原の郭公それかと聞けば杉のむらだち

關郭公

時鳥誰がためとてや名のるらむ今は名のみの朝倉の關

名所郭公

須磨の浦の波こゝもとに鳴き捨てて行くか後の山ほとゝぎす

雨中早苗

五月雨のふるの小山田水越えて植うる早苗も波の下草

○みなと田　港にある田。

○てこな　てこは娘のこと。なは親しみの意。眞間のてこなは古より著はる。

○まゝの繼橋　下總國の歌枕。今の市川町の北。

海邊早苗

村あしも穂に出でぬべきみなと田の秋をたのみに植うる若苗

五月五日

けふ葺きて菖蒲ぞわかぬ朝露の玉の臺も賤が軒端も

あやめふく今日はよもぎの人並に茅が軒端も薫る朝風

古池菖蒲

年ふりし汀のあやめ朝風に根ざしも深く匂ふ池水

橘

吹く風にあやめの露もかつ散りて匂ひ加はる軒の橘

橘薫枕

手枕に見しは昔の夢ながらうつゝに今も匂ふたちばな

樗

いつしかとそともの樗花散りて五月雨晴るゝ程も見えけり

五月雨

五月雨にてこなが軒端雲とぢて月はいつみしまゝの繼橋

花に見し梅の木の實の落ちそひて雫も匂ふ五月雨の頃

右梅雨

山五月雨

月も日も久しく成りぬ少女子が袖ふる山の五月雨の頃

日をふるもさのみいとはじ月にうき姥捨山の五月雨の頃

橋五月雨

年ふりし朽木も波に流れきて浮橋渡す五月雨の頃

湖五月雨

鏡山むかふ心もかきくれぬにほてる海の五月雨のころ

五月雨晴

今日こそは水草拂はめ五月雨の晴れて幾日の庭の池水

洩りかはる月こそあかね五月雨のふるやの軒の朽ちし板間に

めづらしき雲間の日影待ちえても心も晴るゝ五月雨の空

泊水鶏

波風のあら磯枕夢をだに結ばぬ夜半に水鶏啼くなり

海邊水鶏

蜑人の驚かされて磯近く汲むかあか井の水の鷄

○浮橋　船をならべて其の上に渡す橋。船橋。

○にほてる海　琵琶湖。

○あか井　閼伽井。佛に手向くる水を汲む井。

夏月

端居してみれば暑さもなつ衣袖に待ちとる月の涼しさ

山夏月

雷ひゞく峯の浮雲晴れのきて名殘涼しき月の下風

夏草

あげ巻の牛引く道も此のごろは夏野の草の陰高くして

花がつみ

夏深くしげりにけりな花がつみかつ見し草も埋むばかりに

鵜河

沈むべき我が後瀬をも知らずして此の夕闇に鵜舟さすらし

鵜舟多

山陰も月になる瀬とみるばかり鵜舟そふなり波のかゞり火

照射

ともしけつ峯の雫やさを鹿のほかげによるの命なるらむ

五月山空にしられぬ星なれや木の間あまたに照らす燈火

峯照射

○花がつみ　植物、菰(マコモ)の異名。下のかつ見にかく。

○後瀬　後世をかく。

○照射　獵夫のかゞり火をたきて寄り來る鹿を射殺すこと。ともし。
○ほかげ　火かげ。

旅人の夜深く越ゆる光かと見れば高嶺にともしさすかげ

橋螢

岩橋の絶えまも見えて葛城の久米路の谷に螢飛ぶ影

橋邊螢

しら玉のをだえの橋に飛ぶ螢おのが光も風に亂れて

江螢

月影は入江のあしの打ちなびき螢みだるゝ夜半の潮風

さ夜風におのが光もみだれ蘆の露の玉江に螢飛ぶなり

澤螢

淺澤の名にもならはで飛ぶ螢思ひや深く身をこがすらむ

水邊螢

浮草にすがる螢や川水の行方もしらぬ思ひなるらむ

瀧邊螢

飛ぶ螢光をそへて涼しさは岩根にそゝぐ瀧のしら玉

窗螢

晝露も光を添へて窗近き竹の夜すがら螢飛びかふ

○葛城の久米路　大和國。

○をだえの橋　陸前國志田郡古川町にあつた板橋。

草深みふみ見ぬ窗に飛ぶ螢あたら光を誰にかすらむ

田邊螢

秋近みかつしか早稻の穗に出でて螢飛びかふ夕闇の空

有晚夏螢

涼しさは夏も末葉と御祓河あきの立つえに螢とぶ影

夕顏

山がつのあれし垣根も青つゞら隙なくかゝる夕顏の玉

里蚊遣火

煙たつ此のひと里はとく暮れて夜を長しとや蚊遣たくらむ

朝氷室

朝まだき都にいそぐ氷室守露のひる間をうしとなるべし

ひむろ山朝風さえて水無月もこほるばかりの眞木の下露

夕立雲

雲とぢて照る日もしばしかくらくのはつせ路遠くきほふ夕立

遠夕立

鳴神の音羽の峯は虹見えて關のこなたに過ぐるゆふ立

○御祓河　みそぎする河。

○氷室　古昔氷を夏まで貯へ置く室。

○かくらく　隱るの延音。

○關　逢坂の關。

○むべしこそ　げにさやうに。いかにももつともに。しもこそも強めの助詞。

夕立過

見るが中に梢たかはら吹きしをり夕立すぐる風のはげしさ

雲こりてたつもこなたに出づるかと思へば餘所に鳴神の空

蟬

行きなやむ山路の駒に水かへば松風高く蟬ぞ鳴くなる

むべしこそ音をも鳴くらめ空蟬のは山の日影絶えぬあつさに

樹陰蟬

春秋をしらぬ命や空蟬のはやまの露に音をつくすらむ

閨中扇

いかなれば扇ばかりにかよひきてまだき涼しき閨の秋風

松下泉

岩がねに淸き流れは結べとも心涼しき松の下かげ

納涼月

蚊の聲も餘所になびきて涼しさは端居に更くる月の下風

納涼風

涼しさは秋と岩根の苔むしろつどへる袖に松風ぞ吹く

○見せも聞かせも　遣水を見せるのも日ぐらしを聞かせるのも。

○はなちかふ　放牧する。

舟納涼

一葉散る柳の木陰舟とめてしばし待たるゝ水の夕風

樹陰納涼

花やいつあふちの木陰露散りて村雨すぐる風の涼しさ

圓居して涼みとらばや茂りそふ木の下闇は月遲くとも

泉涓々而始流

みれば先づ心涼しも苫清水むすぶ程なき細きながれも

夏天象

若葉もる月こそあらめ大空の星の林も影ぞ涼しき

このごろは五月雨近き程見えて夜な〳〵月の曇りがちなる

夏夕

山陰に見せも聞かせも涼しきは遣水近き日ぐらしの聲

夏夜

手枕に軒端のあやめ薫りきて夢路涼しき宵のうたゝね

夏野

はなちかふ牛も夏野にあげ巻の笛の音近き草の中道

夏　關

我も又すゞしく越えむ夕立のなごりの空の足柄の關

夏植物

夕顏のしろきかたへに紅の入日照りそふなでしこの花

植ゑそへて誰か錦を敷島の大和撫子からあゐの花

夏動物

駒なづむ夏の山路に我も又水こひ鳥の音をや鳴かまし

夏鳥

時鳥鳴きて今宵も明けがたの月に鴉の聲のみぞする

夏獸

拾ふべき木の實やいつと柴栗の花散る峯にましら鳴くらむ

夏衣

夏來ては朝夕露の外ならで暑さにしぼる蟬の羽衣

夏絲

夏引の手びきより猶長き日のよのいとなみや誰も苦しき

夏雜物

○水こひ鳥　深山魚狗（みやませうびん）の異名か。

○夏引　春蠶の夏にあがりたるを絲に引くこと。

短夜の月に聲すむ笛竹は誰が涼みとるすさびなるらむ

明けやすき空行く月の竹席臥しながら見る夜半の涼しさ

夏旅

立ち寄らむ影も夏野の旅人は吹雪に越えし峯よりやうき

旅人の命なりけり水無月の照る日も餘所にならの下陰

六月祓

御祓河あさの立枝の打ちなびき夕波よする風は涼しも

夏のはて

飛鳥河昨日の春もとく過ぎてけふぞ御祓の瀨にかはり行く

秋

初秋

秋きぬと目にこそ見えね吹く風の先づ音たつる庭の荻原

吹きかへて今朝は身にしむ難波風あしの一よに秋や來ぬらむ

湖初秋

秋來ぬと浦曲の波も聲そへて松風高き志賀の唐崎

○立枝　高く生ひ立ちたる枝。

○飛鳥河　大和盆地を北流して大和川に注ぐ。

○一よ　あしの節と一夜とにかけた。

早秋

置きあまる夕の露の篠薄秋の日數も穂に出でにけり

早涼

立ちなれしならの木陰に吹き來るも昨日には似ぬ秋の初風

七夕

秋をへて朽ちぬ其の名の岩木山星のちぎりの程やみすらむ

乞巧奠

玉琴の調べも今は引き絶えて何を手向の星合の空

二星適逢

織女のまれの逢瀬や天の河なか〳〵絶えぬ契りなるらむ

七夕雨

天の河みかさそひなば二星の身をしる雨も降りまさるらむ

七夕霞

朝まだき霞むとみるや寐もやらであかせし星の空めなるらむ

七夕山

動きなき龜の尾山の名にかけて萬代契れ星合の秋

○星合の空　七月七夕牽牛織女の二星相合するといふ夜。

○二星の　牽牛、織女。

○龜の尾山　山城國名高き小倉山の東南の尾その形の似たるよりいふ。

○星の宿りを　以下原本闕字。

○みけし　衣の敬語。

七夕川

水上は神代の秋の天の河ながれて末の逢瀨絕えめや

七夕宿

雲霧のへだては今宵なくもがな星の宿りを□

七夕機

名にたてて棚ばたつめのおり機やけふ待つ爲のみけしなるらむ

深夜荻

見し夢の行方をとへば更くる夜の枕に近き荻の上風

秋風の寐覺の牀は夢もなし軒端の荻の何きそふらむ

庭荻

蟲の音も風になびきて折々に夢驚かす軒の下荻

野萩

秋萩の花野のにしき立ち歸りまだ見ぬ人やさそひ行かまし

水邊萩

遣水の水草を茂み散りうくもしばし流れぬ秋萩の花

三枝のおもとより萩の花にそへて鮎の魚を賜はりければやがて其の文字

をかしらに置きて

あさもよい昨日は露とみし花の枝に數そふ庭の秋萩

夕露の枝もとをゝに置き添へて月の影待つ庭の秋萩

野邊近き家居ならでも鹿の音のそふ心地する夜の秋萩

いつしかと花待ち見ても言の葉の色なき露の庭の秋はぎ

おそきとき枝をまじへて咲く花の盛り程ある庭の秋はぎ

女郎花

よりそはば浮名やたたむ女郎花尾花を餘所に咲く野邊もがな

尾花

秋來ればめなれぬ海と武藏野の尾花が末によする白浪

天の川近きかた野の初尾花昨日の星や又まねくらむ

刈萱

歩人（かちびと）の分けゆく袖に跡見えて露しどろなる野邊の刈萱

露ながら誰かるかやのつかねをも亂れそひぬる野べの秋風

蘭

藤袴ひもとく野邊は百草の花もゆかりの香に匂ふらし

○あさもよい　「き」にかゝる枕詞

○とをゝに　たわゝに。

○つかねを　束ね緒。

草香

初尾花まねく袖にもそれとなき草の香うつす野邊の秋風

草花露

ぬれぬとも折りてかざさむ置く露の玉の横野に咲ける百草

槿

霧晴れぬ籬を花の命とや盛りひさしき露の朝がほ

たそがれにほの見し花の折過ぎて又珍らしき宿の朝顔

小鷹狩

うづら鳴くかたやいづこと狩衣ま袖に分くるすゝき高かや

狩人の袖や千種のすり衣鶉ふす野を尋ねてぞ行く

蟲

夜を殘す霧の籬に鳴く蟲の明けてもしばし聲のひまなき

鈴蟲

鷹人のかへる末野にふり出でて鳴くやをぶさの鈴蟲の聲

蟋蟀

月うとき頃ともしらで草の戸にさせてふ蟲の聲しきるらし

○夜を殘す霧の籬　霧立ちこめて朝になつて猶暗い籬。

○鷹人　鷹がひ。
○ふり出でて　ふりは鈴と緣語。
○をぶさ　房の如くに廣がりたる鳥の尾。

山鹿

山鳥のをのへ隔ててすむ鹿は何のかひよと羣れつくすらむ

野鹿

秋の野のをじかや妻を思ひ草尾花がもとの露に鳴くらむ

駒迎

あふ坂の杉の下道越えきても猶かげ見えぬ霧原の駒

東路をいつか立野の駒なべて都の秋にあふ坂の關

月

曇りなき月に契りて老いらくのさかえも千五百秋津洲の國

秋月

松風に軒端の山の雲晴れて千年もすめる秋の夜の月

雪にみがき花にかすめる影もあれど秋を光と月は澄むらし

十五夜月

此の秋はことさらまさる光かと年々めづる望月の空

八月十五夜

露時雨そめぬ葉月の影ながら最中の空ぞ光異なる

○駒迎　古、八月十五日に左馬寮の使駒牽の駒を近江國逢坂の關まで出で迎ふること。「逢坂の關の淸水に影見えて今やひくらむ望月の駒」（貫之集）
○霧原　信濃國西筑摩郡。
○立野　武藏國立野郷、武藏五牧の一、不詳、或は小机領内にあつたかと。「秋霧の立野の駒を引く時は心にのりて君ぞこひしき」（後撰七、秋下）

○夜よしと　「詠めても誰をかまたむ月夜よし夜よしと告げむ人しなければ」(玉葉五、秋下)

天の川今宵を秋の中つせと月も一夜の名にや澄むらむ
見る人も今宵はさぞな望月の隈なき空に心澄むらむ

不知夜月

山松の末こす程や浮雲の晴れてもしばしいさよひの月

十三夜月

秋深き程もしられて向ふよりひかり身にしむ長月の空
蟲の音はやゝうら枯れし籬にも月と菊との盛りをぞ見る
いかばかり宇田野の露にみがかれて御代長月の影は澄むらむ

雲閒月

秋風に雲の浮橋と絶えして夜渡る月の影ぞもりくる

深更月

更けゆけば夜よしと訪ひし人もはや歸るみぎりの月ぞさやけき

山月

初瀬山峯の嵐に雲晴れて檜原がおくの月ぞ澄みゆく
峯高く出でてもしばし小倉山松の梢にさはる月かげ
花にうき嵐の山は秋の夜の月の爲にや名づけそめけむ

○はかられて　たはかられて。だまされて。

○さ筵　さは接頭語、筵に同じ。月のさむしろは月を眺むる爲にしく筵。

都月

さやけさのいづくはあれど名にしおふ月の都の空高きかげ

古郷月

秋更けて人はよもぎの露深み月をあるじの古郷の庭

關月

照りまさる月の光にはかられて鳥が音いそぐ逢坂の山

清見潟波路遙かに霧晴れて早くも明くる關の戸の月

名所月

所がら月も明石の瀨戸かけて浦の見るめのさやかなる影

翫月

月よ知れ夕の空に見し影の有明までもあかぬ心を

月夜待友

夜よしとて契らぬ人もとひや來む猶敷き添へよ月のさ筵

月契秋

千々の秋契り置きても澄みぬらむ末久かたの月の光は

砂上月

雲霧の汀を清み月晴れて濱の眞砂の數もよままし

海上月

和歌の浦や誰も言葉の玉津島ひろへと月の光添ふらし

浦月

しほ風に霧晴れのきて明石潟月も浦曲の名にや澄むらむ

野月

秋風に千草ぞ匂ふ月清み光を花とちらす野原は

萩すゝき分くる心のはてもなし月の盛りの武藏野の原

杜月

露しげき杜の下道行く袖に木の間の月の影ぞあらそふ

松間月

軒ちかき木の間もりくる秋の月千代も澄むべき松の下庵

月前露

月宿る露はみながら哀れとも玉とも見ばや武藏野の原

月前草

今宵しも曇りなければおもひ草尾花が袖に宿る月影

〇玉津島　紀州和歌浦にある小島衣通姫を祀るといふ。

月前松

高きといひよきと語らむ武隈のふた木の松を照らす月影

月前檜

はふり子がかざしも月にいとふ夜を三輪の檜原の何しげるらむ

あなしけに雲晴れのきて卷もくの檜原がおくも月とさやけき

月前葛

よしさらばかたぶく月も吹きかへせ葛の葉白き岡の秋かぜ

月前蟲

さやけさに勇める駒の轡むし野中の月を誰かめづらむ

月前蛬

暮るゝより草のとぼそに月影もさせてふ蟲の音をや鳴くらむ

月前獸

窗とぢて見ぬ月影や更けぬらむ門守る犬の聲のさやけさ

寄月旅行

暮るゝより袖の露とふ月なくば獨りや越えむ小夜の中山

晝露のひるまを草の假枕月の夜ごろを急ぐ驛路

○武隈のふた木の松　陸前國名取郡武隈(今の岩沼)にありしといふ二本の松。

○はふり子　祝子、又巫女。神社に侍ひて專ら祭祀等に從事する人の稱。

○三輪の檜原　大和國三輪山の檜原。卷向の檜原。二つの山相竝ぶ。

○させてふ蟲　蟋蟀。「きりぎりすのつゞりさせとは人の爲に夜寒を敎へ」……(百蟲譜)

月前旅宿

おなじ野に今宵も寢なむ月をさへかたしく露の草のさ筵

聞秋鴈

故鄕の秋をばいつか立田山夜半に越えくる初鴈の聲

峯初鴈

霧こめて姿はみねの遠近に聲さだかなる天津初鴈

田上鴈

小山田の穗浪かたより秋風に翅みだれて落つる鴈がね

旅天鴈

なれも又友なき鴈か露時雨故鄕したふ夕暮の空

霧

夕日影さすか尾花の末見えて薄霧なびく野べの秋風

河風に幾瀨の波の末晴れてたゞく殘る水のうき霧

霧深

百草の花野もけふは見えわかず夜の錦の霧深くして

川霧

○うづら衣　つぎはぎの衣。弊衣。
○眞野　攝津國武庫郡。今神戸市に編入せらる。刈藻川の東。

大井川下す筏もほの見えて嵐に晴るゝ水のうき霧

水郷霧

山の名の朝日にはれて朝霧のむら〳〵殘る宇治の河面

里擣衣

遠づまを思ひやりてや秋風の夜寒の里に衣打つらむ

さらでしも老は寐覺の里近く曉がさ衣打ちしきる聲

浦擣衣

所がらうづら衣の袖寒み波かけて打つ眞野の浦人

田家秋

刈り殘す稻葉の雲や時雨れ來てもる袖寒き小田のかり庵

田家秋風

守(も)り捨てて引かぬ鳴子も秋風に絶えず音する曉が小山田

田鴫

月宿る水田の面に立つ鴫の羽音さやけき明方の空

身のうさを獨りかぞふる曉に門田の鴫の羽音さびしも

刈りのこす澤田の稻葉ほの見えて鴫立つ庵ぞいとゞさびしき

鶉

尾花散る野風を寒みもろ鶉獨りは寢じと音をや鳴くらむ

いつしかと秋も末野の程見えて夕日寂しく鶉なくなり

堅田侯麻布別莊稻荷社奉納和歌のうち菊

月うとき杉の木陰に咲く菊の花や光やみつのともし火

籬菊

匂ひをばよそに散らすなしめゆひし籬の菊の花の朝風

月うとき籬に匂ふ星見草花は光を名にやこふらむ

谷菊

落ちつもる花の雫に谷水の末くむ袖もにほふ白菊

殘菊白

千代もなほ殘れ砌の竹垣に霜をへだてて匂ふ白菊

黄葉

うなる子がちゝのみ拾ふ岡のべに染むる杵の色も珍らし

蔦紅葉

千代も猶かはらぬ色と飽かず見む松より馴れし蔦のもみぢ葉

○星見草　菊の異名。

○ちゝのみ　銀杏の實。

紅葉

秋は名に立田の紅葉見し春の花の氣色もいかで及ばむ

里わくる時雨と見しも此の頃はなべて千入(ちしほ)の四方のもみぢ葉

咲く菊の白きかたへに紅のひと木ぞあかぬ庭のもみぢば

露染紅葉

霜置かば花にかへての紅も又一入の露のもみぢ葉

秋深き情しりてや白露の又紅にそむるもみぢ葉

夕紅葉

霧深き麓の里はとく暮れて入日ほどある岸のもみぢば

山紅葉

染めかねし枝もまじりて山姫の袖のむらごと峯のもみぢば

杜紅葉

染め殘す色こそなけれもみぢ葉の露も時雨も杜の下陰

岡紅葉

霜遲き岡べの松の下紅葉散らで常磐にならふ世もがな

折り殘すしづはもあらじ歩人(かちびと)の往來の岡に染むるもみぢば

○千入　幾度も染むること。

○むらご　所々色濃きこと。

○しづは　下葉。

里紅葉

秋も又知らぬあるじのとはれつゝ紅葉に分くる里の中道

時雨れ來て笠宿りせし里の名も染むる紅葉にけふこそはとへ

池邊紅葉

色深き岸根の紅葉移ろひて波も千入の庭の池水

紅葉映水

夕日さす岸のそがひのもみぢばは波さへ秋の色に出でけり

木がらしの名もあらはれて月影の落葉に晴るゝ杜の下道

秋雨

心あれや秋風寒み降りくるも月にさはらぬ霧の村雨

秋水

朝顏の籬垣(ませがき)近くせき入れていさごも瑠璃の庭の池水

秋夢

秋の夜の夢ぞ樂しき心から須磨さらしなも宮城野の月

身の秋をしばし慰む夢もがな長き夜すがら結ぶ枕に

秋朝

○そがひ　背面。

○いさご　砂。

○須磨さらしなも云々　三箇所共に月の名所。

○むれぐむ　いつはいに羣って。

○いろくづ　魚。

野邊見れば眞萩もいまだ朝寐髪すゝき刈萱露重くして

秋夕

いつの間に置き添はりけむ秋きても日數ほどなき野邊の夕露

うきは只我が身ひとつと思ふ間に袂露けき秋の夕暮

秋野

百草の花の錦はいづれぞと嵯峨野北野の露分けてみむ

秋木

立ちならぶ松の木の間の夕日影紅葉にかざる秋の色かは

秋鳥

刈りのこす賤が門田の稲すゞめむれぐむ聲に秋ぞ賑ふ

鶉啼く野澤を近み立つ鴫の哀れやいづれゆふべあかつき

秋神祇

岩清水月にひれふすいろくづの數も今宵ぞ見えてさやけき

秋眺望

秋風に尾花が末の霧はれて不二の嶺近き武藏野の原

秋風になびく尾花か一筋の川水廣き武藏野の原

暮秋

長月の日數もいつかはつせ寺入相の鐘に秋ぞ暮れゆく

折りのこす菊も紅葉も明日よりや秋の形見とみつゝ偲ばむ

暮秋雲

招くべき尾花が袖もかつ折りて夕霜寒き秋の別れ路

暮秋鳥

花ははやうつろふ籬にとびて啼くきくいたゞきの秋惜しむ聲

下紅葉かつ散る枝にてりうその鳴く音寂しき秋の暮がた

秋のはて

秋深み蟲の啼く音もうら枯れてやゝ影寒き淺茅生の月

○きくいたゞき　菊戴。燕雀類の鳥。
○てりうそ　照鷽。鳴禽類の鳥。

松山集 下

冬

初冬

高砂の時雨は餘所に晴れすぎて松風寒く冬は來にけり

時雨過

山風にきほふと見しもとく過ぎて名のみ時雨の里の浮雲

岡時雨

浮雲は晴れてもしばし木のもとにしぐるゝ露の岡のべの里

川時雨

渡守はや船出せ隅田川遲れし雲のしぐれこぬ間に

里時雨

かり人の笠もとりあへず降りすぎてとをちの里や今しぐるらむ

夢さめて名のみふしみの里なれや山風あらく時雨降る夜は

落葉深

○とをち　十市。大和國。

○名のみふし見の　雨風に夢が覺めて實際にはよく眠れない、ふしみといふのは里の名ばかり。

駒なづむみちの山風吹きわけて蹄も見えず積るもみぢば

河上落葉

散りはてし後も心を盡してや又染河の波のもみぢ葉

翫殘菊

晝霜に籬の菊の色そひてふたゝび花のさかりをぞ見る

殘菊帶霜

紫にうつろふ菊も今朝見れば皆白妙の霜のきせ綿

野外霜

有明の月もそなたに影見えて晝霜白き野邊のあけぼの

竹霜

朝な〳〵緑も霜の白妙に老やまなびのまどの吳竹

橋霜

置き渡す木曾路の霜の朝ぼらけさながら春の花のかけはし

殘鴈

旅の空日數も雪も故鄕のみのしろ衣かりやきぬらむ

寒松

○みのしろ衣　蓑の代りに用ゐる衣。合羽の類。

○いつはあれど　嚴にはあれど。
○いつはの松　五葉松。

○むらあし　叢蘆。

○ひも鏡　氷面鏡、氷の面の鏡の如くなるをいふ。

いつはあれどいつはの松の風さえて霜の花咲く冬枯の庭

庭寒草

さらに又秋見し色をおもひ草霜の籬に殘るひと花

とぢられし窗のむぐらの霜枯に淺茅の庭の廣さをぞしる

寒蘆

よる波も氷にとぢて難波潟あしのかれ葉に殘る浦風

なびきもの綠は猶も深き江に獨りかれたつ風のむらあし

水郷寒蘆

冬來ては浦風寒し難波江の蘆の穗わたる霜にまがひて

氷

垣根行く水の流れも氷りゐて音信たえし冬の山里

氷初結

朝手あらふたよりに見ればひも鏡結び初めぬる庭の池水

池水

松高き砌の池のひも鏡千とせの影もうつしてぞ見む

をし鴨の鳴く音ばかりを殘し置きて玉藻の牀も氷る池水

日影さすかたへは解けて中島の松より北にこほる池水

池水始氷

浮草の朽葉も庵にかつ見えて絶え〳〵こほる庭の池水

寒月

波にはれ雪にみがきて大井河嵐の山の月ぞ寒けき

まさご地はいかにさゆらむ片敷の袖にもこほる冬の夜の月

ふけぬるか影ふむ道に置く霜の砕くる音も月に寒けき

衾

あつ衾ひき重ねても下さゆる老やうきねの限りなるらむ

磯千鳥

友千鳥とはぬ恨みの大磯や小磯の波に翅しをれて

水鳥

山河の氷の淵を立ちわかれ淺瀨にさわぐ水鳥の聲

鴨のゐるみぎはのあしは霜枯れて己が羽音ぞ獨り寒けき

更くる夜にうき寢の牀やこほるらむ陸にまどへる水鳥の聲

霙

○かつ見えて　片方に見えて。

風寒み時雨やこほる奥山の槇の葉づたひ霙降るなり

雪

うなゐ子がまろばす雪を老いらくの埋火ながら見るも寒けし

初雪

葛城の雲のよそにも降りそめて今朝珍らしき峯の初雪

庭雪

とひ來ぬる人の情ぞこのゆふべ雪に跡なき庭のかよひ路

山雪

雪にこそ見るべかりけれ吉野山花にはもるゝ松も有りしを

山家雪

山深み雪にとぢたる柴の戸は春より外に誰か明くべき

杜雪

枝しげみ降りつむ雪の白妙に常磐の森の名をやかふらむ

ねぐらとふ翅も白し夕がらす野中の森の雪のよそめは

海邊雪

波の上は跡なく消えてその名のみつもりの浦に降れる白雪

○うなゐ子　幼子。
○老いらく　老人。

暮村雪

宿りとるゆづはの村も白妙の少女が袖や雪にさゆらむ

松雪積

つもりそふ梢は草の面影をさながらみする雪の松が枝

雪作松樹花

むつの花いつ葉の松に咲きそめて千代をとかへりの色やみすらむ

竹閑雪

たゞひとへさえだの霜と降り初めてなびくもあかぬ雪の村竹

杉雪

深みどり埋もれはてて白雪のけふも隙なくふるの神杉

古寺雪

埋もれぬ鐘のひゞきの高野山嵐は絶えし雪のあけがた

神社雪

榊葉の色もさむけしこと木まで白ゆふかくる雪のあけぼの

名所雪

月にこそなぐさまざらめなべて降る姥捨山の雪のあけがた

○ゆづはの村　萬葉の五百都磐羣より出でたる語。岩石の多く羣り立てる處をいふ。こゝは地名とせるにか。

○むつの花　雪の異名。
○いつ葉の松　五葉松。
○とかへり　松は百年に一度。千年に十たび花咲くといふより、松の花を十返の花ともいふ。

雪中待春

積りこし年の寒さに春をのみ心に松の雪の下庵

雪中鷹狩

袖に散る毛羽（けはね）も雪にこきまぜて狩場の小野はましらふの鷹

野行幸

宮人の袖ふりはへて狩衣北野の御幸めづらしとみむ

何事も古きにかへる君が代は野べのきゞすの御幸をやまつ

爐火

かきおこす下の光のふゝろみつ夜深きねやに殘る埋火

神樂

宮人の榊葉うたふ聲更けて霜の白ゆふ袖にかくらし

早梅

春の來る道のしをりと白雪のふるとしながら匂ふ梅が枝

なべて咲く野山の春の草よりも年のこなたに匂ふ梅が枝

冬天象

山風の雪を催す色見えてきはめる雪ぞ峯にかゝれる

○ましらふ　眞白斑、鷹の羽毛に白色の斑點あるもの。

○ふゝろみつ　含みつゝ。

○ふるとしながら　白雪の降るに舊年をかけてある。

冬雲

もみぢ葉をさそふ時雨の跡に又入日染めなす峯の浮雲

冬海

さむけしな潮風あれて今朝も又雪氣催す沖つ舟道

冬旅

袖さえて越えうき旅のあさ衣木曾路の雪は花とみるにも

冬夜夢

風寒みねられぬ夜半は夏よりも猶手枕の夢ぞみじかき

冬獸

埋火のあたりにねぶる庵猫は花咲く春や夢にみるらむ

さびしさはましらかせきの跡ばかり雪に殘れる冬の山里

夕歳暮

新玉の春待つ身にも行く年の名殘は惜しき夕暮の空

歳暮松

いとはやもおはせぬ門に松立てて春待つ宿の暮ぞ賑ふ

歳暮梅

○ましらかせき　猿鹿。

ろぢ近き梅の立枝の春待たで匂ふもうれし年のこなたに

老後歳暮

花鳥の色音待つ身は加はれる老の數をもしひて歎かじ

行く年の名殘もあれど老が身は堪へぬ寒さに春をこそ待て

としは暮れにき

榾の火の光ばかりを頼みにて又いたづらに年はくれにき

戀

忍戀

うきも身のよそにもらさじ涙河おさふる袖はよし朽ちぬとも

もらさじと思ひしのぶの摺衣袖のみだれも誰か知るべき

忍涙戀

我が袖のしのぶ文字ずり亂れなばいかにつゝまむ露も涙も

見戀

海士のかる見るめばかりを契りにてあふこと波に袖やくたさむ

小車のわりなく慕ふ下すだれ隙もる影のほのかなりしも

○しのぶの摺衣　しのぶは今福島市の邊。

○しのぶ文字ずり　しのぶ摺に同じ。忍草の葉にて布帛に摺りつけたるもの。その模樣のもぢれ亂れたる狀なるより、しのぶもぢずりともいふ。文字はあて字。

○見るめ　海松をかく。

通書戀

玉章のかよふちぎりは有りながら憂きいらへのみ見るもわりなし

依戀祈身

つれなさも限りやあると引きかへてうき身を祈る森のしめ繩

契戀

僞りのあるよも知らでかはらじと我が誠より契る言の葉

不逢戀

とひよりしかひこそなけれ空蟬のもぬけの衣薄き契りは

過不逢戀

解けそめし妹が下紐今は又何の報いにむすぼゝるらむ

さねかづらさねし夢路に引きかへて今さらたどる相坂の山

待戀

まろねして七ふさびしきすが筵今宵も又や三ふに明かさむ

初逢戀

ながれての末をぞ頼むうきながら逢ひそめ川の波の枕に

思ひ寐の夢に馴れこし中も今うつゝとなれば恥づる言の葉

○さねし　さは接頭語。

○七ふさびしき云々　「陸奥のとふの菅ごも七編には君をねさせて三編に我ねむ」（袖中抄）

夢中逢戀

宵々の夢の浮橋なかりせば何に命をかけて頼まむ

別戀

手枕にはづかしとみし月影を今はかたみのきぬぐ〃の空

歸戀

鳥が音に知らぬあるじの心までうらみて歸る曉の空

見夢增戀

ながかれと契りし夢の鳥がねに覺めて亂るゝ牀の黑髮

後朝戀

今朝はなほ夜半の枕にかきやりしその黑髮の亂れてぞ思ふ

稀戀

ともすればもとのつらさにかへり花稀なる色を何賴みけむ

久戀

幾度か袖も涙に朽ちはてて立てしかひなきかどの錦木

片思

よし今は憎しともいへそれをだに思ふかひある言の葉にせむ

○きぬぐ〃　男女相會したる翌朝

○錦木　一尺ばかりにて五色に彩りたる木。昔奥州地方にて男が思ふ女の家の戸口に此の木を立て、女が同意すれば此の木を取り入れる。然らぬ時は次々に加へ立てて千束を限りとして女の靡くを求めたといふ。「思ひかね今日たてそむる錦木の千束も待たであふよしもがな」（詞花戀上）

言の葉のいらへなきだに今ははや世にちらさずば憎しと思はむ

片戀

動きなき人の心は石河のかた淵にのみこひ渡れとや

思

人はなど淺瀬なるらむ思川思ひせく身の袖をみるにも

あふはして涙の露に袖ぬれて尾花のもとの草の名ぞうき

被忘戀

ゆゝしとて拾はぬ中の忘れ貝いつしか袖によする浦浪

忘れ草我が心には生ひずして頼むかた野になど茂るらむ

忍絶戀

忍びこし庭の通ひ路跡絶えぬ淺茅が露は袖に殘りて

春戀

青柳のなびくと見しをいかにしてもとのつらさに歸る鴈がね

さやかにもやがて扇の三重がさね霞める月を契りにはして

わりなしや花の下紐解けながら霞の袖に面かくしして

夏戀

○あふはして　不明。

○ゆゝしとて　忌々しいからといつて。

○扇の三重がさね　三重襲扇。檜扇の板の幅の狹く開くもの。扇に逢ふをかけ、三重に見えをかく。

○花の下紐　花の蕾を譬へいふ。

○今は夏野　今は無きにかけた。

○ねのこ　子の子の餅。亥の二十月亥の日）の翌日食する餅。子に寢をかく。

逢ふことも今は夏野の眞葛原下にや秋の風通ふらむ

秋戀

うき中はまだき時雨の降りそめて獨りこがるゝ袖のもみぢ葉

秋顯戀

つゝみこし袖の千入も顯はれぬ人の心のあきの時雨に

冬戀

手すさびにとふ殿うらも空しくて涙に消ゆる寢屋の埋火

冬逢戀

牀の霜袖の冰もなかりけり妹が心のとくる今宵は

つゝみても新手枕のあらはれてねのこの數を人やとふらむ

寄七夕久戀

棚機の絶えぬ契りも有るものをつれなくてのみ秋ぞへにける

寄秋風戀

吹きかはる人の心に言の葉の賴みも今はなかの秋風

寄雪戀

跡つけば人もこそしれ歸るさの道降りかくせ今朝の白雪

寄杜戀

つひにわが浮名やよそに杜の露つゝまむ袖の朽ちもはてなば

寄關戀

うきかたにたが關すゑて心さへ通はぬ中と今はなりけむ

寄水戀

餘所に又通ふ行方も知りながら賴む筧のみづからぞうき

寄河戀

深くのみおもひて渡る飛鳥川うきも嬉しき瀨にかはるよを

寄海戀

逢ふ事の涙に沈む牀の海は枕流れて見る夢もなし

寄葵戀

小車のめぐりあふひを賴みても人のかざしと見るぞかひなき

諸葉草もろ心にはかけずして我に卯月の袖の朝露

寄竹戀

篠竹の一よ二よの隔てをも葉に置く露の亂れてぞ思ふ

わりなしや靡くとみるもなよ竹のさすがをりうき人の心は

○めぐりあふひ　廻り逢ふ日、葵。
○諸葉草　ふたばあふひの異名。

寄松戀

逢ふ事は猶かた岸の松よりもうき年波に袖ぞしをるゝ

寄鳥戀

いかにして逢染川のしまつ鳥うかりし瀬々も有りと語らむ

寄鏡戀

ひとりのみ見るや契りの朝鏡ともに向ひし折も有りしを

寄棹戀

杣河や筏の棹のさし離れ思ふ心のかよふ瀬もがな

雑

星

飛ぶ螢雲居に消えし光かとやゝ見え初むる夕づゝの影

宮人の雲居にうたふ聲よりも空に寒けきあか星の影

夕風

まさき散る深山はさぞな都にもゆふべ寂しき松風の聲

薄暮煙

○しまつ鳥　島の鳥の意、鵜の異名。

○杣河　杣木を流し運ぶ河。

○夕づゝ　金星、宵の明星。

○あか星　金星に同じ。

宿ごとにたつる煙の色よりや早くも暮るゝ山もとの里
里遠く立つる煙の一すぢはなか〳〵寂し夕暮の空

曉

待ちわぶる老ぞ悲しき鐘のこゑ鳥の鳴く音もよそなりし身に

關

秋は又霧や隔てむ東路の霞が關のしげきゆき來も
朝まだきいさめる駒の鈴鹿山しるべにたどる關の下道

水

春秋とかはるうき瀨もかはらぬや水草淸き流れなるらむ
山水の細き流れや中々に人の心も澄みまさるらむ

水石契久

春きぬと岩井の氷解けそめて汲む手に契る千代の若水

名所瀧

松風もひとつに落ちて峯高くひゞく音羽のたきつ岩波

名所河

折々にかきながしても芥川つもる心のみづからぞうき

○芥川　攝津國三島郡。淀川の支流。

名所橋

よゝふとも猶朽ちせじな橋柱昔ながらに残る其の名は

名所湊

松風に波ふき立ちてうき寐する與謝の湊は夢も結ばず

海路

かぢ枕波の千里のいかにぞと思ふ心も八重の濱風

海村

浦近き松の隙より立つ煙見ゆるや海士の家居なるらむ

浦波

これも又千代の數とやあし田鶴の翅にかゝる和歌の浦なみ

閑居

世をそむく心ならねどすなほなる竹の庭にはうきふしもなし

遣水もはらふ人なみ埋もれて音かすかなるむぐら生の宿

門

末つひに車入るべき松の門木高く千代の色も見えけり

古寺鐘

○かぢ枕　船中に旅寝すること。

○車入るべき　前漢の于公、門の限りを高く造りしこと枕草子六段（大進生昌が家）に見ゆ。

しきみつむ曉おきは鐘の音もまだほのぐらき峯の古寺

水戸宰相きみ 紀治卿 の御國へいらせ給ふ御はなむけに松にぬさ袋をつけて奉りける歌

千代經べき君がかへさを諸人の今やとさぞな松の言の葉

旅朝

朝煙木の間に見えて旅人のおき行く星につゞく松原

旅館雨

ふる里をしのぶの露も落ち添ふや窗うつ雨の夜半の枕に

旅宿夢

草枕むすびかへてもかはらぬや朝に通ふ夢路なるらむ

旅泊波

松風に浦波高くこゆるぎのいはがね枕夢も結ばず

見る夢は都にちかの名のみして浦わの波にぬる夜半もなし

都へのぼる道にて

をさな子の門に出でつゝ啼く聲を聞くばかりなる夕悲しも

戸塚といふ所にてかくし題

○ぬさ袋　旅行する時、道祖神に手向くる幣、多くは切幣を入れる袋。

○こゆるぎの　相模國酒匂川より大磯に至る浦。

○都にちかの　都に近いと千賀の浦とをかけてある。千賀の浦は陸前の歌枕として名高い。

草枕ひとつかりねにみる夢も心々の月花のかげ

大磯

松風に沖津白波吹きよせてとかくもしろき大磯の里

箱根

松の火も木の間に見えて箱根山明けゆく峯ぞなほ遙かなる

沼津

あやめふく沼津の里は旅人の袖さへかをる露の朝風

原の宿といふ事を折句に

はる〴〵とらに匂ひ來てのる駒の鈴蟲きほふ草の中道

浮島が原にて

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬもなか〳〵よしや雪のふじの嶺

はだ寒みさこそは我をしたふらめ添寝せし子の宵々の牀

藤枝

見し春のゆかりの色を今もなほ青葉に殘す藤枝の里

小夜の中山にて

鳥が音におき行く末も霧こめてなほ明けやらぬ小夜の中山

○松の火　たいまつ。

○らに　蘭。

碓氷にて

もみぢ葉のうすひのみ坂越えしより猶深からむ山路をぞ思ふ

山家風

吹きたゆむ程こそあらめ馴れぬれば今は夢をも峯の松風

山家友

妻木こるたよりに人の音づれて友うとからぬ松の下庵

苔

のがれこし峯の松風猿の聲うきものながら友とこそきけ

山がつの往來やしげき蒸す苔の綠少なき岩のかけ道

苔露

柴人のかよふばかりの岩が根は露さへ深き苔の細道

濱ゆふ

移し植ゑて千代を重ねぬ濱ゆふのためしもこゝにみくま野の浦

窗竹

月のため植ゑぬ窗にも吳竹のよその這ひ根の生ひ茂る影

戶外松風

○濱ゆふ　はまおもとの異名。
○みくま野の浦　みは美稱、紀伊國熊野浦。

とひすてて人は歸りし柴の戸に殘る夕の松風の聲

夏深き山櫻戸は松の風吹くともよしや散る花もなし

浦松

浦風の梢吹き越す音までも神さびにけり住吉の松

名所松

深みどり鹿の子まだらの雪ならで時しらぬ色を三保の松原

田鶴の居る干潟やいづこ白波の梢にかゝるわかの浦松

山榊

增鏡神代をかけて榊葉のかげ榮え行く天の香具山

神路山さかゆくほどや宮人のとる榊葉の色にみゆらむ

鶴馴砌

年月をこゝに重ねて雛をさへあまた砌の鶴の毛衣

渡舟

今もなほ船こぞりてや都鳥隅田河原の昔こふらむ

眺望

さはるべき草の葉山もなかりけり緣につゞく武藏野の原

○砌　軒端の敷石。見る意を懸く。

○船こぞりて　船中の乘客悉く。

入日さす浦の苫屋に干す網の目ならぶ里ぞやがて暮れ行く

望遠帆

船まもる神の心やいさむらむ眞帆に吹きこす沖津潮風

仁正寺侯の別莊にて樂山樓と名づけ給へるは富士筑波に向ひて土さへさけむといへる思ひもしらずがほなるに又池水近ら風の涼しく吹きのぼりければ

水無月の暑さもけふは筑波山ふじの高嶺の雪にけられて

台臨亭址　古風園十七勝の中

涼しさに池のぬなはは暮るゝ日もしらでよりそふ水のおくしま

玉椿君がみましの跡とめて常磐かきはに猶仰ぐべし

枕岸棣棠

岸高み下行く水に影見えて波をまくらの山吹の花

秧田新綠

植ゑわたす田の面の末にみる山もひとつ綠につゞく若苗

苔甃[illegible]水

涼しさは岩井の淸水結びあげて苔ぢにそゝぐ夕暮の庭

○ぬなは　じゆんさい（蓴）の異名

○棣棠　山吹の花。

梅窓殘月

咲く梅の花を姿の窓の内に月のひかりも有明の風

富士秋雪

もみぢ葉をよそに入日の紅も雪にはえたるふじの芝山

筑波晨光

この宿の光になして筑波山峯の朝日を軒端にぞ見る

むつき　六帖題十二月

餘所に聞く老も心の長閑けきは若菜小松の遊びなりけり

きさらぎ

かりがねの行方やいづこつばくらめ軒の古巣にきさらぎの空

やよひ

彌生山櫻は散りてうす綠夏にさきだつ色ぞ涼しき

うづき

これも又うづきの數にかぞへばや卯の花細き寢屋の手枕

さつき

さつき山峯も麓も折を得てともし鵜河に夜を明かすらし

○若菜小松の遊び　古、正月初子の日に野邊に出で小松を引き千代を祝ひ或は若菜を摘みて食料とし邪氣を拂ひし遊び。

○彌生山　彌生の頃の山。春の山。

○さつき山　さつきの頃の山。

みなづき

なべてよのたへぬ暑さにふじの嶺の雪さへ今は水無月の空

ふみづき

闕

はづき

露時雨そめぬ葉月の薄紅葉後の葉月や照り増るらむ

後のはづき

闕

ながつき

幾度かねざめし後の鳥がねによを長月の程ぞしらるゝ

神無月

うつろはぬ菊も有りけり神無月紅葉の外に秋を殘して

霜月

霜しろき賀茂の河原の月更けてかへるぞ寒き山あゐの袖

師走

かき暗し空もすゝけて降る雪に拂ひかねたる賤が家々

○ふみづき　歌なし。

○後のはづき　歌なし。

○山あゐの袖　山藍を以て青色に摺り出したる袖。

○龜の尾　山城國小倉山の東南の尾をいふ形の上より名づけた。

述懐

定めなき身の古を思ふにもなほ頼まれぬ行末の空

獨述懐

何事も我が先の世の報いぞと思へば言はむ言の葉もなし

身にあまる惠みある世は讀む文の少なきのみや歎きなるらむ

旅述懐

聲きけばまづ古里ぞ忍ばしき兒なき里を旅路ともがな

藤丸といふ刀にそへてよめる

岡のべの松の梢に千代かけて咲く藤丸のたちさかえなむ

鳩丸といふ刀にそへて讀める

八幡山ゐる鳩丸の太刀さして千代よびかはす峯の松風

やんごとなき御方より賜はせたりとて嵐山の櫻高尾山の楓の木もて造れる短冊ばさみといふものにやがて其のところの花紅葉を蒔繪にしたるを田安の御館(みたち)に仕へ給ふ三枝の御許えさせ給ひたりければ誠に我が家の寶として末の世にも傳へ侍るべきものぞと思ふにいとも〳〵畏くて

龜の尾もながき嵐の山櫻高尾の紅葉萬代にみむ

懐舊　或人追善

植ゑ置きし千種の花も露そふや早七年の秋のなごりに

夏懐舊　同上

橘の木陰はさぞなよそにさへ消えし世しのぶ袖の夕露

堀田攝津守正敦朝臣の室清光院君の三回忌によみ置き給へりし歌をかみに置きて郭公

かりのよの夢さませとや郭公夜深く鳴きて西へ行くらむ

菖蒲　同上

るりの池にひかばさぞなと菖蒲草思ひやるにも薫る朝かぜ

おなじ君の七回忌に草花

いとはやも移りにけりな七とせの秋は夢野の月草の花

こと草の盛りを見ても女郎花かれしよしたふ野邊の夕露

故郷露　或人追善

色増る小萩が花に消えし世を誰もしのぶの露のふる里

秋水　同上

月も今みしよの秋や偲ぶらむなき影うかぶ庭の眞清水

○堀田正敦　下野國佐野の城主、寛政中幕府の少老であつた。天保三年卒。陸奥紀行水月文藻等の著がある。

○堀田正富　下野佐野の城主、正敦の養父。

○うし　牛と憂しとをかく。

○ふる文の楝木にみてる　所藏の古書が汗牛充棟と。

堀田若狭守正富朝臣の二十三回忌に正敦朝臣のすゝめ給ふにより庭霜を

たらちねの教へもかくや殘りけむ霜に跡ある庭の眞砂地

寒夜懷舊　或人追善

なき跡に冱ゆる夜風や埋火のもとの光を思ひ出づらむ

寄雪懷舊　或人五十回忌

五十とせの跡とふ庭に散る雪や御法の花の色をそふらむ

水戸武公 紀治卿 の御三回忌に寄夢懷舊を

うつゝとは誰か三とせの花のかほ月の圓居も夢の間にして

手枕に有りし面影立ちそひて殘るや夢のうつゝなるらむ

清光院君のよみ置き給へりける歌の末に

散りしよや更にしたはむ言の葉の花も紅葉も殘る木影に

月宿る草葉の露の消えしより清き光や形見なるらむ

稲山行教の十三回忌によめる

小車のうしや別れし年の名に又めぐりあふ水無月の空

ふる文の楝木(むなき)にみてるいさをしを君ならずして誰かなすべき

夢

小夜枕花も若葉も一時にみするや夢の情なるらむ

故鄕夢

こゝも又むぐら宿りて行きやらぬ夢路露けき秋の故鄕

深夜夢覺

老いらくの程もしられて更くる夜に幾度覺むる夢の手枕

神祇

すべらぎの御代長月のしるしとや絕えぬうちとの神のみてぐら

社頭鳩

稻荷山杉の木の間に鳴く鳩の下りゐる枝もみつの神垣

岸本某が下野國に住めるころ消息つかはしける奧に

いつしかと民の草葉も打ちなびき君が惠みの露や待つらむ

或人の賀に

玉椿梅に櫻に折りそへて君や八千代の春もかざさむ

見花延齡　或人八十賀

見つゝへむ末や千とせの山櫻八十を老の初花にして

祝言

○うちとの神　伊勢の內外宮。

松たてる砌を廣みゐる田鶴の雛もあまたに千代よばふ聲

寄松祝言

千代の波かけてを契れとかへりの花みむ後も和歌の浦松

冬　祝

霜の中に色そふ松の位山榮行く末は千代もかはらじ

冬來ては大路もせばし貢物はらふよぼろのしげき往來も

霜柱あまたの殿を造るべきしるしに立てる冬の庭かも

寄星祝

曇りなき君が千とせも七めぐり七つの星に契りおかばや

大空に曇らぬ星の光より君がみかげや世々に仰がむ

寄山祝　増上寺大僧正七十賀

はかりなき命保たむちりひぢの浮世をよそにすみの山人

寄道祝

年々に繁りそひつゝ言の葉の正しき道ぞ代々に榮えむ

そのまゝに神代の姿傳へこし大和言葉の道ぞ正しき

月星の國の敎へも傳へ來て我が日の本に敷島の道

○とかへりの花　十返花。松の花。松は百年に一度、千年に十度花咲くといひて祝賀の意に用ゐる語。

○位山　位を山にたとへいふ語。

○よぼろ　古昔丁年の男子の稱。二十一歲より六十歲まで。

寄都祝

大君の惠みを四方に敷島の都の手ぶり千代もかはらじ

寄國祝

春の來るあづまのえぞが貢ぎもの年に數そふ秋津春の國

寄竹祝

窗にめでしりへに植ゑてこの君の齡かぞふる宿は幾千代

寄松祝

契り置く末や幾千代いく本の松にともなふ老の齡は

とかへりの花百年やさきくさのみつ葉四つ葉の軒の松が枝

寄鶴祝　或人七十賀

七十はまだ雛鶴の末遠き千代の齡やなほ契るらむ

寄鏡祝

朝な〳〵むかふ鏡のうらにすむ田鶴の齡や君保つらむ

寄神祝

代々かけて和歌の浦人仰ぐらしひろふ言葉の玉津島姫

深みどり變らぬ色に幾とせか賴む北野の松のことの葉

○この君　竹の異稱。支那晉の王子猷が竹を植ゑて何可三一日無二此君一耶といへるより出づ。

○とかへりの花　十返花。松の花。

○さきくさ　草の名。諸說あって定かでない。一種の瑞草とす。

○鏡のうら　安房國館山灣。

○玉津島姫　和歌浦近くにある小島。衣通姬を祭る神社あり。

松山歌集者塙撿挍保己一之所吟詠也同輩若杉氏藏本借得寫焉

于時安政三丙辰歳三月既望

松村樂山

松山集終

昭和十二年十月十五日印刷
昭和十二年十月二十日發行

（非賣品）

校註國歌大系

第十五卷

編輯者　中山泰昌

發行者　小川菊松
東京市神田區錦町一丁目五番地

印刷者　西尾眞八
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地

印刷者　凸版印刷株式會社本所工場
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地

發行所　株式會社　誠文堂新光社
東京市神田區錦町一丁目五番地
電話神田 自二一二六番 至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和二年七月三十日印刷・昭和三年八月三日發行